

岩手県埋文センター文化財調査報告書第29集

# 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

雫石町 桜松・除Ⅰ・除Ⅱ遺跡

盛岡市 下猿田Ⅰ遺跡

(昭和49年度・51年度・55年度)

岩手県教育委員会  
(財)岩手県埋蔵文化財センター  
建設省御所ダム工事事務所

# 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

雫石町 桜松・除Ⅰ・除Ⅱ遺跡

盛岡市 下猿田Ⅰ遺跡

(昭和49年度・51年度・55年度)

# 序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年3月の県教育委員会文化課の分布調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は、4,719ヶ所の多きとなっております。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

この貴重な文化遺産と開発との関係が、近年問題となってきました。文化遺産を守ると共に現在の生活を豊かにするという要求との均衡を保つために文化財関係機関は多大な努力を払っております。県教育委員会文化課においても、事業者との調整につとめ、止むを得ず記録保存する遺跡を最少限に止どめる努力をいたしております。

当センターにおいて、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。本年度から新たに資料課を設置し、調査と同時に資料の整備、報告書の刊行等を進めて参りました。

本報告書は昭和48年度より調査を開始し昭和55年度で野外調査が終了した御所ダム建設関係遺跡37のうち当センター調査遺跡1、県文化課調査遺跡3の計4遺跡を収録いたしました。本報告が、いささかでも関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教育委員会、建設省御所ダム工事事務所をはじめ、地元関係者、考古学研究者など大勢の方々にご協力、ご援助を頂きましたことに厚く感謝申し上げます、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

(財)岩手県埋蔵文化財センター役員名簿

役員		
理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	中原 良一	(県教育次長)
常務理事	菅原 一郎	(センター所長)
理事	吉田 良和	(県農政部次長)
〃	田代 太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤 光雄	(県土木部次長)
〃	板橋 源	(県立博物館長)
〃	草間 俊一	(県立盛岡短大長)
〃	小形 信夫	(県民俗の会々長)
監事	白石 丈雄	(県教委総務課長)
〃	及川 久男	(県教委財務課長)

職員	
所長	菅原 一郎
副所長	小野寺 登
総務課長	小笠原喜一
庶務係長	岡沢 成治
主事	佐藤久四郎
〃	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男

調査課長	嶋 千秋
主任専門調査員	近藤 宗光
〃	遠藤 勝博
〃	国生 尚
専門調査員	村上 達夫
〃	畠山 靖彦
〃	朝野 孝二
〃	菊池 利和
〃	鈴木 恵治
〃	小平 忠孝
〃	大原 一則
〃	田鎖 寿夫
〃	佐々木 嘉直
〃	栃沢 満郎

専門調査員	平井 進
〃	種市 進
〃	鈴木 隆英
〃	三浦 謙一
〃	岩淵 久
〃	光井 文行
〃	佐藤 勝
〃	高橋 義介
〃	佐々木 清文
〃	酒井 宗孝

資料課長	瀬川 司男
専門調査員	高橋与右衛門
〃	四井 謙吉
〃	本沢 慎輔
〃	工藤 利幸
〃	高橋 文夫
〃	中川 重紀
〃	松野 恒夫
県立 文化財専門員	渡辺 洋一



# 例 言

1. 本書は御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書である。

2. 本書は、桜松、除Ⅰ、Ⅱ、下猿田Ⅰ遺跡の発掘調査成果を収録した。

3. 各遺跡の調査主体、調査年度、担当者は次の通りである。

桜松遺跡	県文化課	昭和51年度	工藤利幸、上野 猛、内村 明
	埋文センター	昭和55年度	中川重紀、上野 猛
除Ⅰ遺跡	県文化課	昭和49年度	本宮雄輔、新沼武秀、上野 猛、工藤利幸 高橋与右衛門、熊谷太郎
除Ⅱ遺跡	県文化課	昭和51年度	高橋与右衛門、桐生正一、佐藤信行
下猿田Ⅰ遺跡	県文化課	昭和49年度	本宮雄輔、熊谷太郎

4. 本報告書の執筆分担は次の通りである。

御所ダム関連遺跡調査経過		瀬川司男	
遺跡群の立地と環境		高橋与右衛門	
桜松遺跡、除Ⅱ遺跡		中川重紀	
除Ⅰ遺跡		瀬川司男	
下猿田Ⅰ遺跡	Ⅱ章	本宮雄輔	他は本宮の整理ノートにまとめてあったものに上野猛が加筆し、中川が編集した。

5. 本報告書作成にあたっては次の方々より御指導、御助言を賜った。

松沢亜生氏、相原康二氏、鈴木優子氏、山田昌久氏

6. 石質の鑑定は次の方に御教示を賜った。

佐藤二郎氏

7. 遺物の写真撮影は、当センター室内作業補助員岩淵希士、佐藤和也が担当した。

8. 本報告書に使用した実測図は担当者が分担し、当センター室内作業補助員が作成した。

なお、下猿田Ⅰ遺跡の実測図は当時岩手県教育委員会事務局文化課期限付臨時職員として同文化課御所作業所に勤務していた高橋史子が、同所冬期作業員を指導し作製、まとめたものである。

9. 図版凡例は各々図版中に示してある。

10. 発掘調査には、盛岡市繫地区、土淵地区、雫石町戸沢地区、安庭地区、塩ヶ森地区

下町地区、林地区の方々に御協力を頂いた。

# 本文目次

序文

例言

御所ダム関連遺跡調査経過	3
遺跡群の立地と環境	5

## 桜松遺跡

I 章 遺跡の位置と環境	12	IV 章 検出された遺構と遺物	23
II 章 調査方法と経過	12	(1) 遺構と遺構内出土遺物	23
1 調査方法	12	(2) 遺構外出土遺物	53
2 調査経過	13	V 章 J-10ピット出土剥片	
3 屋内整理	13	接合資料	119
III 章 基本土層	21	VI 章 まとめ	139

## 除 I 遺跡

I 調査の概要	224	調査の結果	224
---------	-----	-------	-----

## 除 II 遺跡

I 章 遺跡の位置と環境	228	IV 章 検出された遺構と遺物	233
II 章 調査の方法と経過	228	1 遺構	233
III 章 基本層序	230	2 遺物	236
		V 章 まとめ	243

## 下猿田 I 遺跡

はじめに	278	II 章 調査方法および調査経過	279
I 章 遺跡の位置と周囲の環境	278	1 発掘区の設定	279

2. 発掘経過	280.	V章 遺物	300
III章 基本層序	283	VI章 結語	335
IV章 遺構	286		

## 図 版 目 次

図版A	1	図版C	8
図版B	2		

### 桜 松 遺 跡

図版1：遺跡位置図	10	図版20：J-10ピット	41
図版2：遺跡附近の地形図	11	図版21：D-10ピット・P-21ピット	43
図版3：グリット配置図	14	図版22：C-10フラスコ形No.1ピット	
図版4：遺構配置図 (1)	15	C-10フラスコ形No.2ピット	44
図版5：遺構配置図 (2)	17	図版23：K-6陥し穴状遺構	
図版6：遺構配置図 (3)	19	N-7陥し穴状遺構	45
図版7：基本層序	22	図版24：J-9陥し穴遺構	
図版8：C-12住居址	25	L-6陥し穴状遺構	47
図版9：C-12住居址出土遺物 1	26	図版25：D-9陥し穴状遺構	49
図版10：C-12住居址出土遺物 2	27	図版26：L-5周溝状遺構	51
図版11：C-12住居址出土遺物 3	28	図版27：J-11周溝状遺構	52
図版12：B-12炉址	29	図版28：遺構外出土土器	65
図版13：B-12埋設土器	29	図版29：遺構外出土土器	66
図版14：E-10柱穴群	30	図版30：遺構外出土土器	67
図版15：グリット柱穴群全体図	31	図版31：遺構外出土土器	68
図版16：C-10柱穴群 D-10柱穴群	33	図版32：遺構外出土土器	69
図版17：D-10柱穴 D-10NO1ピット		図版33：遺構外出土土器	70
出土土器	35	図版34：遺構外出土土器	71
図版18：C-11柱穴群	37	図版35：遺構外出土土器	72
図版19：M-7No.1ピット	39	図版36：遺構外出土土器	73
H-9No.2ピット	39	図版37：遺構外出土土器	74
D-9ピット	39	図版38：遺構外出土土器	75

図版39：遺構外出土土器……………76	図版60：石器 18…………… 104
図版40：遺構外出土土器……………77	図版61：石器 19…………… 105
図版41：遺構外出土土器……………78	図版62：石器 20…………… 106
図版42：遺構外出土土器(古銭)……………86	図版63：石器 21…………… 107
図版43：石器 1……………87	図版64：石器 22…………… 108
図版44：石器 2……………88	図版65：石器 23…………… 109
図版45：石器 3……………89	図版66：石器計測位置図 1…………… 110
図版46：石器 4……………90	図版67：石器計測位置図 2…………… 111
図版47：石器 5……………91	図版68：剥片計測位置図…………… 120
図版48：石器 6……………92	
図版49：石器 7……………93	袋入図版
図版50：石器 8……………94	附図1：接合資料 2
図版51：石器 9……………95	附図2：接合資料 7
図版52：石器 10……………96	附図3：接合資料 8
図版53：石器 11……………97	附図4：接合資料 1、3、4、5
図版54：石器 12……………98	附図5：接合資料 6、9、10、11
図版55：石器 13……………99	附図6：接合資料 12、13、14、15
図版56：石器 14…………… 100	16、17
図版57：石器 15…………… 101	附図7：接合資料 18、19、20、21
図版58：石器 16…………… 102	22、23、24
図版59：石器 17…………… 103	附図8：接合資料 25、26、27、28
	附図9：接合資料 29

除 II 遺跡

図版1：遺跡位置図…………… 226	図版11：土器 3…………… 248
図版2：遺跡附近の地形図…………… 227	図版12：土器 4…………… 249
図版3：グリット配置図…………… 229	図版13：土器 5…………… 250
図版4：基本層序…………… 231	図版14：土器 6…………… 251
図版5：Ae 21住居址…………… 234	図版15：石器 1…………… 252
図版6：A h 21ピット…………… 235	図版16：石器 2…………… 253
図版7：土器実測図1…………… 244	図版17：石器 3…………… 254
図版8：土器実測図2…………… 245	図版18：石器 4…………… 255
図版9：土器 1…………… 246	図版19：石器 5…………… 256
図版10：土器 2…………… 247	

下猿田 I 遺跡

図版 1：遺跡位置図……………	276	図版19：拓本 2……………	313
図版 2：遺跡附近の地形図……………	277	図版20：拓本 3……………	314
図版 3：基本層序……………	283	図版21：拓本 4……………	315
図版 4：遺構配置図—1……………	284	図版22：拓本 5……………	316
図版 5：遺構配置図—2……………	285	図版23：拓本 6……………	317
図版 6：建物址……………	292	図版24：拓本 7……………	318
図版 7：住居址—1……………	293	図版25：拓本 8……………	319
図版 8：住居址—2……………	294	図版26：石器 1……………	320
図版 9：住居址—3……………	295	図版27：石器 2……………	321
図版10：土坑—1……………	296	図版28：石器 3……………	322
図版11：土坑—2……………	297	図版29：石器 4……………	323
図版12：土坑—3……………	298	図版30：石器 5……………	324
図版13：小土坑及焼土……………	299	図版31：石器 6……………	325
図版14：土器 1……………	308	図版32：石器 7……………	326
図版15：土器 2……………	309	図版33：石器 8……………	327
図版16：土器 3……………	310	図版34：石器 9……………	328
図版17：土器 4……………	311	図版35：石器 10……………	329
図版18：拓本 1……………	312	図版36：石器 11……………	330
		図版37：石器計測位置図……………	331

# 目 次

## 桜 松 遺 跡

表 1	C-12住居址柱穴計測表	23	表23	剥片接合資料 9	128
表 2	E-10柱穴群計測表	30	表24	剥片接合資料 10	129
表 3	D-10柱穴群計測表	36	表25	剥片接合資料 11	129
表 4	C-10柱穴群計測表	36	表26	剥片接合資料 12	130
表 5	C-11柱穴群計測表	36	表27	剥片接合資料 13	130
表 6	その他の柱穴群計測表	37	表28	剥片接合資料 14	131
表 7	古 銭	86	表29	剥片接合資料 15	131
表 8	石器計測表	112	表30	剥片接合資料 16	132
表 9	石器計測表	113	表31	剥片接合資料 17	132
表10	石器計測表	114	表32	剥片接合資料 18	132
表11	石器計測表	115	表33	剥片接合資料 19	133
表12	石器計測表	116	表34	剥片接合資料 20	133
表13	石器計測表	117	表35	剥片接合資料 21	133
表14	石器計測表	118	表36	剥片接合資料 22	134
表15	剥片接合資料 1	121	表37	剥片接合資料 23	134
表16	剥片接合資料 2	122	表38	剥片接合資料 24	134
表17	剥片接合資料 3	123	表39	剥片接合資料 25	135
表18	剥片接合資料 4	123	表40	剥片接合資料 26	135
表19	剥片接合資料 5	124	表41	剥片接合資料 27	135
表20	剥片接合資料 6	125	表42	剥片接合資料 28	136
表21	剥片接合資料 7	126	表43	剥片接合資料 29	137
表22	剥片接合資料 8	127	表44	剥片接合資料 29	137

## 除 II 遺 跡

表 1 :	石器計測表	257
-------	-------	-----

下猿田 I 遺跡

表 1 : 石器計測表……………	334	表 3 : 石器計測表……………	336
表 2 : 石器計測表……………	335		

写真図版目次

桜松遺跡

写真 1	A 遺跡遠景(南)……………	146	E H-9 No.2ピット	
	B 遺跡近景(北)……………	146	セクション……………	152
写真 2	A 遺跡近景(北東)……………	147	F P-21ピット土器検出状況	152
	B 遺跡近景(北南)……………	147	G P-21ピット完掘……………	152
写真 3	A 調査後遠景……………	148	写真 8 A C-10フラスコ形No.1ピット	
	B 調査後近景……………	148	ト土層断面……………	153
写真 4	A 基本土層……………	149	B C-10フラスコ形No.1ピット	
	B 基本土層 盛土状況……………	149	ト完掘……………	153
写真 5	C-12住居址……………	150	写真 9 陥し穴状遺構……………	154
写真 6	A B-12埋設炉……………	151	写真 10 周溝状遺構……………	155
	B 柱穴群全景……………	151	写真 11 C-12住居址出土遺物……………	156
	C D-10柱穴群……………	150	写真 12 遺構出土遺物……………	157
	D C-11柱穴群……………	151	写真 13 遺構出土遺物……………	158
	E D-10柱穴23……………	150	写真 14 土器 A……………	159
	F D-10柱穴43……………	151	写真 15 土器 B……………	160
	G D-10柱穴29……………	151	写真 16 土器 C……………	161
	D-10No.2ピット……………	151	写真 17 土器 D……………	162
写真 7	A M-7ピット……………	152	写真 18 土器 E……………	163
	B D-10No.1ピット……………	152	写真 19 土器 F……………	164
	C H-9 No.2ピット石検出		写真 20 土器 G……………	165
	状況……………	152	写真 21 土器 H……………	166
	D H-9 No.2ピット完掘……………	152	写真 22 土器 I……………	167



写真23	土器	J	168	写真50	接合資料	6	196
写真24	土器	K	169	写真51	接合資料	7	197
写真25	土器	L	170	写真52	接合資料	7	198
写真26	土器・土偶・古銭		171	写真53	接合資料	8	199
写真27	石器	A	172	写真54	接合資料	8	200
写真28	石器	B	173	写真55	接合資料	9	201
写真29	石器	C	174	写真56	接合資料	9	202
写真30	石器	D	175	写真57	接合資料	9	203
写真31	石器	E	176	写真58	接合資料	10	204
写真32	石器	F	177	写真59	接合資料	11	205
写真33	石器	G	178	写真60	接合資料	11	206
写真34	石器	H	179	写真61	接合資料	11	207
写真35	石器	I	180	写真62	接合資料	12	208
写真36	石器	J	181	写真63	接合資料	12	209
写真37	石器	K	182	写真64	接合資料	13	210
写真38	石器	L	183	写真65	接合資料	14	211
写真39	墓抔柄鏡出土状況		184	写真66	接合資料	15、16	212
写真40	接合資料	1	186	写真67	接合資料	17、18	213
写真41	接合資料	1	187	写真68	接合資料	19、20、21	214
写真42	接合資料	2	188	写真69	接合資料	22、23、24	215
写真43	接合資料	2	189	写真70	接合資料	25、26	216
写真44	接合資料	3	190	写真71	接合資料	27、28	217
写真45	接合資料	3	191	写真72	接合資料	29	218
写真46	接合資料	4	192	写真73	接合資料	29	219
写真47	接合資料	4	193	写真74	接合資料	29	220
写真48	接合資料	5	194	写真75	接合資料	29	221
写真49	接合資料	6	195	写真76	接合資料	29	222

## 除 II 遺 跡

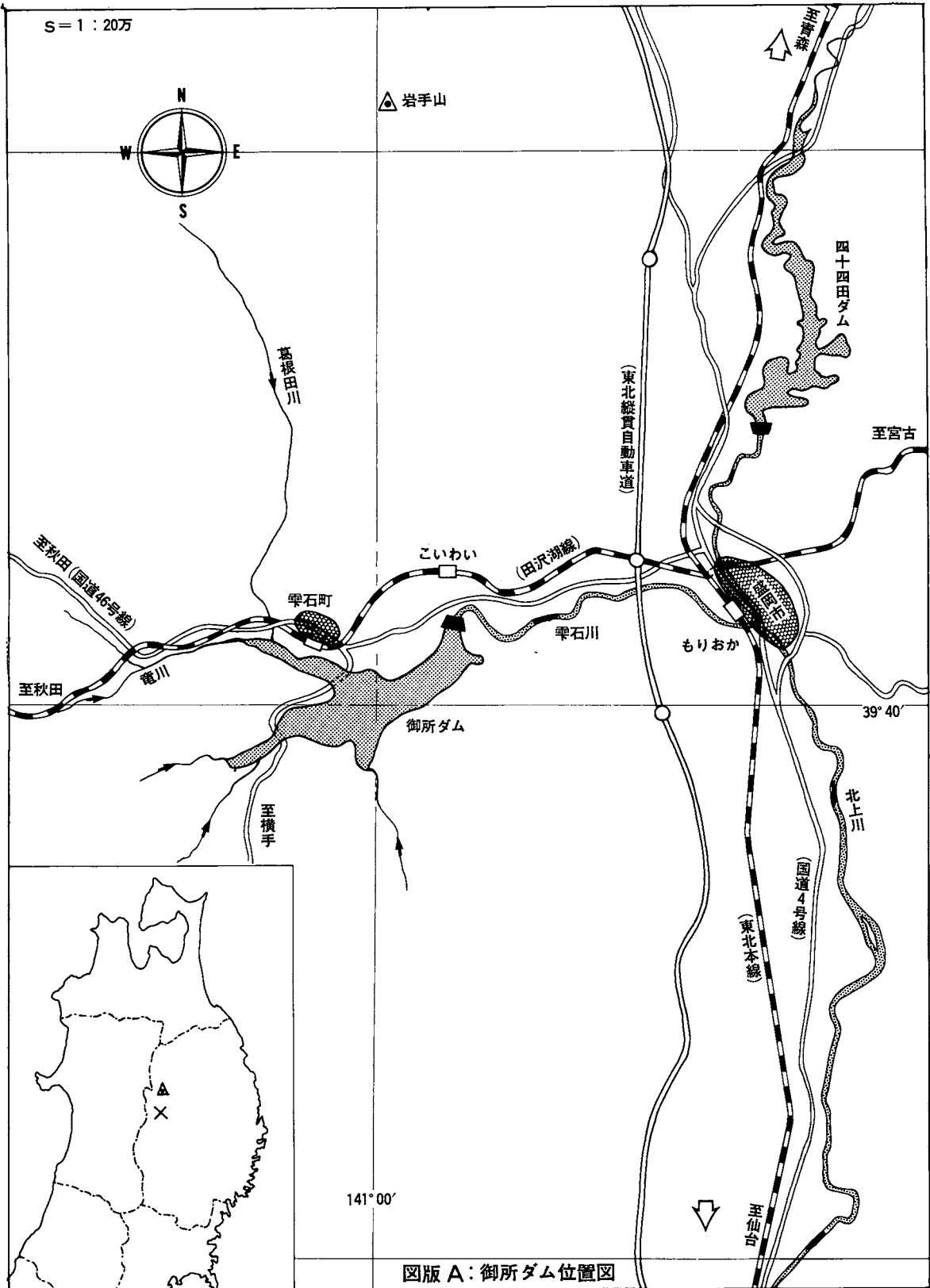
写真 1	A	遺跡遠景	260	B	A e	21住遺物出土状況	261
	B	遺跡近景	260	写真 3	A	A e	21住
写真 2	A	作業風景	261		B	A e	21住炉

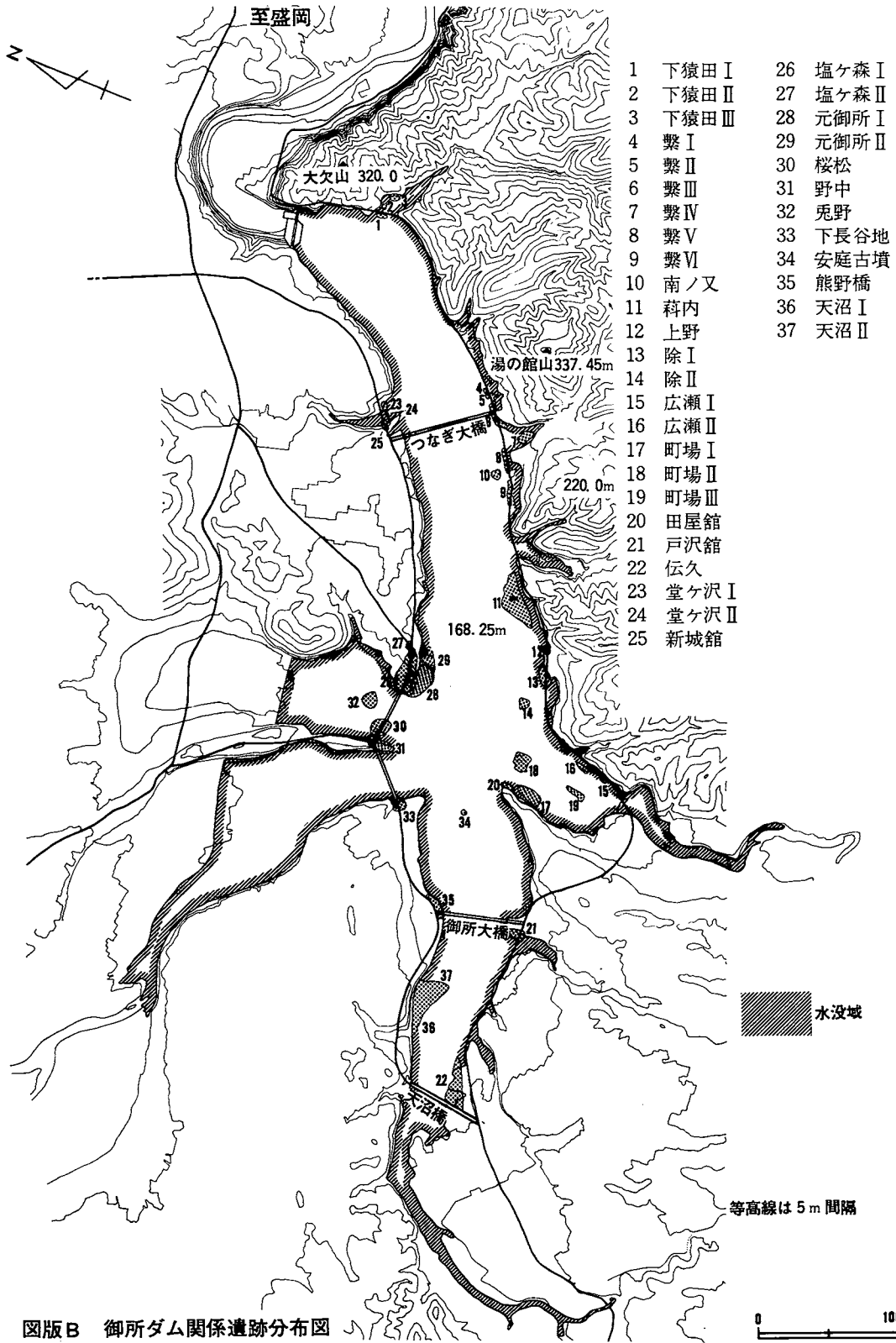
写真4	A	A e	21住埋設土器……………	263	写真9	土	器	D……………	268
	B	A e	21住遺物出土状況…	263	写真10	土	器	E……………	269
写真5	A	A e	21住遺物出土状況…	264	写真11	土	器	F……………	270
	B	A h	21ピット完掘……………	264	写真12	石	器	A……………	271
写真6	土	器	A……………	265	写真13	石	器	B……………	272
写真7	土	器	B……………	266	写真14	石	器	C……………	273
写真8	土	器	C……………	267					

下猿田 I 遺跡

写真1	A	遺跡遠景東より……………	338	写真12	A	土	坑	9……………	349		
	B	遺跡遠景南より……………	338		B	土	坑	10……………	349		
写真2	A	遺跡近景東より……………	339	写真13	A	土	坑	11……………	350		
	B	土層……………	339		B	焼	土……………	350			
写真3	A	土層……………	340	写真14	A	A-13住居址遺物出土状況			351		
	B	土層……………	340		B	A-13グリット遺物出土状況			351		
写真4	A	B-2住居址 北から……………	341	写真15	A	遺物出土状況 1……………			352		
	B	B-2住居址検出状況東から	341		B	土坑検出状況 2……………			352		
写真5	A	A-13住居址検出状況北から	342	写真16	A	遺物出土状況……………			353		
	B	A-13住居址完掘北から…	342		B	遺物出土状況……………			353		
写真6	A	A-6、7住居址完掘……………	343	写真17	A	土	器	1……………	354		
	B	A-6、7住居址炉……………	343		B	土	器	2……………	354		
写真7	A	A-6、7住居址炉1……………	344	写真18		土	器	3……………	35		
	B	A-6、7住居址炉2……………	344	写真19		土	器	4……………	35		
写真8	A	土	坑	1……………	345	写真20		土	器	5……………	35
	B	土	坑	2……………	345	写真21		土	器	6……………	35
写真9	A	土	坑	3……………	346	写真22		土	器	7……………	35
	B	土	坑	4……………	346	写真23		土	器	8……………	36
写真10	A	土	坑	5……………	347	写真24		土	器	9……………	36
	B	土	坑	6……………	347	写真25		石	器	1……………	36
写真11	A	土	坑	7……………	348	写真26		石	器	2……………	36
	B	土	坑	8……………	348	写真27		石	器	3……………	36

写真28	石器	4	365	写真32	石器	8	369
写真29	石器	5	366	写真33	石器	9	370
写真30	石器	6	367	写真34	石器	10	371
写真31	石器	7	368				





図版 B 御所ダム関係遺跡分布図

## 御所ダム関連遺跡調査経過

岩手県の岩手町御堂を水源として南流する北上川は、一関市狐禅寺狭削部によって数々の洪水を引き起こし、その被害は県南部を中心に広くもたらしている。この洪水対策は岩手県部分については、昭和16年以前は皆無の状態であった。昭和16年に岩手県内に5ヶ所のダムと遊水池を設けて洪水調節を行う北上川改修計画がたてられ、同年から田瀬ダムの建設が行われた。しかし戦後カサリン・アイオン両台風によって計画を大巾に上廻る洪水が引き起こされ、昭和27年当初計画を改訂した。

御所ダム建設は、県内5ヶ所のダムの最後となり昭和48年移転宅地の造成から開始され、昭和55年11月湛水完了し、完成を見た。ダム建設の目的は、洪水調節を主とし、盛岡市の上水道用水、かんがい用水の他発電等にも利用される多目的である。

ダムの貯水池諸元概要は次の通りである。

湛水面積	6,400,000㎡
湛水延長	8.0km
常時満水位標高	180.0m
洪水満水位標高	182.0m
制限水位標高	174.0m
総貯水容量	65,000,000㎡

ダム建設に伴う水没地内の家屋および水田、畑地等の水没面積は次の通りである。

家屋	520世帯
宅地	45.4ha
田地	360ha
畑地	87ha
山林・原野	91ha
道路	22ha

ダム建設予定地内の分布調査は、昭和47年・48年に行なわれ、37ヶ所の遺跡を確認した。

これら遺跡群に対する発掘調査は建設省御所ダム工事事務所の委託を受けて昭和48年7月より、岩手県教育委員会事務局文化課によって開始された。その後昭和52年4月に(財)岩手県埋蔵文化財センター発足、これに伴ない、調査主体は埋蔵文化財センターに移管された。

野外調査は、昭和55年10月で完了し、昭和56年度には全ての報告書を刊行することとなっている。

以下各年度における発掘調査は次のとおりである。

昭和48年度 繫Ⅳ、Ⅴ、野中、下長谷地、元御所Ⅱ、熊野橋遺跡。

北西部には大欠山、湯の館山等の標高 350 m 土の中起伏山地が多く存在し、中起伏山地の麓には小規模な段丘がへばりついている。雫石川左岸には雫石町七ツ森山群（標高 348 m）、滝沢村鳥泊山山群（標高 389 m）があり、ともに麓には平野部が形成されている。これらの山群は安山岩、凝灰岩、チャート等で構成されている場合が多く、七ツ森山群は第 4 紀火山岩より成る。

#### 〔丘陵〕

丘陵地とみられる地域は雫石町塩ヶ森、松ヶ森山群（標高 265 m 土）と雫石町西安庭地内の女助山北麓にみられる（標高 270～300m 土）地形が相当すると考えられる。これらの丘陵は凝灰岩や安山岩で構成される場合が多いが、塩ヶ森の場合は石英粗面岩や安山岩質の第 4 紀火山岩より構成され、七ツ森と同時期の火山活動によって形成されたものである。女助山北麓の場合には凝灰岩によって構成され、現地表面には若干の起伏がみられる。

#### 〔段丘〕

段丘は洪積段丘と沖積段丘に大別されるが、雫石川流域では洪積段丘 3 面、沖積段丘 2 面が認められる。洪積段丘は高位面より H 面、M 面、L 面、沖積段丘は古期、新时期面となる。

H 面：相当する面は雫石町西安庭旭台、清水沢地区に広範囲に亘ってみられる。他には、雫石町西安庭籬野、雫石町繫字新城、高見、雫石町板橋、盛岡市繫字尾入野等に中位段丘の段丘崖沿いに残丘上の小丘としてみられる。標高は雫石町西安庭旭台清水沢地区では 220～250m であるが、他は、205～220m である。現河床との比高は 60～70m を測る。堆積物は雫石町繫字塩森地区（塩ヶ森 I B 遺跡）の土層観察によれば、礫層は全体としてクサリ礫が多く礫層の上面には 0.5 m 土の黄橙色火山灰が堆積している。

M 面：相当する面は雫石町繫字塩ヶ森、新城地区、盛岡市尾入野、山根地区、雫石町板橋・仁沢瀬地区、滝沢村仁沢瀬地区、雫石町西安庭等の各地区に広範囲に亘って観察される。盛岡市繫温泉地区には、中位段丘相当面は観察されない。標高は 190～210m であり、現河床との比高は 40～50m である。上位段丘面とは比高 10m 土であり、緩傾斜の段丘崖が観察される。堆積物は、主として新鮮な砂礫分からなり、その上面を 1.5 m 内外の、黄橙色火山灰が堆積している。雫石町繫字新城・盛岡市繫字尾入野地区には火砕泥流の堆積がみられ、小岩井泥流に相当するものと考えられる。

L 面：相当する面は、盛岡市繫温泉、除地区、雫石町下平、桜松、町場、戸沢、安庭地区にみられ、標高は 180～200m であり、現河床との比高は 20m 土である。上位段丘面とは比高 10m 土であり明瞭な段丘崖が観察される。段丘堆積物は、繫 III 遺跡の例では、新鮮な砂礫層の上にシルトが 0.5～1.0m 堆積しており、火山灰の堆積はみられない。

沖積段丘古期面：相当する面は、盛岡市繫葎内河原・下繫・猿田・尾入野・北の浦・雫石町西安庭字広瀬・町場・安庭・皂角・天沼・兎野地区等にみられる。標高は 160～170 m であり



現河床とは比高10m±である。上位のL面との比高は10～15mである。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に直接黒色シルトまたは腐植質土が堆積している。

沖積段丘新期面：各河川流域の両岸に細長くみられ、増水時には一部冠水する部分も含まれている。現河床との比高は3～5mの場合が多い。堆積物は新鮮な砂礫層の上面に砂質の腐植質土が堆積している。

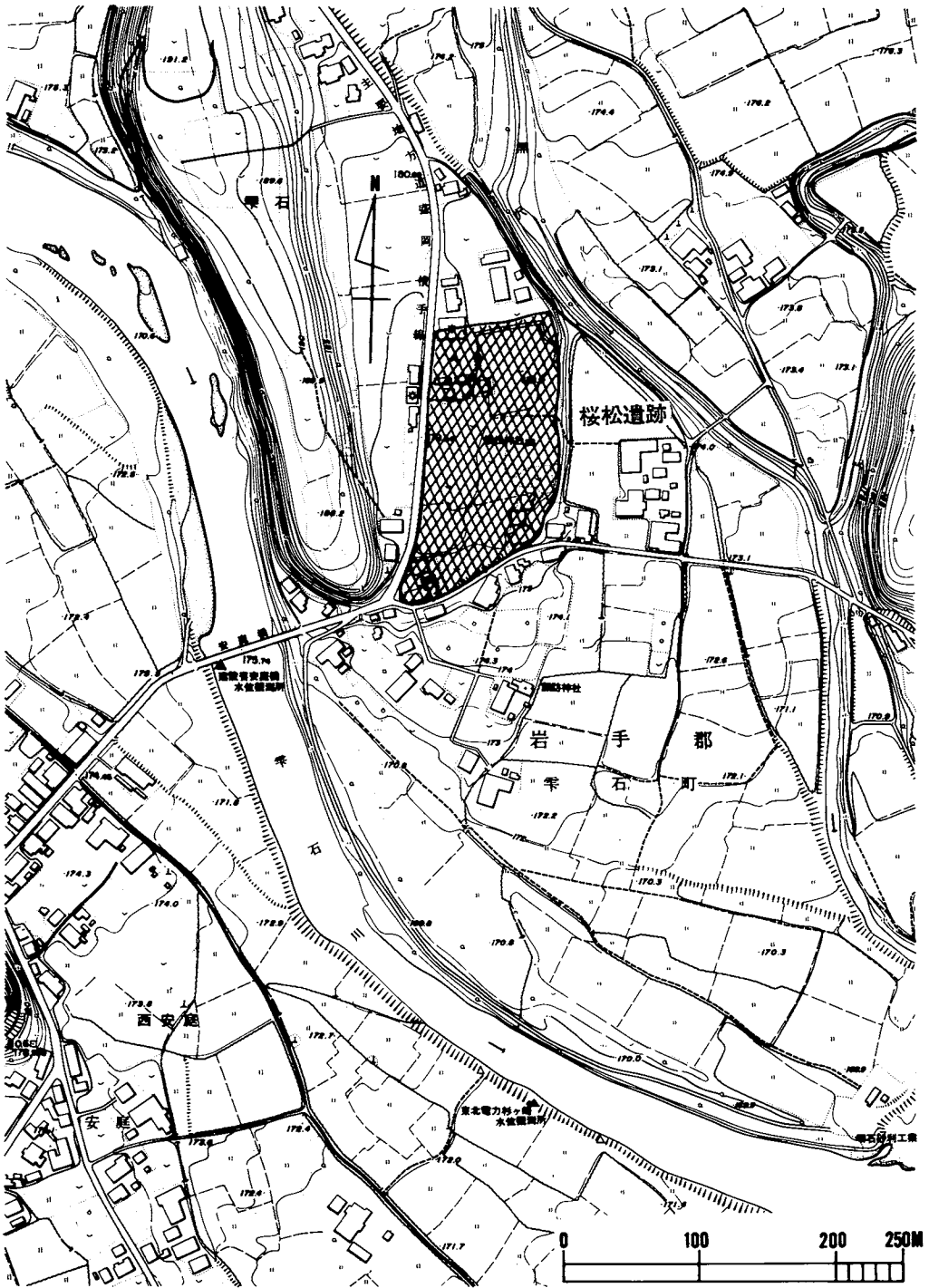
扇状地・谷底平野・扇状地は開析扇状地と現成扇状地に大別されるが、開析扇状地は洪積段丘として残存しており、繫Ⅲ遺跡の立地する段丘も洪積低位段丘相当の開析扇状地とおもわれる。

現成扇状地は、立石沢下流域、萩内沢下流域の沖積段丘古期面上にみられ、その中でも、立石沢下流域の扇状地は沖積段丘古期面とは比高5～10mである。

谷底平野は崖錐性扇状地とともに盛岡市繫地区の沢や谷沿いに形成されている。



図版 1 遺跡位置図



図版 2 遺跡附近の地形図 (1 / 5000)

## I 章 遺跡の位置と環境

桜松遺跡は、雫石町第18地割字野中9-1外13筆地内に所在し、国鉄田沢湖線雫石駅の東南約2kmに位置し、盛岡・秋田間の国道46号線を雫石町堀割で南に折れ、堀割より1.4km南方で遺跡の直下で雫石川に合流する黒沢川に沿って走る県道鶯宿線の南側にある。遺跡の標高は、170.500 m前後であり北より南に向って緩やかに傾斜する平坦な低位段丘上に存在する。遺跡の東側は黒沢川が流れ、背後（西方）には中位段丘が北から南へ細長く張り出している。

遺跡は御所ダム開発が開始されるまでは畑地、宅地、工場として利用されている場所であったが、調査時には荒地と化しており東側段丘縁は削られ南側は段丘縁近くまで整地され遺跡の周辺は旧地形を留めていない。

周辺の遺跡としては、中位段丘上に野中遺跡があり雫石川を挟んだ対岸の中位段丘上に下長谷地遺跡、熊の橋遺跡等があり、黒沢川を挟んだ対岸中位段丘上に塩ヶ森遺跡、元御所遺跡、南側の雫石川を挟んだ低位段丘上に除Ⅱ遺跡、沖積面に蒨内遺跡がある。

## Ⅱ 章 調査方法と経過

### 1) 調査方法

調査方法は76年度と80年度ではグリットの組み方に違いがあるためここでは別々に述べる。

#### 76年度（1次調査）

76年度は橋脚部分 2,000m<sup>2</sup>を対象とした調査であったが、調査方法の決定に先立ち遺跡全体にハンドボーラの試錐調査を行なった結果、土層や地形的にあまり変化は認められない。また、いずれ調査される地域で砂利採集事業によって切り崩されてフラスコピット等が露頭で発見されていることや、全面調査を前提としていることから6m×6mを基本としたグリットを遺跡全体に設定した。また、必要に応じて各々のグリットを2m×2m、あるいは3m×3mまで組分けする事とした。グリットを組むにあたっては、御所ダム開発道路のセンター坑、No. 190とNo. 192の二本の坑を軸線として組んだ。各遺構・遺物ともグリット単位で取り上げることとし、グリットの名称は東西に東よりABC……、南北に123……、とし、グリットの名称はA-1グリット、A-2グリットと呼称することとした。遺構は各グリットの北西隅にあたるグリットと同一の名称をもちいた。

#### 80年度（2次調査）

80年度は1次調査の結果を踏まえ、また、1次調査で組んだグリットによって調査すること

としたが、1次調査で組んだグリット杭は朽ちくしたり、動いているために使用不能であるため新たに組み直すこととした。基準杭の設定にあたっては、亜細亜航測株式会社に依頼した。グリットの組み方は2本の基点より2点間の杭（基準杭A、B）を設け、更に原点0を設けて、原点0を基準として第×系による相対座標を組んだ。各杭の座標は以下の通りである。

基点Ⅰ X＝－36250.05m Y＝＋13980.77m

基点Ⅱ X＝－36344.63m Y＝＋13971.03m

基点1と基点2の平面距離95,089m

基準杭A X＝－3620.05 m Y＝＋13990.00m

基準杭B X＝－36344.63m Y＝＋13990.00m

原点0 X＝－36270.00m Y＝＋13990.00m

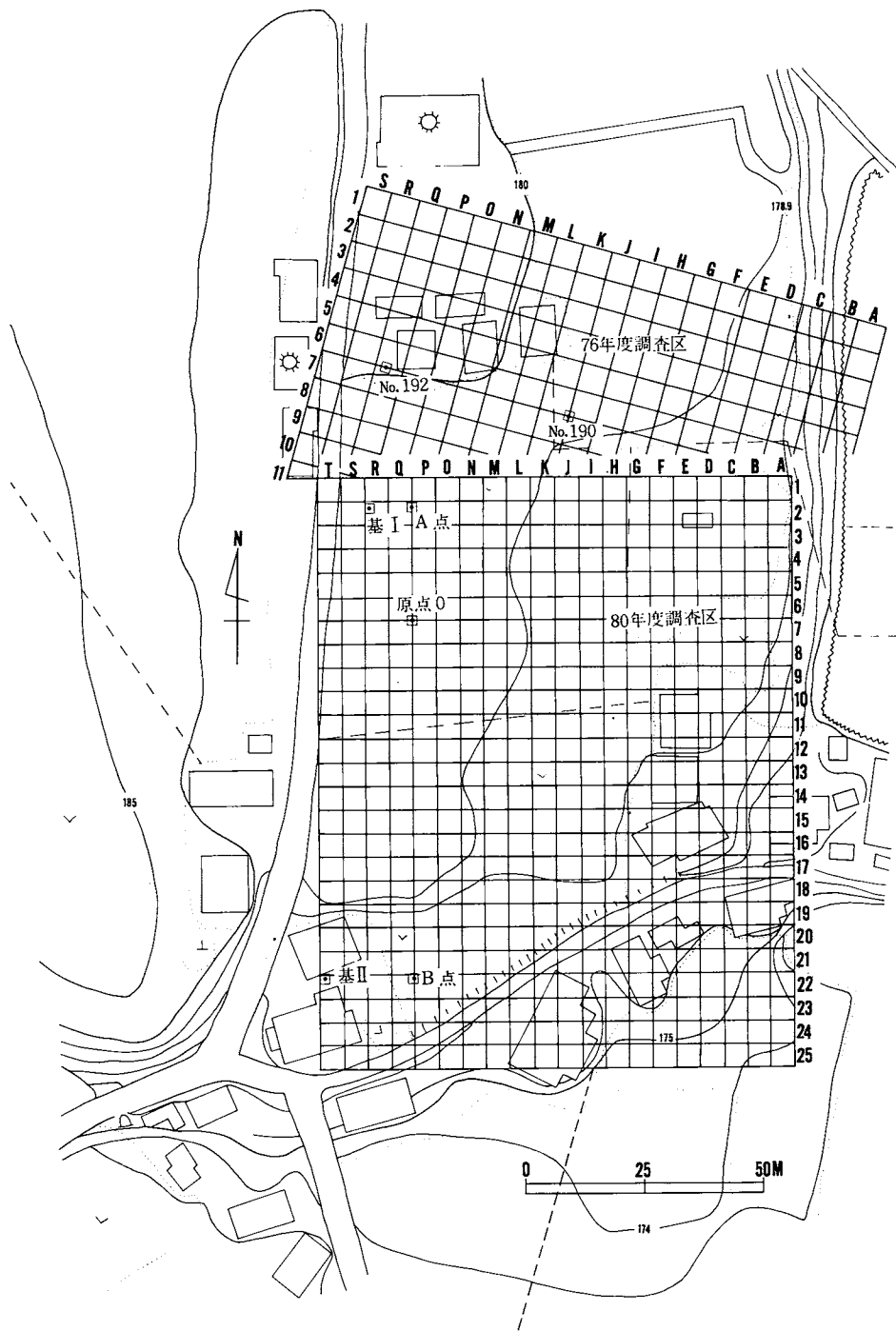
グリットは5m×5mの単位を基準として、本年度調査区全域に組み、各グリット名称は、北から南に1～22まで、東から西にA～Tまでとし、各グリットの北西隅の杭において、B－11グリットというように呼称し、遺構も同様にC－12住居址と呼称し、重複あるいは同一グリット内に2基以上存在した場合は、新旧関係より新しい方からNo.1、No.2とし、切り合い関係がない場合は、北側にあるものからNo.1、No.2とした。遺物は各グリット単位で層ごとに取り上げた。

## 2) 調査経過

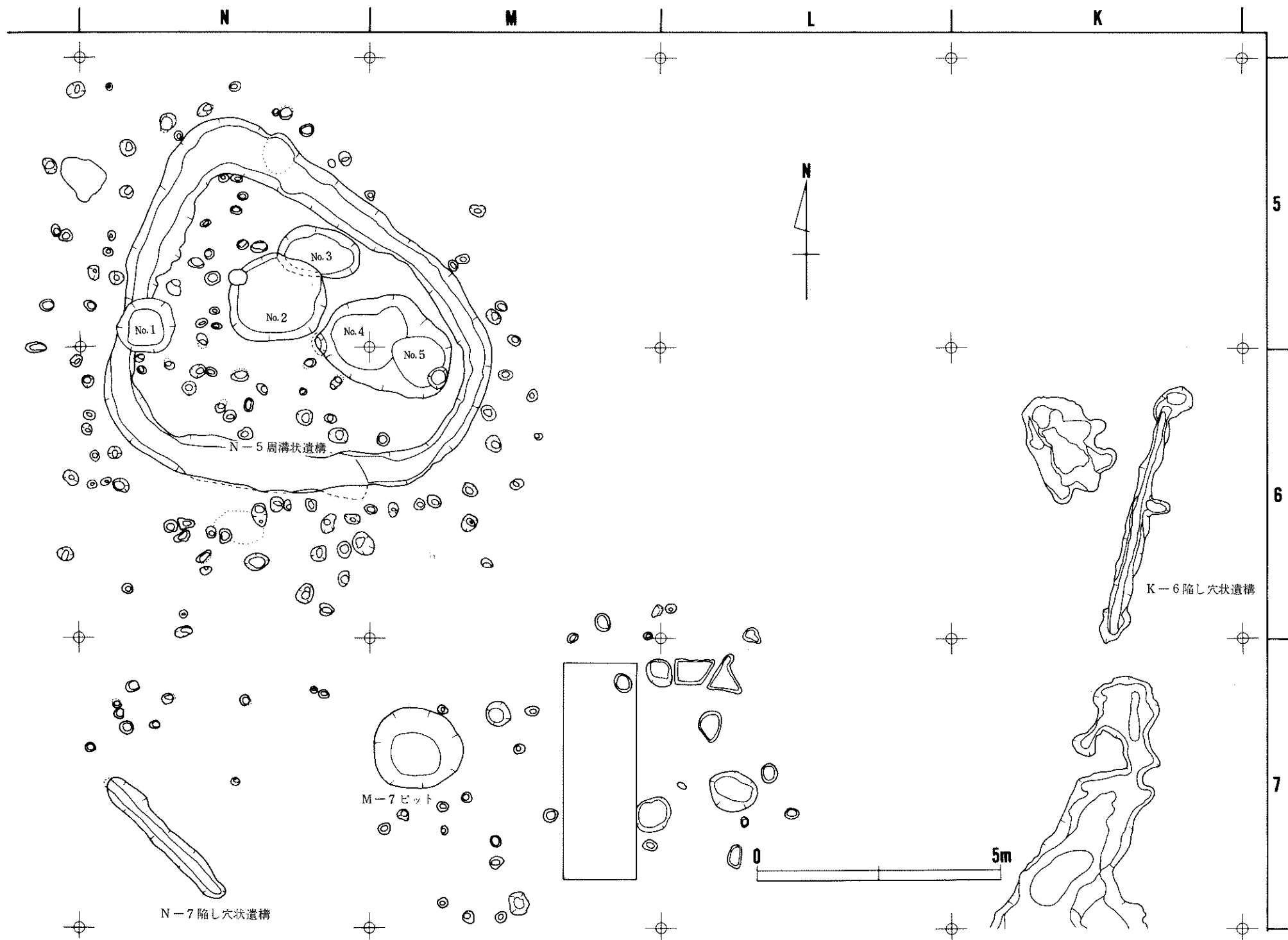
調査は76年度が5月6日～7月19日まで、80年度は4月7日～7月19日までの期間で行なわれた。いずれも粗掘りは人手による手掘で行ない、76年度はテストトレンチによる土層の観察結果に基づいて、各層ごとに発掘を行なった。80年度は、76年度の結果に基づいた土層観察と本年度の土層観察結果に基づき発掘を行ない、段丘縁近くのグリットと、遺跡中央付近のグリットとの同時併行による粗掘を実施した。その結果、段丘縁付近で土器・石器等が多く出土していることからその付近を重点的に調査することとした。その結果段丘縁付近と遺跡中央付近で遺構が検出された。6月16日よりそれら遺構の精査を行ない6月30日から各遺構の実測を開始し、同時に残っている調査区の粗掘を行なった。その結果、先に検出された以外の遺構は検出されなかった。7月18日には遺跡の発掘調査がすべて終了し、現場撤収は19日に行なった。

## 3) 室内整理

整理作業は現地での遺物の洗浄、出土地の記入とセンター内での遺物の仕分け、復元、拓本と遺構、遺物の実測、トレースを分けて行なった。各遺構の図は、調査時に作成した図面をトレースし、土器は復元可能なもの及び反転実測可能な資料を図化し、石器類は明らかに石器として捉えられるもの等を実測した。

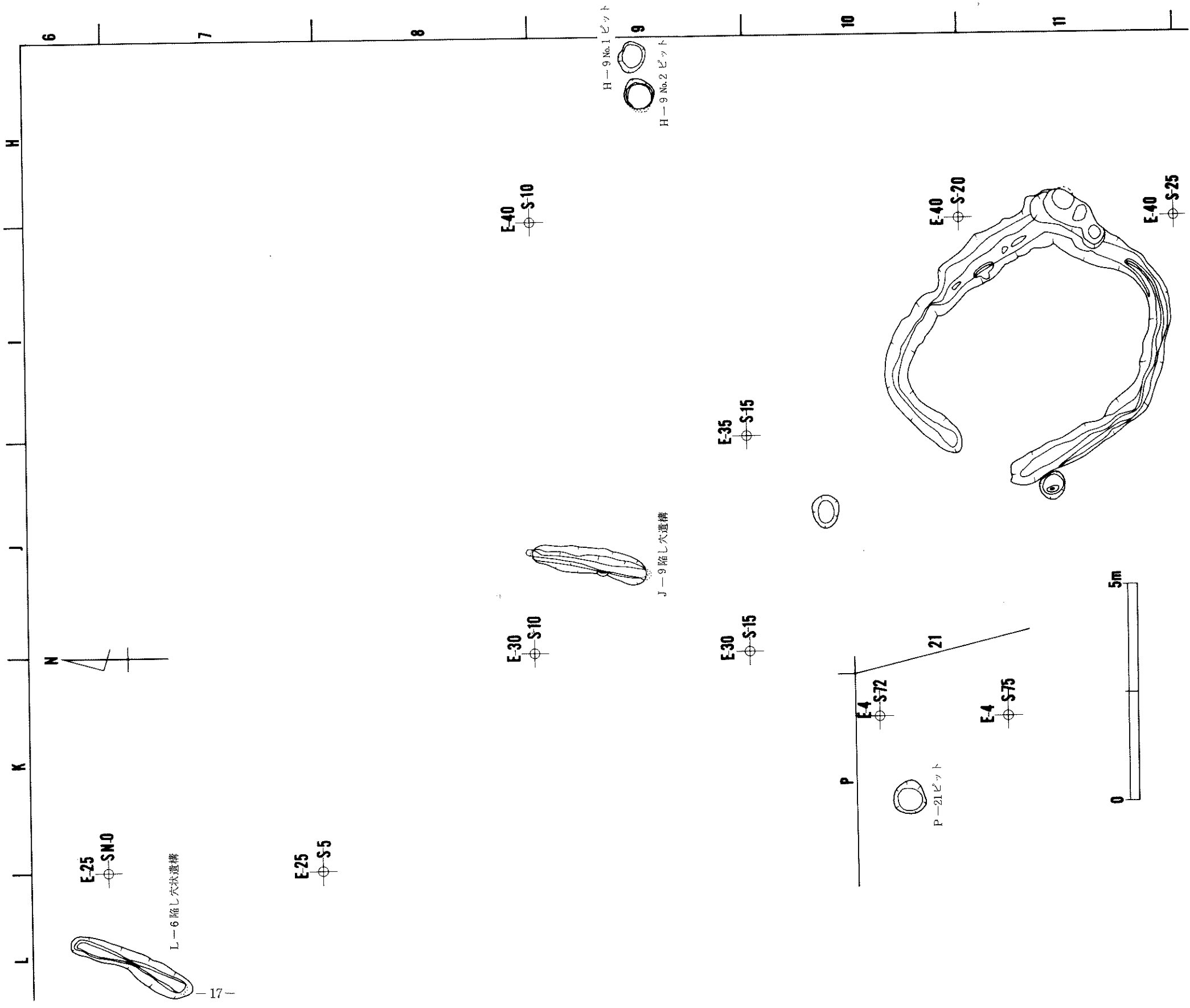


図版3 グリッド配置図 (1 / 1500)

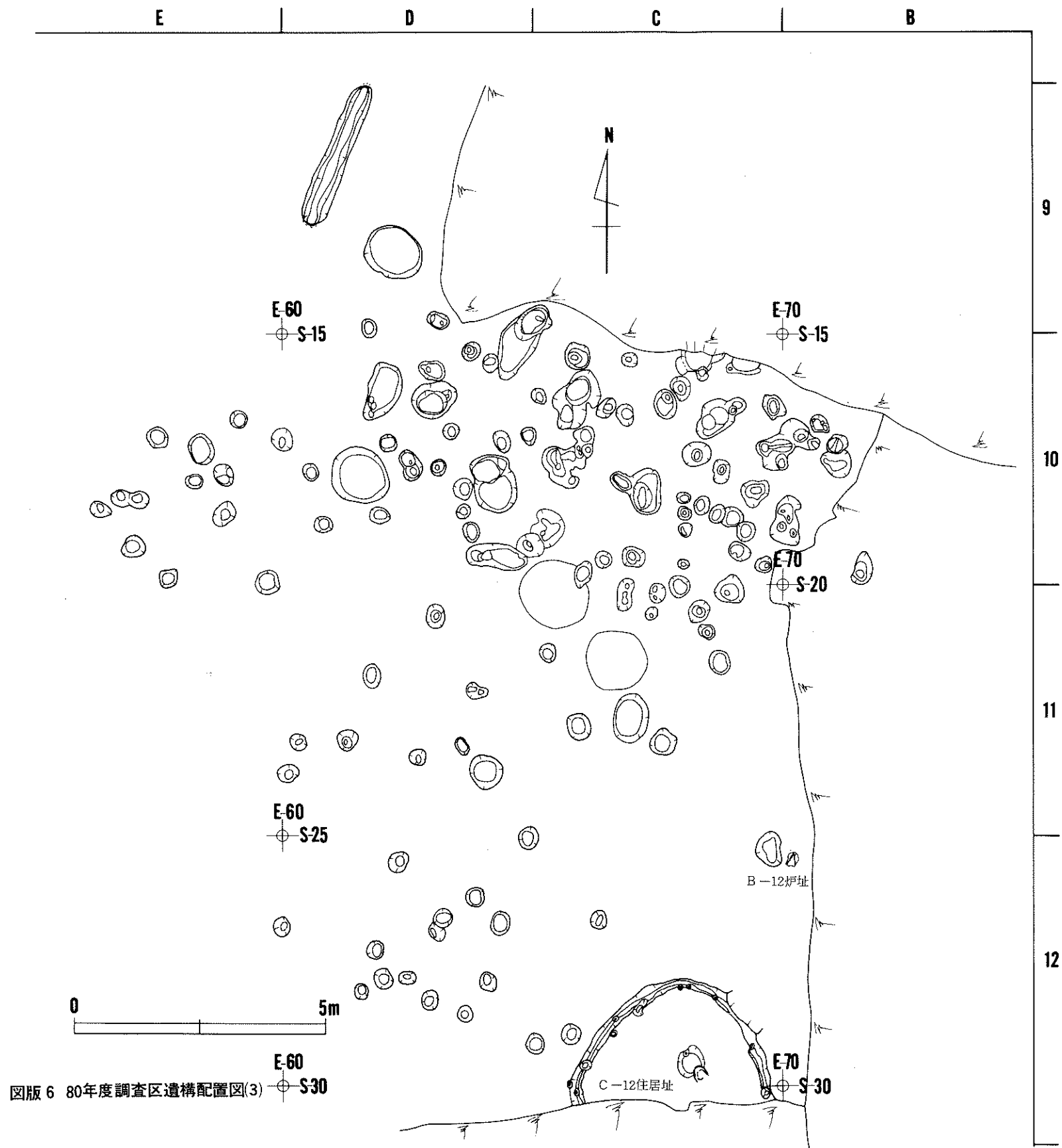


図版4 76年度調査区遺構配置図(1)S = 1 / 100





図版 5 80年度調査区遺構配置図(2)S=1 / 100



図版 6 80年度調査区遺構配置図(3)

### Ⅲ章 基本土層

遺跡の北側76年度調査分と中央平坦地から東側段丘縁では層の堆積状況に若干の相違がみられ、また特に段丘縁近くでは後世の盛土がなされる。以下地点ごとに述べる。

#### 76年度調査区M-7グリット付近基本土層

第Ⅰ層 黒色土：耕作土であり、段丘縁近くには盛土がみられる。

第Ⅱ層 黒色土：砂質の火山ガラスを含んでいるが、遺跡全体からみれば部分的にみられるものである。

第Ⅲ層 火山灰が地形の低い所に最大厚15cm位でレンズ状にみられる。

第Ⅳ層 黒色土：耕作土よりも若干黒っぽい土で粘性が僅かに認められ、暗褐色土粒が入っている。この層より溝が切り込まれている。

第Ⅴ層 暗褐色土：漸移層で柔かでボサボサしている。層厚は厚い所で20cm位である。

第Ⅵ層 褐色土：シルト質で粘性のある土で下方に行くに従って砂質部分が多くなる。この層の上面がこの地区の陥し穴状遺構等の検出面である。

#### 80年度調査区L-6グリット付近基本土層

Ⅰ層 黒色土：耕作土である。

Ⅱ層 黒色土：Ⅰ層よりも黒色が強く、部分的にみられるもので北側の基本層序Ⅱ層に対比されるが、火山ガラスは入っていない。

Ⅳ層 黒色土：Ⅰ層よりは粘性があり、黒っぽい土で柔かい。暗褐色土が僅かに層下位で混入する。この層よりJ-10溝状遺構が切り込まれているようである。76年度の北側土層のⅣ層に対比される。

Ⅴ層 暗褐色土：漸移層であり、柔かくボサボサしている。層厚は20cm位である。北側土層のⅤ層に対比される。

Ⅵ層 褐色土：シルト質の粘性のある土で、下位に行くに従って砂質部分が多くなる。

80年度調査における遺構検出面である。

#### 80年度調査区C-10グリット付近基本土層東側段丘縁（B、C、D地区部分）

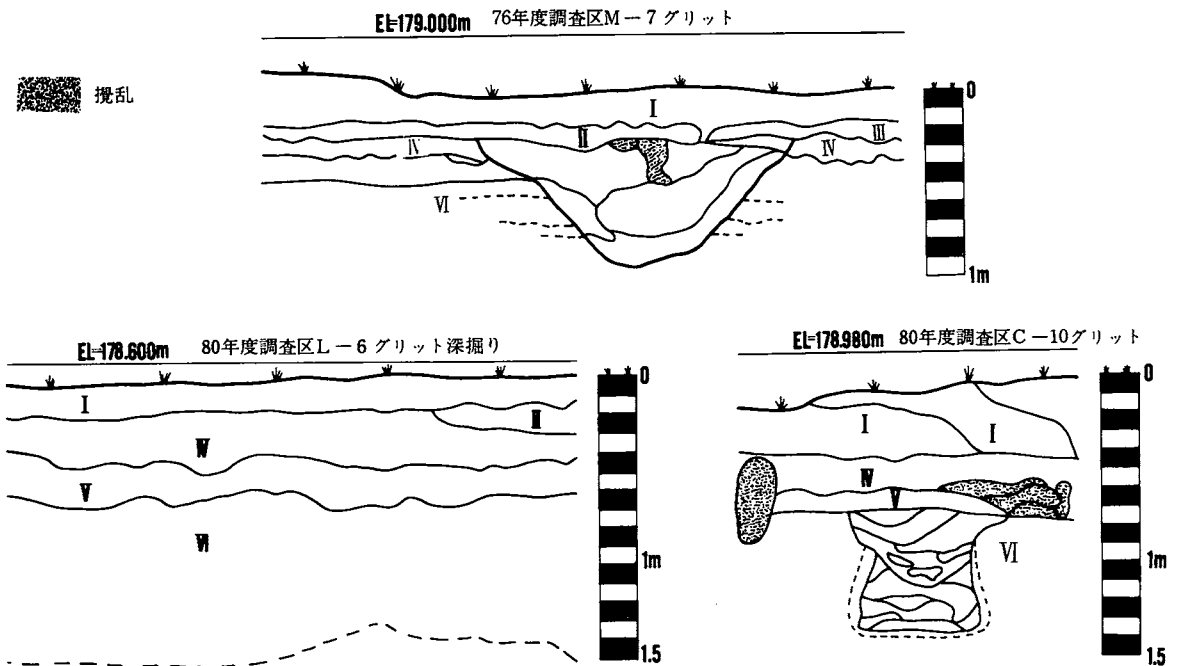
Ⅰ層 盛土：表土層であり、整地等によって剥ぎとられたり新たに褐色土が盛土されている。

IV層 黒色土：上部の盛土の結果と思われるが薄く堆積している。

V層 暗褐色土：漸移層であり、柔かくボサボサしている。

VI層 褐色土：シルト質で粘性がある。この地区での遺構検出面であり、断面にみられたフラスコピットは、下位の砂質が強くなる部分まで掘り込まれている。

以上の通りである。これを整理するとI層は遺跡全体にみられ、段丘縁近くでは盛土となっている部分であり、II層は調査区に部分的にみられる堆積であり、水的作用によって運ばれてくぼみ状の所に堆積しているらしい。III層は北側部分にのみみられた火山灰の層で、くぼみ状の所にレンズ状に堆積しているものである。IV層は、I層下位に遺跡全体にみられるもので、西側の上位段丘の裾部に厚く堆積しているのが観察されている。この層より多くの遺物が出土している。V層はVI層の漸移層であり、厚く堆積している部分で20cm前後の層厚をもつものである。VI層は褐色シルト質の土で、上部は粘性が強いが下位では砂質が強くなっているものである。この層の上面で多くの遺構が検出されている。



図版7 基本層序  $S = \frac{1}{40}$

## IV章 検出された遺構と遺物

桜松遺跡で検出された遺構・遺物は76年度、80年度合わせて、遺構は住居址1棟、柱穴群1ヶ所、炉跡1基、ピット9基、陥し穴状遺構5基、溝状遺構2本が検出された。遺物は遺構に伴って検出されたものは少なく、大半は遺構外に検出されたものである。

### (1) 遺構と遺構内出土遺物

#### 1 住居址

##### C-12住居址（図版8・写真図版5）

調査区東側のC-12グリット、VI層上面で検出された。この地区は、御所ダム工事が始まる以前には宅地として利用されていた部分である。表土からIV層面までの間は攪乱が激しく、杉等が植樹されていた所であり、住居址の東側には排水溜があり、南側は工事と共に移転する際の整地、削削が行なわれ削られている。検出面上縁で東西4.20mの平面形は楕円形状を呈するものと思われる。検出面よりの深さ0.20mで、断面形は北壁、西壁とも壁の立ち上りは急であるが、東壁の壁の立ち上りは緩やかである。埋土は5層よりなるが、層全体は木根による攪乱を受けている。

表1 C-12住居址ピット計測表

ピット 番号	南		北		東		西		床面から の深さ
	上バcm	下バcm	上バcm	下バcm	上バcm	下バcm	上バcm	下バcm	
1	10	8	13	4.5	15				
2	16	9	17	9.8	26				
3	15	7	15	6	21				
4	12	5.5	16	4	6				
5	34	21	21	9	13				
6	11	5	9	7	12				
7	7	3	8.5	4	11				
8	10	6	10	6.5	21				
9	12	6	8	4	11				
10	16	7	17	8.5	11				

1層は黒褐色土と暗褐色土の混土で柔かい。

2層は暗褐色土で小礫が入り、焼土炭化物を僅かに含む。

3層は褐色土でザラザラした土である。

4層は褐色土でブロック状に入り柔かい。

5層は暗褐色土で黒褐色土や褐色土が混入し、微量の炭化物を含む。

床面は木根による攪乱が随所に認められ若干の凹凸があり固く

はない。壁溝は壁に沿って床面に検出された。上部幅は18cm～30cmであり、深さは6cm～10cmである。ピットは壁沿い溝中に柱穴状のものが10個検出されたが、それ以外には検出されなかった。炉は住居址北東部分に埋設土器とピットが1基検出された。検出状況から一応複式炉の形をしているものであるが果して複式炉と呼んで良いものか疑問である。埋設土器部、ピット部とも石を囲んだ形跡はない。埋設土器は胴中央部を使ったもので、口縁部、底部を欠いて火熱のために内外面共に剝落している。ピット部は直径55cm、深さ15cmの平面形が円形を呈しており埋設土器の一端に接している。壁は比較的堅くゆるやかに立ち上り埋設土器部に接している側は焼けて赤変している。埋土は埋設土器部とピット部とも同一であり、黒褐色土に焼土粒、炭化物粒が入り柔かい単層である。

## 出土遺物

出土遺物は埋土中、床面上にあり床面上のものは少なく、土器・石器・土製品がある。土器は完形品はなく、いずれも破片である。

### 土器（図版9-1、3・10-1～5・11-1・写真図版11）

図版9-1は炉として使用されたものである。地文としての縄文は撚りが弱い単節斜縄文R Lを横位に施文している。胎土は粗砂・砂粒等を含み器面は火熱のため表裏とも剥離が激しく、軟弱である。色調は褐色から暗褐色である。器厚は7mmである。

図版9-3は床面に貼り付いて出土したものである。文様は胴部に沈線をU字状にめぐらし、沈線間を磨り消しているもので、地文は複節斜縄文L R Lを横位に施文している。器表面にはスス状の炭化物が付着している。色調は赤褐色を呈する。器厚は7mmである。

図版10-1～5は埋土中から検出されたものであり、いずれも小破片であり全体的な器形は掴めないが、深鉢型と思われる。図版10-1は口縁部分がわずかに内湾するもので頸部付近より胴部に撚糸文Rが施文されている。胎土は粘土が多く含まれ調整がよくなされている。色調は黄褐色を呈する。器厚は7mmである。図版10-2は口縁部がわずかに外傾するもので口縁部は平坦である。地文は口縁直下より単節斜縄文L Rが施される。胎土は粗砂・砂粒が僅かに混じるが焼成は良い。色調は暗褐色を呈する。器厚は6mmである。図版10-3は胴部破片である。地文は櫛歯状のものによって縦位に浅い沈線を施しているものである。胎土は小石が含まれるがよく調整され、焼成も普通である。色調は褐色を呈する。器厚は5mmである。図版10-4も胴部破片である。地文は単節斜縄文R Lが施される。胎土は小石を含むがよく調整され、焼成も普通である。色調は暗褐色を呈する。器厚は6mmである。図版10-5は底部付近の破片と思われる。地文は撚糸文Rが施されるものが部分的に見られる。胎土は粘土が多く焼成も普通である。色調は褐色を呈する。器厚は9mmである。

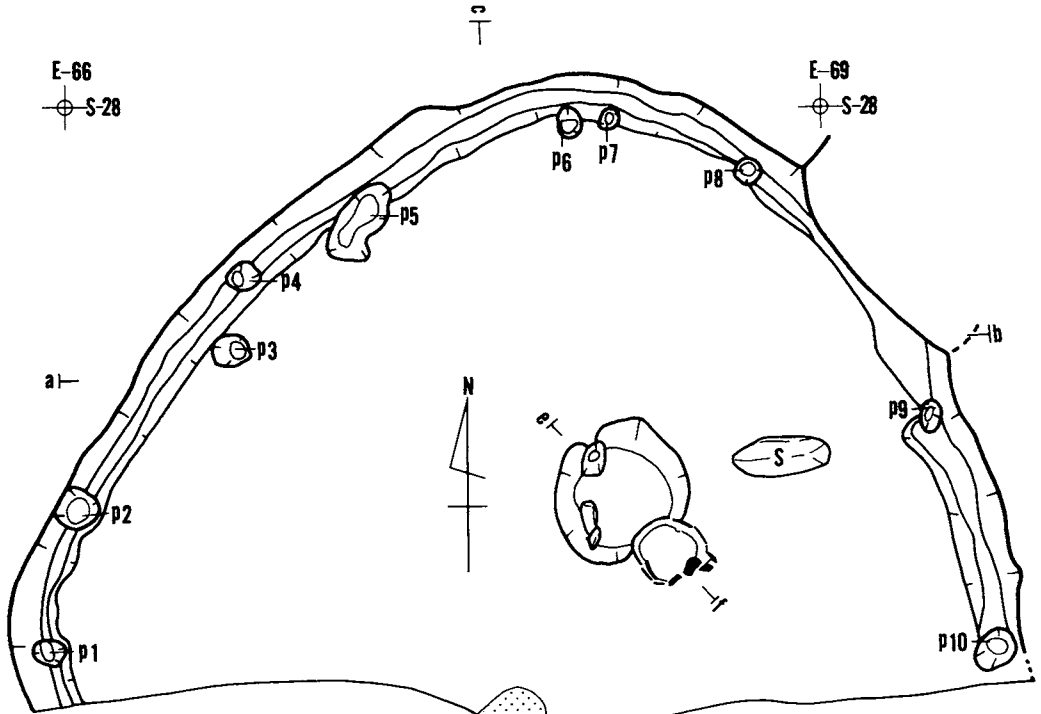
図版11-1は埋土中出土の底部部分の出土である。地文は単節斜縄文L Rを底部近くまで施される。底部近くはへら状工具によってなでつけられている。底部は平坦である。胎土は砂粒が混じるが比較的堅い。焼成もよい。色調は褐色を呈する。器厚は9mmである。

### 土製品（図版9-2 写真図版11-6）

東壁近くの床面より出土した。一端を欠くが完形品である。直径54mm、高さ31mmを呈し、中央部分に3mmの穴が通っている。器面はへら状工具によるミガキが施される。胎土は粘土だけであり焼成は普通である。用途は不明である。

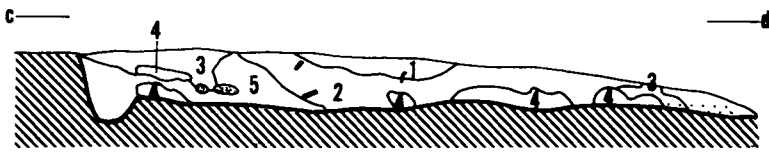
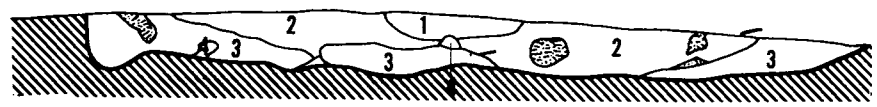
### 石器（図版9-4、5）

いずれも床面からの出土である。どちらも破片であり、細部加工は施していないものでそれぞれの側面に使用された痕跡があるものである。



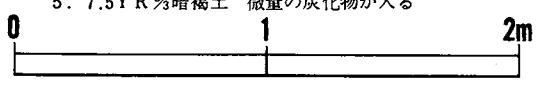
● 焼土      P1.P2 ビット  
 ■ 攪乱      S 礫  
 ▨ VI層      — 土器

EL=172900m



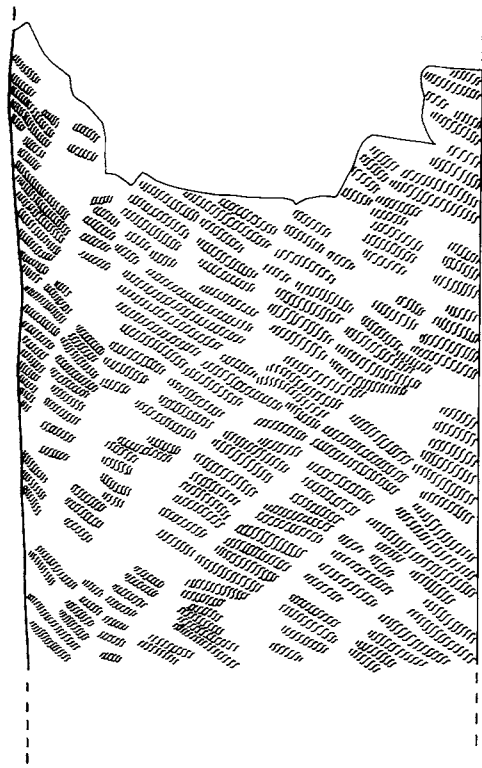
- C-12住居址埋土注記
1. 7.5Y R ㉔黒褐色土
  2. 10Y R ㉔暗褐色土 微量の焼土粒炭化物を含む
  3. 7.5Y R ㉔褐色土
  4. 10Y R ㉔褐色土 柔らかい
  5. 7.5Y R ㉔暗褐色土 微量の炭化物が入る

EL=177700m

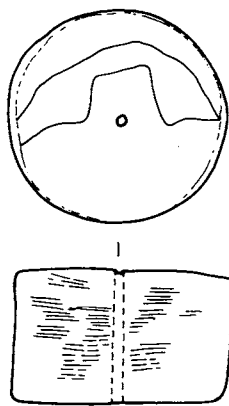


図版8 C-12住居址 S=1/30

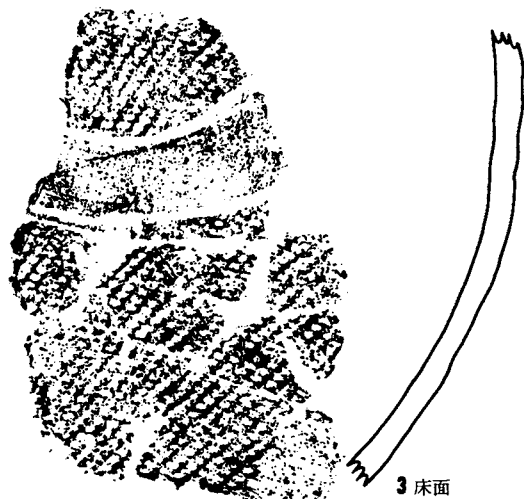




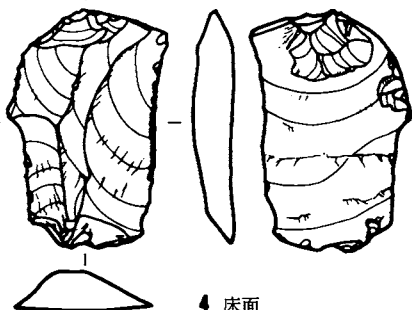
1 埋設土器



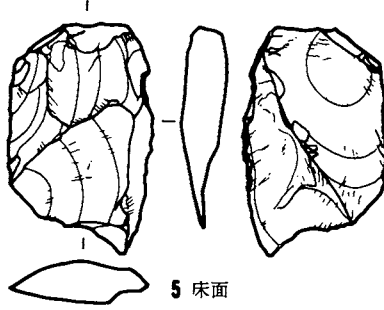
2 床面



3 床面



4 床面

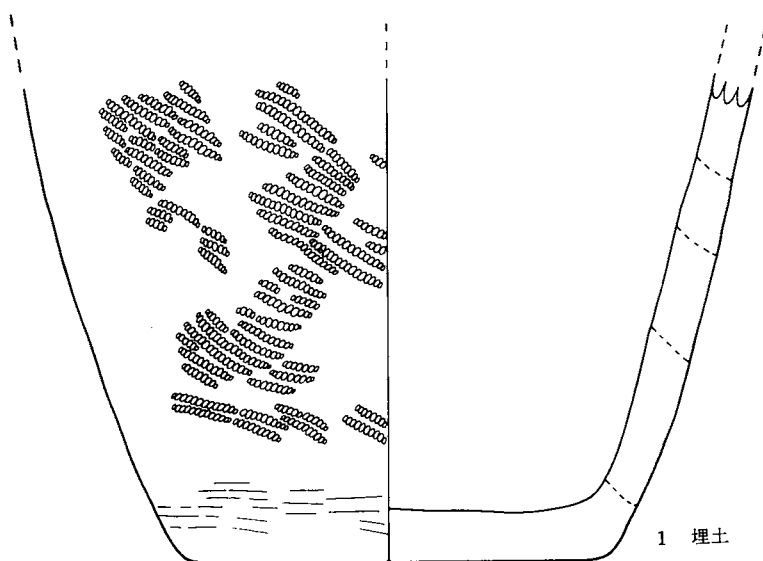


5 床面

図版9 C-12住居址出土遺物(1)S=1/2



図版10 C-12住居址出土遺物(2) S=1/2



図版11 C-12住居址出土遺物(3)S = 1/2

## 2 炉 址

### B-12炉址 (図版12・写真図版6-1)

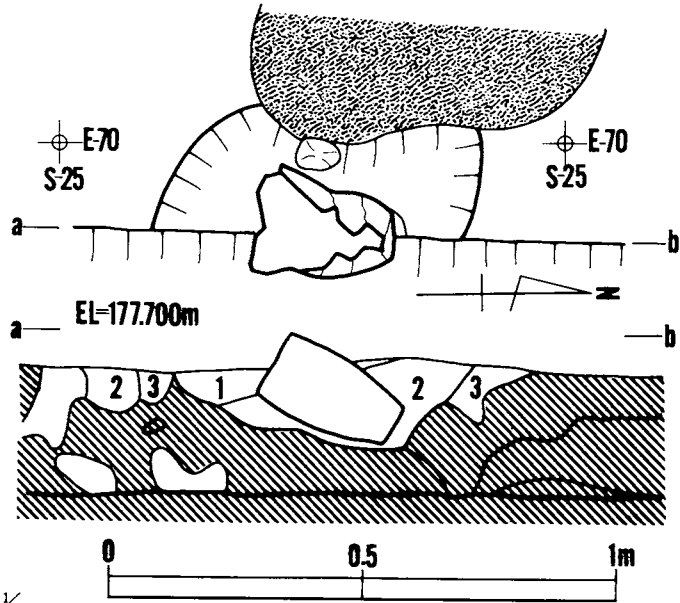
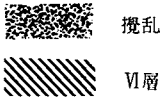
B-12グリットVI層上面で検出された土器埋設炉である。本遺構の周辺は後世の攪乱をうけ特に東側は墓地の利用によって削られている。土器を埋設するための掘り方は東西は不明であるが、南北0.6mの幅で、深さ0.17mの断面形がすり鉢状を呈している。土器は南側に口縁部分を向けて斜位に埋設されており、焼土粒・炭化物が僅かに認められた。炉はあまり焼成を受けていないものであるが炉の周囲や周辺には現地性の焼土が少量認められている。この炉址の周辺では前述のごとく攪乱があり、柱穴等は確認できなかった。

### 出土遺物 (図版13・写真図版12-1)

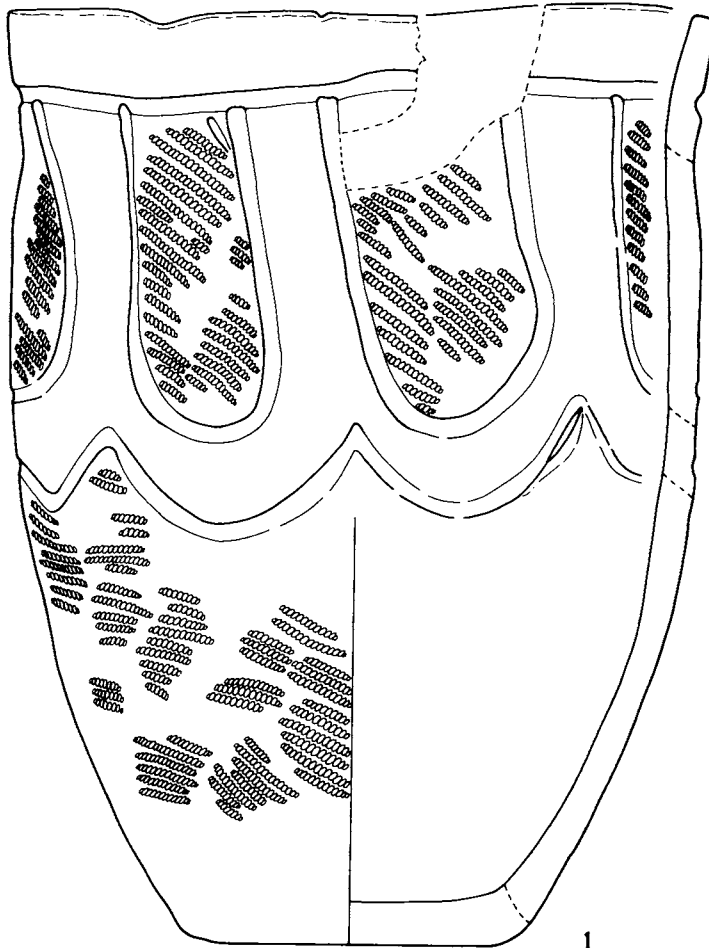
炉の埋設土器として使われた土器で、一部欠失しているが口縁部より底部までである。器形は深鉢形土器で、文様は沈線によるU字状の区画を横位に展開し、沈線間及び口縁部分をすり削しているものである。縄文は単節斜縄文RLが施される。胎土は小石等を含むが火熱を受けているためかあまりよくない。色調は浅黄橙色を呈する。その他の出土遺物はない。

B-12炉址注記

1. 7.5Y R 暗褐色土  
炭化物、焼土粒含む
2. 7.5Y R 褐色土  
微量の炭化物が入り暗褐色土  
が混じっている
3. 7.5Y R 暗褐色土  
木根攪乱しまりなり



図版12 B-12炉址 S = 1/5



図版13 B-12 埋設土器 S = 1/2

### 3 柱穴群 (図版14、15、16、17、18・写真図版6-B~G)

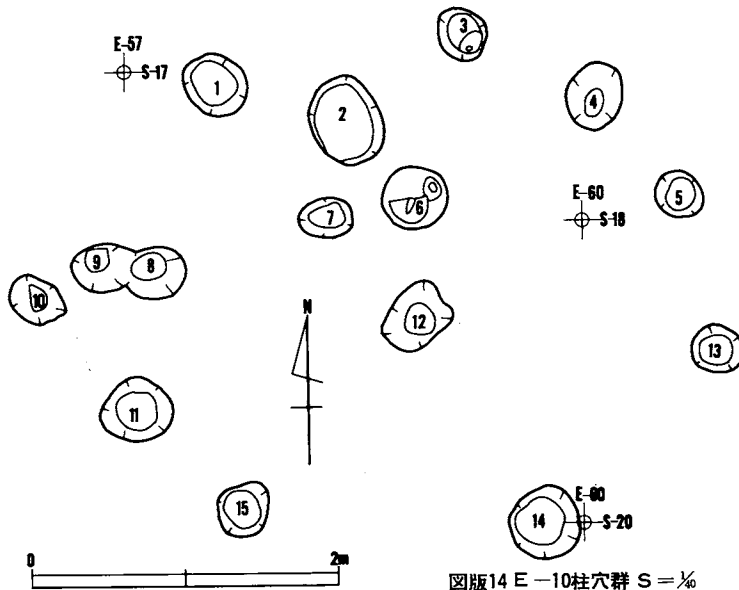
調査区東側のE-10グリットからB-10グリット及びD-12グリットのVI層上面で、大小合わせて129個のピットが検出された。本地区の上層は盛土となっており、また家屋等があった所であり、排水溝や排水溜等で、攪乱されていた。そのためか、炉跡や焼土などの痕跡はなく小ピットが検出されたにすぎず、ピットの配列は殆ど把握できなかつたが、これらピット群は住居址の柱穴跡と推定されるが、攪乱等があり住居址として捉えるだけの根拠がないため柱穴群として一括して捉えた。ここでは個々のピットの配列がある程度考えられるもののみを記載した。なおピットの計測値等は表にしてあるのでそれを参照されたい。

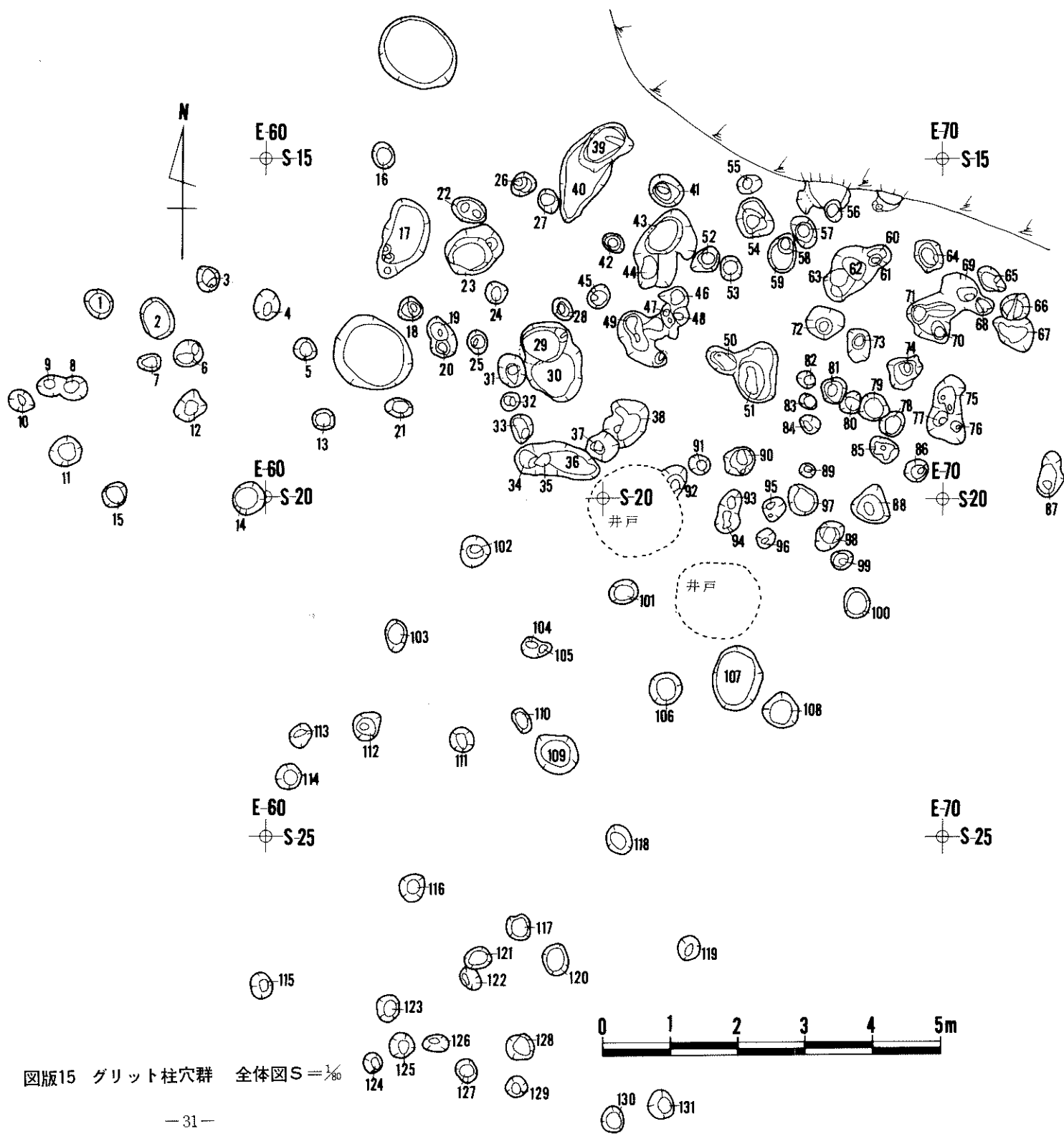
#### E-10柱穴群 (図版14)

E-10グリットに単独に検出されたもので、円形状にピットが配列されるものである。ピットの広がりからみて直径4.00m前後の住居址と推定される。

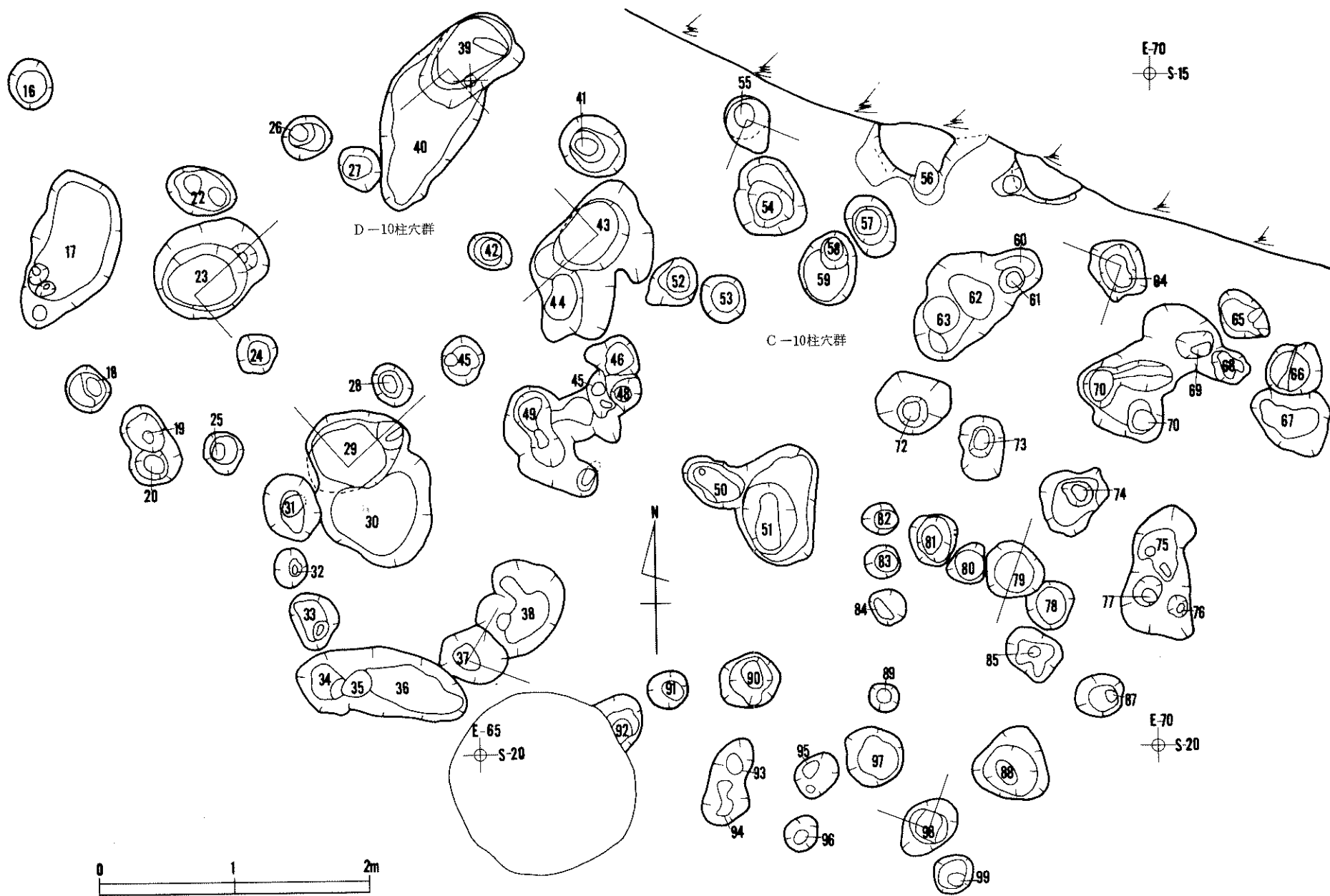
番号	南		北		床面からの深さ	備考	番号	南		北		床面からの深さ	備考
	上バcm	下バcm	上バcm	下バcm				上バcm	下バcm	上バcm	下バcm		
1	42	30	40	27	21	埋土、暗褐色土	9	32	15		15	20	埋土、暗褐色土
2	59	51	48	38	17	埋土、暗褐色土	10	30	16	34	11	23.5	埋土、暗褐色土
3	33	24	32	23	23	埋土、暗褐色土、木根跡	11	42	25	46	26	24	埋土、暗褐色土
4	44	18	37	11	31.5	埋土、暗褐色土	12	40	20	43	18	23.5	埋土、暗褐色土
5	31	20	31	18	20.5	埋土、暗褐色土	13	32	20	32	20	17	埋土、暗褐色土
6	42	15	41	26	22	埋土、暗褐色土、木根跡?	14	50	33	45	33	27	埋土、暗褐色土
7	26	17	34	23.5	12	埋土、暗褐色土	15	34	27	33	25	16	埋土、暗褐色土
8	34	18	17.5	15	20	埋土、暗褐色土							

表2 E-10柱穴計測表

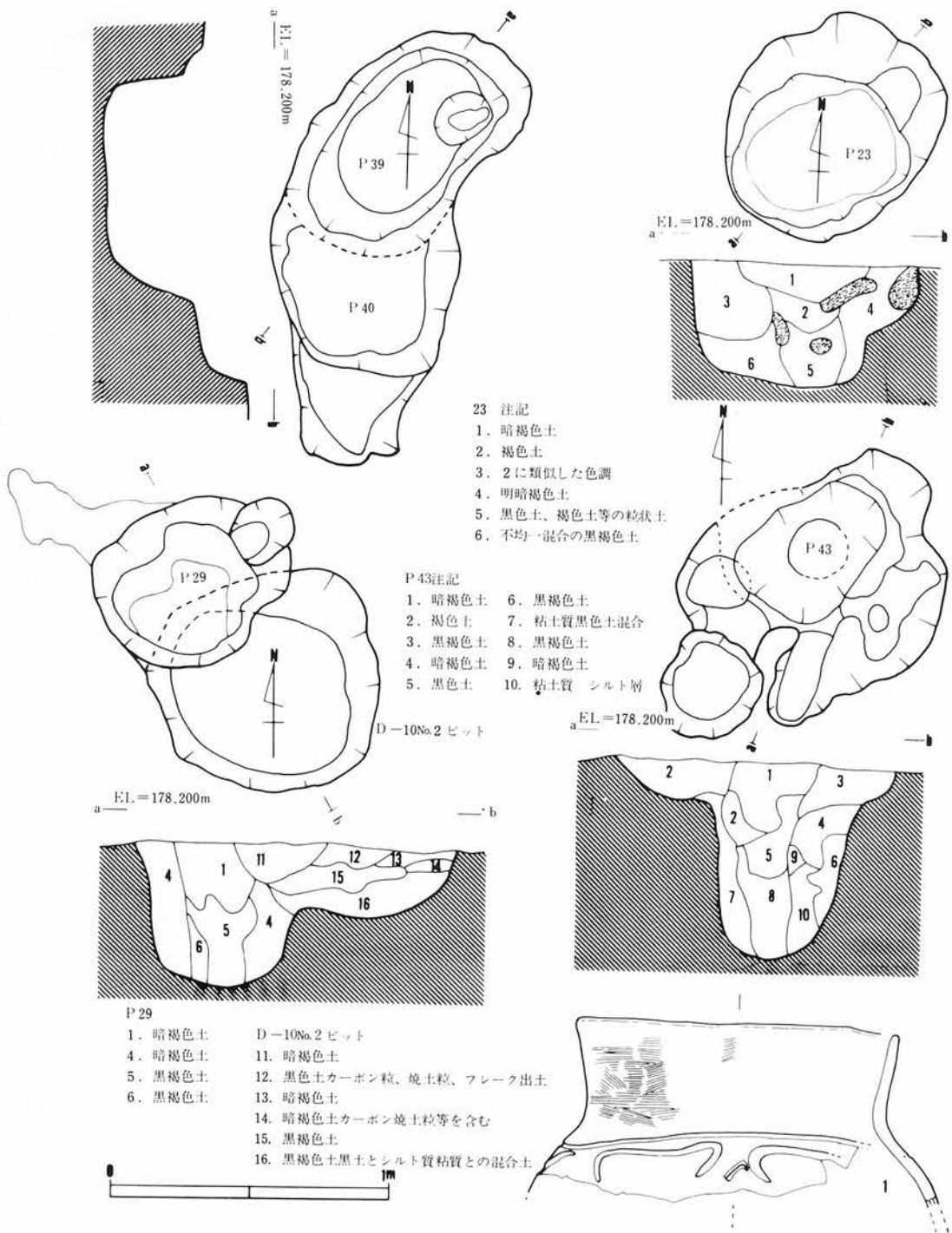




図版15 グリット柱穴群 全体図  $S = \frac{1}{80}$



图版16 C-10柱穴群、D-10柱穴群  $S = \frac{1}{40}$



図版17 D-10柱穴・D-10No. 2 ビット出土土器 S = 1/2



**D-10柱穴群** (図版15, 16・写真図版6-C, E~G)

D-10グリットに検出され、大形のピット4個によってその配列が考えられるものであるが北側が削られており、北側に延びていた可能性も考えられる柱穴群である。またNo.29の柱穴はD-10No.2ピットによって一部切られている。

番号	南 上バcm	北 下バcm	東 上バcm	西 下バcm	床面から の深さ	備考	番号	南 上バcm	北 下バcm	東 上バcm	西 下バcm	床面から の深さ	備考
23	70	37	78	50	48		39	60	38	59	25	53	
29	55	46	75	53	49		43	52	42	53	42	63	

**表3 D-10柱穴計測表**

**C-10柱穴群** (図版15)

D-10ピット群の東側に検出された柱穴群で9個の柱穴配置が考えられるもので、C-10フラスコNo.1ピットの一部をNo.56の柱穴が切っているものである。

番号	南 上バcm	北 下バcm	東 上バcm	西 下バcm	床面から の深さ	備考	番号	南 上バcm	北 下バcm	東 上バcm	西 下バcm	床面から の深さ	備考
37	44	14	48	18	19		64	45	25	40	16	18	
48	25	13	23	13	15.5		79	42	31	41	29	12	
52	35	18	37	18	22.5		92	41	16	44	11	37	
55	32	18	32	18	24		93	55	15	30	12	17	
56	30	18	32	14	24		98	40	23	39	19	31	

**表4 C-10柱穴計測表**

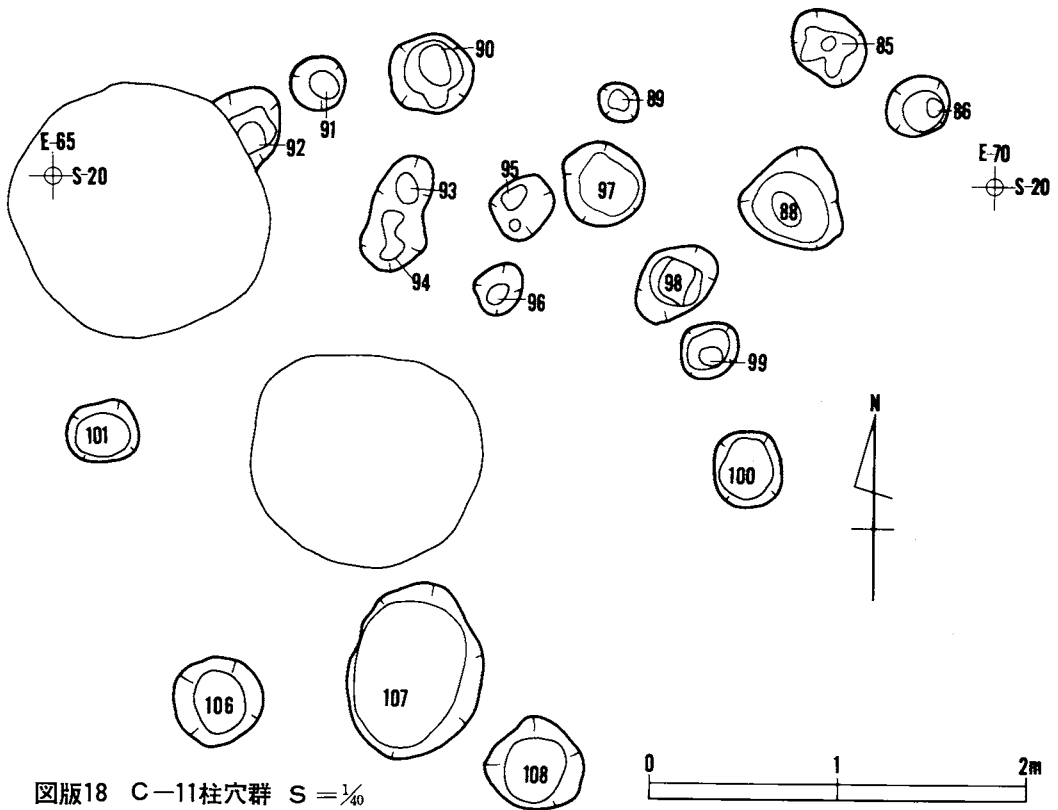
**C-11柱穴群** (図版17・写真図版6-4)

C-10柱穴群の南側C-11グリットに検出され、現在の井戸2ヶ所によって一部壊されていると思われる。ピットの配列から4.00m前後の住居址かと推定される。またこの柱穴群の内側に、平面形で南北1.00m・東西0.70m、の平面形が小判型を呈したピットがあるが埋土の状態からみて、本柱穴群に伴うものと考えられる。このピットよりの出土遺物は縄文式土器細片が一片出土している。

番号	南 上バcm	北 下バcm	東 上バcm	西 上バcm	床面から の深さ	備考	番号	南 上バcm	北 下バcm	東 上バcm	西 下バcm	床面から の深さ	備考
90	42	21	44	17	24		101	38	24	38	28	33	
91	28	14	29	16	37		106	48	33	45	26	36	
97	44	31	43	32	34		107	93	77	71	58	25	C-11柱穴群に伴う ピットと思われる(貯蔵穴?)
99	28	11	24	14	36		108	50	34	51	32	38	
100	40	34	37	30	39								

**表5 C-11柱穴計測表**

以上述べた以外にも多数の小ピットがあり、述べた以外にもまとまりのある柱穴配置等が考えられるものもありそうであるが、難しいためにとりあげなかった。またある程度時期の判明するものとして、D-10No.2ピットによって柱穴の一部が切られているD-10柱穴群があげられよう。D-10No.2ピットについてはピットの項で後述するが、このピットより出土している土器は後期初頭頃のものであることからD-10柱穴群は縄文後期初頭ないまたはそれ以前の時期の遺構と考えてさしつかえないものであろう。



図版18 C-11柱穴群 S = 1/40

番号	南 上ノcm	北 下ノcm	東 上ノcm	西 下ノcm	床面から の深さ	備 考	番号	南 上ノcm	北 下ノcm	東 上ノcm	西 下ノcm	床面から の深さ	備 考
16	32	24	37	33	16	埋土、暗褐色土、攪乱	74	47	12	50	12	43	
17	100.4	83	66	44	16		75	39	10	16	4	19	
18	33	25	33	28	13		76	15	6	14	6	40	
19	57	9	36	7	20		77	21	10	20	11	37	
20	57	14	37	16	15.5		78	36	29	34	22	16	
21	28	18	39	24	19		80	30	21	26	19	18	
22	37	29	50	38	15		81	38	22	34	17	20	
24	29	19	29	16	15		82	24	16	26	16	15	
25	32	13	29	11	20.5		83	24	10	25	12	34	
26	32	11	36	11	28		84	25	17	26	7	8	
27	33	17	32	23	10	85	39	20	41	29	15		
31	46	14	40	16	30	86	32	21	34	21	37		
32	26	16	26	17	20	87	67	41	36	24	39		
33	40	30	35	19	12	88	54	18	55	15	15		
34	40	26	120	23	16	89	20	10	21	9	19		
35	45	19	120	24	20	94	50	27	36	10	12		
36	43	36	120	65	20	95	35	12	32	12	7		
38	73	43	66	27	12	96	25	11	26	10	12		
40	107	92	66	57	66	102	45	13	40	17	36		
41	45	13	47	17	16	103	43	30	32	26	24		
42	28	15	30	14	28	104	20	11	40	19	31		
44	53	34	30	23	20	105	31	12	40	19	31		
45	32	21	32	26	10	109	60	38	60	45	29		
46	30	21	40	20	10	110	33	26	23	19	14		
47	33	10	14	11	15	111	37	19	33	15	20		
49	53	30	29	14	13	112	36	11	37	14	43		
50	34	23	39	24	23	113	34	10	32	15	24		
51	60	42	57	18	17.5	114	36	22	38	20	24.6		
53	56	20	53	19	24	115	37	18	31	14	24		
54	66	19	38	18	24	116	39	20	38	17	24.8		
57	45	20	37	18	24	117	35	26	33	24	11		
58	54	16	34	13	28.5	118	33	13	33	10	28		
59	54	38	42	33	11	119	32	18	32	10	47.5		
60	35	15	80	37	15	120	43	34	37	28	20.5		
61	20	11	18	11	15.5	121	30	22	38	25	19		
62	63	29	64	31	17	122	32	16	33	6	30	木根跡?	
63	70	27	46	27	27	123	36	26	33	20	18	木根跡?	
65	35	27	35	24	14	124	26	17	26	12	34.5		
66	36	29	40	30	12	125	36	19	33	16	24		
67	49	21	60	42	16	126	26	8	34	15	18		
68	25	18	21	14	53	127	36	17	31	19	34		
69	20	9	28	13	32	128	32	22	32	20	30	木根跡?	
70	25	19	19	17	21	129	29	11	29	14	24.5		
71	30	25	28	17	30	130	36	23	32	21	26		
72	46	16	55	14	14	131	37	30	40	22	32		
73	46	15	34	12	17								

表6 その他の柱穴計測表

#### 4 ピット

##### M-7ピット (76年度調査) (図版19・写真図版7-1)

76年度調査グリットのM-7グリットVI層上面で検出された。検出面上縁で東西1.80m、南北1.60mを測り平面形は楕円形状を呈する。検出面よりの深さは0.70mを測る。断面形は鍋底状を呈し、底面もいくらか丸みを帯びている。埋土は黒色土を主体とし、検出面及び内部とも火山灰を含んでいる。このピットは埋土の状態が自然流入の際に生じるガラス質鉱物等の分類分けは認められないことより、人為的埋設と判断した。出土遺物はない。

##### J-10ピット (図版20・写真図版8-3~5)

J-10グリットにおいて多量のフレークを伴って検出されたピットである。フレークはIV層の中頃より検出されたが、ピットが構築された面はVI層上面でのフレークの出土状況より、VI層面であることが確かめられた。ピットは検出面上縁で長軸0.72m、短軸0.61mの楕円形状を呈し、検出面よりの深さは0.15mで、断面形は壁が緩やかに外傾する鍋底状を呈する。埋土は暗褐色土の土がフレーク片の中に僅かに存在するだけである。

**出土遺物** (図版19・42-21~24、28・45-11、13・47-6・51-2・53-1・写真図版40~75)

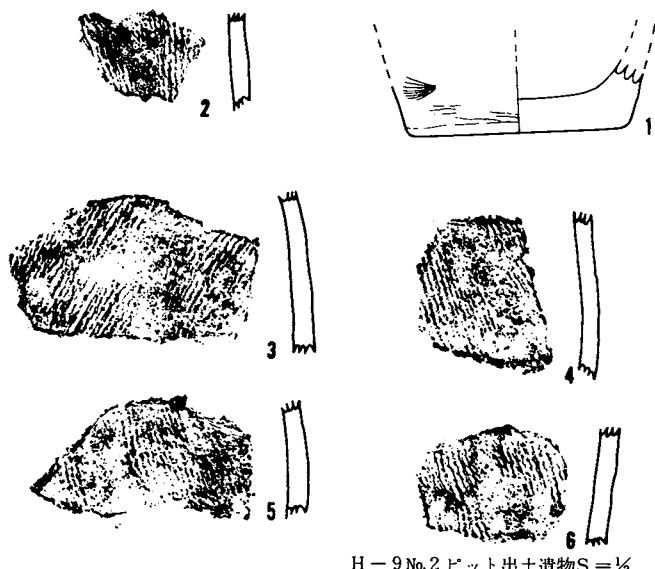
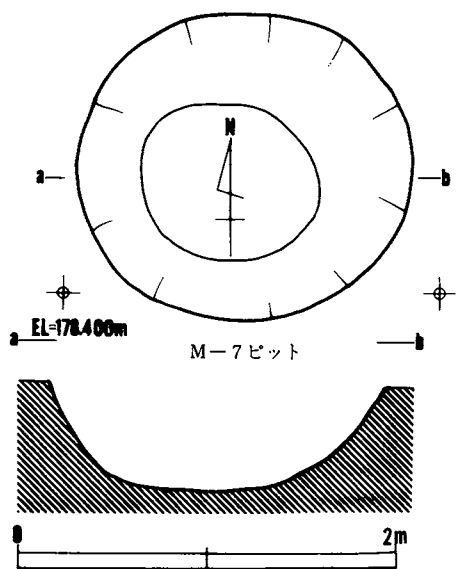
出土遺物は、フレーク 877片と石器と思われるもの(図版42-21~24、28・45-11、13・47-6・51-2・53-1)などがある。なお、フレークは接合できるものがあり、接合資料として項を設けてある。そちらを参照されたい。

##### H-9 No 1ピット (図版19)

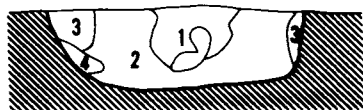
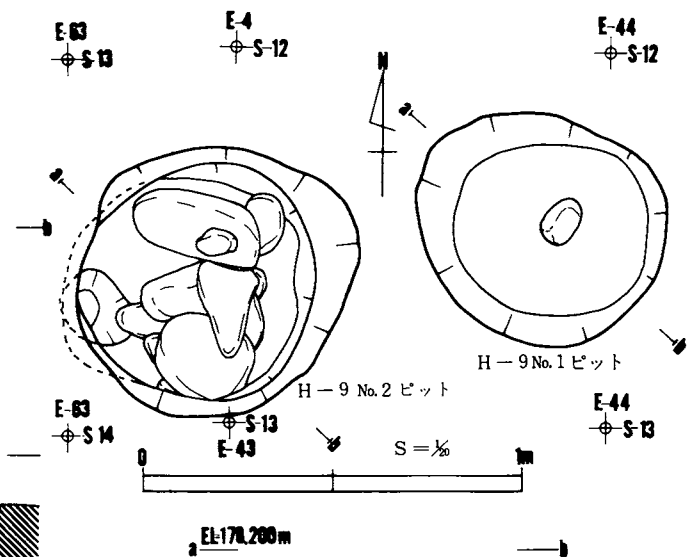
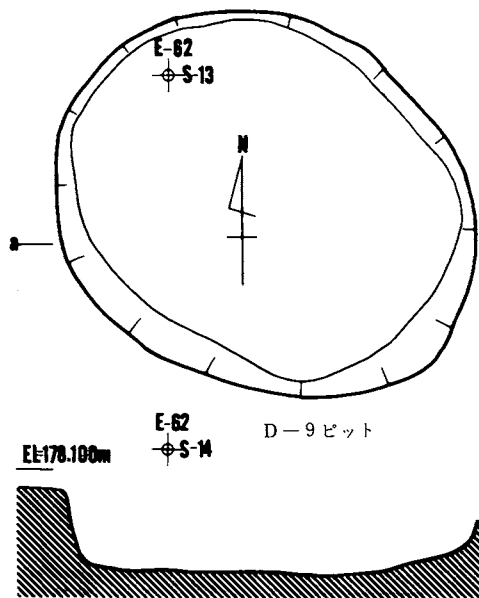
調査区中央付近のH-9グリット、VI層上面で検出された。検出面上縁で長軸0.65m、短軸0.61mの平面形が円形状を呈する。検出面よりの深さは0.24mで、断面形は壁が垂直に立ち上がる皿状を呈する。底部は堅く平坦である。埋土は黒褐色土・褐色土・明褐色土からなりいずれも柔らかく炭化物が僅かに混じる。出土遺物はない。

##### H-9 No 2ピット (図版19・写真図版7-3~5)

H-9 No.1ピットの西側に検出された。検出面はVI層上面である。検出面上縁で直径0.70mの平面形が円形を呈する。検出面よりの深さは0.53mで、断面形はピーカー状を呈する。床面は平坦である。埋土は上層に黒褐色土、褐色土で柔らかい。下層は黒褐色土、黒色土、褐色土であり、底部には焼土粒が混じった柔らかい黒褐色土で構成される。ピット内には20cm大~40cm大の



H-9 No.2 ピット出土遺物 S = 1/2

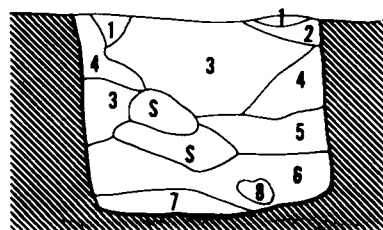


EL=187.200m

- H-9 No.1ピット注記
1. 7.5Y R 1/2 黒褐色土
  2. 7.5Y R 1/2 褐色土
  3. 7.5Y R 1/2 褐色土
  4. 7.5Y R 1/2 明褐色土

- H-9 No.2ピット注記
1. 7.5Y R 1/2 黒褐色土
  3. 7.5Y R 1/2 褐色土
  3. 7.5Y R 1/2 褐色土
  4. 7.5Y R 1/2 褐色土
  5. 7.5Y R 1/2 極暗褐色土
  6. 10Y R 1/2 黒褐色土
  7. 7.5Y R 1/2 黒色土
  8. 7.5Y R 明褐色土

図版19 ピット(1)



礫が重なり合ってピット中央に入っていた。礫の状態より意図的に埋られたと推定される。

#### 出土遺物 (図版19-1～6・写真図版13-1～6)

出土遺物は埋土中とピット底面より出土している。これらの土器は胎土、色調、施文方法が同一であることより、同一個体の破片と思われる。図版18-1は底部破片であり、底部は平担である。図版18-2～6は撚糸文が縦位に施文されている。胎土は粗砂を含むがよく調整され、焼成も良好である。色調はにぶい褐色を呈する。器厚は4mmから5mmである。その他の出土遺物はない。

#### D-9ピット (図版19)

調査区東側段丘縁D-9グリッドⅥ層上面で確認されたピットで、検出面上縁で東西1.16m 南北0.96mの平面形が楕円形状を呈する。検出面よりの深さ0.20mで断面形は皿状を呈する。埋土は褐色土の単層で固く締っていた。床面は平担で堅い。出土遺物はない。

#### D-10No 1ピット (図版21・写真図版7-2)

D-10グリッドのⅥ層上面で検出された。D-10柱穴群の一角にあるが柱穴群との関係は不明である。ピットの一部は後世の攪乱によって削られている。検出面上縁で南北1.00mを測り平面形は不整な円形状を呈する。検出面よりの深さは0.20mを測り、断面形は皿状を呈する。床面は平担である。埋土は暗褐色土、褐色土を主体としたものより構成され、焼土粒、炭化物が混入している。

#### 出土遺物 (図版21-1・写真図版13-8)

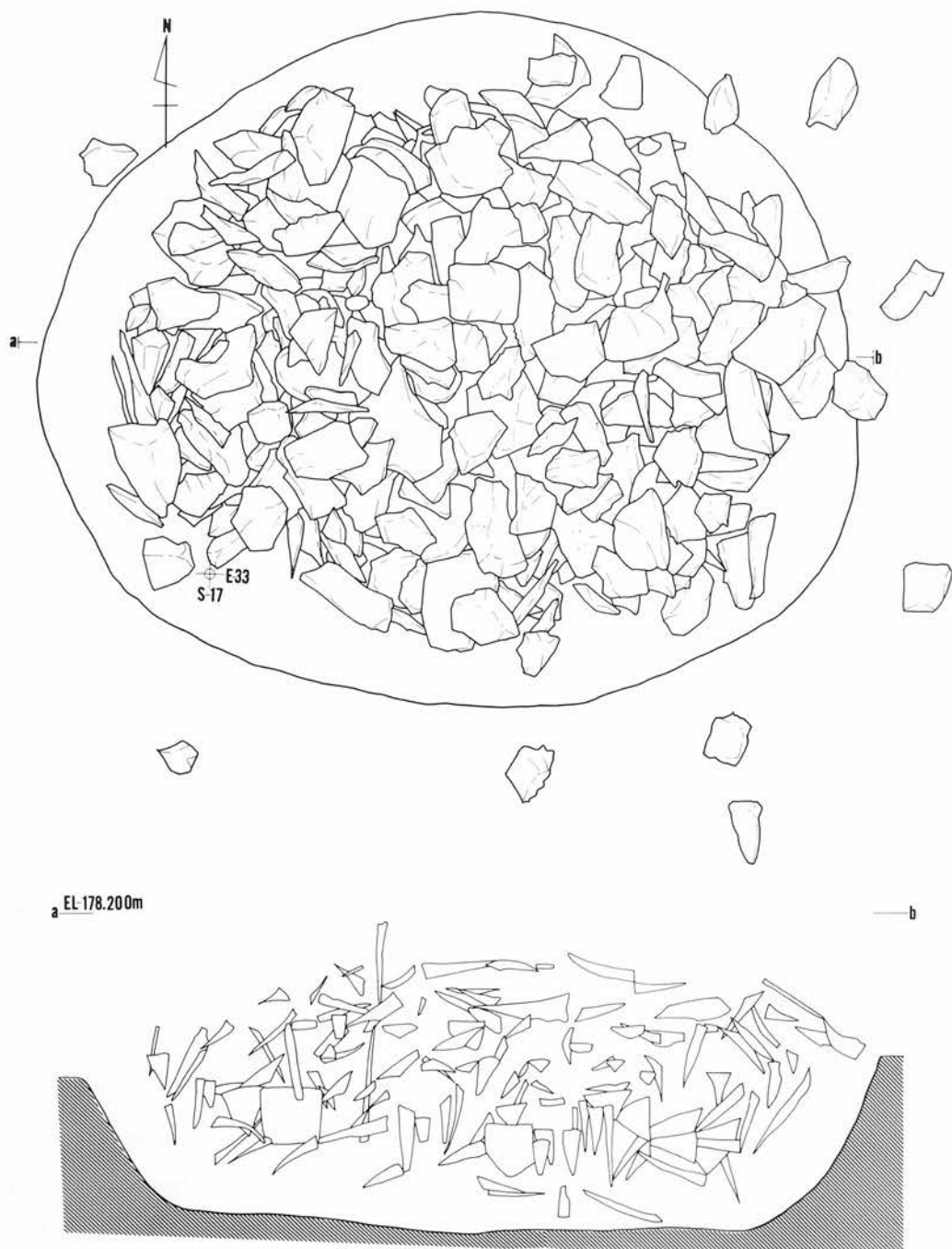
遺物は埋土中より小形の手づね土器の底の部分が一点出土している。胎土は石英粒・粗砂を含み、軟弱である。焼成は普通である。色調は黒褐色を呈する。器厚は底部で6mmである。

#### D-10No 2ピット (図版17)

D-10グリッドに検出されD-10柱穴群の一部を切っている。平面形は直径0.85mのほぼ円形を呈し、検出面よりの深さは0.26mを測る。断面形は壁がゆるやかに立上る鍋底状を呈する。床面はほぼ平担である。埋土は暗褐色土と黒褐色土であり焼土粒、炭化物粒などが入っている。

#### 出土遺物 (図版17-1・写真図版13-7)

出土遺物はフレックと土器がある。土器は図版17-1の口縁部より肩部にかけての土器で、器形は肩部より胴部にかけ張り出す壺形と思われる。文様は肩部より下位に沈線によって長楕円形状のものや、三角形状のものを横位に施文している。縄文は口縁部、体部とも施されていない。口縁部の一部にはミガキの痕跡が残っている。また器表面には黒色光沢をしている天然



図版20 J-10ピット(2)S=1/6

樹脂膜状の物質が刷毛塗りされているものがみられる。胎土は粗砂を含むが緻密である。焼成は良く堅い。色調は浅黄橙色から褐色を呈する。器厚は約4mmである。

**P-21ピット** (図版21・写真図版7-6)

調査区南側P-21グリッドでV層上面で土器を伴って検出された。土器の出土状況はピットに覆いかぶさるようにして底部を欠いて、 $\times$ 個体が検出された。検出面上縁で直径0.74mの平面形が円形状を呈する。検出面よりの深さは0.13mで、壁が外傾に緩く外反する皿状を呈する。底部は平坦であるが柔かい。埋土は炭化物が僅かに混入する柔かい暗褐色土で構成される。

**出土遺物** (図版21-2・写真図版12-2)

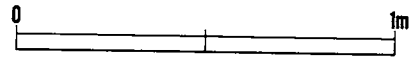
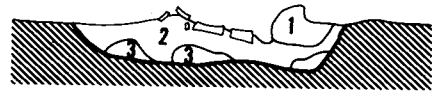
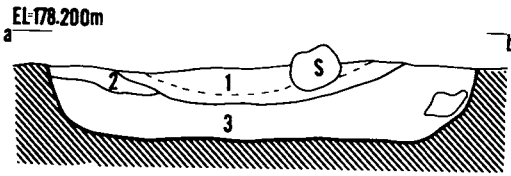
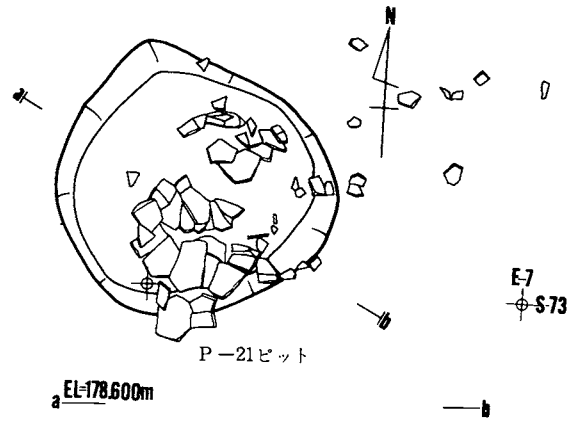
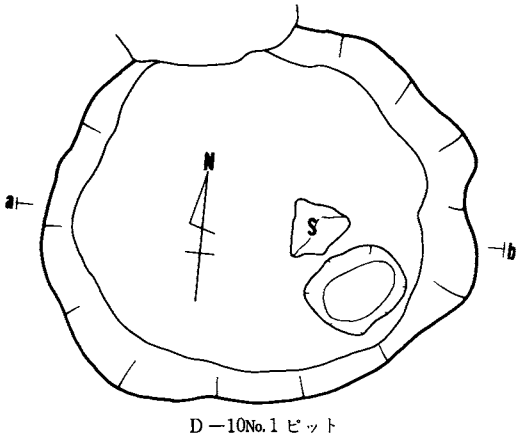
遺物はピットに覆いかぶさるように出土したものであり、約 $\times$ 個体が出土した。器形は深鉢形を呈する。口縁部は外傾するが口縁は平坦であり1個の小突起を有する。口縁部から頸部にかけて部分的にコゲ状の付着物が外面についている。口縁部は無文であり頸部より体部にかけて複節の斜縄文RLRとLRLを交互に横位に回転して羽状縄文にしている。胎土は繊維を多量に含み、粗砂が入り脆弱である。焼成は普通である。色調は暗褐色から褐色を呈している。器厚は10mmである。

**C-10フラスコ形No1ピット** (図版22・写真図版8-1・2)

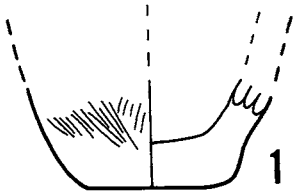
C-10グリッドVI層上面で検出された。ピットの北側は削られており約半分が消失している。またこのピットの一部に柱穴状のピットが重複しており、柱穴状ピットが本ピットより新しいものである。規模は検出面上縁で東西0.50m、深さ0.65m、底部で0.78mを測る。平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。底部は平坦であり比較的堅い。埋土は上層で褐色土から暗褐色土を主体としている。5層には焼土粒・炭化物粒が多く含まれ、下層では褐色土中に黒褐色土が混入し、炭化物粒を微量に含むものからなる。出土遺物はない。

**C-10フラスコ形No2ピット** (図版22)

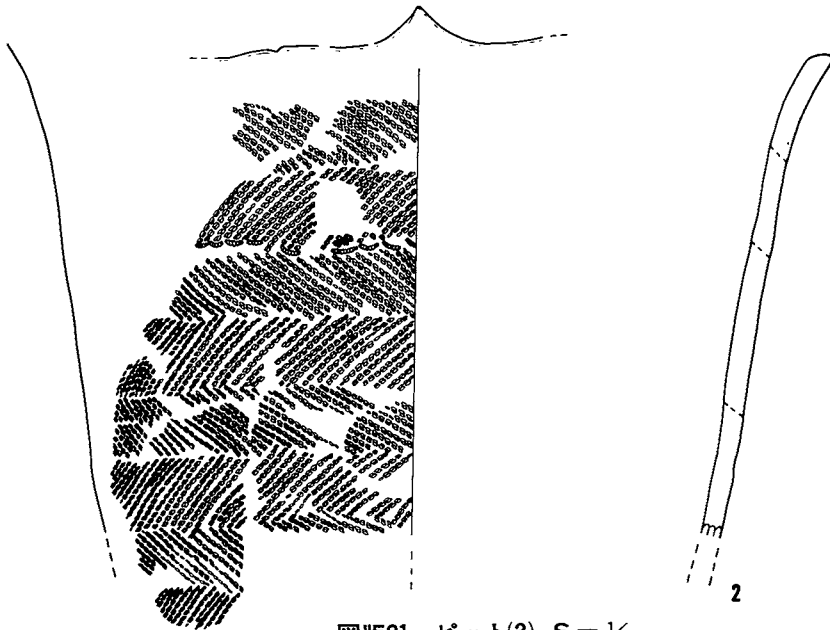
C-10フラスコ形ピットNo.1の東側に検出され、No.1ピット同様、北側は削られ、ピットの一部を柱穴状ピットが切っている。規模は検出面上縁で東西0.63m、深さ0.28m、底部で0.55mを測る。平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。底部は平坦である。埋土は褐色土を主体としたもので構成され、底部上には壁が崩れたと思われる堆積がみられる。出土遺物はない。



1. 暗褐色土  
焼土粒炭化物粒を含む
2. 褐色土
3. 褐色土  
炭化物粒を含む



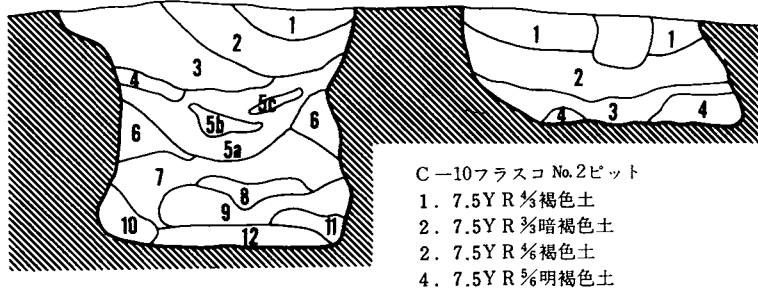
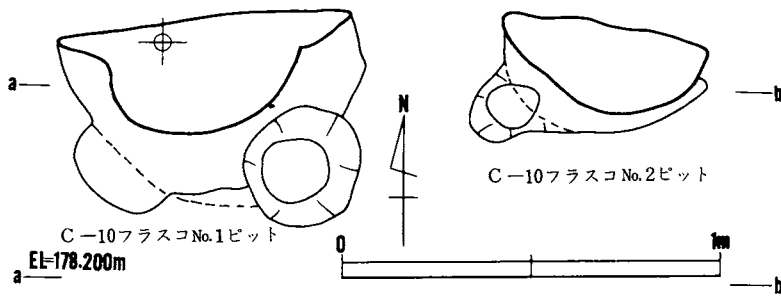
D-10No.1 ビット出土遺物 S = 1/4



P-21 ビット出土遺物 S = 1/4

図版21 ビット(3) S = 1/20





C-10 フラスコ No.1 ビット

1. 7.5Y R 1/2 黒褐色土
2. 7.5Y R 1/2 褐色土
3. 7.5Y R 1/2 "
4. 10Y R 褐色土
5. 5 a 7.5Y R 1/2 褐色土
- 5 b 炭化物粒
- 5 c 焼土粒

6. 7.5Y R 1/2 明褐色

7. 7.5Y R 1/2 暗褐色土、シルト質褐色土粒風化礫、炭化物粒焼土粒を含む
8. 黒褐色土、褐色砂、炭化物粒、小礫の混土
9. 7.5Y R 1/2 褐色土
10. 黒色土、褐色砂、炭化物粒小礫の混土
11. 10Y R 1/2 褐色土 シルト質
12. 10Y R 1/2 褐色土

図版22ピット(4)S=1/40

## 5 陥し穴状遺構

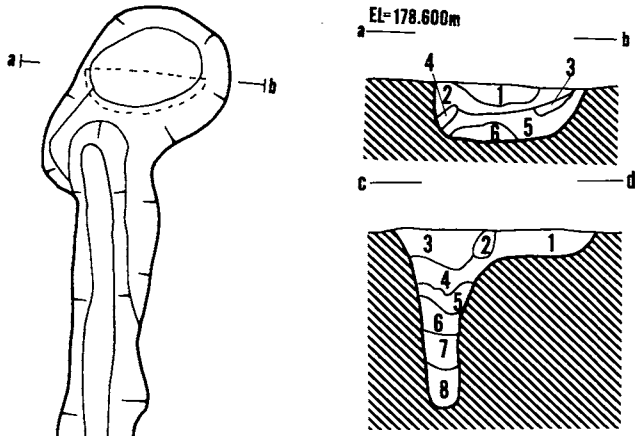
K-6 陥し穴状遺構 76年度調査区 (図版23・写真図版9-2)

76年度調査グリットのK-6グリットVI層上面で検出され、検出面上縁で長軸5.0m、短軸0.40m、底部で長軸4.92m、短軸0.12mの平面形は長楕円形状を呈し、検出面よりの深さ0.70mで、横断面形はU字状を呈する。縦断面形は袋状を呈する。底部はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土と黒褐色土が互層をなし、締りはあまりないものから構成される。

出土遺物はない。

N-7 陥し穴状遺構 76年度調査区 (図版23・写真図版9-1)

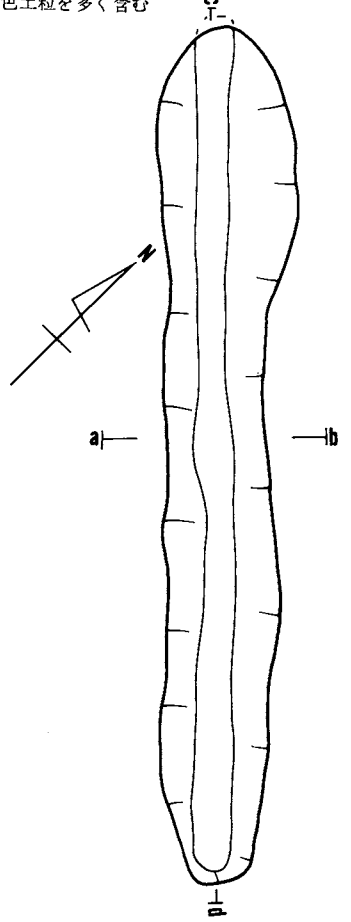
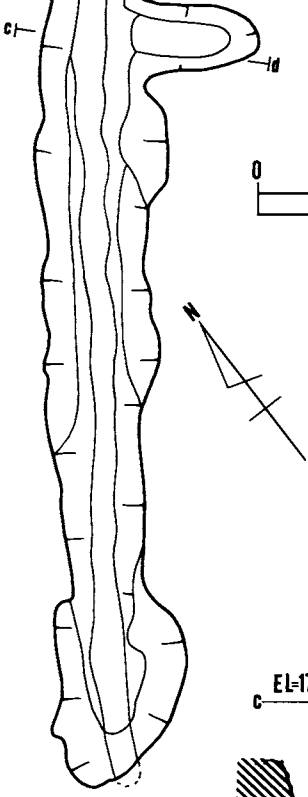
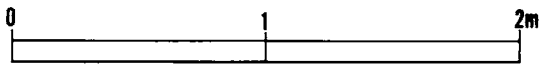
76年度調査グリットのN-7グリットVI層上面で検出された。検出面上縁で長軸3.34m・短軸0.38m・底部で長軸3.40m・短軸0.14mの平面形は長楕円形状を呈し、検出面よりの深さ0.90mで、横断面形はU字状を呈する。底部は平坦である。埋土は黒色土を主体としているが、湧水のため土層観察が十分にできなかった。出土遺物はない。



K-6 陥し穴状遺構注記

1. 木根等による攪乱をうけた部分
2. ローム ブロック
3. 黒色土を主とした黒色土層との混合土
4. 黒褐色土層炭化物粒 小礫 (3~7mm) を少量含む
5. 黒色土細砂質 若干しまりあるが粘性なし
6. 黒色土で細砂を含む 明褐色土粒を若干含むしまりよく、粘性なし
7. 明褐色土と黒色土とが交互に重なっている。
8. 細砂質黒色土明褐色土粒を多く含む

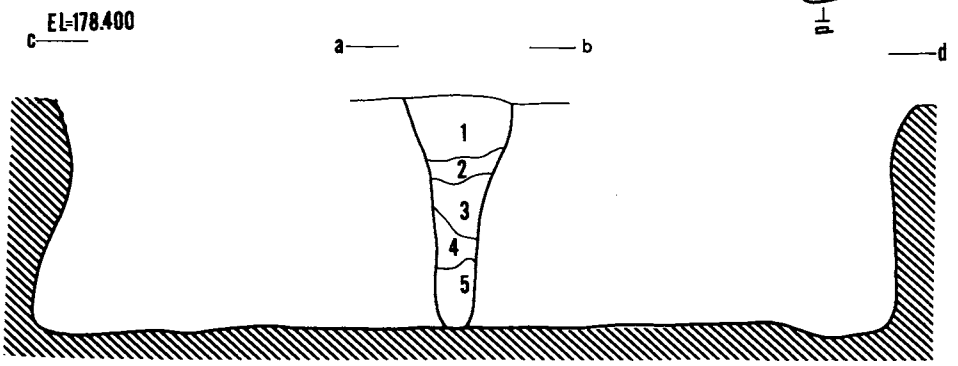
K-6 陥し穴状遺構



N-7 陥し穴状遺構注記

1. 黒色土上部にシルト質 細砂を含む
2. 黒色土層 白色砂を多く含む
3. 黒褐色土層 褐色土砂質のブロックあり炭化物多い
5. 黒色土層 ローム粒少量含む しまりなしカーボ多し

N-7 陥し穴状遺構



図版23 陥し穴状遺構(1) S = 1/50

#### L-6 陥し穴状遺構 (図版24・写真図版9-8)

調査区の中央付近L-6グリットVI層上面より検出され、精査中に水が湧き出て精査に苦労したピットである。検出面上縁で長軸3.20m・短軸0.50m・底部で長軸2.78m・短軸中央部で0.07m、両端で0.16mを測る。形状は南北に長い長楕円形状を呈するが中段より底部の形状は長方形を呈し、中央部分が狭くなっている。検出面よりの深さは0.95mである。横断面形は開口部が広く中段より底部が狭い「Y」字状を呈する。縦断面形は南側の壁が内側に入り込み北側の壁が垂直に立ち上る形を呈する。底部は平坦である。埋土は水が湧き出するため土層の観察は十分に行な得なかったが、上層は暗褐色土・黒褐色土・褐色土からなりいずれも柔かい。中層から最下層までは暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土が交互に入り最下層は黒褐色土である

#### 出土遺物 (図版24-1・写真図版13-9)

遺物は7層より口縁部破片が1片出土している。器表面に貝殻文と沈線を組み合わせた文様を施している。口唇部内部には貝殻腹縁を利用した刺突がつけられている。胎土は小石・粗砂等が含まれるが良く調整され、焼成も良い。色調はにぶい橙色である。器厚は6mmである。

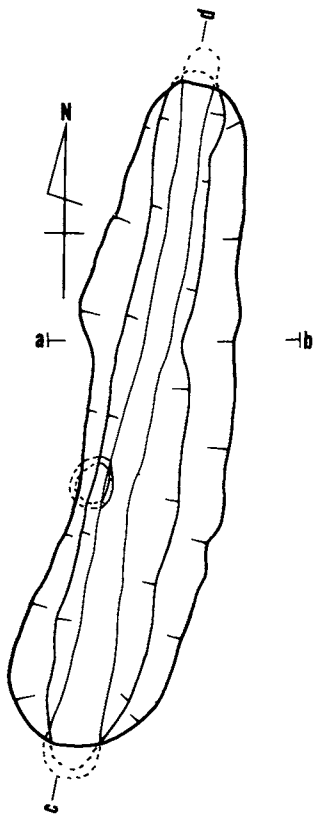
その他の出土遺物はない。

#### J-9 陥し穴状遺構 (図版24・写真図版9-6, 7)

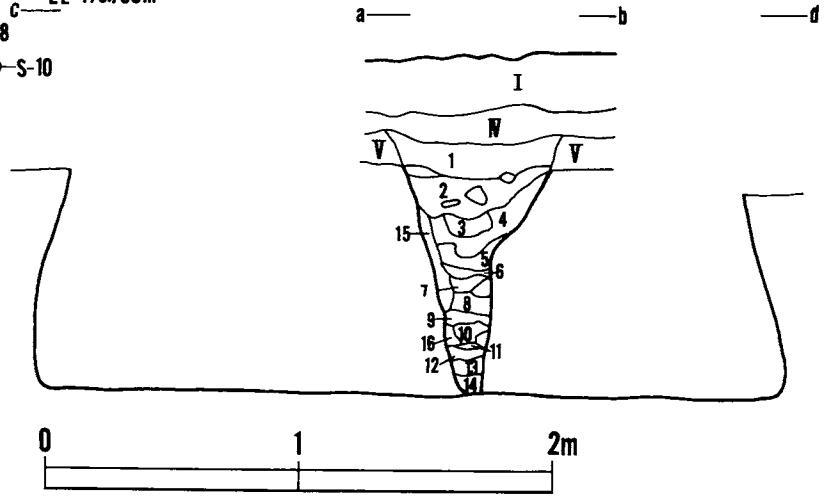
調査区中央J-9グリットで検出された。検出面はV層上面であるが、形態などがはっきりしないため、V層を剥いだVI層上面で精査したピットである。精査面上縁で、長軸2.68m、短軸0.87m底部で長軸2.95m・短軸0.11m、精査面よりの深さ0.87mで、横断面形は「V」字状を呈する。縦断面形は両端とも快り込み袋状を呈する。床面は平坦である。埋土は上層で微量の炭化物が入る柔かい黒褐色土と暗褐色土が入る。中層から最下層にかけては褐色土には微量の炭化物が混じり、最下層は黒褐色土で微量の炭化物が混入している層より構成される。出土遺物はない。

#### D-9 陥し穴状遺構 (図版25・写真図版9-3, 5)

調査区東側段丘縁のD-9グリットのVI層上面に検出された。この地区のVI層上部は盛土であり盛土をする際にいくらか上部は削られていると思われる。検出面上縁で長軸2.97m・短軸0.56m、底部で長軸3.00m・短軸0.13mを測る。形状は南北に長い長楕円形状を呈し、検出面よりの深さは0.92mである。横断面形はU字状を呈する。縦断面形は箱形を呈する。壁は比較的固い。底部は下位の礫が露出しており、北から南に向ってゆるやかに下降している。埋土は上層で明褐色土と褐色土がブロック状に見られる柔かい黒褐色土、中層でやや粘性のある柔かい黒褐色土・明褐色土・暗褐色土・最下層で明褐色土と褐色土が混入する柔かい黒褐色土より



EL=178.700m  
E-28  
S-10



J-9 陥し穴状遺構

J-9 陥し穴状遺構

1. 7.5Y R 極暗褐色土
2. 7.5Y R 黒褐色土
3. 10Y R 黒褐色土
4. 10Y R 暗褐色土
5. 7.5Y R 褐色土
6. 7.5Y R 黒褐色土
7. 7.5Y R 褐色土
8. 7.5Y R 褐色土

9. 7.5Y R 黒褐色土
10. 7.5Y R 極暗褐色土
11. 10Y R 暗褐色土
12. 7.5Y R 暗褐色土
13. 7.5Y R 明褐色土
14. 7.5Y R 黒褐色土
15. 7.5Y R 褐色土
16. 7.5Y R 暗褐色土

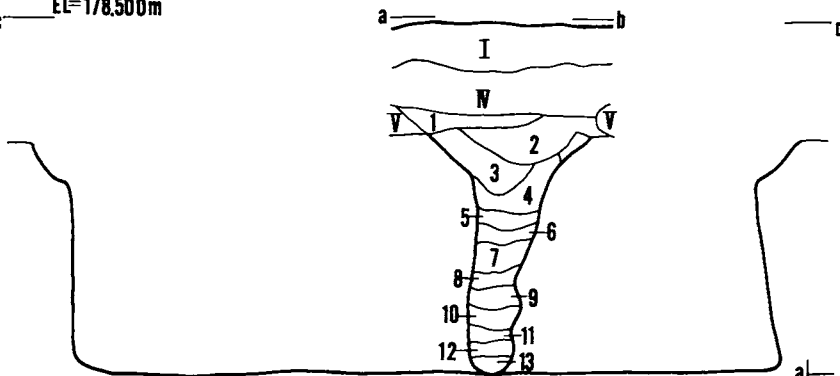


E-28  
S-13

E-22  
N-1

L-6 出土遺物

EL=178.500m

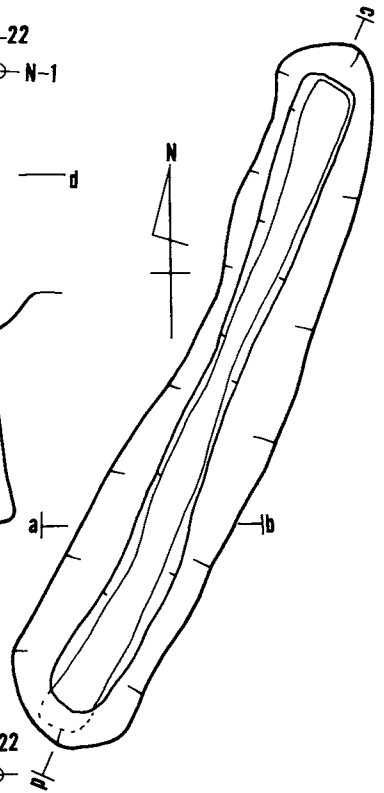
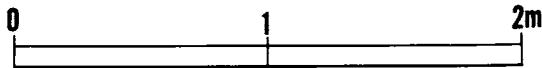


L-6 陥し穴状遺構

1. 7.5Y R 褐色土
2. 7.5Y R 暗褐色土
3. 7.5Y R 褐色土
4. 7.5Y R 暗褐色土
5. 7.5Y R 極暗褐色土、土器出土
6. 7.5Y R 褐色土
7. 7.5Y R 黒褐色土

L-6 陥し穴状遺構

8. 7.5Y R 極暗褐色土
9. 10Y R 暗褐色土
10. 7.5Y R 褐色土
11. 7.5Y R 黒褐色土
12. 7.5Y R 褐色土
13. 7.5Y R 黒褐色土



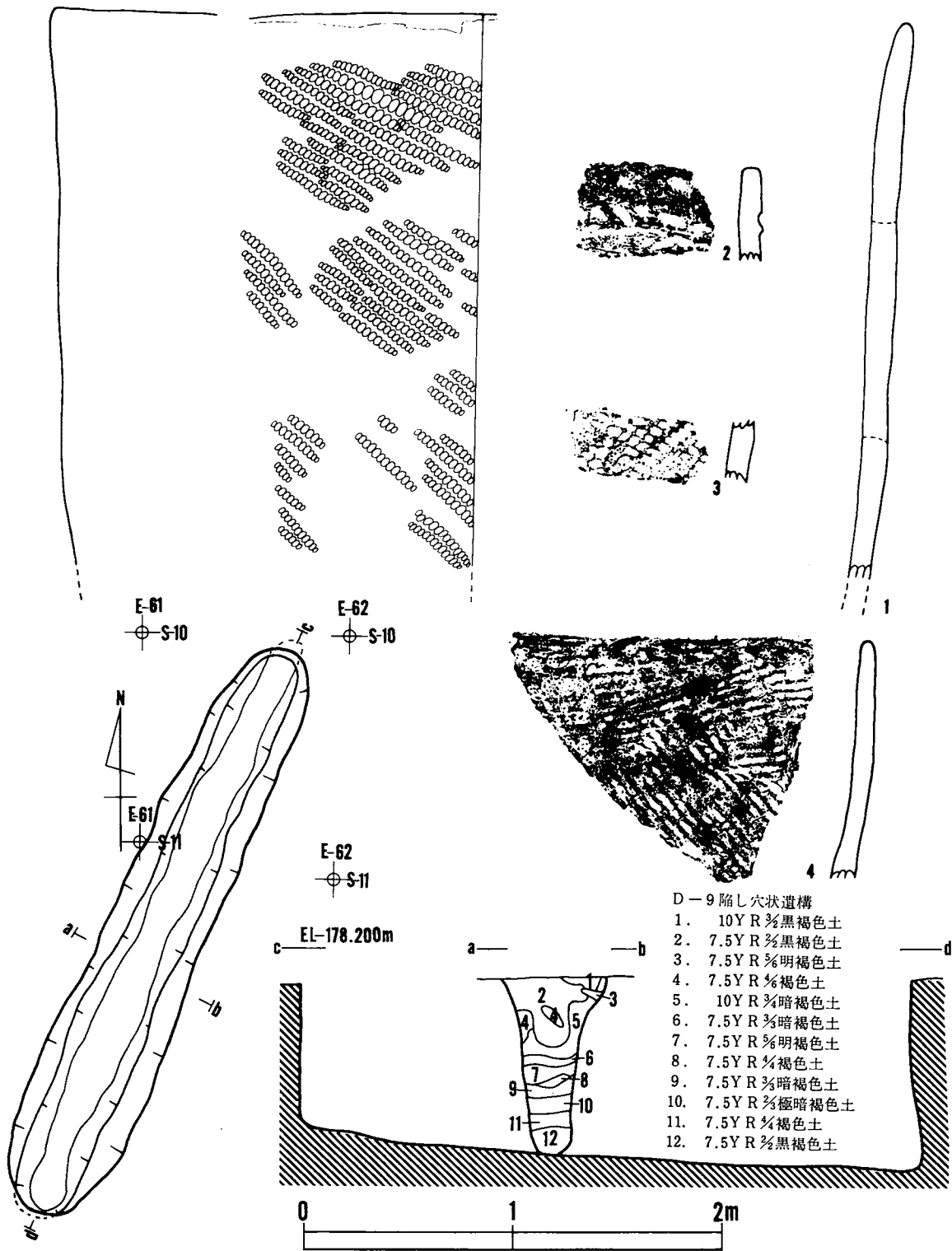
E-22  
S-2

図版24 陥し穴状遺構(2) S = 1/30

構成される。

**出土遺物** (図版25-1～4、写真図版13-10～12)

遺物は2層の中頃より縄文土器片が4片出土している。図版24-1は口縁部が直線的に立つ深鉢形土器で口縁は平縁である。口唇部の状態は丸みを帯びている。文様はなく口縁部より単節斜縄文RLが施される。胎土は粘土が多く砂粒がいくらか入る。焼成は普通である。器厚は7mmである。図版25-2は口縁部破片であり口唇部の断面形は箱形を呈する。口縁部は無文で頸部に棒状工具による刺突が見られる。それより下位は不明である。胎土は脆弱である。色調は褐色を呈する。器厚は6mmである。図版25-3は胴部破片で単節斜縄文LRが施されているものである。胎土は良好。色調は褐色を呈する。器厚は6mmである。図版24-4は口縁部破片であり口縁部が平縁をなし、口唇部は胴部よりも細くなっている。口唇部の断面形は丸みを帯びている文様はなく口縁部より単節斜縄文RLが方向を変えて施文され羽状縄文状になっているものである。胎土、焼成も良い。色調は暗褐色を呈する器厚は6mmである。



図版25 陥し穴状遺構 (3)

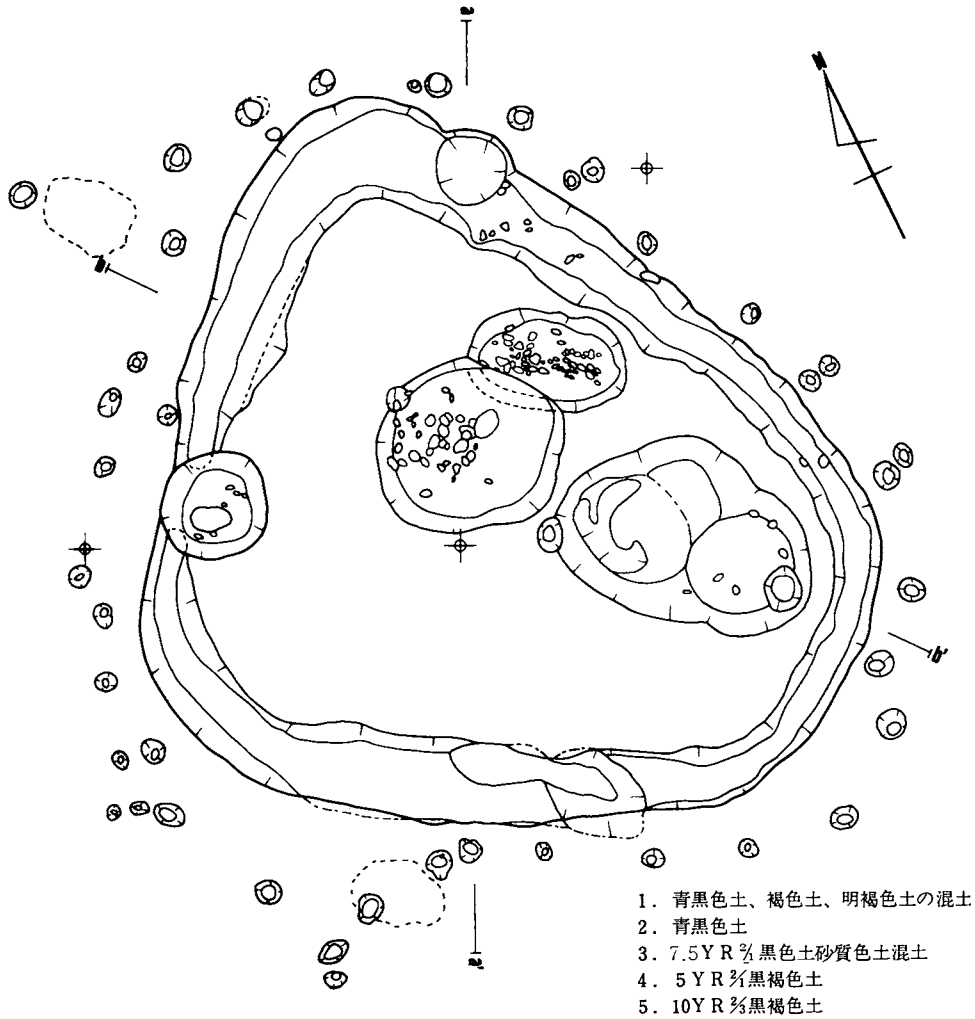
## 6. 周溝状遺構

### N-5 周溝状遺構 76年度調査区 (図版26・写真図版10-1~5)

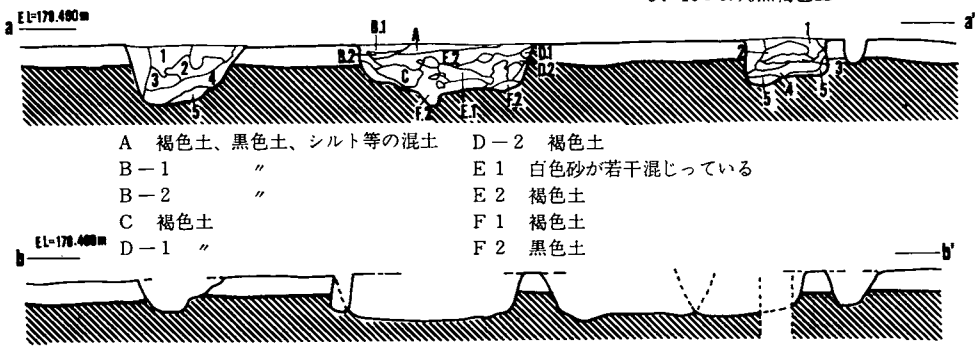
N-5 グリットⅢ層上面で検出されたものである。溝は全周するもので平面形は東側が3m前後と短い、他の辺は6m前後で隅丸の方形状を呈するものである。溝の最大幅は0.75m・最小幅0.45mで検出面よりの深さは最深部で0.60mを測る。溝の断面形は〔U〕字形を呈するものである。この溝は二度及び三度の掘り返しが認められた。埋土は黒色土を主体とするものである。この溝に伴う遺構としては周溝内及び周溝部分にピットが5基確認されたが、周溝全体が人為的攪乱を受けているため実際にはどの位のピットが形成されていたか不明である。No.1ピットは直径1.10mの円形を呈するものである。No.2ピットは直径2.00mの円形を呈するものである。No.3ピットは長軸1.70m・短軸1.60mの長楕円形状を呈する。No.4ピットは直径2.00m前後の不整形を呈する。No.5ピットは直径1.50mの円形を呈するものである。深さは一定ではないがどのピットも0.60m前後を測るものである。埋土はどのピットもほぼ同一の内容を呈し、褐色土と黒色土を主体としたもので構成され、多かれ少なかれ礫を内包しており、No.1ピットは巨礫(30×40cm)1個と15cmほどの礫5個があり、他のピットは3~15cmほどの礫が土坑底部及び中層部に入っている。なお周溝の周囲には径0.10m~0.20m・深さ0.20m~0.40mほどの小柱穴状の穴が検出されている。これらの小穴は検出状態より本遺構に直接関係のあるものであろう。

### J-11 周溝状遺構 (図版27・写真図版10-6、7)

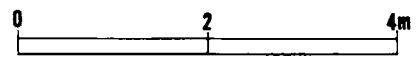
J-11 グリットⅣ層上面で確認されたが輪郭等がはっきりしないために、Ⅵ層上面まで下げて遺構精査したものである。平面形は隅丸方形状に周り、1辺が2.50m前後で隅丸方形状を呈し、北西部分で途切れるものである。最大幅0.50mで最小幅0.20mを測る。深さは精査面よりの深さ0.30m前後で、断面形はU字状を呈するが、底部の溝幅が細くなっている部分もある。埋土は黒褐色、暗褐色が主体であり柔らかい。この溝に伴う遺構としては東側の溝部分に1個のピットが検出され、平面形は長軸1.00m前後、短軸0.40m前後の楕円形状を呈し、断面形は検出面より深さ0.85mで東壁が内湾するものである。埋土は黒褐色土の単層である。尚このピットは底部の状態より3個のピットの切り合いとも考えられるが水が湧き出してくるために捉えることは出来なかった。出土遺物は溝埋土中、ピット埋土中とも出土していない。



1. 青黒色土、褐色土、明褐色土の混土
2. 青黒色土
3. 7.5YR 7/2 黒色土砂質土混土
4. 5YR 7/2 黒褐色土
5. 10YR 7/2 黒褐色土

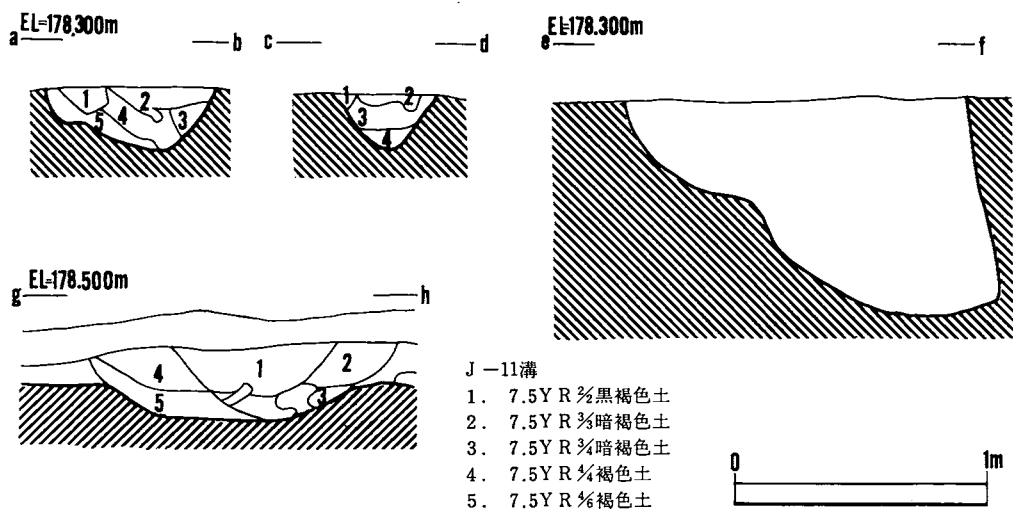
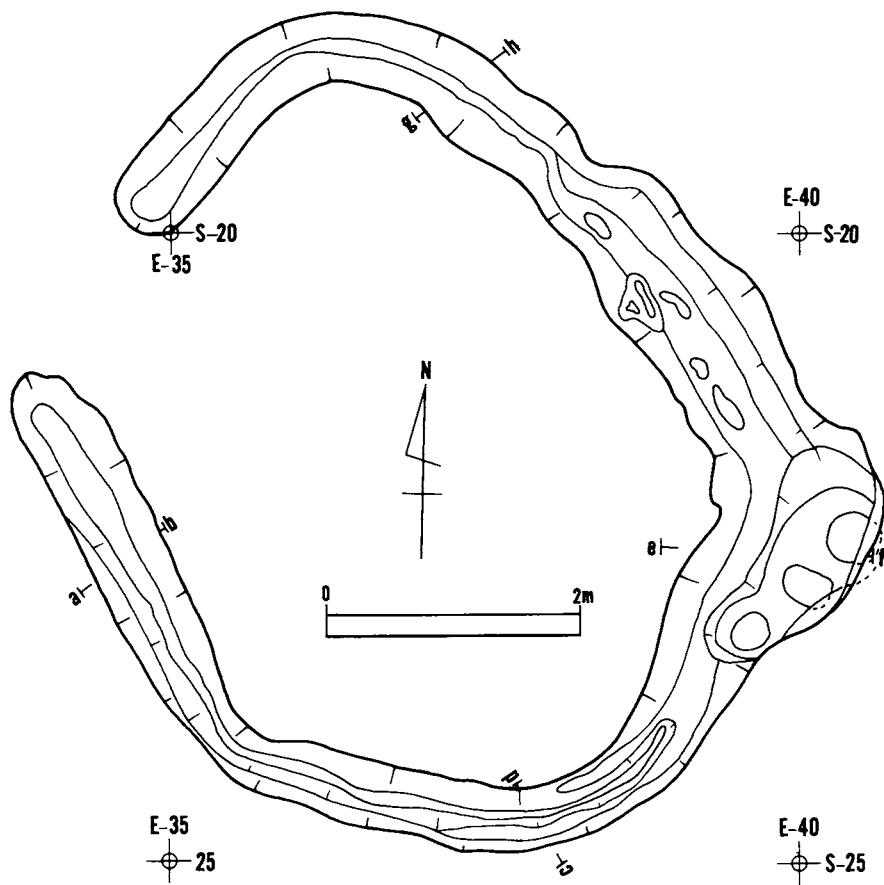


- |     |                 |     |              |
|-----|-----------------|-----|--------------|
| A   | 褐色土、黒色土、シルト等の混土 | D-2 | 褐色土          |
| B-1 | "               | E 1 | 白色砂が若干混じっている |
| B-2 | "               | E 2 | 褐色土          |
| C   | 褐色土             | F 1 | 褐色土          |
| D-1 | "               | F 2 | 黒色土          |



図版26 N-5 周溝状遺構 S = 1/80





圖版27 J-11 周溝狀遺構 S = 1/60

## (2) 遺構外出土遺物

桜松遺跡の1次2次発掘調査で出土した遺物は遺構からの出土が少なくいずれもⅠ層からⅣ層にかけて出土したものである。

縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期、奈良・平安時代の各期の土器、土製品、石器、剥片が出土した。出土層位は、各時期の土器ともⅠ層からⅥ層上面に包含されている。出土した遺物（特に土器）はそれぞれの従来編年されている各型式に比定されるが、攪乱や掘り返し等があるため、層位的把握により判別されたものはない。ここでは出土した遺物を土器、土製品、石器に分けて以下に述べる。

### 1. 土器

土器は、完形品を除いた以外は、復元個体（図上復元も含む）4個で、他はいずれも破片である。破片の部位は口縁部、体部、底部の各部位が含まれている。これらの土器は時代別に大別すると、縄文式土器（1群）と、土師式土器（2群）に大別される。その内縄文式土器がもっとも多い。縄文式土器（1群）は、施文技法により貝殻文、押型文、降帯文、沈線文、縄文とあり、胎土に繊維を含むものと含まないものがある。土師器（2群）は拓影図に載せた2片以外にも76年度調査で、内黒坏の小破片が出土しているが、数度の遺物の移動によって所在が不明になったものもある。

土器の分類は、施文技法、地文の違いにより下記のごとく分類した。

#### 第1群 縄文式土器

第1類 貝殻文

第6類 縄文

第2類 押型文

第7類 無文

第3類 縄文側面圧痕文

第2群 土師式土器

第4類 隆帯文

土師器片

第5類 沈線文

## 第1群土器 縄文土器

第1類 貝殻文と沈線文による文様を施文しているもの（図版29-1、2・30-1～6・写真図版15-1～8）

a 貝殻文と沈線文の組み合わせによって文様を構成するもの（図版29-1、2・30-1～8・写真図版15-1～8・16-1、2）

器物としては完形品がなくいずれも口縁部分や胴部の破片であり、全体的なものはつかめな  
いが、おおよそ尖底深鉢形の土器と推定される。口縁の形状としては山形波状口縁（図片29-  
1・30-1、2、5）と平縁（図片30-4）がみられ、山形口縁はその突起部の両脇に小突起  
を有するものがある（図片29-1・30-2）。口唇部の断面形は平坦あるいは丸味を帯びるも  
の、ゆるやかに外傾するものなどがあり、口唇部に刻みを有するものと有さないもの（図片29-  
1・30-2）とがある。口唇部の刻みは貝殻腹縁部分により押圧したものであり、図版29-  
1の口縁部の左側口唇部分には貝殻腹縁押圧後さらにへら状工具によって刻み目を施している。  
施文方法はへら状もしくは棒状工具による沈線文や刺突文と貝殻腹縁文よりなり、沈線文は文  
様を区画するために使われ、直線的に抽かれる場合と連続波状曲線文を描く場合に使われてい  
る。また2条の平行沈線内では内部が隆起している。刺突文は連続波状曲線文の両端に施文さ  
れている。貝殻腹縁文は図形内部を埋める場合（図版30-4）と沈線の脇と口唇部分と胴部に  
施されている。文様帯は図版29-2を見る限りにおいては、胴部下半までは入るようであるが  
よくわからない。文様構成としては、山形波状口縁の頂部付近よりほぼ左右対称に配置され△  
形を基調としているが、胴部で屈曲する器形（図版29-2）では屈曲部の上半と下半では文様  
を異にし、下半では直線を平行に引いた方形の区画をもっているようである。

b 貝殻文だけで文様を構成するもの（図版30-9、10・写真図版16-3、4）

口縁部は外傾する深鉢形と思われる。器形はいずれも小破片であるため全体の器形が不明で  
ある。口縁の形状は平縁と思われる。口唇部は平坦なもの（図版30-9）と、丸味を帯びてい  
るもの（図版30-10）とがある。図版30-9は口唇部にへら状もしくは棒状工具による刻みが  
つけられており、図版30-10は貝殻腹縁文による押圧の刻みがある。施文方法は図版30-9で  
は口縁部より縦位に貝殻腹縁文が施され、裏面には条痕が施されている。図版30-10は表裏と  
もに口縁部より縦位に貝殻腹縁文が施されるが表にはなお横位に一条施されている。いずれも  
小破片であるため文様構成ははっきりしない。

**c 沈線によって格子目状の文様を構成するもの** (図版30-11・写真図版16-5)

小破片であり器形文様とも全体的なものとはつかめないが、口縁部は極端に細くなりいくらか内湾している。口唇部の断面形はいくらか丸味を帯びている。口唇部には(×)状にへら状工具による刻みが入っている。施文方法は口縁部より縦位と横位に格子状に沈線が入り、口縁直下にはさらに斜位に1cm程度の沈線による刻みがつけられ、一条であるが貝殻腹縁による押圧痕が体部にみられる。胎土はa、b、cの各類とも繊維の混入はなく粗砂、石英粒、砂粒などが入り堅く焼き上げられている。なお図版30-8には金雲母が入っている。器表裏面はいずれもよく整えられている。色調はにぶい黄橙色、明褐色、黒褐色等であり比較的明るい色調を呈している。器厚はいずれも8mm前後である。

**第2類 押型文を施している土器** (図版30-12、13・写真図版16-6、7)

2片の出土であるがいずれも小破片であるため詳細は不明である。図版30-13は口縁部分が先細り状になっており口縁部分はへら状工具によって削られている。施文方法は図版30-12、13とも施文原体の復原は出来ないが、恐らくいずれも棒状のものに刻みを施したものを斜位もしくは横位に回転している。図版30-12は山形波状に押型文を展開しているもので、図版30-13は横位に施文した後、棒状工具により口縁部と平行に沈線を数条施している。胎土はいずれも繊維を多量に含むが、器表裏面ともよく整形され堅い。色調は暗褐灰色を呈する。器厚は図版30-12が11mm、図版30-13が8mmである。

**第3類 縄文側面圧痕による文様をもつもの** (図版31-1~8・写真図版16-8~15)

この類は2種に分けられ、縄文側面圧痕と刻みによって文様を構成するもの(a)と、組紐の圧痕によって文様を構成するもの(b)とに分けられる。

**a 縄文側面圧痕と刻みにより文様を構成するもの** (図版31-1~7)

器形はいずれも破片であり全体形はつかめないが深鉢形を呈するものと思われる。図版30-1~5は文様器形等からみて同一個体と思われるものである。口縁部はゆるやかな波状を呈するものようであるが詳細は不明である。口縁部はいくらか内湾ぎみのものであり、波状頂部付近(図版31-1)には粘土の高まりがある。口唇部の断面は丸味を帯びている。施文方法は原体Rの撚糸の側面を口縁部に施し、体部上半付近で横に1本の縄文側面圧痕を施文して口縁部文様帯と体部に分け、口縁部部分に側面圧痕と下方からの刺突によって文様を構成し、体部には羽状縄文を施文しているものようであるが、体部破片が少ないことからはっきりしない。図版31-6、7も同様の文様構成を呈するものであるが、口縁部は平縁で、口唇部断面形は外側に傾斜するもの(図版31-6)と、内側に傾斜するもの(図版31-7)である。施文方法は

図版31-6が原体R lのものを、図版31-7が原体L rのものを押捺している。図版31-6は図版31-1～5と同様の文様構成を呈しているが、図版31-7は口唇部外面に刻みを施し、側面圧痕内には刻みを施さないものようである。図版31-6の体部には結束のある羽状縄文を施文している。原体はO段多条のRL rとLR lである。胎土はいずれも繊維を多量に含み、粗砂、石英粒を含む。焼成は普通である。色調はにぶい褐色から褐灰色を呈する。器厚は10mm位である。

**b 組紐の圧痕によって文様を構成するもの** (図版31-8)

1片の出土をみたもので、小破片であり器形は不明である。施文方法は三本組紐で平組の側面圧痕によって文様を構成しているもので、円形の刺突が1個見られる。胎土は繊維を含む土器で粗砂等が入っている。焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈している。器厚は8mmである。

**第4類 隆帯文をもつもの** (図版28-3、32-1～9・写真図版17-1～9)

**a 粘土紐を貼付けることによって隆帯を表わしているもの** (図版32-1)

器形はいずれも小破片となっているため、器形全体を捉えることは出来ないが深鉢形土器と思われる。口縁は外傾し、口唇部で外反している。口唇部は厚く、断面形は丸味を帯びている。施文方法は口縁部と体部の付近に粘土紐を貼り付けることによって隆帯を施文しているもので口縁部分は無文とし体部には縄文が施文されている。隆帯上に指頭によると思われる圧痕がつけられている。胎土は繊維を含むがよく整えられている。焼成は普通である。色調は褐色を呈する。器厚は6mmである。

**b 沈線と隆帯によって文様を施文するもの** (図版28-3・32-2～6)

器形全体は捉えられないが、図28-3は小型の深鉢形土器で口縁は1個所だけ波状口縁状になるものようである。他はいずれも小破片のため詳細は不明であるが、浅鉢もしくは深鉢形土器の破片と思われる。図版32-4～6は口縁部破片であり、口縁はいずれも平縁のようである。口縁部は図版28-3は外傾するが、他はいずれも内湾するものである。施文方法はいずれも沈線内に隆帯を残すものであり、図版28-3は、口縁部に平行して2条の沈線をめぐらし口縁部分は無文とし、体部に地文として単節斜縄文RLを施文し、沈線と隆帯によって器面に渦巻状の文様をつけているものである。図版32-2、3は文様構成はよくわからないが、図版28-3と同様に施文されるものようである。地文としての縄文は図版32-2が単節斜縄文RLで、図版32-3が単節斜縄文LRである。図版32-4、5は共に頸部部分に隆帯と沈線をめぐらして、口縁部を無文帯とし体部に単節斜縄文LRを施文するものである。図版32-6は2

条の沈線間内に粘土を盛り上げて隆帯状としているもので、体部には単節斜縄文LRを施文している。胎土はいずれも小石、粗砂、石英粒を含むが器表面はよく整えられ、焼成は普通である。色調はいずれもにぶい褐色を呈している。器厚は8mm位である。

**c 口縁部に1条の隆帯と竹管を施文するもの** (図版32-7、8)

器形は小破片であり捉えられない。いずれも口縁部破片であり波状となっている。施文方法は、波状頂部より隆帯(粘土の盛り上りか?)がみられその両脇には竹管による刺突が見られる。口縁部分のためか縄文はつけられていない。胎土はいずれも小石、粗砂、石英粒を含んでいるが器表面はよく整えられている。色調はにぶい橙色を呈する。器厚は8mmである。

**第5類 沈線による文様構成をもつもの** (図版32-11~15・33-1~15・34-1~11・35-1~15・写真図版17-10~14・18-1~14・19-1~11・20-1~15)

施文方法によりさらに細分される

**a 磨り消しと沈線によって文様を構成するもの** (図版32-10~15・33-1~11)

器形は小破片であり詳細はよくわからないが深鉢形を呈するものと思われる。口縁部は平縁のもの(図版32-13~15・33-11)と、小波状を呈するもの(図版32-10、12)がある。施文方法は頸部横位に描き出した沈線より上部では無文帯となり、下位では直線と曲線によって文様を施文し図版32-13、15・33-3、4、5等では沈線に沿って刺突が施されている。地文は単節斜縄文LRが施され沈線の施文具としては、ヘラ状工具によるものと棒状工具によるものがある。なお図版32-11、12には口縁部裏側に隆帯がつけられている。胎土はいずれも粗砂、石英粒、小石が入るが緻密である。焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈するものがほとんどである。器厚は厚いもので10mm、薄いもので5mmである。

**b 地文縄文の上に沈線だけで文様を構成するもの** (図版33-12~15・34-1~10)

器形は小破片のため捉えられないが深鉢形を呈するものと思われる。図版33-13、14、15・図版33-13は口縁部破片であり小波状を呈するものである。なお図版33-13、14、15は胎土等より同一個体と思われる。図版34-10は平縁である。それ以外は体部破片である。施文方法は沈線で口縁部より体部に施文されるもので図版33-13は小波状の頂部付近に渦巻状に沈線が施される。図版34-3~8は2本か3本が対となり体部に三角形や菱形の文様を構成しその内部にS字状の連続沈線が施される。地文としての縄文は単節斜縄文RLが施されるものと、不整撚糸文Lr(図版34-10)が施文されるものがある。沈線の施文具としては棒状工具によるものが多い。胎土はいずれも粗砂、石英粒などを含むが焼成はよく堅い。色調はほとんどにぶい黄橙色を呈する。器厚は厚いもので10mmで薄いもので5mmである。

### C 無文地に沈線によって文様を構成するもの (図版34-11・35-1~11)

器形はいずれも深鉢形を呈すると思われるが小破片のため詳細は不明である。口縁部は平縁を呈するもの(図版34-11・35-4、5、10、11)と、小波状を呈するもの(図版35-1、2)がある。施文方法は口縁直下から沈線によって文様を構成するものである。図版34-11・35-1~5は比較的幅広の沈線によって直線もしくは曲線によって施文される。図版35-6~9は胴部破片であり全体の文様は捉えられないが、櫛歯状の工具によって縦位に施文される。図版35-11は口縁部に併行する数条の沈線を施文し沈線間を1条置きに半截竹管による刺突が入っているものである。胎土はいずれも粗砂、小石、石英粒が含まれるがいずれもよく調整されており、焼成もよい。色調はほとんどにぶい黄橙色を呈する。器厚は7mm位である。

### d 三叉文による文様を構成するもの (図版35-12~15)

器形は小破片のためよく捉えられないが、浅鉢形の土器片と思われる。これらの破片は縄文・胎土とも同一であることにより同一個体と思われるものである。口縁は小波状を呈するものと思われ、いくらか内湾している。施文方法は口縁部分に棒状工具による三叉文を施文するものであり、口縁に平行する。沈線を頸部部分に施文し、口縁部分に沈線による文様を施す。体部は縄文だけのものである。縄文は粒の細い斜縄文LRが施される。胎土は粘土が多くよく調整され、焼成もよい。色調は褐色を呈する。器厚は6mmである。

## 6類 器表面に縄文だけを施文しているもの (図版35-16~19・36・37・38・写真図版20-16~19・21・22・23-1~15)

胎土より繊維を含むもの(a)と繊維を含まないもの(b)に分けられる。

### a 繊維を含むもの (図版35-16~19・36-1~2)

施文方法よりさらに細分可能である。

#### a-1 表裏に縄文が施文されるもの (図版35-16~19・36-1~2)

器形はいずれも小破片であり、器形全体は捉えられないが、深鉢形を呈すると思われる。図版35-16~19は、口縁部破片でいくぶん外傾する。口唇部断面形は丸味を帯びるもの(図版35-16)と平坦なもの(図版35-17~19)がある。口唇部には縄文側面圧痕を施すもの(図版35-17、19)がある。施文方法は表裏共、同一原体を用いて口唇部直下より単節斜縄文LRによって施文するもの(図版35-16~18・36-1、2)と、単節斜縄文RLによって施文するもの(図版35-19)がある。胎土はいずれも繊維を多量に含むもので焼成は普通である。色調は図版35-16が灰黄褐色、図版35-17、19が灰褐色、35-18・36-1がにぶい橙色、図版36-2が浅黄橙を呈する。器厚は8mm位である。

#### a-2 口縁部分に単軸絡条体による縄文が施文されるもの(図版36-3、4)

いずれも小破片のため器形はわからない。図版36-3は口縁部分が残っている破片であり、直立している。口唇部断面形は箱形を呈する。施文方法は口縁部分に原体R $\ell$ の撚糸を単軸に巻きつけて施文し、体部にO段多条のRL $r$ によって施文するものである。図版36-4は小破片であり、はっきりしないものがある。胎土はいずれも繊維を多量に含む。焼成は普通である。色調は暗赤褐色を呈する。器厚は8mm位である。

#### a-3 O段多条による縄文を施すもの（図版36-5、6）

器形は小破片であるため全体形は把握できない。いずれも口縁部破片であり、図版36-6は先端部分が外傾する。施文方法は口縁部分に1cm位の無文帯を残し、O段多条による斜縄文が施されるもので図版36-5はRL $r$ で、図版36-6はLR $\ell$ で施文される。胎土はいずれも繊維を多量に含むもので焼成は普通である。色調は図版36-5が灰黄褐色色で、図版36-6が黒褐色を呈する。器厚はいずれも7mmである。なお図版36-8もO段多条の縄と思われるが土器片が小さいことや器表面が不鮮明であることからはっきりしないものである。

#### a-4 撚りの違う数本の原体を束ねたものを回転して施文するもの（図版36-7）。

器形は小破片のため捉えられない。口縁部は直立し口唇部で外傾に僅かであるが出ている。口縁部の断面形は丸味を帯びて内側に傾斜する。施文方法は口唇部より1cm位を無文帯とし数本の撚りの違う繩を束ねて、横方向に回転しているもので原体RとLを使用している。胎土は繊維を含み粗砂、小石、石英粒等が混入している。器表面は整えられているが内面はボサボサしている。焼成は普通である。色調はにぶい橙色を呈する。器厚は7mmである。

#### a-5 口唇部に刺突や刻みを施し、体部に縄文を施すもの（図版36-9～15）

器形はいずれも深鉢形を呈すると思われるものである。口縁は平縁のもの（図版36-9～12、15）と小破状を呈するもの（図版36-13～14）がある。口唇部に施される刺突は棒状工具のもの（図版36-9、10、11）と、円形竹管によるもの（図版36-12）と、半截竹管によるもの（図版36-13）及びへら状工具によるもの（図版36-14、15）があるが刺突や刻みをつける位置としては口唇部外面につけるもの（図版36-9、10、11、13）と、口唇部上につけるもの（図版36-12、14、15）がある。図版36-12は口縁部の無文帯にも刺突が施される。施文方法は口縁部分に僅かの無文帯を残し、それ以外の部分に縄文を施文するものである。図版36-9は結節のある羽状縄文RL、LRを施文している。図版36-10、11は末端処理がみられるもので、図版36-10が単節斜縄文LR、図版36-11が単節斜縄文RLを施文している。図版36-12は大粒の縄文で単節斜縄文RLを施文している。図版36-13、14は単節斜縄文RLを施すもので、図版36-13は末端部分が押捺されているものであり、図版36-14は強く付けられていないものである。図版36-15は単節斜縄文LRを施文している。胎土はいずれも繊維を含むが、図版36-15は石英粒を多く含む、器表面はよく整形され整っている。図版36-13、14には内面に炭化



物の付着が僅かに認められる。焼成は普通である。色調は図版36-9、12、15がにぶい橙色を呈し、図版36-10が黒褐色、図版36-11、13、14が赤褐色を呈する。器厚はいずれも7mm前後である。

#### a-6 口縁部に結節文を施文し、体部に縄文を施文するもの（図版36-16~21）

器形はいずれも小破片であるため器形全体形は捉えられないが、深鉢形を呈するものと思われる。口縁部は直立し、若干先細り状になるもの（図版36-16）、口縁部分が体部に比して厚手となり若干外傾するもの（図版36-17、19）、体部から口縁部先端までほぼ同一の器厚を呈し外傾するもの（図版36-18）とがある。施文文法は口縁部文様帯として一段L撚りを結節した原体を横位に施文するが、図版36-21に見られるように体部まで施文するものもあるらしい。図版36-20は体部に単節斜縄文RLが施文されている。胎土はいずれも繊維を含むが繊維の含有量が少なくなり、小石、粗砂、石英粒が混入する度合いが多い。焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は図版36-17が12mm位であるが他は8mm位である。

#### a-7 単軸絡条体によって文様を構成するもの（図版37-1~8）

器形は小破片であるため器形全体形は捉えられない。口縁部破片は図版37-1だけであり、外傾し、口唇部は体部に比して厚手となる。図版37-7は口縁部破片と思われるが、口唇部分が欠損している。図版37-8は底部近くの破片と思われる。形状よりみれば尖底になる可能性がある。施文方法は原体L<sub>r</sub>のものを単軸に巻きつけて体部に横方向に施文するもので、図版37-1~7がS字状連鎖沈文と呼ばれているものと、図版37-8は葺瓦状と呼ばれるものである。S字状連鎖沈文は多くは口縁部文様帯として使用されるものようであるが、体部に施文されるものもある。図版37-7は体部に複節斜縄文LRLが施文される。胎土はいずれも微量の繊維を含み、粗砂、小石等が混じり、器表面はポロポロしている。焼成は普通である。色調は、図版37-8が明褐灰色を呈するが他はいずれもにぶい黄橙色を呈する。器厚は8mm前後である。

#### a-8 羽状縄文を施文するもの（図版37-9~16）

器形は小破片であるため器形全体は捉えられないが、深鉢形を呈すると思われる。口縁は平縁を呈するもの（図版37-9、11、15）と、小波状を呈するもの（図版37-10）がある。口縁部は直立し、口縁部先端で外傾し、厚くなっているもの（図版37-14、15）がみられ、図版36-14は口唇上端に縄文原体を回転し押捺している。施文方法は口縁部より施文され、互に撚りの違う原体O段多条のRL<sub>r</sub>とLR<sub>l</sub>を結束したものと口縁部より単節斜縄文RLとLRを結束したもの（図版37-10、14）と交互に横位に回転して、羽状縄文を作り出しているもの（図版37-11、12、13、15、16）があり図版37-11、13、16は単節斜縄文RLとLRを施文し、図版37-12は無節RLとL<sub>r</sub>を施文し、図版37-15は複節斜縄文LRLとRLRを施文しているものである。胎土はいずれも繊維を含み、石英粒、粗砂が混じる。焼成は普通である。色調は図

版37-14が黒褐色を呈するが、他はいずれもにぶい黄橙を呈する。器厚は図版37-9が10mmを呈するが、他はいずれも8mm前後である。

#### a-9 単節斜縄文を施すもの (図版38-1~10)

器形はいずれも小破片であり器形全体は捉えられないが、深鉢形を呈すると思われる。口縁は平縁であり、口唇部は平坦となるものが多く、図版38-6には口唇部に縄文を回転した圧痕がつけられている。施文方法は図版38-8は約1cm位の無文帯を残すが、他はいずれも口唇部分より単節斜縄文LR(図版38-1~8、10)と、RL(図版38-9)によって施文されるものである。なお図版38-1~7は他の撚り方(組み方)によっても出来る可能性のあるものであるが、よくわからないものである。胎土はいずれも繊維を含むがごく僅かであり、粗砂石英粒などが混じっている。焼成は普通である。色調はいずれもにぶい橙色を呈する。器厚は厚いもので10mm、薄いもので8mm位である。

#### a-10 不整然糸文を施すもの (図版38-11)

器形は小破片であり、器形全体は捉えられないが深鉢形を呈すると思われる。口縁は平縁であり、口唇部はへら状工具によるナデが見られる。施文方法は口縁部に5mm位の無文帯を残しそれより下位に不整然糸文RLを横方向に回転して施文するものである。胎土は微量の繊維を含み、粗砂、石英粒が多く混じっている。焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する、器厚は7mm位である。

#### a-11 複節斜縄文を施文するもの (図版38-12)

器形は小破片であり器形全体は捉えられないものである。口縁は平縁を呈し口唇部は厚くなっており外側に出ている。施文方法は口縁より1cm位に無文帯を残し、それより下位に複節斜縄文LRを横位に回転して施文しているものである。胎土は繊維を含み、僅かであるが小石石英粒が混入している。色調は灰黄褐色を呈する。器厚は薄い所で7mmである。

#### a-12 組紐の回転によって文様を施文するもの (図版38-13)

体部破片であり器形は不明である。施文方法は3本組紐で丸組のものを器表面に回転しているものである。胎土は微量の繊維を含み、僅かに石英粒、粗砂が混じっている。焼成は良い。色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は9mmである。

#### a-13 撚りの異なった2本の原体を使用して文様を施文するもの (図版38-14)

体部破片であり器形は不明である。施文方法は撚りの異なった2本の原体RとLを棒に巻きつけて施文したもののようである。すなわち図版36-7に見られた撚りの異なった原体を束ねて回転施文したものとは異なっているものである。胎土は繊維を多量に含み石英粒等が混入しているものである。焼成は普通、色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は内面剥落のため不明である。なおこの土器らは図版31-8と胎土が似ており、図版31-8を口縁部文様帯と考えるなら

ば、施文方法は違うが同一個体と考えるとよいと思われるものである。

**a—14 底部近くまで縄文を施すもの** (図版28—5・38—15)

いずれも尖底深鉢形土器の尖底部破片である。図版28—5は尖底部が尖っているものであり、図版38—15はやや丸底風を呈するものである。施文方法は図版28—5は細い縄文原体を尖底部にまで施し、図版38—15は太めの原体を施しているものでいずれも単節斜縄文である。胎土はいずれも繊維を多量に含んでいる。焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は体部付近で7mm位である。

**b 胎土に繊維を含まないものである。** (図版28—1、2、4、39・40・写真図版14—1、2、4・23—1～18、24)

これらは施文方法よりさらに細分される。

**b—1 単節斜縄文を施すもの** (図版39—1～7)

器形はいずれも小破片であり、器形全体は捉えられないが深鉢形を呈すると思われる。口縁部破片は(図版39—1、8)の2点である。口縁は平縁であり、口唇部は丸くなっている。施文方法は、単節斜縄文RLを施すもの(図版39—4、7)と、単節斜縄文LRを施文するもの(図版39—1～3、5、6)がある。いずれも横位に回転しているものである。胎土はいずれも小石、粗砂を含むが表裏ともよく整えられている。図版39—2には金雲母も入っている。焼成は普通である。色調は図版28—4は表面が黒褐色を呈するが、裏面はにぶい黄橙色を呈する。その他は暗褐色を呈する。器厚は7mm位である。

**b—2 頸部に押圧縄文を施し、それより下位に単節斜縄文を施すもの** (図版39—8)

器形は器形全体は捉えられないが深鉢形を呈すると思われる。口縁は平縁であり、口縁部は外傾している。施文方法は頸部に一条の押圧縄文を施し、口縁部分を無文帯とし、体部に単節斜縄文LRを施文するものである。胎土は粗砂を含む程度で堅く、器表裏面ともよく整えられており、磨き痕がみられる。色調はにぶい褐色を呈する。器厚は7mmである。

**b—3 複節斜縄文を施すもの** (図版28—1、2・39—9～11)

器形は図版28—1、2を見る限り、深鉢形を呈するものである。なお図版28—1、2は、施文方法、胎土等により同一個体と思われるものである。口縁は平縁であり、口縁部は直立する。口縁部内側には〔ノ〕字状の隆帯がついている。底部は平坦である。施文方法は、口縁部より複節斜縄文LRLを横位に回転施文して、底部近くまで施文するものである。図版39—9～11は小破片であり器形全体は捉えられない。施文方法はいずれも複節斜縄文LRLを横位に回転している。胎土はいずれも粗砂等混じるが、よく調整され整えられている。焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。器厚は図版27—1、2が薄い部分で6mmであり、図版39—9～11は7

mm位である。

**b-4 単軸絡状体によって縄文を施文するもの** (図版39-13~15)

器形は小破片であり器形全体は捉えられないが、口縁部の形状よりみれば、口縁部が直立するものと、外傾するものがあり、いずれも深鉢形を呈すると思われる。口縁は平縁であり、口唇部断面形は箱形を呈するものである。施文方法はいずれも原体Rの撚糸を単軸に巻きつけて横位に施文するものである。胎土はいずれも粗砂、小石、石英粒を含むが器表面はよく整えられている。色調はにぶい橙色を呈する。器厚はいずれも7mm位である。

**b-5 同一原体の回転方向を変えて羽状縄文にしているもの** (図版39-12)

小破片であり器形全体は捉えられないが、口縁部が若干内湾する深鉢形土器と思われる。口縁は平縁であり、ヘラ状工具によってナデられている。施文方法は単節斜縄文LRを口縁部より1cm位下から体部に縦位に回転施文した後に口縁部部分に横位に回転施文しているもので、両者の接点は無結束の羽状となるものである。胎土は小石、石英粒を含むが器面はよく整えられており、裏面には縦方向に磨きがかけられている。焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は5mmである。

**b-6 不整撚糸文を施文するもの** (図版39-16)

器形は口縁が内湾ぎみの深鉢形を呈すると思われる。口縁部は平縁であり、口唇部断面形は丸味を帯びている。施文方法は原体RLの不整撚糸文を横位に回転して施文するものである。胎土は粗砂、小石、石英粒を多く含んでいる。焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。器厚は6mmである。

**b-7 結節文が施文されるもの** (図版40-1、2)

器形は体部小破片であり不明である。施文方法は単節斜縄文RLの原体を1個所ないし2箇所結びこれを縦位に回転して文様を施文するもので、いわゆる綾絡文と呼ばれるものである。胎土は石英粒、粗砂を含む、焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈する。器厚は図版38-1は10mmであり、図版40-2は7mmである。

**b-8 単軸絡状体によって撚糸文を施文するもの** (図版28-4・40-3~14)

器形は図版28-4を見る限り平底の深鉢形を呈するものと思われる。口縁部破片は図版40-5、6、8であり、口縁はいずれも平縁であり、口唇部断面形は外に向って傾斜するものである。施文方法は口縁部より単軸に原体を巻きつけて施文するもので(図版40-3、6)がRLの原体で、図版40-4、5、10~14がLrの原体で、図版28-4・図版40-7~9がLRの原体で縦位に施文されるものである。胎土はいずれも小石、粗砂、石英粒等を含むが器表面はよく整えられている。色調はにぶい褐色を呈するものである。器厚は薄いもので5mmであり、厚いもので10mm位である。

### b-9 単軸絡状体によって網目状捺糸文を施文するもの (図版40-15、16)

器形はいずれも体部破片であるため不明である。施文方法は単軸に2本の捺糸RLを一方を右巻きに、他方は左巻きにした原体を体部に縦方向に施文しているものである。胎土は粗砂、石英粒を含むが器表面はよく整えられている。焼成は普通である。色調は図版40-15が暗褐色であり、他は褐色である。器厚は9mmである。

### 7類 無文の土器 (図版41-1、2、3)

いずれも口縁部破片である。図版41-1は波状口縁と思われ、波状頂部には棒状工具による刺突がある。胎土は小石、粗砂、石英粒を含む。色調は暗褐色を呈する。器厚は5mmである。図版41-2は小型土器の口縁部と思われるもので、外反しているものである。図版41-3は底部近くの破片と思われるものである。胎土はいずれも繊維や粗砂、石英粒、金雲母を含み、器表裏面の調整は行なわれていない。焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。器厚は5mmである。

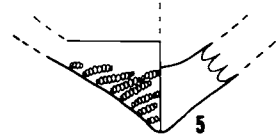
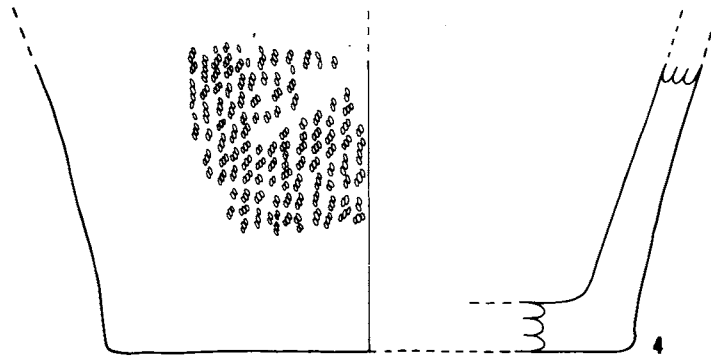
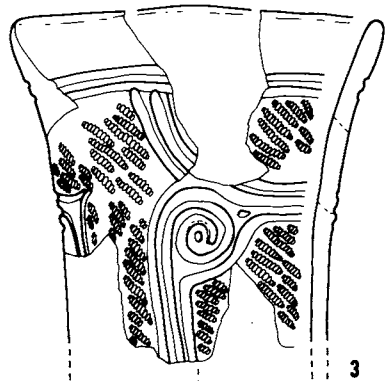
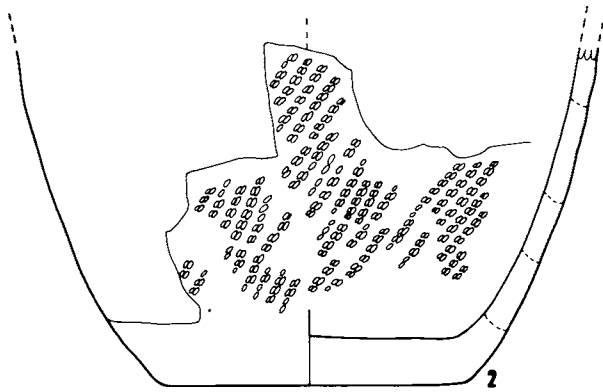
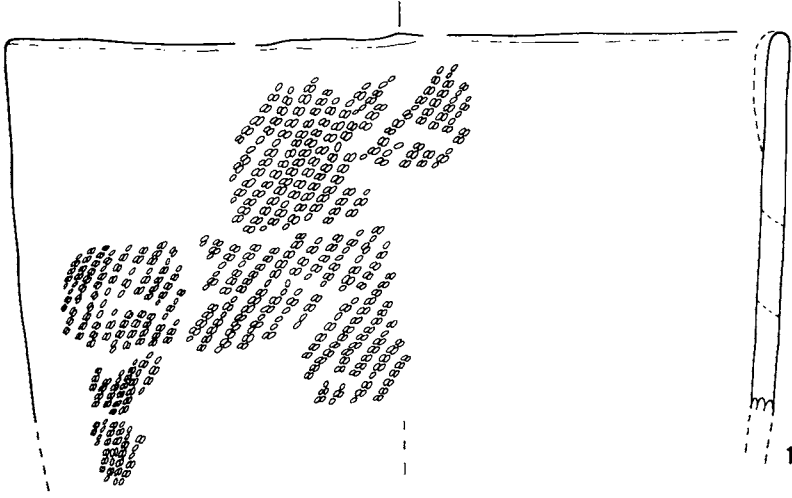
## 2群 土師式土器

本遺跡で出土した土師器は図版41-4、5以外に、76年度調査で内黒の土師器数片が出土していたが、数度の遺物の移動により不明になったものもある。図版41-4、5はいずれも口縁部破片で、図版41-4は小型甕と思われるものである。口縁部は外傾しているものである調整は不明である。図版41-5は大型甕の破片で、口縁部は外傾し、口唇部は細くなっている。調整は表面に荒いケズリ調整が施され、内面は刷毛目調整が施されている。胎土はいずれも小石、石英粒を含むが器表面はよく整えられている。焼成は普通である。色調は図版41-4が橙色を呈し、図版41-5が浅黄橙色を呈する。器厚は図版41-4が5mmで、図版41-5が13mmである。

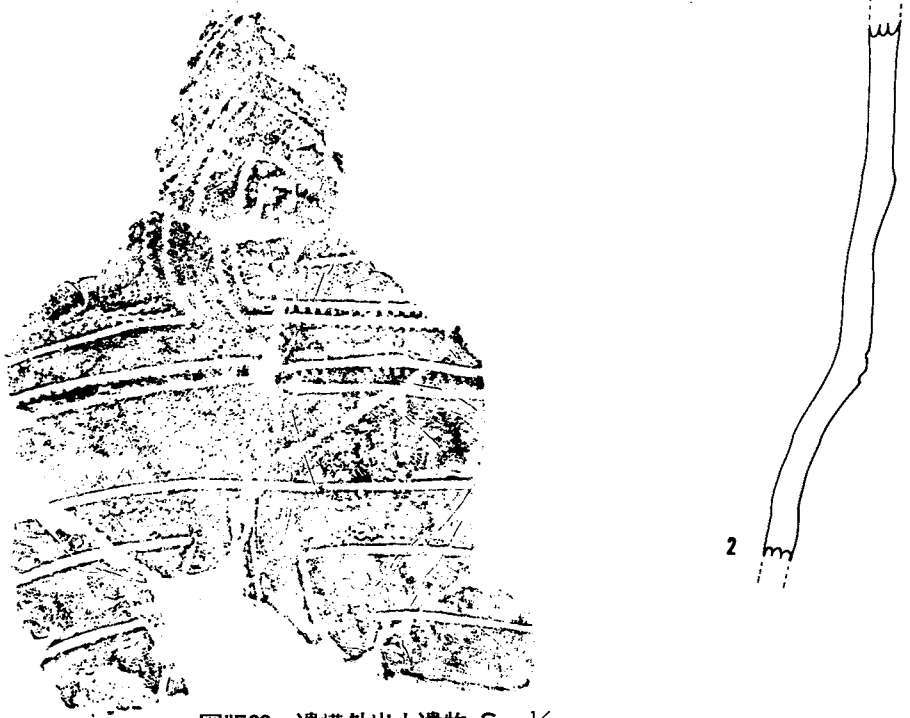
## 2 土製品

### 土偶 (図版41-6、7・写真図版26-6、7)

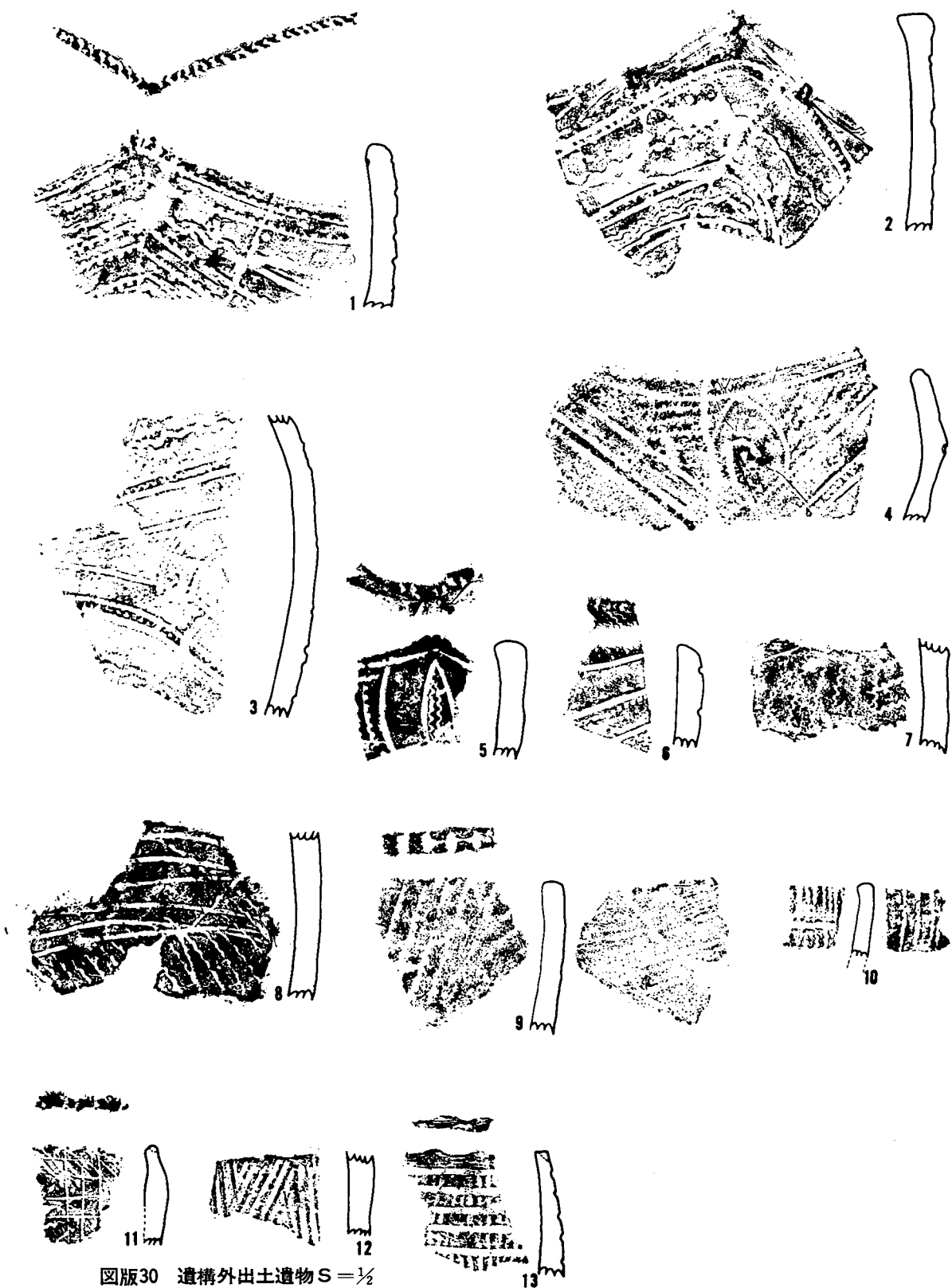
土偶は2点出土しているが、施文方法よりみて同一個体の破片と思われるものであり、形態は円筒状の土偶である。図版41-6は腕部分と思われ、7は胴下部より脚部が残っているものである。いずれも全面に棒状工具による刺突がなされ、胴部ではへそがつき出している。胎土は脆弱であり、色調は褐色を呈する。時期は縄文後期頃のものとして推定される。



図版28 遺構外出土遺物 S = 1/2.

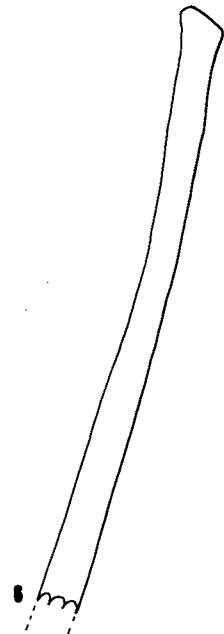
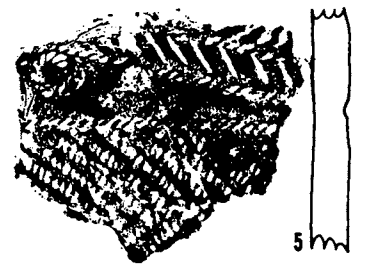
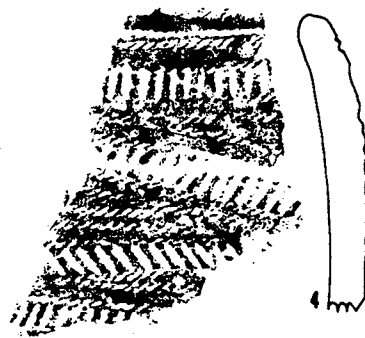
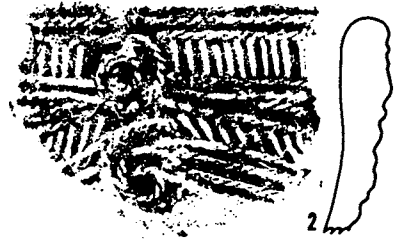
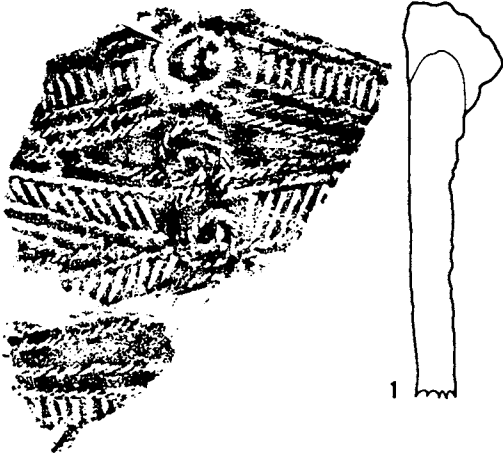


图版29 遺構外出土遺物 S = 1/2

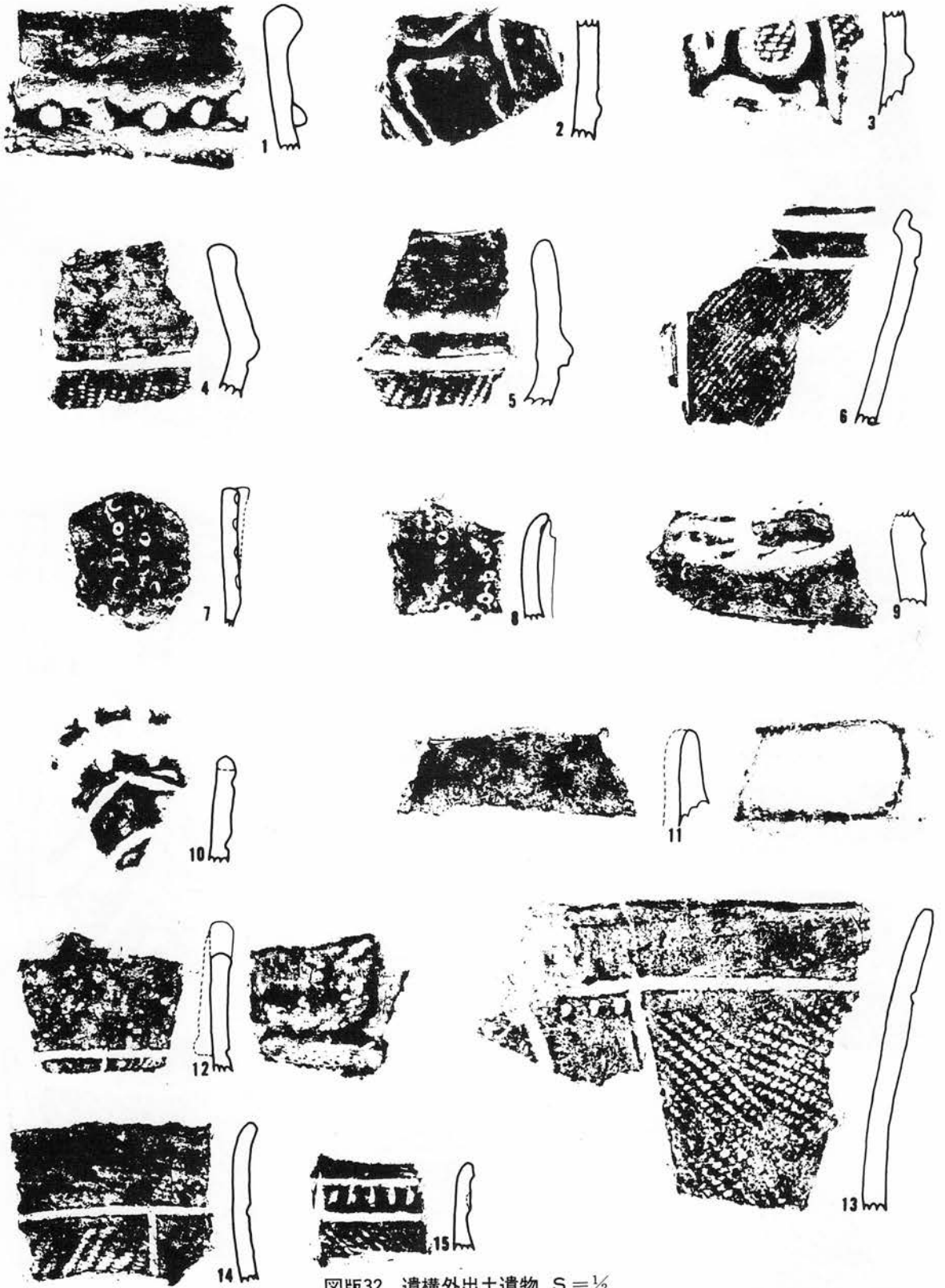


图版30 遺構外出土遺物 S = 1/2

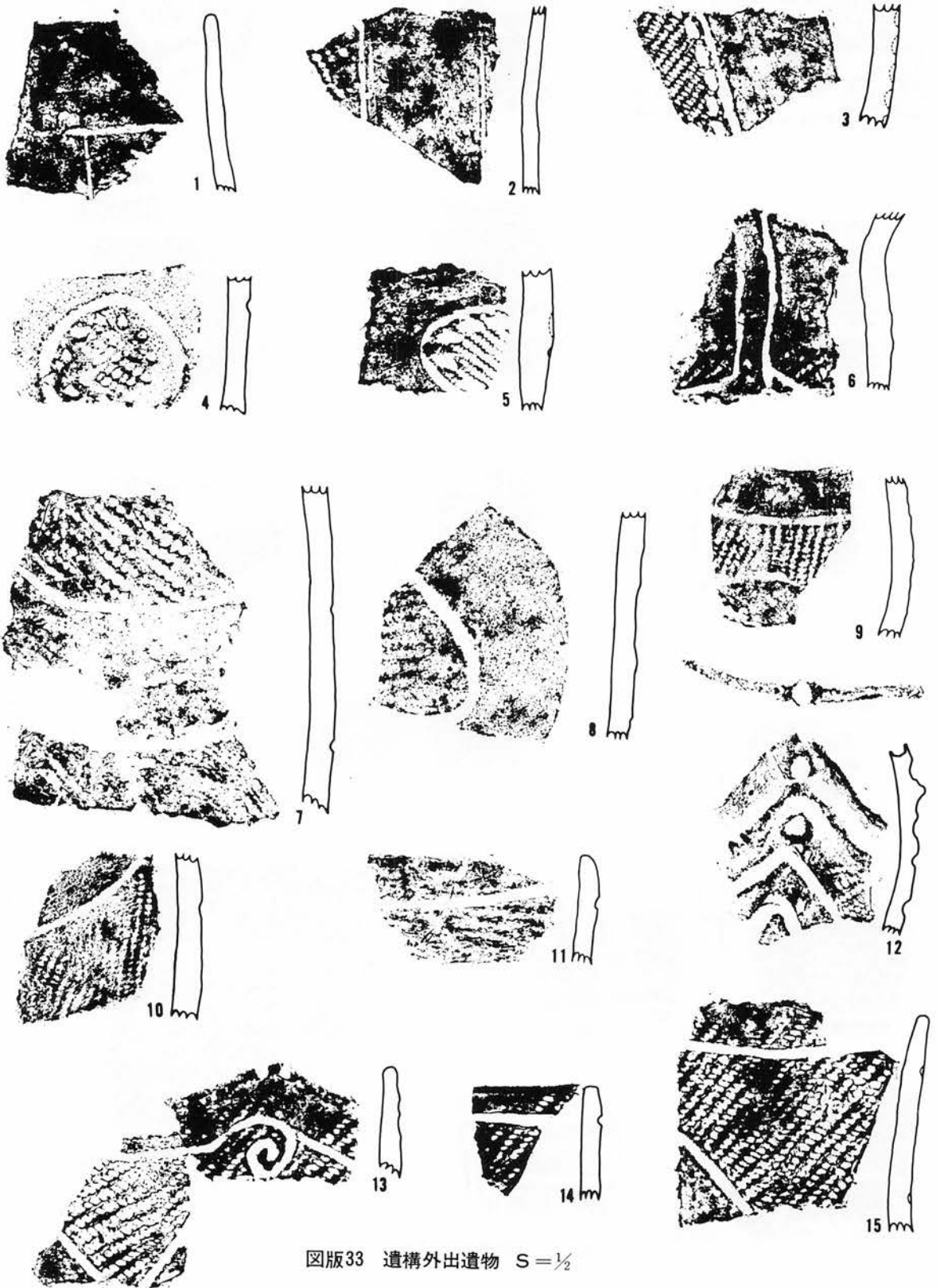




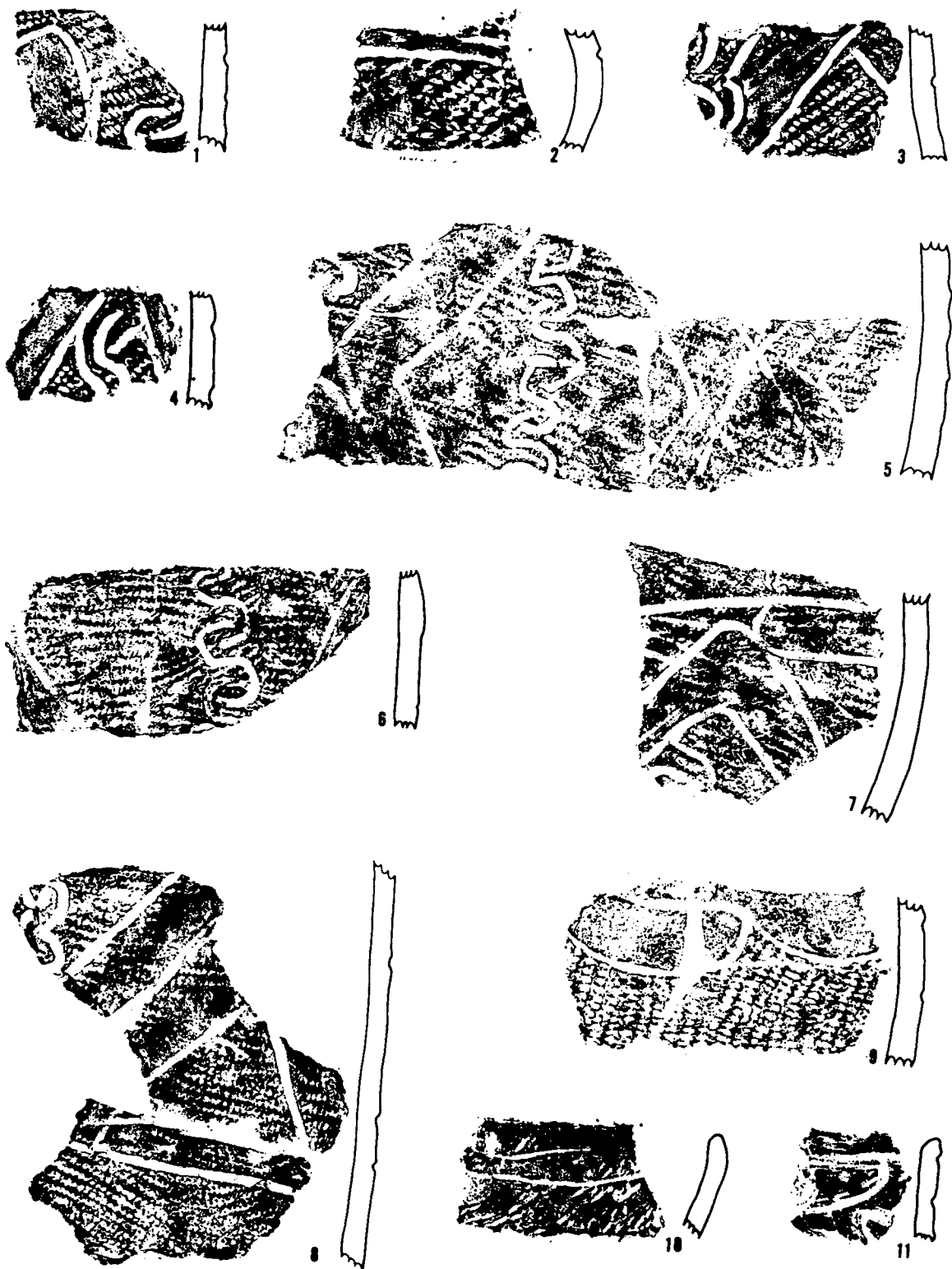
图版31 遺構外出土遺物 S = 1/2



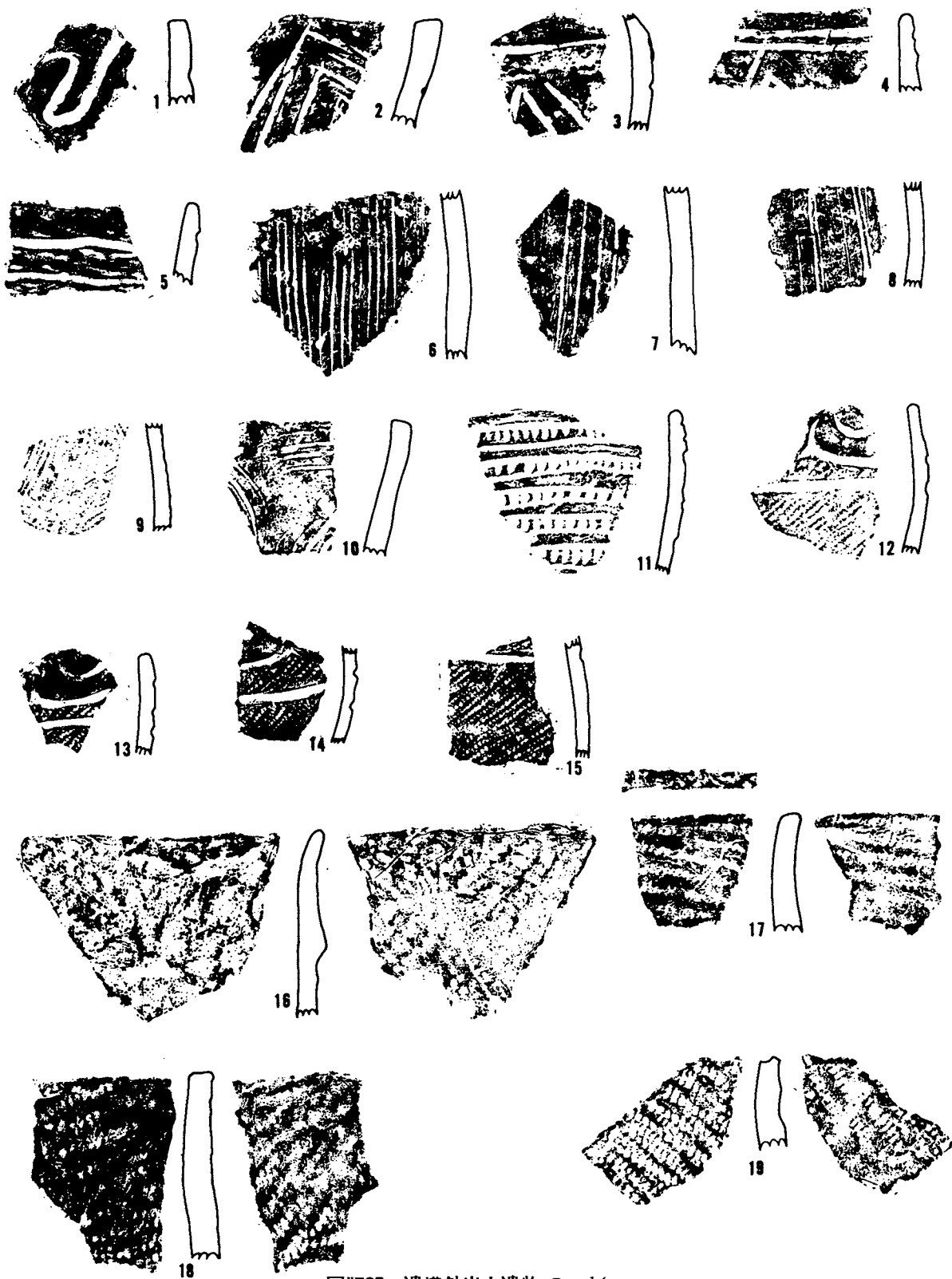
图版32 遺構外出土遺物 S = 1/2



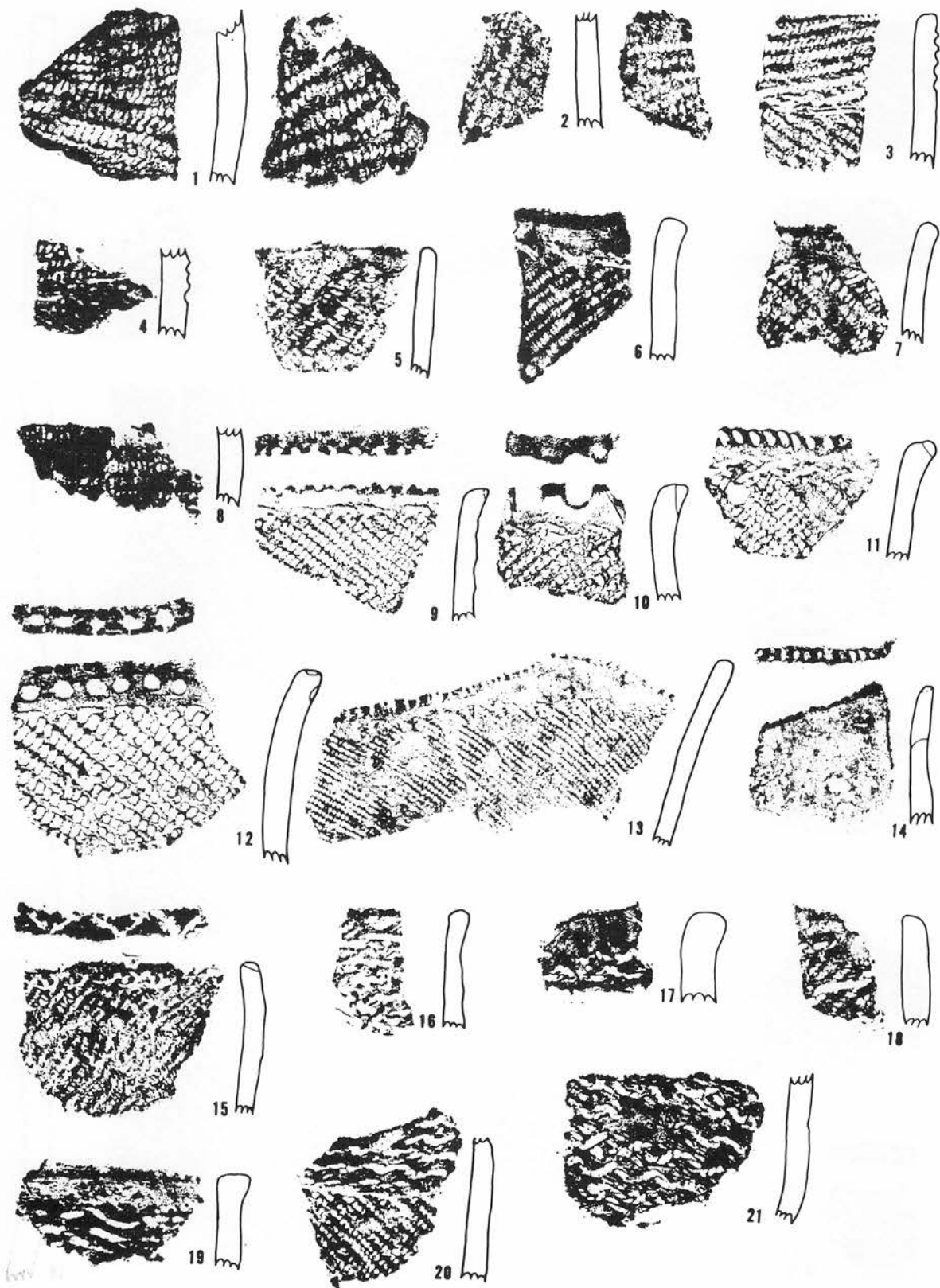
图版33 遺構外出遺物  $S = \frac{1}{2}$



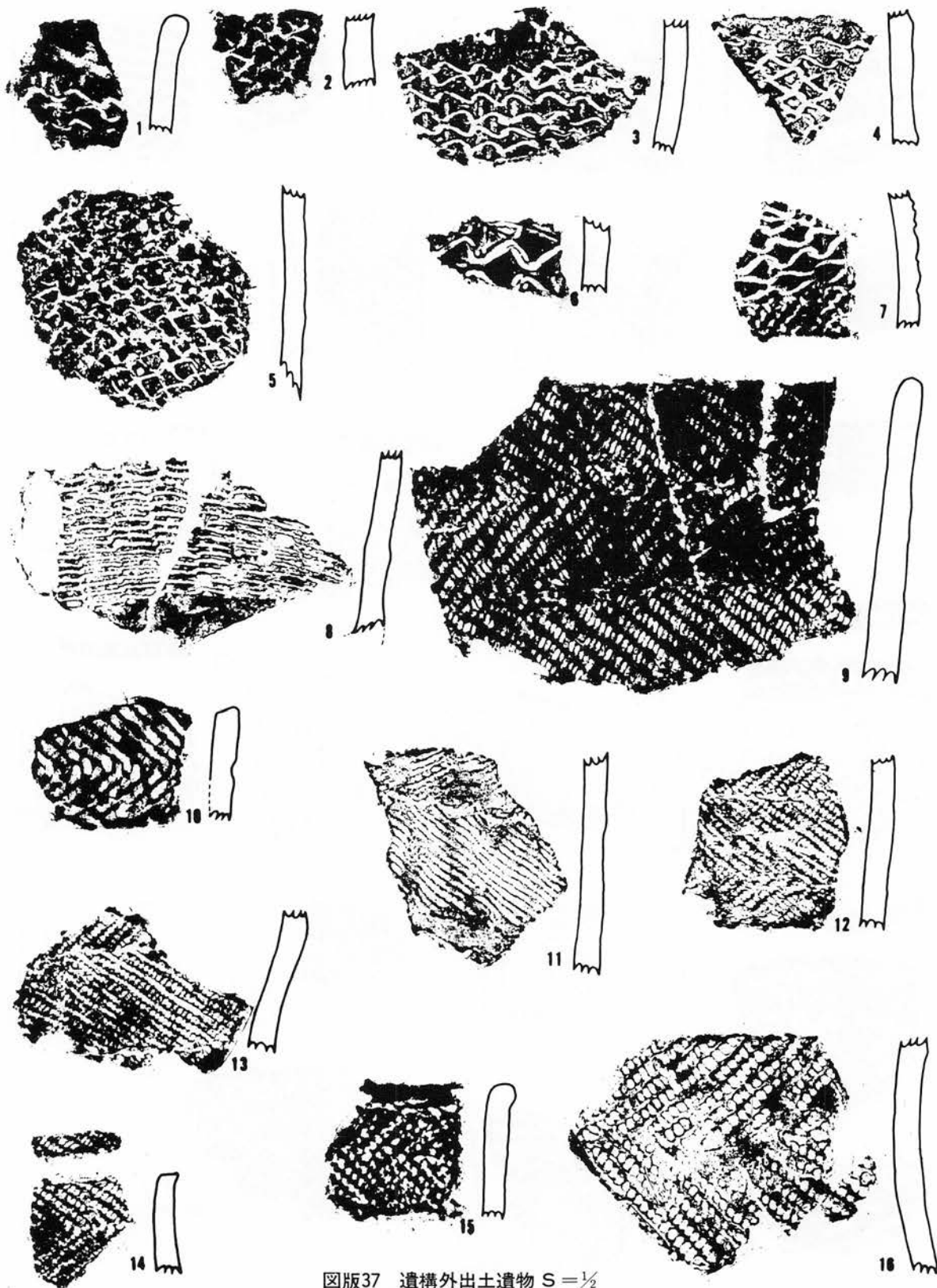
图版34 遺構外出土遺物 S = 1/2



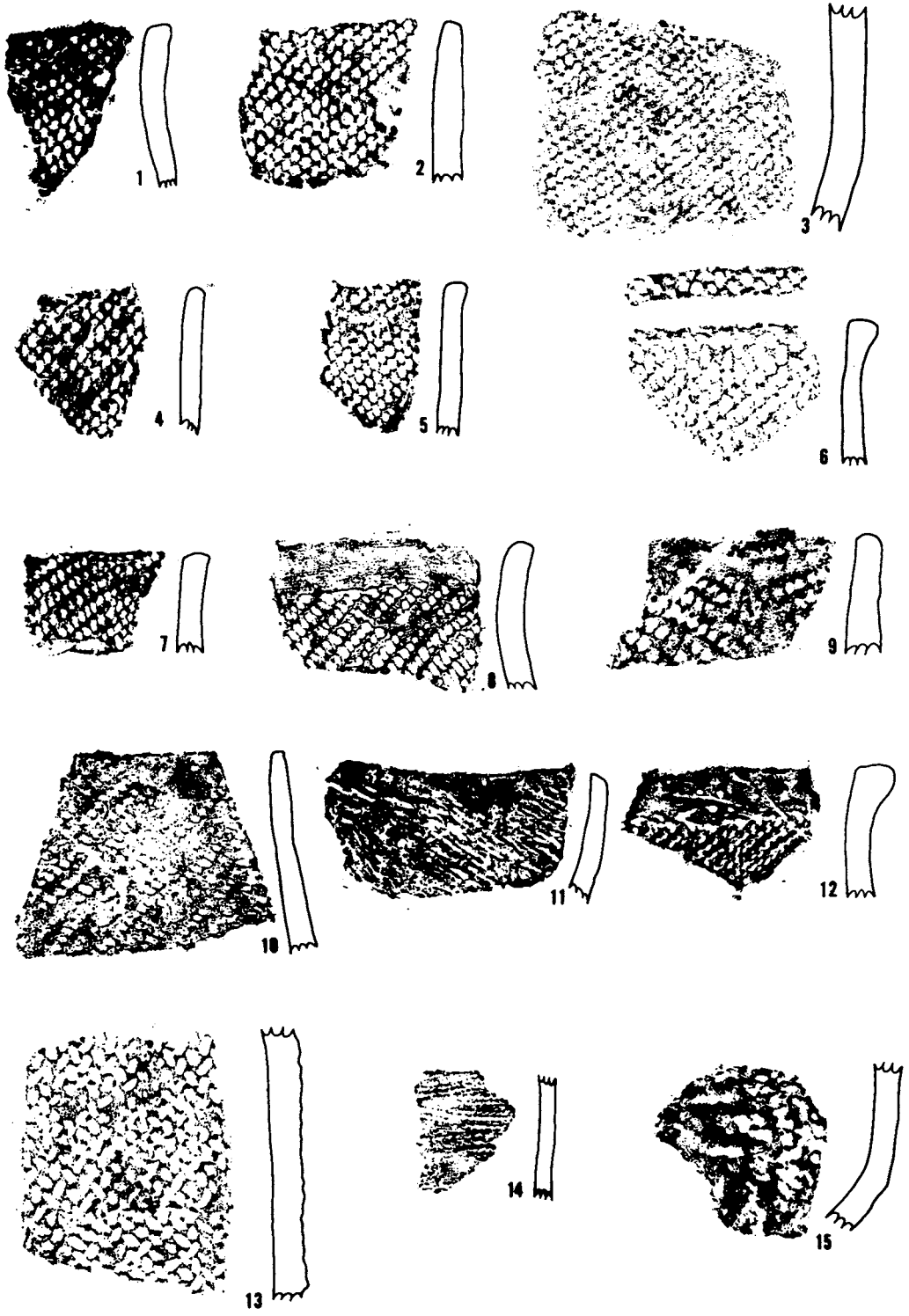
图版35 遺構外出土遺物 S = 1/2



图版36 遺構外出土遺物 S = 1/2

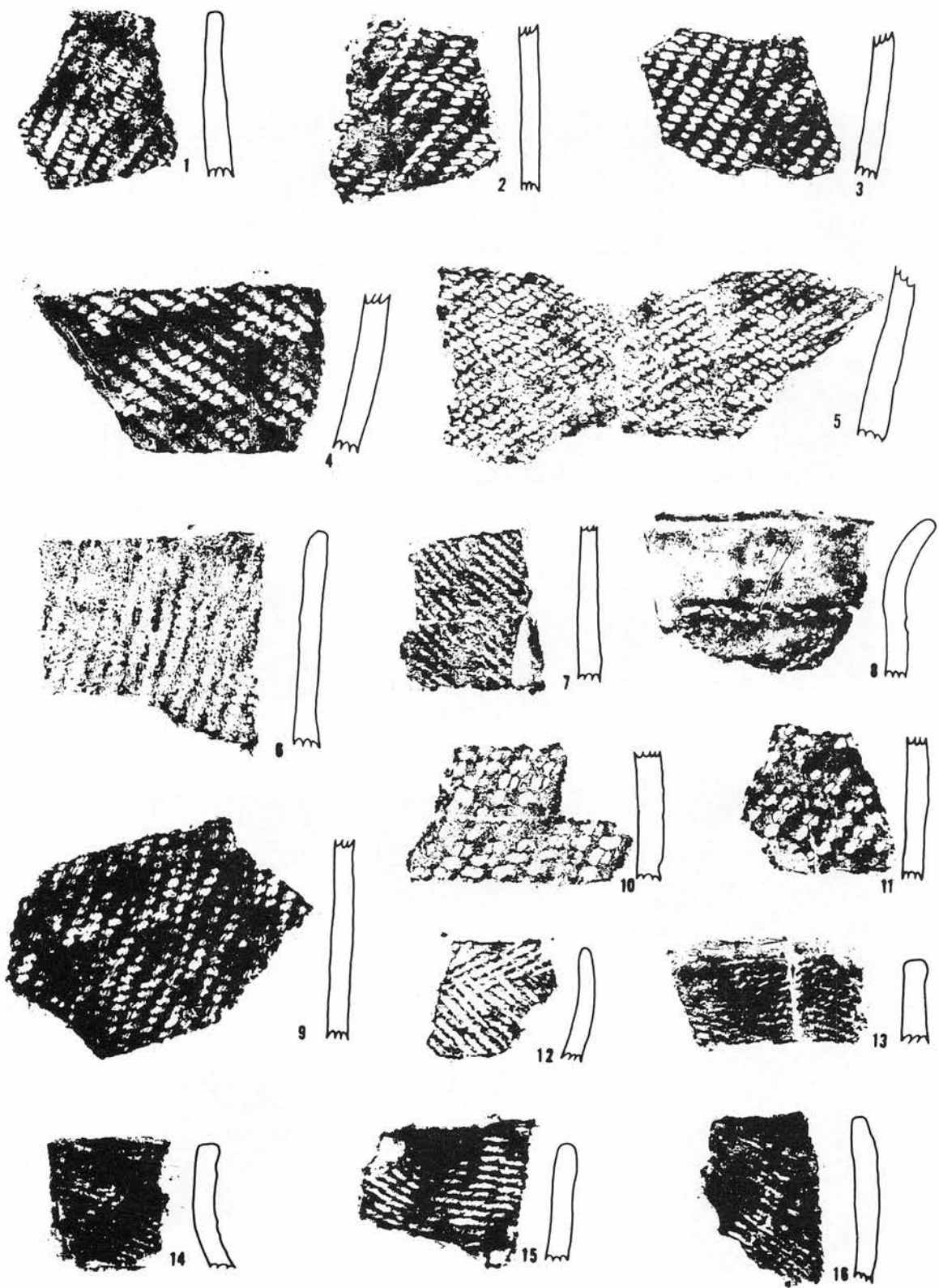


图版37 遺構外出土遺物 S = 1/2

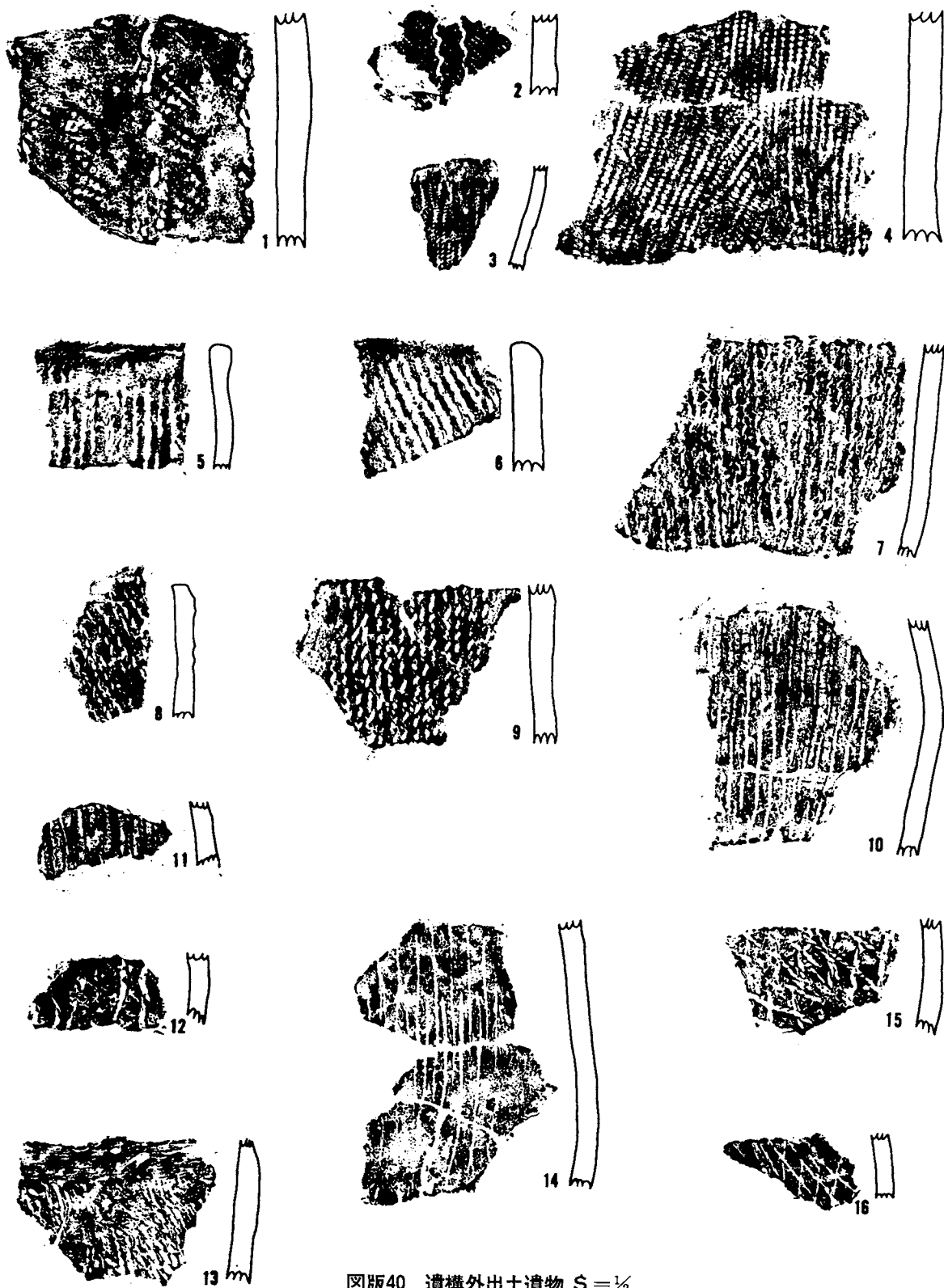


图版38 遺構外出土遺物 S = 1/2

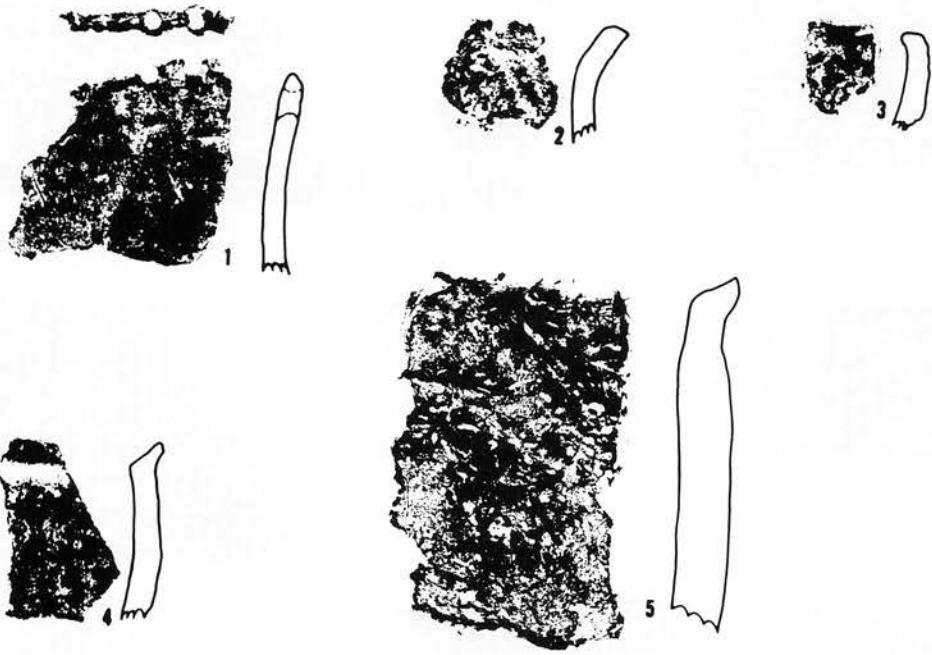




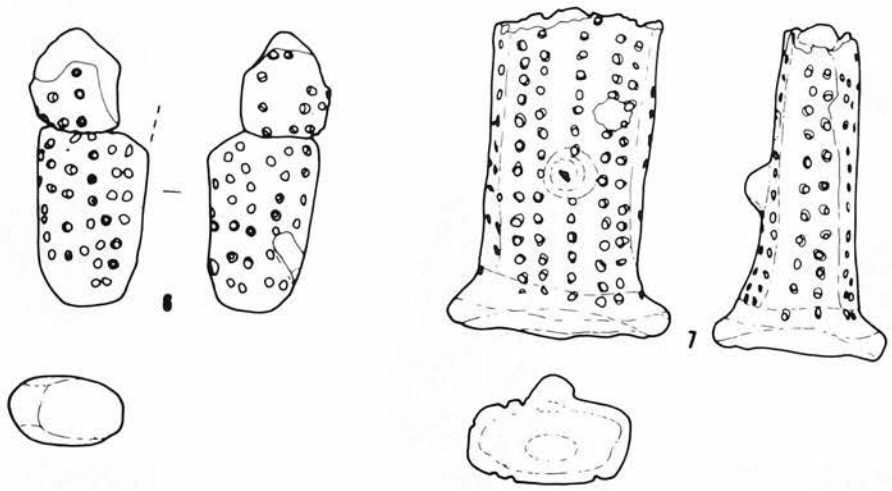
图版39 遺構外出土遺物 S = 1/2



图版40 遺構外出土遺物 S = 1/2



1~5 S=1/2



6~7 S=1/2

图版41 遺構外出土遺物

### 3 石器

本遺跡から出土した石器及び石片類は非常に多量であるが、第二次加工痕をもたない剥片及び石器作成中に生じたと推定される極く一部分に加工痕を有する剥片等を除き、明らかに石器として特定の形態、機能を有するものを図化し、その殆んどを収録した。これら石器群は特定の種類を除いて特に重要な意味をもつと考えられる層位、もしくは地点より発見されていない。これらの石器群が本遺跡より検出、出土した遺構及び土器群と密接な関連を有するものは少ない。以下石器の形態別に記述する。

#### 石 鏃 (図版43-1~29・写真図版27-1~29)

比較的小型のものが多く、形態としては以下に大別される。

- 1、柳葉形もしくはそれに近いもの(図版43-1、2)
- 2、三角形を呈するもの(図版43-3~13、15、16、19、21~29)
- 3、柳葉形に近いが基部と思われる一端に抉り込みのあるもの(図版43-14)
- 4、茎を有するもの(図版43-20)
- 5、三角で基部に抉り込みのあるもの(図版43-17)等である。

他に図版43-18は、先端部と思われる部位を欠損しているために全体の形態を明確にできないが残存部の加工状態、断面の形状よりみて柳葉形を呈する石鏃の一部ではないかと推定される。1~5までの分類で形態の細分及び加工状態、大小などの差異が著しく見られるのは三角形を呈する一群である。二等辺三角形で細長いもの(図版43-3、4、6、7)、正三角形に近いもの(図版43-8、11、13)、基部に丸みを有するもの(図版43-21~28)、基部に極く浅い抉り込みを有するもの(図版43-15、16)、などがある。基部に丸みを有するものは他の石鏃に比して大型であり、また1例を除いて第二次加工が粗い状態である。即ち第一次剥離面を多く残しているものがあり、細部加工も非常に雑である。これら一群の石鏃は恐らく精巧な加工を施されて完成品となる途中のものと考えられる。これらの石器の大きさからみて、更に細部加工が加えられれば小形三角の石鏃として加工されるに十分な大きさである。

#### 石 錐 (図版44-4・写真図版27-33)

錐状の刃部を作りだしてある石器としては唯一例である。刃部は不整形の菱形断面を呈しているが、全体に加工は粗い。素材となった剥片も比較的肉厚であり、剥片自体が三角形の一端に突出したものを加工したものである。尚、他に1例、石錐ともナイフ形石器とも判断のつけにくい石器がある(図版44-14・写真図版27-33)が、この石器については後述する。

#### 石 ヒ (図版44-5~12・45-1~15・写真図版27-34~41・28-1~15)

横形(図版44-5~10)と縦形(図版44-11、12・図版44-1~15)とがある。横形のもは加工しやすい貝殻状の剥片を利用して作られたもの4例があり(図版44-5、6、8、9)

これらは比較的入念な刃部及びつまみ部分の加工が行われているが、不整形の剥片を利用したものは、つまみ部分もしくは刃部の加工が粗い。縦形のもの大型と小型がある。小型のもの2例は図版44に示したがつまみ部分は共に入念な加工が施こされているが、刃部についてはその内1例は殆んど調整が行われていないものである。大型の石ヒ類の加工は正面に細長い。恐らく押圧剥離に近い技術によると思われる加工痕を残しているものがほとんどであり、そうでないものも正面に刃部を形成するための細い加工が施されている。つまみ部分については入念な加工のあるものと、明確に挟り込みが見られず、僅かにそれと判る程度の加工が施されたものがある。また図版45-12、13はほとんどつまみ部分の加工が見られず、第一次剥離が裏面にそのまま残されており、はたして石ヒとして良いものかどうか判断に迷うところであるが全体の刃部加工の状況から見て未成品もしくはつまみ部分のない石ヒとしておく。

石ヒと分類される石器の機能としては最近の実験考古学等の分野でも明らかなように現代におけるナイフの様な機能が強く考えられており、つまみ部分を持たなくてもその用を足す事は可能であろう。このようなナイフの機能を持つ石器としては、縄文時代の石器中に不整形の剥片の一縁辺に加工を施したサイド、スクレーパーとして分類される石器があるが、この事については、それら石器の項において述べる。

#### 石 槍 (図版49-1~12・写真図版30-3、6~14、16、17)

大型木葉形、小型木葉形及び大型柳葉形等の形態を呈する槍先形の石器群である。三者共に完形及び欠損品を含む。大型木葉形の石器(図版49-1、2、9)は本遺跡を含む御所ダム関係の遺跡より発見された石器の中でも特異なものである。幅広で長さに対して加工による剥離痕は比較的浅く、両面ともに全面にわたって調整痕がみられる。小型木葉形のもの一例は基部がやや幅広となっており、最大幅が全体のほぼ中央部にある大型のそれとは形態が異なっている。更に先端部と見られる部分もあまり鋭く尖っておらず全体に丸味を有する(図版49-10)。他1例は前者よりやや細長くなっており、最大幅は大型のもの同様ほぼ中央部にあるが、大型のものうち2例は両端がほぼ同様な類似形となっているのに対して、小型の本例は先端はやや尖っているが、基部と思われる一端は平坦な形となっている(図版49-7)。

柳葉形を呈するものは六点ある(図版49-3~5、8・11・12)。この形のものも両端が鋭く尖っているものと(図版49-5)、一端が丸く作られたものとの2つの形態がある。図版49-3、11のうち1例は欠損品である。なお図版49-4、5の2例は共に両面加工であり肉厚な断面を呈しており、全体形な形も槍先形石器としての分類中に含めるのは無理かと思われるが、他にこの様な類似品がないため槍先形石器の未成品かもしれないとしてここにあげた。

槍先形石器としたものの中にスクレーパー様石器と共に含めた図版48-12・13が含まれるが、更に図版44-13に示した石器も含まれよう。片面加工もしくは半両面加工と考えられるもので

あるが両端ともに鋭利に尖出しており、表面は両側よりの加工が細く施こされている。小形の槍先形石器として充分なものであり、また、この形態を作り出した後に左側縁の先端部より剥離を行なっていることから彫器ともとれるもので唯一例の出土である。

**スクレーパー類**（図版44-15・46-1～16・47-1～16・48-1～15・写真図版27-44・28-16～30・29-1～16・29-17～27、30-1、2、4、5）

ここに分類したスクレーパー類石器としたのは、その多くが不定形の剥片の片面と両面、又は一縁辺及び複数の縁辺に刃部と思われる細部加工が施されたものである。いわゆるサイド・スクレーパーもしくは、エンド・スクレーパーなど旧石器時代の石器の典型的な形態を明確に認められないような石器類であり、僅かの例を除いて特定の名称を与えることが出来得ないようなものばかりである。また、この類の中には恐らく縦形もしくは横形の石ヒの作製途上にあると思われる石器も含まれている。以下特徴あるものについて述べる。特殊な例としては、まず図版44-15に示したもので小さな破片であるが、薄い縦長の剥片の先端部左右両側に裏面より加えられた加工痕をみせる石器である。この石器は正面に一条の稜を残し、きれいに縦に剥ぎ取られた剥離面を残し、裏面も縦方向の打撃による剥離面をもっている。あたかも旧石器時代におけるブレード、コア（石刃核）から剥ぎ取られたブレード（石刃）の両側部にリタッチ（再調整）を行って作られたナイフ形石器のような形を呈している。これと同様の石器は同じく（図版44-14）に示したもので、先端部の加工により石錐として分類した石器に非常に似ているものである。両者共に薄い縦長剥片と言うよりは石刃状剥片に加工したような石器であり、錐状に先端部を作りだした例でナイフ状石器とでもしたい石器となっている。この一例を除いて他の石器は比較的大形もしくは肉厚の剥片を使用しており、その加工部位によって便宜上、サイドもしくはエンド・スクレーパー様石器及び他のスクレーパー様石器類とする。

**サイド・スクレーパー様石器**（図版46-1、2、7、9、10、11・47-1、9・48-3、5～7、9～11）

図版46-1は大形横剥ぎの剥片に加工されたものである。全体の形状は縦形の石ヒの様である。やや丸味を帯びた先端部にかけて両側辺に粗い加工と細かい加工の両者が混在して施されている。基部と思われる部位は第1次剥離の際の形をそのまま生かしつまみ状になっているが、くびれのある反対側は肉厚であり、そこに加工痕が施されているが、くびれを作り出すほど深いものでない。裏面はバルブの部分をつぶすように粗い剥離が加えられており全体をさらにやや薄くするための努力がなされている。石ヒの末製品とも考えられぬことはないが大形のサイド・スクレーパー様石器として分類した。図版47-1も同様である。図版46-2は比較的肉厚の卵形を呈する剥片の表面両側辺に粗い加工の施された石器であり、裏面にはなんらの加工はない。剥片をとるための打撃点となった部分にみられるものは剥離作業の際に生じたものと思われる。

縦長の剥片の片側縁部もしくは、両側縁部に加工された典型的なサイド・スクレーパーと呼ばれる様な石器は（図版46-7、9、10、11・図版48-9）に示した。比較的大形縦長の剥片の側縁部に規則正しく並列する再加工痕がみられるものである。図版46-7は裏面先端部にも若干の加工痕を有しており、先端部のみはあたかも両刃の石斧のような作りになっている。

図版47-9・48-10、11に示したものは、幅広の剥片の一部に加工痕を有する石器であり、一部には表裏両面に加工のある側縁部を持つ石器もある。図版48-11に示したものは図版46-1に示したものと同様湾曲した剥片の両側に加工を施したものであり、外反部と内反部のいずれを刃部とするかによっても異なる名称を持つ石器としうるものであるが、特に限定せず、前述のもの同様、石ヒの未成品とも考えられる石器であろう。

#### エンド・スクレーパー様石器（図版46-6、8・47-6・48-6、8、14、15）

前にも述べた如く明確にエンド・スクレーパーと分類できる石器は本遺跡出土の石器群中にはない。ここに分類した石器は単に剥片の一端に加工が施されているものとしたのみであり、特に図版46-6、8などは円形に近い剥片に加工されており、あるいは大形のラウンド・スクレーパーとして良いものであろう。

その他のスクレーパー様石器としては図版47-4、7・48-7の3例があるが、形態上の分類にしたがえば、コンケイブ・スクレーパーとされるものと類似していよう。本来、コンケイブ・スクレーパーは、槍の柄もしくは矢柄作りに使用されるとみられるものであり、目的物を丸棒状に加工するための道具と考えられている。この意味から言えば湾曲の度合の少ないこれら石器が、はたしてそれにあたるものか否か判断しがたいものであるが、僅かに湾曲している部位の加工と言うことでこの類に分けておく。

図版46、47、48に示した石器類は当初スクレーパー様石器類としておいたが、これまでの分類に含めないものが多くある。それらは一応加工痕を有する不定形の石器としておくがこれらの中に他の類のものと考えられるものもあるので若干それらについて述べる。

図版46-12、13・47-14のうち前2例は石ベラ類の未成品と考えられる。いずれも肉厚の剥片であり、これらをさらに加工すれば石ベラとして典型的な形をなすと思われる。図版47-14は石ベラの欠損品であろう。

図版46-4、5は共に小形両面加工の石器であり、スクレーパー類とするよりは、石鏃の未成品と考えた方が良いかもしれないものである。

図版48-12、13の2例はその加工及び形状からみて、石槍の未成品であろう。

#### 不定形石器（図版54-1～19・写真図版33-8～26）

小形不定石器の一群である。この中には、スクレーパー類及び石ヒの欠損品かと思われるもの（図版54-2、3、7、9～12、14、19）、石鏃の未成品と考えられるもの（図版54-1、

17、18)、大形石鏃もしくは槍先形石器の欠損品かと考えられるものなどの他に、若干の使用痕と考えられる痕跡を有する剥片などが含まれているが、特定の石器に明確に比定しえないものばかりである。

**石ベラ** (図版49-13-15・50-1-15・51-1-15・52-1-17・写真図版30-15、18、19・31-1-11、13-16・31-12・17-27、32-1-3・32-4-20)

石ベラとして明確に形態、機能等のはっきりした形で分類しうる石器は以上あげて図示したものの中にはそう多くはない。この項では、石ベラ及びそれに類似する石器とし一括して表わしておく。本来石ベラとして分類される石器の形態的特徴は、細長い台形状を呈して正面はほぼ全面にわたって加工が施され、裏面は第一次剥離面の部分を多く残す、いわゆる半両面加工か、または両面加工の石器であり、刃部と目される台形状の長辺である基部に急角度で剥離加工が施され刃部を形成しているものと考えられる。このような加工の加えられた点から当然石器の横断面形は三角形に近い肉厚のものとなる。縦断面形は刃部の形成により基部近くで急角度になり、全体として正面側に僅かに湾曲したものとなるが、そうでないものもある。刃部の加工は後述するトランシェ様石器のそれと異なり複数の打撃によって作られるのが一般である。このような点を注意してみれば、これらの条件を全てみたすか、もしくはそれに近いものは僅かな例しかない。図版49-13-15、50-1-14・51-1-3、10・52-1-8、10、12、16、17などに図示したものは前述した条件のすべてを満たすものではないが、比較的それに近いものと言えよう。形態的には台形と言うより三角形に近いものもあるが、一様に刃部の形成が石ベラの特徴とするものを示している石器であろう。また図版51-11、12・52-14の石器類は、完全な両面加工であり、刃部と考えられる基部は両面より作り出されている。図版51-11は、形が多少変形であるが他の二例は左右側縁が対象的になっており、打製石斧として分類されるものであろう。石ベラの項に図版番号で示した石器のうち上記以外の石器は全て欠損品であり、加工の部位も不揃いであるために個々の石器の分類を行う事は無理である。しかしながら図による剥離調整等の面からみて、恐らく石ベラとして分類されるものが大多数であると考えられる。

**トランシェ様石器** (図版53-1-7・写真図版32-21-27)

トランシェ様石器としたのは、形態的には石ベラと分類した石器と類似しているものであるが、石ベラと違う点は横長の剥片を素材とし、刃部部分は第1次剥離によってできた鋭い縁辺を利用しているものである。本遺跡で出土したものは、形態より二種に分けられ、細長い台形状のもの(図版53-1、2、4、7)と二等辺三角形のもの(図版53-3、5、6)に分けられる。これらはいずれも完形品であり、側縁は二次加工によって直線になるもの(図版53-1-5)と、くびれるもの(図版53-6、7)とがある。刃部の形は直刃(図版53-1-3、



6、7)と曲刃(図版53-4、5)を呈するが、刃部には僅かに刃こぼれ状のものが見出されるだけである。

**石斧**(図版53-8~14・55-1~11・56-1~2・写真図版33-1~7・34-1~10、12・34-11、13)

石斧として分類したものは以下の3種類に分かれる。

**打製石斧**(図版53-8~14)

石ペラの項で若干打製石斧についても述べたが、ここに示したものはすべて両面加工の石斧である。1例を除いてすべて完全な形である。図版53-13は欠損品で刃部を欠いている。他のものは刃部が両面よりの加工によって形成されたいわゆる両刃のものである。図版53-8は大形扁平のものであり、両面の剝離は浅い。全体に薄く刃部より基部に至るまでほぼ同一の厚さである。刃部は若干の細部加工により両面より形成されているが、表裏両面共に刃部の極く一部分に磨かれた個所が認められる。他の石器はいずれも短冊形であり、肉厚な剝片の両面に丁寧加工されている。

**磨製石斧**(図版55-7~11・56-1、2)

中形のもの1、小形のもの2の3例をのぞいて他は欠損品である。図版56-1は、2ヶ所から折れているものが接合したもので、本類の中でも特に大形のものである。表、裏とも研磨痕が僅かに認められるもので、全体的に丸味をもつものである。頭頂部には敲打による剝落が認められる。刃部は蛤刃に近く曲刃を呈する。他は図版55-9をのぞいて、いずれも全面に研磨痕が認められ、また両側面に面取りが認められるものであるが、全体的に稜が丸味をもつものである。図版55-7は頭部欠損、55-8は刃部欠損で頭頂部に敲打痕が認められる。図版55-10、11、図版56-2は完形品である。頭頂部には敲打痕が認められない。刃部は蛤刃に近く、曲刃状となっている。図版55-9は側縁が丸みもち、研磨痕が僅かに認められることから、磨製石斧の破片と思われるので本項の類に入れたものである。

**環状石斧**(図版55-1~6)

中心部に穴を有する円形の石器である。全体に扁平な石をさらに平らに磨き、周囲にも形を整えたあとを残す。すなわち外周部全体にわたって加工痕もしくは使用によって生じたと思われる打ち欠きが残されている。図版55-2~6はいずれも欠損品であるし、中心部の穴も完全に穿孔されていないものであるが、外縁部には明らかに人為的な加工の痕を残している。これらの状況からみると、図版55-3は外縁部の打ち欠きが粗く、未だ全体に円形を呈するまでに至っていないものと考えられる。図版55-6は、それに比べるとやや円形に近づいている。他のものは欠損品を含めて一応その外周部分は円形を呈するとみてよい。これらの状態からみて本類石器の加工過程をある程度うかがい知ることができるものである。

#### 磨石（図版57-5～8、58-1～10・59-1～5・写真図版）

磨石の類には2通りの形態の変化がみられる。すなわち、凹石同様、円形を呈するもの（図版57-5～8）と、長円形もしくはそれに類する形のもの（図版58-1～10・59-1～4）である。円形に近い磨石類はその全面が使用によると思われる磨耗を残しており、特別な部位における加工もしくは使用の痕は見られないものである。

長円形、もしくはそれに類する形態の磨石類は図示した如く、石器の一部分に縦長に走る2本の稜によって形づくられた平らな細長い面を有している。石器の横断面によっても判るように変形の四角形を呈している。この細長い平坦面は、極く一部に残る打ち欠きを除き全て磨きによって作り出されている。また一部の例では、打ち欠きの後に磨きによってその面を形づくっているようである（図版58-4）。又形態としては図版58-8に示したように全体の形は磨製石斧に近いものであるが、刃部と考えられる部分には何らの加工痕もなく、1側面のみ磨りへらされたような面が残されているものもあるが、おおむねその全体的に細長い棒状の石の一面を磨削によって形づくられていることがこの石器の特徴である。しかもこの平坦面以外に使用に供されたとみられる部位のないことから、この面がこの石器の使用面であると考えられる。

#### 凹石（図版56-3～9・57-1～4・写真図版35-1～11）

円形もしくは長円形の河原石の片面もしくは両面に1ないし数個所の凹みを持つ石器群である。両者の形状以外の相異としては、円形のもの1個所の凹みを有するか、あるいは2個所としても両方の凹みが互いに接している状態のものである点と、長円形のもの2個所以上別れているか、数個所の小さな凹みが互いに相接して大きな1個所の凹みを形成している状態があげられる。全体に石器の表面は自然面のままである部分がほとんどであり、極く僅かな部分に擦痕状の痕跡が認められるにすぎない。

#### 石 錘（図版59-6～14・60～64・写真図版36-1～9・36-10～37-21）

本遺跡からは多量の石錘が出土した。小形のもの少なく中形のもの及び大形のものが多いのが特徴である。110頁にあげた計測表によって明らかなように大形のもの1,265g～305g、中形のもの445g～100g、小形のもの95g～10,85g程の重量である。特に図版63-5は超大形とも言えるものでこの種の大形の石錘は多くない。

石器の特徴として特殊な加工痕を有するものはなく、比較的扁平な長円形の河原石の長辺の部分上下に打ち欠きによる凹みがつけられている。凹みをつけるための打ち欠きは一回の打撃によるものと数回にわたるものとがみられる。

#### その他の石器（図版65-1～6・写真図版36-26～31）

大形ハンマー様の形態を有するもの1例がある。一部に敲打によると考えられる痕が残されている以外加工らしいものはなく、その形も自然石をそのまま利用したものであろう。細い部

位を握り部として使用すればハンマーとして充分利用しうるものである。(図版65-1)

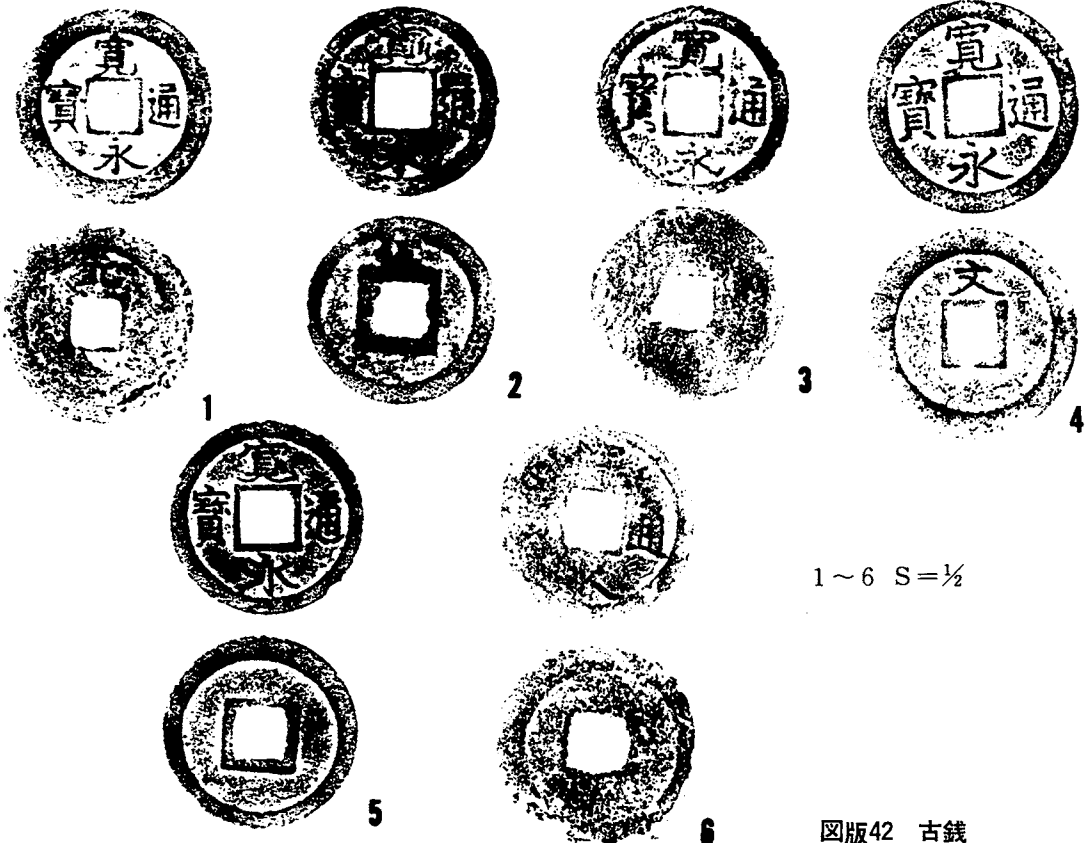
石の一部に穴のうがたれた石が四例あるが、うち二例は自然の状態で混入物が脱落したものであるが、図版65-3は穴の状態よりみて人為的にうがったものと考えられる。(図版65-6)とは穴のうがち方が多少異っている。恐らく両者共に混入物脱落後の自然に出来た穴をさらに人工的に整形したものではなかろうか。

古銭 (図版42-1~6・写真図版26-8~13)

東側段丘縁の墓地部分を掘った所、数枚出土している。鉄銭と思われるものと銅銭のものがあり、判読できたものは6枚である。判読できたものはいずれも新寛永銅一文銭である。以下表を参照されたい。

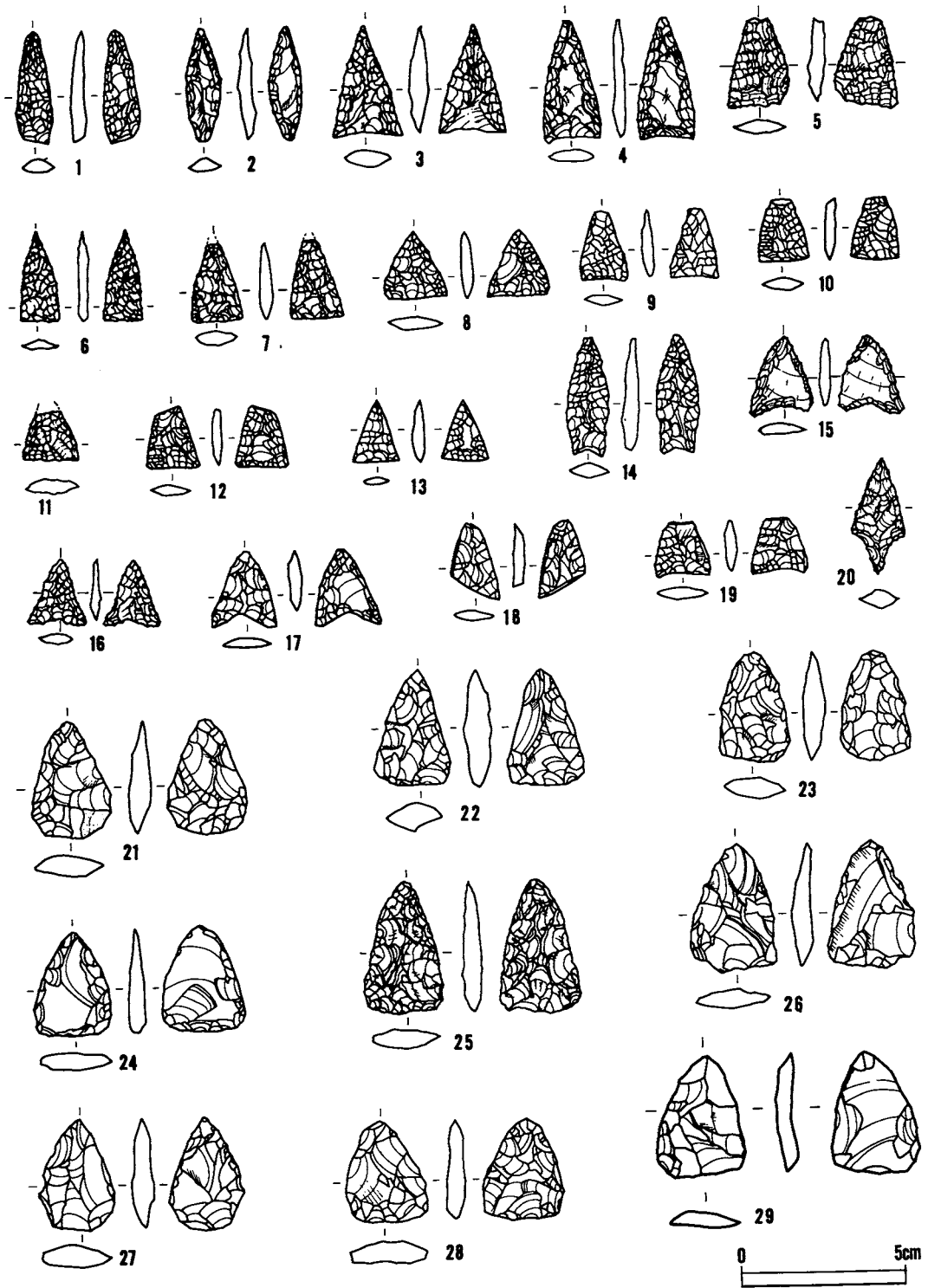
番号	名称	年 号			備 考	番号	名称	年 号			備 考
		時代	和 曆	西 曆				時代	和 曆	西 曆	
1	新寛永銅一文銭	近世	寛保元年	1741年	背(元)	4	新寛永銅一文銭	近世	寛文年間	1661~1672	背(文)
2	"	"	明和8年~天明元年	1771~1781	背(佐)	5	"	"	宝和5年	1708年	宝徳年間説もある
3	"	"	天文3年	1534年		6	"	"	天文年間~享保11年	1532~1726	

表 7

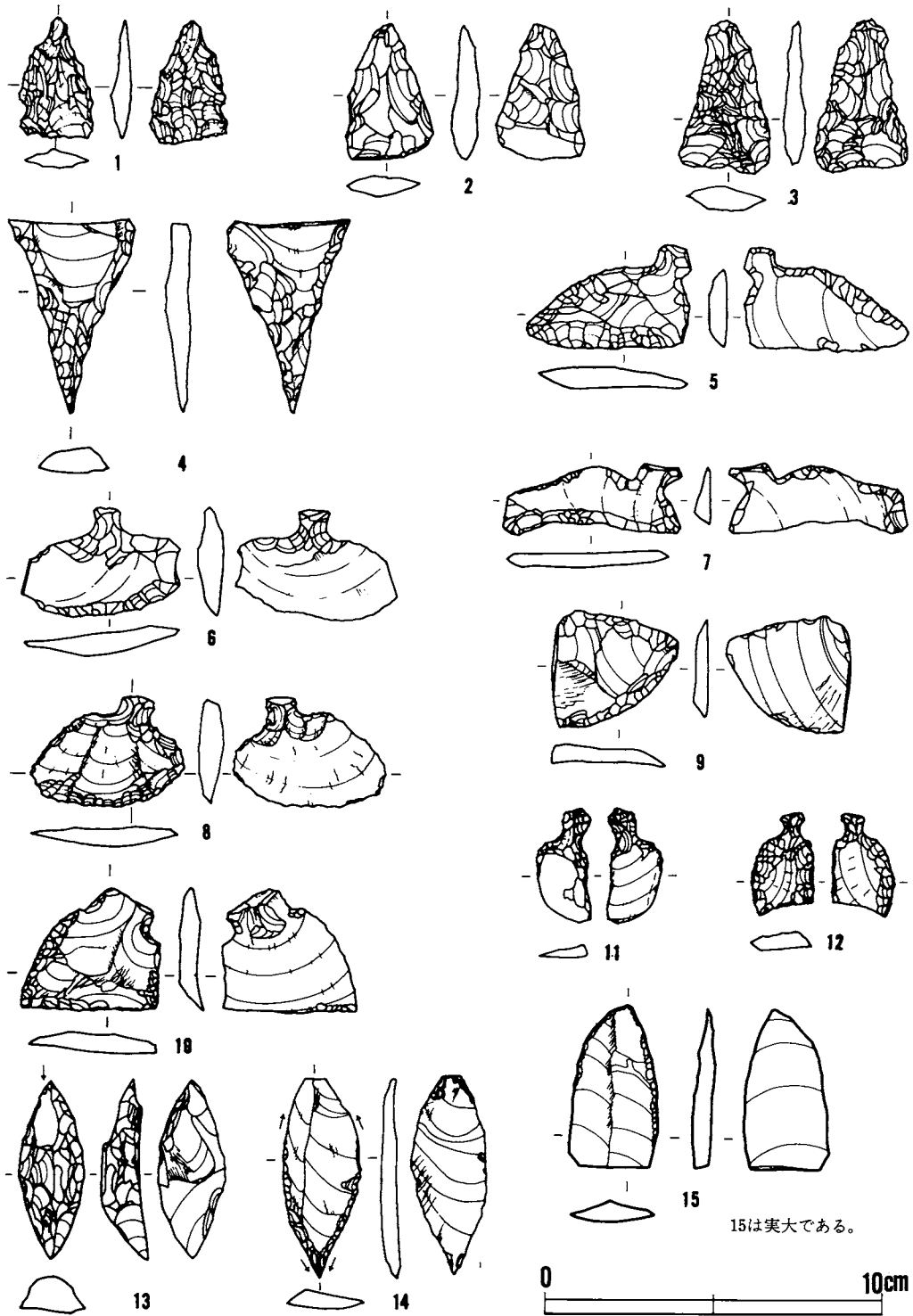


1~6 S=1/2

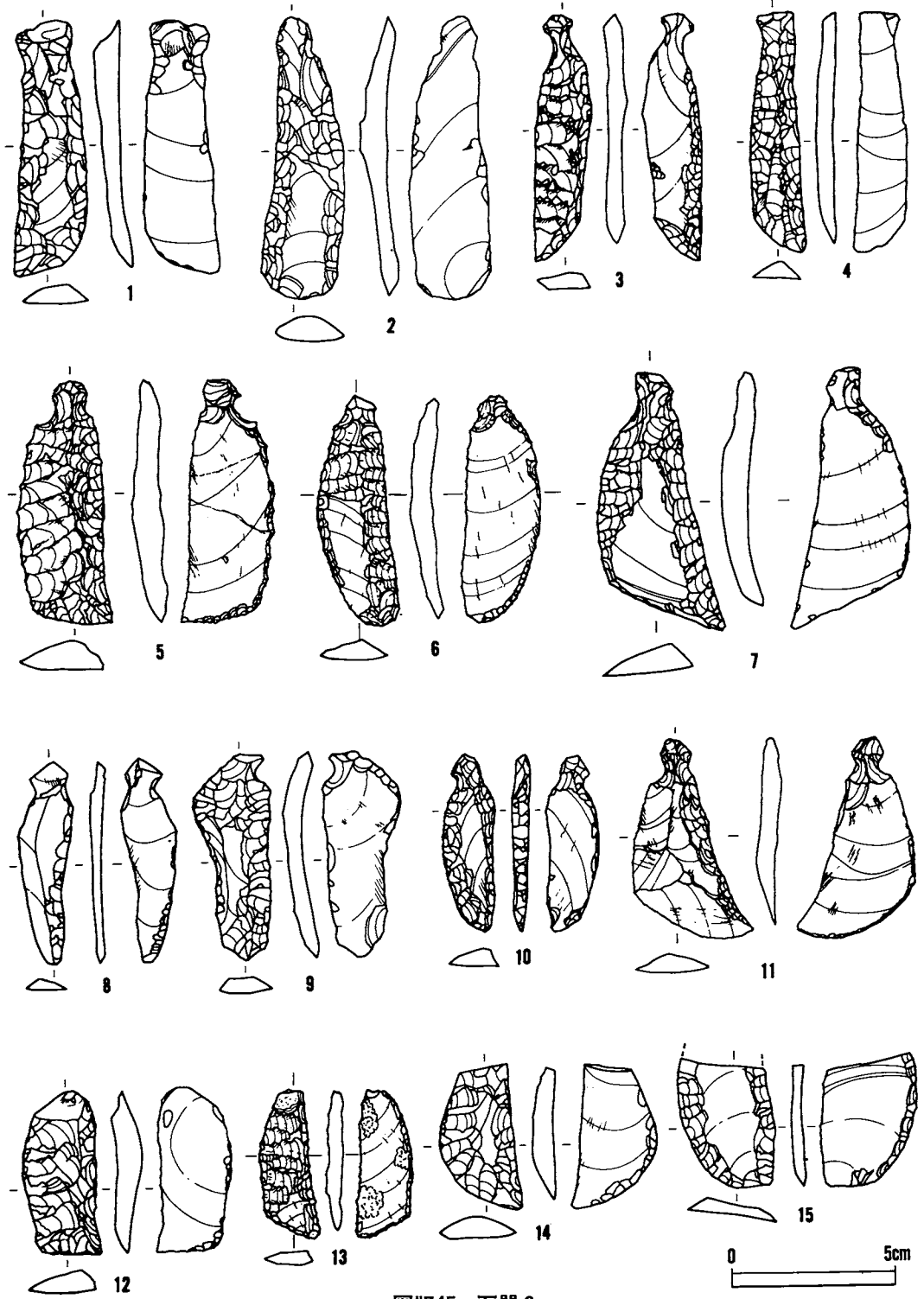
図版42 古銭



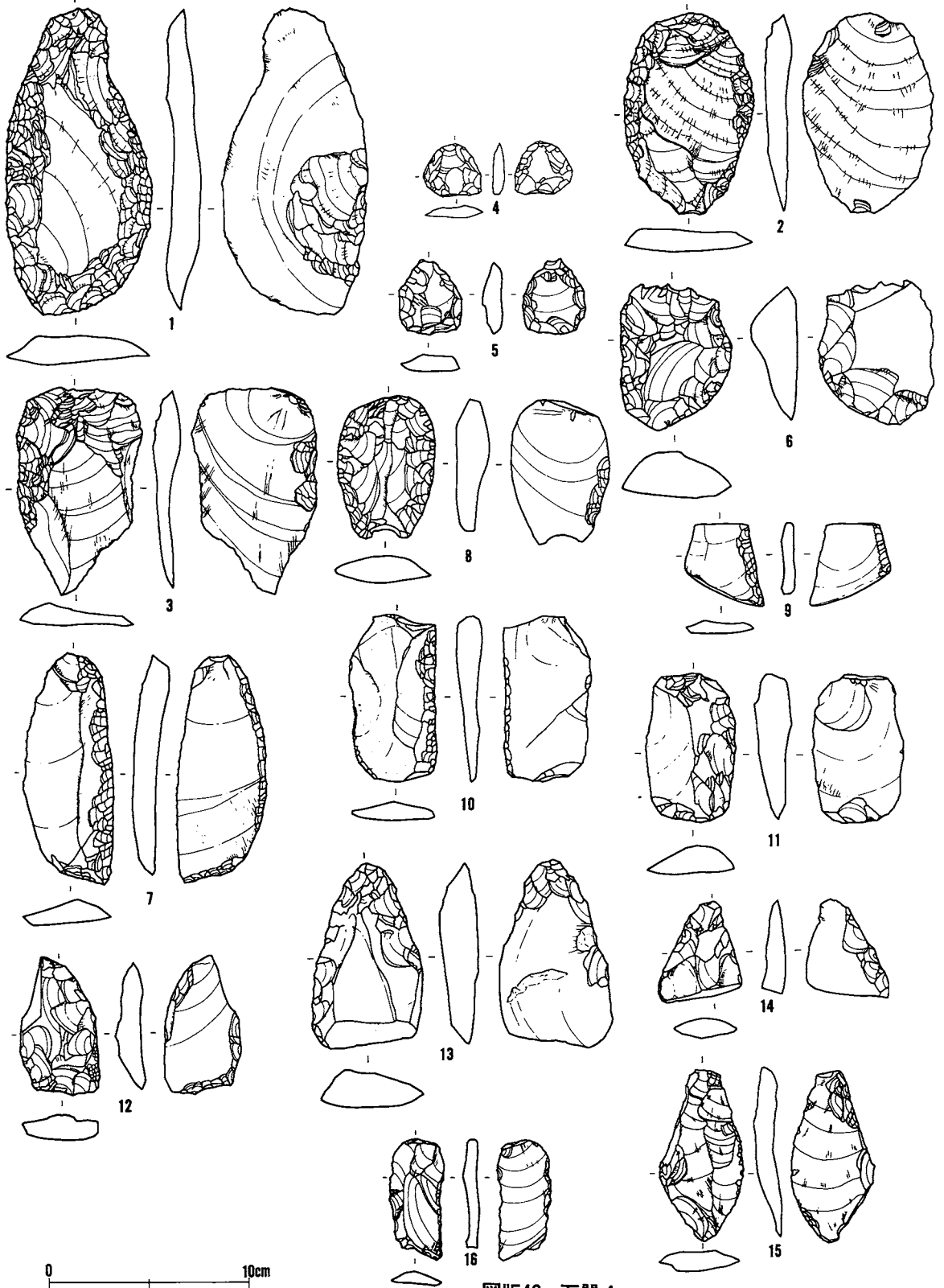
图版43 石器 1



図版44 石器2



图版45 石器3

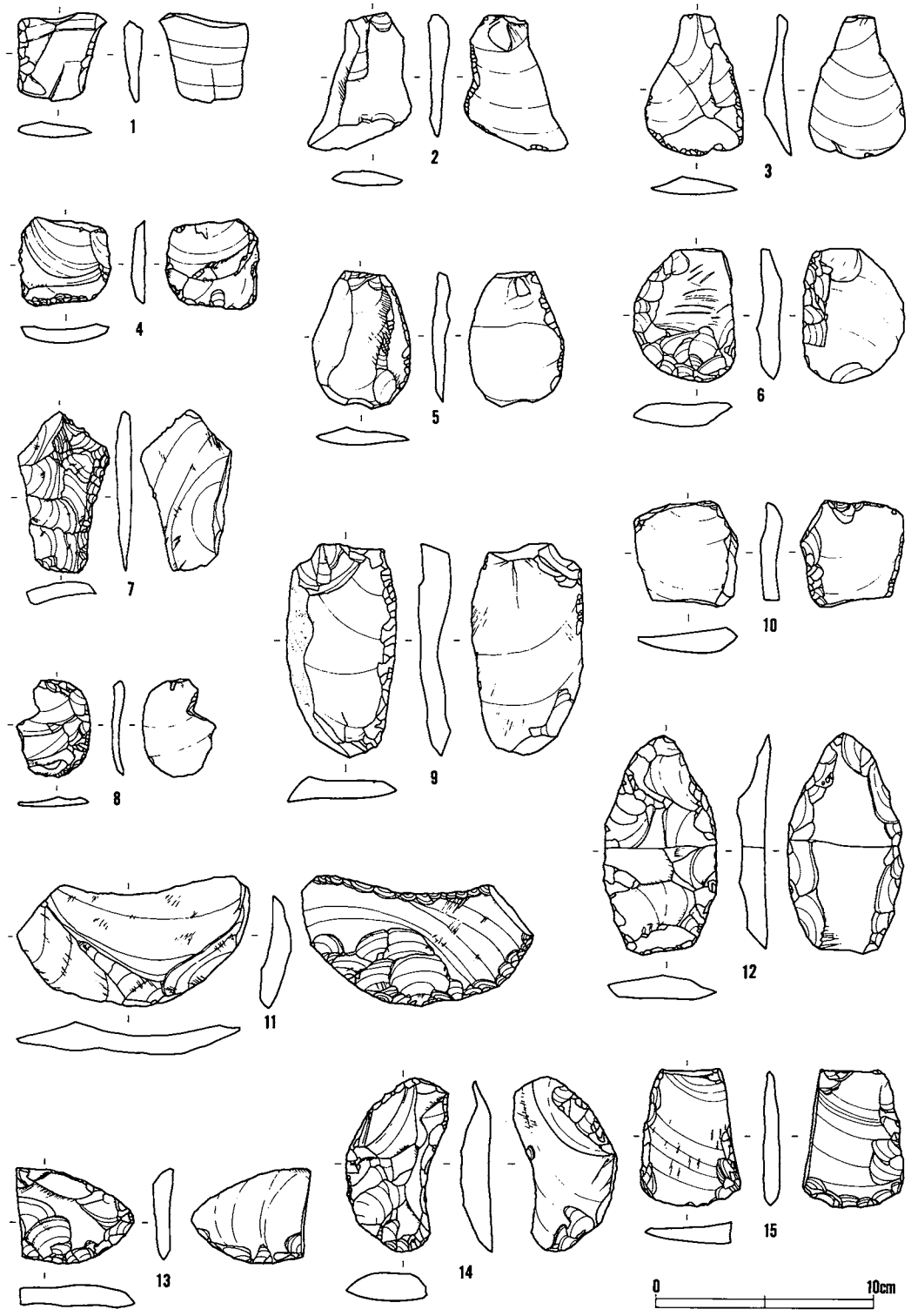


图版46 石器4

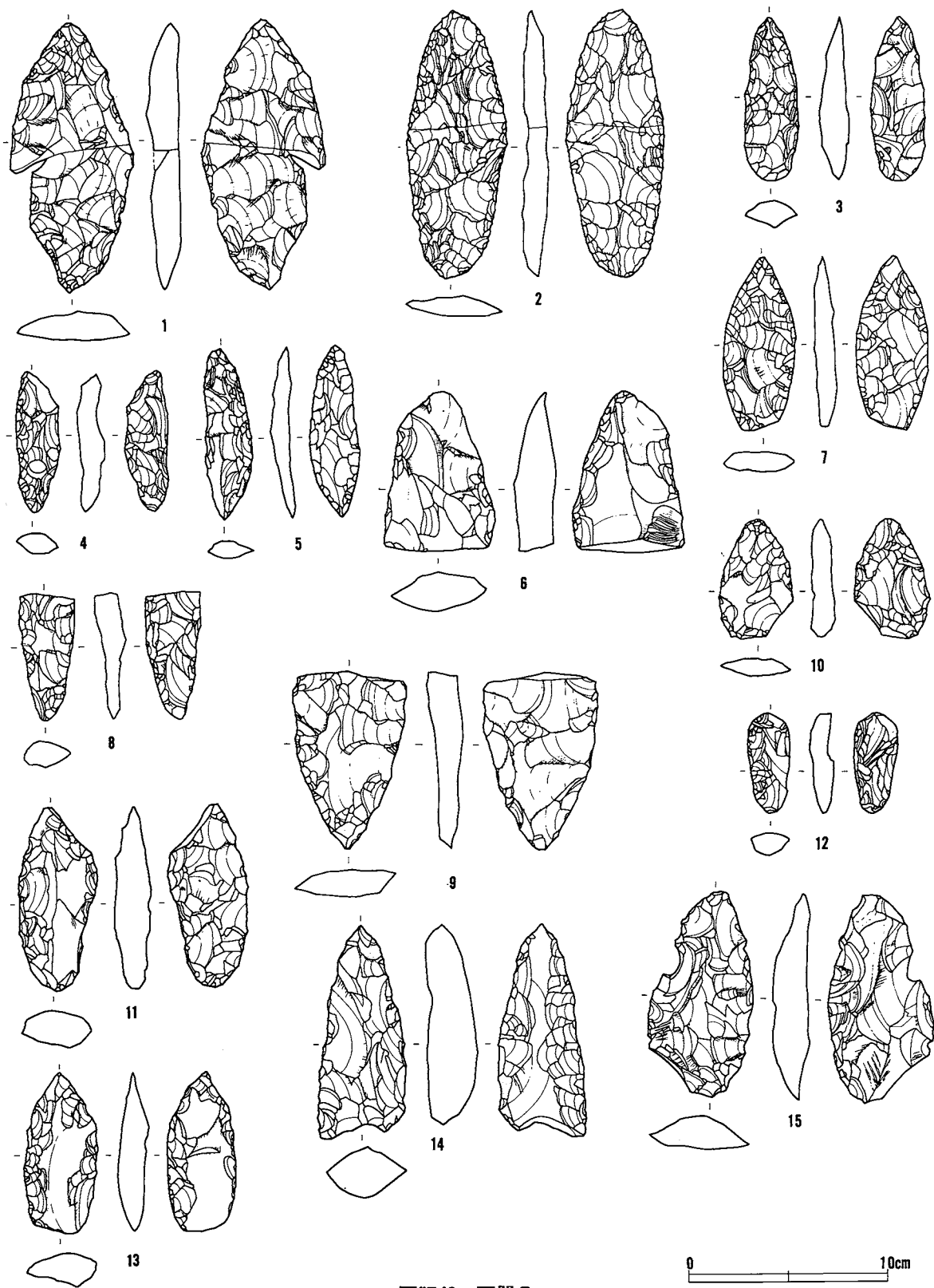


图版47 石器5

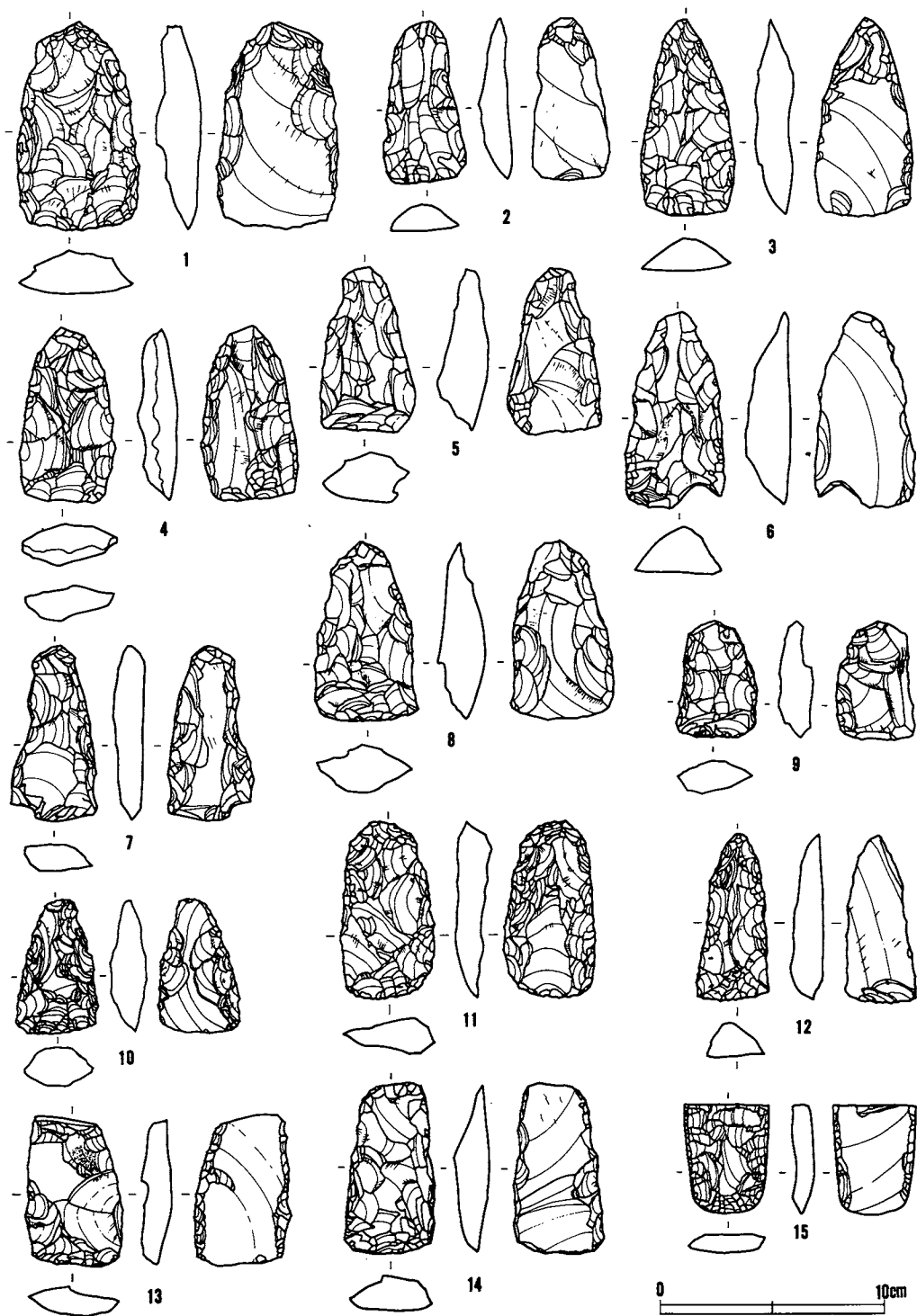




图版48 石器6



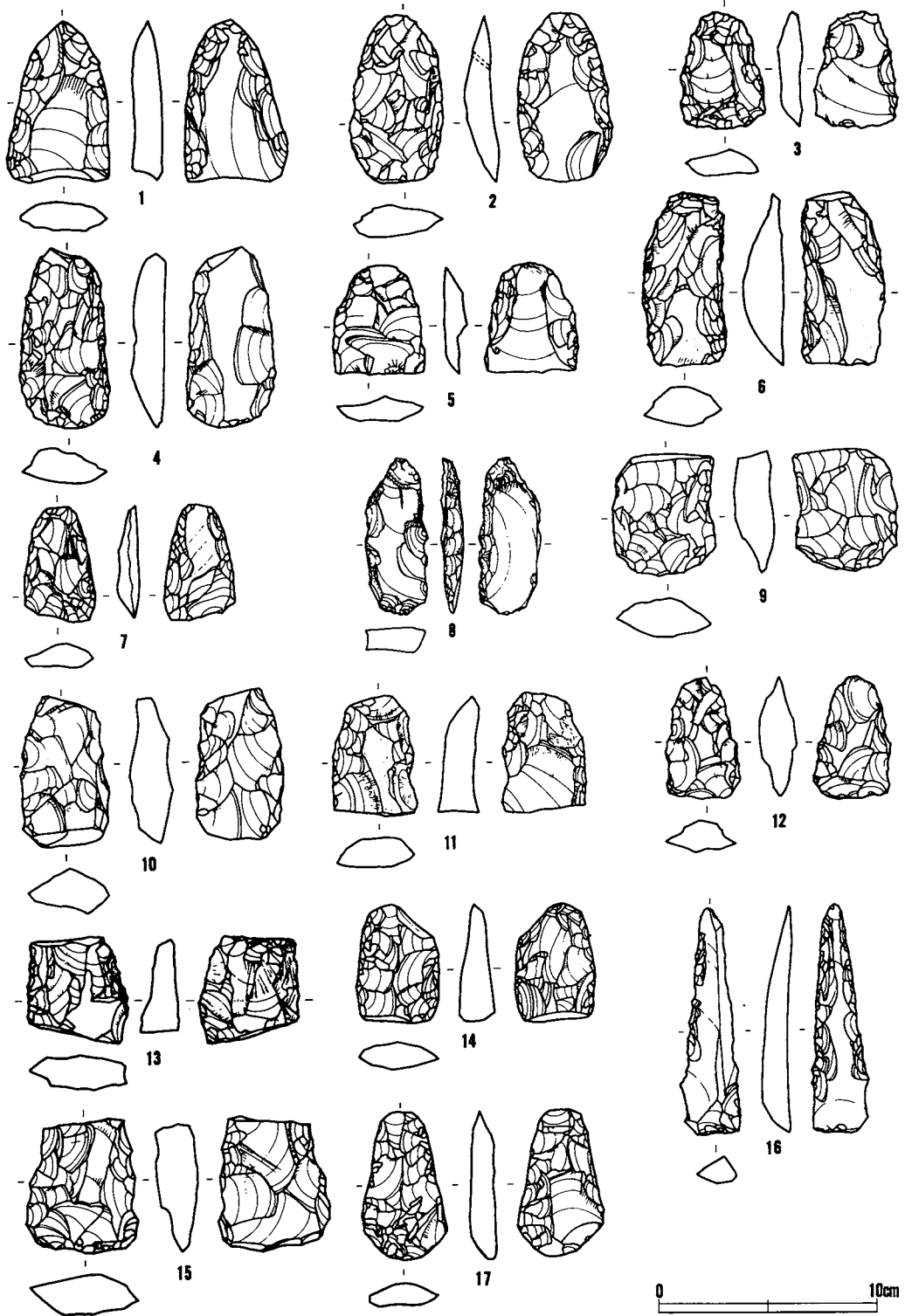
图版49 石器7



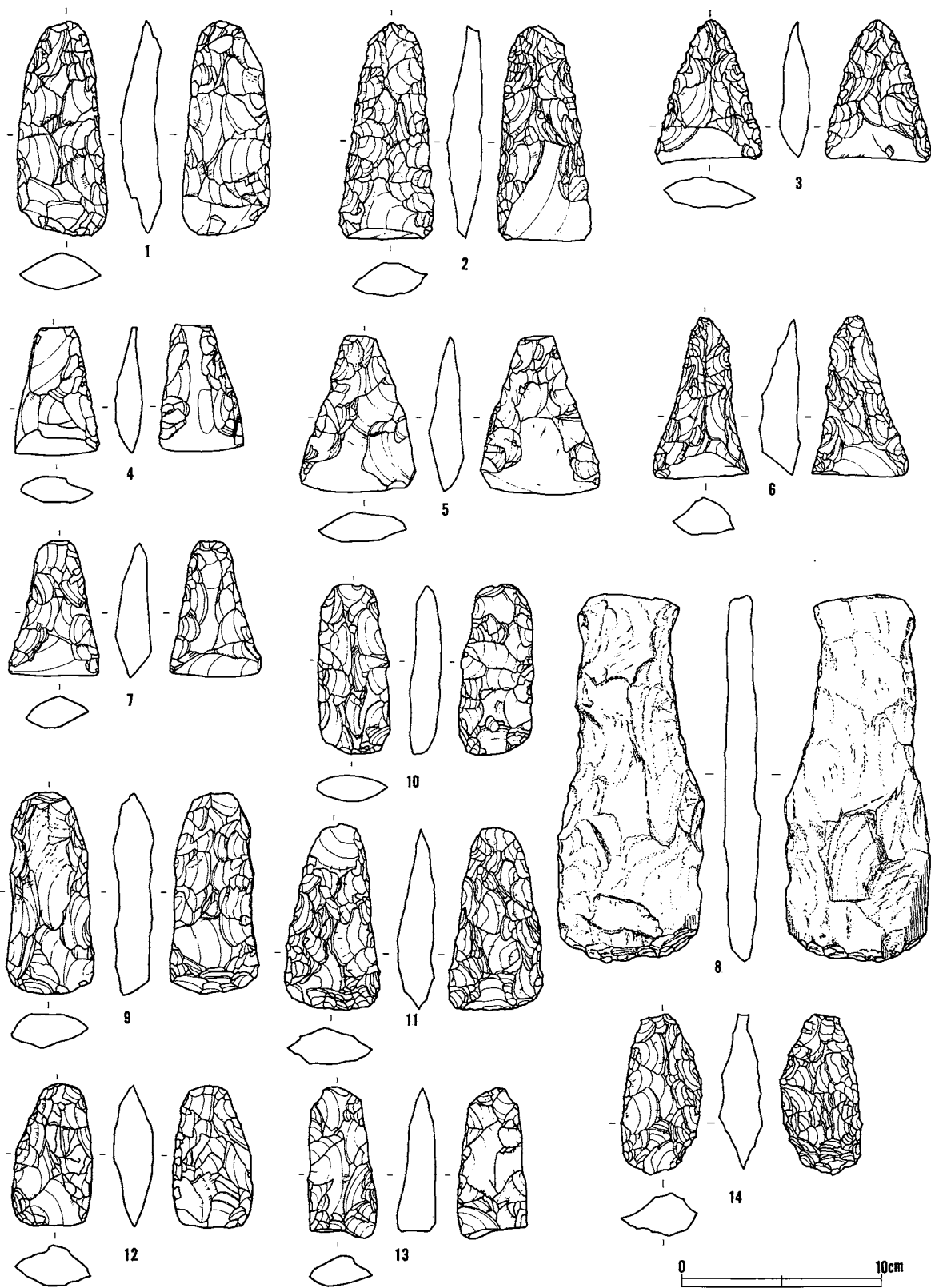
图版50 石器 8



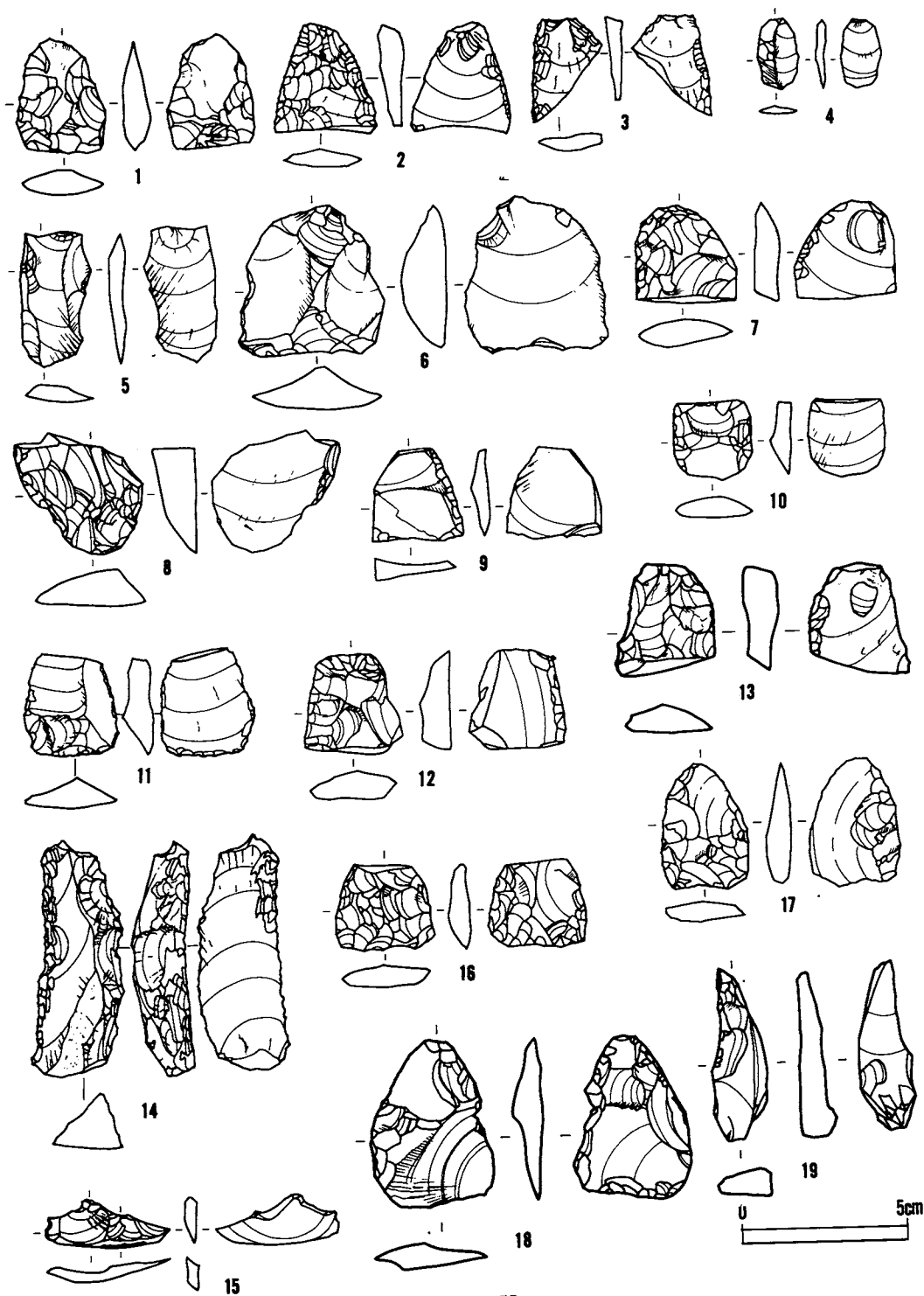
图版51 石器9



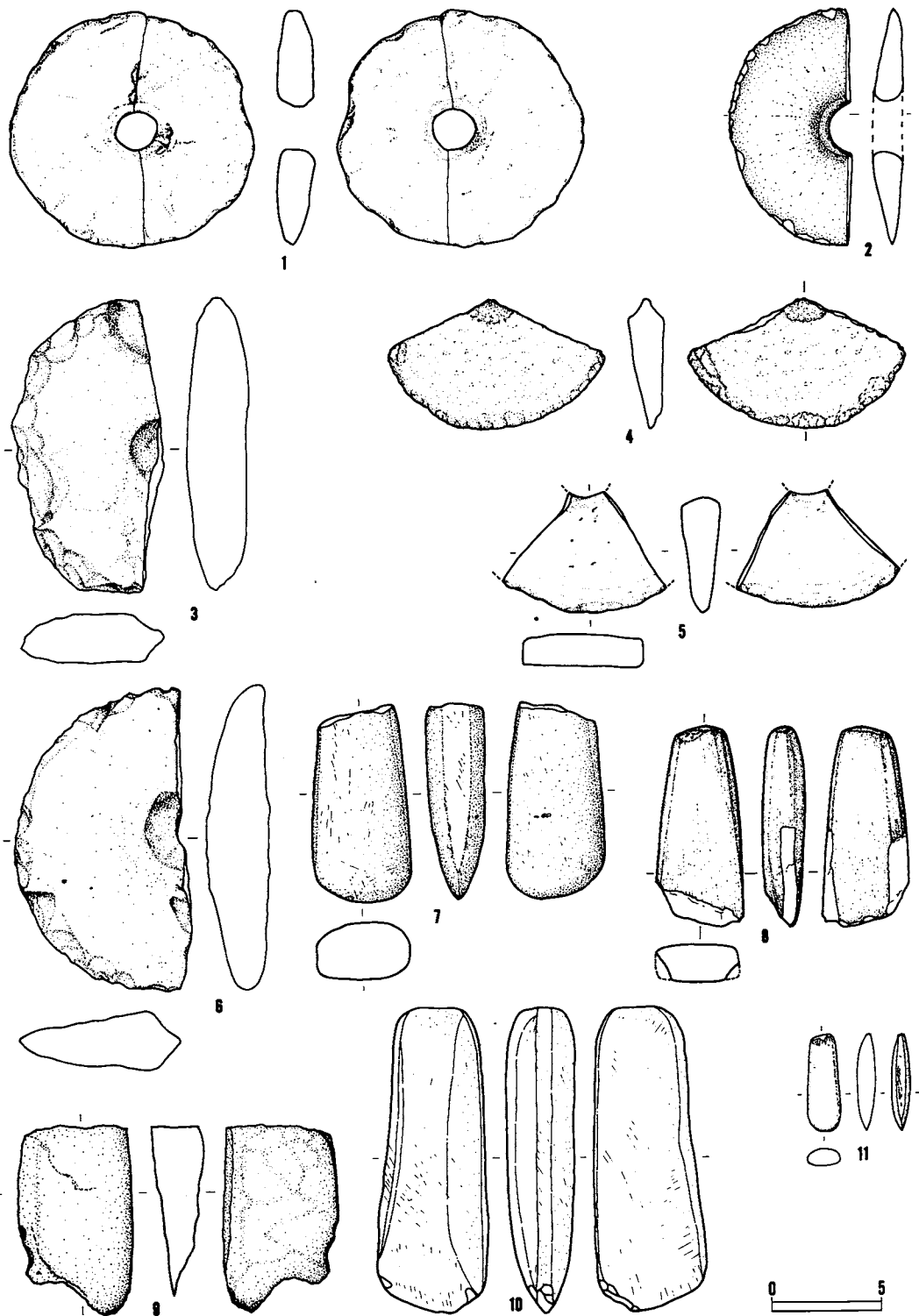
图版52 石器10



图版53 石器11

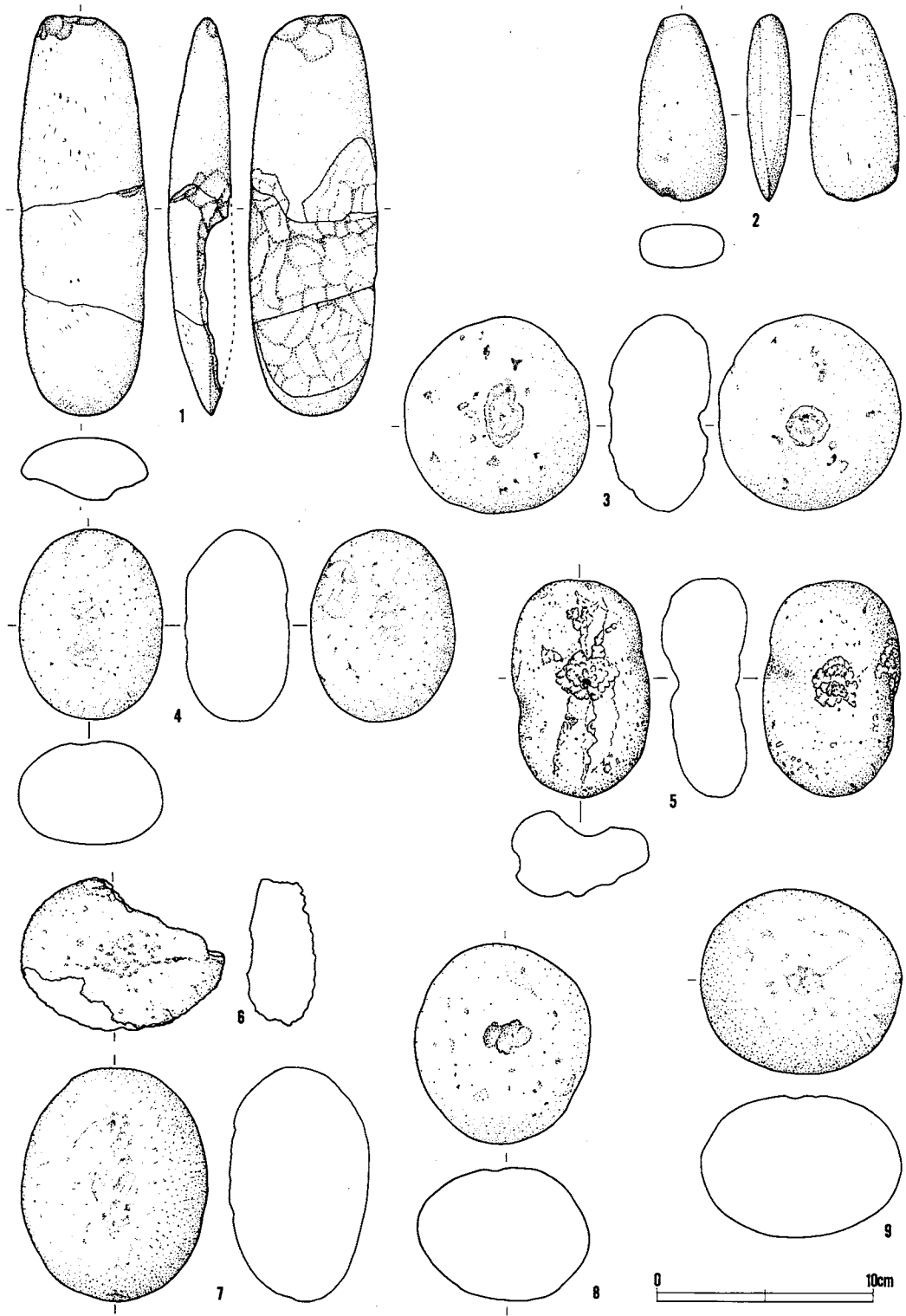


图版54 石器12

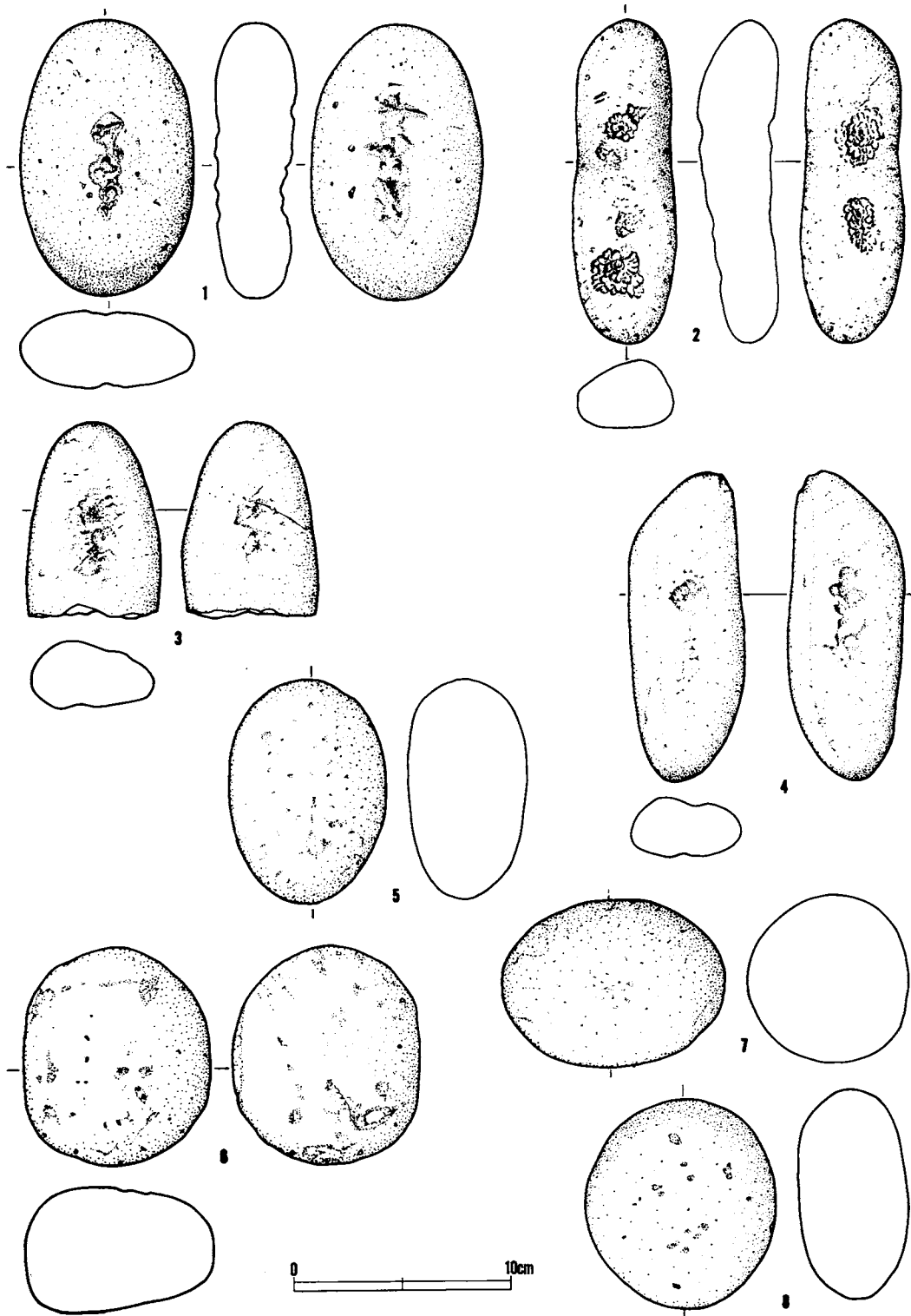


图版55 石器13

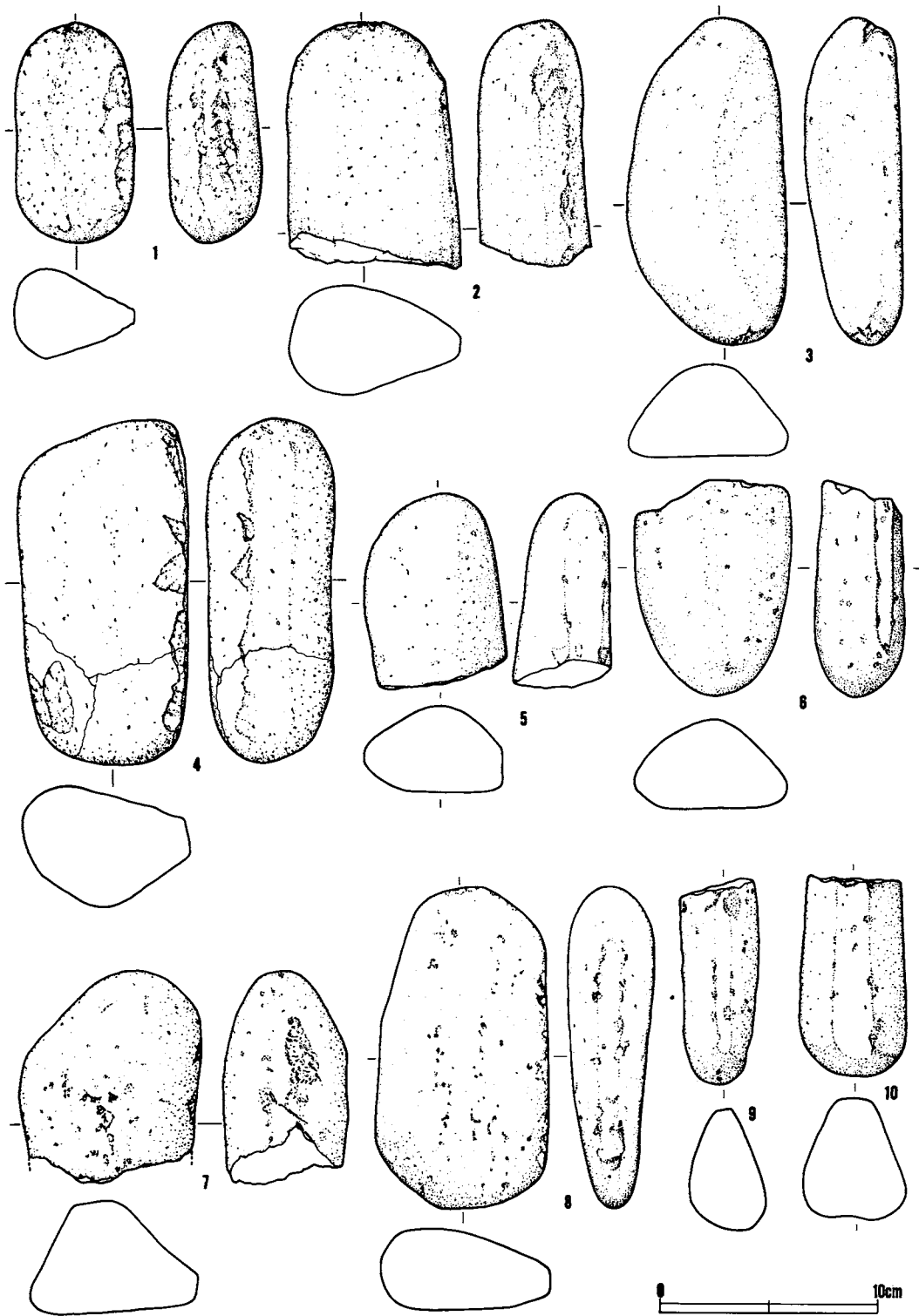




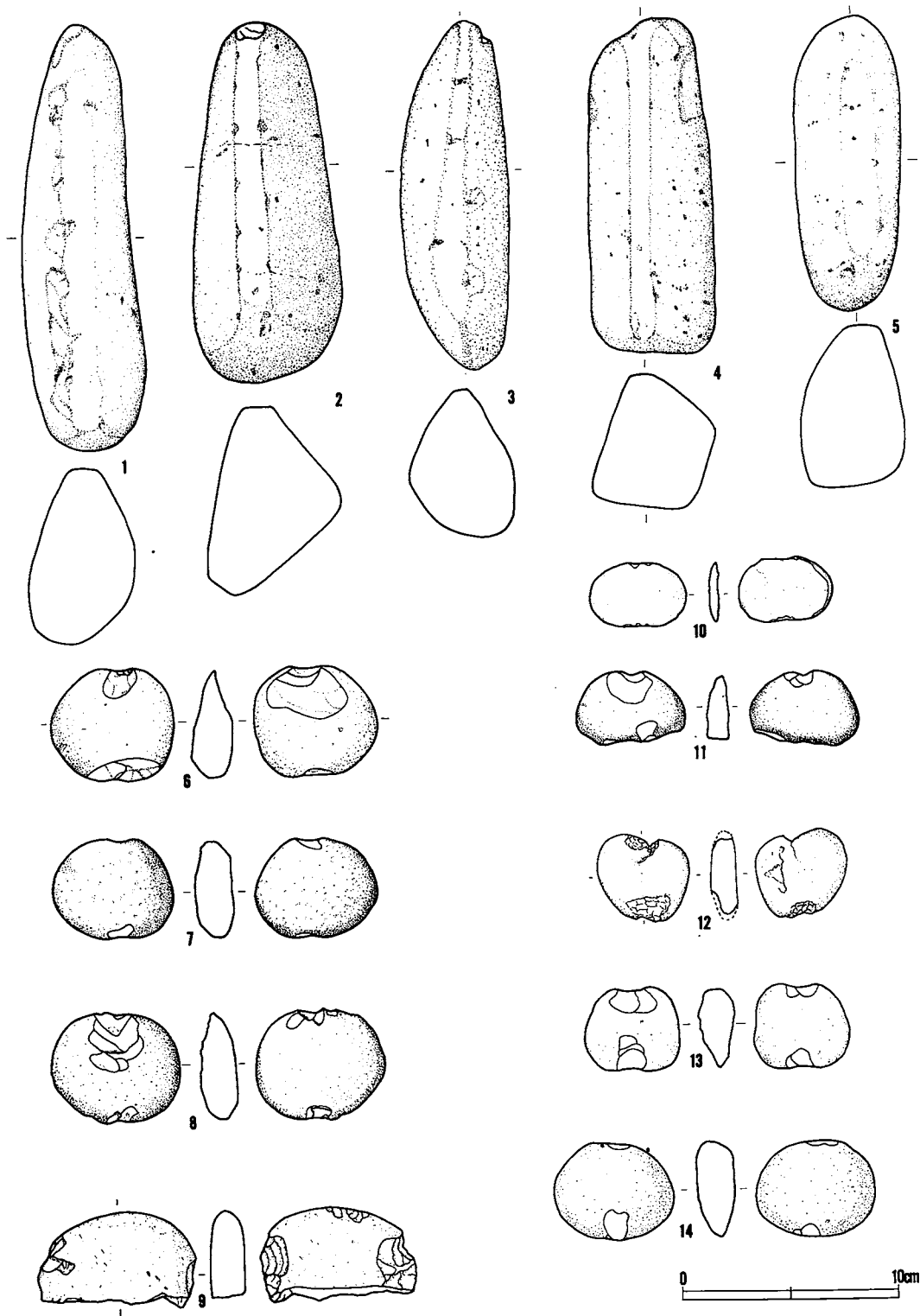
图版56 石器14



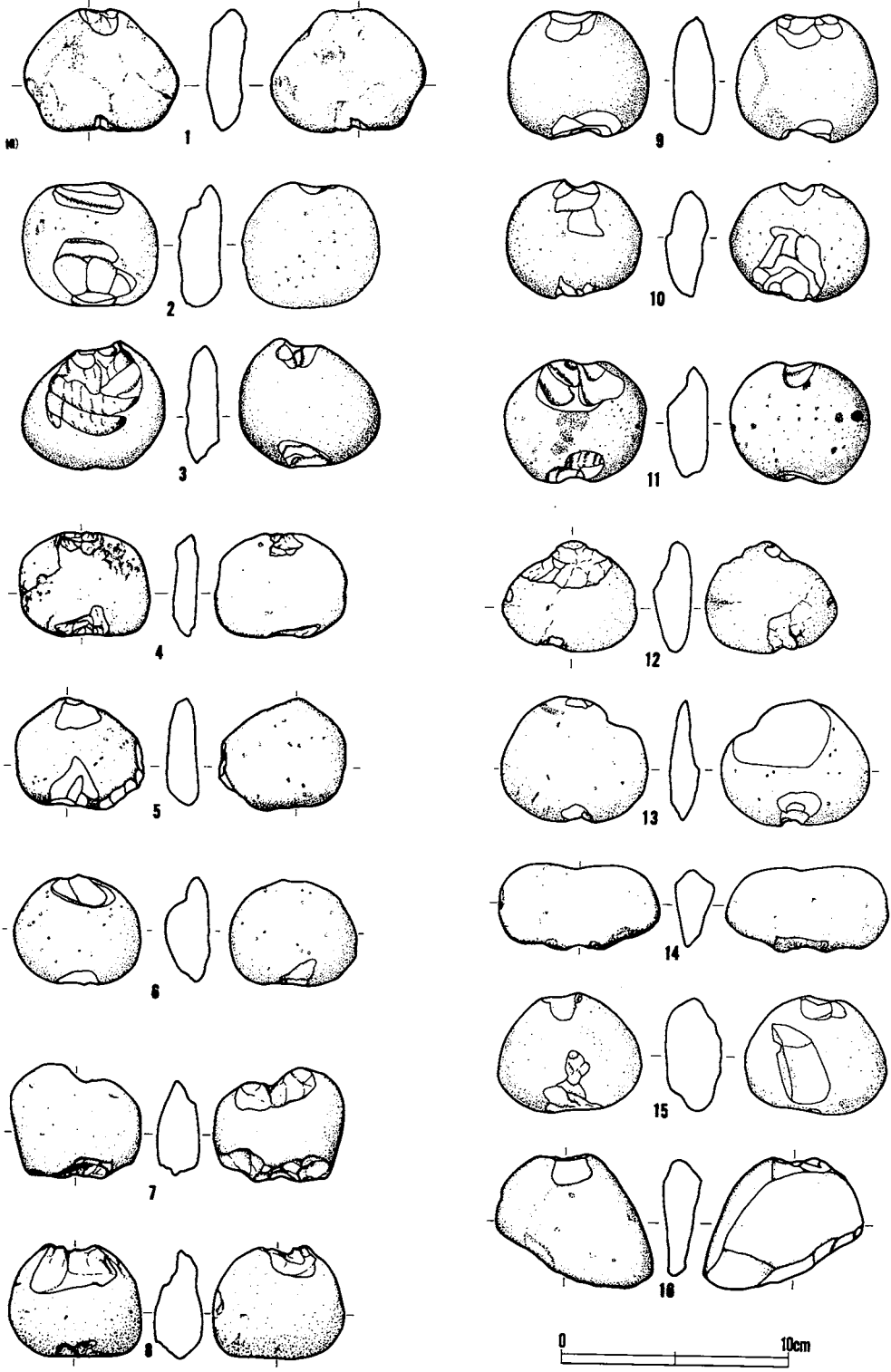
图版57 石器15



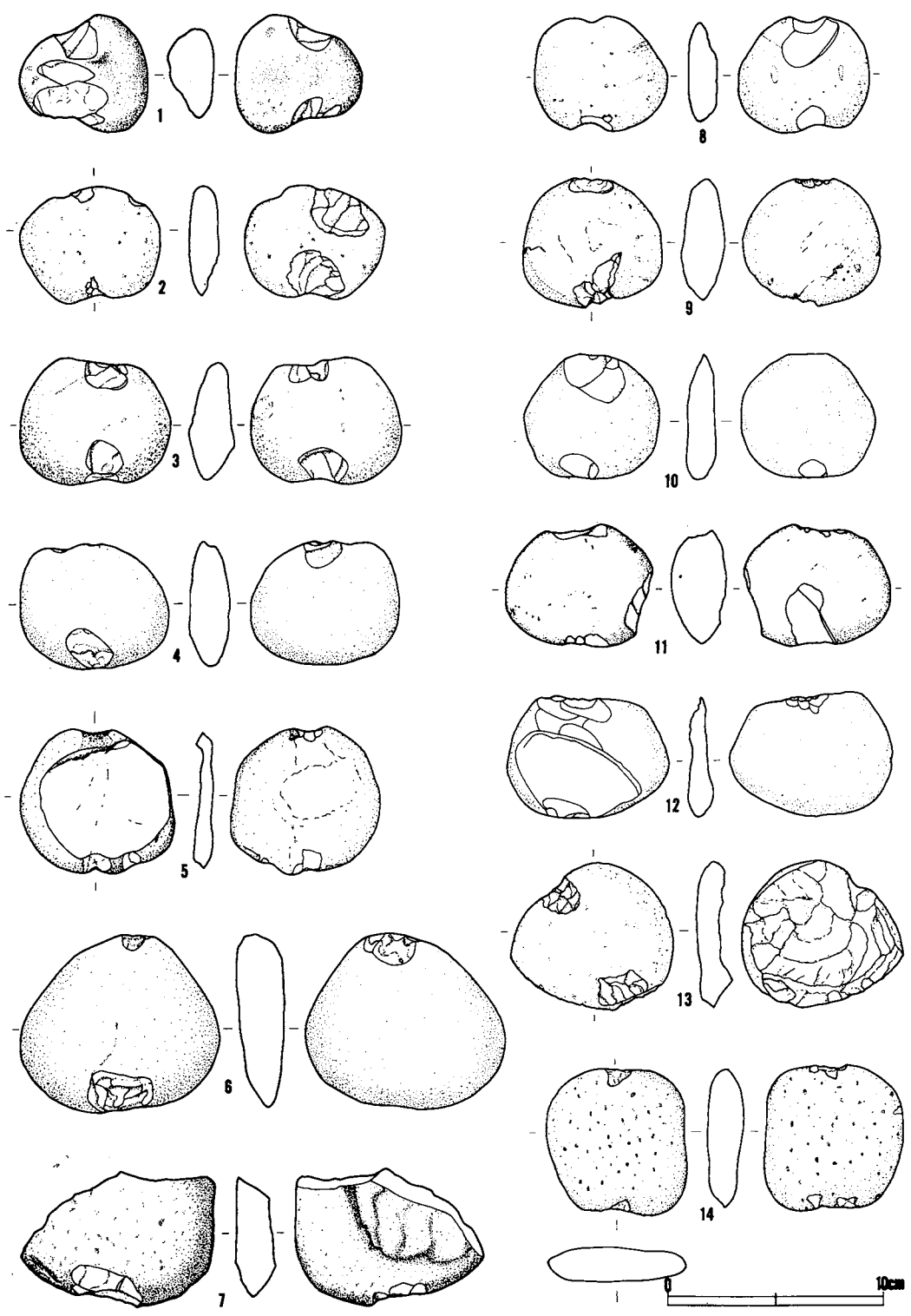
图版58 石器16



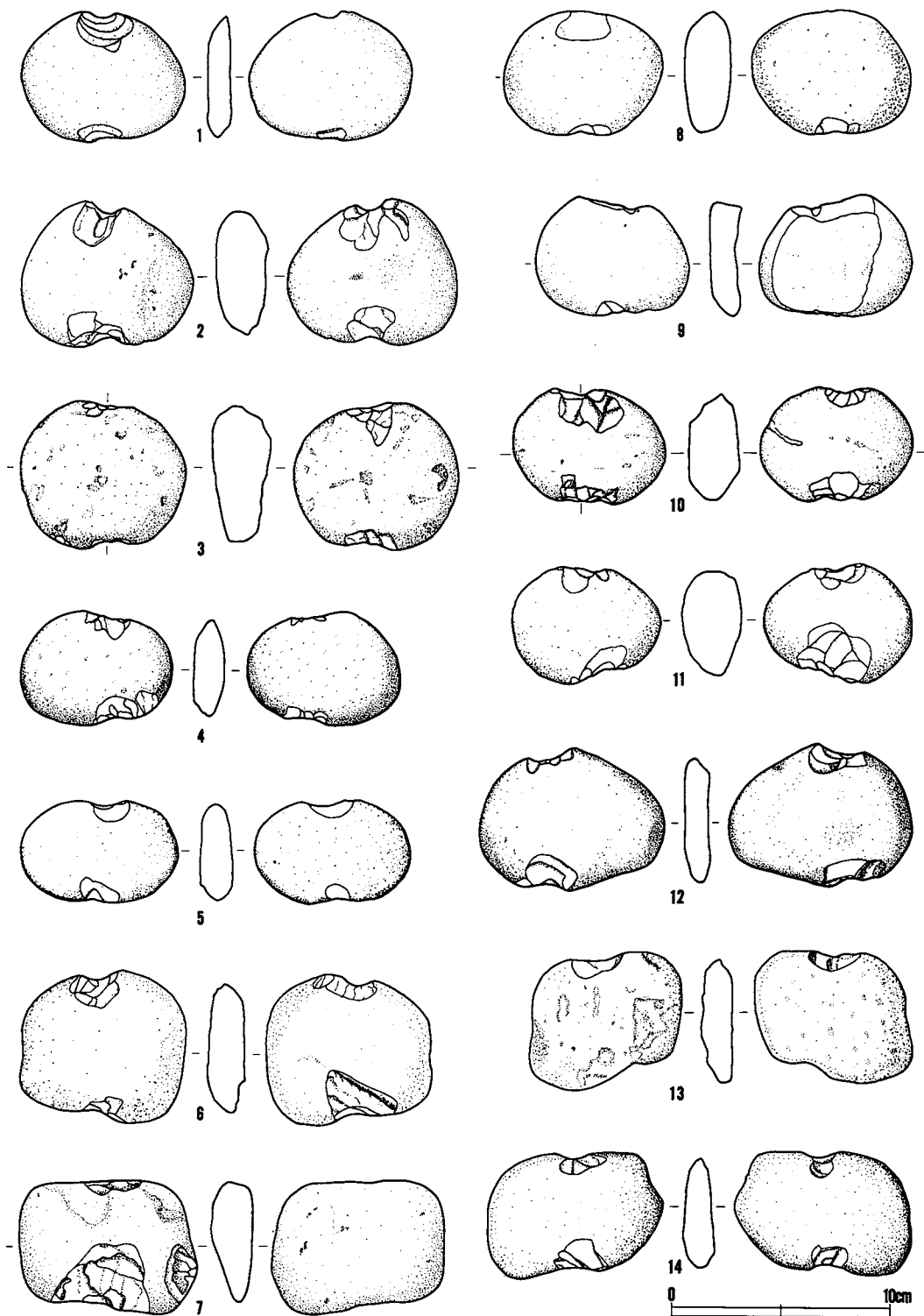
图版59 石器17



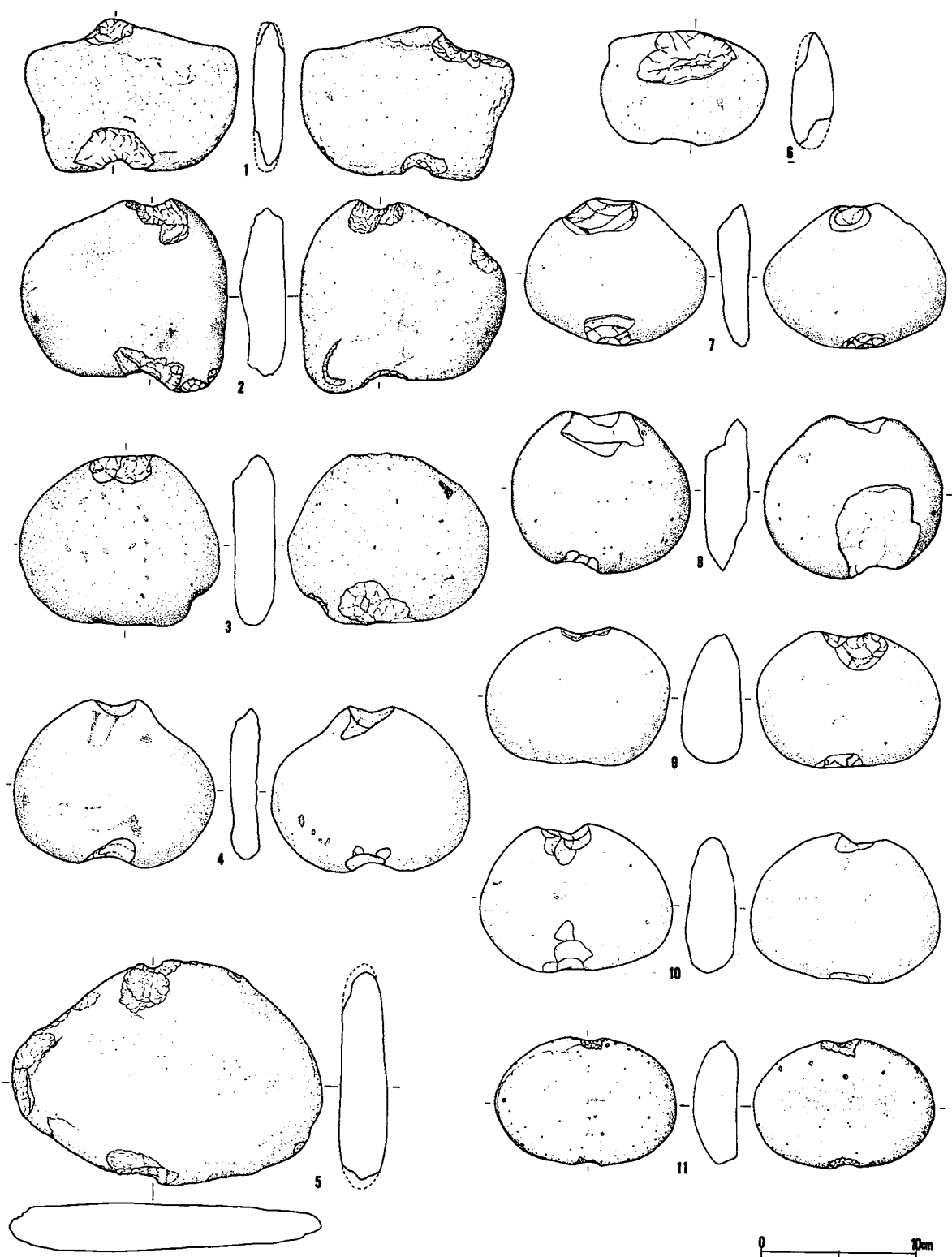
图版60 石器18



图版61 石器19

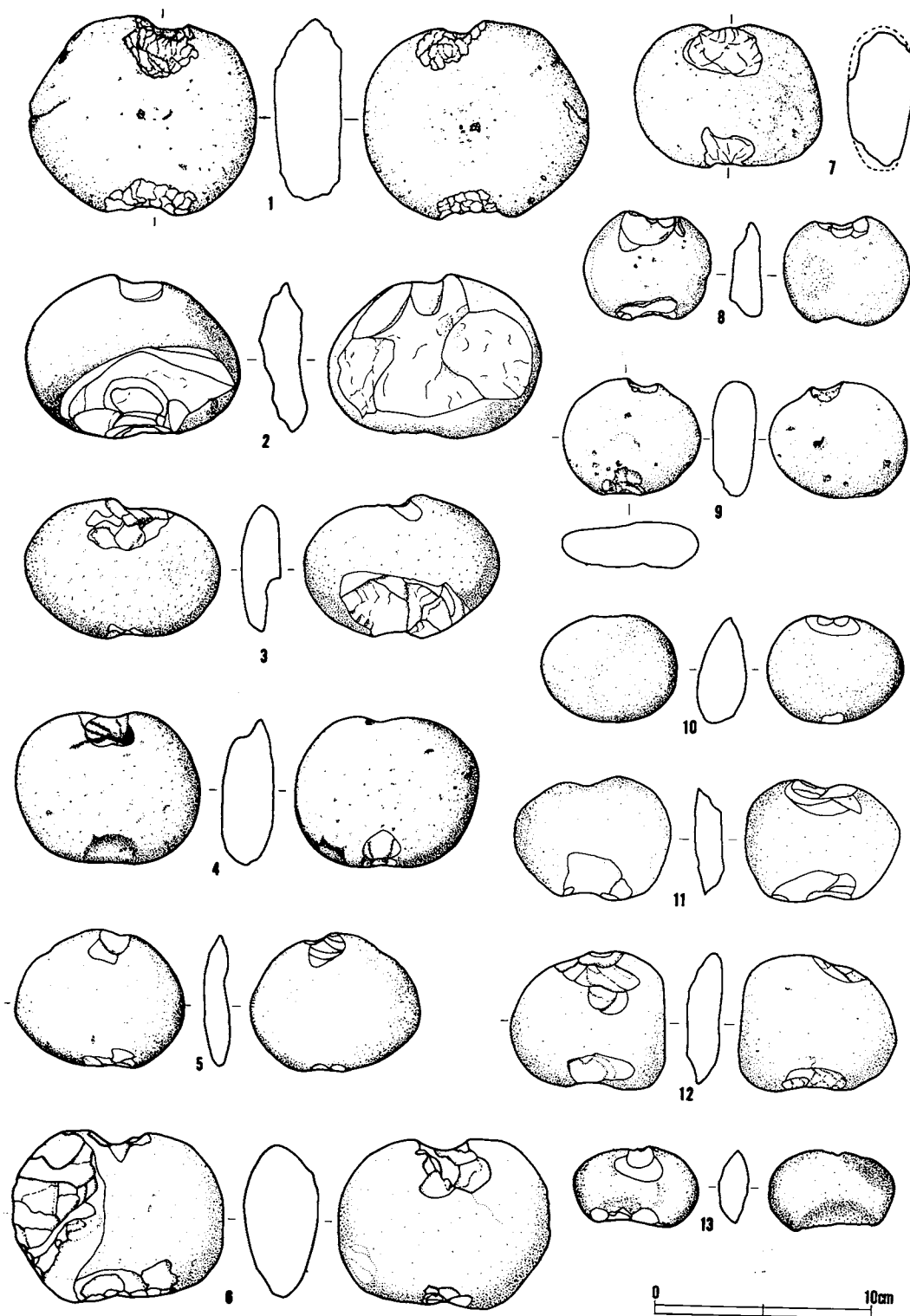


图版62 石器20

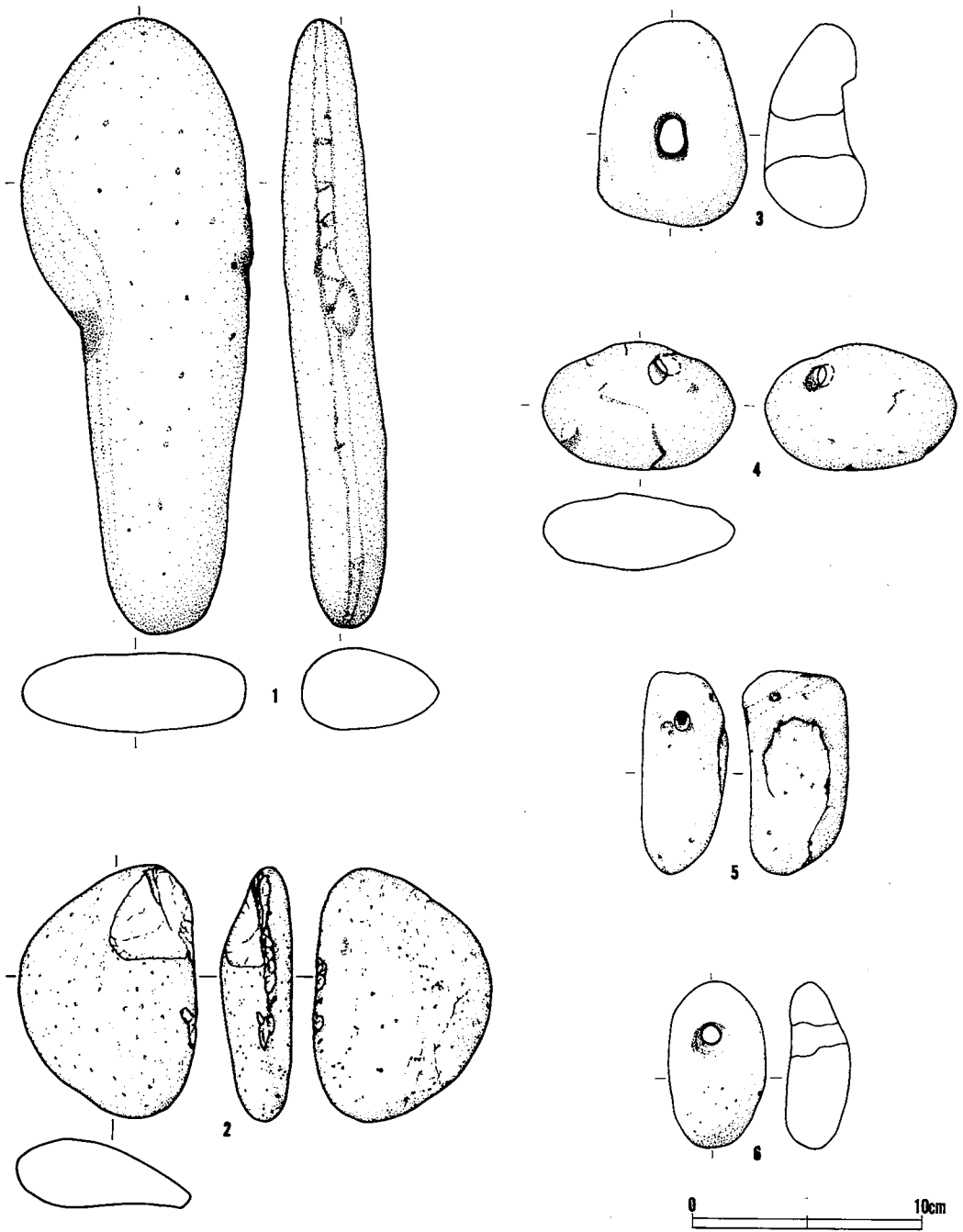


图版63 石器实测图21

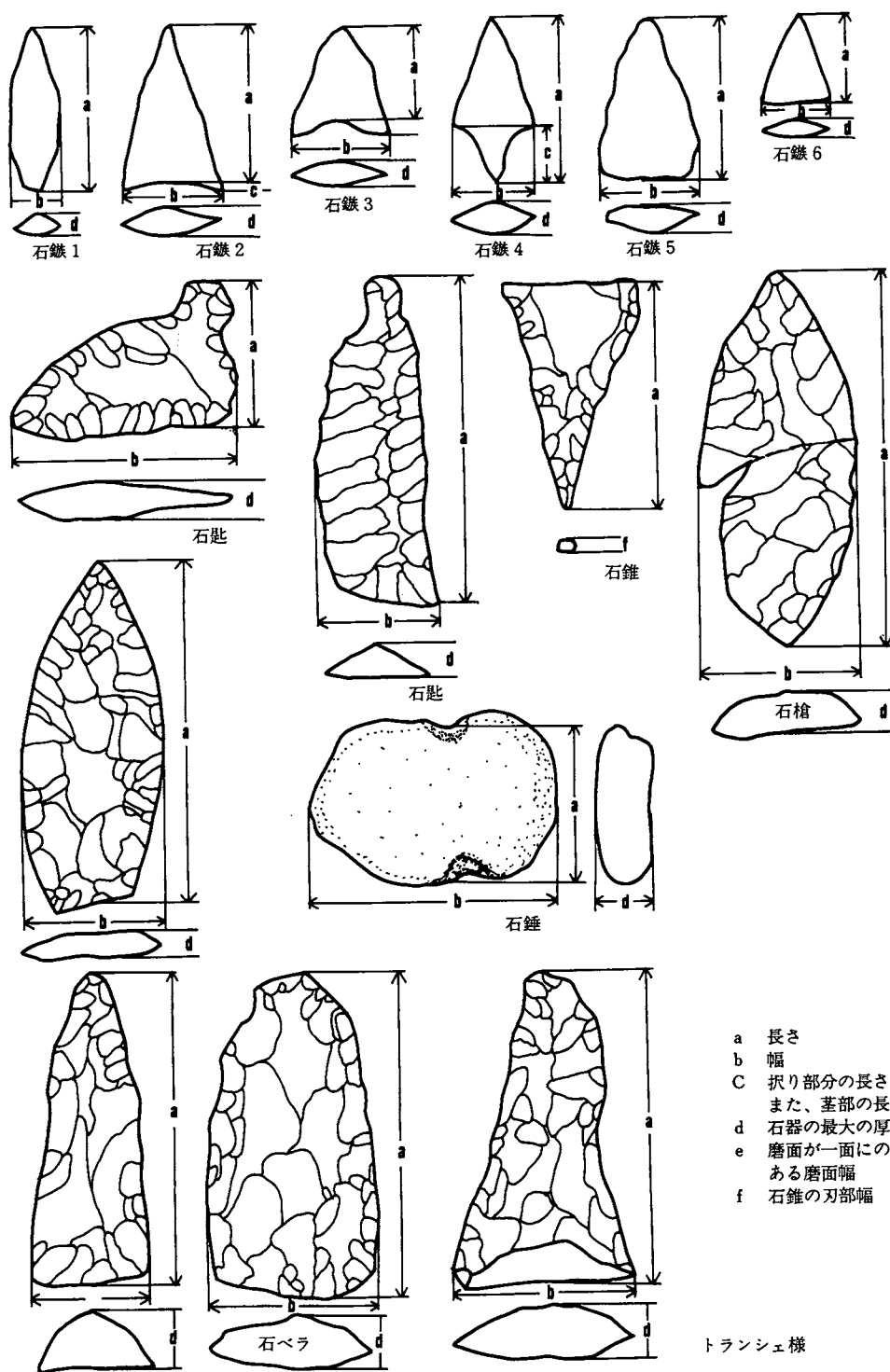




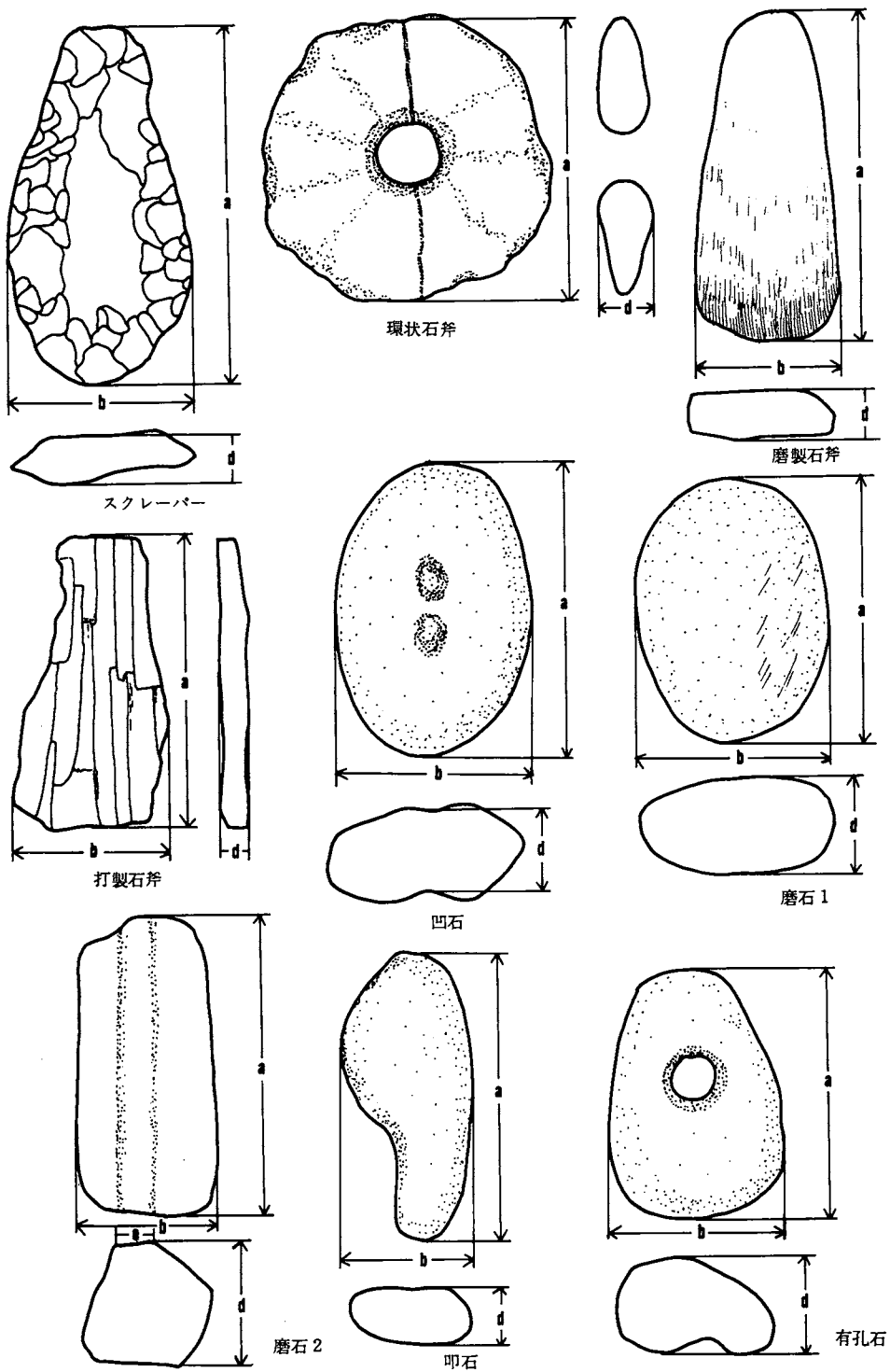
图版64 石器22



图版65 石器23



図版66 石器計測位置図1



図版67 石器計測位置図 2

図版	番号	写真図版	番号	グリット名	層位	石質計測値					石質
						a(mm)	b	c	d	重量(g)	
43	1	27	1	I-10	I	33	13		4	1.6	硬質泥岩
	2		J-13	V	34	9		4	1.85	"	
	3		3	Q-20	V	31	19	1	5	2.55	凝灰質硬質泥岩
	4		4	D-21	I	35	17		3	2.25	硬質泥岩
	5		5	Q-22	V	25	5		4	2.05	"
	6		6	76表採	I	27	12		3	1	玻質泥岩
	7		7	P-19	I	23	15		3	1.1	硬質泥岩
	8		8	R-21	V	20	7		3	1	"
	9		9	J-10	I	20	14		3	0.75	泥質硬質泥岩
	10		10	G-7	V	18	14		4	1	玻璃質流紋岩
	11		11	T-12	I	14	17		4	1	凝灰質硬質泥岩
	12		12	P-16	I	15	19		3	0.95	玻璃質流紋岩
	13		13	C-11	VI	18	13		3	0.6	"
	14		14	M-9	IV	34	7	2	4	1.6	硬質泥岩
	15		15	R-22	IV	18	2	6	4	1.3	"
	16		16	表採	I	17	16		3	0.5	"
	17		17	R-22	I	18	19	5	4	1.4	"
	18		18	L-10	VI	18	13		3	0.85	"
	19		19	J-11	V	14	16	1	4	0.85	"
	20		20	76, J-6	I	35	15	12	5	2.25	玉髓
	21		21	J-10	ビット中	34	27		6	4.85	硬質泥岩
	22		22	J-10	"	35	23		7	4.75	"
	23		23	J-10	"	32	20		5	4.25	"
	24		24	J-10	"	31	23		4	4.4	"
	25		25	C-10	VI	40	23		5	4.8	硬質泥岩
	26		26	D-12	VI	38	25		6	5.2	
	27		27	C-11	VI	33	22		6	3.95	凝灰質硬質泥岩
	28		28	J-10	ビット中	30	23		5	3.35	硬質泥岩
	29		29	C-11	I	60	25		6	6.7	"
44	1	28	30	C-11	VI	35	21		6	3.55	"
	2		31	C-12	I	38	25		6	5.7	"
	3		32	D-11	VI	42	10		7	6.2	硬質泥岩
	4		33	Q-22	I	55	20	f 3	9	12.15	珪質泥岩
	5		34	G-10	IV	28	46		7	8.2	硬質泥岩
	6		35	E-7	I	3	45		8	7.95	"
	7		36	J-10	IV	18	51		4	4.65	"
	8		37	F-12	I	44	33		7	8.45	凝灰質硬質泥岩
	9		38	Q-23	I	36	3		5	7.4	硬化泥岩
	10		39	C-10	V	34	4		5	19	"
	11		40	C-10	V	33	13		5	2	"
	12		41	C-10	V	25	16		5	2.95	"
	13		42	N-20	IV	53	19		11	10.65	珪質粘板岩
	14		43	D-9	I	58	22		5	6.2	珪質細粒凝灰岩
	15		44	C-10	V	23	11		2	0.65	凝灰質硬質泥岩
45	1	28	1	Q-21	I	76	19		7	13.25	硬質泥岩
	2		2	Q-21	IV	86	25		7	17	凝灰質硬質硬質泥岩
	3		3	表採	V	75	13		6	6.8	硬質泥岩
	4		4	J-11	V	71	14		5	6.9	"
	5		5	H-6	V	74	25		7	15.9	凝灰質硬質泥岩
	6		6	C-10	V	7	11		6	9.6	硬質泥岩
	7		7	I-11	I	71	29		8	20.8	"
	8		8	H-10	I	62	14		4	3.7	凝灰質硬質泥岩

石器計測表 8

図版版	番号	写真図版	番号	グリット名	層位	石質計測値					石質
						a(mm)	b	c	d	重量(g)	
45	9	28	9	C-12	VI	62	14		6	4.95	硬質泥岩
	10		10	J-14	I	54	14		5	4.5	"
	11		11	C-12	V	60	28		6	9.4	流紋岩質細粒凝灰岩
	12		12	E-7	I	50	19		7	10.2	硬質泥岩
	13		13	O-17	I	45	14		3	3.1	"
	14		14	I-10	VI	39	44		7	7.75	"
	15		15	D-6	I	35	26		4	6.2	"
46	1		21	C-11	VI	153	72		14	2.00	硬質泥岩
	2		31	C-11	VI	98	63		10	95	"
	3		20	C-11	VI	101	60		13	80	"
	4		26	C-11	VI	25	22		5	5.1	"
	5		27	L-8	VI	36	30		9	11.25	珪質細粒凝灰岩
	6		24	C-12	VI	69	55		23	90	凝灰質硬質泥岩
	7		19	R-21	V	113	33		8	70	流紋岩質細粒凝灰岩
	8		22	表採	I	65	28		16	56.1	硬質泥岩
	9	30	I-8	V	25	37		5	10.2	"	
	10	17	N-21	IV	80	37		11	42.1	"	
	11	18	J-10	ビット中	72	43		16	52.7	"	
	12	16	D-11	I	65	35		14	34.05	"	
	13	25	J-10	ビット中	90	54		18	100	"	
	14	29	D-11	I	46	41		11	20.35	"	
	15	28	L-10	IV	85	40		10	31.75	"	
	16	23	G-9	V	59	22		7	12.8	珪質泥岩	
47	1	29	1	H-6	I	101	39		19	110	硬質泥岩
	2		2	P-21	I	78	30		19	51.4	"
	3		3	F-11		72	36		9	28.5	硬質泥岩
	4		4	P-24		71	32		12	30.35	"
	5		5	R-20		77	48		18	51.7	珪質泥岩
	6		6	D-10	V	52	56		11	29.4	"
	7		7	D-10	I, II	69	34		17	42.6	硬質泥岩
	8		8	76, H-7	I, II	59	34		23	70	"
	9		9	C-10	V	71	16		10	25.3	珪質泥岩
	10		10	J-14	I, II	67	38		16	45.5	"
	11		11	76, H-7	V	59	31		17	46.5	硬質泥岩
	12		12	J-12	I	59	19		5	6.5	泥質硬質泥岩
	13		13	J-14	I, II	79	35		16	49.55	硬質泥岩
	14		14	J-8	V	40	45		13	27.7	"
	15		15	J-14	I, II	43	39		17	24.4	"
	16		16	76, H-6	I, II	51	38		10	15.05	"
48	1	30	17	Q-21	V	37	37		7	11.6	"
	2		18	N-20	V	59	37		8	17.5	"
	3		19	S-21	I	65	44		10	20.05	"
	4		20	I-8	V	37	41		6	15.9	"
	5		21	L-6	V	57	43		7	22.75	"
	6		22	J-10	ビット中	60	38		10	38.7	"
	7		25	P-21	I	71	41		7	23.15	"
	8		24	Q-23	V	43	25		7	6.85	"
	9		26	D-12	I	45	49		15	80	"
	10		27	D-11	IV	43	39		9	26.8	"
	11		23	R-21	V	108	90		13	70	"
	12		1	N-10	VI	98	35		15	80	"
	13		4	F-11	I	51	39		9	23.35	"

石器計測表 9

図版	番号	写真図版	番号	グリット版	層位	石質計測値				重量(g)	石質
						a(mm)	b	c	d		
48	14		5	N-21	I	77	31		12	49.05	硬質泥岩
	15		2	S-21	I	61	43		10	32.05	"
49	1	30	6	R-21	I	134	46		14	110	"
	2		7	F-11, J-11	IV	135	49		12	80	"
	3		8	I-9	V	81	15		14	26.4	"
	4		3	D-9ピット	2	70	14		10	16.15	"
	5		9	Q-21	IV	86	23		10	16.8	"
	6		10	H-6	V	78	53		19	70	"
	7		11	C-12	VI	84	35		9	22.75	流紋岩質細粒凝灰岩
	8		12	T-21	I	61	8		12	21.65	硬質泥岩
	9		14	T-21	I	88	55		15	80	"
	10		16	I-11	V	58	36		10	23.05	"
	11		17	F-8	I	50	20		10	65	凝灰質硬質泥岩
	12		13	F-6	I	51	21		15	11.4	硬質泥岩
	13		18	F-8	I	79	34		12	39.2	"
	14		15	M-7	I	100	38		26	100	"
	15		19	H-6	I	103	50		18	80	"
50	1	31	1	J-7	V	90	45		20	110	流紋岩質細粒凝灰岩
	2		10	J-10	ピット中	71	35		12	31.95	泥質硬質泥岩
	3		4	K-11	IV	86	38		16	56.7	凝灰質硬質泥岩
	4		8	J-14	V	75	37		15	55.4	硬質泥岩
	5		7	I-10	I	71	36		22	60	"
	6		3	F-11~12	I	88	42		20	65	"
	7		2	Q-19	II	77	36		13	41.25	"
	8		9	H-10	I	78	42		21	60	"
	9		15	D-10	V	50	32		15	27.8	珪質細粒凝灰岩
	10		11	P-20	IV	58	35		15	32.25	硬質泥岩
	11		5	Q-23	I	78	33		14	49.75	"
	12		6	表採	I	73	32		15	35.6	"
	13		14	N-14	I	65	38		10	43.9	"
	14		16	C-10	V	74	38		16	47.3	"
	15		13	J-14	I-II	47	36		7	21.5	珪質細粒凝灰岩
51	1	31	21	I-8	I	42	37		11	21.25	珪質泥岩
	2		26	S-13	IV	49	40		14	22	泥質凝灰岩
	3		24	E-4	I	60	35		14	34.85	硬質泥岩
	4		19	D-12	I	60	47		17	60	"
	5		23	N-14	IV	60	42		12	34	"
	6		22	D-10	I	45	38		12	23.7	"
	7		27	F-11	I	47	36		13	39.9	"
	8		18	E-12	I	65	38		15	50.35	"
	9		12	I-11	I	71	44		12	56.5	"
	10		17	E-8	I	48	36		14	28.15	"
	11		20	E-8	V	72	50		21	90	"
	12		25	表採	I	43	31		8	11.6	"
	13		1	H-6	I	63	44		17	70	"
	14		3	Q-23	I	53	43		12	37.8	泥質凝灰岩
	15		2	I-11	I	28	38		10	9.5	硬質泥岩
52	1	32	9	J-10	ピット中	70	43		11	47.3	硬質泥岩
	2		11	C-12	VI	75	31		16	48.35	"
	3		7	I-11	I	51	36		12	26.35	"
	4		12	E-8	I	79	28		14	58.05	"
	5		4	C-10	V	50	41		11	23.8	"

石器計測表 10

図版	番号	写真図版	番号	グリット名	層位	石質計測値					石質		
						a(mm)	b	c	d	重量(g)			
52	6	32	10	F-9	I	77	33		29	55.95	硬質泥岩		
	7		14	D-10	II	51	31		10	18.5	"		
	8		13	C-11	V	71	27		10	27.7	珪質細粒凝灰岩		
	9		19	P-23	I	55	45		20	52.7	硬質泥岩		
	10		6	F-8	I	65	40		18	58.95	"		
	11		8	D-9	I	52	37		18	41.25	"		
	12		5	G-7	IV	55	32		16	26.75	珪質泥岩		
	13		15	E-10	I	48	42		16	46.2	硬質泥岩		
	14		20	G-7	IV	53	36		13	31	"		
	15		17	P-21	IV	57	52		17	60	"		
	16		16	H-13	I	102	25		12	28.35	"		
	17		18	O-21	I	68	38		10	30.2	"		
	53		1	33	23	G-10	IV	105	44		20	90	"
			2		24	C-11	V	105	44		18	90	"
			3		27	C-11	V	70	51		15	45.75	"
			4		25	C-11	V	-	47		12	32.75	"
			5		22	C-11	V	79	53		15	70	"
6		26	C-11		V	79	47		19	49.2	"		
7		21	C-11		V	67	45		17	40.95	"		
8		1	E-8		I	182	69		16	300	粘板岩		
9		2	P-23, 24		I	99	42		16	90	硬質泥岩		
10		3	P-20		IV	83	34		13	47.65	"		
11		4	G-8		IV	92	46		18	70	"		
12		5	L-11		I	71	37		18	47.2	流紋岩質玻璃質凝灰岩		
13		6	H-8		IV	71	34		16	43.8	硬質泥岩		
14		7	I-6		V	58	35		12	57.45	硬質泥岩		
54	1	33	8	C-11	V	32	22		7	6	"		
	2		9	C-12	V	36	30		7	5.95	"		
	3		10	O-21	IV	33	10		5	2.85	"		
	4		11	C-11		20	18		5	4.3	珪質細粒凝灰岩		
	5		12	C-10	V	20	11		2	0.5	硬質泥岩		
	6		13	J-11	IV	43	40		12	20.6	"		
	7		14	D-12	V	-	30		7	8.15	"		
	8		15	G-7	IV	-	39		12	15.55	"		
	9		16	Q-22	I	26	27		7	4.6	"		
	10		17	S-21	I	22	27		6	3.4	"		
	11		18	P-18	I	29	26		10	7.4	"		
	12		19	N-20	I	72	25		18	32.1	珪質泥岩		
	13		20	J-12	I	31	29		10	4.45	硬質泥岩		
	14		21	-	I	30	29		10	10.15	"		
	15		22	C-10	V	13	36		3	1.7	"		
	16		23	C-12	VI	25	28		6	5.7	"		
	17		24	C-12	I	36	21		6	6	"		
	18		25	G-11	V	49	32		9	14	"		
	19		26	P-24	IV	51	17		9	8.2	"		
55	1	34	3	D-11・E-11接合	I	105	107		14	240	中粒砂岩		
	2		2	J-10	V	108	56		15	115	淡緑色角礫質凝灰岩		
	3		5	F-8	I	133	66		24	310	緑色砂質凝灰岩		
	4		1	G-9	II	58	98		16	110	角閃石安山岩		
	5		4	I-9	V	51	73		17	70	緑色砂質凝灰岩		
	6		6	L-10	V	138	71		24	320	"		
	7		7	E-8	I	-	43		27	180	淡緑色石質凝灰岩		

石器計測表 11



図版	番号	写真図版	番号	グリット名	層位	石質計測値					石質
						a(mm)	b	e	d	重量(g)	
55	8	34	8	76, G-6	I	87	42		18	120	凝灰質粘板岩
	9		9	I-8	IV	—	48		23	140	角閃石安山岩
	10		10	表採	I	140	49		30	370	珪質輝綠凝灰岩
	11		12	C-10	V	43	15		8	102	粘板岩
56	1	35	11	D-11G-6, 10	I	186	58		28	390	粗粒石武岩
	2		13	D-11	VI	86	38		20	120	緑色砂質凝灰岩
	3		1	M-11	VI	87	89		46	380	両輝石安山岩熔岩
	4		2	76, N-7	I	88	65		48	400	両輝石安山岩
	5		3	K-8	V	101	61		40	225	両輝石安山岩熔岩
	6		4	76, HY	I	93	71		29	220	両輝石安山岩
	7		5	76, G-6	I	110	85		67	860	"
	8		6	D-9	VI	90	79		60	560	石英安山岩
	9		7	E-9	V	93	86		65	740	両輝石安山岩
57	1	35	8	J-7	I	127	78		34	440	両輝石安山岩
	2		9	P-24	IV	149	47		34	285	石質細粒凝灰岩
	3		10	C-10	V	87	60		30	245	両輝石安山岩
	4		11	D-10プラスチックビット	I	144	50		28	310	淡緑色角礫質凝灰岩
	5		12	C-10	V	100	71		50	575	両輝石安山岩
	6		13	76, H-6	I	101	86		56	745	"
	7		14	D-10	V	102	75		70	750	角閃石玲岩
	8		15	R-20	V	86	96		50	530	両輝石安山岩
58	1	35	17	G-9	V	101	53	6	42	340	"
	2		18		I	107	77	11	48	665	"
	3		19	G-9	V	151	73	6	46	710	"
	4		16	J-8	V	160	68	16	56	115.5	"
	5		20	K-13	I	—	60	17	43	355	両輝石安山岩
	6		27	H-9	V	—	71	6	40	425	"
	7		21	D-10	V	96	81	10	54	585	石英安山岩
	8		22	L-9	VI	150	79	14	38	700	角閃石玲岩
	9		30	-11	V	—	39	6	33	280	"
	10		29	D-11	VI	—	57	15	50	435	両輝石安山岩
59	1	36	24	S-21	I	195	80	16	45	1,295	緑色砂質凝灰岩
	2		25	K-10	IV	168	91	12	63	1,250	両輝石安山岩
	3		23	I-9	IV	162	50	6	48	810	流紋岩質凝灰岩
	4		26	Q-23	I	158	54	9	54	885	"
	5		28	J-9	I	38	75		47	820	両輝石安山岩
	6		1	P-23	I	49	55		18	57.5	硬質泥岩
	7		2	R-20	V	43	59		17	58.25	淡緑色角礫質凝灰岩
	8		3	S-21	I	48	49		16	59.9	凝灰岩
	9		4	C-12	V	40	67		15	75	濃緑色凝灰岩
	10		5	F-12	I	27	45		7	10.85	硬質泥岩
	11		6	F-11	I	29	49		11	26.2	濃緑色凝灰岩
	12		7	76, HY	I	36	41		12	25.2	凝灰岩
	13		8	F-5	I	35	43		16	37.65	濃緑色凝灰岩
	14		9	Q-19	I	44	55		17	60	緑色砂質凝灰岩
60	1	36	10	S-21	I	50	68		19	85	凝灰岩
	2		11	Q-20	I	56	53		18	95	濃緑色、凝灰岩
	3		12	Q-21	I	62	65		15	70	石英安山岩質凝灰岩
	4		13	P-20	I	44	56		10	40.15	淡緑色流紋岩質凝灰岩
	5		14	S-21	I	44	55		16	65	両輝石安山岩
	6		15	Q-19	I	46	56		19	65	緑色砂質凝灰岩
	7		16	J-10	I	48	56		18	70	両輝石安山岩

石器計測表12

図版	番号	写真図版	番号	グリット名	層位	石質計測値					石質
						a(mm)	b	c	d	重量(g)	
60	8		17	Q-21	IV	51	56		23	85	淡緑色角礫質凝灰岩
	9		18	S-21	I	53	61		17	85	硬質泥岩
	10		19	N-17	I	51	60		16	70	石英安山岩質凝灰岩
	11		20	Q-22	I	49	63		18	65	両輝石安山岩
	12		21	Q-20	I	48	59		17	55	緑色砂質凝灰岩
	13		22	R-19	IV	54	65		12	49.6	硬質泥岩
	14		23	Q-20	I	37	70		17	49.45	"
	15		24	Q-21	I	48	62		24	80	凝灰岩
	16		25	R-20	V	49	63		17	60	"
61	1	36	26	P-22	I	53	59		23	70	濃緑色凝灰岩
	2		27	R-20	V	50	65		15	75	"
	3		28	P-22	I	56	68		21	95	凝灰岩
	4		29	S-21	I	55	68		17	100	硬質泥岩
	5		30	S-21	I	65	69		12	49.1	凝灰岩
	6		31	S-21	I	80	90		21	220	濃緑色凝灰岩
	7		32	C-12	I	64	76		17	85	淡緑色流紋岩質凝灰岩
	8		33	Q-21	IV	52	60		13	60	凝灰岩
	9		34	R-19	IV	58	64		19	90	"
	10		35	Q-22	I	57	61		14	70	"
	11		36	Q-20	I	55	63		23	110	"
	12		37	Q-21	I	53	74		12	65	硬質泥岩
	13		38	R-21	I	65	68		14	90	両輝石安山岩
	14		39	Q-23	I	61	62		16	95	"
62	1		40	S-21	I	59	73		11	70	凝灰岩
	2		41	O-20	I	66	77		24	160	濃緑色凝灰岩
	3		42	表採	I	66	73		26	160	両輝石安山岩熔岩
	4		43	R-21	IV	52	70		15	80	濃緑色凝灰岩
	5		44	N-16	I	45	71		14	65	"
	6		45	Q-23	I	62	73		23	165	緑色砂質凝灰岩
	7		1	Q-20	I	55	78		19	135	凝灰岩
	8		2	S-21	I	55	70		22	130	濃緑色凝灰岩
	9		3	R-20	V	53	69		14	70	"
	10		4	表採	I	42	69		24	120	両輝石安山岩
	11		5	Q-22	I	53	67		26	130	"
	12		6	Q-22	I	55	82		9	80	流紋岩質凝灰岩
	13		7	Q-21	I	59	67		15	90	凝灰岩
	14		8	R-21	I	50	79		13	80	"
64	1	37	9	S-23	I	89	104		29	445	輝石安山岩
	2		10	F-11, 12	I	74	98		20	200	凝灰岩
	3		11	R-20	I	64	89		21	155	輝石安山岩
	4		12	R-22	IV	64	82		24	190	両輝石安山岩
	5		13	R-20	I	62	78		12	80	凝灰岩
	6		14	E-12	I	77	98		27	240	流紋岩質凝灰岩
	7		15	C-10	V	61	85		30	250	濃緑色凝灰岩
	8		16	Q-21	I	49	56		15	54.25	凝灰岩
	9		17	S-21	I	50	62		22	95	両輝石安山岩
	10		18	σ-20	IV	48	62		21	95	"
	11		19	P-22	I	56	71		13	65	凝灰岩
	12		20	S-21	I	59	71		15	90	硬質泥岩
	13		21	Q-21	I	32	56		13	26.7	凝灰岩
65	1		22	E-4	I	97	270		38	1,220	輝石安山岩
	2		23	G-9	V	77	109		31	280	流紋岩質凝灰岩

石器計測表 13

図版	番号	写真図版	番号	グリット名	層位	石質計測値				石質	
						a(mm)	b	c	d		重量(g)
65	3	37	24	C-12住	No.7	85	63		42	260	石質細粒凝灰岩
	4		26	S-21	I	83	55		36	155	"
	5		27	S-21	I	88	44		37	200	硬質泥岩
	6		25	S-21	I	70	40		27	95	淡緑色石質凝灰岩
63	1	38	1	C-10	V	97	127		19	350	凝灰岩
	2		10	86P-22	I	125	133		32	690	濃緑色凝灰岩
	3		4	P-23	IV	114	127		18	360	両輝石安山岩
	4		5	T-20	I	108	125		29	680	"
	5		11	C-10	V	147	20.16		30	1,265	濃緑色凝灰岩
	6		3	D-10	V	70	106		34	310	"
	7		6	R-20	I	91	116		21	305	"
	8		7	P-23, 24	盛土	103	115		27	460	両輝石安山岩
	9		2	I-6	V	88	117		39	660	"
	10		8	R-22	IV	93	121		33	520	"
	11		9	Q-19	II	79	117		29	410	緑色砂質凝灰岩

石器計測表 14

## V章 J-10ピット出土剥片接合資料

本項で扱っているものは、J-10ピット内に出土した剥片 877片の内 307片が接合した、接合資料29個である。これら接合資料は縄文時代の石器製作技法の一例となり得るものと思われるので、本項でまとめて記載する。なお接合資料1～29に接合した剥片 307片以外の剥片も、いずれ接合できるであろうと思われるが、時間的制約がありすべてに検討を加えられなかったものである。接合資料1～29は、原石別の個体として現在扱っているが、将来的に同一個体となる可能性があるものもある。J-10ピットより出土した剥片の石材は泥岩系のものと、凝灰岩系のものがあるが、剥片のほとんどは泥岩系のものであり、接合資料1～29は珪質泥岩、硬質泥岩、凝灰質泥岩のものである。接合資料1～29の剥片剥離技法は単純なもので、作業としては、原石の自然面を打面として自然面に直接打撃を加えて剥片を剥離するものであり、打面作出のための調整はほとんど行われないものである。打撃は原石の比較的平坦な面を選び一面にのみ加えられるものと2面、3面に及ぶものがある。打撃が一面にだけあるものは剥片が比較的縦長のものが多いが、剥離角はしだいに鋭角になる様相を呈しているもので、剥片の末端部は一点に集中するような傾向を呈している。打撃が2面、3面、4面に及ぶものは、剥離角がしだいに鈍角になり、120度～130度頃に打面を転移するものと、最初の打撃よりも剥離角が鋭角になり、110度前後に打面を転移するものがある。これらのことから言えることは、いずれも石核として残っている面（背面）の状態により2面、3面に打面を転移していることがうかがえるものであり、このような作業によって得られた剥片の末端は原石の中心近くに集中するものと、打面の反対側の面まで末端が及んでいるものがある。これらの剥片は、末端が原石の中心近くにあるものは、末端がヒンジで終るものが多い。また打面がA面、B面、A面のようにすぐに元の打面に戻るものは背面の整形のための打撃ともうけとられるものである。以上のような作業から得られている剥片には、形、大きさ、厚さとも一定の状態を呈するものはないが、打面が一面にあるものは縦長の剥片を多く得ているものであり、2面、3面、4面に打面が転移しているものは、縦長の剥片、横長の剥片を得ているが末端がヒンジで終るものが多い。また接合資料29には、剥片の横方向からの打撃を加えて石器を作る工程が入っているものである。なおこれらピット中から出土した剥片の中には剥片に二次加工を加えている剥片も数点存在する。

### 剥片の計測方法

- 1、剥片の長さは a-b 間を測った。
- 2、剥片の打面軸長として c-d 間を測った。
- 3、剥片の最大幅は e-f 間を測った。
- 4、打面幅は g-h 間を測った。

5、打面厚は  $i-j$  間を計測した。 6、角度は、打面と打点、バルブを結んだ角度  $\theta_1$  と、打面と打点、剥片の末端を結んだ角度を  $\theta_2$  として計測した。 7、剥片の最大厚は  $k-l$  間を計測した。

### 表の見方

剥片No.は、①、②……で示した。(現存する剥片)

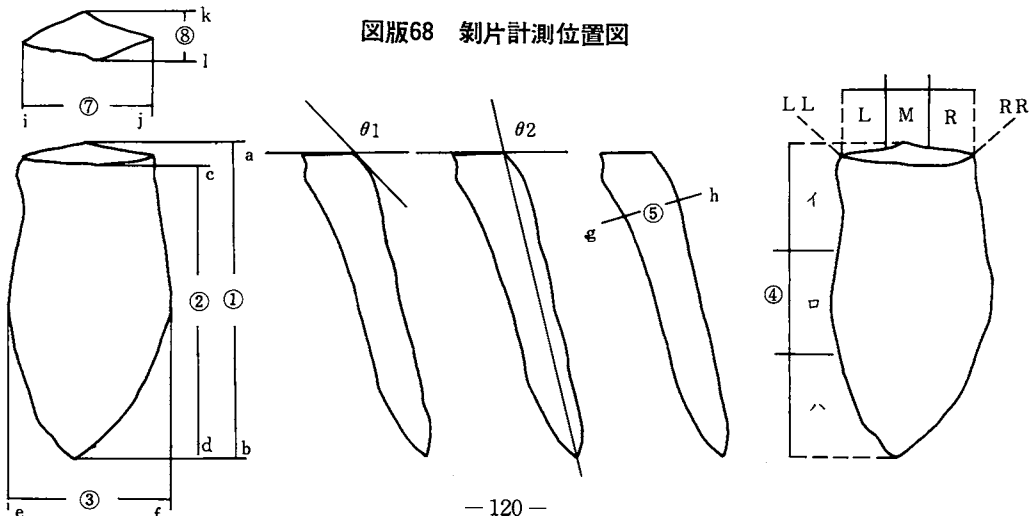
剥片の面の構成は、現存する接合状態のものから背面の構成の面の切り合い関係をもとに、1.2.3.4.5.……で示した。(すなわち剥片の存在しない部分もあり、絶対のものではない)

表には、現存する背面の構成より、○印を剥片の背面の構成とし、●印を現存する剥片の腹面の構成としてある。

剥片の計測値は①を  $a-b$  間の計測値、②を  $c-d$  間の計測値、③を  $e-f$  間の計測値、④を最大幅の位置。(剥片を三等分し、イ、ロ、ハ、で示した、図版を参照)。⑤を  $g-h$  間の計測値、⑥を最大厚の位置(④と同じ方法)⑦を  $i-j$  間の計測値、⑧を  $k-l$  間の計測値、角度  $\theta_1$ 、 $\theta_2$ 、(図版を参照)。打点の位置は、打面を三等分し、L、M、Rで示し、打面の末端にあるものは、LL、RRで示した。末端の形状はフェはフェザー、スはステップ、ヒはヒンジをそれぞれ示す。打面の位置は、接合状態の原石面にそれぞれA、B、C、D、E、Fの名称を与えた。自然面は打は打面、側は側面、正は正面、末は末端にそれぞれ自然面があることを示す。一は計測不能を示す。( )は折れていて正確なものとは得られないが、現存する剥片から推定した計測値である。

### 図の見方

計測表と背面の構成、打面の位置はすべて対応させてある。すなわち打面上の●印は現存する剥片の打点の位置、○印はない剥片の打点の位置(不明なものもある。) ①は剥片番号、1、2、3、は背面の構成を示し、→印は作業の順序を示す。➡は、加撃の方向を示す。写真の剥片は剥離された順序に載せてある。



**接合資料1**（附図1・写真図版40、41）

接合した剥片は13片である。原石は幅  $8 + \alpha$  cm、高さ 6.5cm、長さ  $7 + \alpha$  cmの大ききで六面を有する立方体状を呈すると思われる。作業は自然面を打面とするもので、最初の打撃から2番目の打撃までは原石の形を整えるための作業と思われる打撃をC面、D面に加えている。その後A面を打面として打点3以降、後方に打点の移動を繰り返して剥片剥離をしているものである。剥片は一定の長さには厚みを持つが、幅は一定ではなく、剥片⑦では折れ、剥片⑧にはヒンジが入っている。剥片⑫の末端部には細部加工を施した痕がある。以下表を参照されたい。

接合資料1		凝 灰 質 硬 質 泥 岩																							
		現 在 す る 剥 片 の 背 面 お よ び 腹 面 の 構 成																							
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
			C	D	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
①	打、正、末	A	○		○	●																			
②	打	A	○	○	○	○	●																		
③	打、側	A	○			○	○	●																	
④	打、側	A						○	●																
⑤	打	A	○						○	○	○	●													
⑥	打	A	○						○	○		○	○	●											
⑦	打	A							○	○				○	○	○	●								
⑧	打	A			○			○	○			○		○		○	●								
⑨	打、側、末	A	○								○	○	○	○		○	○	●							
⑩	打	A													○	○	○	○	○	●					
⑪	打、側	A																○	○	○	○	○	○	○	○
⑫	打	A																○	○	○	○	○	○	○	○
⑬	打、側	A																				○	○	○	○

剥 片 計 測 値													
剥片	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の位置	末端の形状	備 考
	(mm)	(mm)	(mm)		(mm)		(mm)	(mm)	$\theta 1$	$\theta 2$			
①	62	40	47	ロ	11	ハ	23	5	116	119	M	ヒ	
②	53	40	49	ハ	11	イ	27	10	118	110	R	フェ	側面に2次加工有り
③	65	48	61	ロ	12	イ	42	13	122	110	R	フェ	側面に2次加工有り
④	61	58	37	イ	15	イ	25	8	118	112	R	フェ	
⑤	63	54	32	ロ	10	イ	27	11	100	99	M	フェ	
⑥	52	44	37	ロ	8	イ	27	9	116	109	M	フェ	
⑦	47	44	21	ロ	5	イ	16	6	107	104	RR	フェ	
⑧	51	48	32	ロ	5	イ	19	5	107	109	M	ヒ	
⑨	68	63	53	イ	11	ハ	34	9	115	107	M	ヒ	
⑩	60	56	30	ロ	10	イ	27	10	116	105	M	フェ	
⑪	35	33	35	イ	11	イ	35	11	120	89	M	ヒ	
⑫	50	45	32	ハ	16	イ	32	6	126	114	—	フェ	末端に2次加工有り
⑬	55	52	39	ロ	11	イ	39	7	116	106	—	ヒ	

表15

**接合資料2**（附図1・写真図版42、43）

接合した剥片は15片である。原石はA面幅 7.5cm、C面幅 6.2cm、高さ 7 cm、長さ  $10 + \alpha$  cmの大ききで上面形が長方形、側面形が三角形状、正面形が正方形を呈するものである。作業は自然面を打面とするもので、平打であるがカーブしているA面を打面として打撃1から後方にジグザグに打点の移動を繰り返しながら剥片剥離をしているものである。剥片は一定の長さ、形状のものではなく、剥片⑤は中程より折れ、剥片⑦でステップを起した面を取り除くべく剥片⑧⑨が剥離されるが、剥片⑪で僅かに残り、それを取り除くべく側方より打撃を加えて取り除

いている。以下表を参照されたい。

接合資料 2		珪 質 泥 岩																							
		現 存 す る 剥 片 の 背 面 お よ び 腹 面 の 構 成																							
剥方	自然面																								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
①	打、側	A	○	●																					
②	打、側	A	○	○	●																				
③	打、側	A	○		○	○	○	●																	
④	打、正、側	A	○		○			○	○	○	●														
⑤	打	A						○	○		○	○	●												
⑥	打、側、未	A						○					○	●											
⑦	打、側	A											○	○	●										
⑧	打、側	A										○		○	○	○	●								
⑨	打、側、未	A											○	○		○	○	●							
⑩	打、側、未	A																○	○	●					
⑪	側、未	A																○	○	○	●				
⑫	打、側	A																	○	○	○	●			
⑬	打、正、側	A																		○	○	○	●		
⑭	打、側	A																			○	○	○	●	
⑮	側	—																				○	○	○	●

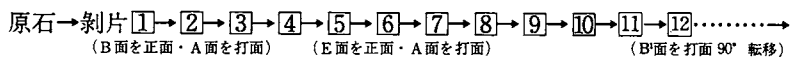
  

剥片	剥 片 計 測 値								角 度 θ 1	角 度 θ 2	打点の 位 置	末端の 形 状	備 考	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧						
	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)						
①	51	(48)	—	ロ	9	イ	28	13.5	127	109	L	フェ	打点から2つ割れ	
②	62.5	61	53	ロ	8	イ	40	11.5	110	99	M	フェ		
③	71	67	40	ロ	11	イ	35	12.5	123	111	M	フェ	この剥片がとれる前に3回の打撃あり	
④	62	59	42	ハ	15	イ	38	16	94	100	RR	フェ	この剥片がとれる前に2回の打撃あり	
⑤	57	56	24.5	ロ	4.5	イ	19.5	2.5	113	110	M	—	三ツ折	
⑥	75	70	40.5	ロ	8	ロ	29.5	7	123	101	M	フェ	この剥片がとれる前に1回の打撃あり	
⑦	36	34	31.5	—	13	イ	23	10	122.5	101	L	ス		
⑧	56	53	53	ロ	12.5	イ	39	17	108	102	M	ヒ	僅かにヒンジ	
⑨	80	78	67	ロ	14	イ	36.5	13.5	118	103.5	RR	フェ	側方より打撃 1回の打撃あり	
⑩	76	71	44	ロ	10	イ	41	11.5	121	98	M	フェ		
⑪	—	—	—	ハ	—	—	—	—	—	—	—	フェ	打点不明	
⑫	36	33	49	—	10	イ	41.5	10.5	116	110	M	ス		
⑬	57	56	—	ハ	10	イ	28	13	103	98	M	ヒ		
⑭	50	48	34	ロ	9	イ	17	12	110	105	M	ヒ		
⑮	—	—	—	—	ユ	—	—	—	—	—	—	—	—	打、中央、末端折れ

表16

接合資料 3 (附図 4・写真図版44、45)

接合した剥片は12片である。原石は幅 $12.5 + \alpha$  cm、高さ 8 cm、長さ  $8 + \alpha$  cmの大きさでおそらく六面を有する立方体状を呈すると思われる。作業は自然面を打面とするもので、A面で打撃1より打撃13までをB面を正面に向けた状態で剥片を剥離した後、打面を変えずに90度正面をE面に移行して打撃15から打撃27まで剥片を剥離した後90度打面をB'面(剥片1、2を剥離した面)に変えて打撃28から以降を行っている。剥片はいずれも厚手で打面部に比して末端が広くて厚い剥片である。以下表を参照されたい。



接合資料 3			硬質泥岩																																				
			現存する剥片の背面および腹面の構成																																				
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35		
			A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	B	B	A	
①	打、側	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②	側	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	打、正	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	打、側、末	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	打、側、末	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧	打、側、末	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑨	打、側、末	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑪	側	B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑫	側	B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表17

接合資料 4 (附図 4・写真図版46、47)

接合した剥片は10片である。原石は幅14.5+α cm、高さ10.8cm、長さ 7.5+α cmの大きさで原石の中程の接合資料であり詳しくはわからないが楕円形状を呈すると思われる。作業は自然面を打面としてA面にのみ打撃を加えて剥片を剥離しているようである。剥片はいずれも縦長の剥片が得られ、末端は薄く細くなるものが得られている。以下表を参照されたい。

接合資料 4			硬質泥岩(硅化している)																																			
			現存する剥片の背面および腹面の構成																																			
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29							
			A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A						
①	打、正	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧	打、側	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑨	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表18



接合資料5 (附図5・写真図版48)

接合した剥片は7片である。原石は幅 $13+\alpha$  cm、高さ  $9.7+\alpha$  cmの大ききで原石の表面の一部であろう。作業は自然面を打面とするもので、原石の下方C面より打撃1で2個の石塊 (A石塊・B石塊) に荒割し、その後各石塊のA面に打撃を加えて剥片を剥離しているものである。(模式図化すると以下ようになる)。

原石→打撃1 (C面より) → A石塊→剥片①→剥片②→剥片③→剥片④……  
A面を打面とする  
 B石塊→剥片⑤→剥片⑥→剥片⑦

⑥・⑦の間に1回の打撃によって剥片を剥離している

得られた剥片はA石塊では縦長の剥片が得られ、剥片①は打点部より折れ、末端はさらに横方向より加撃が加えられている。剥片④は中程より折れている。B石塊ではA石塊より短い剥片が得られ、剥片⑤には側方の両面に合計3回の二次加工がみられる。以下表を参照されたい。

接合資料5			硬質泥岩										
			現存する剥片の背面および腹面の構成										
剥片	自然面	打面	C	A	A	A	A	B	A	A	A	備考	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9		
①	打側	A	○	●								1の打撃はC面より打撃。2つの隙を作る	
②	打側	A		○	●								
③	打側	A		○	○	●							
④	打側	A				○	●						
⑤	打	B	○					●					
⑥	打	A	○					○	●				
⑦	打	A	○					○	○	○	●		

剥片	剥片計測値								角 度 θ1 θ2	打点の 位置	末端の 形状	備考	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧					
	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)					
A①	87.5	—	50.0	□	19.0	—	—	—	—	102	—	—	末端折れ、E面を正面とする
②	87.5	88.5	49.0	□	18.0	□	38.0	12.5	108	78	—	フェ	
③	98.5	96.5	57.5	□	10.0	□	27.0	9.0	116	98	—	—	末端折れ
④	98.5	—	50.5	—	15.0	□	22.0	11.0	120	—	M	—	中央部より折れ
B⑤	66.0	60.0	75.0	□	19.0	□	49.0	18.0	116	127	M		F面を正面とする。剥片剥離の打撃あり
⑥	76.0	60.0	70.0	イ	14.0	□	35.0	15.0	114	105	M		〃
⑦	87.5	65.0	65.0	□	19.0	□	14.0	2.0	114	102	M		〃

表19

接合資料6 (附図5・写真図版49、50)

接合した剥片は16片である。原石は幅 $15+\alpha$  cm、高さ10cm、長さ $8+\alpha$  cmの大ききで、楕円形状かと思われる。作業はほぼ平坦な自然面のA面を打面とし打撃を加えているもので、最初の打撃をA面の端部に打撃し以後後方に打点の移動を繰り返しながら剥片剥離を行うものである。剥片の形状は薄身の縦長のもので、剥片の最大幅は剥片の中頃にあり、剥片①だけが打点部より末端にかけて割れている。細部加工はみられない。以下表を参照されたい。

接合資料 6		硬質泥岩																																																				
		現存する剥片の背面および腹面の構成																																																				
剥片	自然面	打																																																				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41												
1	打、側	A	○	○	○	○	●																																															
2	打	A			○	○	○	●																																														
3	打	A			○		○	○	●																																													
4	打、側	A								○																																												
5	打、末	A									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
6	打	A									○																																											
7	打	A																																																				
8	打	A																																																				
9	打	A																																																				
10	打、側、末	A																																																				
11	打、末	A																																																				
12	打	A																																																				
13	打、末	A																																																				
14	打、末	A																																																				
15	打	A																																																				
16	打、末	A																																																				

剥片計測値													
剥片	① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点の 位置	末端の 形状	備 考
									θ 1	θ 2			
1	100	109	71	□	145	イ	38	15	112	99	M	フェ	
2	50	52	33	□	12	イ	21	12	112	93	M	フェ	
3	62	52	44	イ	17	イ	44	23	121	123	L	フェ	
4	93	95	48	□	12	イ	34	11	85	80	M	フェ	
5	73	57	55	イ	19	□	45	16	116	117	R	フェ	
6	80	52	65	□	16	イ	26	18	108	96	M	フェ	
7	63	45	58	ハ	13	イ	31	16	119	121	M	フェ	
8	97	91	65	□	13	イ	32	12	112	115	M	フェ	
9	59	63	52	□	15	イ	27	11	118	117	R	フェ	
10	58	54	34	イ	10	イ	33	6	106	108	M	フェ	
11	62	53	29	□	11	イ	20	8	110	107	R	フェ	打点部より2つ割れ
12	73	60	62	□	17	イ	38	19	115	88	M	フェ	
13	86	76	70	□	13	イ	35	11	101	102	M	フェ	
14	85	77	73	イ	13	イ	35	12	88	99	R	フェ	
15	85	81	73	□	14	イ	36	12	115	99	R	フェ	
16	98	92	52	□	13	□	29	12	120	109	M	ヒ	

表20

接合資料7 (附図2・写真図版51、52)

接合した剥片は18片である。この資料は原石の中程のもので、幅14cm、高さ10.5cm、長さ9 + α cmの大きさで、正面形が精円形のものである。作業は自然面に打撃して剥片を得るもので打面はA面、B面、C面、D面と各面に及んでいる。このような打面の移動を繰り返して、得られた剥片は不規則なものであり、折れているもの、ヒンジを起しているものなどさまざまである。なお図中では剥片13の後に剥片14が剥離された状態になっているが、剥片13の剥片は剥片14が剥離された後に剥片14から剥離されたものである。以下表を参照されたい。

接合資料 7		珪 質 泥 岩																																																			
		現 存 す る 剥 片 の 背 面 お よ び 腹 面 の 構 成																																																			
剥片	自然面	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42																																																			
		打面	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	B	A	B	B	B	B	B	C	C	C	A	A	A	A	A	C	C	A	C	A	C	A	B	A	C	A	C	B	B	C											
①	打、面	B	○	○	○	●																																															
②	打	B				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
③	打、側	B		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
④	打、側	A						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
⑤	打、側	B			○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
⑥	打	B					○																																														
⑦	打	B																																																			
⑧	打	B																																																			
⑨	打、側	C																																																			
⑩	打	A																																																			
⑪	打、側	A																																																			
⑫	打、側	A																																																			
⑬	打、側	A																																																			
⑭	打、側	A																																																			
⑮	打、側	A																																																			
⑯	打、側	C																																																			
⑰	打、側	A																																																			
⑱	打	C																																																			

剥片	剥 片 計 測 値								角 度 θ 1 θ 2	打点の 位 置	末端の 形 状	備 考	
	① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)					
①	58	57	68	□	12	イ	29.5	9	117	79	M	ヒ	
②	43	41.5	72	□	18	□	31.5	13.5	116.5	94.5	L	ヒ	
③	74	72	69.5	□	11.5	ハ	30	14	113	102.5	R	ヒ	9は打面形成?
④	67.5	67	45	□	10	ハ	—	4	—	—	M	フェ	打面部より欠損、折れ
⑤	54.5	53	47	□	8.5	□	36	9.5	121.5	110	M	ヒ	
⑥	45.5	41.5	38	イ	13.5	イ	38	18	114	90	M	ヒ	
⑦	64.5	63	30	イ	10	イ	16	6	101	92.5	M	フェ	
⑧	50	46	66	イ	11	□	42	9	126.5	101.5	M	ヒ	
⑨	95.5	90	67	□	13.5	イ	28	15	126.5	102.5	R	フェ	
⑩	58.5	57	60	イ	9	イ	14	12.5	117	115.5	M	—	末端折れ(一部分)
⑪	74	72.5	50	□	9	□	12.5	5	108	109	M	フェ	
⑫	51	50	42	□	6.5	イ	10.5	9.5	99.5	98	R	—	末端、中央部などより4つ折れ
⑬	40	39	41	ハ	6	□	8.5	3	105.5	119	M	—	打点部より2つ割れ⑬の剥片より剝離されたもの
⑭	51	48	49	□	13.5	□	11	5	116.5	73	M	ヒ	
⑮	68	65	50.5	□	10	□	34	10	111	103	M	フェ	
⑯	54	53.5	76	□	9.5	ハ	18.5	4	105.5	94	M	ヒ	
⑰	73	69	91	ハ	18	□	41	12	118	115	M	ヒ	
⑱	69.5	68	76.5	ハ	14	□	40	12	121	100	M	フェ	

表21

接合資料8 (附図3・写真図版53、54)

接合した剥片は12片である。原石は幅7.7cm、高さ10cm、長さ7+αcmの大きさで、正面形が方形状を呈する。作業は自然面を打面とし、打面は平坦な面を有するA面とB面にある。すなわち、打撃は接合した資料より見れば打面をB面、A面、B面、A面、B面、A面と打面を転移して行っており、それぞれ1回の打面で1回から数回の打撃を行なって剥片を剝離している。またこれら一連の作業によって得られた剥片の末端は打面A面からの打撃によって得られる剥片はヒンジ、フェザーのものであるが、打面B面からの打撃によって得られる剥片は、剥片②でヒンジのものがある以外、すべてフェザーとなっているところに特徴がある。これらの作業によって得られた剥片は、一定の形、大きさとはなっていないが、ほぼ一定した厚みとなっている。以下表を参照されたい。

接合資料 8		硬質泥岩(硅化している)																											
		現存する剥片の背面および腹面の構成																											
剥片	自然面	打面																											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	
		B	A	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A
①	打	A	○	○		○	●																						
②	打、側	B						○	○	●																			
③	打	B	○		○	○			○	○	○		●																
④	打、側、末	B		○			○	○	○			○	○	●															
⑤	打	B				○	○	○	○		○		○	●															
⑥	打、側	B											○	○	○	●													
⑦	打、末	B					○						○	○		○	●												
⑧	打	A															○			○	○	●							
⑨	打	A																○	○	○	○	○	●						
⑩	打、側	A																	○	○	○	○	○	○	●				
⑪	打、側	A																	○	○			○	○	○	●			
⑫	打、末	A												○				○								○	○	○	●

剥片	剥片計測値								打点の位置	末端の形状	備考		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧					
	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)					
①	82	80	44	□	12.5	イ	49	14	113	97	M	フェ	
②	50	49.5	46	□	7	□	94	13	99	105	M	ヒ	
③	73	67	36	□	15	□	60	15	122	120	M	フェ	
④	80	75	100	□	8	イ	41	11	120	105	M	フェ	
⑤	73	71	47	□	8	イ	19	8	112	105	M	フェ	
⑥	50	48	64	□	12	□	44	10	115	91	M	フェ	
⑦	89	84	78	□	12	イ	32	14	114	102	M	フェ	
⑧	59.5	55	34	イ	10.5	イ	31	19	123	94	M	フェ	
⑨	59	48	59	ハ	13	イ	41	19	108	94	M	ヒ	
⑩	56	52	55	イ	13	イ	57	14	107	94	M	ヒ	
⑪	65	63	60	ハ	15	イ	32	10	119	105	RR	フェ	
⑫	100	97	90	ハ	13.5	ハ	20	9	115	114	M	フェ	

表22

接合資料 9 (附図 5・写真図版55、56、57)

接合した剥片は24片である。原石は幅 $14.2 + a$  cm、高さ  $7.5 + a$  cm、長さ  $9 + a$  cmの大きさで、楕円形状を呈すると思われる。作業は自然面に打撃して剥片を得るもので、打面はカーブしているA面にある。現存する背面の構成からみれば剥片①の打撃の前に3回の打撃があり、その後剥片①を4回目の打撃で剥離している。以後はジグザグに打点の移動を繰り返しながら剥片剥離を行っている。以上のような作業によって得られた剥片は縦長のものであるが、形、大きさ、厚みはさまざまである。以下表を参照されたい。



接合資料10		硬質泥岩																	剝片計測値												
剝片	自然面	現存する剝片の背面および腹面の構成																	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の位置	末端の形状	備 考
		打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16									17	θ 1			
①	打、正	A	A	A	A	D	A	A	A	A	A	A	A	A	D	D	D	58	53	34	ロ	11.5	ハ	9	5	116	82	M	フェ		
②	打側正	A	○	○	○	○	○	●										63	58	58	ハ	13	イ	37	10	117	104	M	フェ		
③	打	A	○						○	○		●						69	60	63	ロ	9	イ	24	8.5	115	104	M	ヒ		
④	打、側	A								○	○	○	●					59	42	51	ロ	11.5	イ	47	15	89	89	M	フェ		
⑤	打	A			○						○	○	○	●				51	41	81	ハ	14	イ	43	19	92	80	M	ヒ		
⑥	打、側	D	○								○	○	○	○	○	○	○	81	81	64	ロ	15	ハ	23	8	116	98	M	ヒ		
⑦	打	D														○	●	54	54	31.5		6.5	ハ	12	5	110	107	RR	—	末端折れ	

表24

接合資料11 (附图5・写真図版59、60、61)

接合した剝片は13片である。原石は幅 $17.5 + \alpha$  cm、高さ  $9.5 + \alpha$  cm、長さ  $8 + \alpha$  cmの大きさである。作業は自然面を打面とするもので、打面はA面にあり打点の移動を繰り返しながら、後方にジグザグに剝片剝離をしている。得られた剝片は縦長のものが多く得られるがその形状厚さはさまざまである。以下表を参照されたい。

接合資料11		硬質泥岩																																				
剝片	自然面	現存する剝片の背面および腹面の構成																																				
		打面	B	A	A	A	A	A	A	A	A	D	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A			
①	打	A	○	○	○							●																										
②	打、側、末	A	○					○	○	○		○	●																									
③	打	A								○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	打	A									○																											
⑤	打	A										○		○																								
⑥	打	A									○																											
⑦	打	A	○									○																										
⑧	打	A										○																										
⑨	打	A																																				
⑩	打	A										○																										
⑪	打	A										○																										
⑫	打	A																																				
⑬	打	A										○																										

剝片	剝 片 計 測 値								角 度		打点の位置	末端の形状	備 考
	① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	θ 1	θ 2			
①	67	63	87	ハ	7	ロ	14	3.5	—	—	M	フェ	
②	82	75	100.5	イ	12	イ	32.5	13.5	121	108	R	フェ	
③	74	67	66	ロ	15	ロ	49	19	110	92	M	フェ	打点部より二つ折れ
④	58	49	26	イ	7.5	ハ	26	8.5	91	91	M	—	末端折れ
⑤	81	75	80	ロ	12	ハ	35	12.5	112	106	M	ヒ	
⑥	50.5	50	32	ロ	5	イ	27	5	109	109	L	フェ	
⑦	51.5	5.6	70	ロ	8.5	ハ	37	8	125	102	M	ス	
⑧	45	4.4	67	イ	13.5	ロ	42.5	12.5	115	109	M	フェ	
⑨	62.5	56	86	ハ	9	ロ	30	14	121	106	M	ヒ	
⑩	100.4	100	65	ハ	13.5	ハ	33	12	116	108	M	フェ	
⑪	86	81.5	50	ロ	13	ロ	28	13	119	105	M	フェ	
⑫	57.5	55	63.5	ハ	7.5	イ	22	10	114	106	M	ヒ	
⑬	100	95	34.5	ロ	10	ロ	18.5	11.5	111	112	M	フェ	

表25

接合資料12 (附图6・写真図版62、63)

接合した剝片は8片。原石は幅 $9 + \alpha$  cm、高さ  $7 + \alpha$  cm、長さ  $7.5 + \alpha$  cmの大きさであるが

形状はよくわからない。作業は自然面に打撃を加えて剥片を得ているものであるが、打面A面は起伏があり、平坦な面を打撃点を選んで剥片①から剥片④までA面を打面として剥片を剥離し、剥片⑤は90度打面を転移してD面より打撃を加えて剥離し、剥片⑥でA面に戻り剥片⑦を剥離する前にまたD面から打撃を加えてその後A面に戻って剥片を剥離しているものである。以上の作業で得られた剥片の形状はさまざまなものであるが、剥片⑥は比較的厚めのものであるが、他は薄めのもので得られている。以下表を参照されたい。

接合資料 12		硬質泥岩																														
		現存する剥片の背面および腹面の構成																														
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
			C	C	C	B	C	C	A	A	A	A	A	A	A	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	D	A	A	A	A
①	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●																		
②	打	A											○	○	○	●																
③	打	A						○				○			○	○	○			●												
④	打	A	○	○									○									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	側	B	○	○									○									○	○	○		●						
⑥	側	A																				○	○	○		○	○	○	○	○	○	
⑦	打	A																				○			○	○	○	○	○	○	○	
⑧	打	A																													○	

剥片	剥片計測値								角度			打点の位置	末端の形状	備考
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	θ 1	θ 2				
	(mm)	(mm)	(mm)		(mm)		(mm)	(mm)						
①	55	50.5	86.5	ハ	8	イ	38	8.5	118	132	M	フェ		
②	35	33.5	30	ロ	6	イ	14.5	6.5	118	112	M	フェ		
③	51	43	43	ロ	12	ロ	29.5	13	128	130	M	フェ		
④	53.5	51	56.5	ハ	8.5	ロ	36.5	8	125	130	M	フェ		
⑤	90	89	54.5	ロ	12.5	ロ	14	3	105	98	M	フェ		
⑥	47	44	47.5	イ	9.5	イ	20	12	117	117	M	フェ		
⑦	55	53	60	ロ	10.5	ロ	22.5	12	119	117	M	フェ		
⑧	53	—	32	ハ	7.5	イ	—	—	—	—	M	フェ		

表26

接合資料13 (附図6・写真図版64)

接合した剥片は5片である。原石は幅12+α cm、高さ9+α cm、長さ3.6+α cmの大きさで接合した剥片の状態より、作業は原石から剥片された剥片(石塊)に打撃を加えてさらに剥片を剥離しているものである。以上の作業により得られた剥片は厚手の短いものである。

以下表を参照されたい。

接合資料 13		硬質泥岩																
		現存する剥片の背面および腹面の構成																
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
			A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	A	A	A	C	A	A
①	打	A			○	○	○	○	●									
②	正	C	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	打	A						○				○					○	○
④	正	A	●			○		○			○	○	○	○	○	○	○	○

剥片	剥片計測値								角度		打点の位置	末端の形状	備考
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	θ 1	θ 2			
	(mm)	(mm)	(mm)		(mm)		(mm)	(mm)					
①	57	48	61	ロ	18	ハ	31	12	128	103	M	フェ	
②	82	80	68	ロ	22	ロ	55	12	108	94	M	ヒ	
③	49	32	65	ロ	15	—	47	15	107	108	R	フェ	1は接合資料13が剥離された時の面
④	—	—	120	ロ	28	ロ	—	—	—	—	M	フェ	18の打撃の後に中央部より2cm割っている2次加工

※ 注 この接合資料はある原石から剥離された剥片である。すなわち、ある原石の1部で、この作業はさらに小さな剥片を得るための(?)作業であろう。

表27

**接合資料14** (附図6・写真図版65)

接合した剥片は7片であるが、折れたものを含むもので厳密には5片である。原石は幅7 +  $\alpha$  cm、高さ13.2 +  $\alpha$  cm、長さ4 +  $\alpha$  cmの大きさである。作業は自然面を打面として剥片を剥離するもので、打点の位置は各剥片とも角ばった稜にある。剥片は形、大きさとも一定してはいないものでどの剥片も折れや欠損しているものである。なお剥片⑤は、折れた面を打面として1片の剥片を剥離している、この接合資料は接合状態より、原石から剥片剥離をしている一部分と考えられる。以下表を参照されたい。

接合資料14		凝灰質硬質泥岩											剥片計測値															
		現存する剥片の背面および腹面の構成																										
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の位置	末端の形状	備 考
			A	A	A	A	A	A	B	B	A	B	B	A	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	$\theta 1$	$\theta 2$						
①	打	A	○	○	○	●										—	3.1	—	□	7.5	□	8	4.5	108	—	L	ス	
②	—	—	○	○	○	●										—	—	—	—	13.5	□	—	—	—	—	M	ヒ	
③	打側	A	○	○	○	○	●									135	133	30	□	20	ハ	19	13	109	102	M	ヒ	
④	—	—	○	○	○	○	○	○	●							105	102	59	ハ	16	イ	60	14	109	98	—	ヒ	
⑤	打側	A										○	○	○	●	—	9.5	88	ハ	19	—	—	—	—	—	—	—	

表28

**接合資料15** (附図6・写真図版66)

接合した剥片は4片である。原石は幅12 +  $\alpha$  cm、高さ9 +  $\alpha$  cmで、原石の前後を欠いているものである。作業は自然面を打面としてA面に打撃を加えて剥片を剥離している。剥片の形状は一定のものはない。剥片④には右側面の表裏に数回の2次加工が入っているものである。

以下表を参照されたい。

接合資料15		硬質泥岩									剥片計測値													
		現存する剥片の背面および腹面の構成																						
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の位置	末端の形状	
			C	D	A	D	A	A	A	A	A	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	$\theta 1$	$\theta 2$			
①	打	A	○	○	○	○	●					82	—	91	ハ	17.5	□	23.5	12.5	123	—	M	ス	末端折れ
②	打側末	A		○	○	○	○	●				82	77	86	□	9	イ	22	13	105	94	M	フェ	
③	側末	A					○	○	●			(75)	(78.5)	(83)	(□)	(14.5)	(ハ)	—	(3.5)	—	—	[M]	フェ	バルブ欠損
④		A							○	○	●	—	—	60	—	16	□	—	—	—	—	M	フェ	側面表裏に2次加工有り

表29

**接合資料16** (附図6・写真図版66)

接合した剥片は4片である。原石は上下8.2 cmのもので、原石の中頃のものと思われる。作業は自然面を打面とするもので、剥片①から剥片③までをA面で剥離し、剥片④はC面で剥離



している。剥片は剥片②が下部まで抜けているが、他の剥片はヒンジを起して剥離されている。以下表を参照されたい。

接合資料16		硬質泥岩									剥片計測値												
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成									① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点の 位置	末端の 形状	備 考
		打面	1	2	3	4	5	6	7	8									9	θ1			
①	打	A	○	○	○	●					64.5	62	62	ロ	16	ロ	31	16	116	99	M	ヒ	
②	打、末	A			○	○	○	●			85	80	63	ロ	13	ロ	20	11	123	113	M	一	
③	打	A			○	○		○	○	●	64	62.5	30	ハ	16	ハ	28	14	130	100	L	ヒ	
④	打、側	C			○			○		○	43	40	62	ハ	16	イ	23	7.5	126	107	M	ヒ	

表30

接合資料17 (附図6・写真図版67)

接合した剥片は5片である。原石は幅 $11.4+\alpha$  cm、高さ $7+\alpha$  cm、長さ $6.2+\alpha$  cmの大きさである。作業は自然面を打面として、A面にのみ打撃を加えて剥片剥離をしている。得られた剥片は打面幅と剥片長がほぼ同じ数値を示すものである。以下表を参照されたい。

接合資料17		硬質泥岩												剥片計測値												
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成												① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点の 位置	末端の 形状	備 考
		打面	D	D	A	A	A	A	A	A	A	C	A									A	θ1			
①	打	A			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
②	打	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
③	打	A			○																					
④	打	A																								
⑤	打	A																								

表31

接合資料18 (附図7・写真図版67)

接合した剥片は3片である。原石は幅 $9.4+\alpha$  cm、高さ $9.6+\alpha$  cm、長さ $4.8+\alpha$  cmの大きさである。作業は自然面を打撃して剥片剥離を行うもので、打面はA面にあり、原石の前面から打点の移動を繰り返しながら後方に作業を進めているものようである。得られた剥片は、打面幅に比して剥片幅が広く、厚手のものがとられている。以下表を参照されたい。

接合資料18		硬質泥岩									剥片計測値														
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成									① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点の 位置	末端の 形状	備 考		
		打面	A	A	A	A	A	A	A	A									θ1	θ2					
①	正、側	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
②	正	A	○																						
③	側	A																							

表32

**接合資料19** (附図7・写真図版68)

接合した剥片は6片である。接合状態より、原石から剥離した剥片は3片であり、剥片①、②、③を剥離後、剥片③に2次加工を施しているもので、2次加工を施しているうちに、折れた剥片と、2次加工によって出来た剥片2片が接合している。2次加工は表裏に18回位打面部と側面部に加えられている。以下表を参照されたい。

接合資料19		硬質泥岩					剥片計測値												
		現存する剥片の背面および腹面の構成					①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の	末端の	備 考
剥片	自然面	1	2	3	4	5	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	θ 1	θ 2	位置	形状	
①	側末	B	○		●	A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
②	打	A		○	●		59	47	37	□	14	イ	45	18	118	109	RR	ヒ	
③	打	A		○	○	●	(75)	(76)	(104)	(口)	(22)	□	(65)	(20)	(110)	(95)	M	ヒ	

表33

**接合資料20** (附図7・写真図版68)

接合した剥片は3片である。接合状態より原石の中程の一部と思われる。作業は自然面を打面としての剥片剥離をしているもので、打面はA面とB面にある。以下表を参照されたい。

接合資料20		硬質泥岩									剥片計測値												
		現存する剥片の背面および腹面の構成									①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の	末端の	備 考
剥片	自然面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	θ 1	θ 2	位置	形状	
①	打	A	○	○	○	○	○	●			78.0	75.0	160.0	ハ	21.0	□	51.0	23.0	116	113	L	ヒ	打点部より割れ
②	打	A				○	○	○	○	●	69.0	68.0	78.0	ハ	19.0	イ	58.0	15.0	128	93	L	ヒ	

表34

**接合資料21** (附図7・写真図版68)

接合した剥片は3片である。原石は縦  $7.1 + a$  cm、横  $7.8 + a$  cm、長さ  $3.4 + a$  cmの大きさである。作業は自然面を打面とするもので、打面はA面とB面にあり、打面を90度転移して剥片剥離を行っているもので、A面を打面として打撃4まで剥片剥離を行ってきたが、剥離角が鋭角になり折れたために、B面に打面を移して剥片剥離を行い、ほぼ同じ長さの剥片を剥離しているものである。(あるいは背面の整形のためとも考えられる。)以下表を参照されたい。

接合資料21		硬質泥岩										剥片計測値												
		現存する剥片の背面および腹面の構成										①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の	末端の	備 考
剥片	自然面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	θ 1	θ 2	位置	形状		
①	打、末	A	○	○	●							80.0	71.0	46.5	□	10.0	□	23.0	11.0	118	118.5	M	ヒ	
②	—	B		○	○	●						—	—	—	9.0	—	—	—	—	—	—	—	フェ	折れ
③	打、側	B			○	○	○	○	○	○	●	78.0	69.0	44.0	—	15.0	□	23.0	—	112.5	107	RR	ヒ	

表35

接合資料22 (附図7・写真図版69)

接合した剥片は4片である。原石の中頃のものと思われるもので、作業は2～3回の打面調整を行った後にA面に打撃して剥片剥離を行っている。剥片は①②とも打点位置が薄い位置にあるため割れているものである。以下表を参照されたい。

接合資料22		硬質泥岩					剥片計測値												
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成					① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点の位置	末端の形状	備 考
		打面	1	2	3	4									5	$\theta 1$			
①	—	A	○	○	○	●	73.0	64.0	121.0	—	18.0	イ	77.0	21.0	116	112	L	ス	打点部より割れ
②	—	A	○			○	66.0	65.0	138.0	—	13.0	イ	114.0	7.0	122	100	M	ス	〃

表36

接合資料23 (附図7・写真図版69)

接合した剥片は5片である。本資料は原石の一部の表皮部分であり、一回の打撃によって得られた縦長の剥片に、さらに左右の両面に打撃を加えて、剥片を剥離しているものである。あるいは剥片に加えられている剥離は表裏面に見られることから、剥片に加工を加えるための剥離過程とも考えられる。以下表を参照されたい。

接合資料23		硬質泥岩																																
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成																																
		打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29			
①	打	D	○																	●														
②	—	D	○	○	○	○															●													
③	—	B	○																															
④	—	A	○	○																														

剥片計測値		備 考												
剥片	① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点位置	末端の形状	備 考	
									$\theta 1$	$\theta 2$				
①	48.0	45.0	34.0	□	9.0	イ	13.0	3.0	106	108	L	フェ	1は原石から剥離された面	
②	63.0	49.0	74.0	□	13.0	イ	16.0	6.0	120	106	M	フェ		
③	42.0	41.0	37.0	□	15.0	イ	33.0	13.0	112	87	L	フェ		
④	67.0	74.0	119.0	イ	25.0	—	—	—	—	—	—	ヒ	23の前に1～2回の打面調整がある	

この接合資料は末端がヒンジで終る。剥片を原石から剥離したのちに剥片の両側より打撃を加えて小剥片を剥離している(剥片を整形しようとしたものか?)面20,25,26,27,28,29は腹面にある。18は剥片の側面にある。

表37

接合資料24 (附図7・写真図版69)

接合した剥片は3片である。作業は自然面に打撃して剥片剥離をするもので、剥片①②は打面がA面にあり、その後B面に打面を転移して剥片③を剥離しているものである。以下表を参照されたい。

接合資料24		硬質泥岩							剥片計測値												
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成							① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角 度		打点の位置	末端の形状	備 考
		打面	1	2	3	4	5	6									7	$\theta 1$			
①	打、側	A	○	○	○	●			93.0	75.0	62.0	ハ	18.0	ロ	44.5	13.0	122	119	M	ヒ	
②	打、側末	A			○	○	●		93.5	77.0	74.0	ロ	20.0	ロ	16.0	22.0	125	97.5	M	ヒ	
③	打	B				○	○	●	83.0	48.0	59.0	イ	16.0	ハ	22.0	6.0	117	94	M	フェ	

表38

**接合資料25 (附図8・写真図版70)**

接合した剥片は2片である。作業は自然面を打面として一方向から剥片剥離をするものである。剥片②には末端部に細部加工の痕がある。以下表を参照されたい。

接合資料25		硬質泥岩							剥片計測値													
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成								① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角度		打点の位置	末端の形状	備考
		打面	1	2	3	4	5	6	7									8	θ1			
①	打	A	○		○	●				86.0	76.0	88.0	□	18.0	イ	43.0	17.0	115	97	M	—	末端折
②	打	A		○	○	○	○	○	○	113.0	105.0	89.0	□	22.0	イ	45.0	17.0	108	97	M	フェ	

表39

**接合資料26 (附図8・写真図版70)**

接合した剥片は4片である。作業は自然面を打面としているもので、接合した状態の剥片を原石から剥離後、打面を変えて3片の剥片を剥離しているものである。以下表を参照されたい。

接合資料26		硬質泥岩				剥片計測値													
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成				① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角度		打点の位置	末端の形状	備考	
		打面	1	2	3									4	θ1				θ2
①	打	B	○	●		79.0	72.0	59.0	□	12.0	□	32.0	11.0	117	118	M	ヒ	中央部折	
②	打	B	○	○	●	73.0	66.0	45.0	□	8.0	イ	14.0	13.0	122	122	LL	フェ	打点部より割れ	
③	打、側	B	○		○	●	54.0	46.0	42.0	□	13.0	イ	26.0	15.0	120	110	M	フェ	

※ある原石から剥離された剥片に側方から打撃を加えて剥片剥離をしている

表40

**接合資料27 (附図8・写真図版71)**

接合した剥片は3片である。原石は幅7+α cm、高さ8+α cmの大きさのものである。作業は接合した姿より、原石の上下両端を打ち欠き上部の面に小さな打面調整を施した後に打撃を加えて剥片剥離を行っているものである。以下表を参照されたい。

接合資料27		硬質泥岩						剥片計測値												
剥片	自然面	現存する剥片の背面および腹面の構成						① (mm)	② (mm)	③ (mm)	④	⑤ (mm)	⑥	⑦ (mm)	⑧ (mm)	角度		打点の位置	末端の形状	備考
		打面	1	2	3	4	5									6	θ1			
①	正	A		○	○	●		71.0	65.0	41.0	ハ	17.0	ハ	24.0	11.0	112	110	R	フェ	
②		A	○	○		○	●	81.0	74.0	64.0		20.0	ハ	27.0	9.0	119	115	M	フェ	
③		A				○	●	57.0	51.0	14.0		7.0	イ	14.0	7.0	120	104	L	フェ	打点部より2つに割れている

表41



接合資料 29			硬 質 泥 岩																																		
			現 存 する 剥 片 の 背 面 お よ び 腹 面 の 構 成																																		
剥片	自然面	打面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	
			B	B	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	(C)	A	(C)	A	B	A	D	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A		
①	打,側	B	○	○	●																																
②	打,側	A			○	○	○	○	○	○	●																										
③	打,側	B									○	●																									
④	側	B			○	○					○	●																									
⑤	打,側	B									○	○	●																								
⑥	打	B									○		●																								
⑦	打	B									○	○	●																								
⑧	打	B			○						○																										
⑨	打,側	A									○	○		○																							
⑩	—	D																																			
⑪	打,側	A									○	○																									
⑫	側	B																																			
⑬	側	B																																			
⑭		B			○						○																										
⑮		B																																			
⑯	打	A																																			
⑰	打	A																																			

剥片	剥 片 計 測 値								備 考				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度 θ 1 θ 2	打点の 位 置	末端の 形 状		
	(mm)												
①	—	—	(158)	—	21	ロ	②7	(8)	83	—	M	ヒ	3の打撃で、3'の面が構成される。
②	58	40	100	イ	28	イ	82	25	129	126	M	ヒ	①のヒンジをとるための作業、4、5、6は打面形成のための剥離か？
③	55	35	③7	(ロ)	10	イ	32	10	—	—	④6	ヒ	打点部より折れ、②のヒンジをとるための作業。
④	(80-90)	—	①6	—	18	—	—	—	—	—	—	ヒ	側面部に4~5回の二次加工有り、打撃と同時に折れ
⑤	65	57	④2	イ	15	ロ	30	2	123	108	M	ヒ	側面部より折れ、あるいは④の打撃といっしょにとれたものか。
⑥	55	39	44	イ	9	イ	41	10	119	120	R	ヒ	末端部斜め折れ
⑦	52	48	⑤0	ロ	15	イ	22	16	101	90	L L	ヒ	⑨の剥片を作る為の準備
⑧	82	68	61	イ	17	イ	27	17	84	95	M	ヒ	
⑨	170	165	85	ロ	38	ハ	47	20	118	116	M	ヒ	打点部より3つに割れている。
⑩	—	—	—	—	9	ロ	—	—	—	—	—	ヒ	トランシェを作る為の刃部面となる加工、打撃方向はD面と思われる
⑪	60	47	72	ロ	7	イ	25	7	109	93	M	フェ	
⑫	—	—	74	—	—	—	—	—	—	—	—	ヒ	二次加工のある剥片、B面方向より打撃を加え、4片以上の剥片を得ている。剥片部はトランケイト
⑬	⑧0	—	158	(ロ)	38	ロ	—	—	—	—	④0	ヒ	二次加工は背面の打面側に打撃して小剥離6個有り、弧状になっている。
⑭	⑧7	76	104	ロ	30	ロ	66	28	109	111	R	ヒ	トランシェを作る剥片、背面は斜にヒンジの段が入る
⑮	(68+a)	(66+)	87	(ロ)	16	(イ)	49	20	103	—	R	—	打点部より2つ折れ、別の打痕があり、その打痕からはじまる折れ、末端部折れ
⑯	86	67	(106)	ロ	15	イ	60	10	115	112	④6	フェ	打面形成4~5回あり打面部より二つ割れ
⑰	—	—	⑥2	イ	12	イ	42	11	124	—	M	—	縦割れ以上の他に、同一個体となる剥片が数点ある。

表43

・黒印

接合資料29		剥片⑭の石器作り								石器を作るための剥片剥離工程の面構成																											
剥片	自然面	打面	剥片剥離作業の面の構成								1-C																										
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21						
①	打	C	⑤																																		
②	側	—	4	10	17	19	⑤																														
③	打	C	⑤																																		
④	打	C																																			
⑤	打	C																																			
⑥	打	C	10	20																																	
⑦	打	C																																			
⑧		B'	17																																		
剥片	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	角 度		打点の 位 置	末端の 形 状	備 考																								
									θ 1	θ 2																											
①	87	84	90	イ	18	イ	37	18	106	105	M	フェ																									
②	(97)	(83)	(100)	(ロ)	(30)	(イ)	(67)	(30)	115	113	R	ヒ	⑤は腹面にある																								
③	36	34	67	ロ	6	ロ	—	4	(111)	(114)	M	フェ	③はB'面																								
④	39	34	40	ロ	8	イ	12	9	116	115	M	フェ																									
⑤	42	37	35	ロ	10	イ	23	12	107	102	M	フェ																									
⑥	58	56	25	ロ	9	イ	14	8	89	—	L	—	未端折れ																								
⑦	49	47	75	ロ	14	イ	38	12	121	91	M	ヒ	④はB'面																								
⑧	71	62	108	ロ	21	イ	62	22	114	111	M	ヒ																									

以上の他に、数回の剥離をC面、B'面方向よりおこなっている。ここでトランシェの姿ができあがっている。剥片を剥離するための作業として残っている面は背面で17、19、20、腹面で刃部側に26の面が残っている。これを調整するべくおこなっている作業の途中に背面側から見たB'面方向よりの打撃Aにより2つに割れて作業を断念している姿である。(写真図版)  
※これらの一連の石器を作るための作業はそのほとんどが縦長剥片⑭の両側方向からの打撃である。打撃19は、剥片剥離の段階の25と、26の打撃の間に剥離して刃部面を構成している可能性もある。

表44

以上接合資料について述べたが、これら接合資料の剥片剥離技法は単純なものであり、ほとんど打面を作らずに、原石面の自然面に直接打撃を加えて連続的に剥片剥離を行うものであり打面は1面にある資料が多いが、原石の形状や剥離の状態（背面の構成）から、打面が2面、3面に転移する資料も中にはあるが数少ない。これら一連の作業において得られた剥片には、さまざまな形態があり、縦長の剥片、横長の剥片、貝殻状の剥片、不定形な剥片など大小さまざまである。剥片の中には、二次加工が加えられたものや、石器となり得そうなもの、石器を作成するための素材として充分であるもの(?)などがある。また、一連の剥片剥離作業の中で、接合資料29には得られた剥片を素材として石器を作成している過程が入っており、得られた石器は、トランシェの姿を呈しているものであり、貴重な1資料と思われるものである。次に、これら接合資料および、ピット内から出土した剥片の石材であるが、本遺跡周辺や、雫石川、黒沢川流域にはなく、その石材の原産地も雫石町西部の奥羽山地にあることが、佐藤二郎氏によって確かめられており、おそらく石材の原産地近くより運び込んだものであろう。

次にこれら接合資料の時期であるが、接合資料の中に最終的には失敗しているがトランシェを作る過程が入り、トランシェの姿となっているものがある。トランシェ（トランシェ様石器）は、東北北部から北海道南部の早期末から前期初頭頃の遺跡より出土している。本遺跡の接合資料もその頃の時期に比定されてよいだろう。実測図、写真とも不備なものであり、不明な点が多々あるが、縄文時代早期末から前期初頭頃の石器制作の過程が判明した数少ない資料となり得るものと確信する。

## その他の出土遺物（写真図版38）

以上のほかに東側段丘縁を掘った所、近世の墓坑跡（御所ダム関連水没のため改葬）の改葬漏れの小墓坑から、鏡と櫛、煙管（雁首と吸口で銀製らしいもの）が出土したので、旧地主に連絡した所、旧地主のものであると判明したので、旧地主に引渡した。

# Ⅵ章 まとめ

以上桜松遺跡の遺構・遺物について述べてきたが、若干の考察を加えてまとめとしたい。

## I 遺構

本遺跡より検出された遺構は、住居址1棟、炉跡1基、柱穴群1ヶ所、ピット、基、陥し穴状遺構5本、周溝状遺構2条である。これら遺構のうち住居址、炉跡、柱穴群などは東側段丘縁の破壊からまぬがれた地域より検出された。ピットは段丘縁付近の柱穴群のある地区から検出されたものと、遺跡中央付近に単独で検出されたものがある。陥し穴状遺構は遺跡の平場に1基を除き長軸を北東方向に向けて単独に検出されている。周溝状遺構は北側の平場と南側の平場より単独で検出されている。以下項目別に述べる。

### 住居址

住居址として原形をとどめていたものはC-12住居址で、南側が削られておりその形態を捉え難いものである。住居址に伴う施設としては、住居址内東側寄りに検出された炉跡がある。炉址は土器の胴中央部分を埋設して使用しているもので、これに付随してピットが設けられておりピットの一部は赤く焼けていたもので、同時に使用されたことがうかがえるものである。時期は床面に貼り付いた土器片と炉に使用した埋設土器から推定すると、文様モチーフの施文方法より大木10式期頃に比定できよう。

### 炉跡

炉跡はB-12炉跡がある。周辺の状況から住居址とも屋外炉とも判断がつかないものである。時期は埋設土器として使用されている土器の文様モチーフから大木10式期に推定できる。

### 柱穴群

東側段丘縁で合計131個検出された（中には木痕と考えられるものもある。）これら柱痕穴は住居址の柱穴と思われるが、上部は攪乱をうけており住居址の壁および住居址に伴う施設が検出されていないものである。柱穴配置は4棟ほど確認できた。他にもまだ柱穴配置を考



えるものもあるが、前述の状態であるため判断しにくいものである。時期はC-10柱穴群がC-10 No.1ピットに切られており、このピットより縄文後期初期の土器が出土しているもので、このことより縄文後期初頭以前と考えることが出来るものである。その他の柱穴群および柱穴については、時期を決定する資料がないため断定できないが、この地区より中期末葉の土器が多く出土していることなどから、中期から後期にかけてのものかも知れない。

### ピット

ピットは9基検出されている。このうち特に注目したいのはJ-10ピットであり、剥片が877片入っていたものであり、これらの剥片は接合できるものもある。その中にトランシェ様石器を作る工程がわかるものが入っていることがあげられる。このピットの時期はトランシェが早期末から前期初頭に伴うことが判明していることより、この頃の時期に位置づけられよう。またピットの性格であるが一応貯蔵の目的のためのものとしておく。なお県内の縄文時代の剥片接合資料が出土した例として、高畑遺跡、東裏遺跡、湯沢遺跡があげられ、高畑遺跡、湯沢遺跡では住居址のピットからの出土資料であり、「剥片貯蔵」の事実例が確認されている。H-9 No.2ピットはピット内に20cm大～40cm大の礫が入っているもので、検出状態より意図的に入れられたものであろう。性格については不明である。時期はピット内出土の土器片より中期末葉頃に推定される。この他のピットであるが時期の推定できるものとしてC-10 No.1ピットP-21ピットがあげられ、それぞれ出土遺物より縄文時代後期初頭頃と縄文時代前期初頭頃と推定されるものである。それ以外のピットについては不明である。

### 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、出土遺物の出土状況から編年的位置づけをすることは難しく、機能も現段階では決定するべく条件も少ない。遺構の性格であるが動物を捕獲するための「陥し穴」的性格を有するものであろう。雫石川中流域から検出されている遺跡としては、下猿田Ⅲ遺跡、繫Ⅵ遺跡、下長谷地遺跡、塩ヶ森遺跡、下平遺跡等があげられ、いずれも配列に規則が認められるものである。

### 周溝状遺構

周溝状遺構は、Ⅵ層上面から検出され、これらの周溝は多かれ少なかれ、土坑を有しているもので、土坑もM-7周溝状遺構を見る限り、限定された区域内を何度も掘り返されている。また周辺から土師器、土器片が出土していること等から平安時代頃から中世初頭にかけての墓坑群と推定される。

## Ⅱ 遺物

### 1 土器

本遺跡から出土した土器は遺構内、遺構外のものをもみても完形土器は1個と少なく、いずれも実測図にのせたものは図上復元の土器であり、他は破片である。これら土器の内容をみると、胎土に繊維を含むものと、含まないもの及び貝殻文の土器に分けられる。これら土器の年代は、早期前葉のもの、早期末葉のもの前期初頭のもの、中期末葉から後期頃のもの、晩期初頭のもの、奈良～平安時代頃のものにわけられる。早期前葉のものは第1群2類としたもの、押型文の土器があげられ、施文方法は盛岡市一本松熊ノ沢遺跡出土のものなどに類似したものであり、これらは早期初頭日計式土器に類似するものであることから、本遺跡出土のものも日計式に併行するものと思われる。なお御所ダム周辺遺跡においては野中遺跡などよりも数片の出土がある。早期末葉のものは第1群1類・6類a-1があげられ、1類は貝殻文、沈線文の組合せなどによる文様を構成するもので、器形等より青森県物見台遺跡出土のものとの共通性がみられるものである。6類a-1は表裏縄文であるがいずれも小破片であり、確定づける資料に乏しいが崎山弁天遺跡出土のものに類似性があり、早期末葉に比定されよう。前期初頭のものには3類、4類a、6類a-2～a-14などがあげられ、3類には文様として縄文側面圧痕と刻みを施し、体部に羽状縄文を施文するもので、関東の菊名貝塚出土のものや、宮城県金山貝塚出土のものに、施文方法、胎土が類似するものである。その他には組紐の圧痕文や回転文および単軸絡状体によるもの、0段多条のもの、口唇部に刻みを施すものなどや、羽状縄文も結束のあるもの、ないものなどがある。これらの地文の多くは早期末から大木2式の各形式に認められるものであり、特に6類a-6は施文方法より大木1式に類似するものであり、6類a-7も大木2式に類似するものである。中期末葉としたものは、4類b、5類aなどがあげられ、施文方法等より大木9式から10式に比定できるものであろう。後期初頭としたものは4類c、5類b・cなどがあげられ、胎土、文様手法などより関東の堀ノ内I式などに類似するものである。図版35-11は1片の出土であるが文様、胎土からみて後期末葉頃に位置づけることができよう。晩期初頭としたものは（図版35-12～15）にあげたものであるが、文様の特徴より大洞B式に比定されよう。この他に繊維を含まない縄文だけの土器の一群があるが、多くは縄文原体や施文方法からみて中期末から後期頃のものとして推定される。

## 2 石器

本遺跡出土の石器は若干の資料を除いて、これら石器群が本遺跡より出土した土器群及び、各遺構と明確に関連すると断言しうるものはない。しかし、トランシェ様石器、環状石器等縄文早期の土器に伴出するものと、他の遺跡からの報告のある石器群の存在からみて、これらの石器がすべてではないが、おそらく本遺跡に於ても縄文時代早期の一時期のものとして捉えることが出来るものがある。またこれら石器群の中で特に注目したいのは（図版44-13～15）の石器があげられる。文中でも述べてきたが、製作技法、形態より、旧石器に類似したものと

えよう。次に他のものとして注目したいのは大形木葉形の石槍であり、その形態及び比較的古い時期の土器の出土がある事などから、比較的古い時期のものとして捉える事ができよう。

次に本遺跡出土の石器のうち二、三の物についてその用途に関する点について述べてみたい。図版44-14、15に示した剥片に加工されたものであるが、前者は錐、後者はスクレーパーの類に分類しておいたが、両者共にあるいは石ヒの類に入れられるべきものかも知れない点である。石ヒは現在の時点では、明らかに削るための道具（ナイフ）としての使用法がとられたであろう事は否定出来ない事実となっているが、このような鋭利な縁辺を持つ石器がそのような用途に使用されたであろう事は容易に考えられる。この削るための道具（ナイフ）としての用途は単に石ヒとして分類したものに限らず、スクレーパー様石器類としたものの中にも多くみられるし、単に剥片として処理された物の中にも多々存在するものと考えられる。スクレーパー類として本来の削る道具としての物は、特殊な矢柄削り等に使用される一部を除いて多くのものは多種多様の使われ方をしたものであろうと考えられる。

石ペラ類は、石ペラとして分類した条件の中で述べておいたが、その特徴ある形態より推察して、呼び名の通り、削るものと考えてよいであろう。

磨り石の類に分類した棒状で一面のみ平坦面をもつ磨り石であるが、これらは前述したように、その平坦面に擦痕を残している点よりみて、明らかにこの部分が使用に供されたものとみて誤りはないであろう。この部分を使用面と考えた場合、扁平なものに対しての使用の点が考えられる。いわゆる砥石の一部としての用途であろうか。もしこの面を利用して敲くものとするならば獣皮、木皮等の鞣しに使用された可能性もある。

また環状石斧としたものの用途についても武器としての用途も考えられないこともない。

以上、本遺跡出土の物について私見による用途らしきものについて述べたが、あくまでもこれらは推測の域を出るものではない。しかしながら単に従来どうりの形状による名称のみによらずこの様な点について考慮しながら石器類の分類を行う事が必要になって来ている事も事実である。

### Ⅲ 遺跡の性格

本遺跡は先に述べた通り、西側に中位段丘をひかえる低位河岸段丘上のほぼ平坦な面にあり、御所ダム開発以前には宅地、墓地、畑地、工場用地など様々な利用をされていた所であり、特に段丘縁は攪乱が顕著にみられた所である。以上のような状態であり、遺跡は良好な状態とは言えないが、かろうじて破壊をまぬがれた東側段丘縁より縄文時代の遺構が多く検出されている。これら遺構の検出状態より推測すると、縄文時代の集落は段丘縁、特に東側段丘縁に多く

営まれていたものと推定され、遺跡中央部分の平場は縄文時代には広場の使用をしていたものと推定される。なお陥し穴状遺構が遺跡中央部分等の平場より、5基検出されているが、本遺構は狩猟のためのものと推測されることより、ある時期には狩猟の場として利用されたこともあったであろう。また、周溝状遺構や、土師器片が出土し、近世頃の墓地などがあったことから、平安時代以降にも様々な利用がされていたものであろう。以上のようなことから本遺跡は縄文時代から様々な利用されてきたことがうかがえるものであり、狩猟・生活、信仰の場所として利用されてきたと考えられる。

なお、最後になりましたが、調査中及び報告書作成のための遺物実測、写真撮影、図版トレースなどを下記の人々に御協力いただいた。記して感謝いたします。

発掘調査に御協力いただいた方々

#### 昭和51年度

川崎富治、佐々木武、長瀬重雄、広瀬一郎、川口甚一、徳田市重郎、高橋丑蔵、長瀬キヌ、細川幸子、長沢トメ、谷地節子、佐々木美耶子、高橋テル、高橋サキ、高橋寿子、川村きみえ、佐藤イト子、細川トシ、瀬川スエ、徳田サヨ、徳田スワヨ、徳田アヤ子、細川ソノエ

#### 昭和55年度

瀬川与四蔵、藤平長之助、村上徳次郎、徳田市重郎、大久保隆、中村孝二郎、斉藤善松、中村金太郎、久保田広治、細川与次郎、細川長一、瀬川クニ、藤平ヨシノ、瀬川スエ、細川フジ川口エミ子、細川利子、高藤ワキ子、細川もも子、徳田敏子、徳田キエ、瀬川幸子、斉藤シヲ高橋サメ、高橋ツヤ、佐々木ショウブ、佐々木モヨ、川口サダ、細川キミエ、長瀬タミ、築場和江、近谷マサ子、加藤キヨ、斉藤ユミ、斉藤オヨ、石亀ヨネ、佐藤シノブ、向井マサ、大和まつの、菊池キヨ、高橋ヒデ、藤平良子

報告書作成に御協力いただいた方々

瀬川クニ、高橋ミヨ子、佐々木美耶子、大久保隆、川口エミ子、高橋ヒデ、附田チャ、菅原キシ子

## 参考文献

- ①「千歳遺跡(13)」埋蔵文化財調査報告書27集 青森県教育委員会 昭和51年3月
- ②「早稲田貝塚」上北考古学会報告 上北考古学会 1960年
- ③「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会 大槌町教育委員会 1974年
- ④「盛岡市一本松熊の沢遺跡」 盛岡市公民館
- ⑤「高畑遺跡」 岩手県文化財調査報告書49集 岩手県教育委員会 昭和55年
- ⑥「東裏遺跡」 岩手県文化財調査報告書55集 岩手県教育委員会 昭和55年
- ⑦「大地渡遺跡」岩手県文化財調査報告書56集 岩手県教育委員会 昭和56年
- ⑧岩手県埋文センター文化財調査報告書2集 岩手県埋文センター 昭和43年
- ⑨岩手県埋文センター文化財調査報告書13集 岩手県埋文センター 昭和55年
- ⑩後藤秀一 附 金剛寺貝塚採集の剥片接合資料  
「宮城県教育委員会文化財調査報告書17集」所収 昭和55年
- ⑪「中本遺跡」日本文化史研究所
- ⑫仙台市三神峯遺跡の調査 「東北の考古歴史論集」所収 宝文堂 昭和49年
- ⑬「日本考古学辞典」 東京堂 昭和51年
- ⑭富樫泰時 トランシェ様石器について「東北考古学の諸問題」所収 1976年
- ⑮SONIA COLE THE PREHISTORY OF EASTAFRICA PENGUINBOOKs 1954年
- ⑯K. P. オークリー 石器時代の技術 ニューサイエンス社 1971年
- ⑰吉田格 関東の石器時代 雄山閣 昭和49年
- ⑱興野義一 大木式土器理解のために、I II III 考古学ジャーナル、ニューサイエンス社、1967、1968年
- ⑲八幡一郎著作集 「縄文文化研究」 雄山閣 昭和54年
- ⑳大分県岩戸遺跡 大分県教育委員会 1980年
- ㉑石器の基礎知識 I II III 柏書房1980・1981年
- ㉒大船渡市史 I 大船渡市教委
- ㉓山内清男 日本先史土器の縄文 先史考古学会 昭和53年
- ㉔中村富男 縄文文化に伴う石器の研究「論集第2号」 共愛学園 昭和43年

# 写真図版



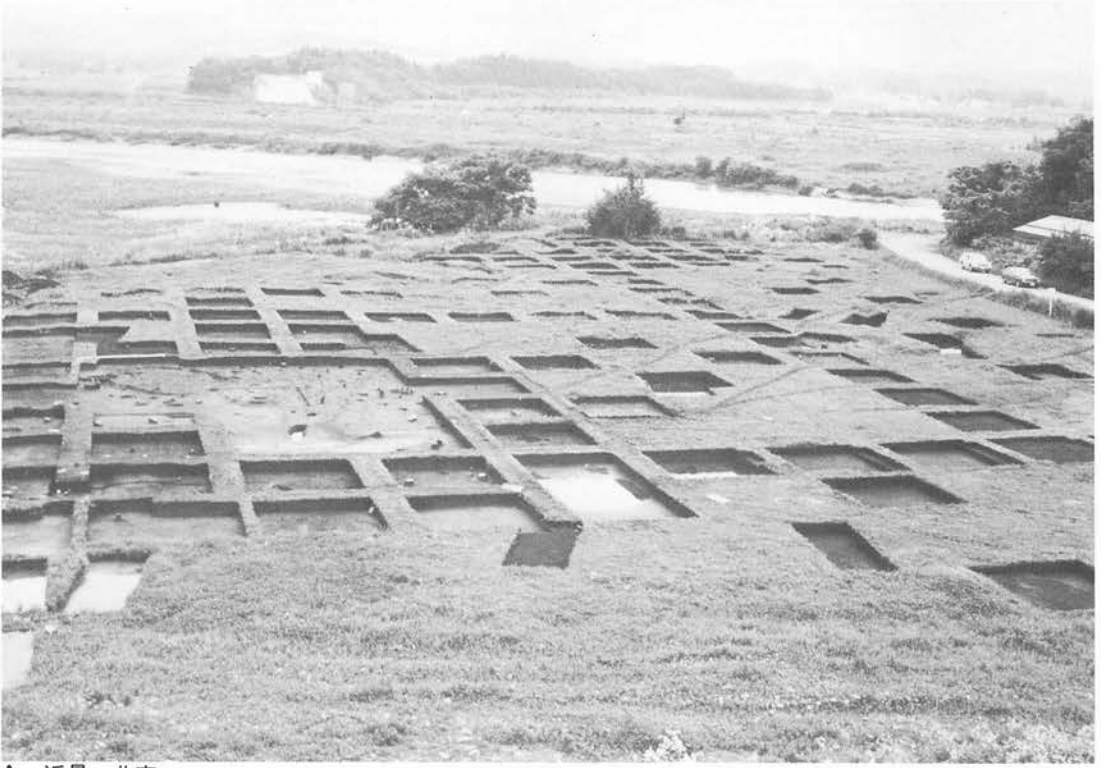


A 遠景 南



B 近景 北

写真図版 1



A 近景 北東



B 近景 北西

写真図版 2





A 調査後遠景 南西

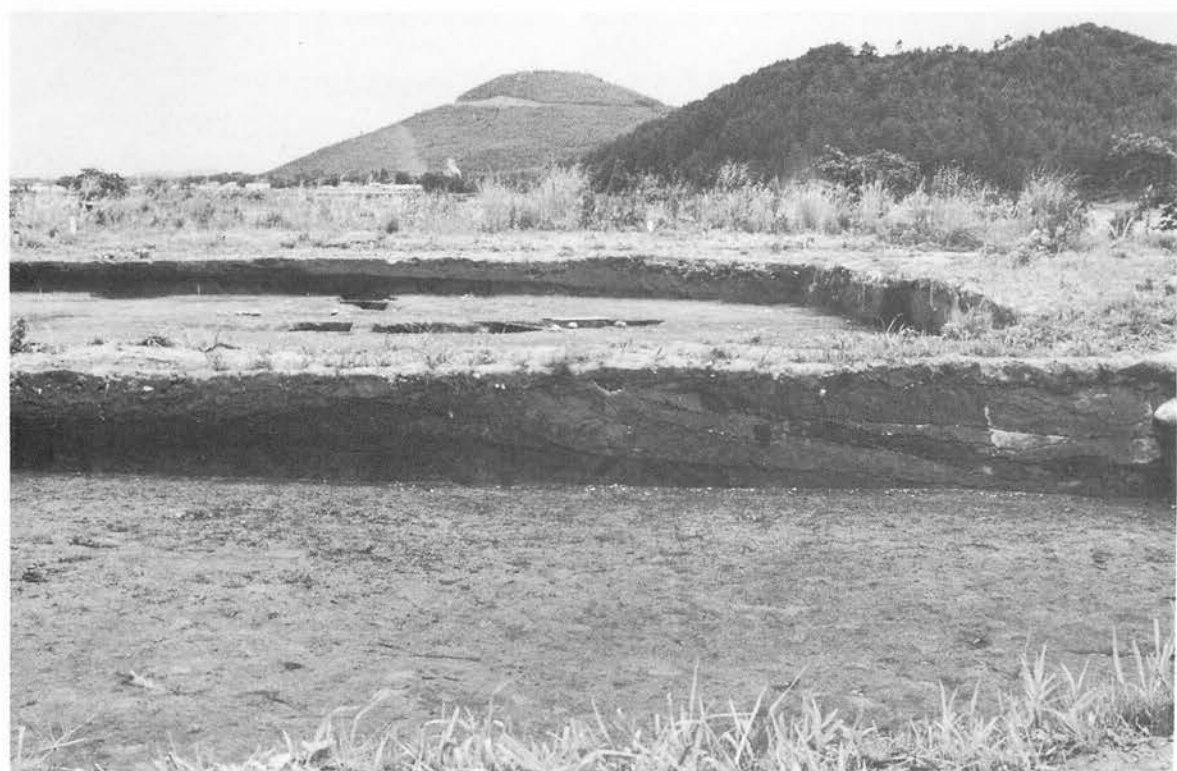


B 調査後近景 東南

写真図版 3



A 基本土層

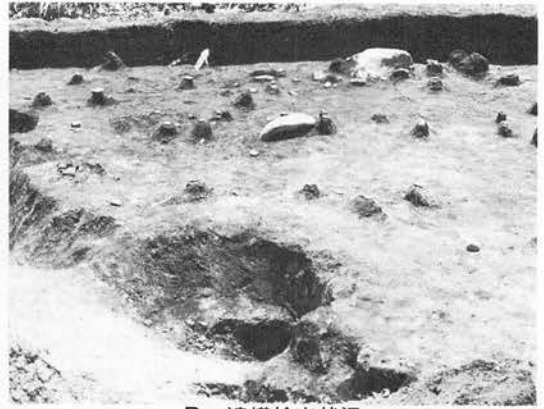


B 基本土層 盛土狀況

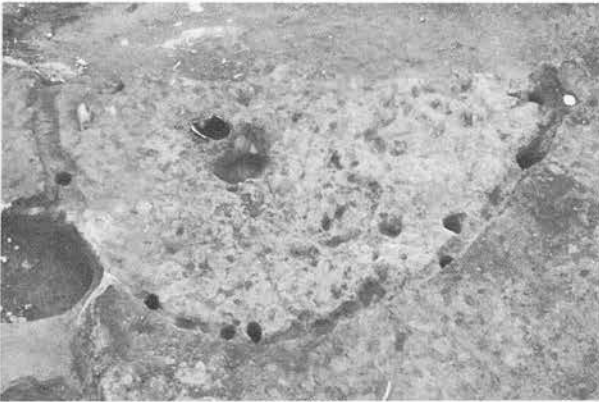
写真図版 4



A 遺物検出状況



B 遺構検出状況



C 完掘



D 炉跡

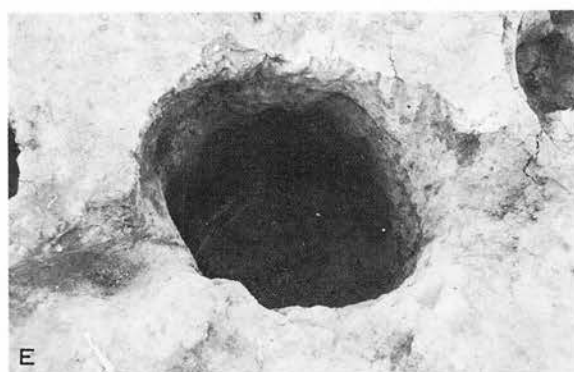
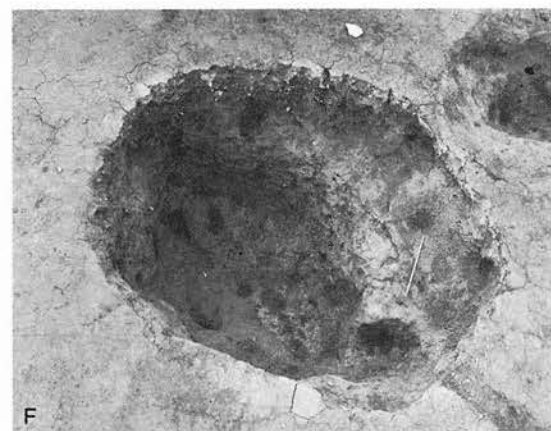


E 東西セクション



F 南北セクション

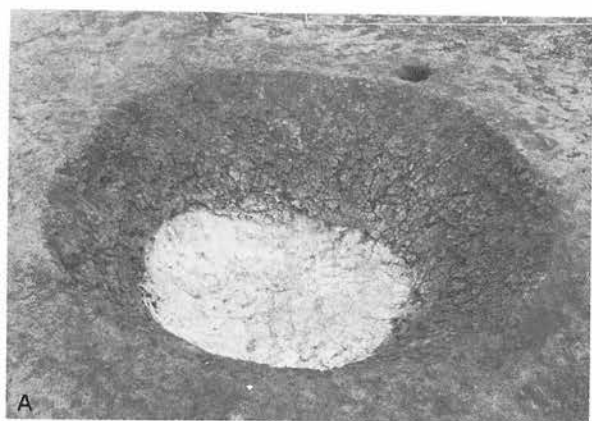
写真図版5 C12住居址



- A B12埋設炉
- B 柱穴群全景 南から
- C D-10 柱穴群
- D C-11 柱穴群
- E D-10 柱穴23
- F D-10 柱穴43
- G D-10 柱穴・29・D-10 No.2ピット

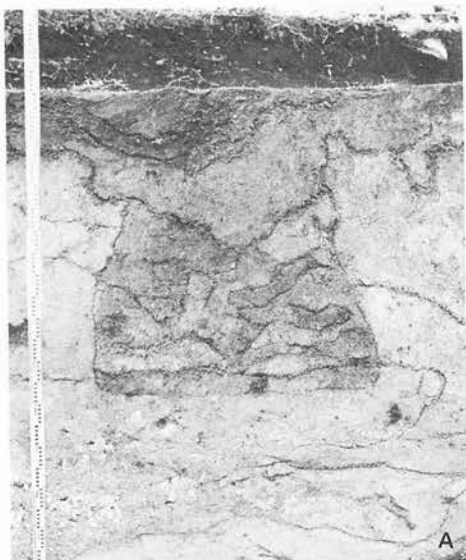
写真図版 6



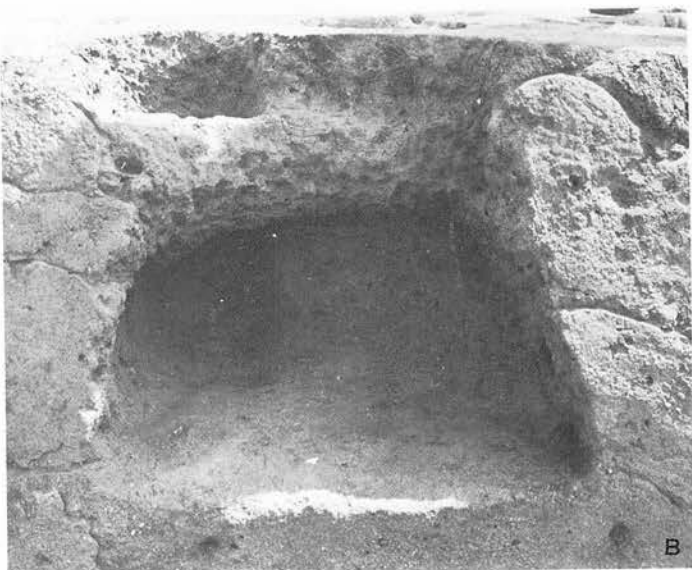


- A M-7ピット
- B D-10 No.1ピット
- C M-9ピット No.2 石検出状況
- D M-9ピット No.2 完掘
- E M-9ピット No.2 セクション
- F P-21ピット 土器検出状況
- G P-21ピット 完掘

写真図版7



A



B



C



D

A C-10 フラスコ形  
ピット土層断面

B C-10 フラスコ形  
ピット完掘

C J-10 ピット剝片検出状況

D J-10 ピット剝片検出状況

E J-10 ピット完掘



E

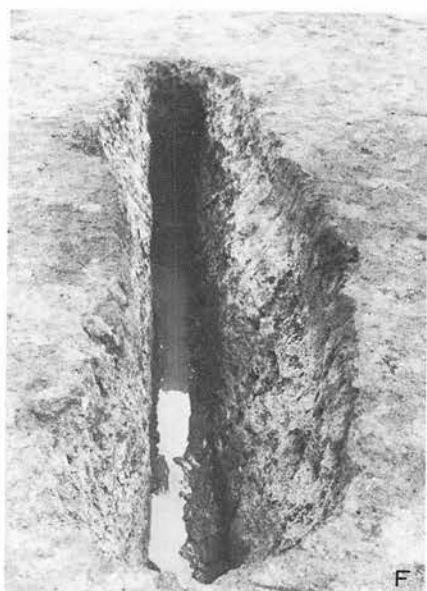
写真図版 8



N-7陥し穴状遺構



D-9陥し穴状遺構



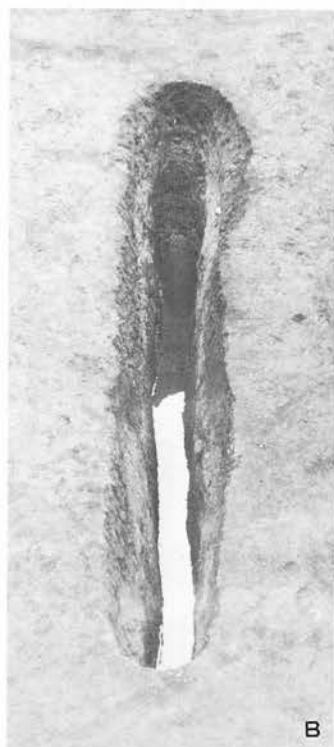
J-9陥し穴状遺構



D-9陥し穴状遺構セクション



J-9陥し穴状遺構セクション



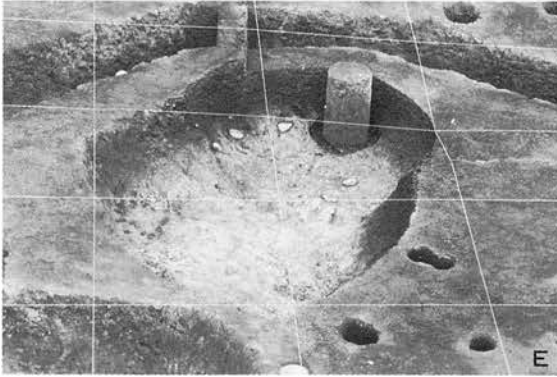
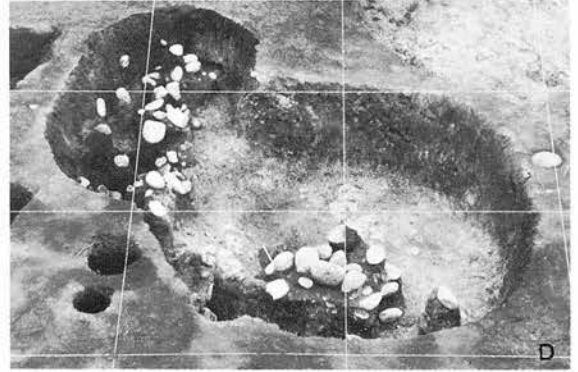
K-6陥し穴状遺構



D-9陥し穴状遺構 土器検出状況  
写真図版 9



L-6陥し穴状遺構



- A N-5周溝状遺構
- B N-5周溝状遺構断面
- C N-5周溝状遺構No.1ピット
- D N-5周溝状遺構No.2, No.3ピット
- E N-5周溝状遺構No.4ピット
- F J-11周溝状遺構 北西より
- G J-11周溝状遺構 断面

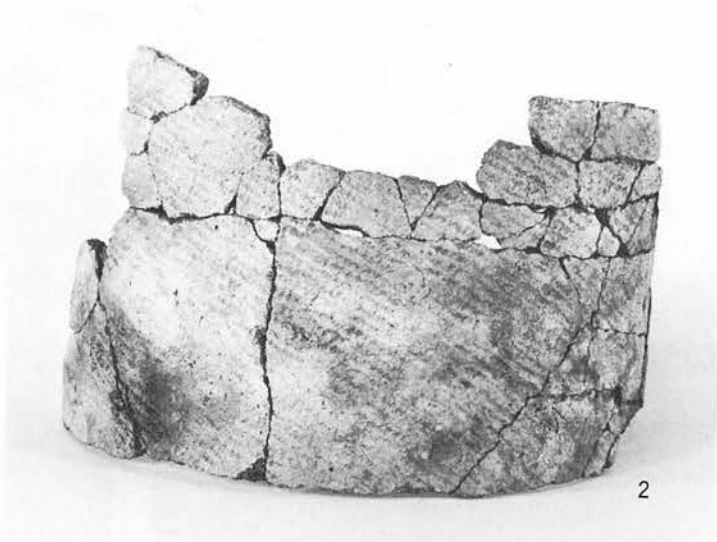


写真図版10





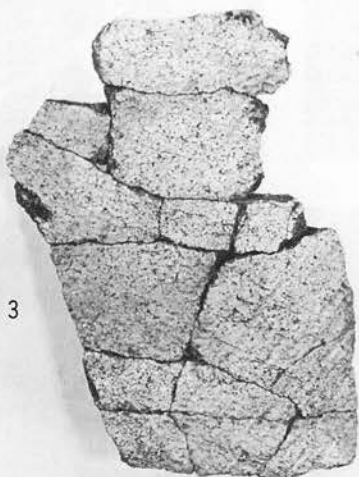
1



2



3



4



5



6



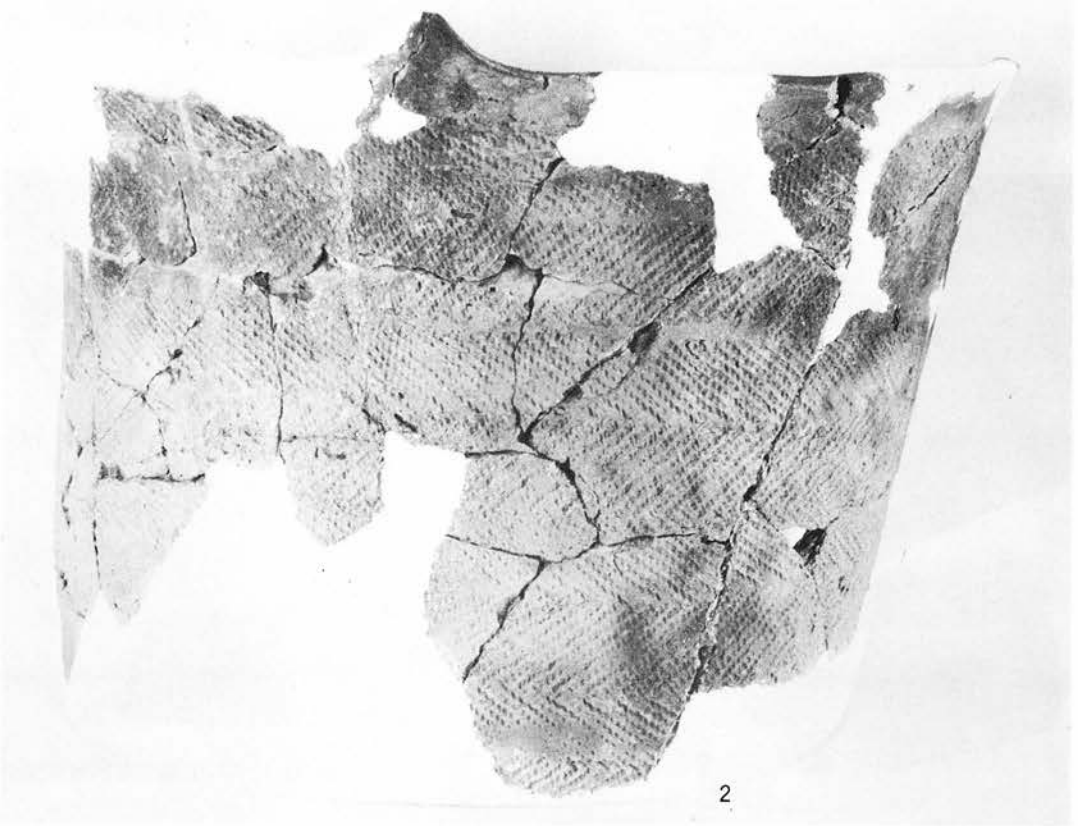
7



8

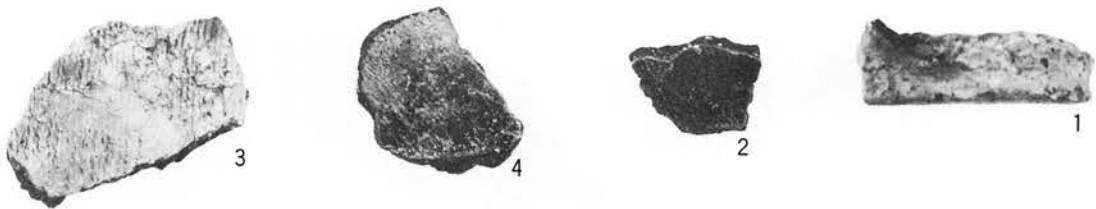
写真図版11 C12住居址出土遺物

S=1/3



写真図版12 遺構出土遺物

S=1/3



3

4

2

1



5

6

1~6 H-9 No.2ピット出土



7

D-10 No.2ピット出土



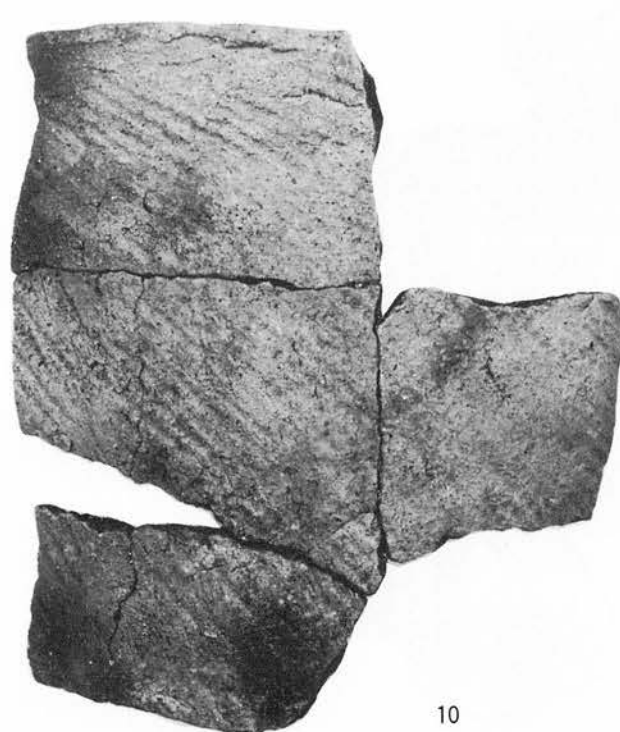
9

J-9陥し穴状遺構出土

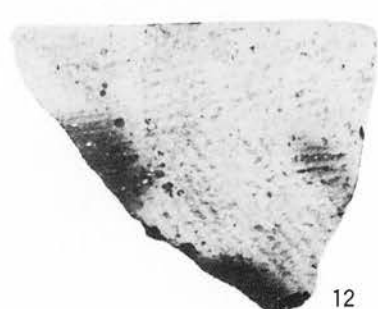


8

D-10 No.1ピット出土



10



12



11

10.11.12 D-9 陥し穴状遺構出土

写真図版13 遺構出土遺物



1



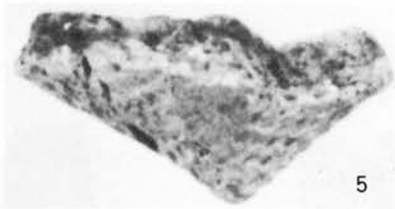
3



2



4



5

1.2.3.4 S=1/2

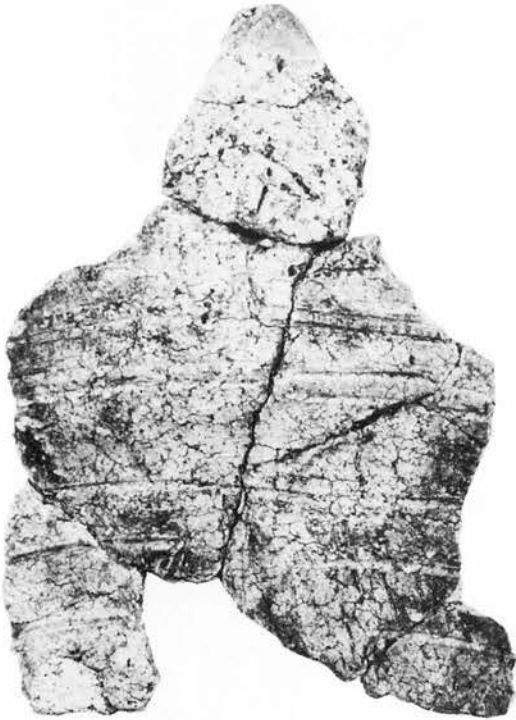
5 実大



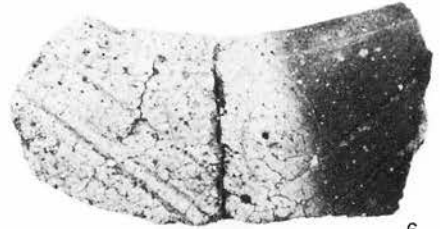
1



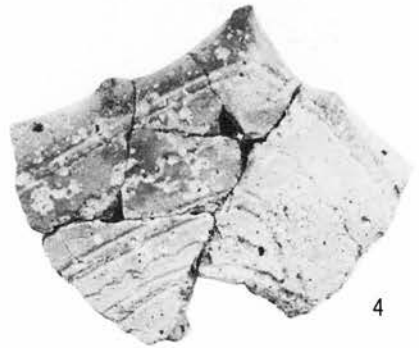
5



2



6



4



3



7



8

写真図版15 土器B

S=1/2



写真図版16 土器C

S=1/2



1



2



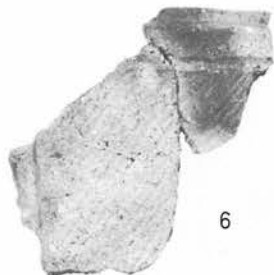
3



4



5



6



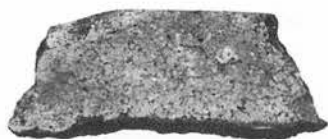
7



8



9



10



11

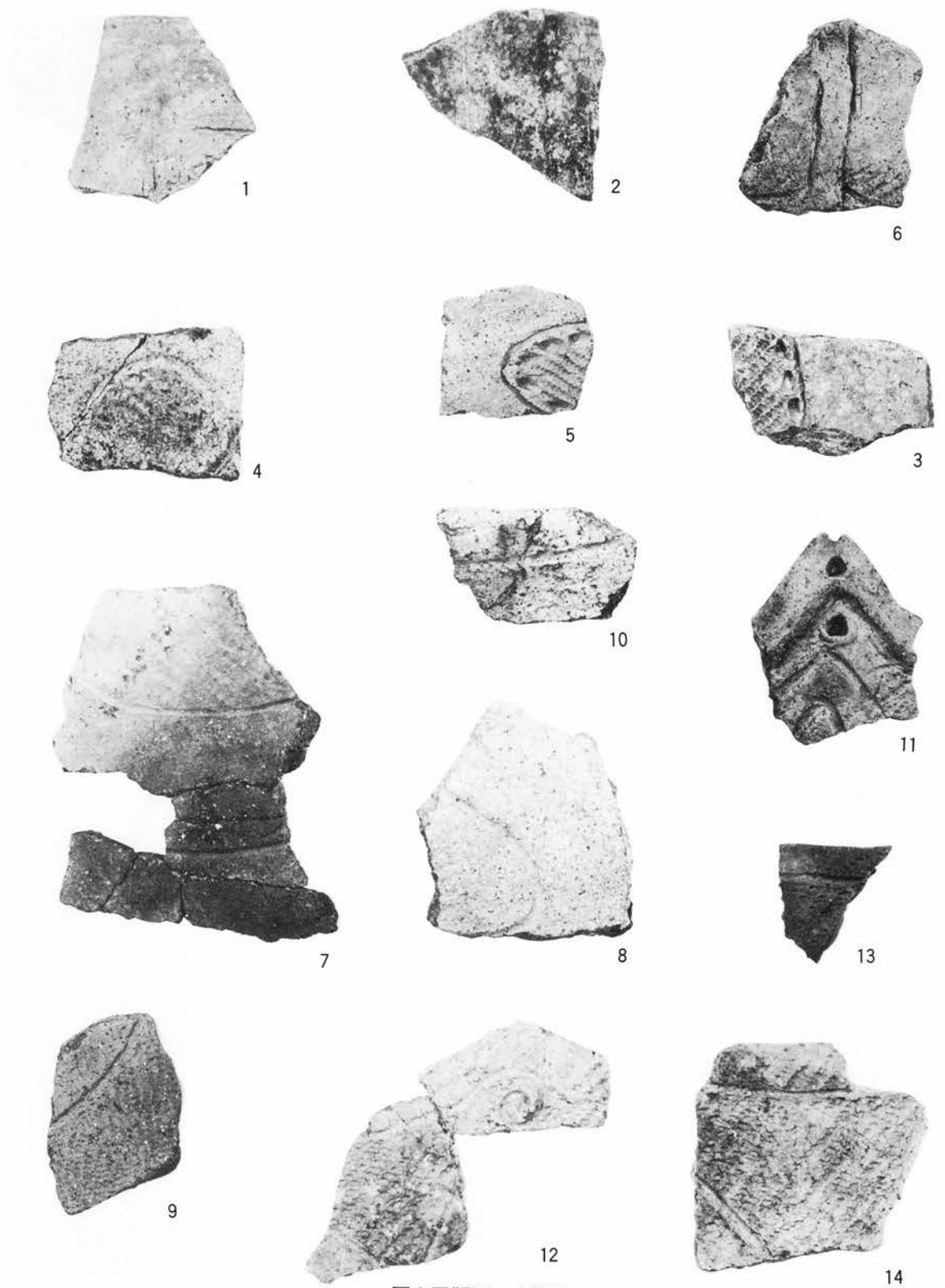


12

写真図版17 土器D

S=1/2





写真図版18 土器E

S=1/2





1



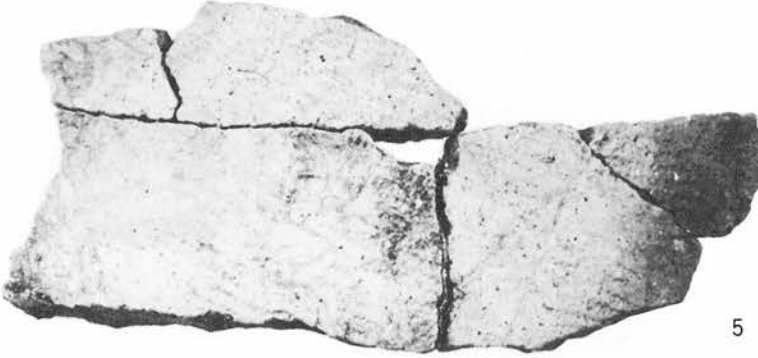
2



3



4



5



7



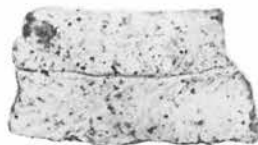
6



8



9



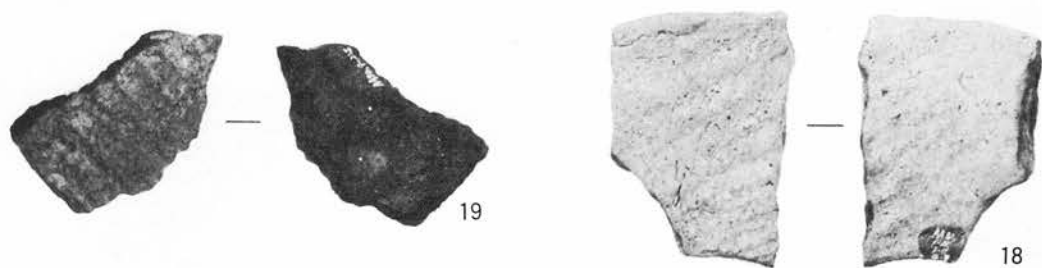
10



11

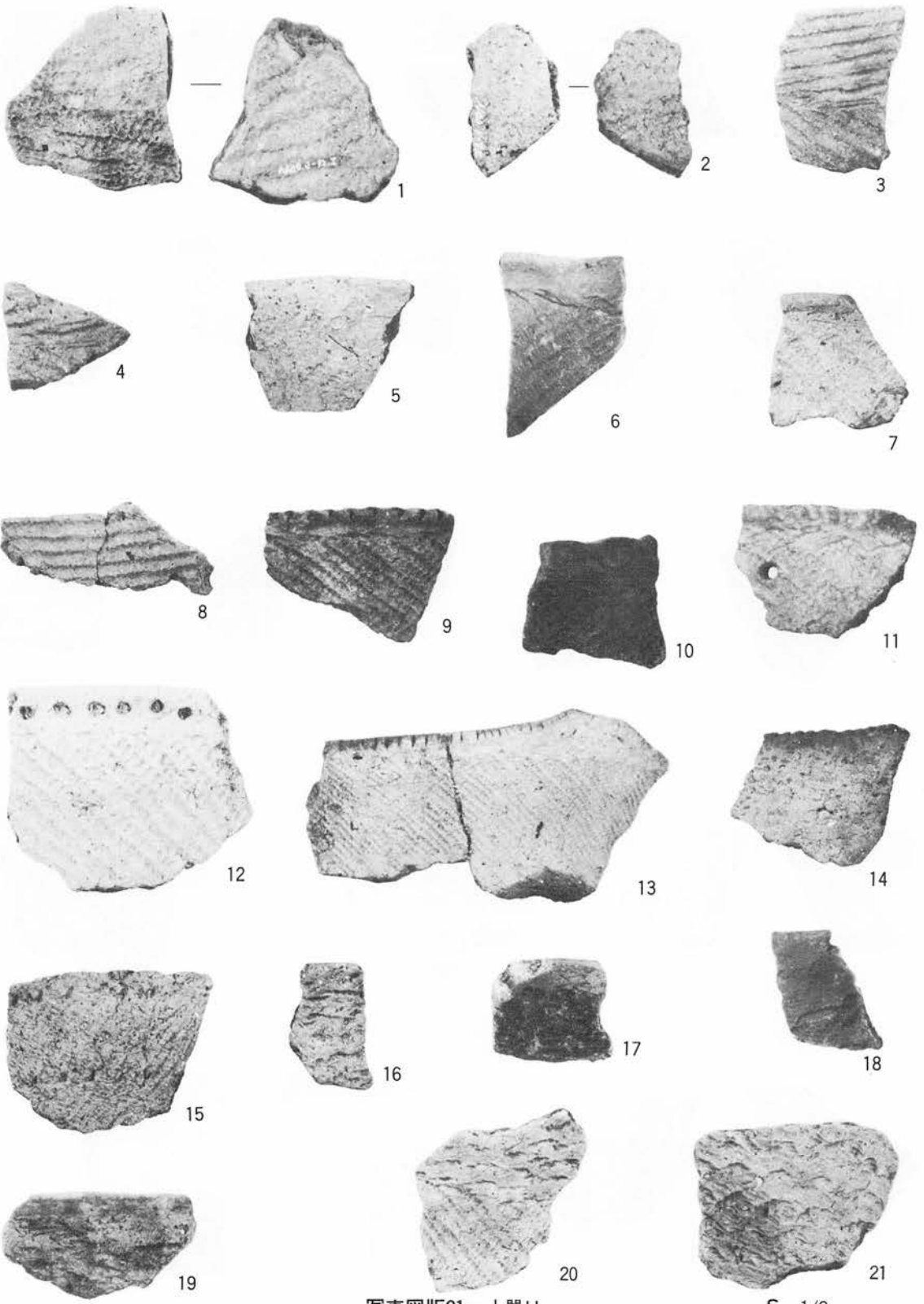
写真図版19 土器F

S=1/2



写真図版20 土器G

S=1/2



写真图版21 土器H

S=1/2



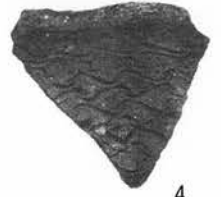
1



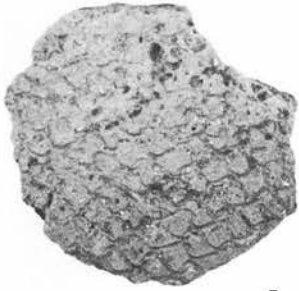
2



3



4



5



6



7



8



10



13



9



14



11



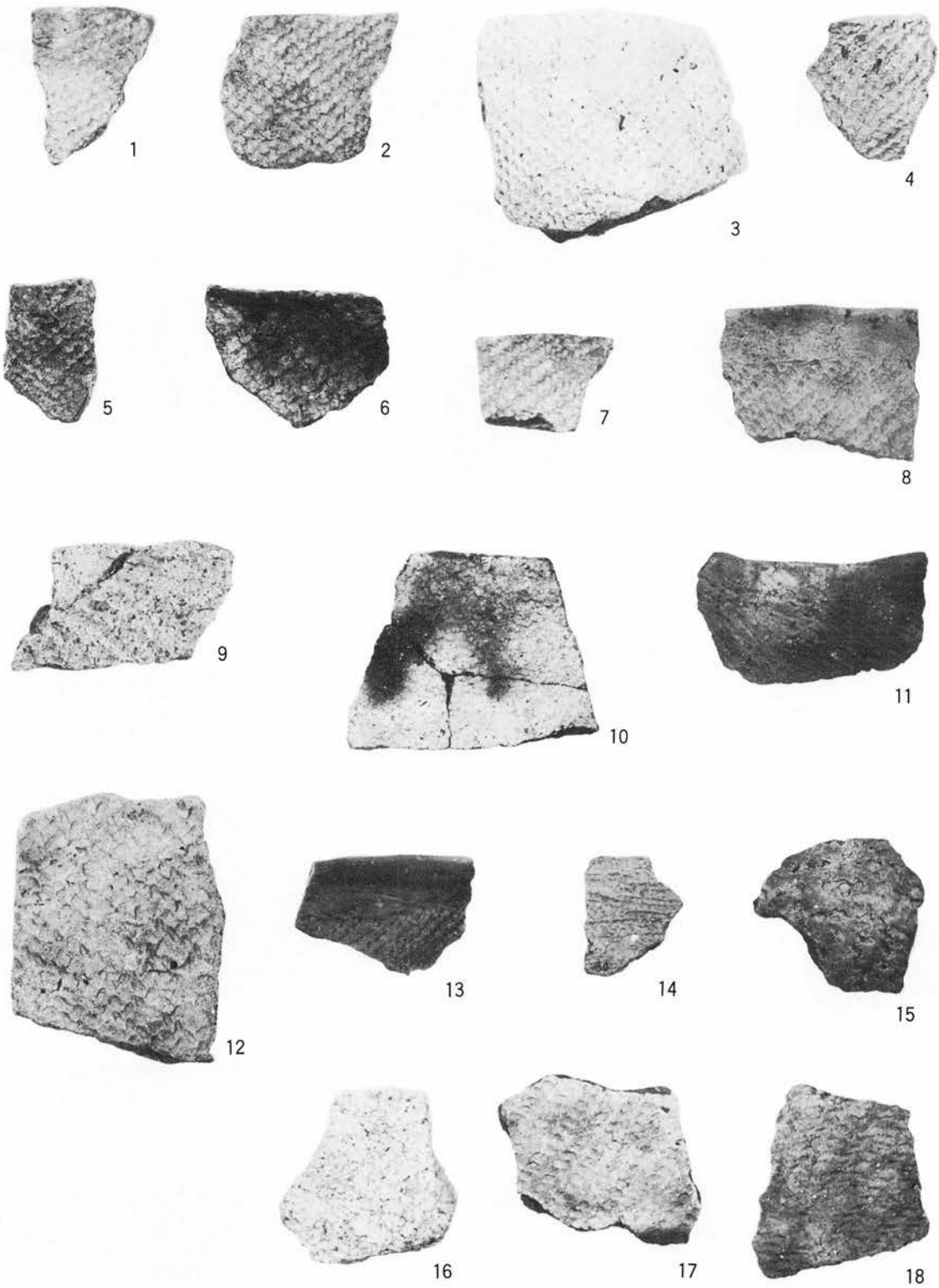
12



15

写真图版22 土器 I

S=1/2

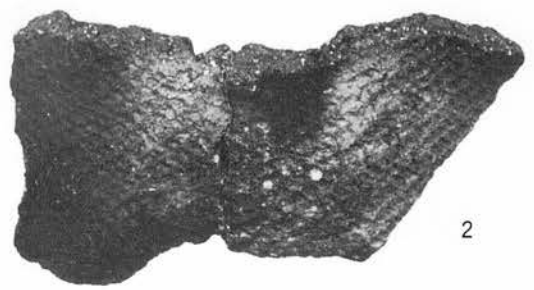


写真図版23 土器J

S=1/2



1



2



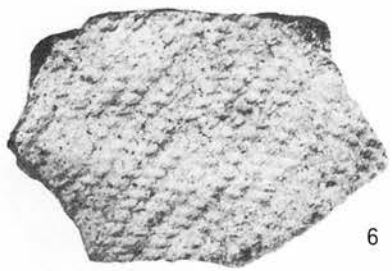
3



4



5



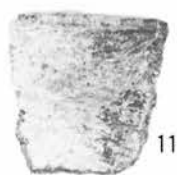
6



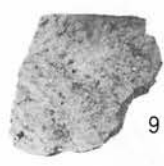
7



8



9



10



11



12



13



1



2



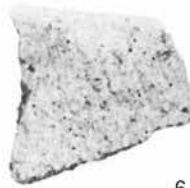
3



4



5



6



7



11



9



10



12



8



14



15



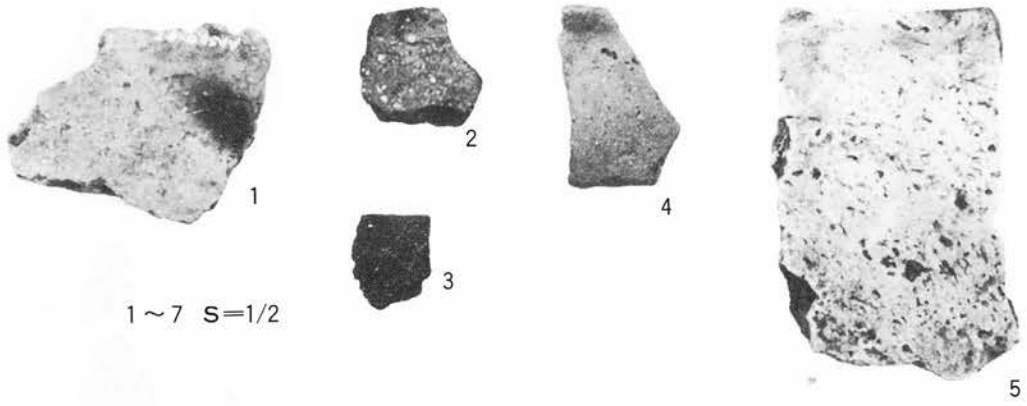
13



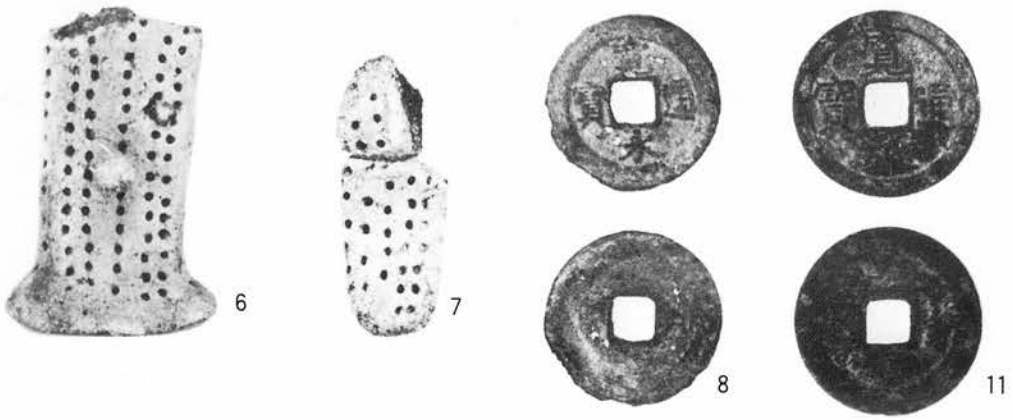
16

写真図版25 土器L

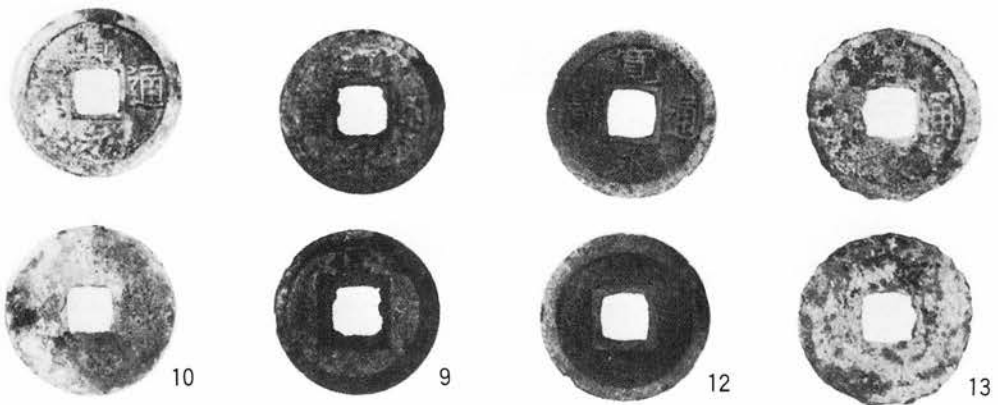
S=1/2



1~7 S=1/2

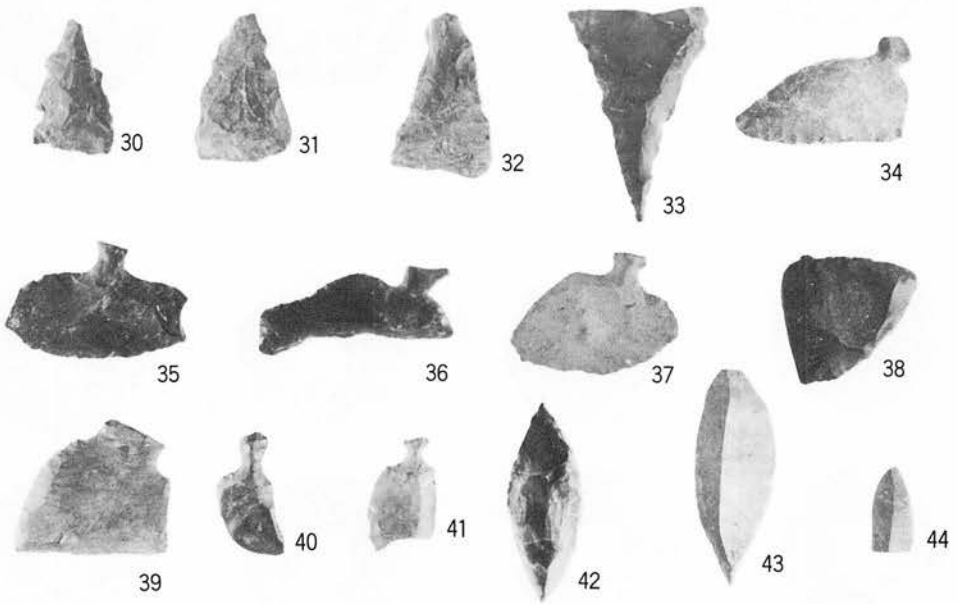
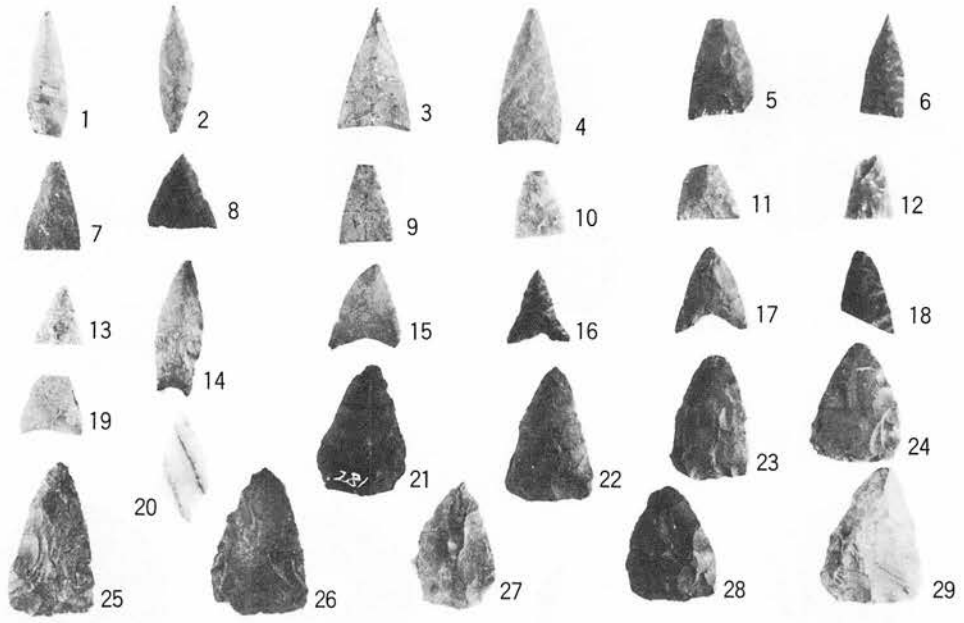


8~13 S=1/1



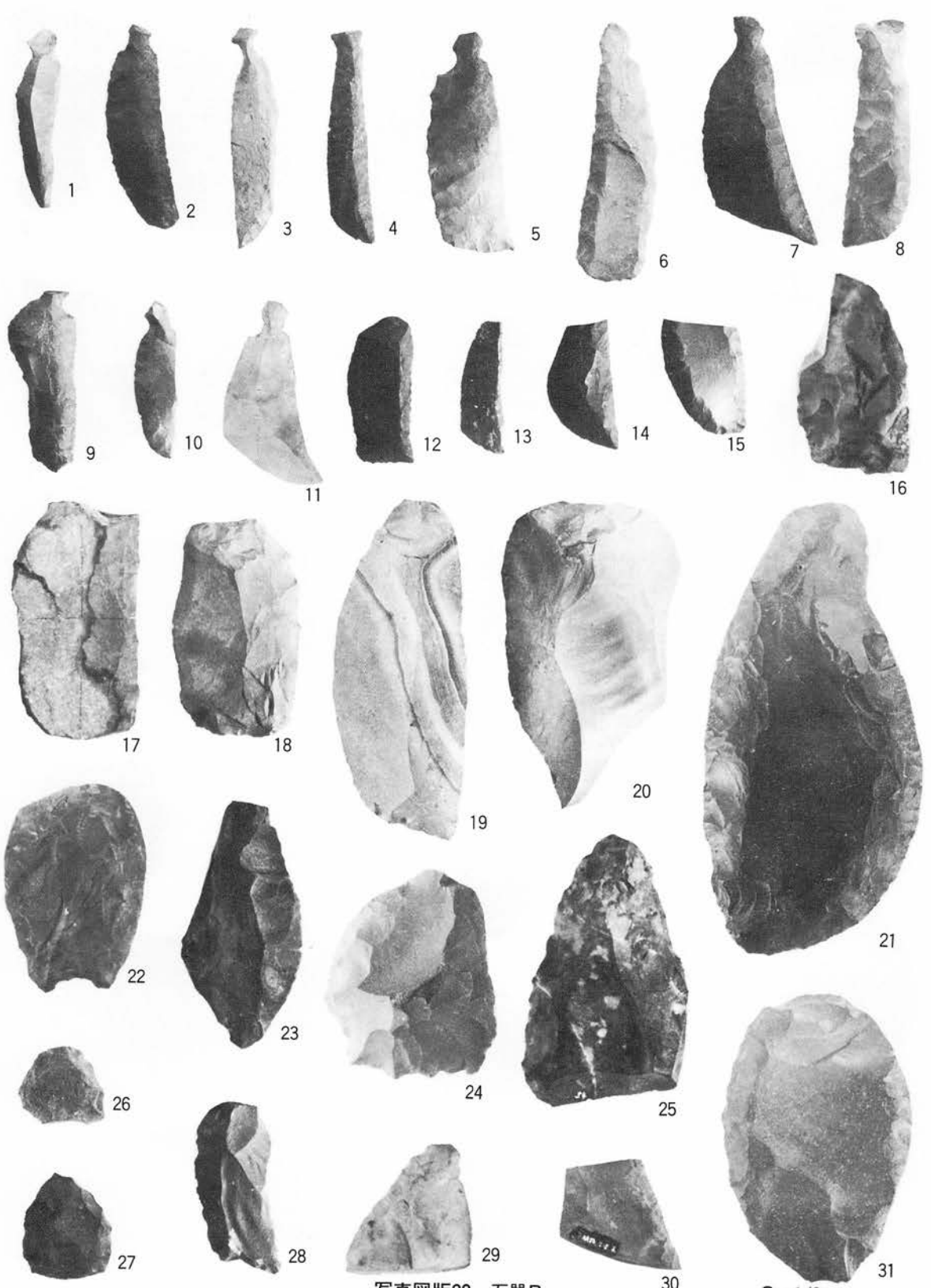
写真図版26 土器・土偶・古銭





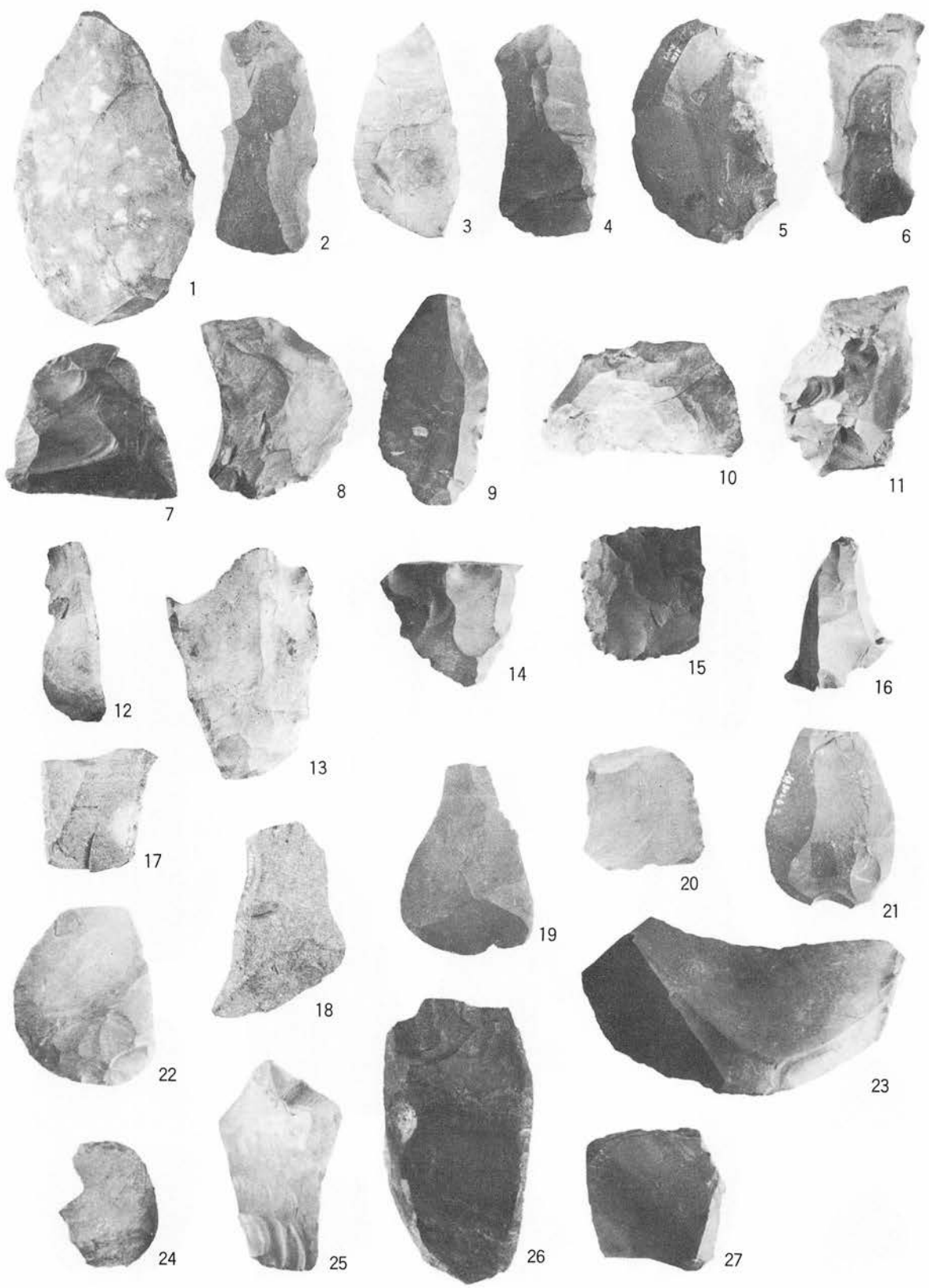
写真图版27 石器A

S=1/2



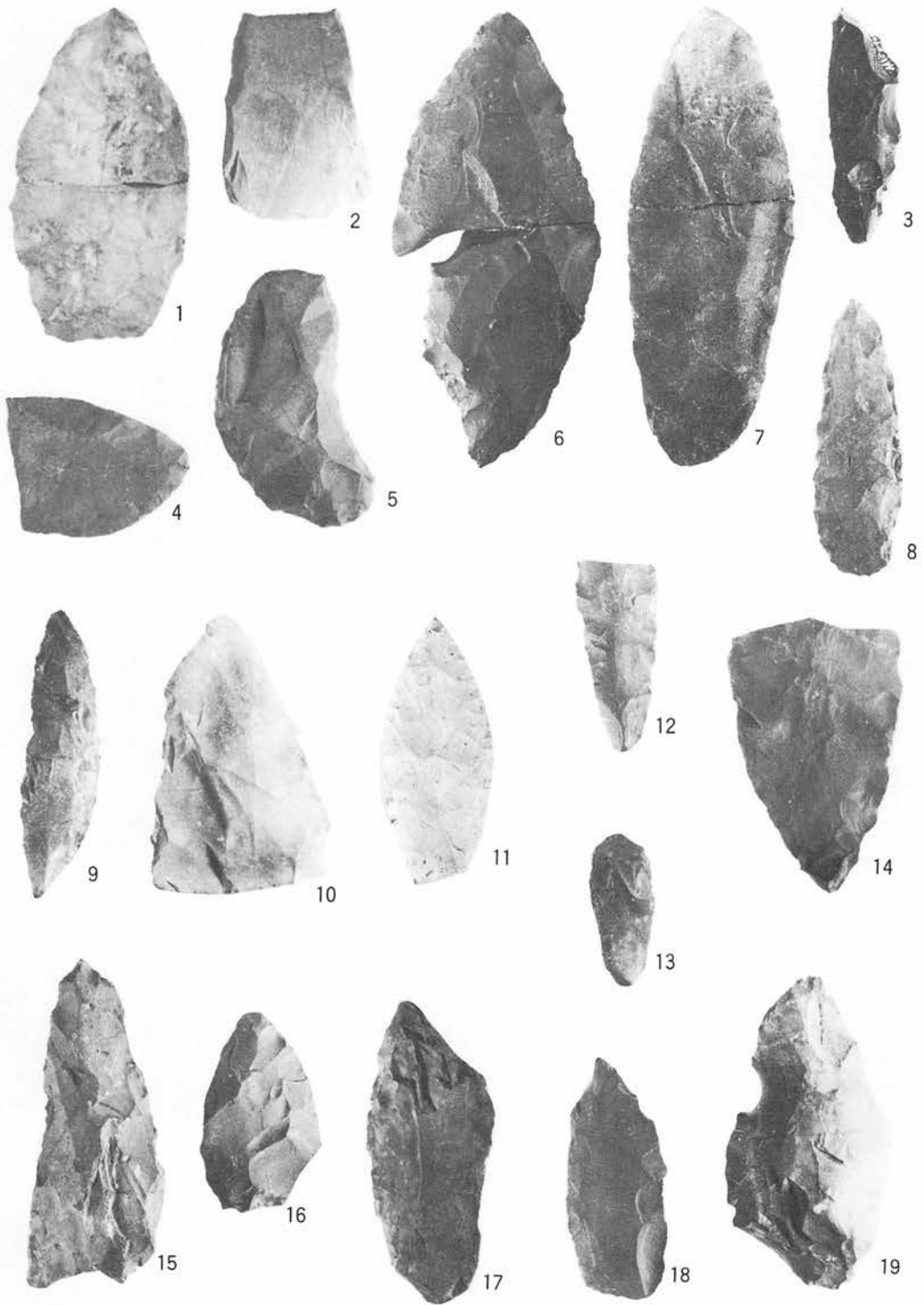
写真図版28 石器B

S=1/2



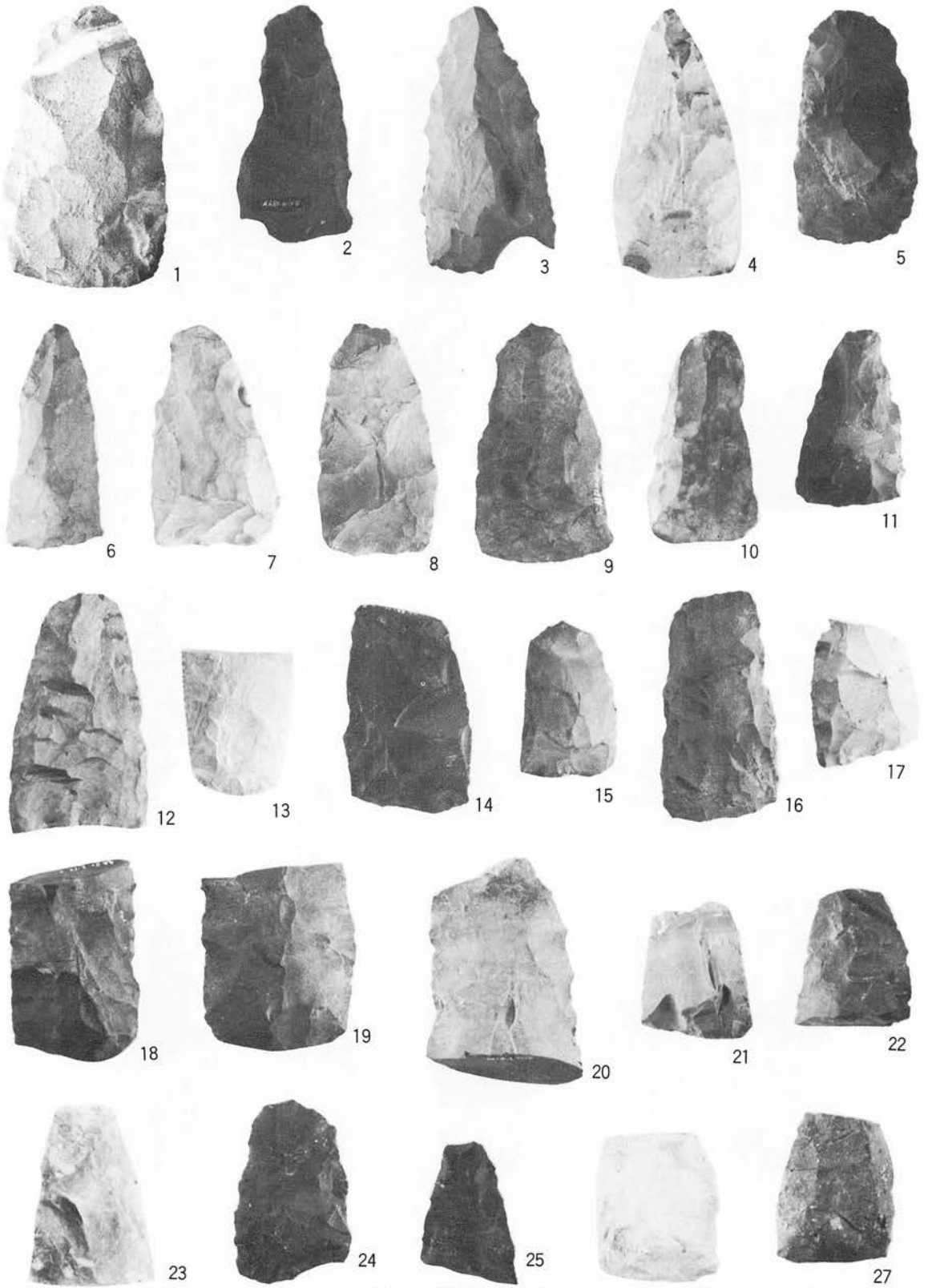
写真図版29 石器C

S=1/2



写真図版30 石器D

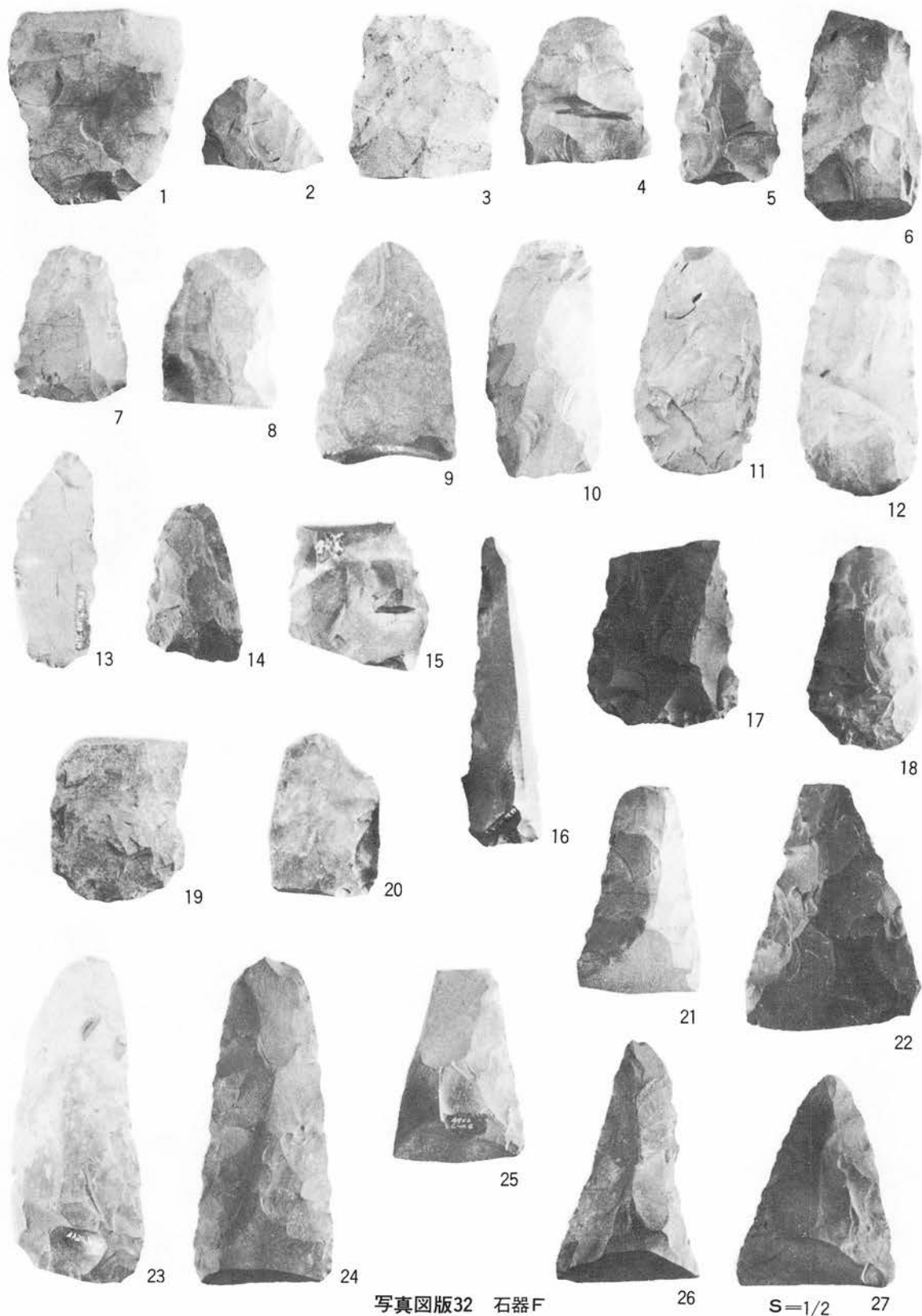
S=1/2



写真图版31 石器E

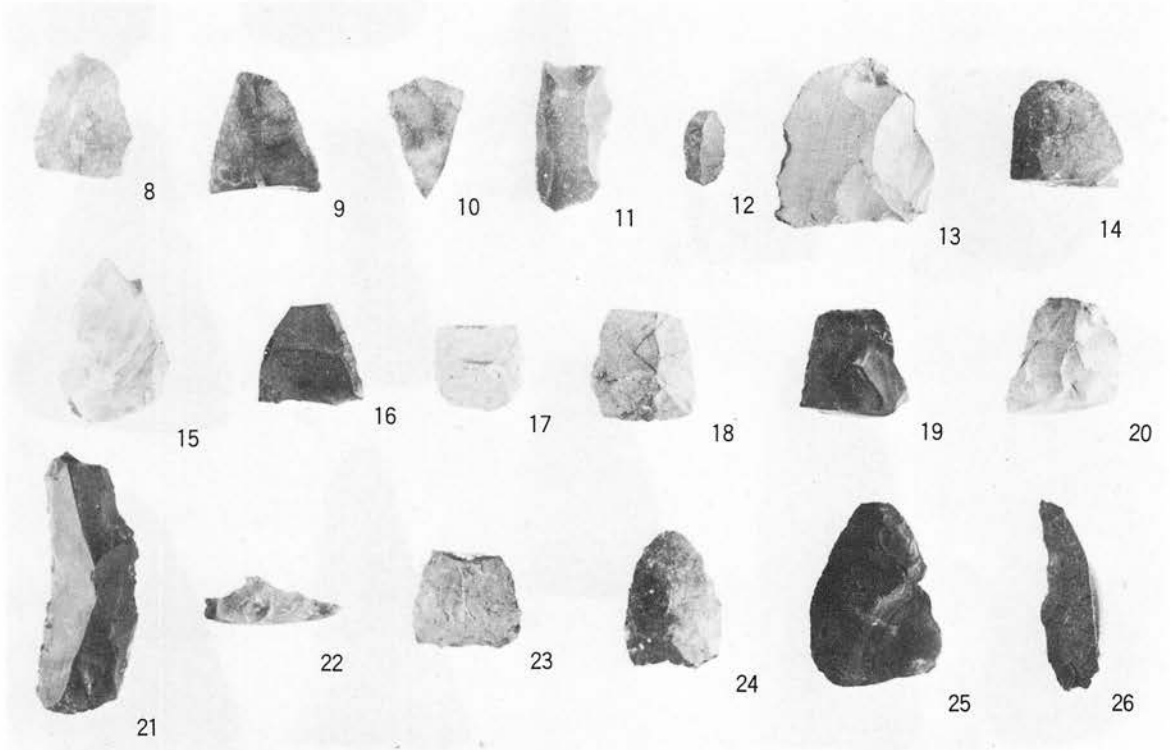
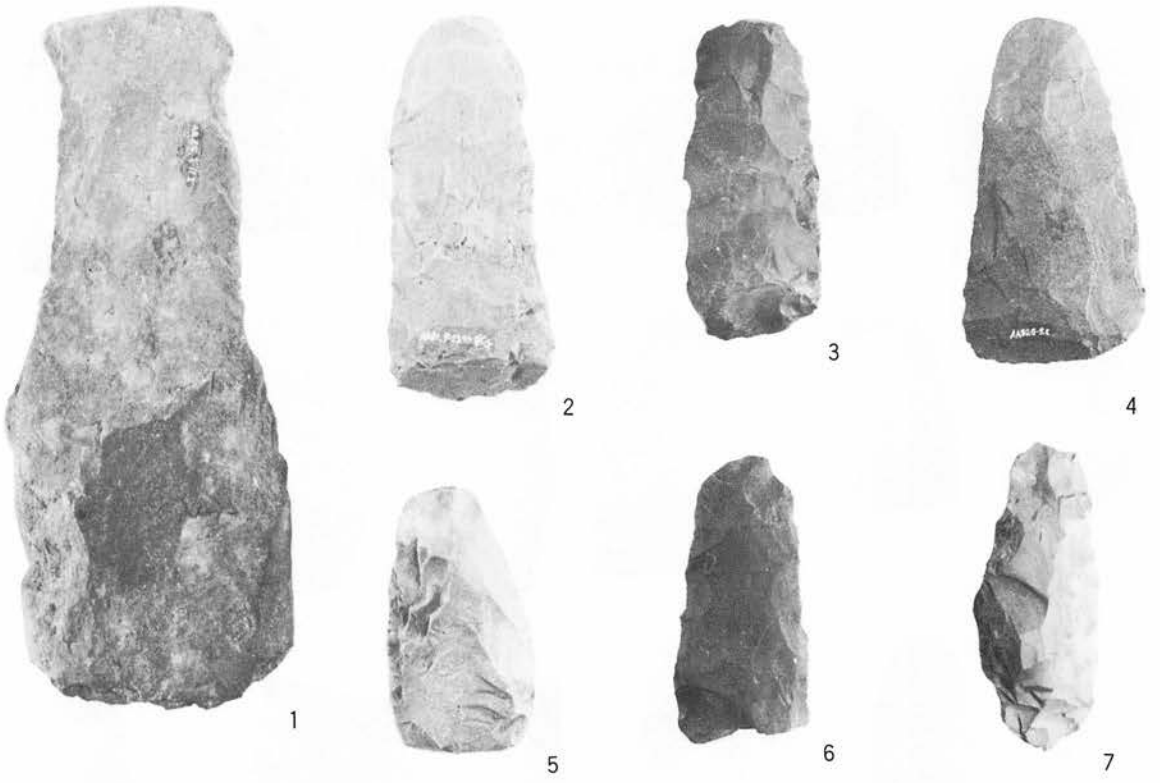
26

S=1/2



写真図版32 石器F

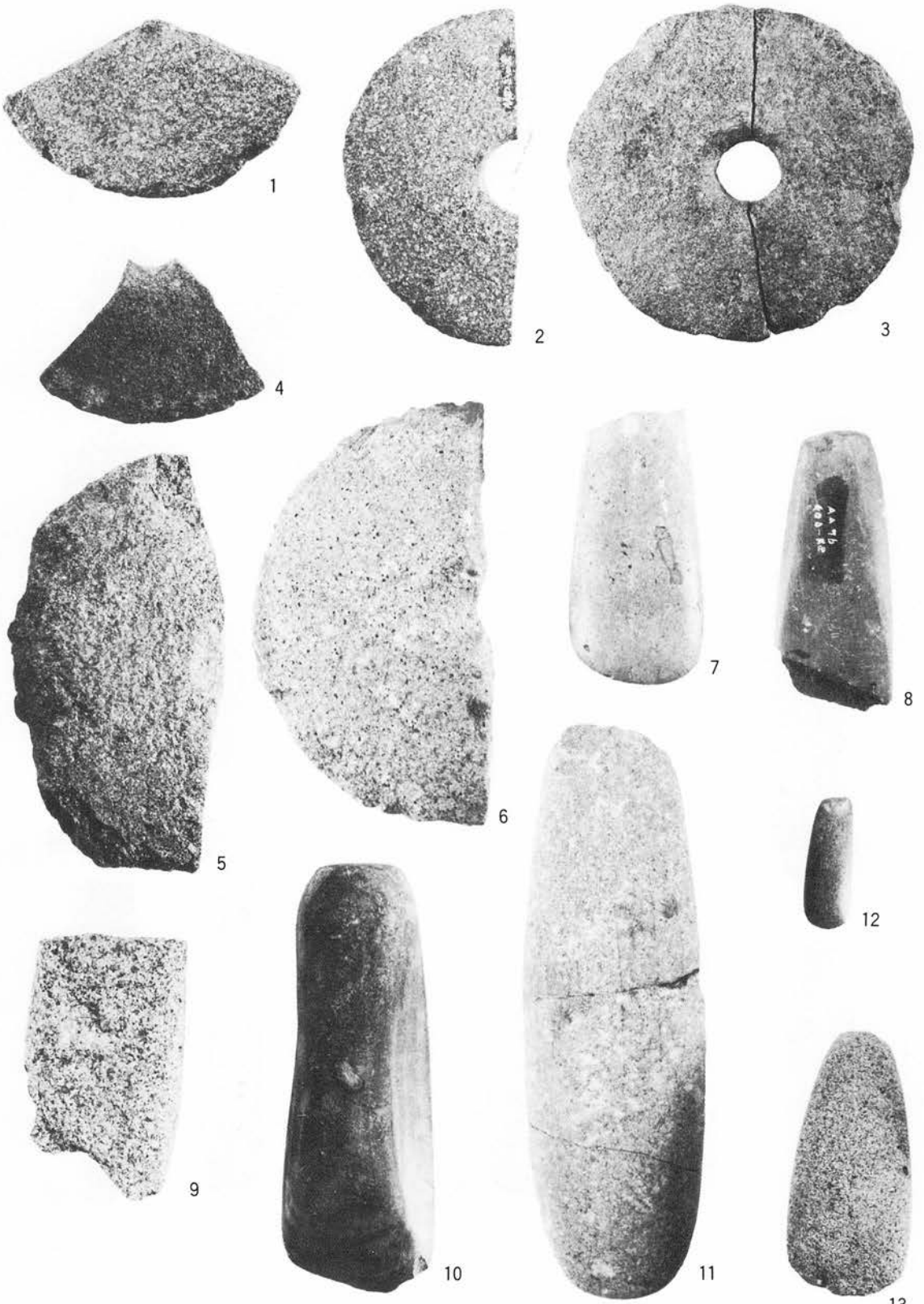
S=1/2 27



写真図版33 石器G

S=1/2





写真図版34 石器H

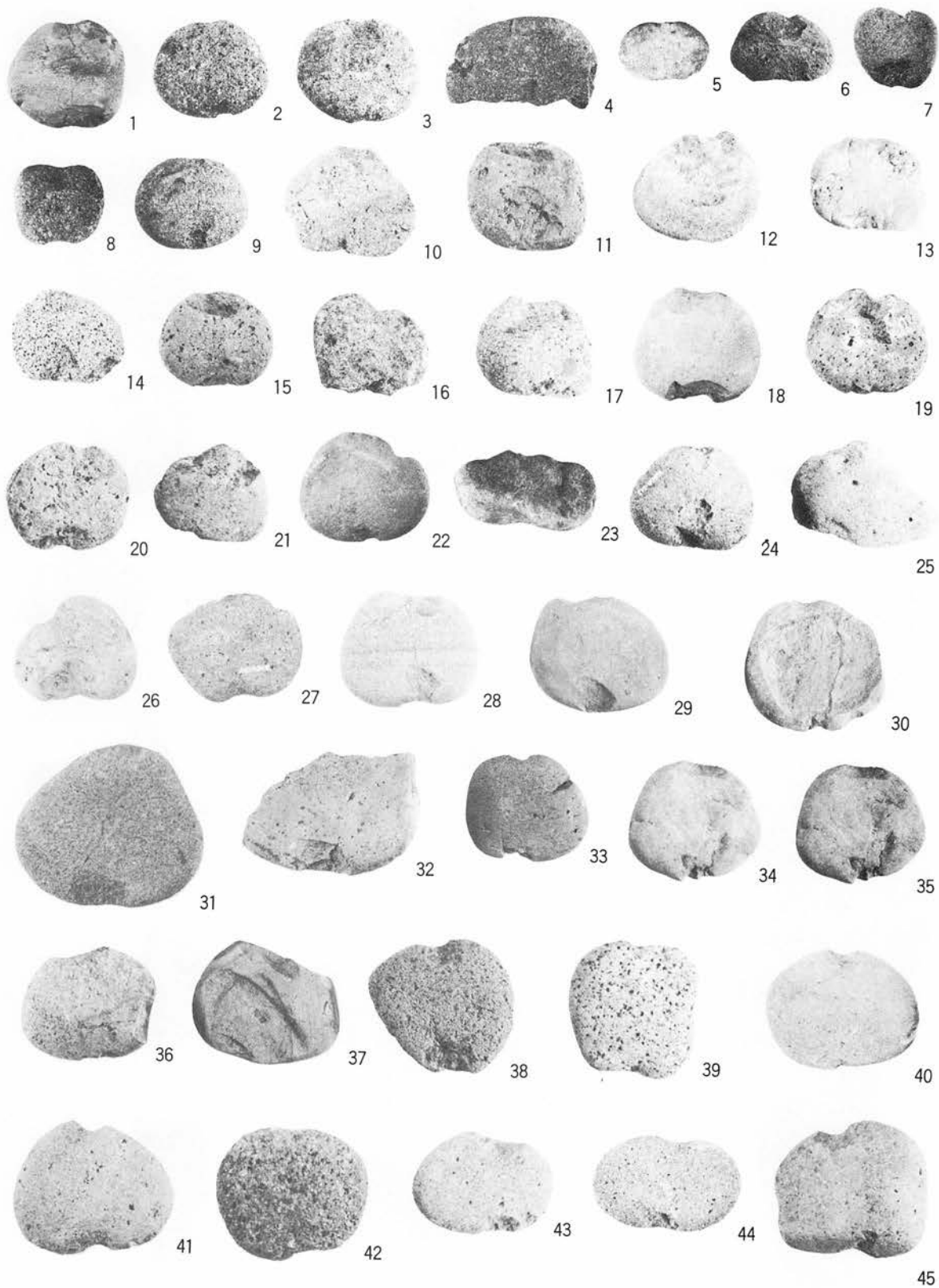
S=1/2 13





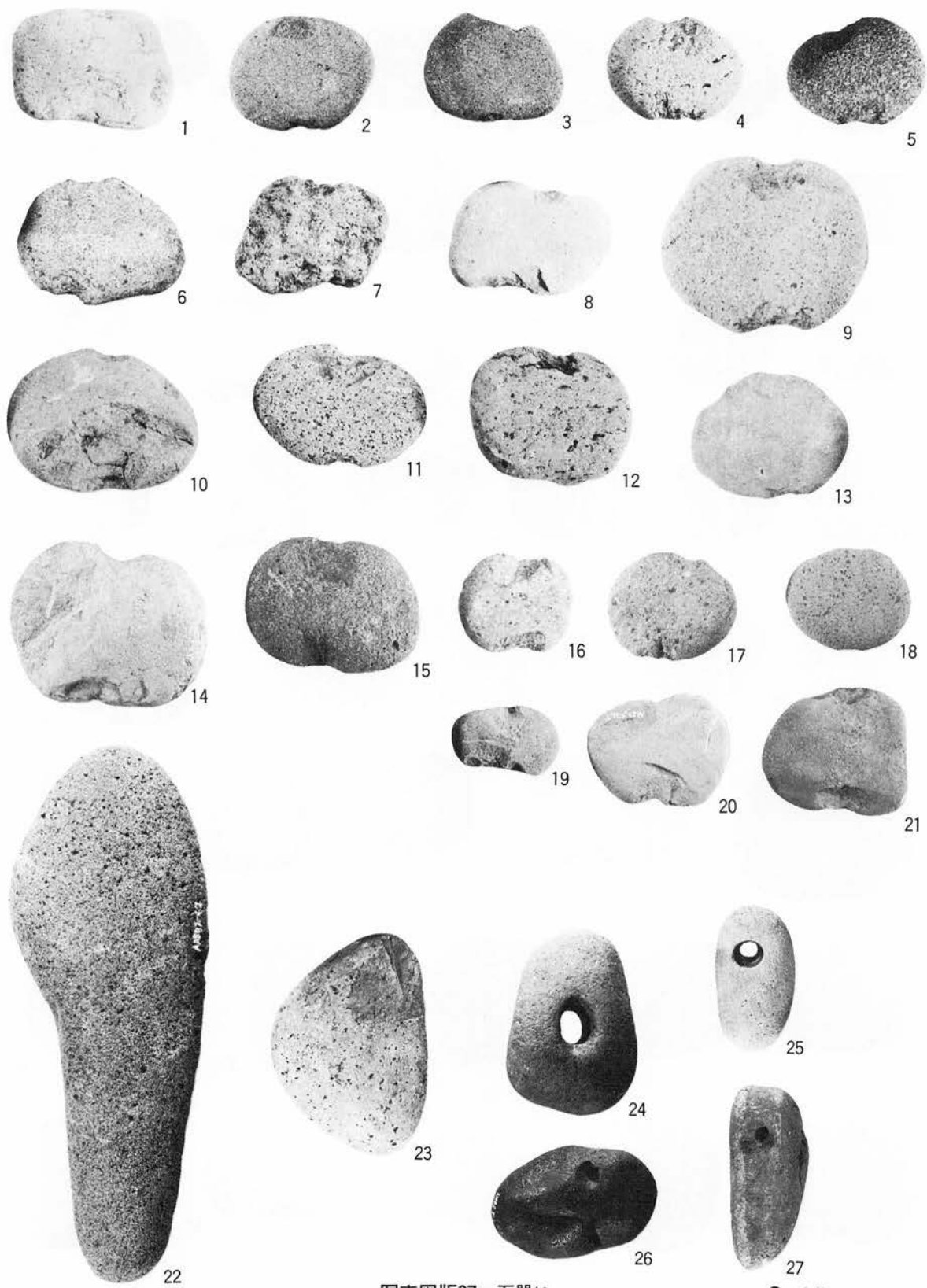
写真図版35 石器 I

S=1/4



写真図版36 石器J

S=1/3



写真图版37 石器K

S=1/3



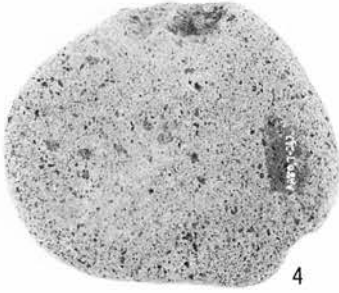
1



2



3



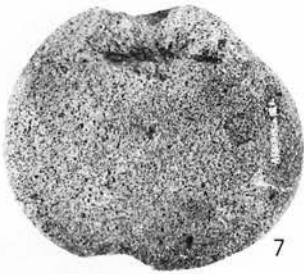
4



5



6



7



8



9



10

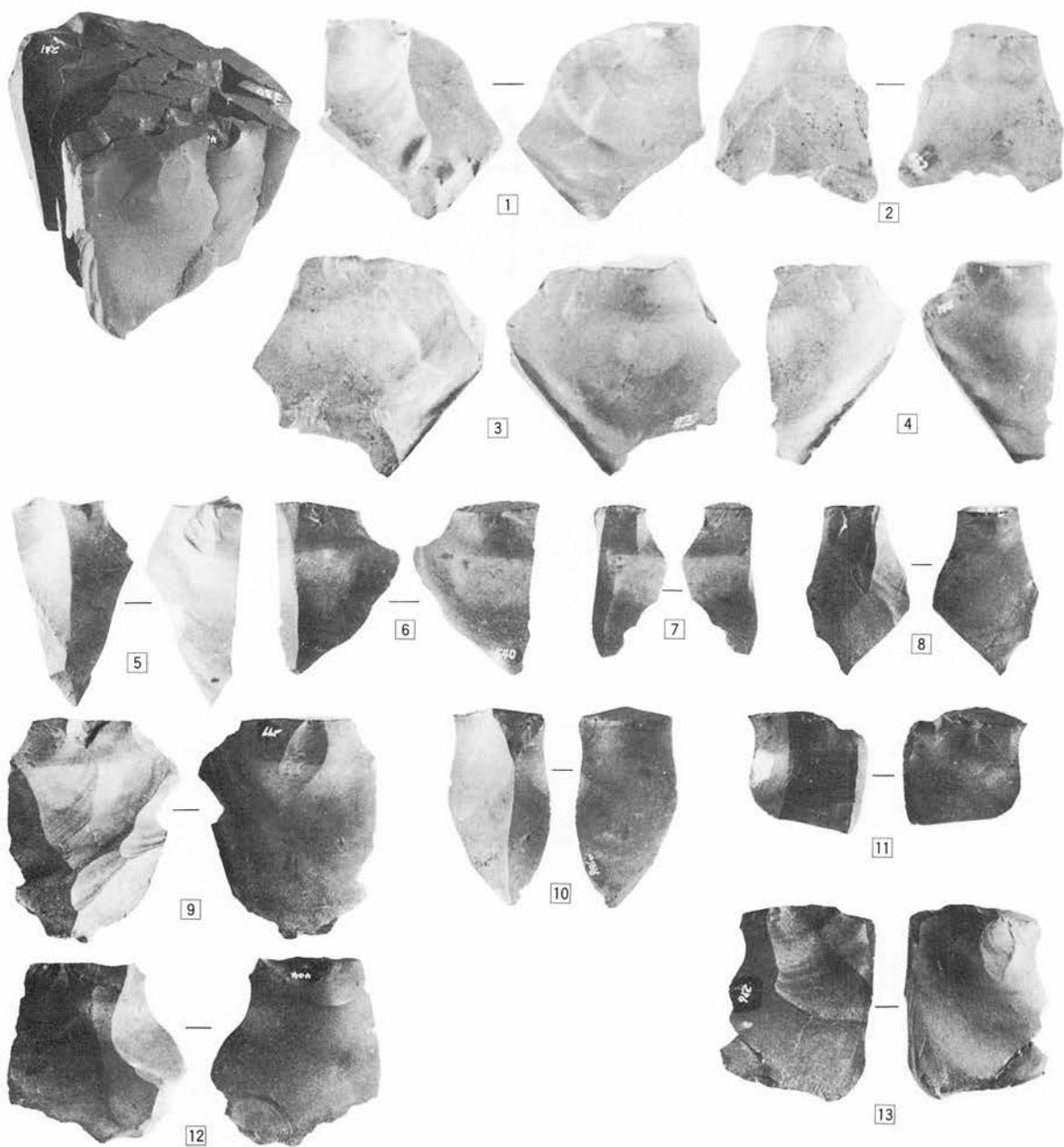
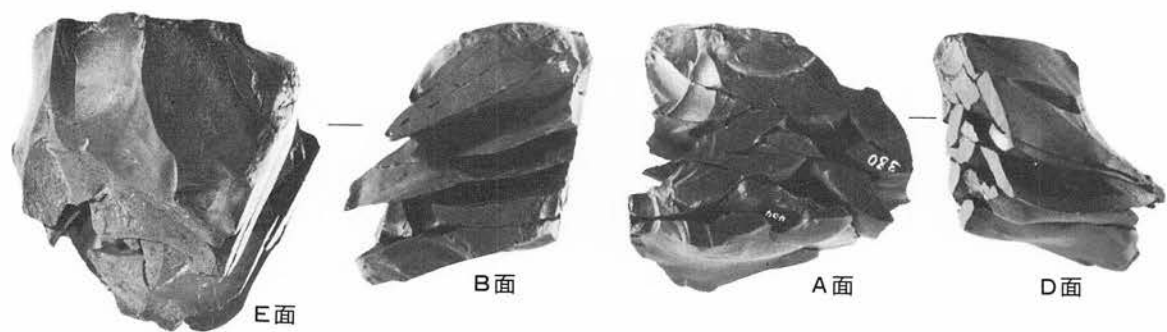


11



写真図版39 墓拵柄鏡出土状況

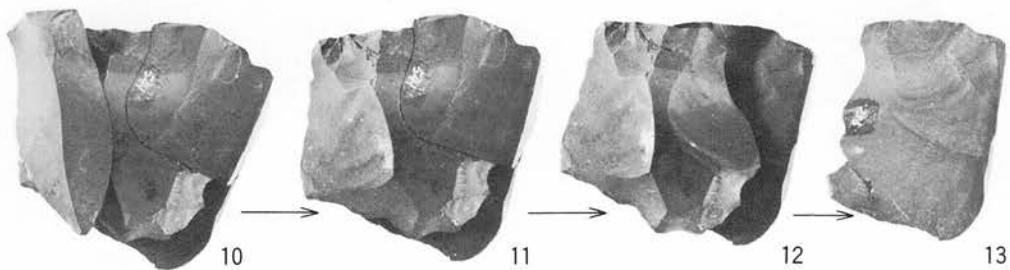
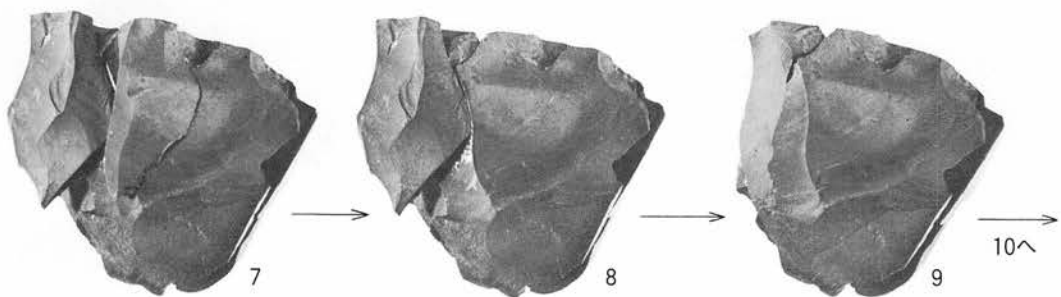
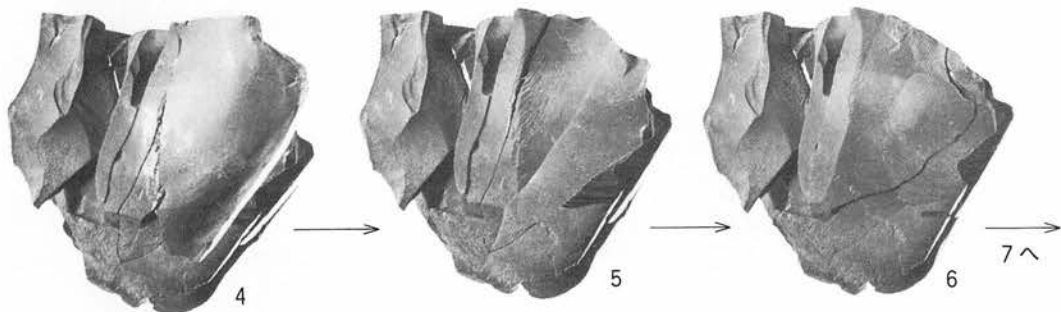
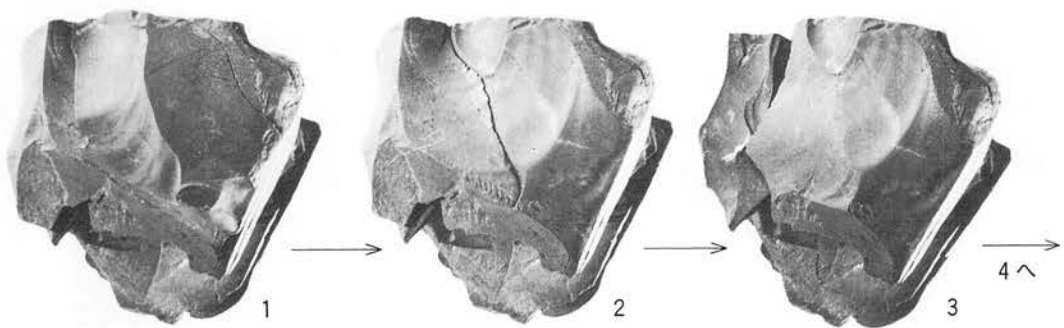
剝片接合資料  
写真図版



写真図版40 接合資料1

S=1/2

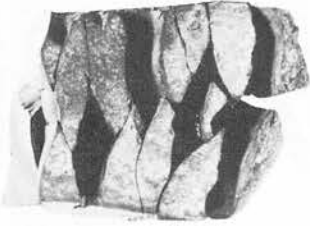




写真図版41 接合資料1

S=1/2





A面 (打面)



A+F面



E面



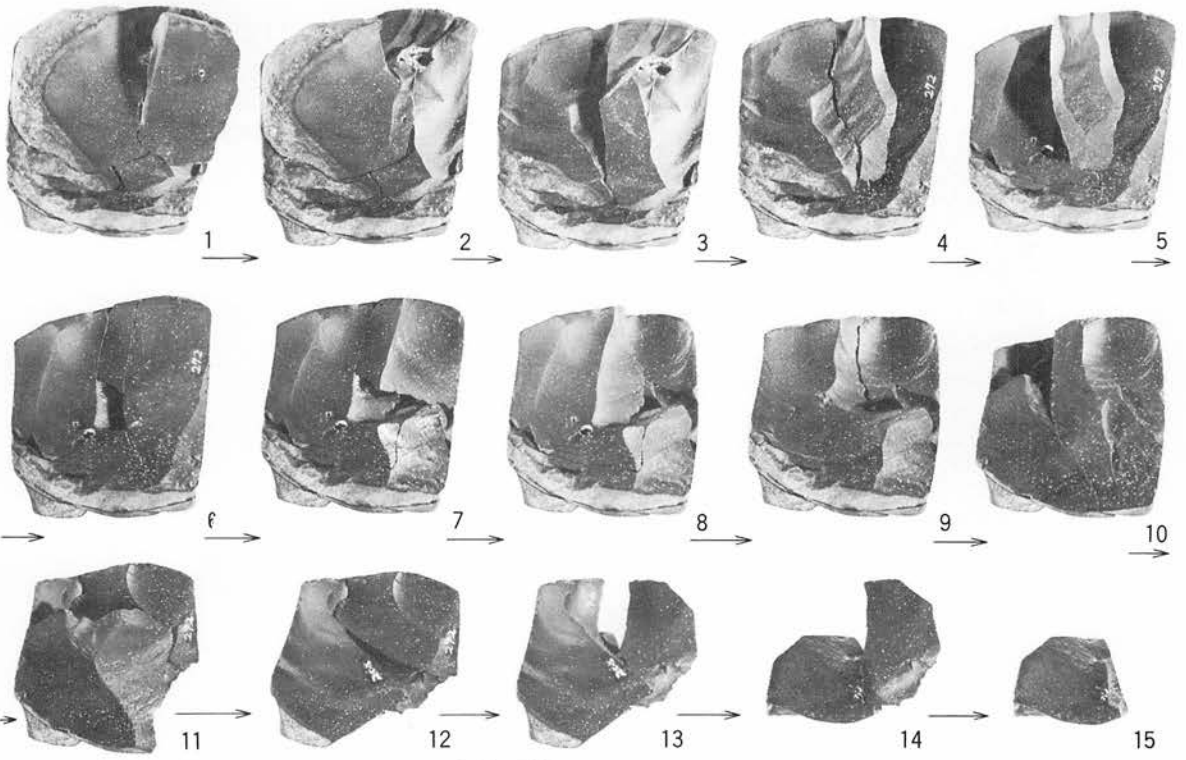
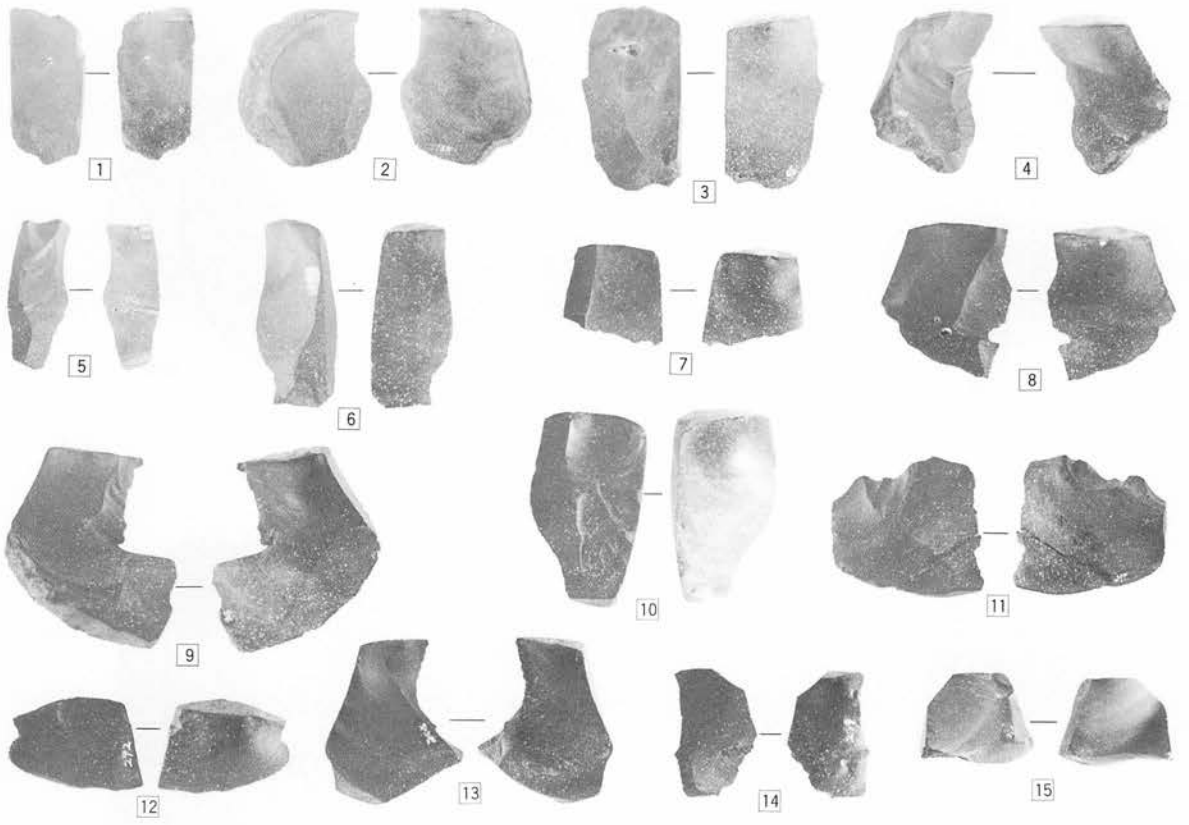
C面



B面



D面



写真図版43 接合資料2

S=1/3



A面 (打面)



B面



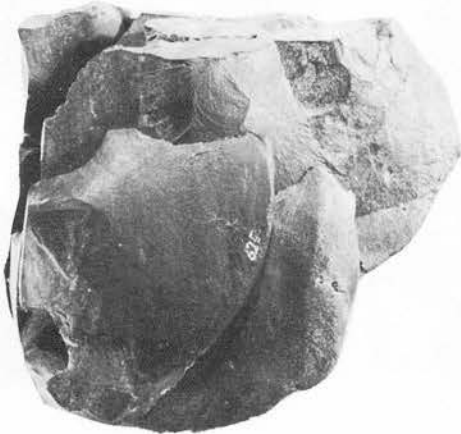
D面



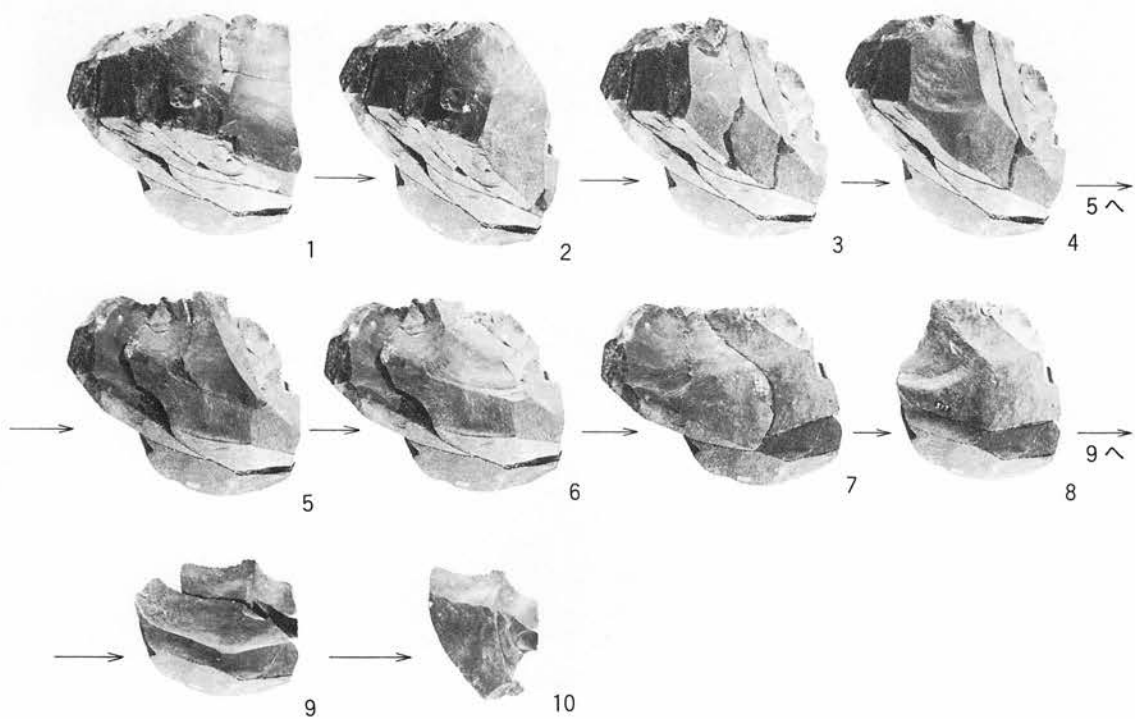
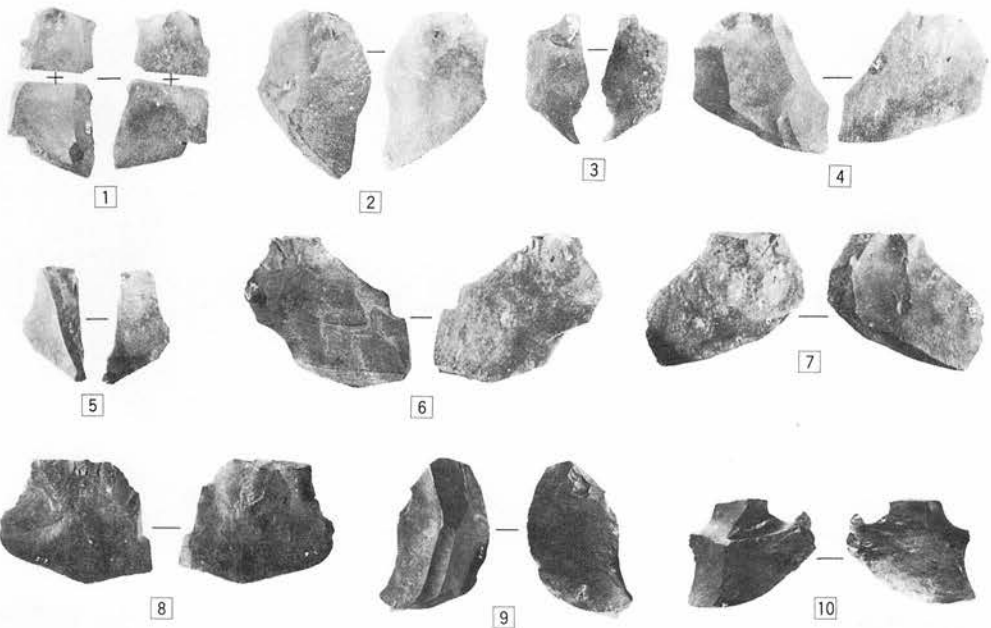
C面



E面

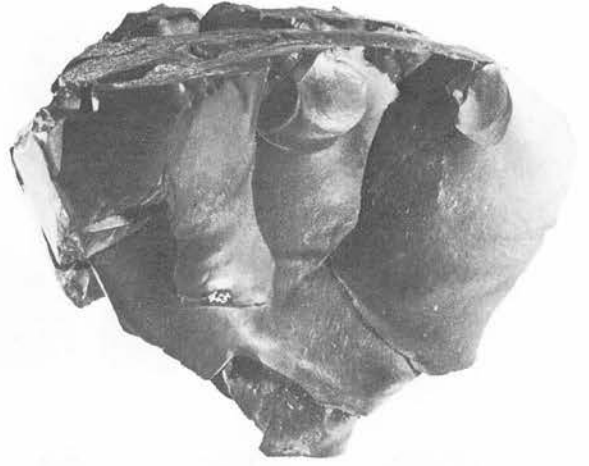


F面





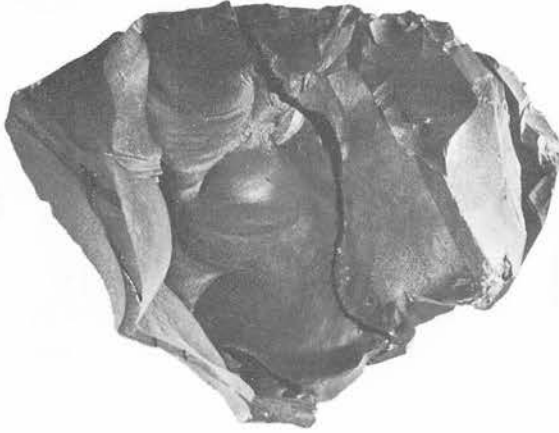
A面 (打面)



F面



D面



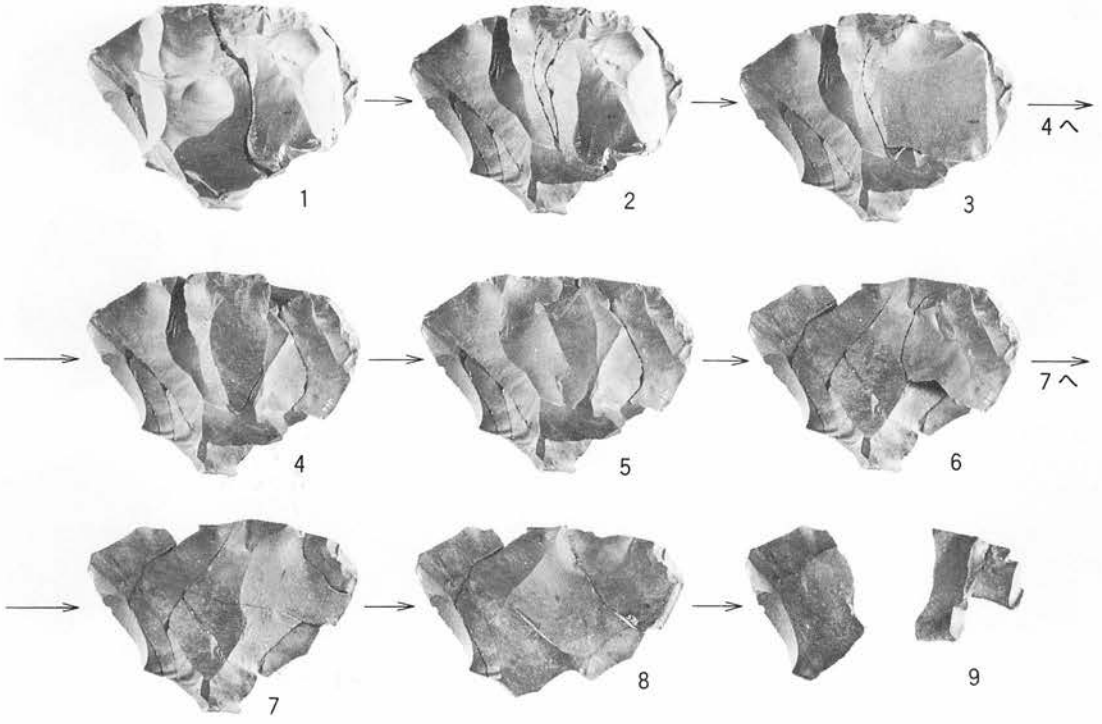
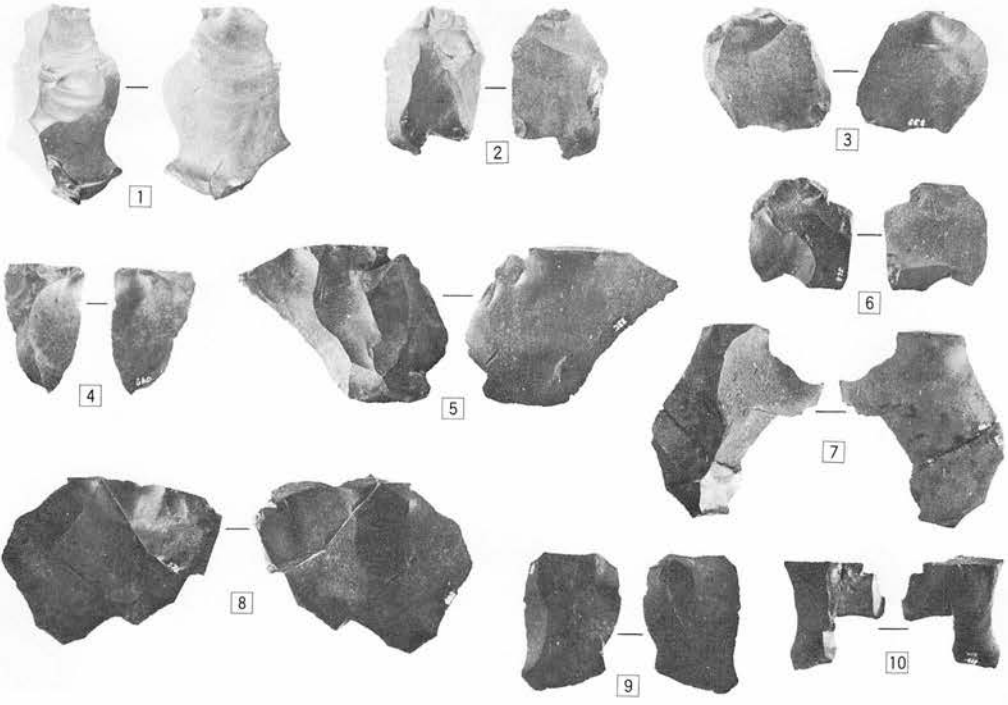
E面



B面



C面



写真図版47 接合資料4

S=1/4



A面 (打面)

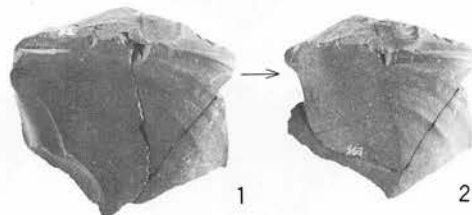
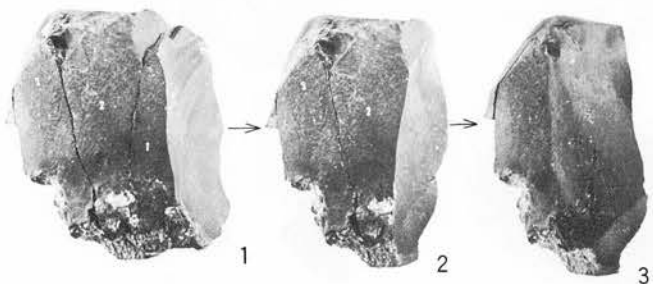
C面

E面

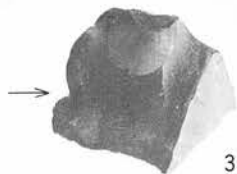


B 石塊

A 石塊



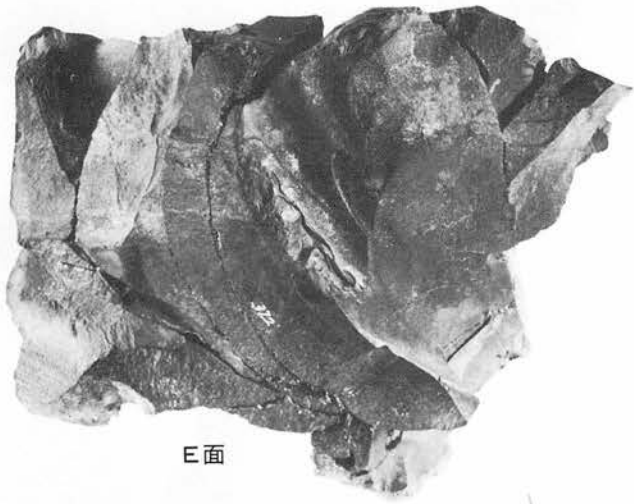
4



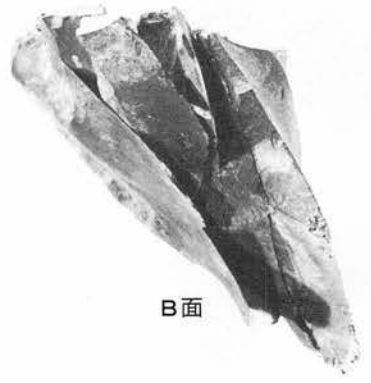
3

写真図版48 接合資料5

S=1/3



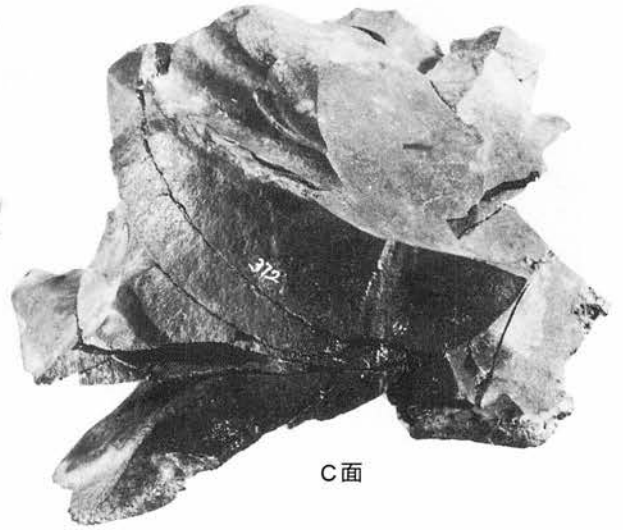
E面



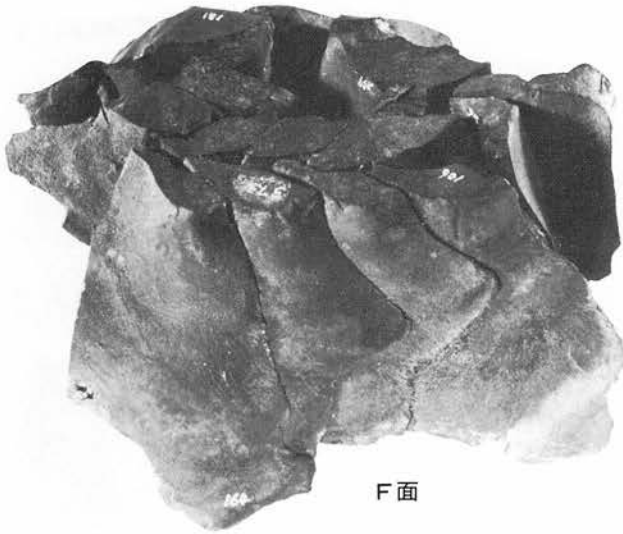
B面



A面 (打面)



C面



F面

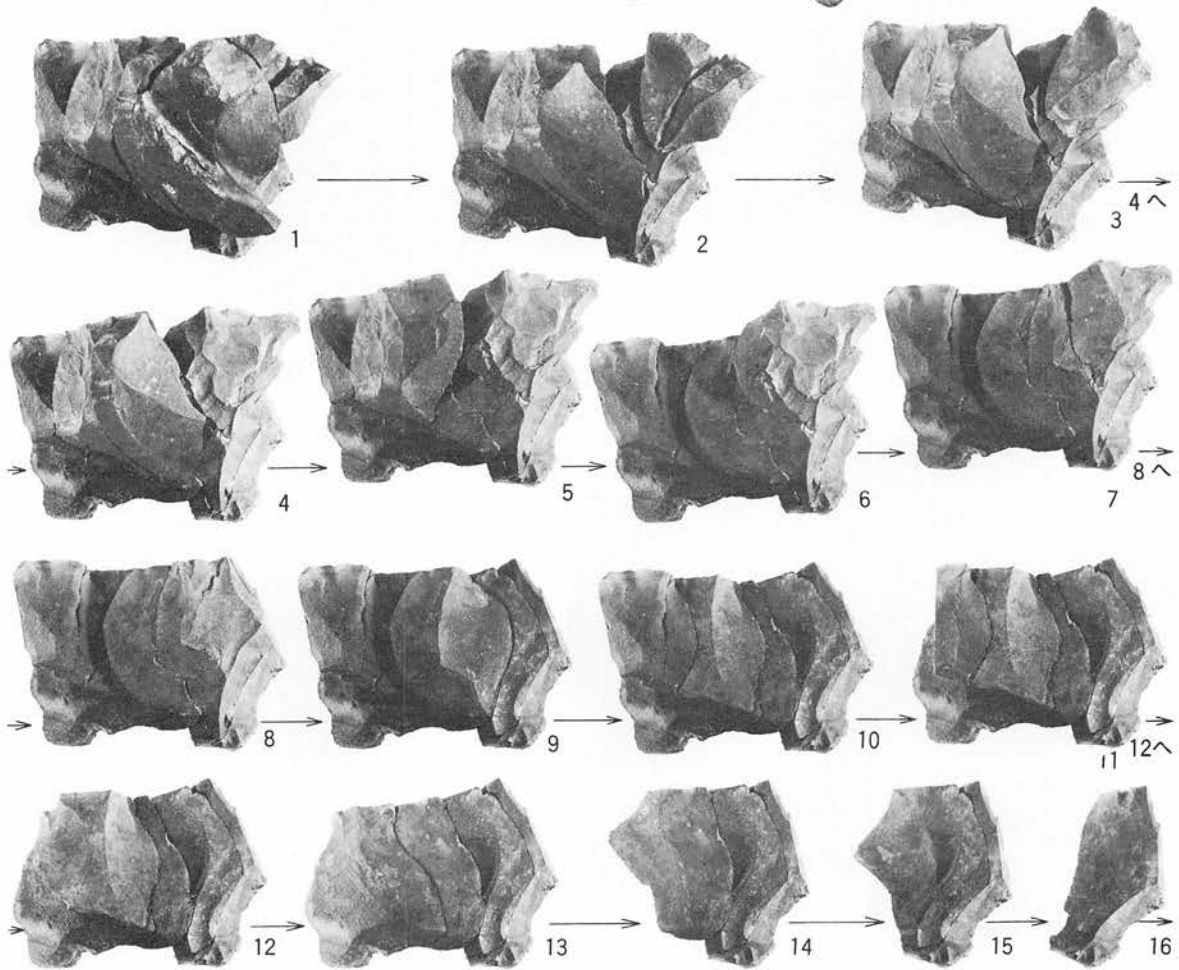
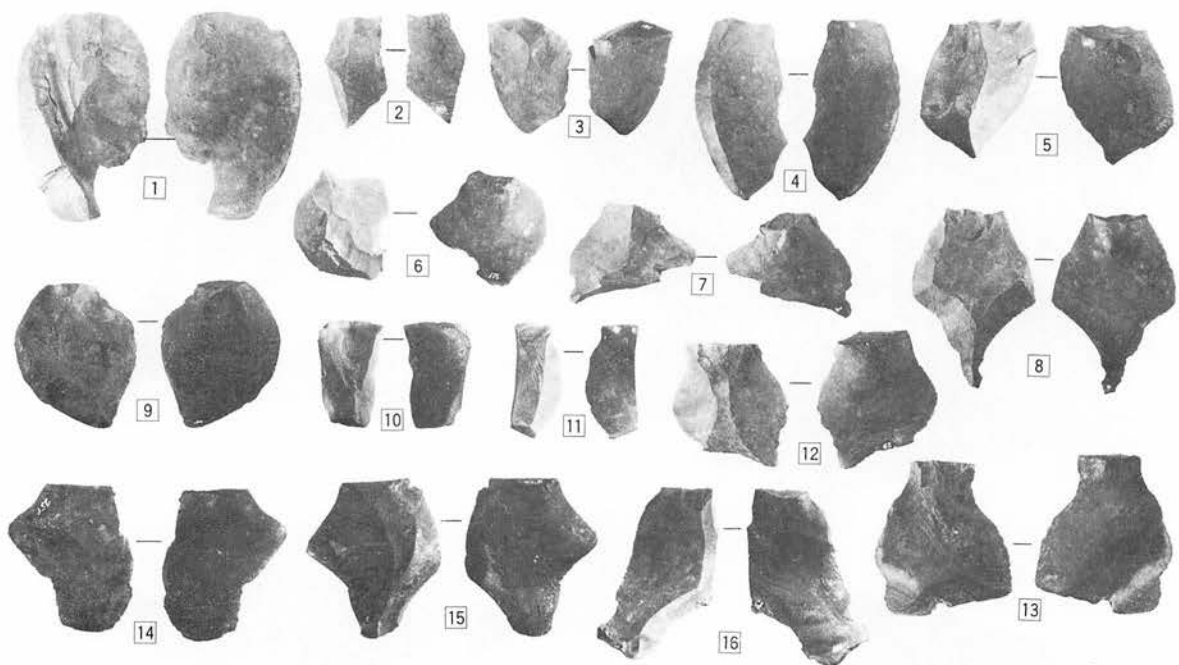


D面

写真図版49 接合資料6

S=1/2



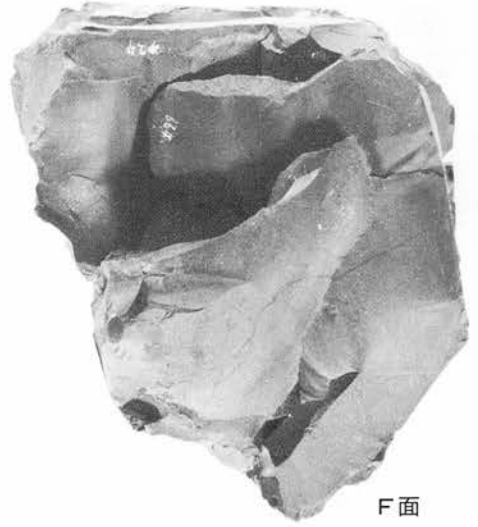


写真図版50 接合資料6

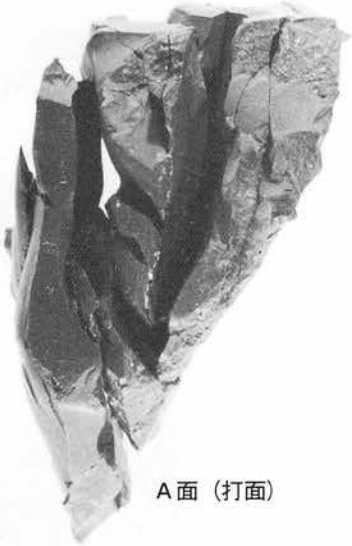
S=1/4



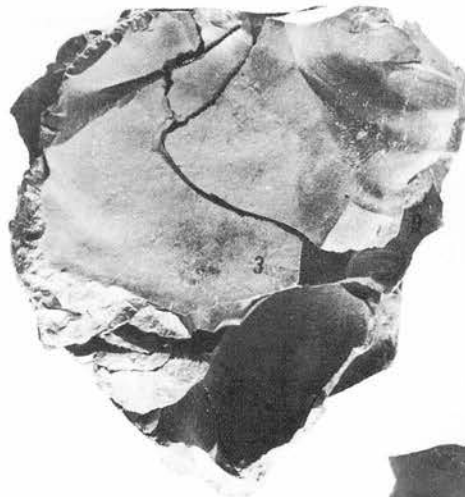
B面 (打面)



F面



A面 (打面)



E面



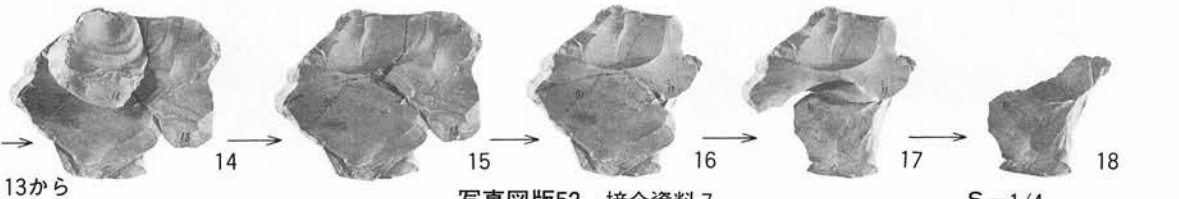
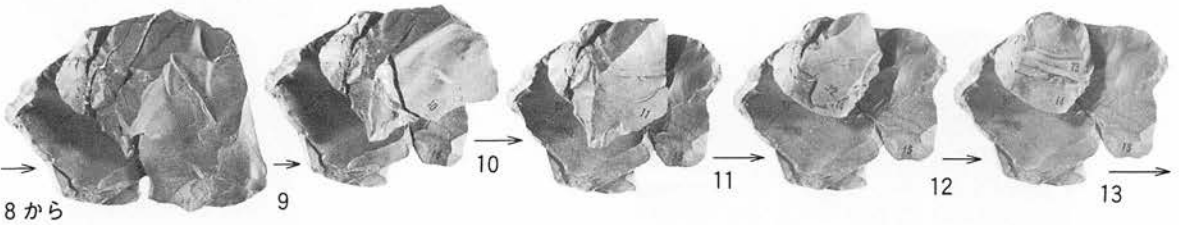
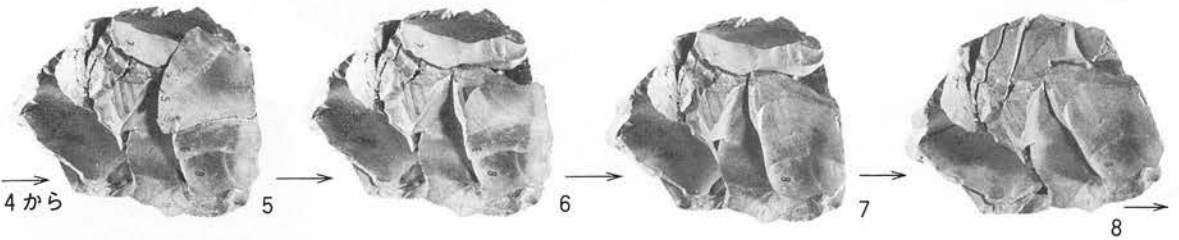
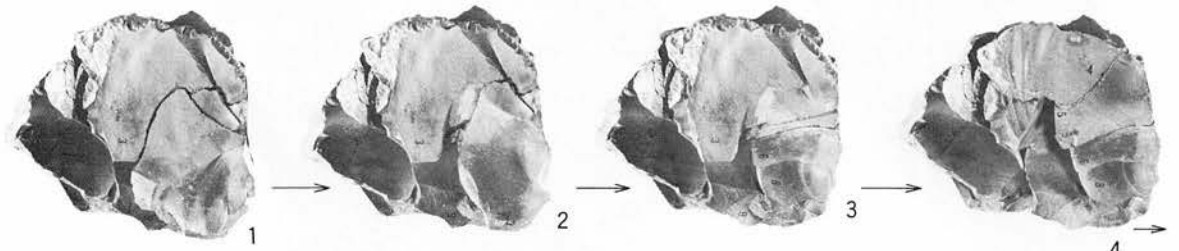
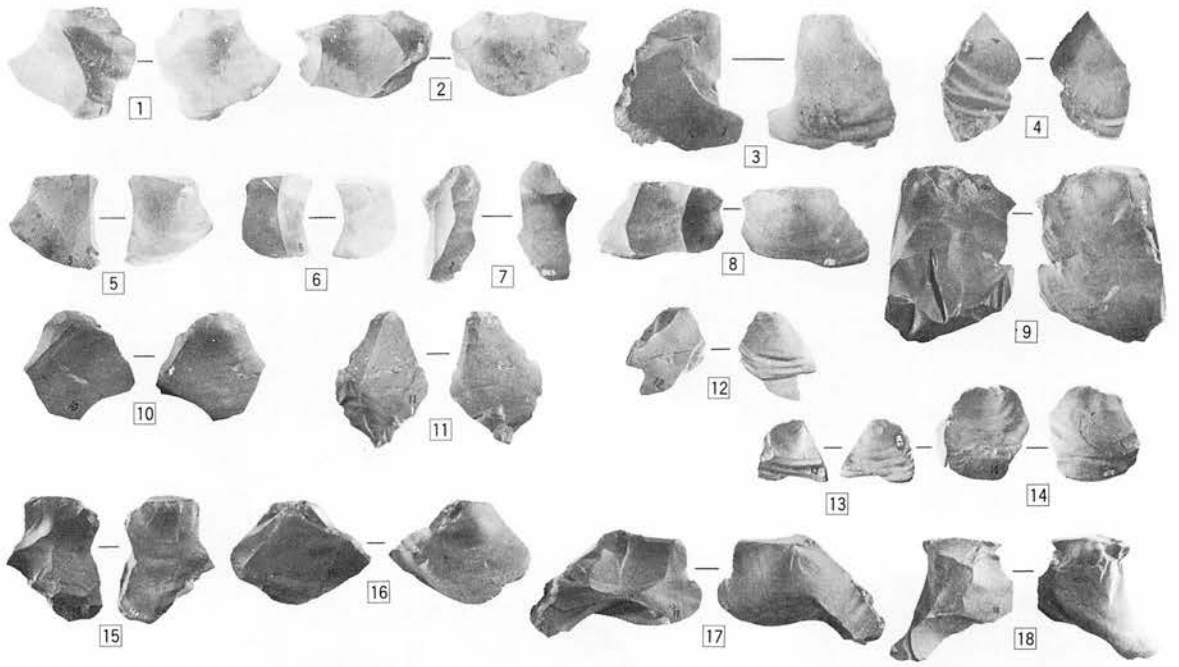
C面 (打面)



D面 (打面)

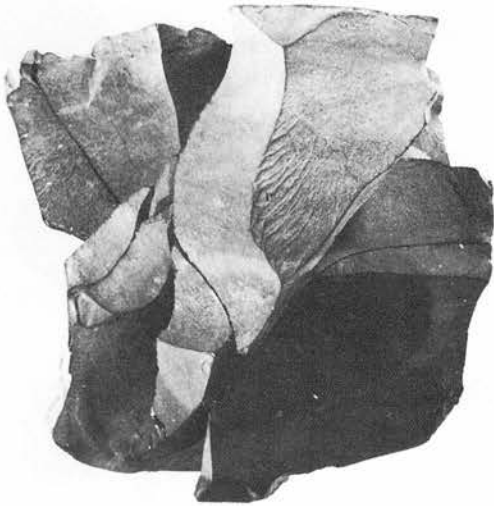
写真図版51 接合資料7

S=1/2

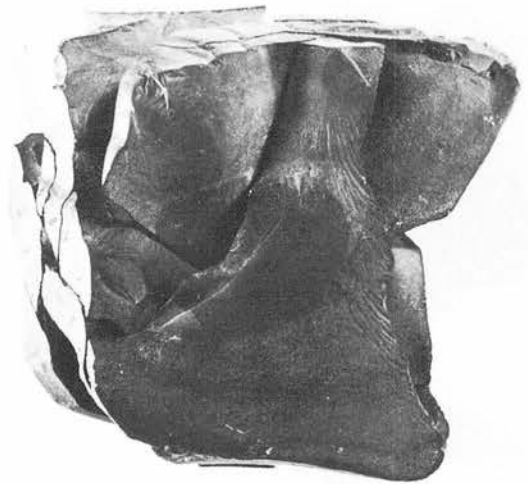


写真図版52 接合資料7

S=1/4



E面



F面



A面 (打面)



B面 (打面)



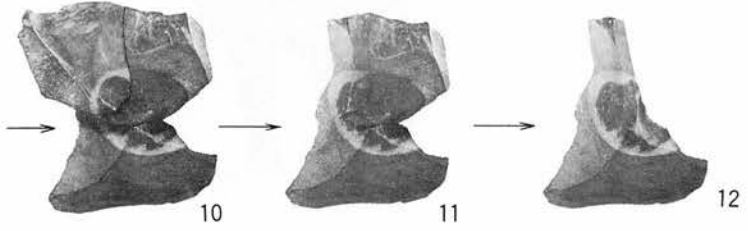
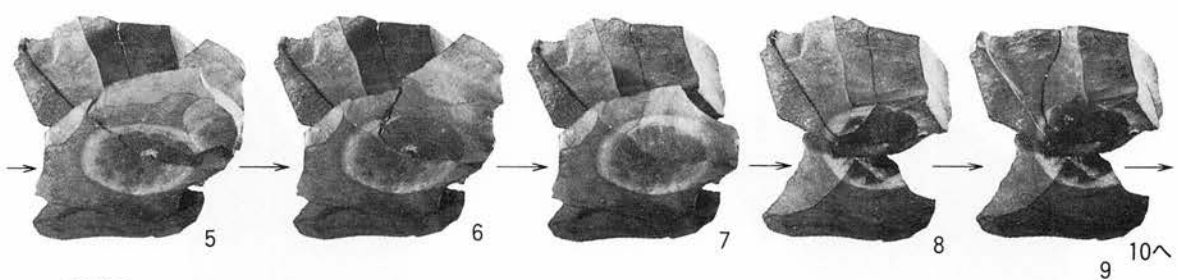
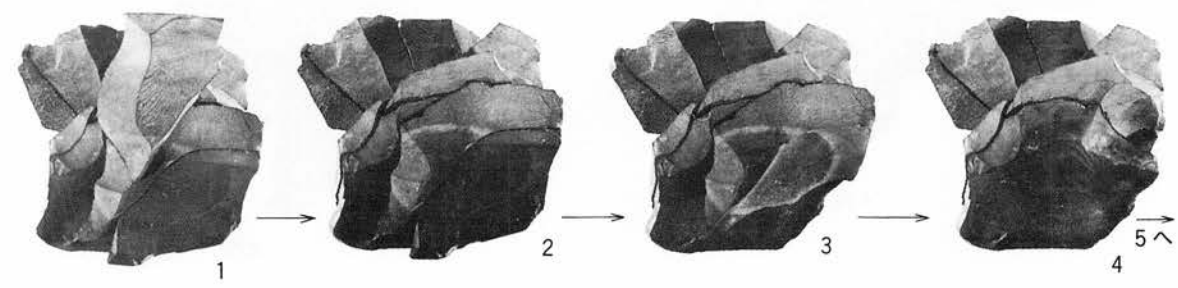
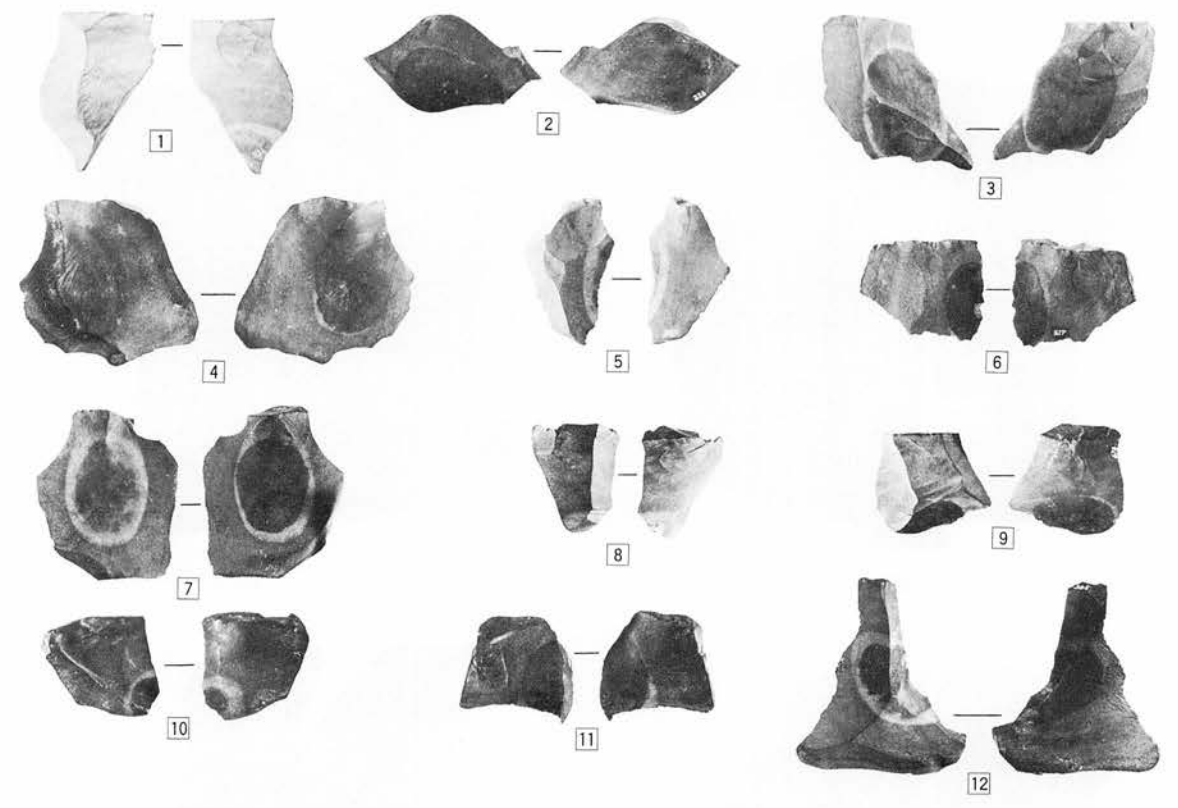
C面



D面

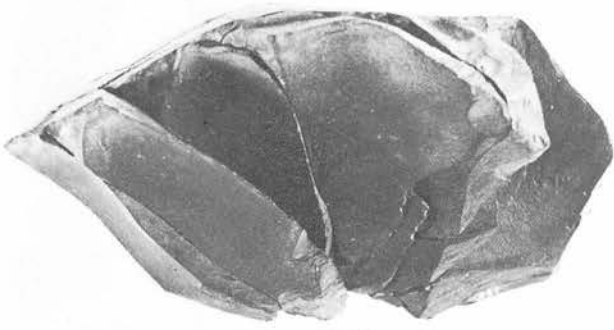
写真図版53 接合資料8

S=1/2

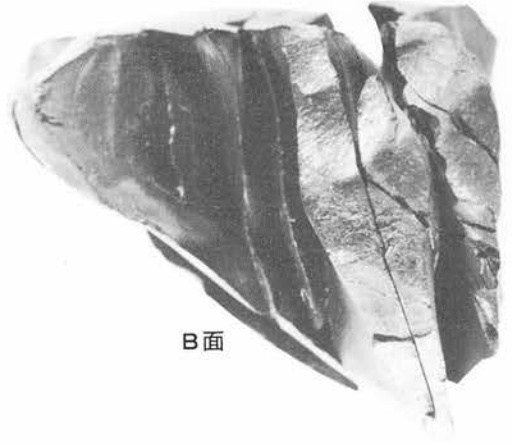


写真図版54 接合資料 8

S=1/4



E面



B面



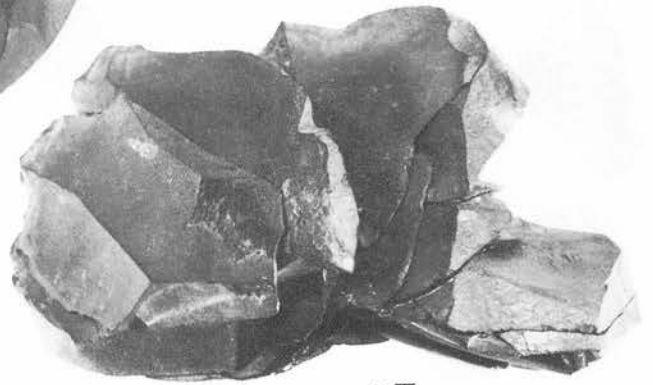
A面 (打面)



D面



F面

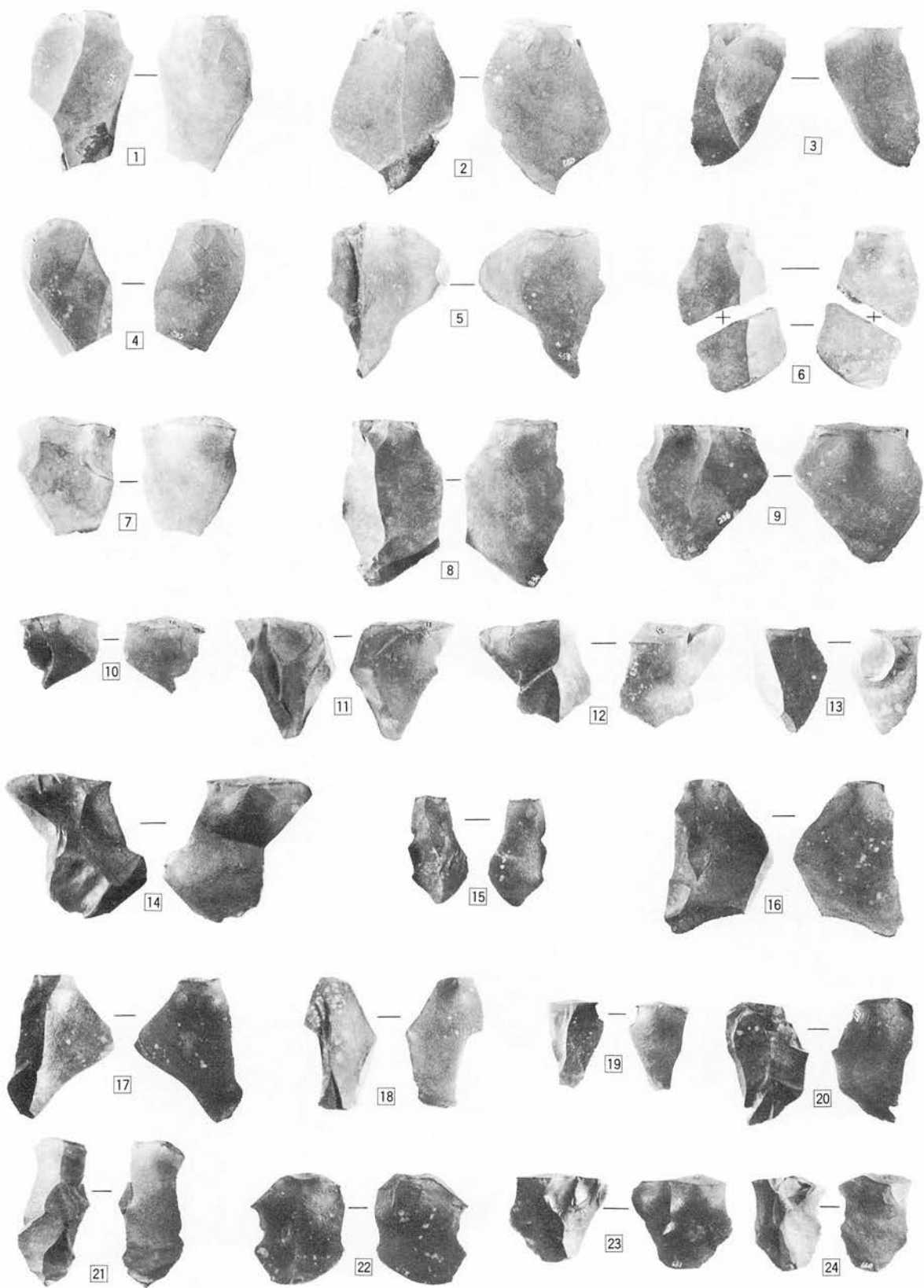


C面

写真図版55 接合資料9

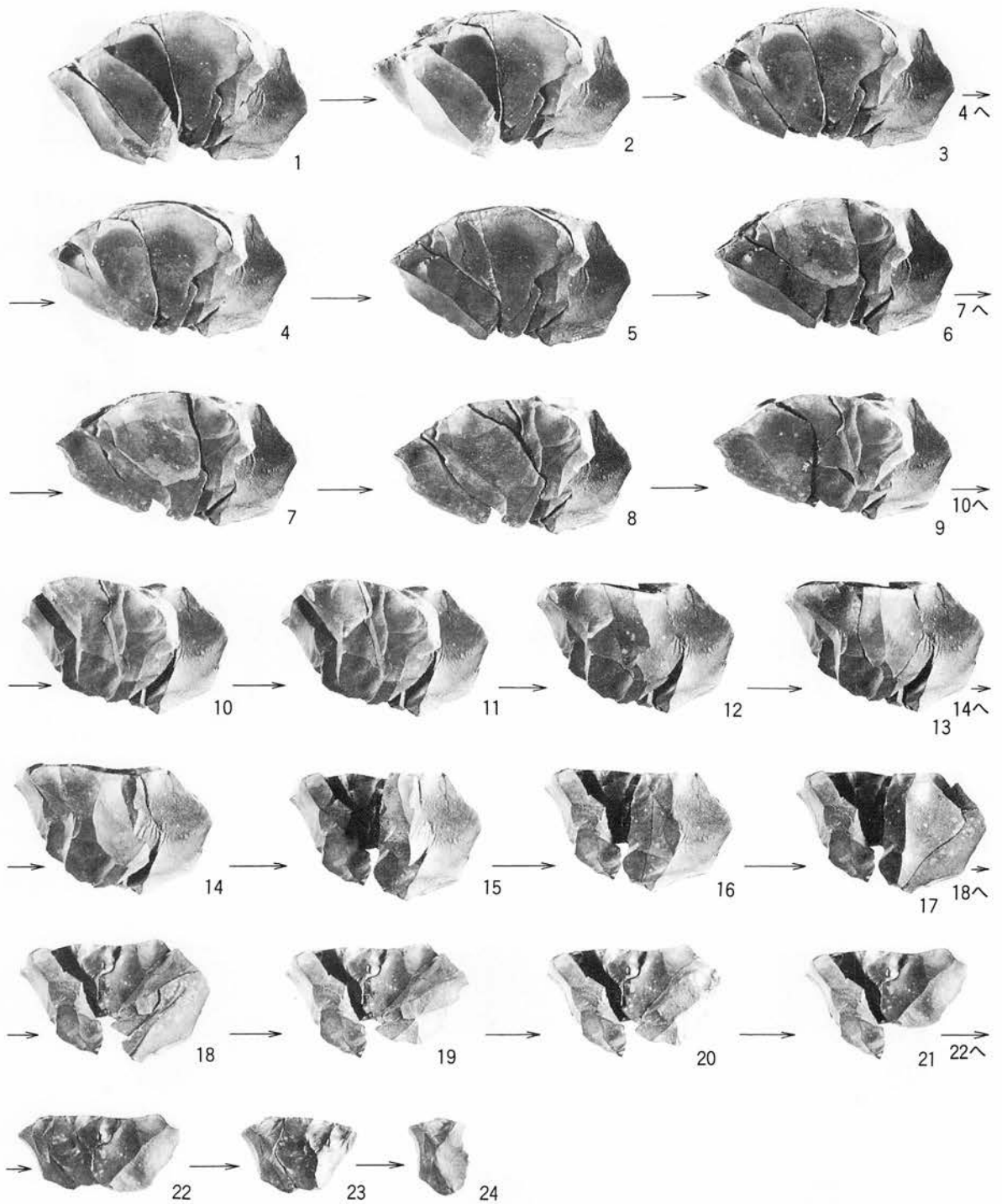
S=1/2





写真図版56 接合資料 9

S=1/3



写真図版57 接合資料9

S=1/4





E面



F面



A面 (打面)



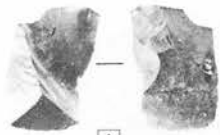
C面・F面



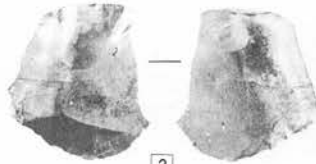
C面



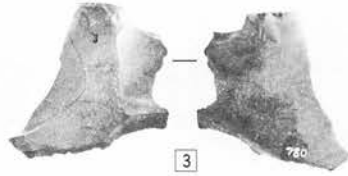
D面



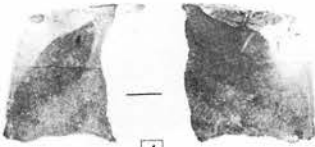
1



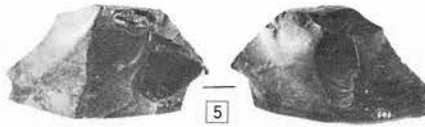
2



3



4



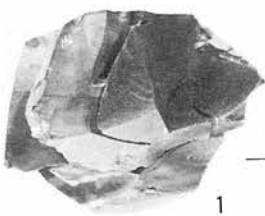
5



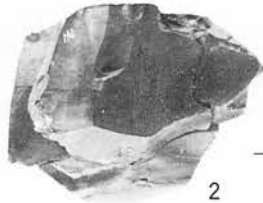
6



7



1



2



3



4



5



6



7

写真図版58 接合資料10

S=1/3



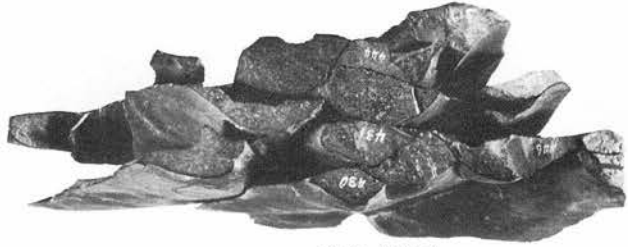
D面



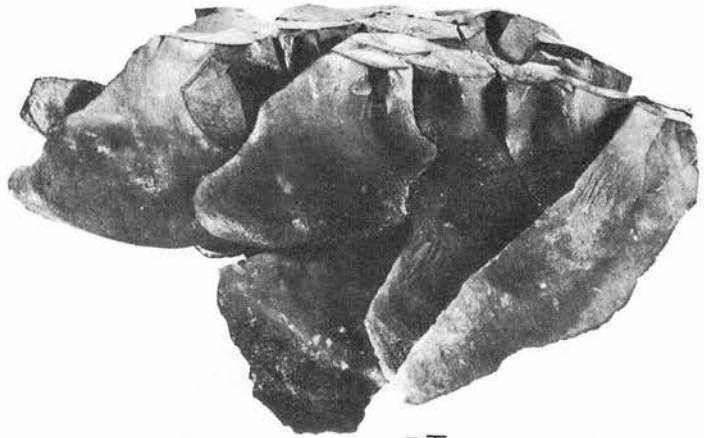
E面



B面



A面 (打面)



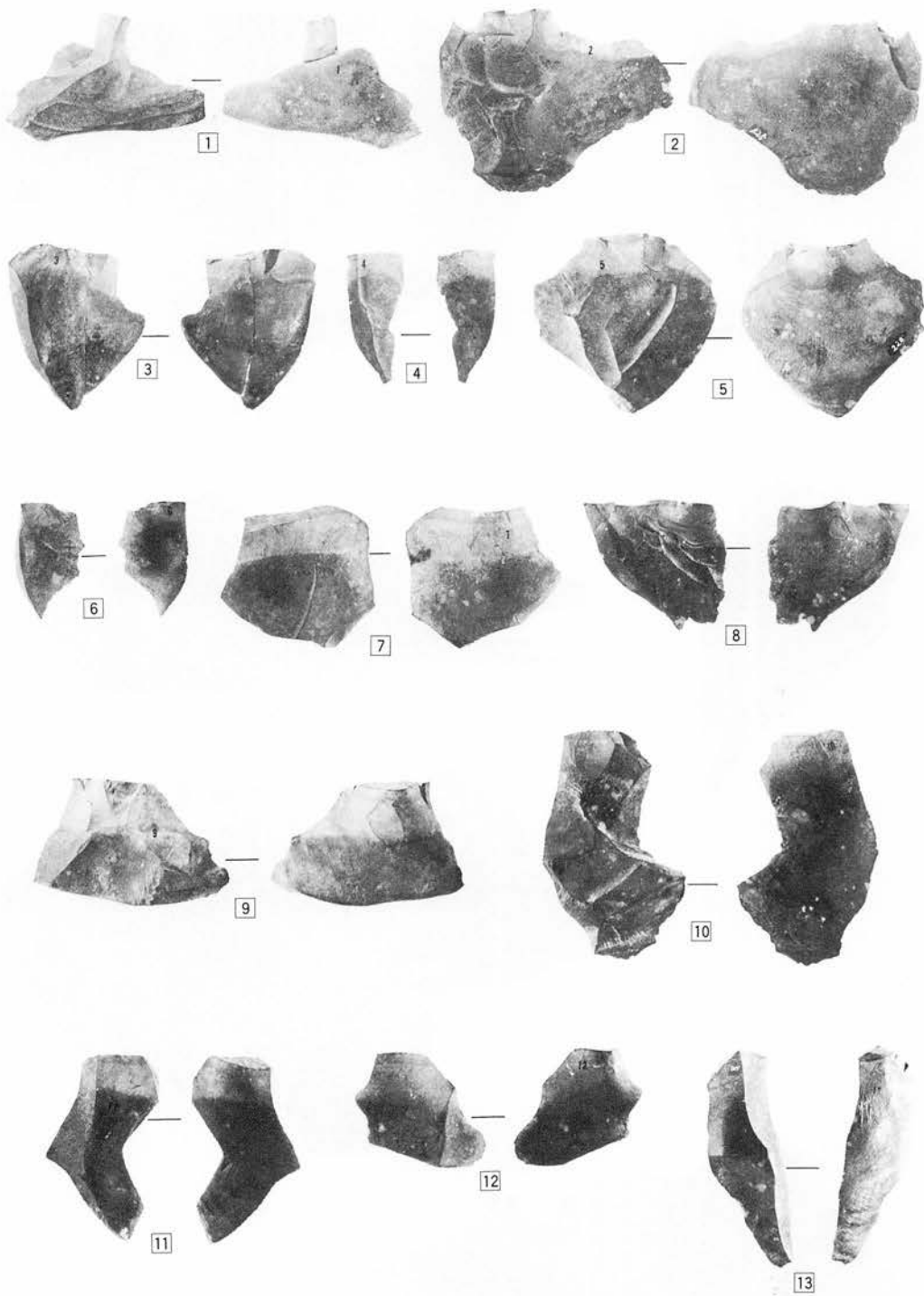
F面



C面

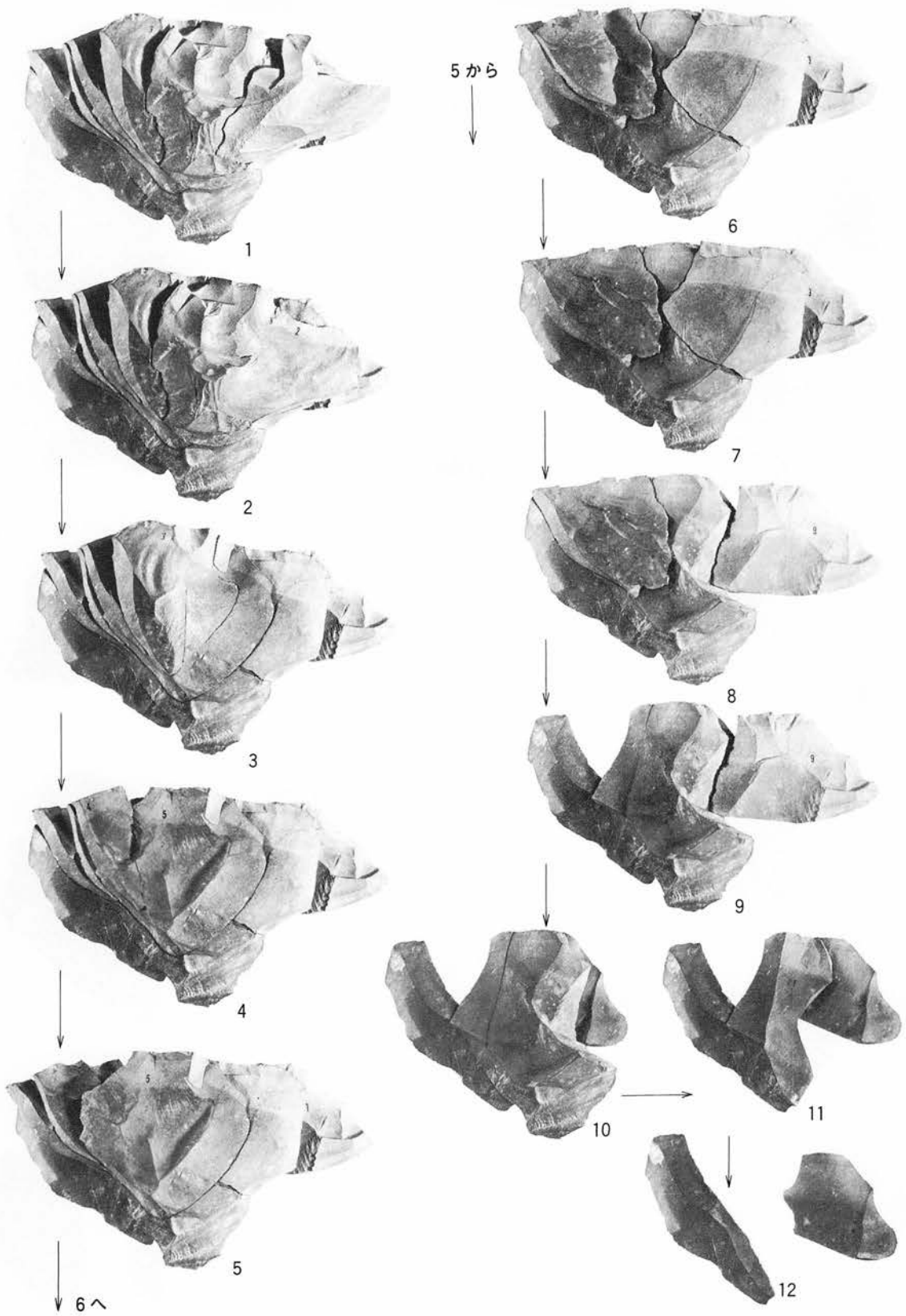
写真図版59 接合資料11

S=1/2



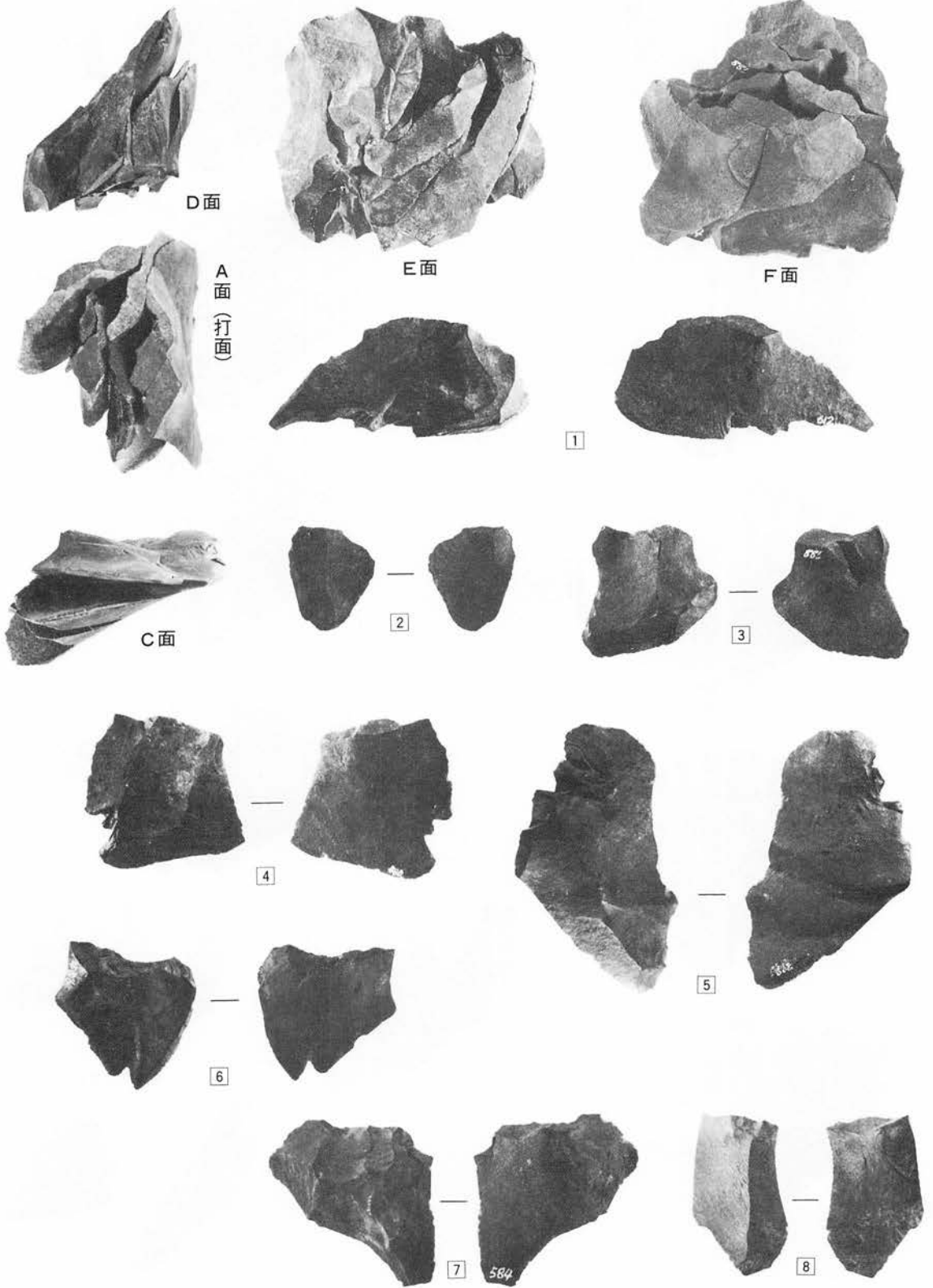
写真図版60 接合資料11

S=1/2



写真図版61 接合資料11

S=1/2



写真図版62 接合資料12



1



2

3^



3



4

5^



5



6

7^



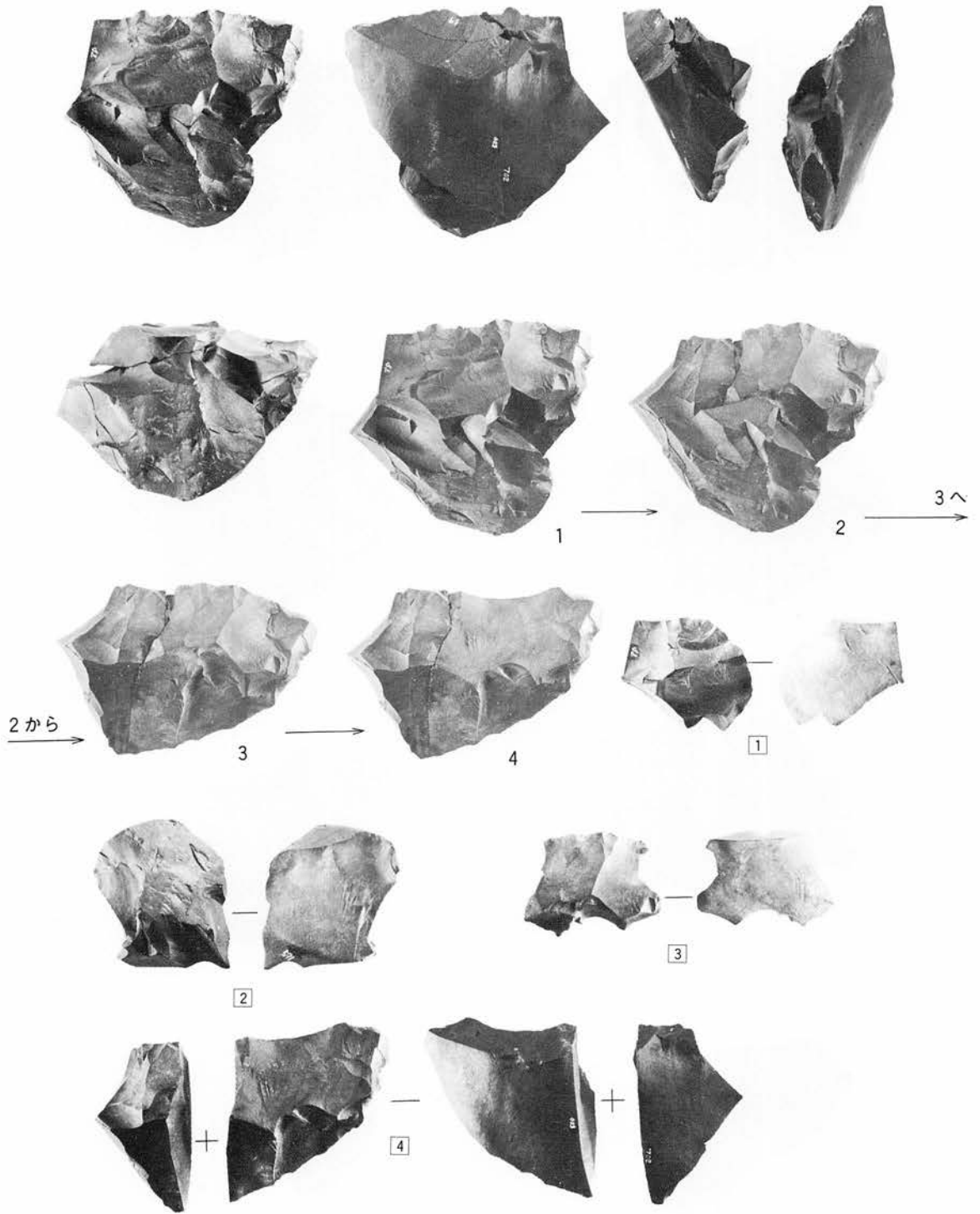
7



8

写真図版63 接合資料12

S=1/2



写真図版64 接合資料13

S=1/3



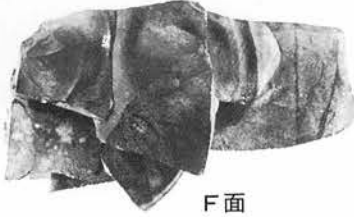
E面



D面



A面 (打面)



F面



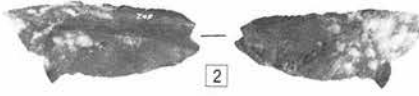
B面



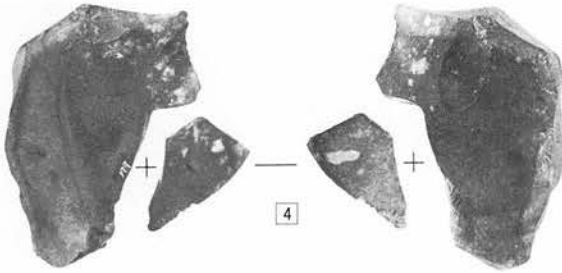
C面



1



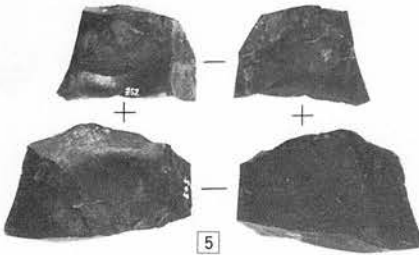
2



4

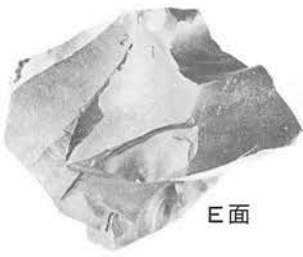


3



5





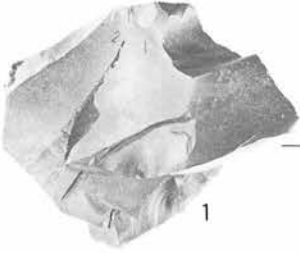
E面



A面 (打面)



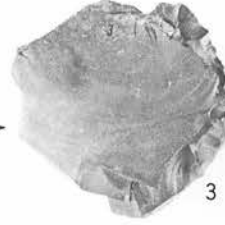
F面



1



2



3



4



1



2



3



4



S=1/3



E面



A面 (打面)



F面



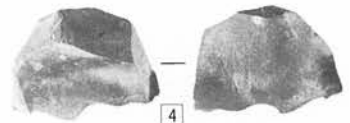
1



2



3



4

写真図版66 接合資料15,16

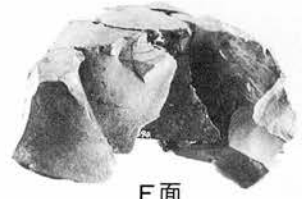
S=1/3



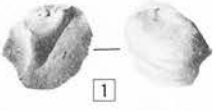
E面



A面 (打面)



F面



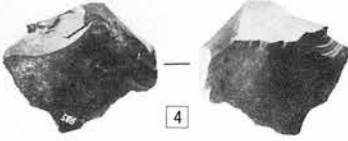
1



2



3



4

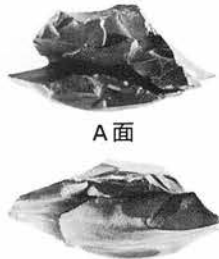


5

S=1/3



E面

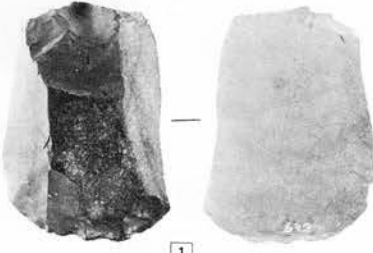


A面

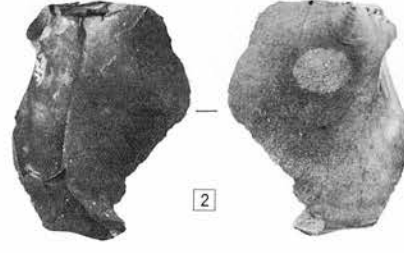
C面



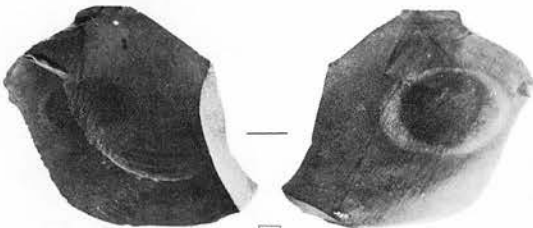
F面



1



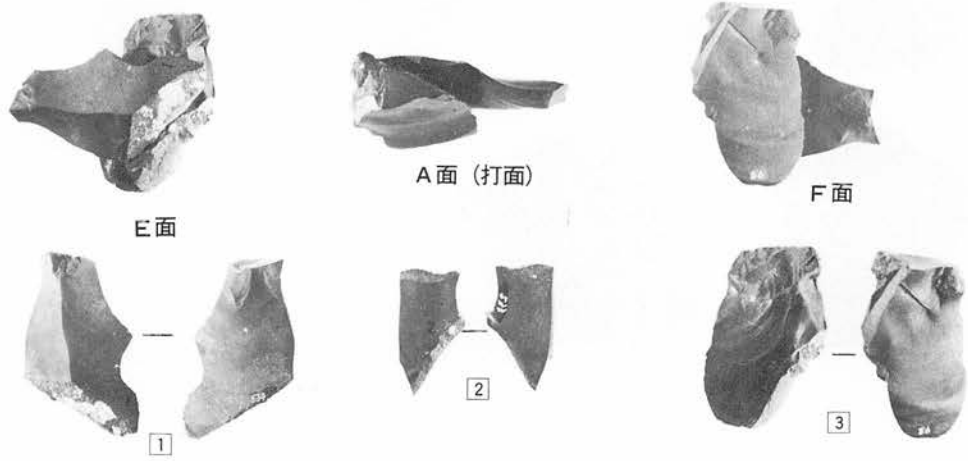
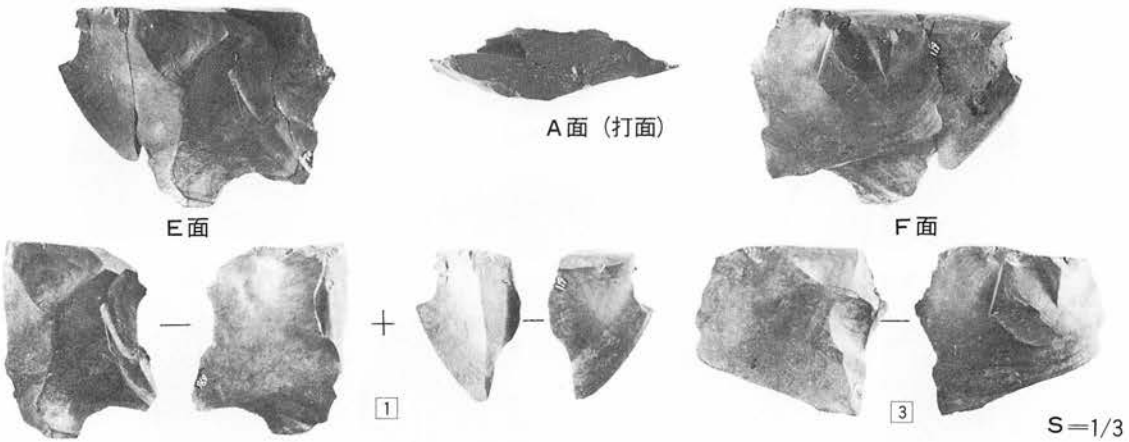
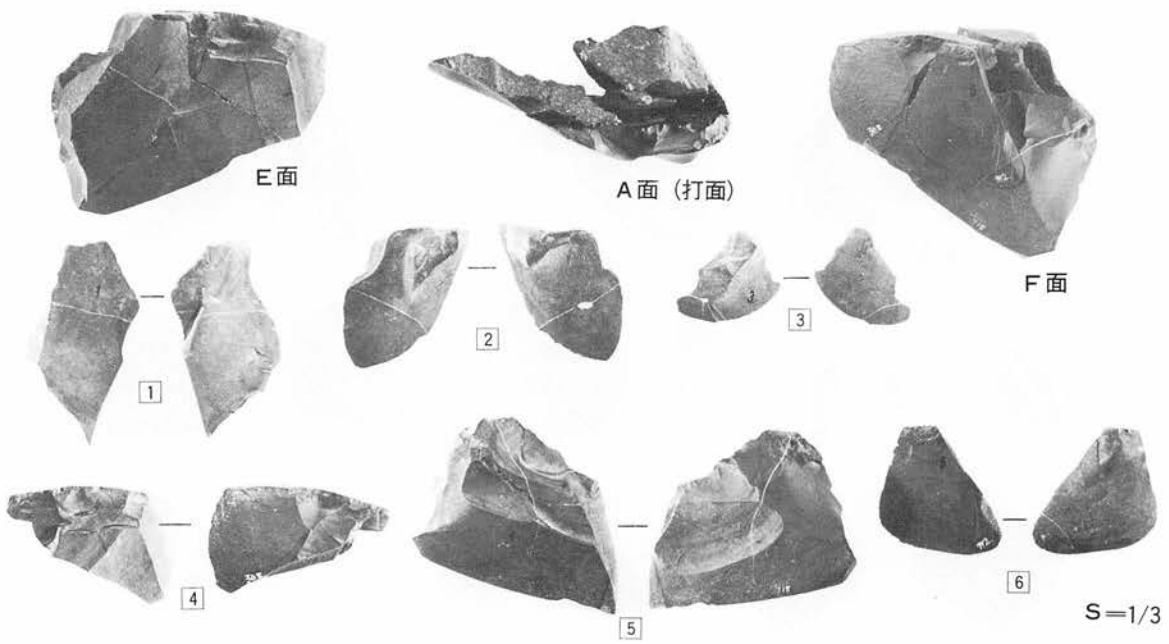
2



3

写真図版67 接合資料17,18

S=1/3



写真図版68 接合資料19,20,21

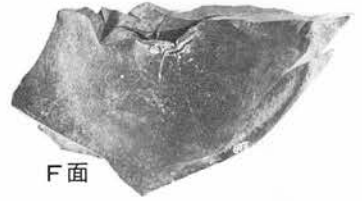
S=1/3



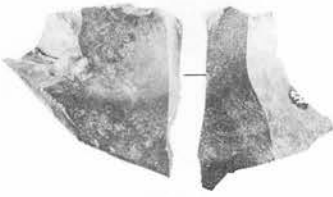
E面



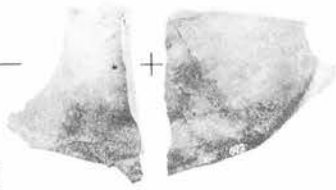
A面 (打面)



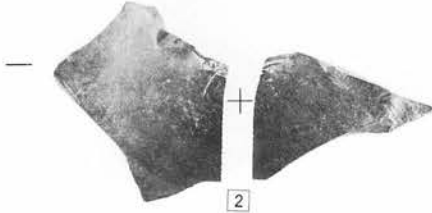
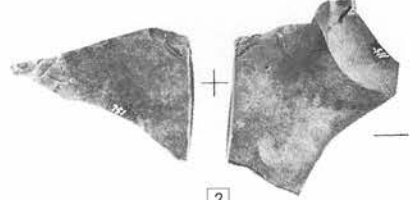
F面



1



2



2

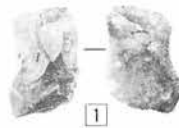
S=1/3



E面



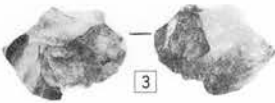
F面



1



2



3

S=1/3



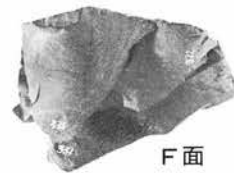
4



E面



A面 (打面)



F面



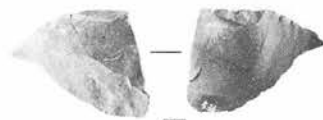
D面 (打面)



1



2



3

写真図版69 接合資料22,23,24

S=1/3



E面



A面 (打面)



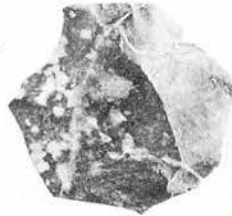
D面



B面



C面



1



F面



2



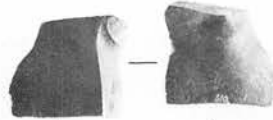
S=1/3



A面 (打面)



E面



2



1



3

S=1/3



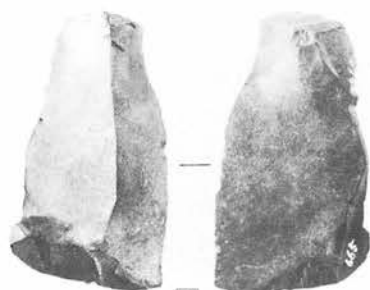
E面



A面 (打面)



C面



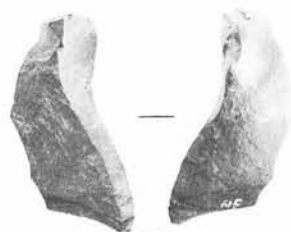
1



F面



2



3



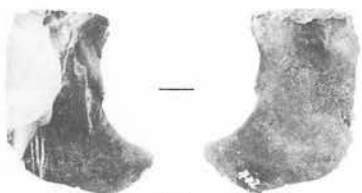
E面



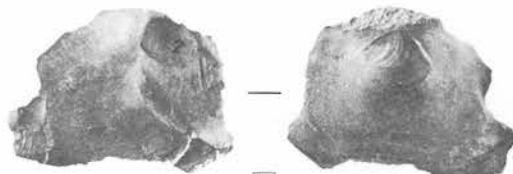
A面 (打面)



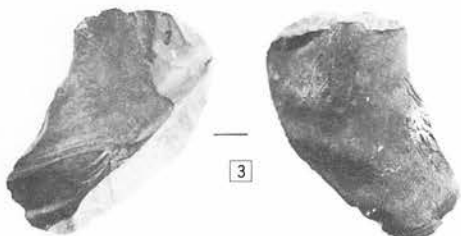
F面



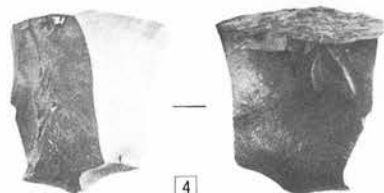
1



2



3



4

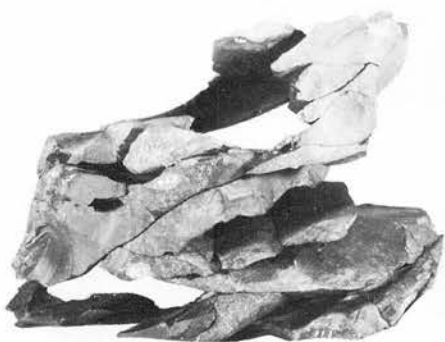
写真図版71 接合資料27,28



E面



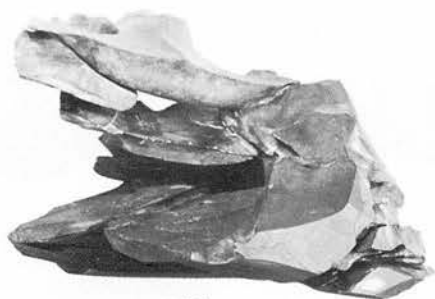
A面



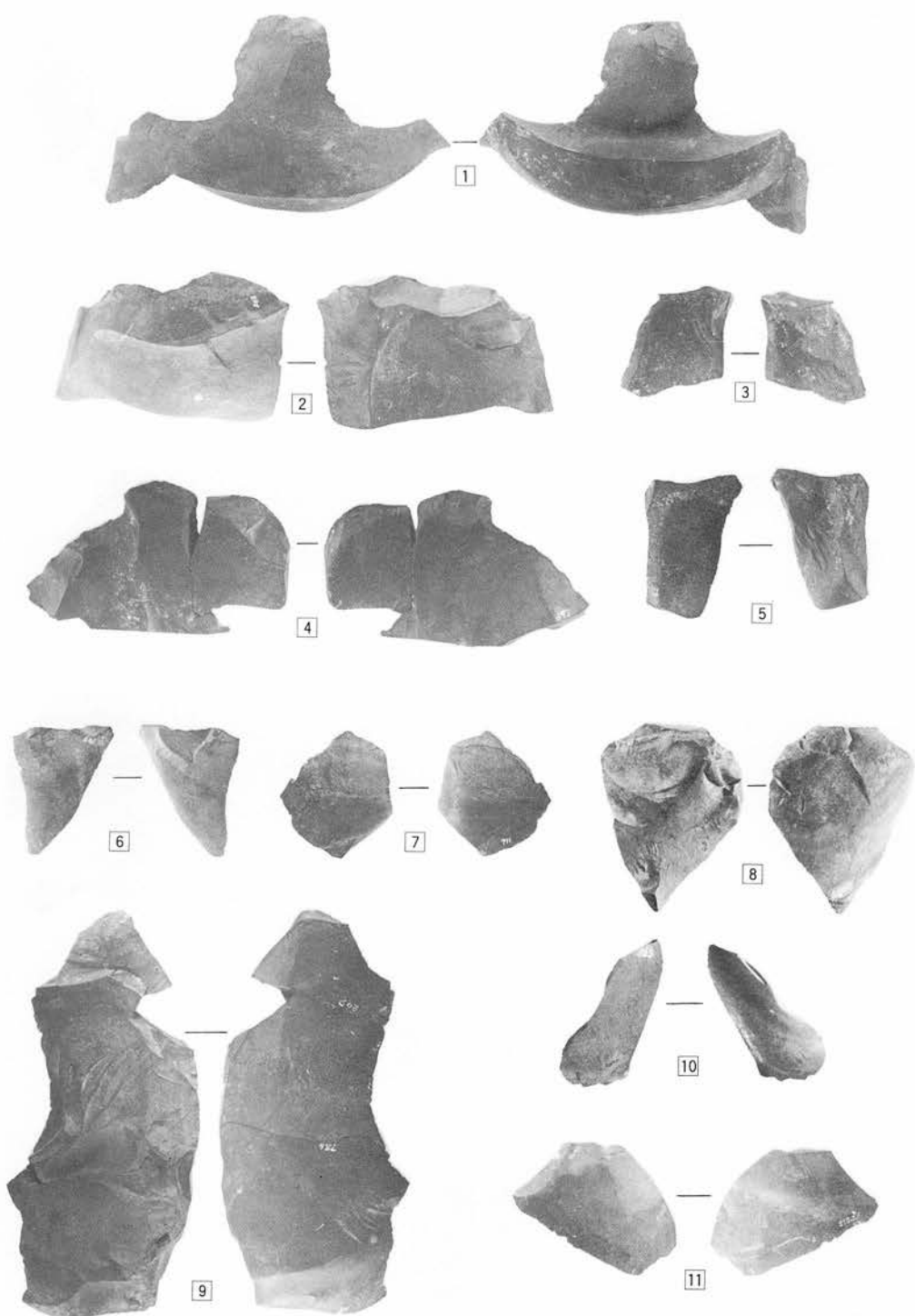
B面



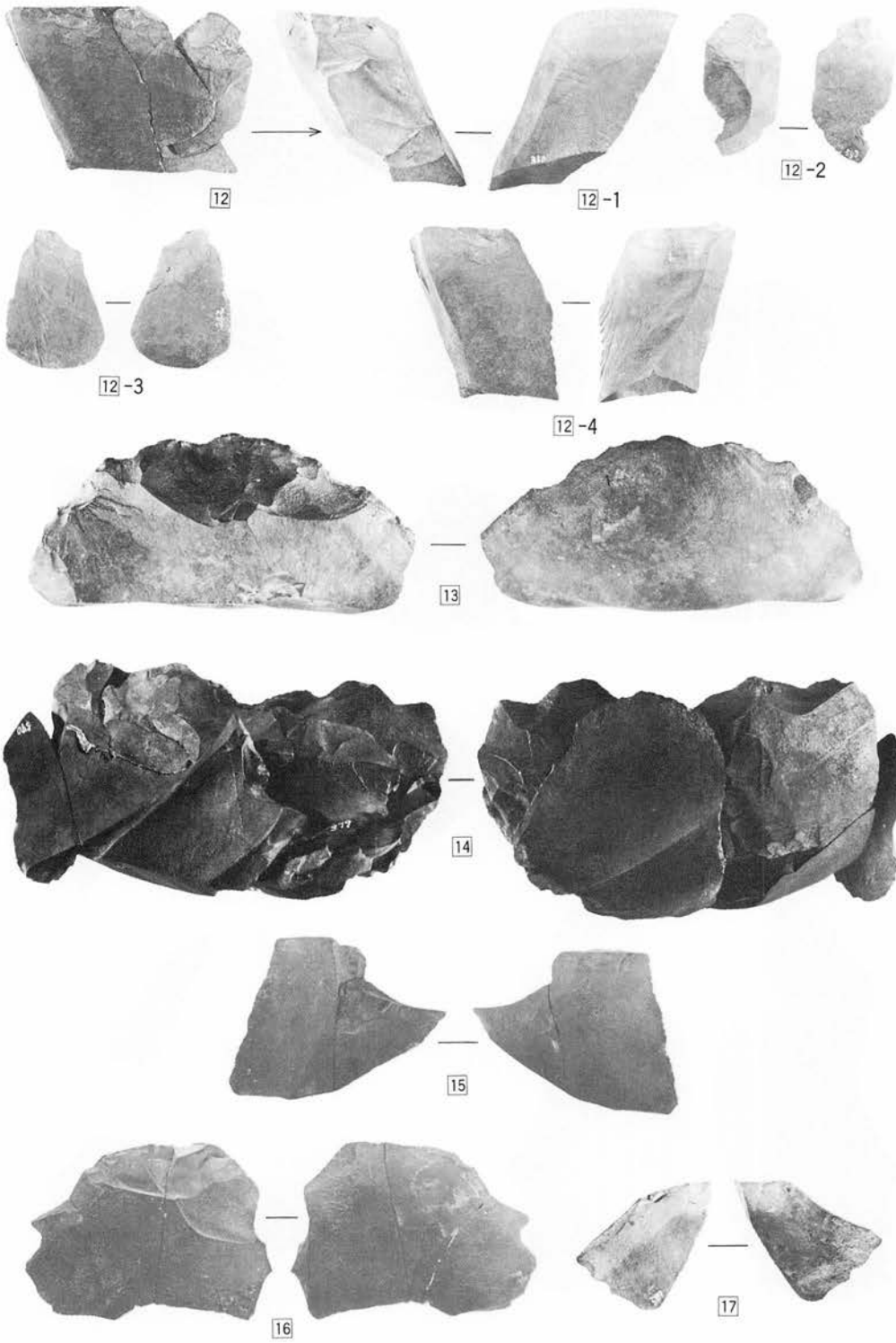
C面



D面

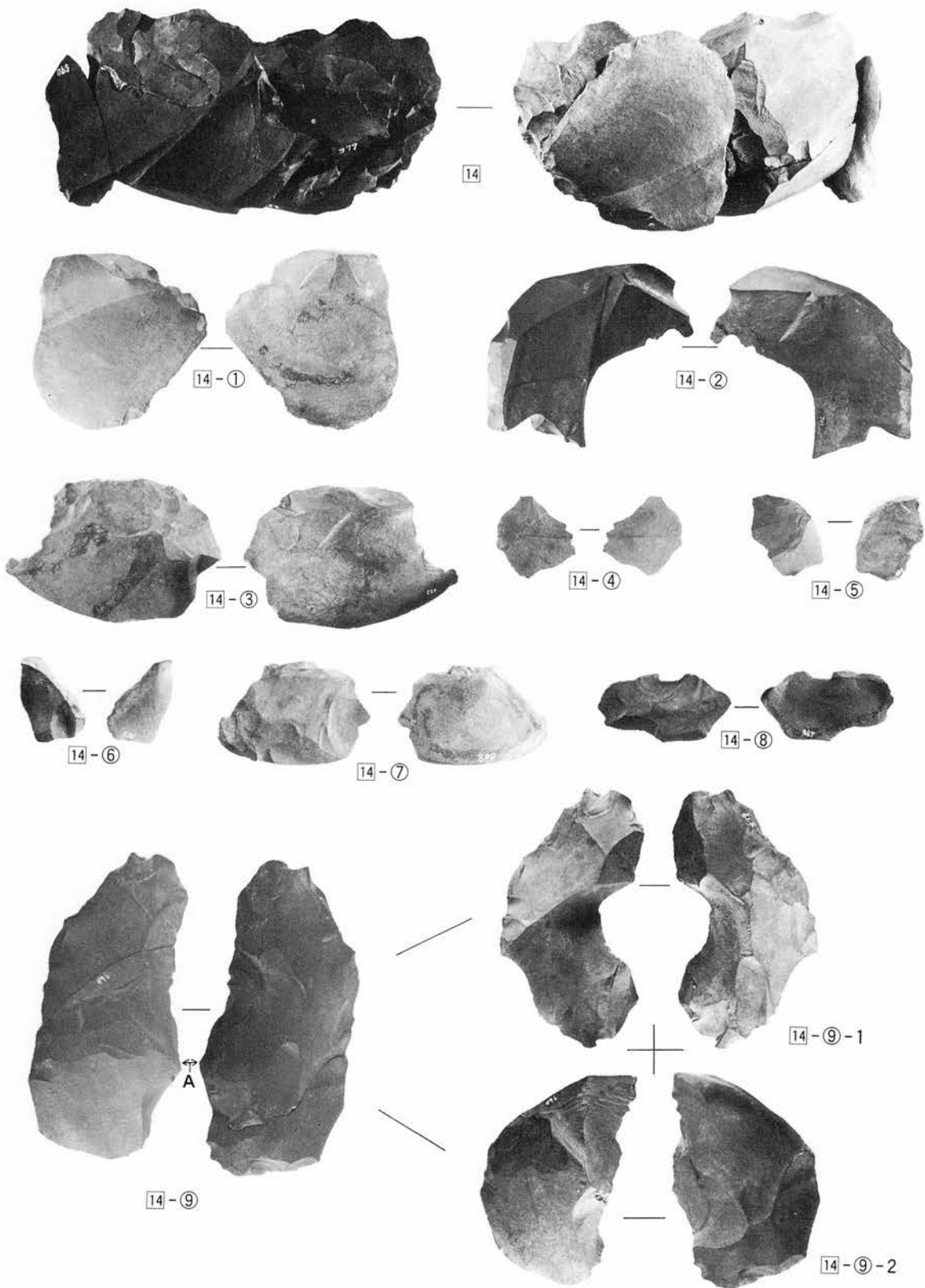






写真図版74 接合資料29

S=1/3



写真図版75 接合資料29・14

S=1/3

# 除 I 遺 跡

遺跡所在地 岩手県盛岡市繫字除25地割 1  
調査対象面積 7,700㎡  
発掘面積 900㎡  
調査期間 昭和49年 4 月 1 日～ 5 月14日  
調査担当者 本宮雄輔、新沼武秀、上野 猛  
工藤利幸、高橋与右衛門、熊谷太郎

## 1. 調査の概要

除Ⅰ遺跡は湯の館山に連なる山地の裾野の下位部分にあたり、標高 182 m で道路用地部分となっている。

御所ダム建設に伴う分布調査において、調査対象西側部分から土師器細片を採取している。このことから奈良・平安時代の遺跡の存在を推定して調査に取組んだ。

調査は地区全体にグリッドを設定し、3 m × 6 m の小グリッドで粗掘を行なった。

## 2. 調査の結果

粗掘によって観察された表土・黒色土層が30～40cm、漸移層10～20cm、黄褐色土層となる。これらの層は表土を除き、水分の含有量が多く、谷地的様相を呈しており、小グリッドを千鳥状に全域に渉るよう粗掘をかけた。その結果ほぼ全域において谷地的様相を呈する事が判明した。

地形的には南側背後にある山地から張り出した小尾根にはさまれた谷地であると考えられる。

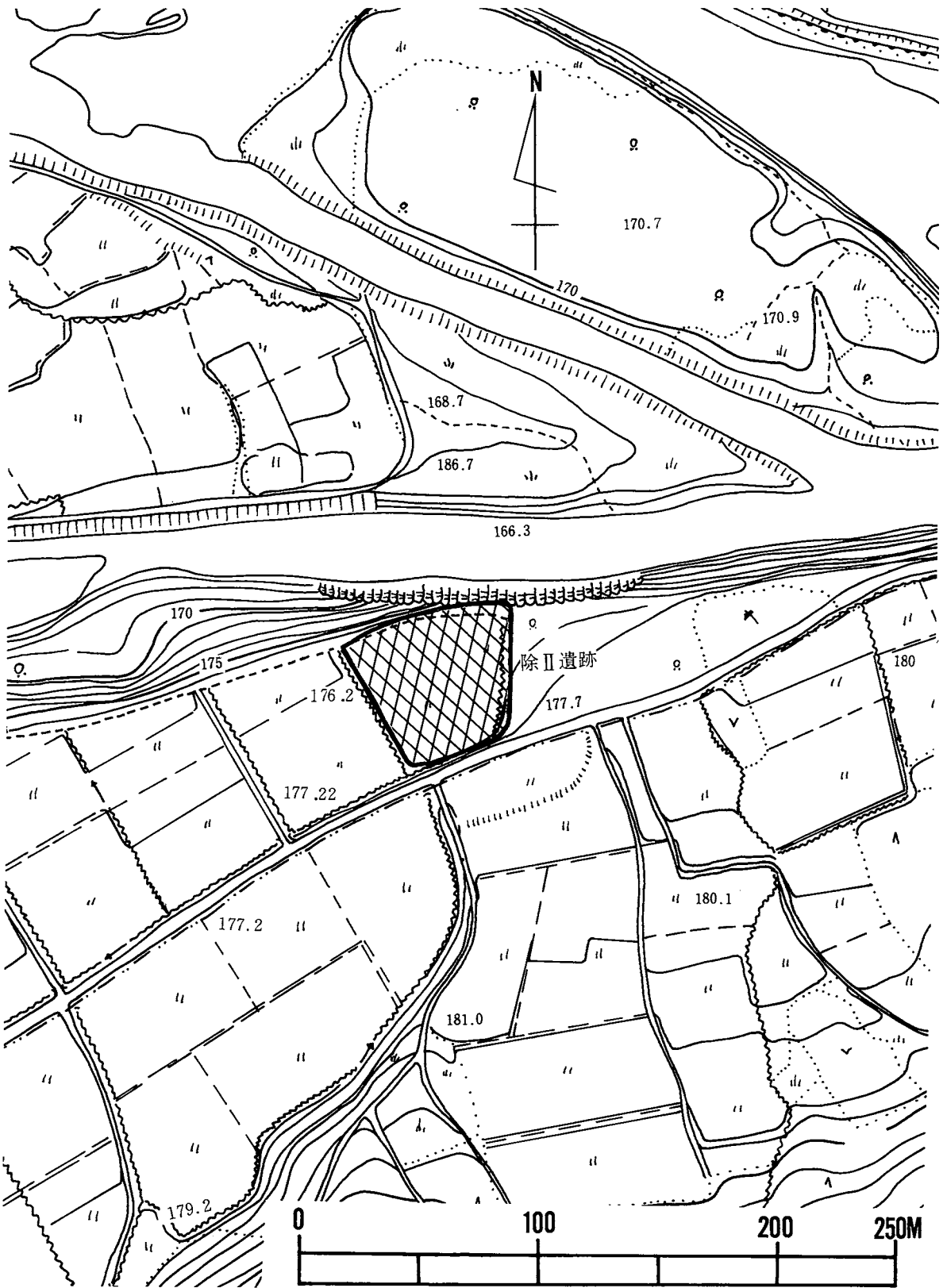
遺物は黒色土の表土からのみ細片が出土するのみで、表土下の黒色土層以下からは出土しない。この事から約 $\frac{1}{3}$ 程度の粗掘ではあったが調査を打ち切った。

## 除 Ⅱ 遺 跡

1. 遺跡所在地 雫石町西安庭第22地割字除92-3、93-1地内
2. 事業主体 御所ダム建設工事事務所
3. 調査主体 岩手県教育委員会文化課
4. 調査担当者 高橋与右エ門、桐生正一、佐藤信行
5. 調査対象面積 3,400㎡
6. 調査面積 3,400㎡
7. 調査期間 昭和51年4月19日～5月15日
8. 遺跡記号 NK-Ⅱ76



図版1 除II遺跡位置図



図版 2 除II遺跡附近の地形図

## I 章 遺跡の位置と環境

本遺跡は岩手県岩手郡雫石町西安庭第22地割字除92-3・93-1に所在し、雫石川右岸の洪積低位段丘上に立地している。本遺跡の位置する台地は、標高177m前後で、箱ヶ森山群より北側へ伸びる舌状の台地であり、台地の東側には水の流れている沢が入っている。現在の地形は開田の際に相当大きく破壊されており、旧地形は部分的にしか残っていない。調査の結果、旧地形は非常に細い瘦せ尾根状の舌状台地であり、雫石川に望む崖上で幾分頂上部に平坦面を有しており、雫石川の流れによって長期間に渡り台地の先端部分が相当削られているものと考えられる。

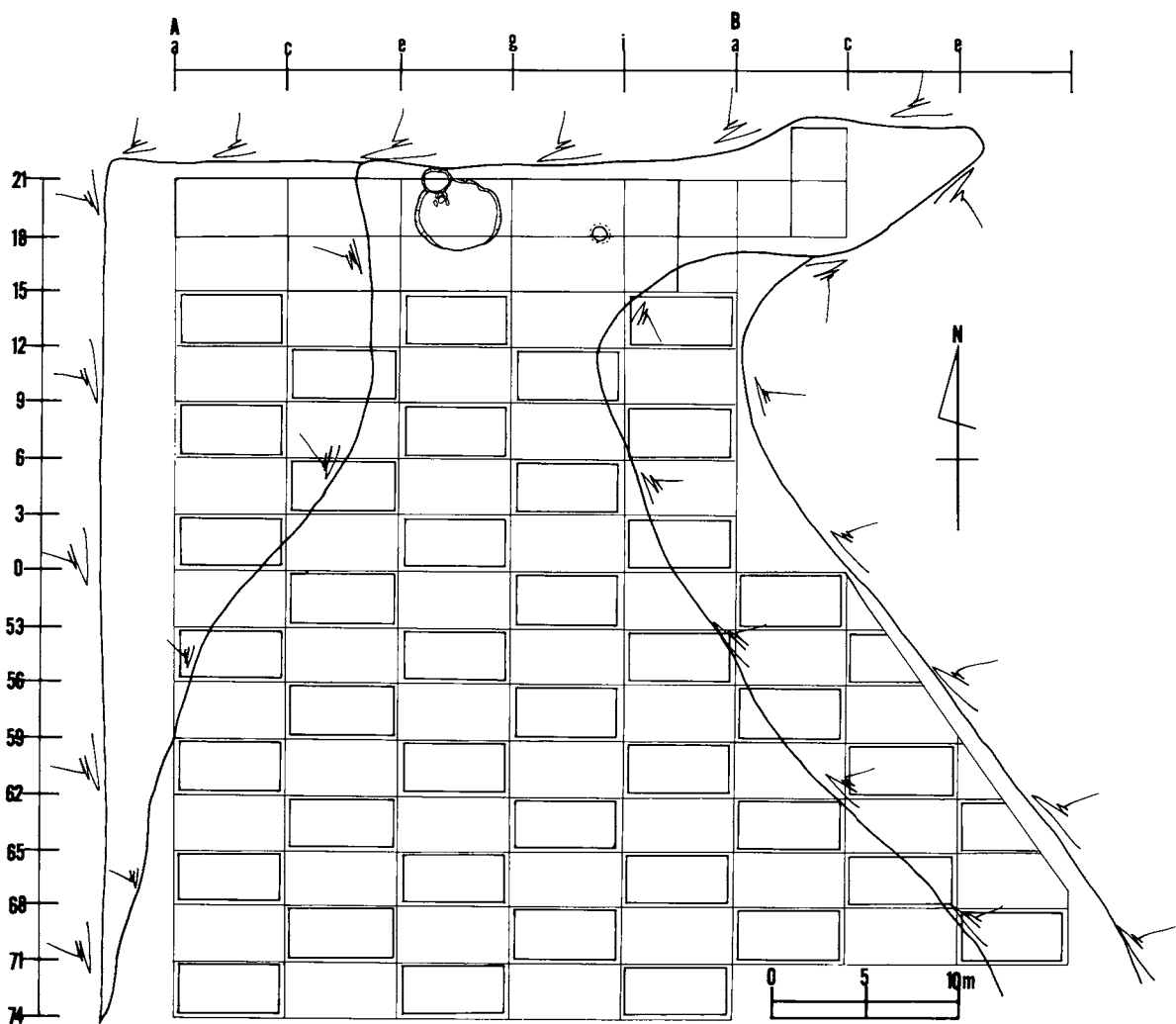
周辺の遺跡としては、同一段丘上に除I遺跡、広瀬II遺跡、雫石川の対岸に町場II遺跡、沖積面に萩内遺跡などがある。

## II 章 調査の方法と経過

本遺跡の調査は調査に先立ち、調査区の西端に2点の原点を磁北方向に設け、南北の軸線を設定し、それに直交する東西線を設け3m×3mのグリッドを組んだ。調査区の名称は東西に30cmの大ブロックを設けA区、B区としさらに3m毎の小ブロックを設け西からa、b、c、……とし、南北は原点0より北側を3m毎に、3、6、9……21として、南側を53、56、59……74とした。各グリッドの名称は北西隅で行ない、A a 21、B a 21と呼称し、遺構も同様の方法で行ない、A e 21住居址、A h 18ピットと呼称した。

調査は昭和51年4月19日より開始され、粗掘りの結果台地を削って斜面に盛土をし、平坦部分の面積を拡大していることが判明し、遺跡指定面積の約半分、15mラインより北側の雫石川南岸崖上に旧地形面、1.692㎡が残っていることが判明したため、この地区を重点的に調査を行なった。その結果、4月26日にA e 21グリッドで土層の変化が認められ、その後、精査の結果住居址であることが判明した。この住居址(A e 21住居址)以外の遺構としては、A h 18ピットが検出されたただけであり、これらの実測等を行ない、すべての調査を終了したのは5月15日である。





図版3 グリット配置図

### Ⅲ章 基本層序

本遺跡の基本的な層序は図版3に示したものであり、遺跡の中で比較的良好な状態で残っていた、18m ラインのものである。すなわち、遺跡の大部分は台地上部が下位の礫層上面まで削られ、斜面は盛土され、平坦面の面積を広くした後に、整地し、水田として利用されている土地の北側、雫石川崖上に残されていた地区である。

I層 黒褐色土：耕作土であり、斜面ではこの層の上に盛土がされている。攪乱され、草根が混入している。

II層 黒色土：斜面に僅かに推積しているのが認められた、I層よりは柔かく、攪乱が少ない。

III層 褐色土：斜面に推積している層である。

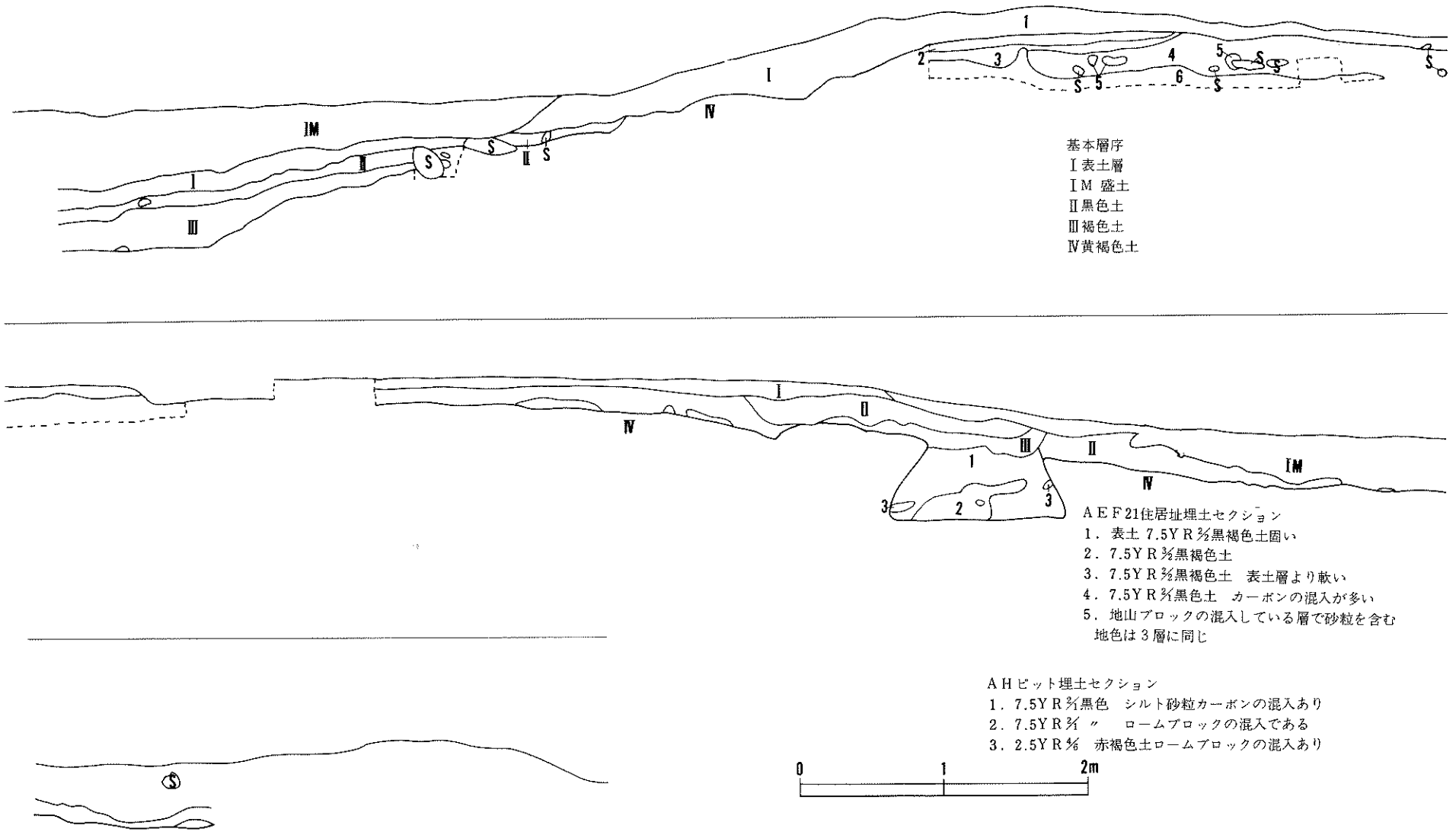
IV層 黄褐色ローム質シルト：遺構検出面であり、調査区北側と斜面にのみ認められた。粘性のある土である。

V層 礫層であり、円礫もしくは亜円礫の層で砂も混っている。調査区の大部分はこの層まで削られている。

VI層 岩盤

以上であり、現地表面よりVI層の遺構検出面までの層厚は45～50cm位で比較的薄い推積である。

EL=177.254m



図版4 基本層序 S = 1/6

## Ⅳ章 検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は竪穴式住居址1棟、フラスコ形ピット1基である。遺物は土器、石器でありダンボール箱で3箱分である。以下、遺構、遺物を分けて述べる。

### 1. 遺構

#### (1) 竪穴式住居址

##### A e 21住居址 (図版5・写真図版2-B・3・4・5-A)

調査区の北端A e 21グリッドのⅥ層上面で検出され、検出状態より上部が削られ、南側も一部削られていることが判明している。また、本住居址は精査の結果、南北4.20m、東西3.00mの平面形が南北に長い楕円形の住居址を東側に拡張して作られていることが判明している。拡張後の規模は東西4.54m、南北4.20mの平面形が東西に長い楕円形を呈し、検出面よりの深さは東壁で0.14m、他の壁は0.10m前後と浅く壁の立ち上りがかろうじて確認された。

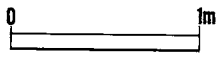
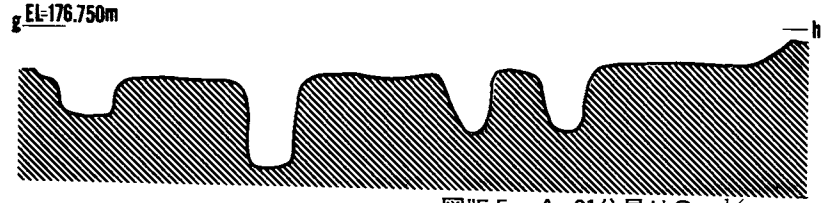
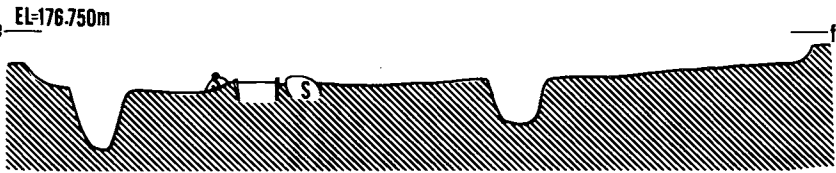
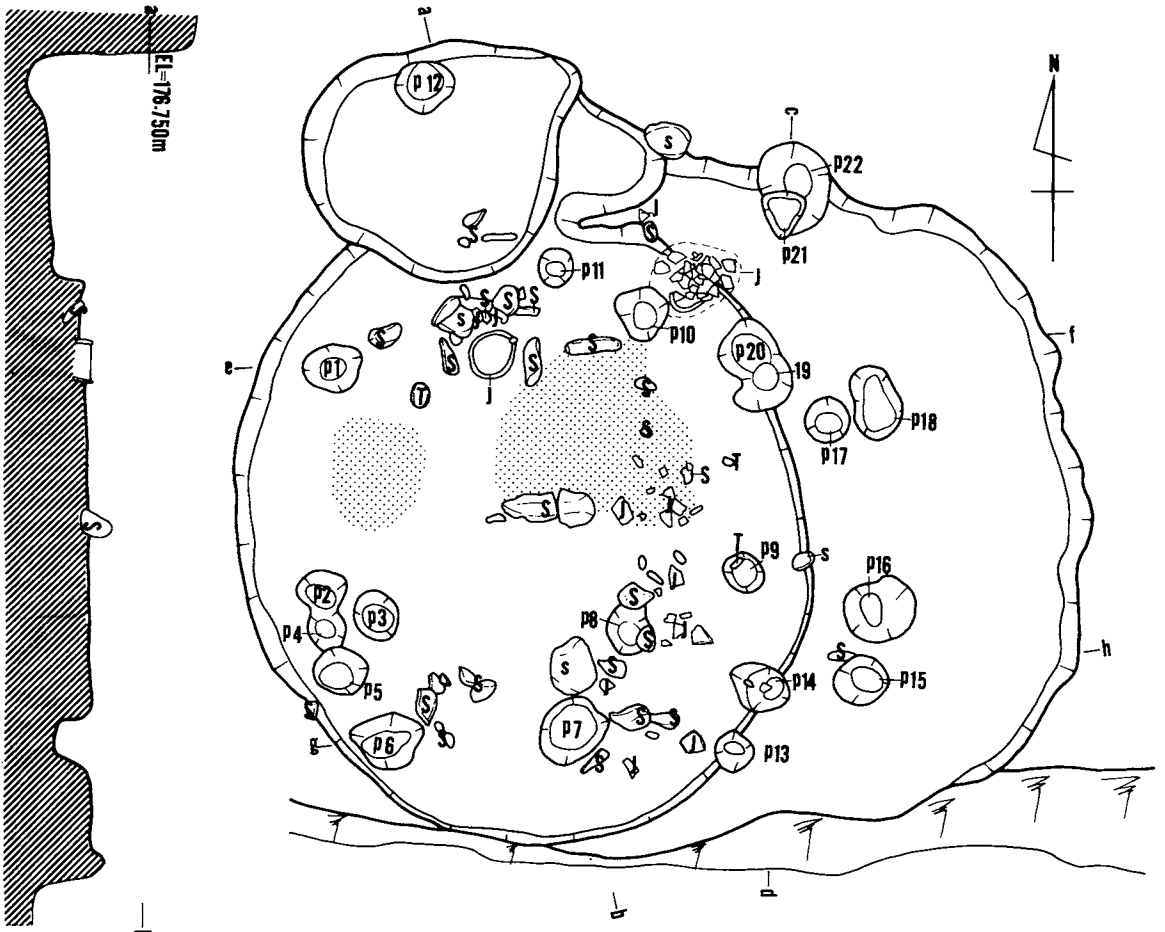
埋土は黒色土の単層で柔らかく炭化物粒の混入しているものである。床面はほぼ平坦であり、拡張前の住居址床面とは0.02m位の差が認められるが明瞭ではない。壁構は検出されない。

小ピットは全部で22個検出され、その内柱穴と思われるものは、拡張前の住居址の柱穴で、P<sub>1</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>14</sub>、P<sub>20</sub>が考えられ、拡張後の住居址の柱穴で、P<sub>1</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>15</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>22</sub>とP<sub>12</sub>が考えられる。その他の小ピットも柱穴(?)と思われるが定かではない。

炉は住居址北西壁に石囲い部と前庭部より構成される複式炉が設けられている。全長は1.90m前後であり、石囲い部は一部石を欠くが南北0.40m前後、東西0.60mを測り、長方形の河原石を方形に配しているようである。石囲い部の中には土器を埋設している。土器は口縁部分10cm前後のもので体部から底部を欠いている。前庭部は南北1.30m、東西1.30mの不整形を呈するもので住居址床面よりの深さは0.07mから0.18mで前庭部床面は南から北に下向して傾斜しているピットであり、この前庭部は住居址外に張り出すような形で作られている。以上の他には、住居址内に焼土が床面より上に散在して認められる個所が2ヶ所ある。

出土遺物は土器、石器であり、埋土中、床面上に検出されている。土器は埋設土器(図版7)と、図版8-2~8・10-20、23、24、26、27、32、33・11-39、40、42、43・13-55、65、67、68、70・14-77が、埋土中、床面上、炉址内から出土している。石器は図版15-16、16-26、17-29、36、18-39、40、19-41、43が、床面上や埋土中から出土している。

本住居址の時期は、出土土器、埋設土器から見て、縄文中期末葉に位置づけて良いであろう。

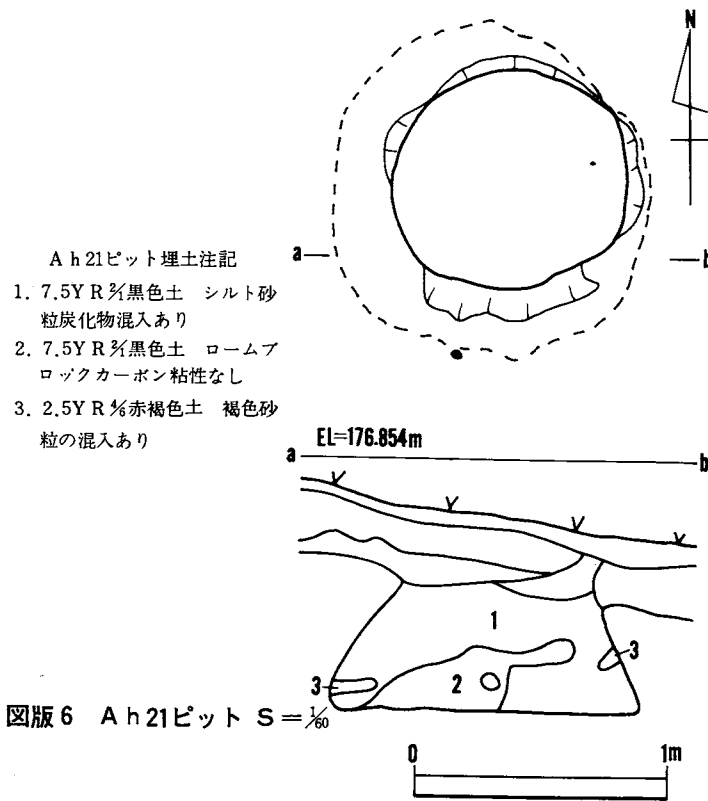


图版5 Ae21住居址S = 1/40

## (2) ピット

### A h 21ピット (図版6・写真図版5-B)

A h 21グリッドIV層上面で検出された。検出面上縁で直径0.90m、底部で直径1.05m、検出面よりの深さ0.50mの断面形がフラスコ形のピットである。床面は平坦である。埋土は2層に分かれ、1層は黒色砂質土で炭化物粒の混入が認められる。2層は黒色土で、褐色土粒、炭化物粒を含むものである。出土遺物はない。



## 2. 遺物

本遺跡の調査で得られた遺物は、遺構内（A e 21住居址）と遺構外の出土遺物であり、土器片、石器、フレーク類でダンボール箱3箱分である。以下、土器、石器に分けて述べる。

### (1) 土器

土器は破片総数で1,603片得られ、内訳は、口縁部破片155片、底部破片49片であり、その外は全て胴部破片である。土器の分類は施文方法、胎土等より次のようにした。

第1類 貝殻文土器

第2類 胎土に繊維を含む土器

第3類 胎土に繊維を含まない土器

#### 第1類 貝殻文土器（図版9-1・写真図版7-1）

口縁部破片1片が検出されている。器形は小破片のため不明である。口縁は平縁であり、口縁部は直立している。口唇部断面形は箱形を呈し、口唇部には斜位方向より棒状工具によって浅い刺突がつけられている。施文方法は器表面に貝殻腹縁文を口縁部より縦位に施文しているものである。胎土は石英粒、雲母粒を含むが器表裏面ともよく調整されている。また器内面にはスス状の物質が付着している。色調は表面が褐色で、裏面は暗褐色を呈する。器厚は7mm位である。

#### 第2類 胎土に繊維を含む土器（図版9-2～19・写真図版7-2～19）

施文方法よりさらに細分される。

##### a 結節文によって施文するもの（図版9-2～5・写真図版7-2～5）

器形は小破片のため不明である。口縁は平縁のようであり、口縁部は直立している。口唇部断面形は箱形を呈するもの（図版9-2、5）、体部に比して厚手となり、外傾して丸くなるもの（図版9-3）がある。施文方法は撚りがLもしくはRの原体を結節したものを器表面に横位に施文している。胎土はいずれも繊維を多量に含むが器表裏面ともよく調整されている。焼成は普通である。色調は図版9-2、4が浅黄橙色、図版9-3が褐色、図版9-5が表面は黒色で裏面が浅黄橙色を呈している。器厚は6mmから8mm位である。

##### b 羽状縄文を施文するもの（図版9-6・写真図版7-6）

体部小破片であり、器形は不明であり、器表面も不鮮明であり施文方法もはっきり捉えられないが、原体RLとLRの2種の撚りの違う原体を交互に器表面に施文して羽状縄文を施文しているようである。胎土は多量の繊維を含み脆弱である。焼成は不良である。色調は表面が浅

黄橙色、裏面が灰黒色を呈する。器厚は8mm位である。

**c 単節斜縄文を施文するもの** (図版8-10・9-7~16)

底部破片1点、底部近くの破片と思われるもの1点を除き他はいずれも体部破片である。底部(図版8-10)は尖底部であり、底部近くの破片(図版9-16)も尖底部分に近い破片と思われる。図版9-9は口縁部破片で口縁部分の位置に粘土の高まりがみられ、それより推察して、折り返し口縁となるものようである。施文方法は図版8-10が原体RLを施文し、その他はいずれも原体LRを施文している。図版9-7、8は節が大きいものである。胎土はいずれも繊維を含むが器表裏面ともよく調整されている。焼成は普通である。色調は図版8-10・9-12、16が浅黄橙色、図版9-9が表面は黒色、裏面は浅黄橙色、その他が暗褐色を呈している。器厚は厚いもので10mmで薄いもので7mm位である。

**d 複節斜縄文を施文するもの** (図版9-17・写真図版7-17)

小破片であり、器形、施文方法ともはっきりしないが、原体LRLと思われる縄文を施文している。胎土は繊維を僅かに含むものである。焼成は普通である。色調は褐色を呈する。

**e 単軸絡状体によって施文するもの** (図版8-9・9-18)

器形は図版8-9よりみれば平底の深鉢形土器であろう。施文方法は単軸に2本の原体を巻きつけて施文するもので、網目状撚糸文といわれるものである。胎土は繊維を含み、石英粒、粗砂が混じるが普通である。色調は表面が浅黄橙色、裏面は暗褐色を呈する。器厚は7mm前後である。焼成は普通である。

以上の他に口縁部破片(図版9-19)があり、口縁部は無文となっている以外は小破片のため不明である。

**第3類 胎土に繊維を含まない土器** (図版7-1・8-2~8・10・11・12・13・14・写真図版6-1、2、6~9・8・9・10・11)

施文方法よりさらに細分される。なお本類にはA e 21住居出土土器も含まれる。

**a 隆線によって施文するもの** (図版10-20~30・写真図版8-20~30)

器形はいずれも小破片であり不明である。口縁は平縁と思われ、口縁部は内湾しているもの(図版10-21、22)と口唇部分で内側に入っているもの(図版10-20)である。施文方法は、隆線の両脇をいずれも丁寧になでているもので、図版10-20~24は隆線がはっきり見られ、横断面は丸みを呈している。図版10-25~30は隆線が極僅かに見られ、横断面形は三角形状を呈している。図版10-20~24は器表面を無文であるが、図版10-25~30は単節斜縄文RLとLRが施文されている。胎土は石英粒、粗砂を含むがよく調整されている。焼成は良い。色調は浅



黄橙色を呈している。器厚は厚いもので10mm位、薄いもので7mm位である。

**b 曲線の沈線を施文するもの**（図版10-31~38・11・12・写真図版8-31~38・9・10-51~54）施文方法よりさらに細分される。

**b-1**（図版10-31~38・写真図版8-31~38）

器形は小破片のため詳細は不明であるが、口縁が外反する深鉢形土器と推定される。図版9-31、32、33は口縁部破片であり、口縁は平坦で、口縁部が外反するもので、口唇部は体部よりも薄くなっている。施文方法は縄文を施文後、沈線を口縁部より体部にかけて縦長の楕円形状に施文するもので、沈線は浅い。口縁部分はすり消され、体的にすり消されている。

なお、図版10-38は撚糸文を縦位に施文している。胎土はいずれも粗砂、小石を混じるが、表裏ともよく調整されている。焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。器厚は5mmから7mm位である。

**b-2**（図版7・11・写真図版6-1・9）

図版7の実測土器はA e 21住居址の埋設炉として使用されたもので、口縁部分は10cm位のものであり、器形全体は捉えられないが口縁部が外反する深鉢型土器と思われ、口縁は4個の波状を呈するものである。施文方法は幅広の沈線で横方向に曲線による文様を施文しているもので、区画された中に縄文があるものである。縄文は単節斜縄文RLを横位に施文している。図版11の拓影土器も同様の器形、施文方法のものである。胎土は図版7が埋設炉として使用されており、表裏面がいくらか剥落しているが、他の土器片は表裏面ともよく整えられている。焼成は普通である。色調は黄褐色を呈している。器厚は9mm位である。

**b-3**（図版12・写真図版10-51~54）

いずれも同一個体と思われる資料である。器形は口縁部が外反し頸部で若干くびれ、胴部で膨らむ形を呈する深鉢形土器と思われ、口縁はゆるやかに波状を呈している。施文方法はb-2類より細い棒状工具により沈線を施文するもので、口縁部では横方向に施文し、口縁に沿うように施文している沈線間には下位方向より刺突文を施しているものであり、胴部では縦方向に沈線を施文しているようである。縄文は沈線で区画された中に単節斜縄文RLを横位、斜位に施文しているものであり、口縁部は無文帯となっている。胎土は石英粒、粗砂を含むが器表裏面ともよく調整されている。焼成は普通である。色調は浅黄橙色を呈している。器厚は胴部部分で10mmであり、口縁部分で7mmである。

**c 直線状の沈線を施文するもの**（図版13-56~62・写真図版10-56~60・11-61、62）

施文方法よりさらに細分される。

**c-1**（図版13-56~58・写真図版10-56~58）

器形は小破片であり器形全体を捉えられないが、深鉢形土器と思われる。施文方法は口縁と

平行する数条の平行する沈線を施文するもので、沈線間内には縄文が施文されている。図版13-57では沈線を連結する縦方向の沈線がみられ、図版14-58では楕円形文の一端と思われる部分が見られる。胎土は石英粒、粗砂を含むもので脆弱である。焼成も不良である。色調は赤褐色を呈する。器厚は6mm位である。

**c-2** (図版13-59~62・写真図版10-59、60・11-61、62)

器形は図版13-60、62が口縁部が直立する深鉢形土器と思われ、図版13-61が口縁部が内湾する浅鉢形土器と思われる。口縁はいずれも平縁で、図版13-61、62は口唇部裏側に一条の沈線をめぐらしている。図版13-62は口唇部の表面に浅い刻みがつけられている。施文方法は、いずれも口縁に平行する数条の沈線を施文するもので、図版13-61には沈線内の2ヶ所に粘土粒を貼り付けている。縄文は細い単節斜縄文であり、図版13-59が沈線間内にあり、図版13-60は体部に施文されている。その他はいずれも丁寧に磨かれている。胎土は素地土が多く入り緻密で、裏面はよく整えられている。焼成も良い。色調は図版13-59、60が浅黄橙色、図版13-61、62が暗褐色を呈している。器厚は5mm位である。

**d 刺突文のみを施文するもの** (図版13-55・写真図版10-55)

1片の出土で、小破片のため器形、施文方法ともよくわからないものである。竹管状の工具を器面に対して直角に施文しているものである。胎土は粗砂を含むが、よく調整されている。焼成は普通である。色調は暗褐色を呈している。器厚は5mmである。

**e 縄文のみを施文するもの** (図版8-2~6・13-63~71・14・写真図版11-63~71)

図版8-2~6はいずれも深鉢形土器であり、図版8-2以外は底部破片である。図版8-2は口縁部が直立し、体部上半より下にかけて細くなるもので、底部は口縁部に比して小さいものである。口縁は平縁であり、口唇部断面形は丸みを帯びている。縄文は単節斜縄文LRを口縁部より底部近くまで施文しているものである。底部破片である図版8-3~6も縄文が底部近くまで施文され原体はRLである。底部形態としては、図版8-6が底部近くで細くなり、底部が張り出している。他はいずれも張り出さないものである。拓影図では図版13-63の口縁部破片が突起を有するものようであるが、他はいずれも平縁であり、図版13-64が口縁部が内湾する以外は、外反もしくは直立するものである。施文方法は口縁部より縄文を施文するもので、単節斜縄文のもの(図版13-63~66)、複節斜縄文のもの(図版13-67~71・14-72~74)単軸に原体を巻きつけて器表面に縦位に施文して撚糸文としているもの(図版14-75~78、80)不整撚糸文のもの(図版14-79)である。胎土は、実測土器、拓影土器とも石英粒、粗砂を含むものである。焼成は普通である。色調はにぶい褐色を呈している。器厚は厚いもので9mm位、薄いもので5mm位である。

f 器表面が無文のもの (図版 8-7、8・写真図版 6-7、8)

住居址内から 1 点 (図版 8-8) と遺構外から 1 点 (図版 8-7) 出土している。図版 8-7 は小形の土器であり、体部から口縁部を欠損している。図版 8-8 はコップ状を呈するもので、底部を欠いている。器表面は軽くナデつけられているようである。胎土は石英粒、粗砂を混じるが、素地土が多く入っている。焼成は普通である。色調は浅黄橙色を呈している。

以上の他に表採品で須恵器小破片が一片出土している。

以上土器について述べたが、これら土器の時期であるが、第 1 類としたのは、器表面に貝殻文を施文していることより早期末葉頃に比定できよう。第 2 類としたのは、胎土に繊維を含むことや、底部形態より縄文時代前期初頭に位置づけることができよう。第 3 類は胎土に繊維を含まないものを一括してあるが、縄文時代中期から晩期のもが含まれている。第 3 類 b-1 は施文方法より大木 9 式に相当するものと思われ、第 3 類 a、b-2、b-3、d、e、f の各類は住居址出土のものも含まれており、施文方法より大木 10 式に相当するものであり、第 3 類 c-1 は施文方法より縄文時代後期頃に位置づけられ、第 3 類 c-2 は晩期に位置づけられ、大洞 C<sup>2</sup>、A 式に比定される。

## (2) 石器

石器・フレイクは合計 663 点得られ、その内石器及び加工痕ないし使用痕の有するフレイク類は以下の通りである。

石 鎌	4 点
石 ヒ	3 点
石べら状石器	8 点
加工痕ないし使用痕のある剥片	8 点
コアスクレーパー	4 点
磨製石斧	2 点
凹 石	3 点
石 皿	1 点

### 石 鎌 (図版 15-1 ~ 4・写真図版 12-1 ~ 4)

比較的小形のもので、形態としては以下に分けられる。

1. 二等辺三角形状で基部に僅に抉り込みのあるもの (図版 15-1)。先端部と逆ざしの一部が欠損している。表裏とも入念な加工が加えられている。

2. 両側縁が膨らみ、先端部が丸みを帯び基部が平基のもの（図版15-2）。剥片の末端部を利用し片方の側縁部分の表裏面と基部に加工を加えただけのものである。基部に加工を加えていることからあるいは小形の石べらの類かも知れない。

3. 細身で長い鎌（図版15-3、4）。先端部、基部ともほぼ同一の形態を呈するもので、図版15-4は先端部が鋭く加工されている。両縁辺の加工は図版15-3は浅く剥離が行なわれ、図版15-4では急角度の剥離が行なわれている。

#### 石 ヒ （図版15-6～8・写真図版12-6～8）

いずれも縦長のものであり、図版15-7は先端部が欠損している。図版15-6、7は表面の左右から押圧剥離によると思われる細長い加工痕を有している。図版15-8は表面の右側縁にのみ押圧剥離によると思われる加工を有し、つまみ部分は非常に小さいもので、つまみ部分にはアスファルト状の物質が付着している。

#### 石べら状石器 （図版15-9～16・写真図版12-9～16）

石べら状石器として分類したものは図示したものであるが、本来の石べらと呼ばれて分類しうる石器は図版15-9～12のものであろう。すなわち横断面形が三角形状を呈し、刃部と目される部分には急角度で剥離加工が施されて、刃部を形成しているものである。これら以外に一応石べら状石器として分類したものの中には、図版15-13～16があるが、図版15-13は刃部と目される部分が両刃となっており打製石斧の可能性のあるものであり、図版15-14は横長の剥片を素材とし、刃部と目される部分が第1次剥離面の縁辺部にあり、曲刃状になっていることから、刃部が一部欠損しているがトランシエ様石器の可能性もある。図版15-15、16は欠損品であり、形態が掴めないが石べら状石器の類に入れたものである。また、図版15-5は石槍の先端部分の可能性もあり、石べらの可能性もあるものである。

#### 加工痕ないし使用痕のある剥片 （図版16-17～27・17-28～34・写真図版13-17～27・13-28～34）

不定形の剥片であり、剥片縁辺部の片面の一部に細部加工が施されたものや、縁辺の一部に使用痕らしきものが認められるものであり、特定の形態を有していないものである。加工痕がある石器としては、図版16-17～26があげられ、これらの類はサイド、もしくはエンドレスクレーパーの類に入れられるものであろう。

**コアスクレーパー**（図版17-37、38・18-39、40・写真図版13-37・14-38、39、40）

大型肉厚の原石の一部の両面から、急角度の剥離により刃部が形成されている。いわゆる石刃核ともみられるような形態を呈するものであるが、打面部と剥離痕が残された縁辺部分に使用痕とみられる擦痕が認められるものである。

**磨製石斧**（図版17-35、36・写真図版13-35、36）

大、小2点の出土である。いずれも欠損品で、刃部部分を欠く、表裏両面には加工痕と思われる磨き痕が認められるもので、両側縁は平担で角がついている。図版17-35は欠損部を再加工して刃部として使用しているものの様である。

**凹石**（図版19-42~43・写真図版14-41~43）

長円形の河原石の片面もしくは、両面に1ないし数個所の凹みを持つ石器であり、石器の表面は自然の状態を呈し、凹みは全体的に浅いものである。

**石皿**（図版19-44・写真図版14-44）

欠損品であり平面形は推定の域を出ないが、方形状を呈し、4個の脚部をもつものと考えられる。器面は荒いが、比較的丁寧な加工が行なわれていたようであり、上面は縁どりされている。

以上これら石器のうち住居址床面出土のもの（図版15-12・17-30・19-41、43）以外のは、出土状態等に特に目立つ特殊性はみられない。

## V章 まとめ

本遺跡は分布調査の際に相当広範囲に渡って攪乱・破壊を受けているであろうことが想像された。調査の結果、台地を削って斜面に盛土をしていることが判明し、旧地形は瘦せ尾根状の台地で、台地は一度幅が12~15m位に細くなり、次第に雫石川に向かって広くなり最大幅30m前後の瘦せ尾根状の舌状台地が考えられる。検出された遺構が雫石川右岸崖上であることから考えると台地は現在の雫石川方向に相当張り出していたと思われ、雫石川によって侵蝕され崩壊しかつての集落跡も崩れてしまったと考えられる。またこれらの事から推測するとあまり集落規模の大きくない集落を形成していたと考えることが出来る。

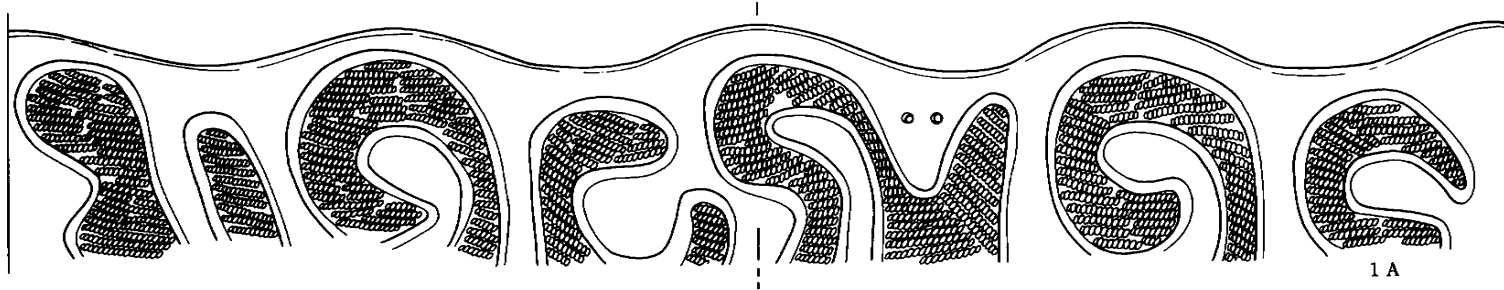
なお、最後になりましたが、調査中及び報告書作成のための遺物実測、写真撮影、図版トレースなどを下記の人々に御協力いただいた。記して感謝いたします。

発掘調査に御協力いただいた方々

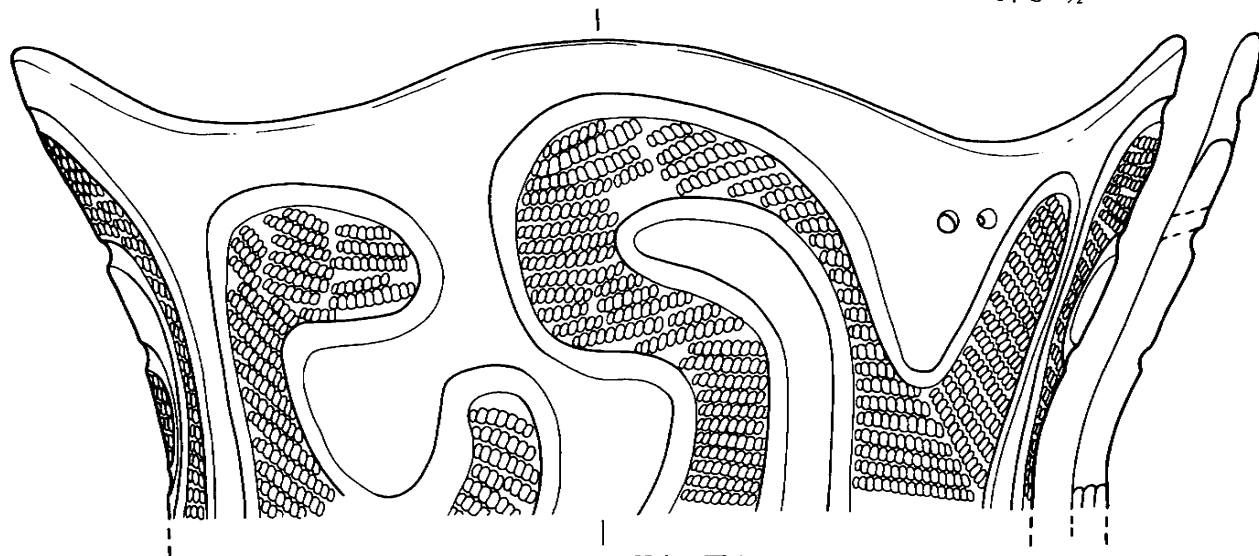
瀬川与四蔵、大鷲嘉兵衛、高橋孝一、高橋栄次、土川長七、高橋錦栄、高橋三吉、高橋大治、高橋ミヨ子、泉川スギノ、瀬川エイ子、藤平ヨシノ、村上ツギ、藤平八江、瀬川ハナ、高橋ミサ、高橋ハル、高橋フジ、高橋マサ、高橋和子、土川シゲ、高橋トキノ、瀬川クニ、佐藤トミ、広瀬カツエ、広瀬カツエ、沼田ツヨノ、広瀬かつえ、高橋ミエ、高橋サメ、杉沢香代、高橋ウメノ、川村きみえ、高橋サキ、高橋寿子

報告書作成に御協力いただいた方々

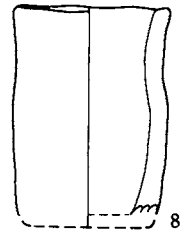
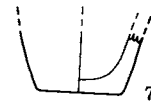
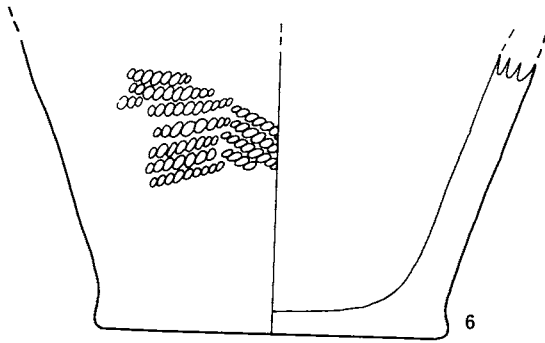
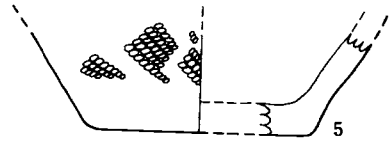
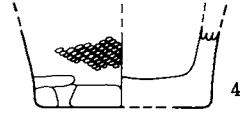
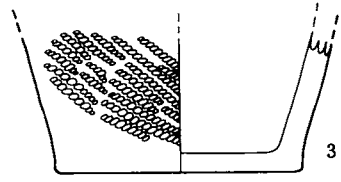
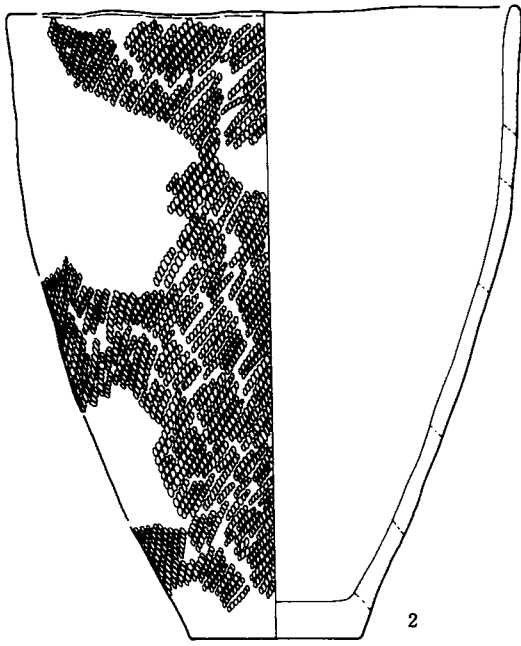
瀬川クニ、高橋ミヨ子、佐々木美耶子、大久保隆、川口エミ子、高橋ヒデ、附田チヤ、菅原キシ子



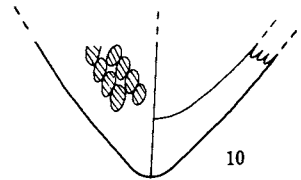
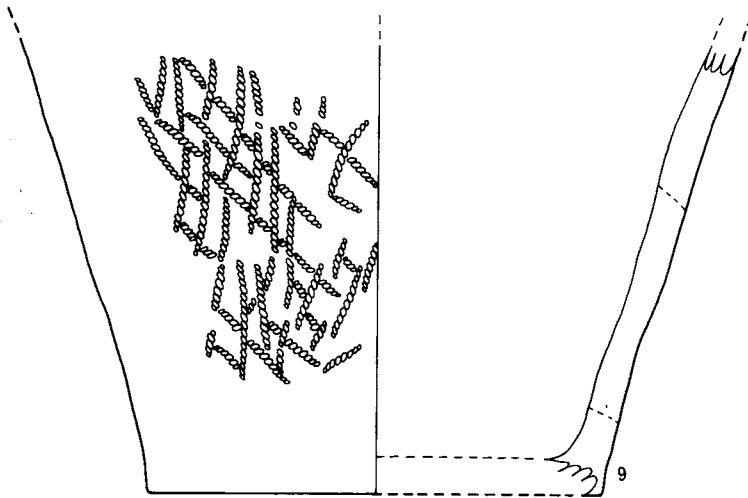
1は2の展開図 1A  
 1AS =  $\frac{1}{4}$   
 1. S =  $\frac{1}{2}$



図版7 土器実測図1 Ae21住居址埋設土器



2~8 Ae21住居址出土遺物

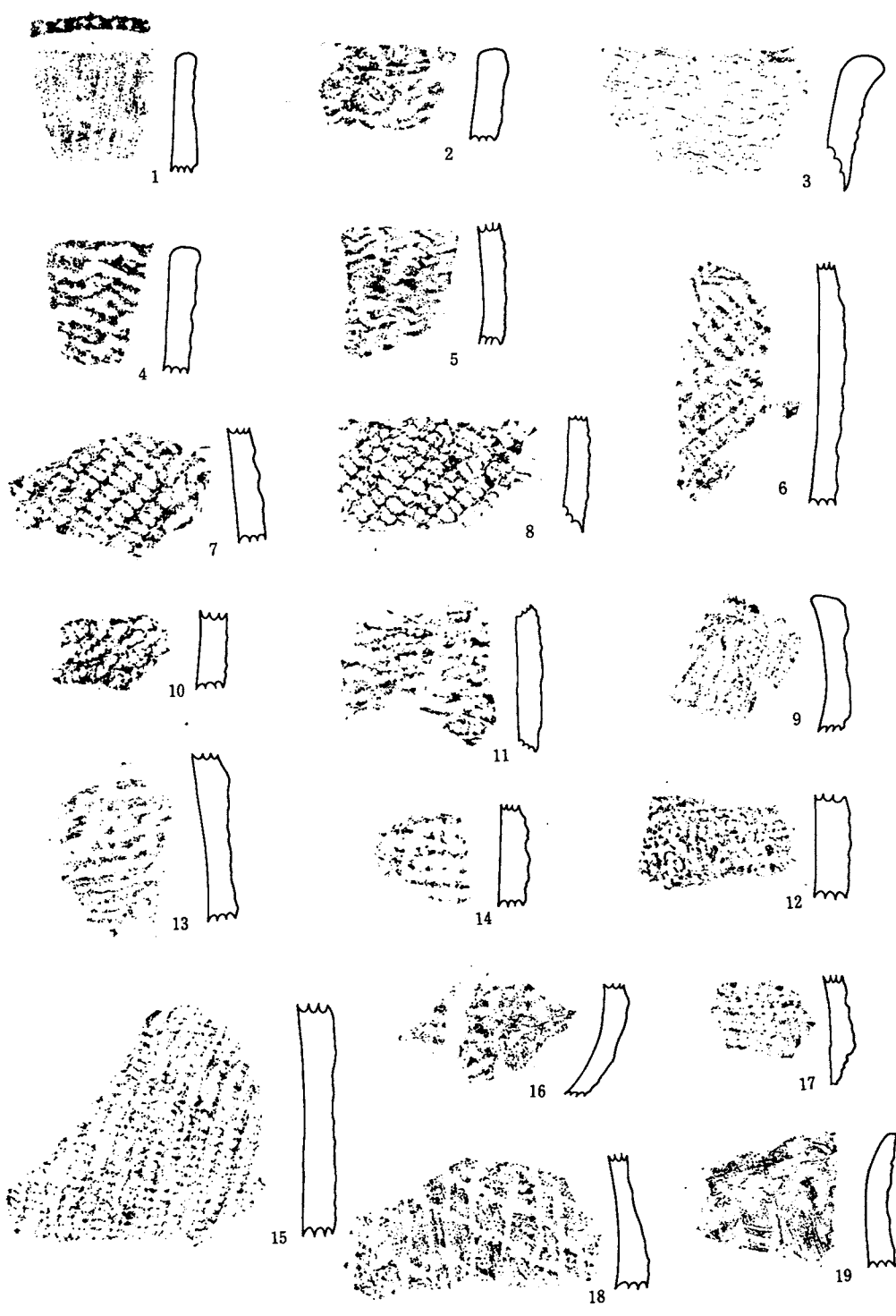


9~10遺構外出土遺物

2 S=1/4 3~10 S=1/2

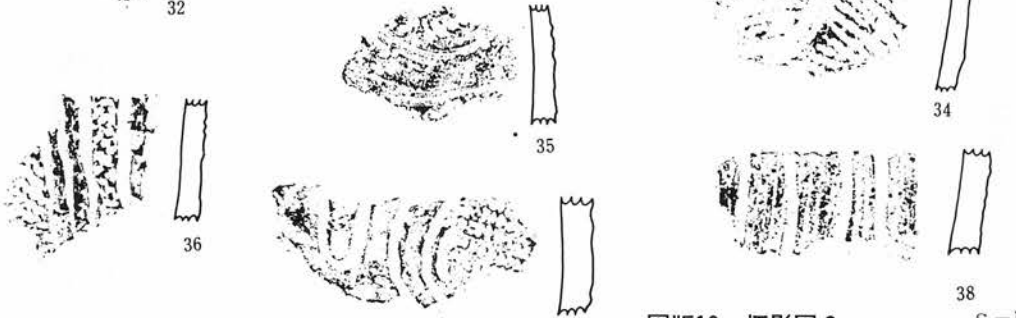
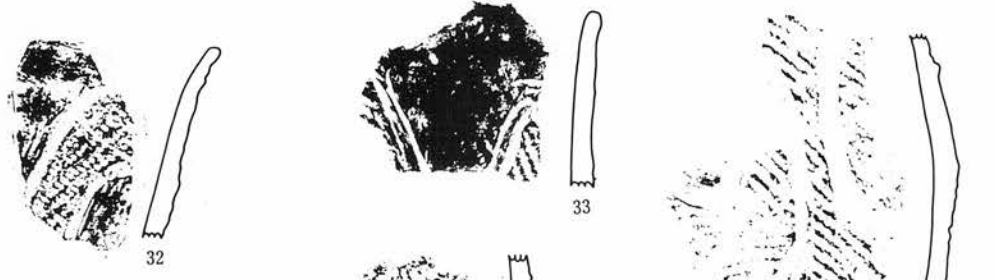
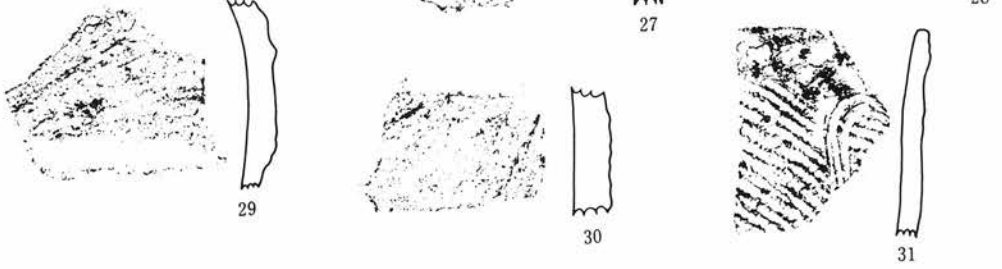
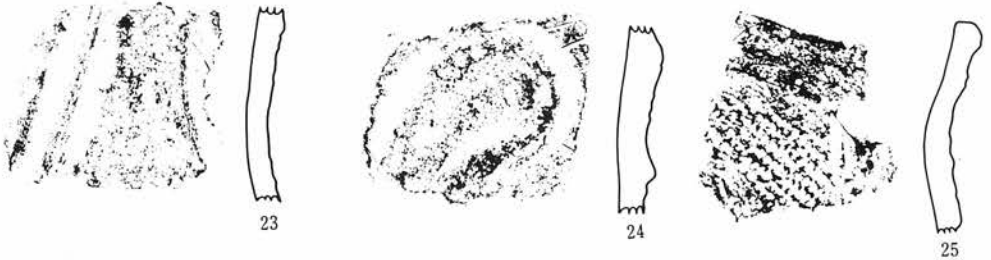
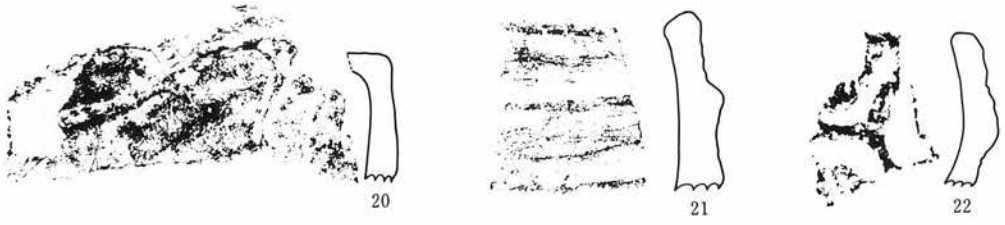
图版 8 土器実測图 2



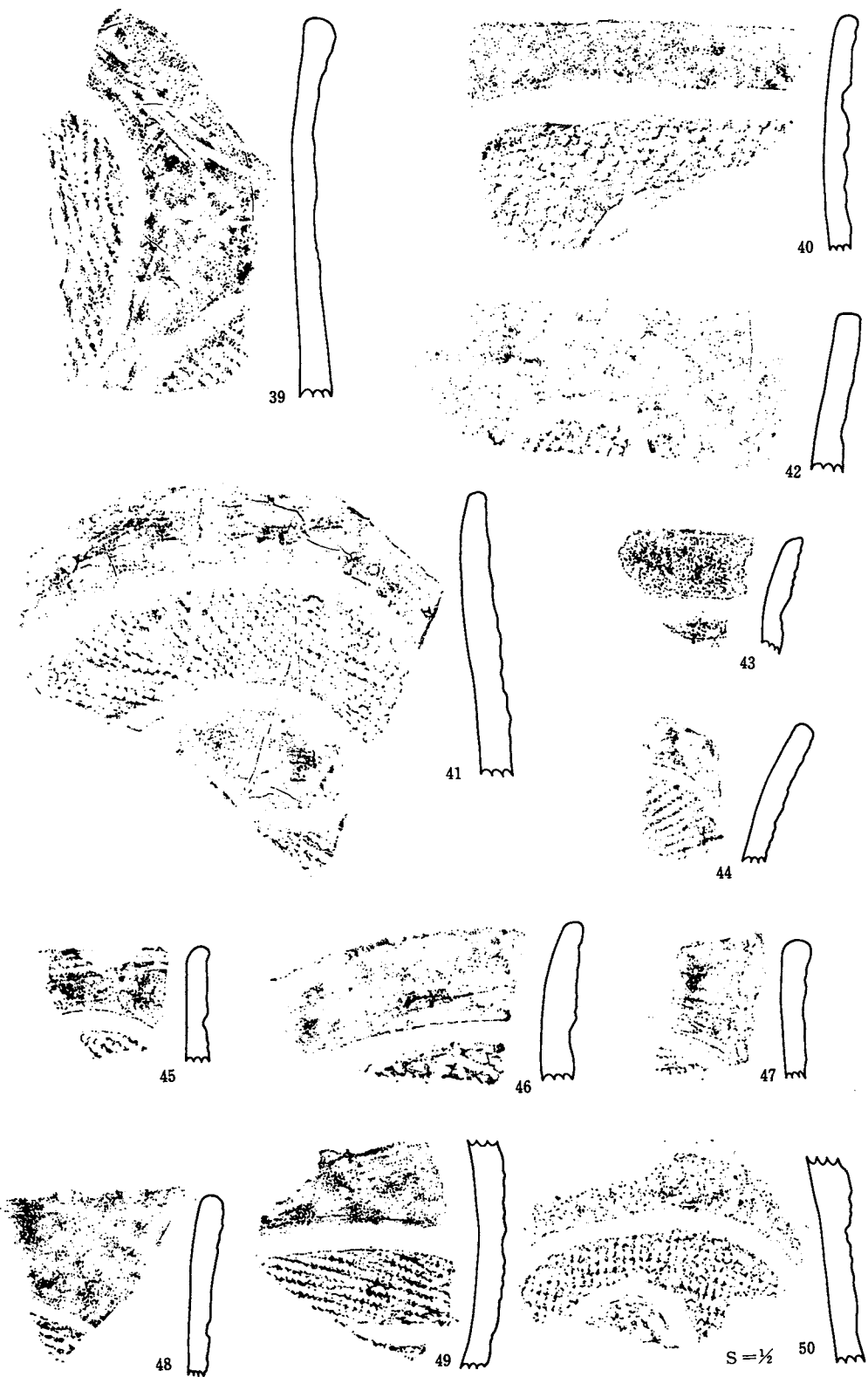


S = 1/2

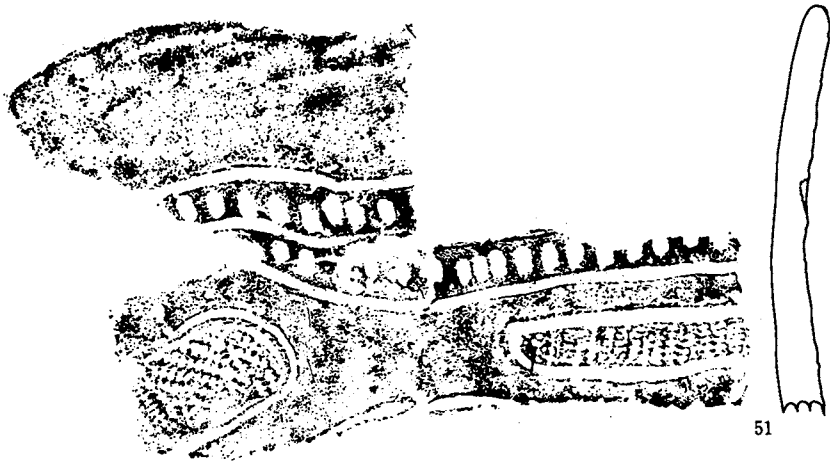
图版 9 拓影图 1



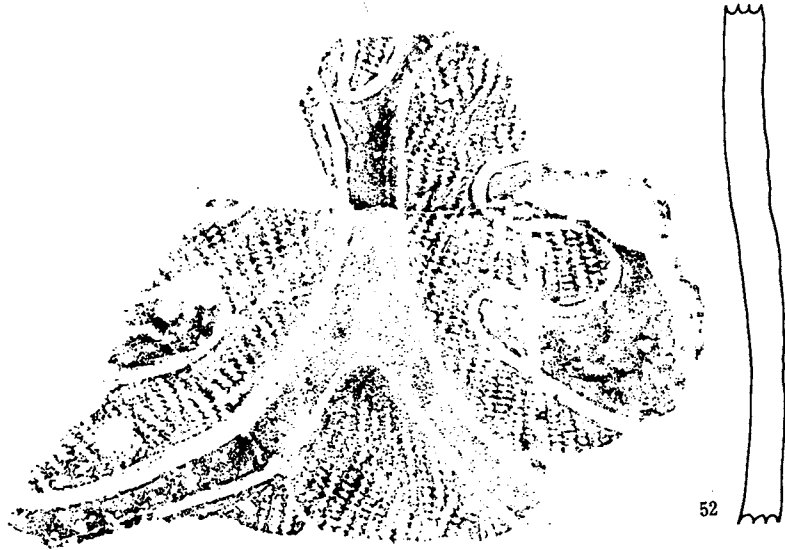
图版10 拓影图2 S=1/2



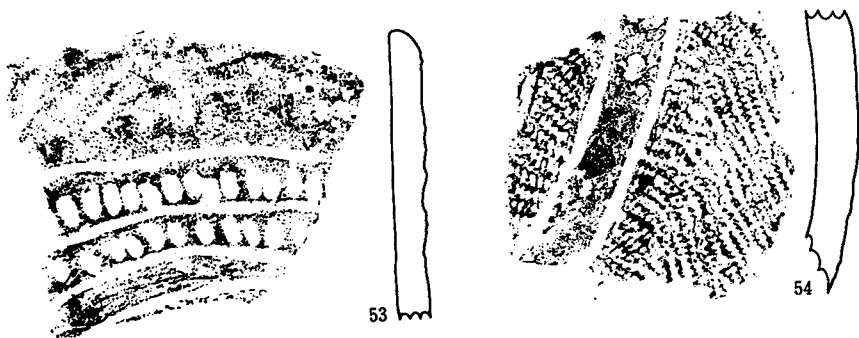
图版11 拓影图3



51



52

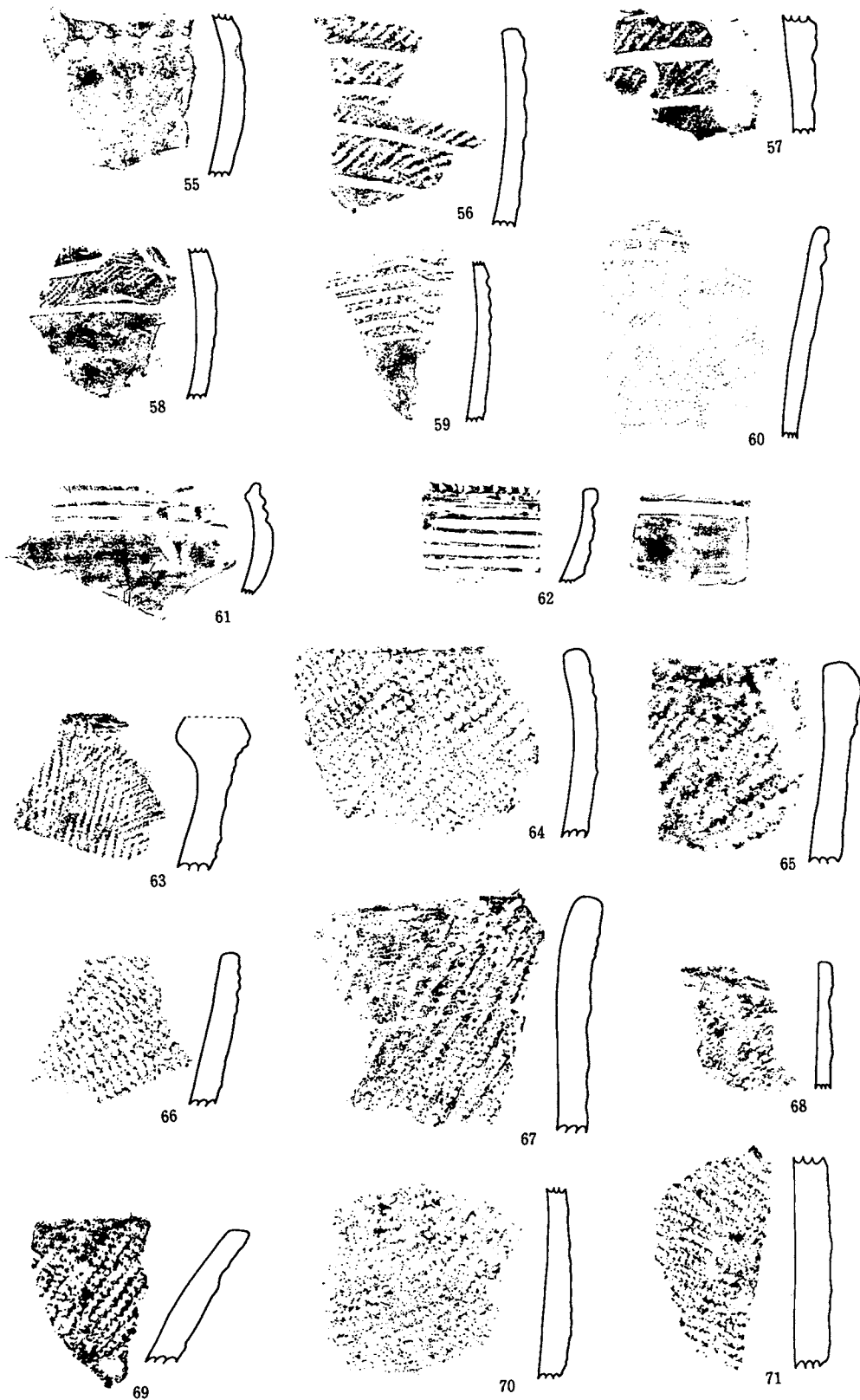


53

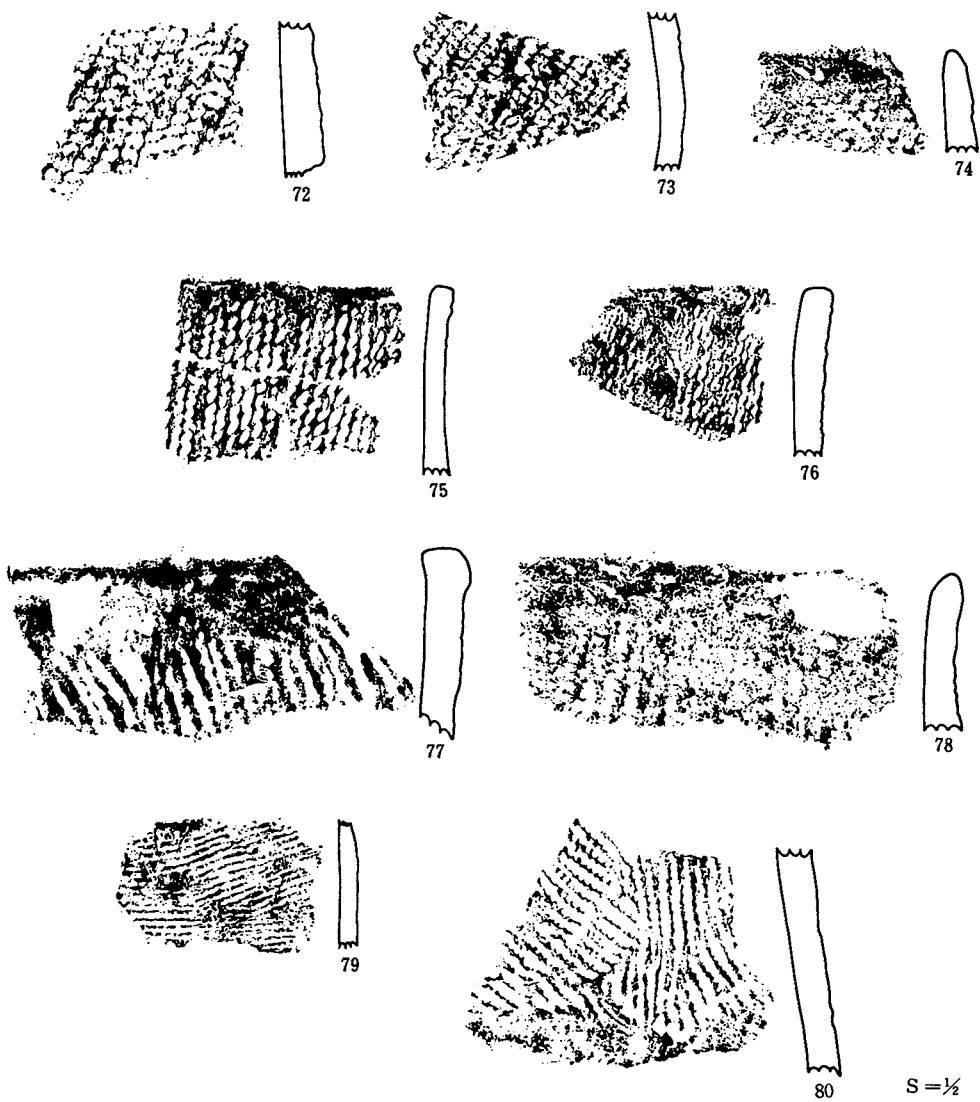
54

图版12 拓影图4

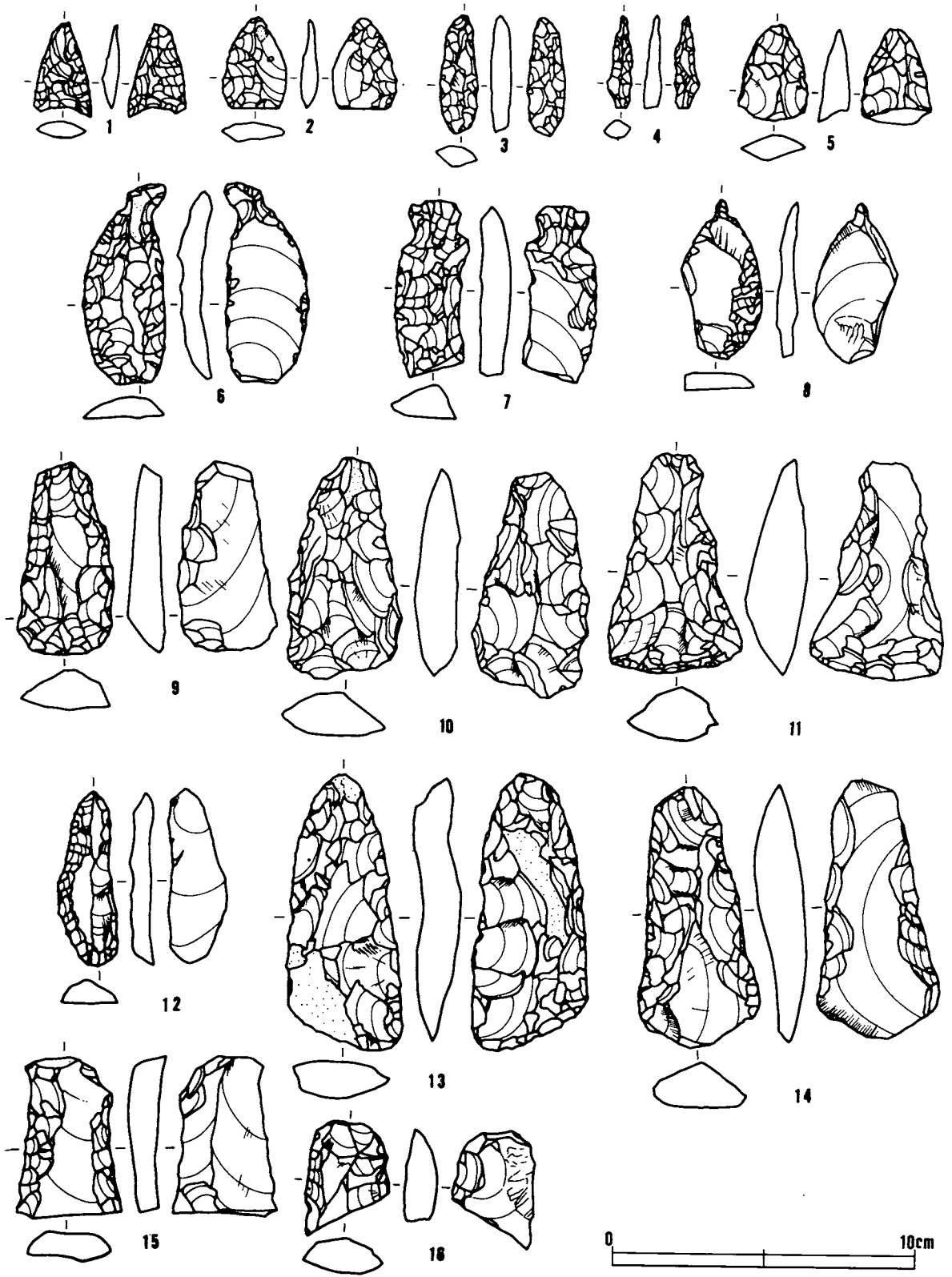
S=1/2



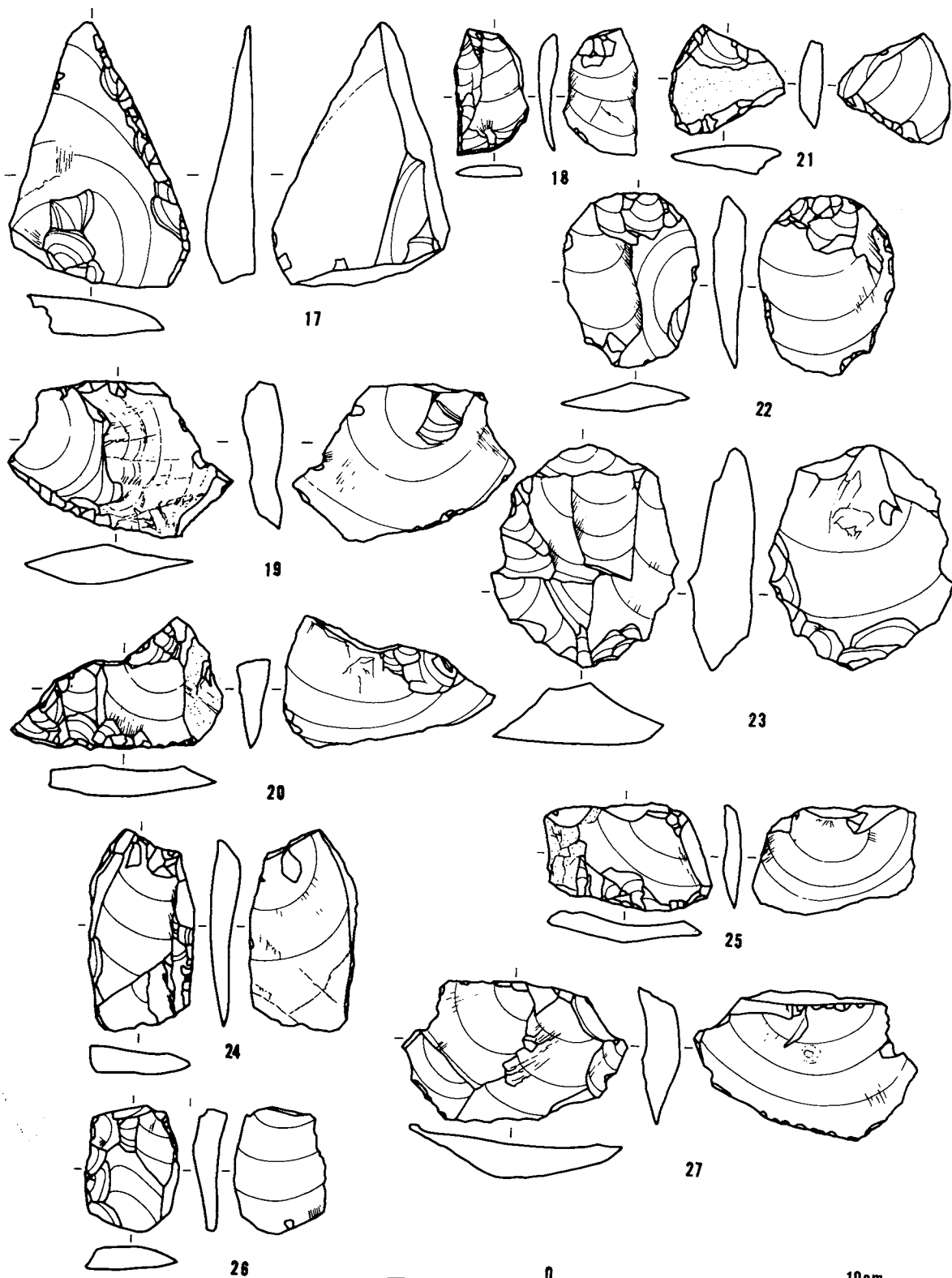
图版13 拓影图 5 S = 1/2



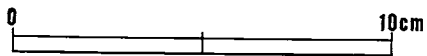
图版14 拓影图 6



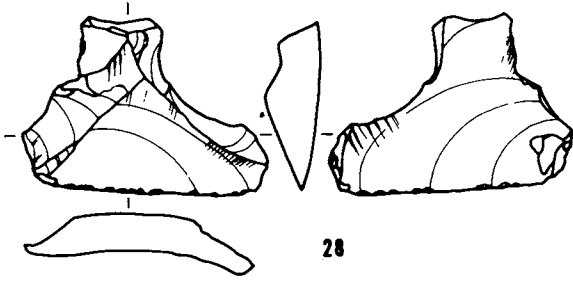
图版15 石器 1



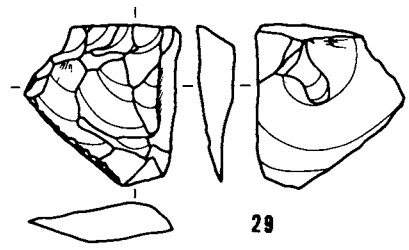
图版16 石器 2



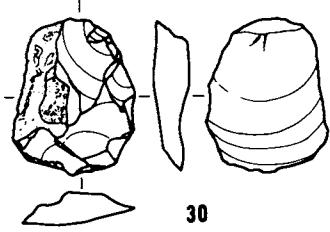




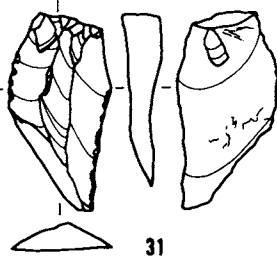
28



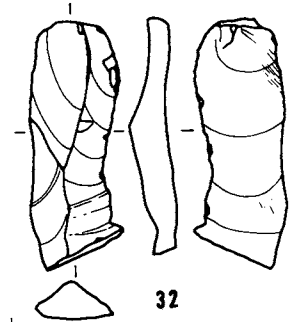
29



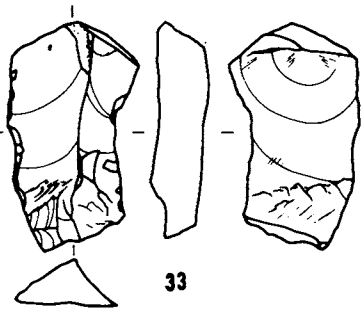
30



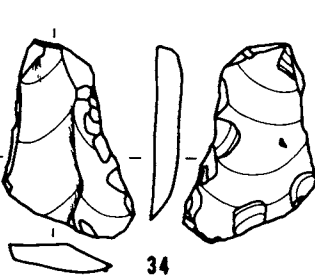
31



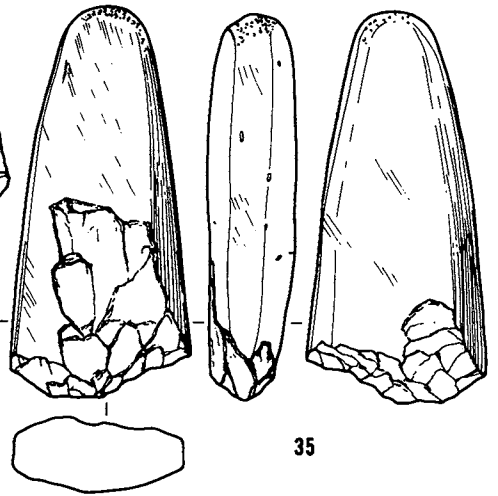
32



33



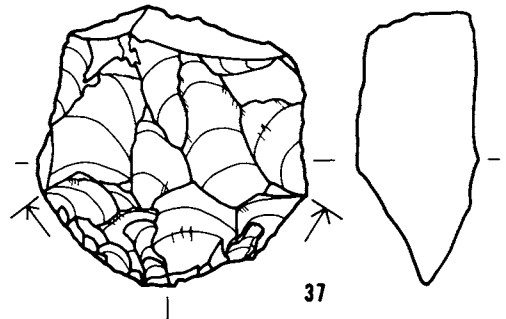
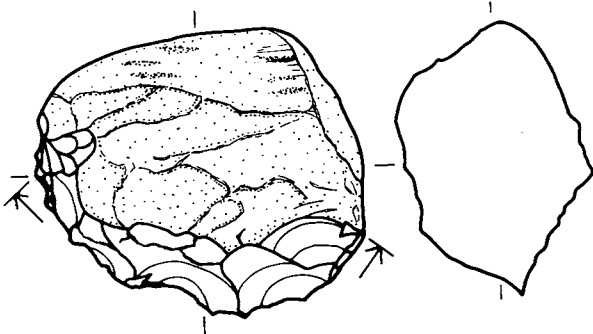
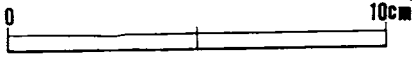
34



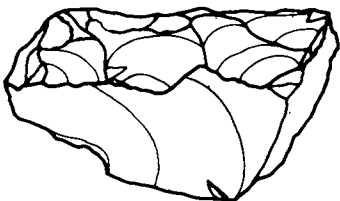
35



36



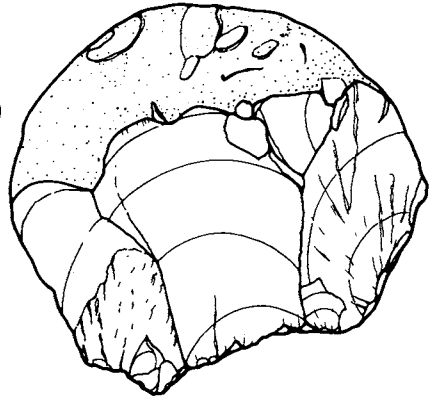
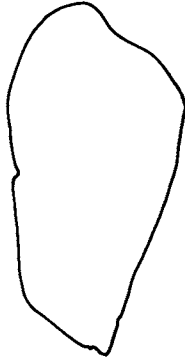
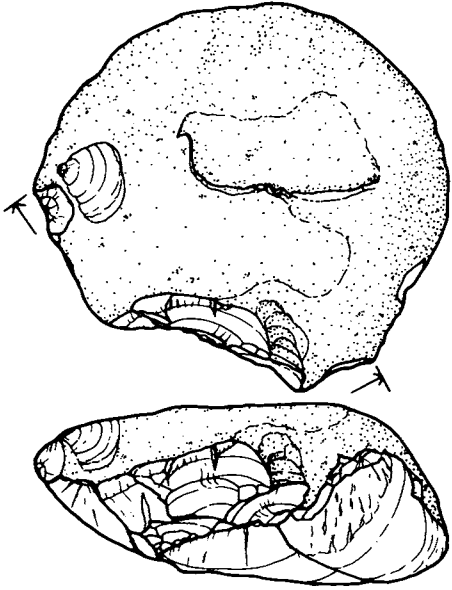
37



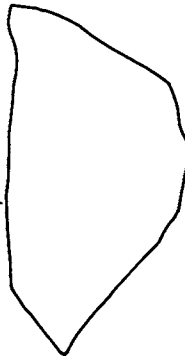
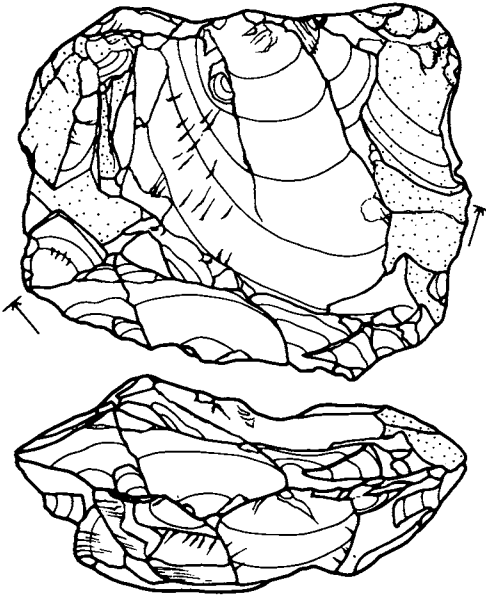
38



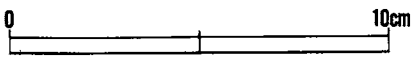
图版17 石器3



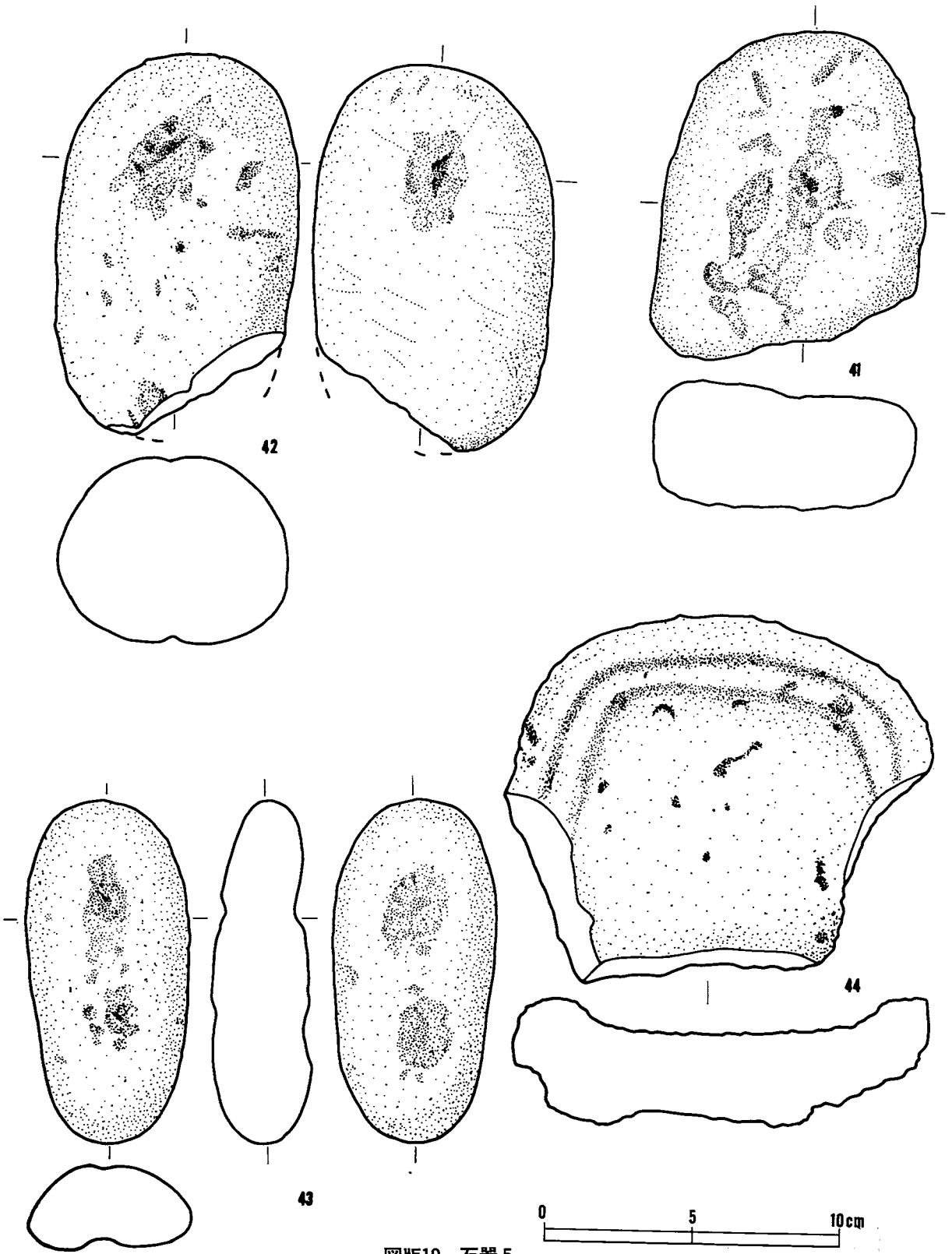
39



40



图版18 石器 4

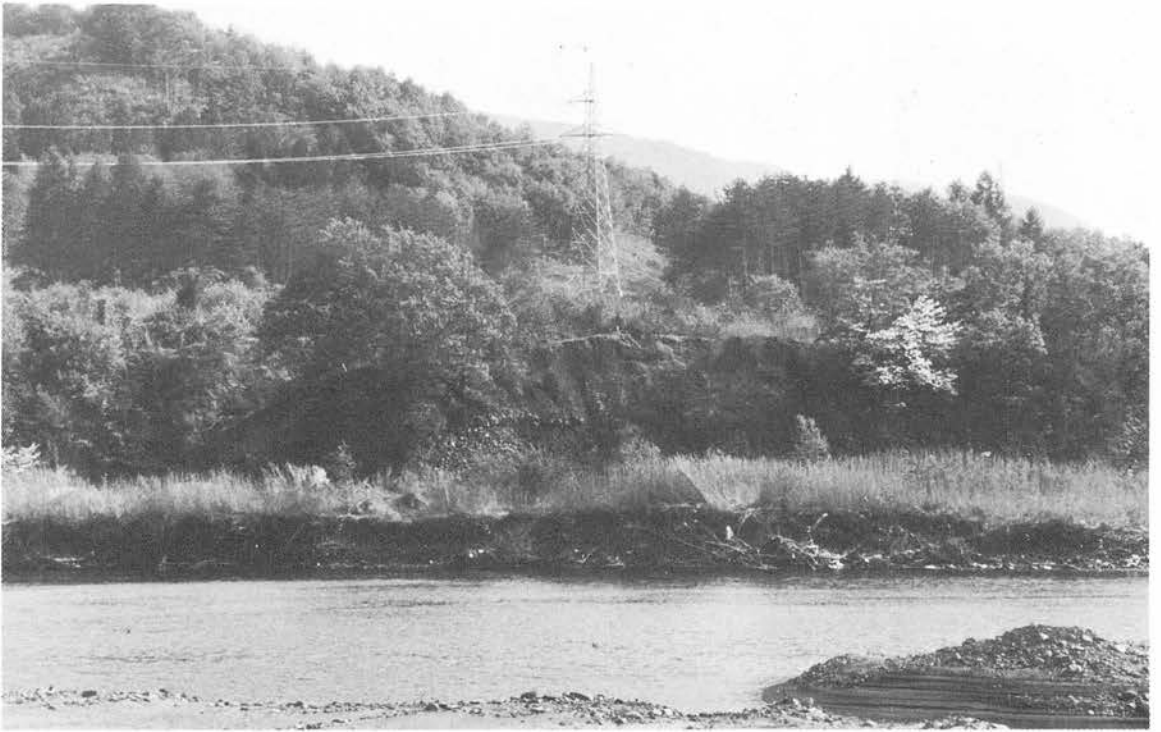


图版19 石器 5

図版	番号	グリット名	層位	a長さ(mm)	b幅(mm)	c厚さ(mm)	重量(g)	石 質
15	1	Abc24	I M	27	17	6	2.3	硬質泥岩
	2	Abc 21	I	30	22	6	3.05	〃
	3	Acd 21	I	39	7	7	3.65	〃
	4	Agh 21	I	30	8	6	1.05	〃
	5	Aab 18	I	31	22	8.5	5.5	〃
	6	Ch12 17	I	65	27	7	16.45	〃
	7	Agh 18	I	57	21	11	17.35	玻璃質流紋岩
	8	Acd 21	II	53	25	6	7.8	凝灰質硬質泥岩
	9	Acd 21	I	62	31	12	25.8	凝灰質硬質泥岩
	10	Ab 24	I	70	35	14	37.45	硬質泥岩
	11	Ce 03	I	73	30	19	47	凝灰質硬質泥岩
	12	Aef 21住	床面	58	19	8	8.9	硬質泥岩
	13	Cr 03	I	89	33	12	46.45	〃
	14	Acd12	I	86	32	14	43.9	〃
	15	Abc21	I	52	30	7.5	21.8	〃
	16	Aab 9	I	34	27	11	11.05	〃
16	17	Ace03	L	86	45	12	57.85	〃
	18	Agh21	I	41	22	4	5.9	〃
	19	AD18ベルト	I	49	52	13	40.4	〃
	20	Agh 18	I	42	69	9	25.15	〃
	21	Agh18	I	36	36	8	9.8	玻璃質流紋岩
	22	Acd 21	I	57	42	9	2.75	硬質泥岩
	23	Acd18	I	73	57	19	80	玻璃質流紋岩
	24	Acd18	I	66	34	7	23.35	硬質泥岩
	25	Aab15	I	32	50	6	13.9	凝灰質硬質泥岩
	26	Abc 21	I	40	30	7	11.85	硬質泥岩
17	27	Ad18	I	57	42	9	22.75	〃
	28	Agh65	I	44	62	10	27.5	〃
	29	Ae21住	埋土	43	46	9	14.45	〃
	30	Ae21住	床面	41	30	8.5	12.95	〃
	31	Bab15	I	49	26	7	15	〃
	32	Ae21	埋土	63	21	10	13.8	〃
	33	Acd21	I	58	27	12	27.15	〃
	34	Aef 21	II	46	32	6	13.55	〃
	35	Ad18	I	103	44	18	180	淡緑色凝灰岩
	36	Ae21住	埋土	20	22	8	5.75	凝灰質硬質泥岩
	37	Ab 24	I	72	71	37	210	硬質泥岩
	38	Ae21住	埋土	71	88	47	335	玻璃質流紋岩
18	39	Aef 18	I	94	106	44.5	570	硬質泥岩
	40	Aj15	I	93	117	46	640	〃
19	41	Ae 21住	床面	105	90	37	460	含カンラン石兩輝石安山岩(熔岩)
	42	Ae 21	II	122	79	61	940	緑色中粒質砂岩
	43	Ae 21住	床面	117	56	25	300	花崗閃緑岩
	44	Acd21	I	115	144	31	710	石英安山岩質粗粒凝灰岩

石器計測表

# 写真図版



A 遠景



B 近景  
写真図版 1



A 作業風景



B Ae21住遺物出土状況  
写真図版 2



A Ae21住



B Ae21住炉

写真図版 3





A Ae21住埋設土器

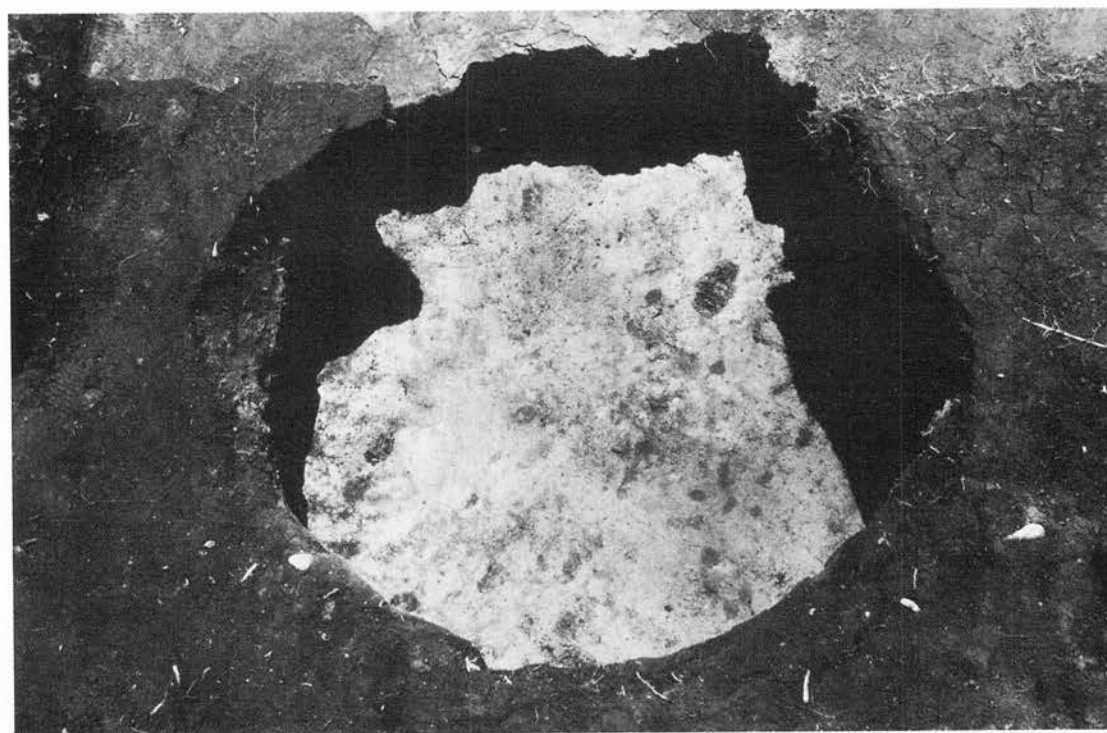


B Ae21住遺物出土状況

写真図版 4



A Ae21住遺物出土状況



B Ah21 Pit完掘

写真図版 5

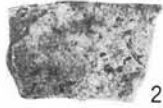


写真図版 6 土器A

S=1/3



1



2



3



4



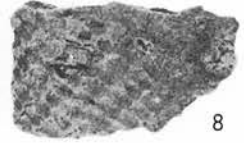
5



6



7



8



9



10



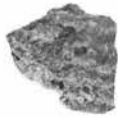
11



12



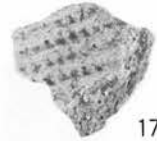
13



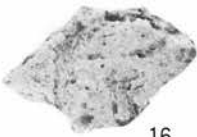
14



15



17



16



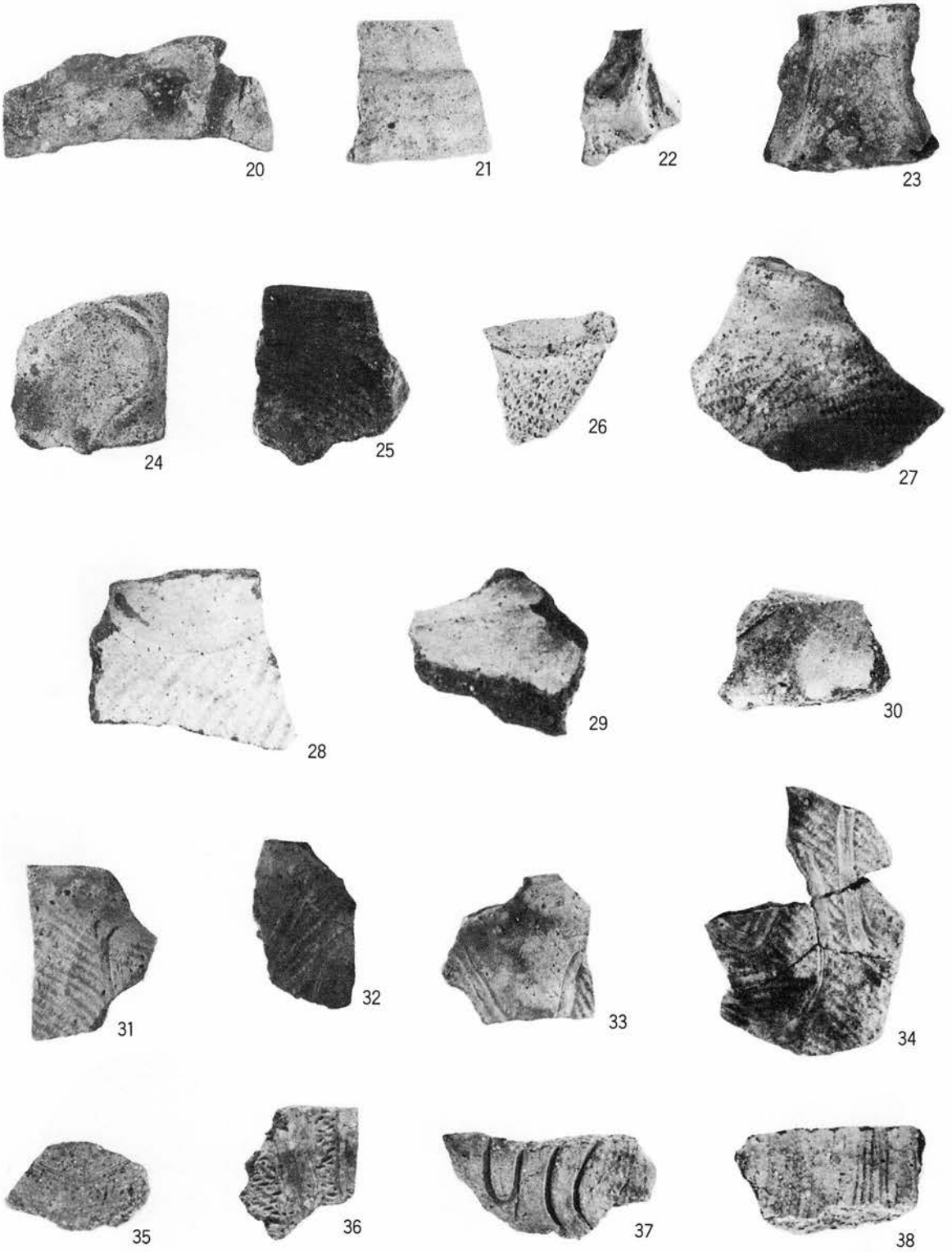
18



19

写真図版7 土器B

S=1/2



写真図版 8 土器C

S=1/2



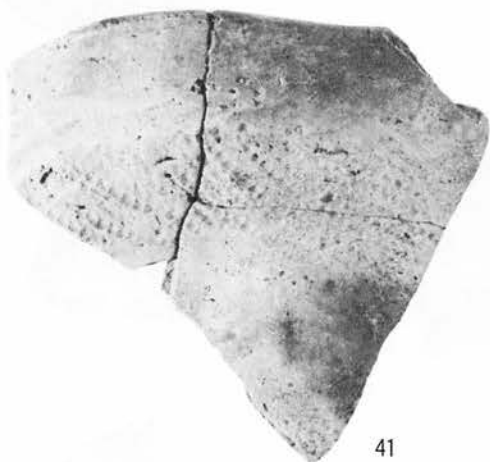
39



40



42



41



43



44



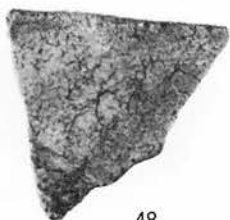
45



46



47



48



49



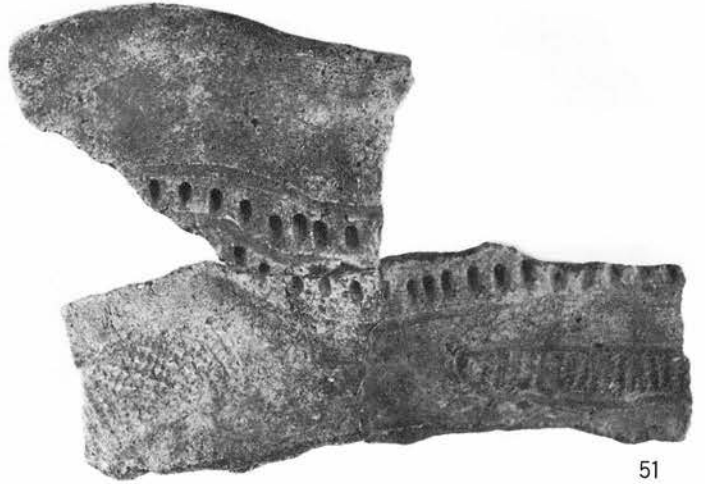
50

写真図版 9 土器D

S=1/2



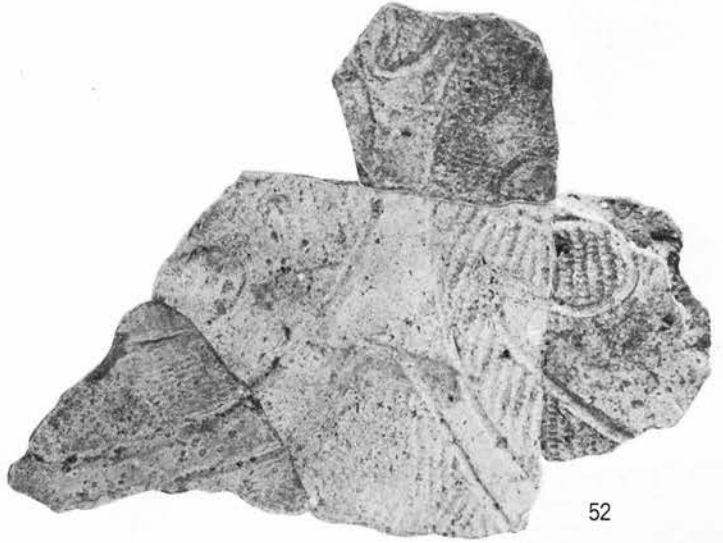
53



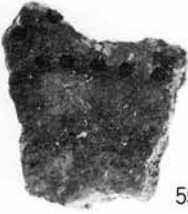
51



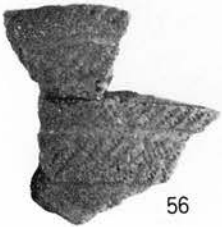
54



52



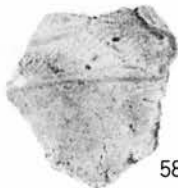
55



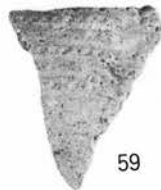
56



57



58



59

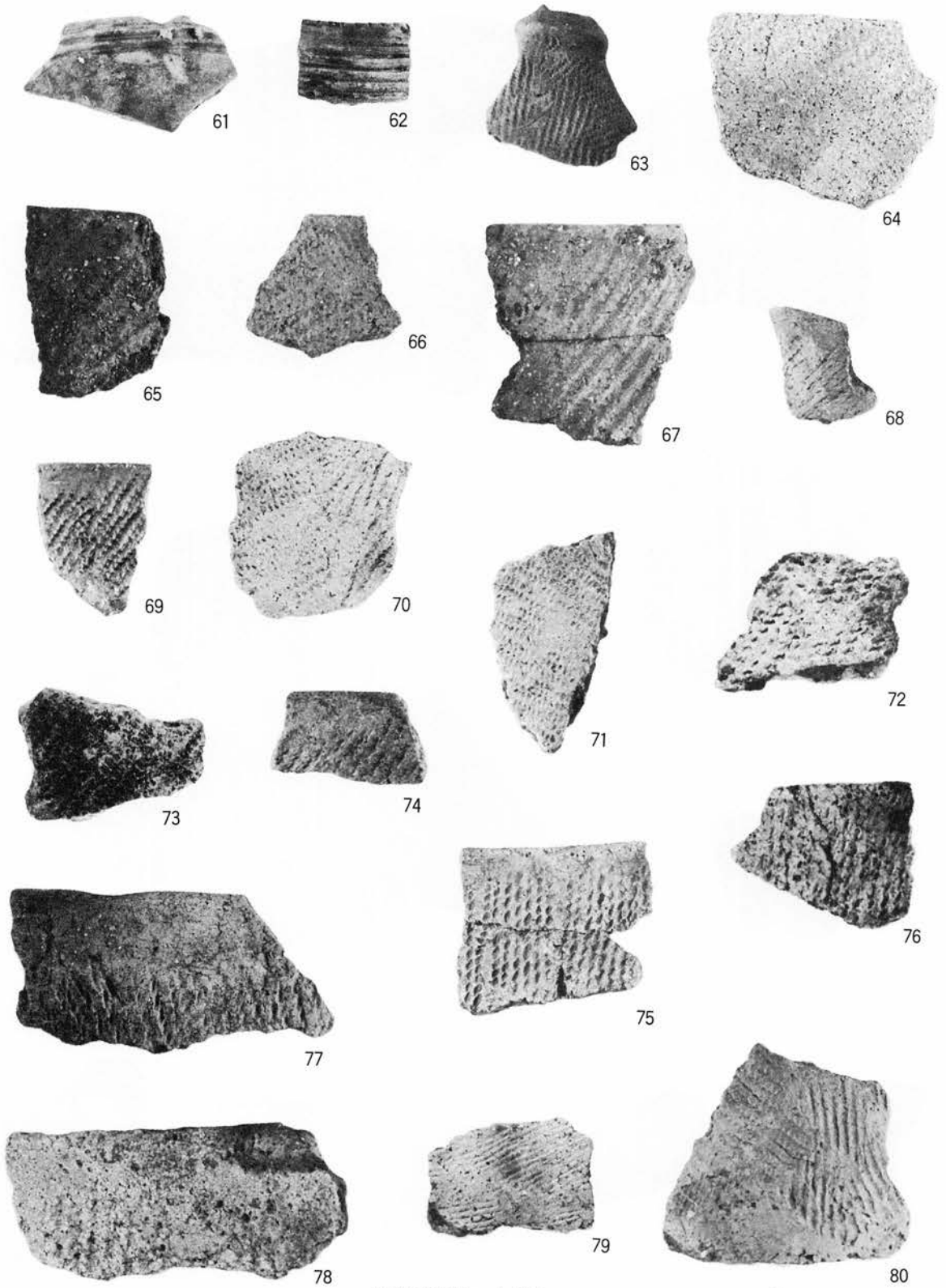


60

写真図版10 土器E

S=1/2

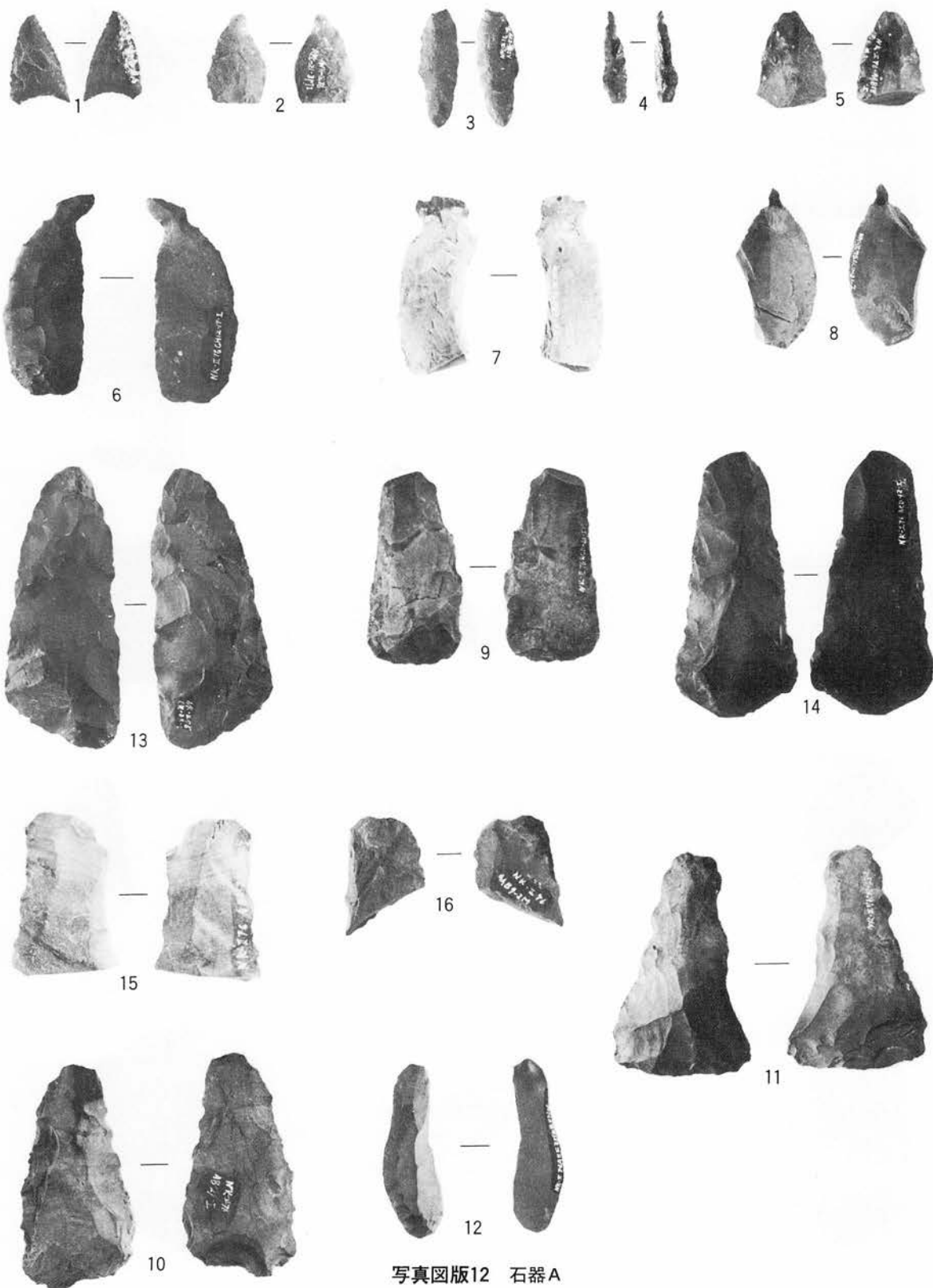




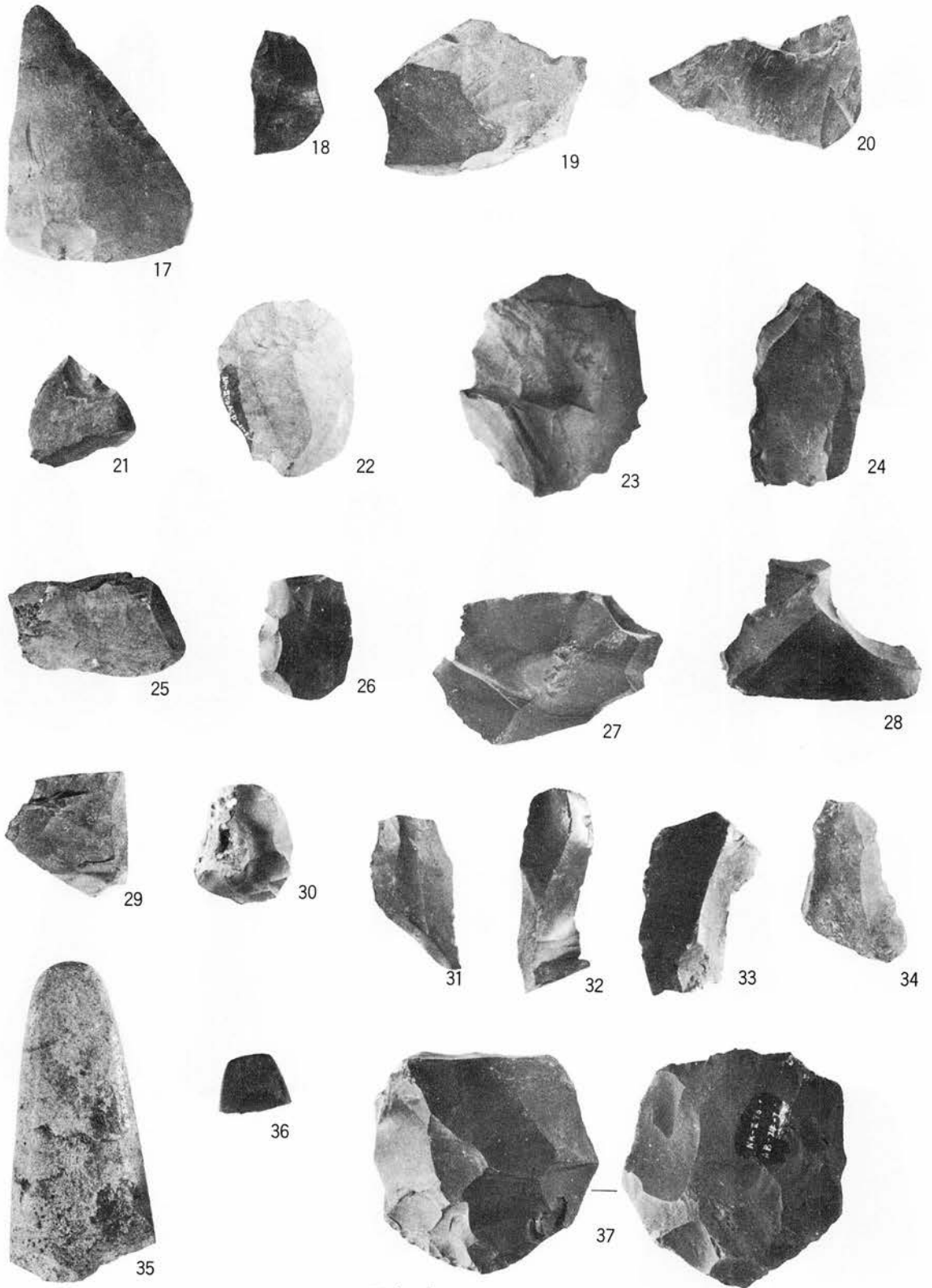
写真図版11 土器F

S=1/2

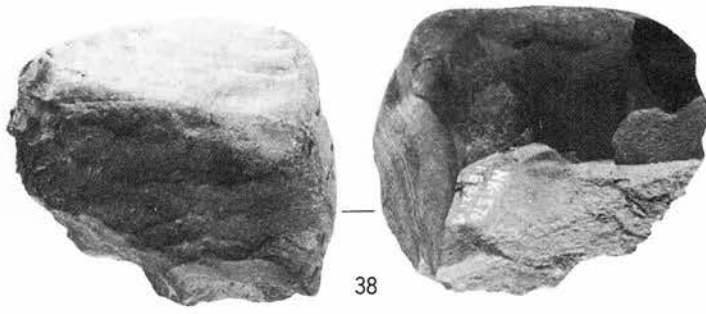




写真図版12 石器A



写真図版13 石器B



38



41



40



43



44



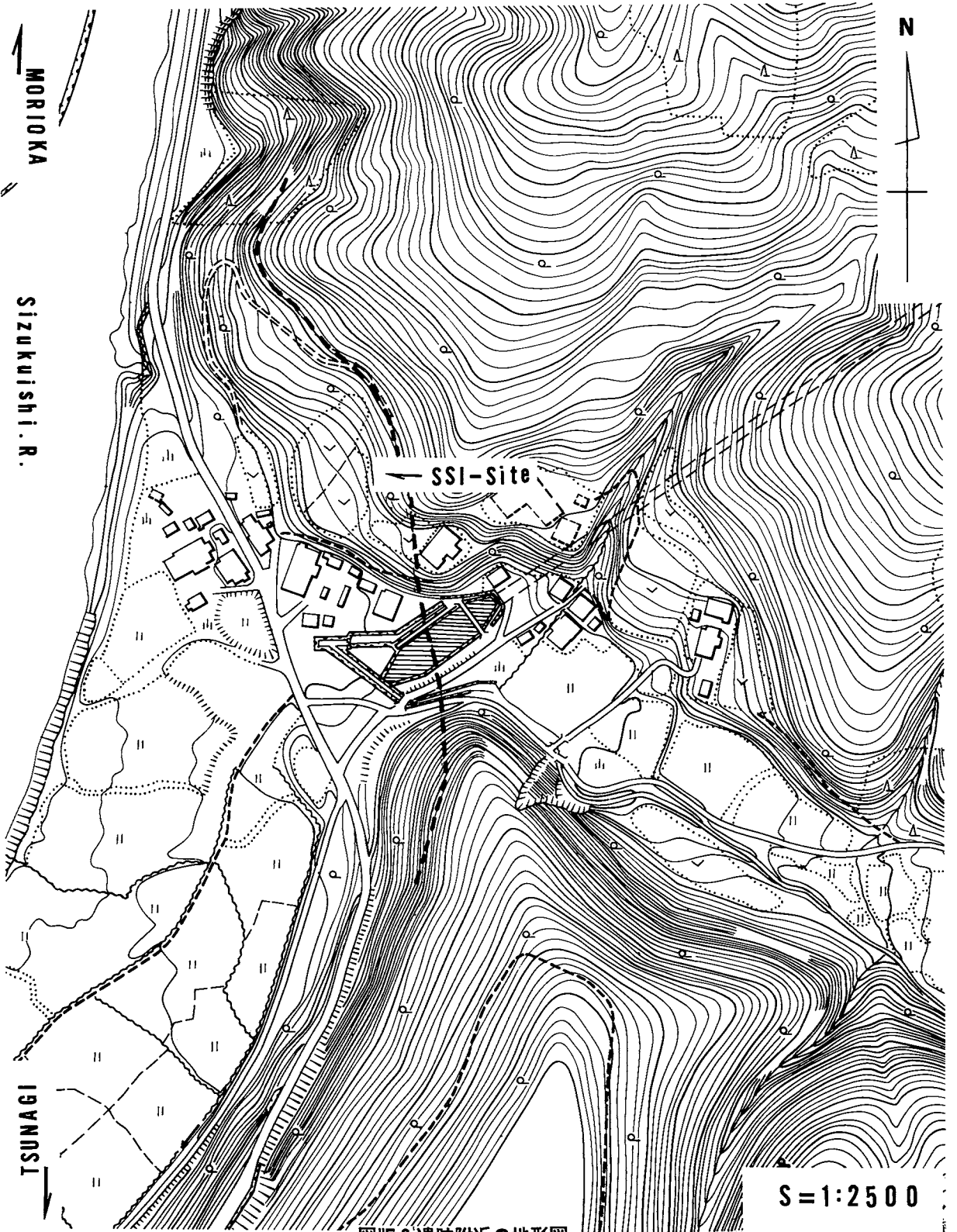
写真図版14 石器C

# 下猿田Ⅰ遺跡

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| 1. 遺跡所在地  | 岩手県盛岡市繁字下猿田     |
| 2. 事業主体   | 建設省御所ダム工事事務所    |
| 3. 調査主体   | 岩手県教育委員会文化課     |
| 4. 調査担当者  | 本宮雄輔、熊谷太郎       |
| 5. 調査対象面積 | 1,134㎡          |
| 6. 発掘面積   | 585㎡            |
| 7. 調査期間   | 昭和49年7月1日～9月14日 |
| 8. 遺跡記号   | S S I 74        |



図版 1 下猿田 I 遺跡位置図



図版 2 遺跡附近の地形図

## はじめに

下猿田Ⅰ遺跡は御所ダム開発に関連して昭和48年7月より行われた御所ダム関係37ヶ所の遺跡の緊急発掘調査の一つとして行われたものである。調査は昭和49年7月1日より同年9月14日までのおよそ2ヶ月半にわたって行われた。調査員は岩手県教育委員会事務局文化課 社会教育主事補 本宮雄輔を調査主任としてこれにあたり、同文化課期限付臨時職員 態谷太郎が調査補助員として参加した。遺跡は宅地等を含む舌状に張り出した丘陵上にあり、あたかも遺跡周辺はダム工事および取附道路工事などが行われており、また遺跡への進入路もダム貯水地となるため人家等が取はらわれた荒地の中を行かねばならない状態であった。

遺跡は発掘調査の結果、縄文時代早期より晩期に至るまでの各種の土器、石器の出土品があり、また先住民の住居址等の遺構も検出され、予想以上の成果をあげる事となった。

本遺跡調査に関しては建設省御所ダム工事事務所をはじめとして各種関係機関ならびに地元住民各位の多くの御協力を得た。ここに記して深く感謝の意を表する。

特に真夏の暑い日の中、調査員と共に遺跡の発掘に従事された瀬川与四蔵氏をはじめとする地元の方々の御協力に心からの謝意を表する次第である。

## I 遺跡の位置と周囲の環境

遺跡は岩手県盛岡市繫字下猿田地内に所在する。盛岡市と雫石町にまたがって建設される御所ダム関係37遺跡の中では同地内の下猿田Ⅱ・Ⅲ遺跡と共に最もダムサイトに近い雫石川右岸に張りだした小台地上に位置している。盛岡市より県境を越えて田沢湖を経て秋田県大曲市に至る国鉄田沢湖線と並行して西に向う国道46号線を尾入十文字で左折し市道尾入線を繫温泉方向に行くとやがて盛岡市太田地区より繫を経て鶯宿方面に向う県道盛岡、鶯宿線に合流する。遺跡はこの県道を太田方面にもどった右側の崖上にあたる。すなわち盛岡市太田方面より鹿妻堰を経て西進するとやがて北ノ浦の部落にかかる。このあたりで道は大きく岬をまわるように南側より張りだした山地のすそをまいていく。その道が約半周してもとの西方向に向いなおすあたりが、下猿田地区である。

下猿田Ⅰ遺跡は丁度道路が岬をまわるようになる西側のつけ根にあたるあたりである。南側には奥羽山脈より派生した一支脈が連なり箱ヶ森、南昌山などの東端部の一群の山々からやがて、東には奥羽山脈山系とをへだてている県中央部の平野地帯へと移る。雫石川はこの奥羽山脈の

中に形成された礫石盆地の東側を流れ、やがて前記の平野部で北上川と合流する。遺跡の東側は箱ヶ森山など東端を区切る山々からの一連のつながりを持ち、その北端部に位置する標高319 mの大欠山にかこまれたようにみえる西側の地点で南西方向にやや広がった1尾根上の平坦面である。北東側はすぐに急峻な崖でさえぎられている。南側は東方向より流出してくる沢によって大きく深くけずりとられたような地形となっている。遺跡の所在する地点の標高は170 m～175 mの範囲であり現河床との比高差は25mを越える。

遺跡の指定された地点は畑地であり、東側に隣接する下猿田Ⅱ遺跡は宅地として極く最近、ダム建設に伴う工事等により除去されるまで家が建っていた。南側西よりの崖下には繫発電所に送水する導水路があり、導水路はトンネルとなって大欠山の中央部を貫通している。南側に対立する台地状山地は礫石川に向けて急な崖となって落ちこんでいる。このように急な山地にかこまれ、わずかに東より流出する沢によって開析されたせまい谷と礫石川の氾濫原とが目前に広がる極く限ぎられたせまい地点である(図版-2)中にある波線は新設道路予定線である。

## Ⅱ 調査方法および調査経過

### (1) 発掘区の設定

本遺跡は、畑地化されていたり、宅地として整地され利用されていた緩斜面の場所である。

しかしながら、調査に入った時点で様相は一変していた。それは、ダム建設工事にもなつて、家屋は移転していたし、県道付替え橋梁工事のためにブルドーザー等の重量機械の往来があつたり、工事の際の排土で遺跡の大部分が覆うわれてしまっていたりしていた。丘陵末端部では、ブルドーザーにより表土が削りとられた石組み炉の破壊された跡や焼土痕が露出していたり、土器がキャタピラでけ散らされているという無惨な光景を呈していた。

それ故、遺跡の大部分は調査できずと考え、比較的破壊程度が少なくと思われた調査可能な残存部をなんとか調査してみようという事になった。それで、調査可能な残存部の中央に直交する幅3mの試掘溝を設定することになった。しかし、この試掘溝は発掘の進行に伴い遺構等が発見されたならば、随時グリット方式に変更し得るように設定することにした。

まず、試掘溝の原点を調査対象とする遺跡のほぼ中央に設定した。

原点の磁北にあわせ、発掘調査可能な地点まで東西南北に試掘溝を設定した。その結果、調査可能と考えられる範囲内すなわち、原点より北18m、南24m、東15m、西に12mの地点にそれぞれ基準杭を打ち込んだ。



名称は南北軸、南基準杭より北の方に3mごとに12・13.14とアラビア数字をつけ東西軸は原点より東に3mごとにABCDEとし、西の方にも同様abcdと名付け3m×3mを1発掘単位として発掘を開始した。

その結果、発掘にとりかゝり数日目にして南北軸の試掘溝(A1.2)(A13)等に住居跡等の遺構の発見が続いたため、グリット方式をとることにした。

グリットは南北、東西の長さを6×3mとするものも、試掘溝を生かして3×3mの方眼区となり、遺跡全体に碁盤目状の発掘区が設定された。調査はこの1区画を単位発掘区とし、その位置は、座標上の位置を表わす一般的な方法で表現することとした。

## (2) 発掘経過

プレハブの設営および、試掘溝の設定は昭和49年6月29日(土)であった。仮BMを設置したのは7月1日(月)で表面採集と粗掘にさっそく取りかかった。

試掘溝における発掘は遺跡の破壊状況等を観察するためにブルドーザー等の影響の多いことと土捨て場所のことを考え南端(A1区)からと、ブルドーザー等の影響がほとんどなく耕作土のみであるE9区からの二方面より粗掘開始をした。

A1区はブルドーザーのため南西部約 $\frac{3}{4}$ が崩壊され地山にキャタピラの爪あとが残っていた。しかし残存部分からは縄文土器の破片が出土し、また焼土が発見された。そのまわりに炉を形成した石は見つからなかったが、石組みの痕跡があり、これを中心として住居址になるのではないかと推察された。さらにA2区からは、縄文後、晩期と思われる精製土器片数片が出土しPit等も発見された。また、A1区の石組炉を伴う住居址に関わる壁と考えられるものも検出されたので試掘溝をさっそく拡張し変更しなければと考えた。

また、表面採集に入っていたグループよりA区にブルドーザーで掘られた穴があり、土器片が散らばっているとの知らせを受け、行って見ると、胎土は比較的よく、焼きも堅緻で磨消されている土器破片、縄文後期らしいものが見つかった。

E9およびD9区からは耕作土を除去しても何も検出されなかったので、一応作業を中止してもらいA13.14区に入ってもらい粗掘をしてもらった。その結果、壁らしいものが検出され、A1区同様住居址の存在がうかがい知れた。

以上のような結果から試掘溝方式を発掘にとり入れ、早々にグリット方式に変更しそれに必要なグリット杭を調査可能な範囲に打ち込むことにした。

B1.2区において粗掘が進行するにつれて、壁高10~15cmが確認されたので住居址第1号とした。この住1号(B-1、2H)は残念ながら南西半分ほどは台地の傾斜とブルドーザーに依る攪乱のため消滅していた。周溝は無く、焼土はほぼ住居址の中央に約50~70cmの広さに広がって堆積していた。石組みの痕跡については前に記したが最後まで使用したと考えられる石

は発見できなかった。大きさは約 4.5～4 m の楕円形であった。B 1 区からは、残存地表から床面までの黒色及び黒褐色土の埋土中に縄文土器破片が多く分布していたし、径約 1 m～2 m の pit (A B C) が 3 ケ発見された。

pit A (A-2P-1) は壁を破っていたので住居地の後に作られたものらしく、住居地内にあった pit B (P-1) からは小形深鉢完成品 1 個が出土し、発掘の人々の意気をたかめてくれた。

(C1.2.3.区は排土で発掘おきず止むを得ず放棄することにし、北側に手を伸ばして行くことにした。

(54区の所はブルドーザーの往来が特に激しく大きなくぼ地となっていたので、この部分は後まわしにし、これより南側の精査に入った。

(a4) から焼土痕 3 ケ所(F2.3.4) がキャタピラ跡の中に見いだされた。周溝、壁等は検出されなかった。土器破片は散発的に見つかる程度であった。しかしながら、まわりのグリットから幅 40～45cm、深さ 40～55cm 程度の円柱状の pit が多数発見された。これは、縄文時代ではない建物跡ではなかろうかと推察されたがくぼ地につらなる様であったので精査に入らないでいた。

七月下旬大雨があり、我々が築いていた南北約 40m<sup>2</sup>、東西約 20m、深さ 0.8～0.6m の排水路を雨水がのりこえ、このくぼ地を泥んこにしてしまった。この泥んこを片付けないと遺跡の北側に行けないので除去することにし、作業にとりかゝった。そうしたら建物跡の pit と結ばれる pit が次ぎ次ぎに検出された。その結果判明したことは、2 棟になり柱穴がかさなる様になったので建てかえではなかろうかと推定された。大きさは 2 棟とも幅約 6m、長さは約 9m までは判明した。あとは傾斜面できれ完全に把握できかねた。

建物の時代判定に役立つと思われる遺物は出土しなかった。

また、この泥を除去している時、繊維混入土器破片が見つかり注目された。

(A13) の焼土痕は F5 となったので第 5 号住居地 (A-13H) とした。この住 5 号の東側はブルドーザーで穴を掘られていたし、南西側は台地の傾斜とブルドーザーによる攪乱のため半分は破壊されていた。大きさは推定約 4.5m × 4 m の楕円形で壁高 25cm、周溝はなく、ほぼ中央に焼土痕(F5)があった。石組みは見つからなかった。柱穴は検出された。縄文後期頃と推定される注口型土器の注口破片や香炉形土器破片が発見された。

遺跡のほぼ中央部 (a67) の粗掘を行なったところ、黒色、黒褐色土中にカーボンが多量に分布していて、その下に複式の石組み炉が焼土 (F6) を伴って発見された。周溝はなく壁と考えられる部分が少々検出されたにすぎなかった。これは、畑地跡で丘陵末端の傾斜地にあり、耕作土はブルドーザーによって運び去られた場所であったので消滅したものであろう。大きさは、推定で約 5 × 4 m の楕円形で柱穴も検出されたので、6 号住居地 (A-6、7H) と

した。

焼土痕F 7、8、9等は単独で検出された。

(C 3)に焼土痕F 11、炉跡が検出されたが傾斜面で完全にブルドーザーにより攪乱され、石組み炉の一部分とその週辺に床面と思われるものが検出された。この住居址を第11号(C-3 H)とした。この住居址のそば(C 3、4)と(b 3)に径約1 mのPitが検出されたが住居址との関連は何もわからなかった。

繊維土器の破片のことを考慮し、縄文早期か前期の遺構が存在するかもしれないという期待感をいだき、台地山手の方にダム工事の際の排土を撤去しつゝ、(F 12、11)や(D 5)等と発掘区を拡張していった。その結果は残念ながら、期待した遺構、遺物等は発見できずに終わった。

もうこれ以上、排土を撤去すると山くずれの危険がともなうと考え、発掘区の拡張は断念せざるを得なくなった。この山手にある下猿田Ⅱ遺跡発掘調査の時に縄文早期前期の遺構確認に希望を託すことにした。

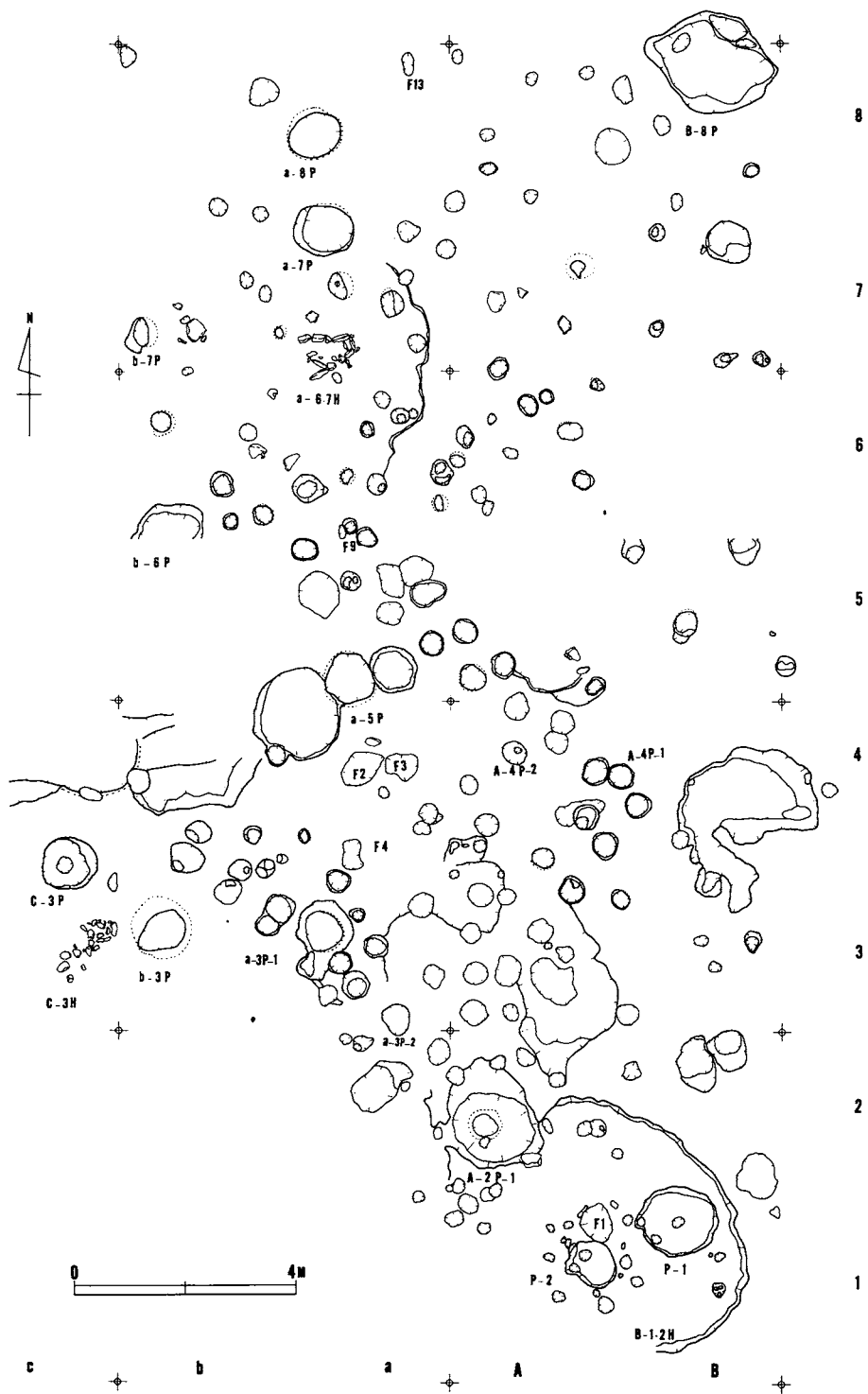
調査期間中9月1日に、ともに調査活動をしていた態谷太郎君は宮古市の高校に赴任して行った。

調査を終了しプレハブを撤去したのは9月14日(土)であった。

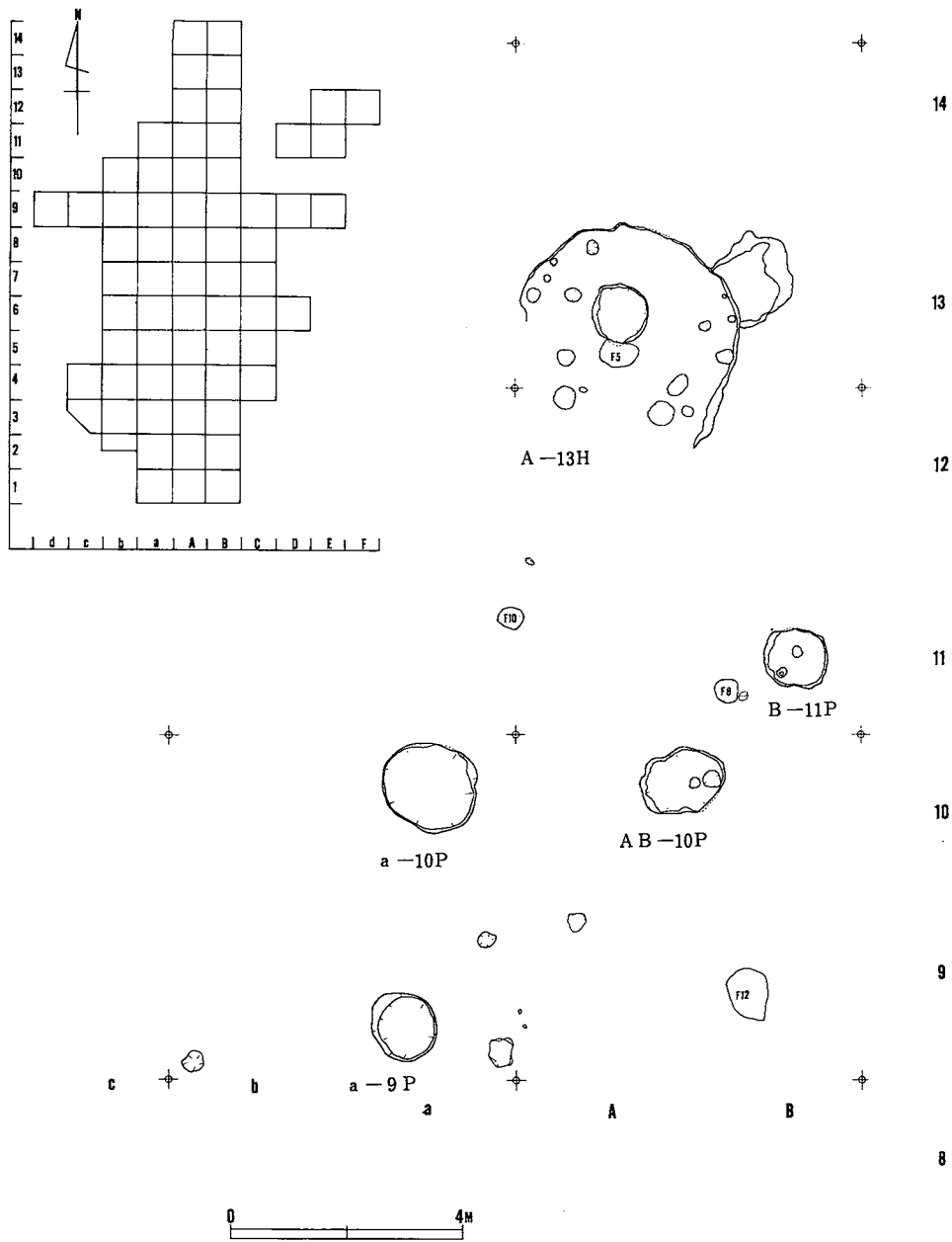
### Ⅲ 基本層序

第Ⅱ章に述べた如く、遺跡全面にわたって重機等の往来があり、旧地表面を明らかに残している地点は東側斜面部の一部にしか存在しなかった。そのために地表下に埋没している遺構もそのほとんどが攪乱をうけており、遺跡全体を通して均一した土層と言うものが明確にとらえ得るのは第3層ないし第4層とした層位に至ってからの状態であり、さらに部分的には完全に最下層と考えられる層位まで攪乱されているために各遺構の検出面も一様ではない。故に例言にも述べた如く各遺構ごとに層位番号を付して色調その他を記しているが、ここでは東側斜面部で確認したものを図示する。

1	褐色、黒褐色土混入、重機等の往来による攪乱
2	2-1 黒褐色、耕作土および重機等による盛土混入遺物あり
	2-2 黒褐色 7.5Y R ½ 非常に水分多く軟質
	2-3 黒褐色 7.5Y R ½ パミス混入
	2-4 褐色 7.5Y R ¼
	2-5 黒褐色 7.5Y R ½ 2-1層中の耕作土と類似する
3	3-1 黒色 7.5Y R ¼ 遺物あり
	3-2 黒色 パミス混入
4	極暗褐色 7.5Y R ½ 遺物あり
5	5-1 黒褐色 7.5Y R ¼ 遺物あり
	5-2 黒褐色 黒色および褐色粒子混入多し
6	暗褐色 7.5Y R ½
7	7-1 褐色 7.5Y R ¼ 粘土層
	7-2 暗赤褐色 5Y R ¾ 粘土層
	7-3 褐色 10Y R ¾ 粘土層
	7-4 黒褐色 10Y R ¾ 粘土層
	7-5 暗褐色 10Y R ¼ 粘土層
	7-6 暗褐色 7.5Y R ¼
	7-7 明褐色 7.5Y R ¼ 砂礫層



图版 4 遺構配置図—1



图版5 遺構配置図-2

## IV 遺 構

本遺跡より検出された遺構は以下の通りである。

建物遺構	2棟
縄文時代住居址	4棟（うち1棟は石組炉のみ検出）。
土坑	28個。
炉址および焼土	13箇所（炉址および焼土は住居址と重複するものあり）。

### 1 建物遺構

A・B-3～6区、a・b・c 3～6区にかけて2棟分の柱穴列が検出された。両者ともに北西部分を重機の往来などによって削りとられており、検出された柱穴列の長い辺がこの建物址の全長であるかどうか判明しない（図版4・6）。検出された範囲内でみれば共に長方形の建物址が考えられる。南西より北東に連なる線は約6mである。南東から北西にかけては10～11mまでの長さまで確認しえた。

建物址-1、A-E-B-C-Dの線によってむすばれるものである。A-E-Bの線における柱穴の間隔は160cm内外である。B-C線も同様である。C-F-D線においては中間に副穴状の柱穴を有するが、だいたいにおいて前二者と同様に160cm内外の間隔に柱穴がうがたれている。A B C Dによって構成されるコの字状の柱穴列のうちB C線に並行してE Fの柱穴列が存在する。E Fにおける柱穴の間隔は約100cmである。E B、C F間は約160cmである。

建物址-2、a-e-b-c-f-dによって構成されるもので、柱穴の間隔は約1mである。この建物址も前者同様にb cに並行するe fの柱穴列が存在し柱穴間は約200cmとなっている。e b、c f間は200cmであり中間にさらに1個の柱穴が存在する。柱穴は両者ともにほぼ同様の大きさであり直径40～45cm、深さ45cm～55cmとなっている。

建物址-1および2とのずれは6度内外であり、柱穴列B Cおよびb cの長さが約6mと等しい。これよりみておそらく長辺となるA E D、C F Dおよびa e b、c f dの長さもほぼ等しい状態の建物であったかと思われる。両者を構成する柱穴のうち柱穴E（a-3 p-2、図版13-2）が唯一の共通使用されたものである。また両者の新旧関係は明確にとらえ得なかったが柱穴fおよびそれとわずかに切り合っているとみられるF D線上の柱穴Fおよび隣接する

ものとして柱穴FおよびC（A-4P-1、図版13-1）がある。図版6に図示した状態では柱穴fとFは、はっきり切り合いの関係にみられるが、内部における埋土等の観察では明確に両者の新旧関係を論じるような状態でなく、両穴中の埋土は混じりあった状態であり、わずかに後者の方が約20cmほど前者よりも深く掘られていただけであった。他の柱穴に関しては前述した如くほぼ同様の深さを示したおり、両方の建物の新旧関係を推測させる材料となるものはない。

また、この柱穴列にかこまれた地域内より焼土が3箇所（F2、3、4、図版13-11）検出された。F2およびF3の焼土の堆積は非常に厚いがF4はさほどではない。これら3箇所の焼土がはたしてこの建物址に附随するものであるか否かははっきりしないが焼土の存在する位置よりみればF2、F3、F4ともに建物址に附随するとして考える事は可能である。この場合建物址のうち焼土の存在する位置を土間と考えれば良い。すなわちeb、cfおよびEB、CFでむすばれる部分が入口部となり焼土のある場所が土間になっていると云う形を想像することは出来よう。しかしながら他の部分に関しては内側に他の柱穴列もみられず全体的にどのような間取りになっていたのかまったく不明の状態であり、この建物址が存在した時代等を示す遺物も全く出土しなかった状態であるために、単に柱穴間隔の異なる2棟の建物址が検出されたとするのみである。

## 2. 住居址

竪穴住居址4棟が検出されたが、うち1棟は石組炉のみが検出されたのみである。住居址と思われた遺構らしきものは11箇所に検出されたため調査中は住居址1号より順次番号を付し11号までとなったが、最終的に住居址と確認しえたものは第Ⅱ章にも述べたが第1号住居址（B-1、2H）、第5号住居址（A-13H）、第6号住居址（a-6、7H）、および第11号住居址（C-3H）の4棟である。以下検出地点の名称によって記す。

B-1、2H（写真図版4・図版7）、南西部分約半分ほどが重機等により完全に破壊されていた。残っていた部分も浅くではあるが削平されていた。壁高約15cmが東側の一部で測り得たが削平されており、実際にはもっと高いものと考えられる。周溝は認められなかった。床面は黒色土層下の黄褐色粘土質層に切りこまれて形成されており、やや硬くふみしめられた状態である。残存部の形状より推察して約4.5m×4mほどの楕円形もしくは卵形を呈するものと考えられる。

炉は住居址のほぼ中央とみられる位置より検出された。70×55cmほどの範囲である。焼土に接して高さ5cm、長さ20cm～10cmほどの棒状の石が1個置かれてあった。また焼土周囲に浅い凹みが数箇所みられ、石組炉の痕跡と思われる状況であったが、周辺にはそれに使用されたと考えられる石は存在しなかった。柱穴と考えられるものは全部で12個が検出されたが、南西部



および西側部分のものは明確に本住居址に伴うものかどうか明らかではない。残存部によってみれば、壁近い部分に北および東側に存在するものがあり、西側部分においても同様の位置にあるものと考えられる。住居址内には土坑が2個所存在した(写真図版9、図版10-2、3)。

**土坑Pit - 1** 150cm×130cm 楕円形を呈し深さ約15cmほどのものであり内部に小穴2個が存在した。この土坑は残存する深さの浅い点および住居址内埋土層の堆積状況よりみて、B-1、2住居址により切られているものである。内部に存在した柱穴状の小穴中より写真図版-19・図版15-6に示した土器1点が出土した。

**土坑Pit - 2** 焼土に隣接してその南側より検出された(写真図版9-6・図版10-3)80×70cmの楕円形を呈し深さ約20cmほどである。内部に柱穴状小穴1が存在する。この土坑は前者と異なり住居址埋土層の堆積状況よりみて住居址と共存したのと考えられる。

**A-13H** (写真図版5・図版8)。B-1、2H同様南西側約4mが削りとられている。さらに東壁外側に壁に接して大きな穴がブルドーザー等により掘りこまれていた。残存部よりの推定により4.5m×4mほどの楕円形を呈するものと考えられる。壁は比較的良好な状態で残されている部分で25cm内外である。黒色および黒褐色土層に切りこんで床面は黄褐色粘土層上部でありややふみかためられた状況である。炉は40×70cmほどの範囲に焼土の堆積があり、深さ15cmほどの炉穴を伴う。柱穴と考えられるもの9個が検出された。うち東西の壁直下にそれぞれ1個ずつ、住居址南側に南北にならんで2個ずつ、さらにそれらの延長線上にややなれて各1個が存在した。周溝はない。土坑1個が住居址内にあった(pit-3)。焼土の北側に隣接して110cm×100cmのほぼ円形を呈し深さ約20cmほどである。この土坑もB-1、2Hのpit-2同様に本住居址と共存したのと考えられる。住居址内東側の床面上に土器片の散布がみられた。

**A-6、7H** (写真図版6・7・図版9)。本住居址は東側にわずかに壁らしきものを残すのみで北、西、南側三方向ともに削平されてしまったものである。壁と考えられる東側部分の一部も非常に軟らかく、高さは10~15cmほどの段差があるが、他の住居址の壁と比較して明確にとらえ得ない状態のものである。住居址の大きさは東側に残る壁と考えられるものと柱穴と考えられるものとの状況よりみて4m×5mほどの楕円形を呈するのではないかと考えられる。柱穴と考えられるものの位置よりみて中央部よりやや東よりに石組炉が検出された。大小20個の扁平または丸石を用いて作られている。形状は図示したごとく西に開口部をもつコの字形に近い形である。炉を構成する石は原位置をあまり動かされていないと考えられるが、いわゆる複式炉に近い形であるが、本格的な複式炉とは言いえない配列である。柱穴は本住居址に附

随すると考えられるものは15個と考えられる。配列の状態は東側部分にみるかぎり壁に沿って住居址内にぐりと存在するように考えられる。なお、炉を中心として直径2mほどの範囲に炭化物の細片の散布がみられたが、本住居址が焼失住居であるような明確な痕跡は存在しなかった。

**C-3H** (図版4・12-9)。形状の定かでない石組炉のみが検出されたものである。東側よりの部分は明らかに石囲いをしたらしい石の配列になっているが西側は数個の大形の礫が1方のみにおかれた状況で検出された。推定の形状としてはA-6、7Hに検出された複式炉状の炉址であろうと思われる。この地点はわずかに3～4個所の極く浅い土坑と思われるものが存在するのみで、この炉址を含む住居址、それに伴う柱穴等の痕跡も認めることが出来ない状態であった。

以上本遺跡より検出された住居址について述べたが、いずれも攪乱、削平によって一部もしくは、その大部分を破壊されており、完全な形状を止めているものはない状態である。住居址は大きさにおいてほぼ等しい大きさであるが、焼土および土坑を伴う地床炉のものと石組炉を伴うものとの2つの形態に分類しうるものが存在した。この炉址の形態の相異が何を意味するものか定かではないが、出土遺物等が一例を除いてそれぞれの住居址ともはっきりしていないために時期的な差異と断定する点もはばかれるものである。この点に関しては後述する。

### 3. 土坑

明確に土坑としての形状を残しているものは、住居址内に存在したのもも含めて18個である(図版10-1～3、11-1～6、12-1～8、13-4)。遺構配置図にみられる土坑状のものうち番号の示していないものについては非常に浅いもので、土坑として明確にとられる事が出来えないものである。

土坑の形としては、フラスコ形(図版10-1・11-4、5・12-1、6、8・13-4)とビーカー形(図版11-2、3・12-2、5)の二種類に分けられる。他に底面が一定の形を呈していないもの(図版11-1、6・12-3、4)などがある。また住居址の説明で述べたように底部にさらに柱穴状の小穴を有するものもある。深さは後世の攪乱によって異なるが、前記住居址中に検出されたもののように20cm内外のものから1mほどのものまでである。特にa-8区から10区、AB-8区から10区にかけて存在するものはもともとの深さを保っているものと考えられるものも多く深い。しかし、この深さも遺跡全体が削平されている点よりみてさらに若干

の深さが当初それらが作られた時点ではさらに加算されて考えられねばならないと思う。

特別な形状を呈するものはB-1、2Hの北西に検出された土坑（A-2 pit -1）である。この土坑は明らかにB-1、2Hの壁を壊して掘りこまれている点、B-1、2Hより後に作られたものであることは明瞭である。調査した結果この土坑は二段の構造をもっているらしいことが判明した。すなわち、外周200cm×160cmの楕円形を呈し深さ40cmほどの皿状の掘りこみの中にさらに上部45cm×40cm、底部60cm×55cm、深さ45cmほどのフラスコ形土坑が掘り込まれているものである。フラスコ形土坑のすぐわきには柱穴状の掘り込みが存在した。この土坑の形が一度に作られたものか、あるいはフラスコ形土坑を埋めるか、もしくはフラスコ形土坑が埋まってからその上に皿状の土坑を掘りこんだものか明確にはとらえ得なかったが、ただフラスコ状土坑の上部に平たい石が数個、敷きつめられたようにおかれてあった点が注意される。なお上部皿状土坑の最上部に縄文晩期の土器片が散在していた。

### 3 炉址・焼土

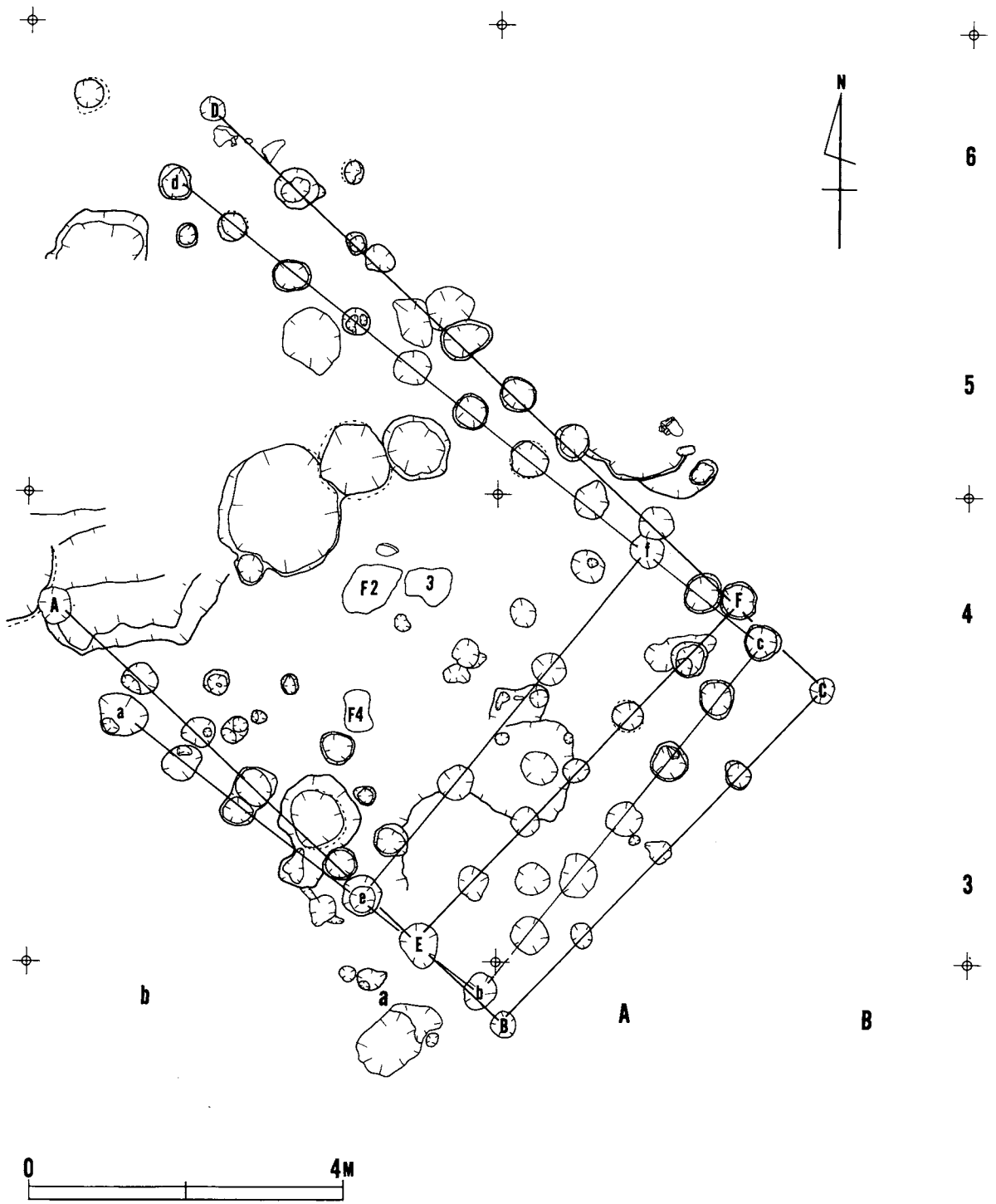
炉址、焼土は、住居址および建物址内より検出されたものも含めて13個所で検出された（図版7、8、9、13-7~10）。

- |      |                |
|------|----------------|
| F 1  | B-1、2H内        |
| F 2  | 建物址内           |
| F 3  | 建物址内           |
| F 4  | 建物址内           |
| F 5  | 建物址内           |
| F 5  | A-13H（石組炉）     |
| F 7  | 単独出土（B-13グリット） |
| F 8  | 単独出土（B-11グリット） |
| F 9  | 単独出土（a-5グリット）  |
| F 10 | 単独出土（A-11グリット） |
| F 11 | C-3Hとしたもの（石組炉） |
| F 12 | 単独出土（B-9グリット）  |
| F 13 | 単独出土（A-8グリット）  |

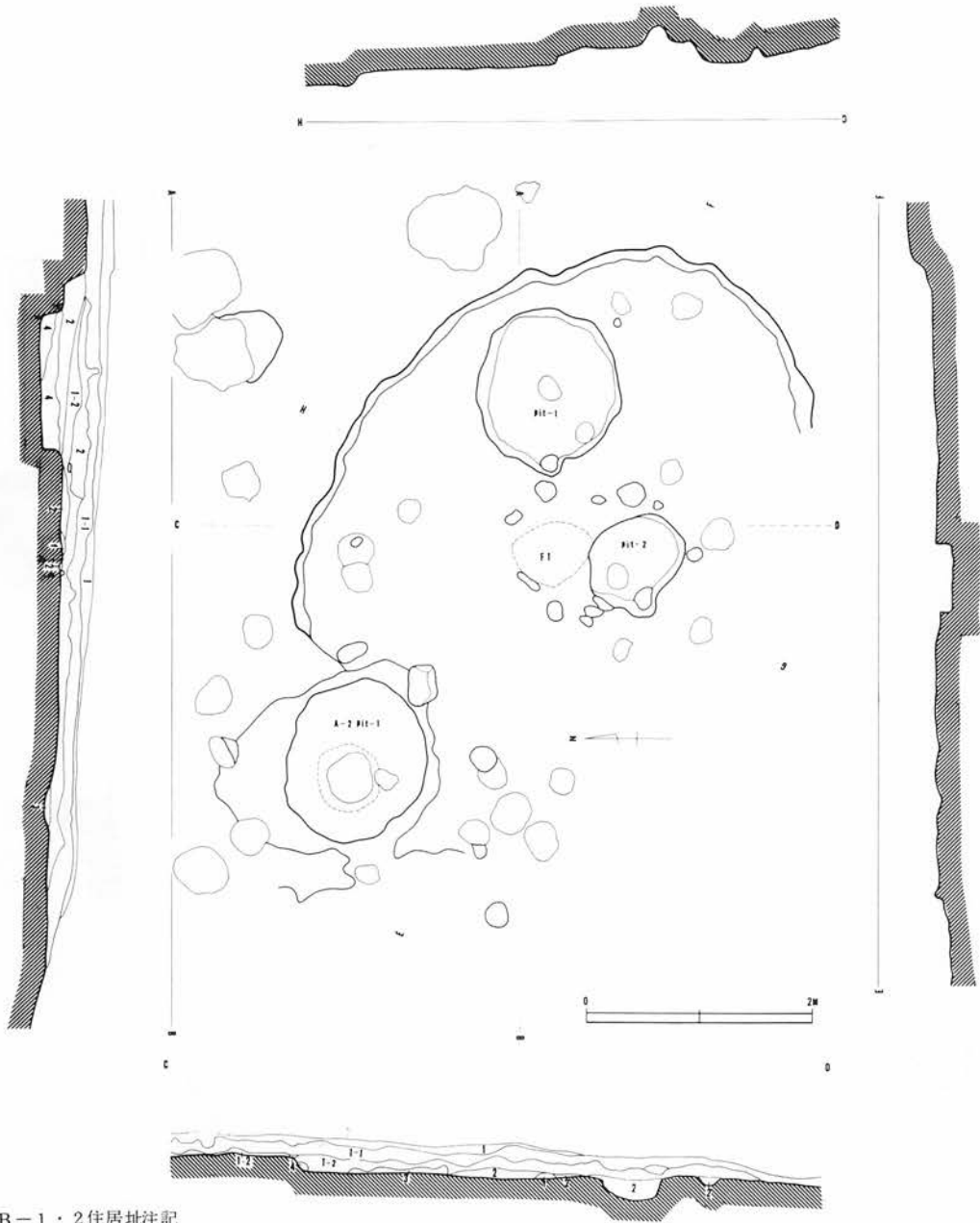
以上であるが、F 7~F 10、F 12およびF 13は単独で出土したものである。図版4、5にみられるようにこれら単独出土の焼土を中心とした地域内における柱穴状小穴の配列状態などから、1棟づつの住居址を推定しうることもまた可能な状態ではあるが、床面、壁などまったく

認められないために住居址として報告するのがためらわれたものである。

以上本遺跡より検出された遺構について略記して来たが、ここで簡単にまとめてみる。建物址は柱穴間の異なるものが各1棟ずつあるが、その規模はほぼ同様であり、おそらく何らかの理由により建替えられたものである。時代的な点を示す遺物はない。竪穴住居址は4棟検出されたが、うち1棟は石組炉のみが発見された。残る3棟の住居址の規模は約4.5m×4.0mほどで形状は楕円形を呈すると思われるが、いずれも $\frac{1}{3}$ 以上が後世の攪乱によって破壊されており、明確な形は不明である。石組炉を伴うもの2棟、炉穴を伴うもの2棟である。床面もしくは、それに近い地点よりの出土遺物によって縄文時代後期のものと考えられる。なお炉穴を伴う住居址には炉のすぐわきに浅い土坑が存在する。土坑は18個所の検出があり、フラスコ形、ビーカー形および皿状のものがある。炉址、焼土としては13個所で検出された。



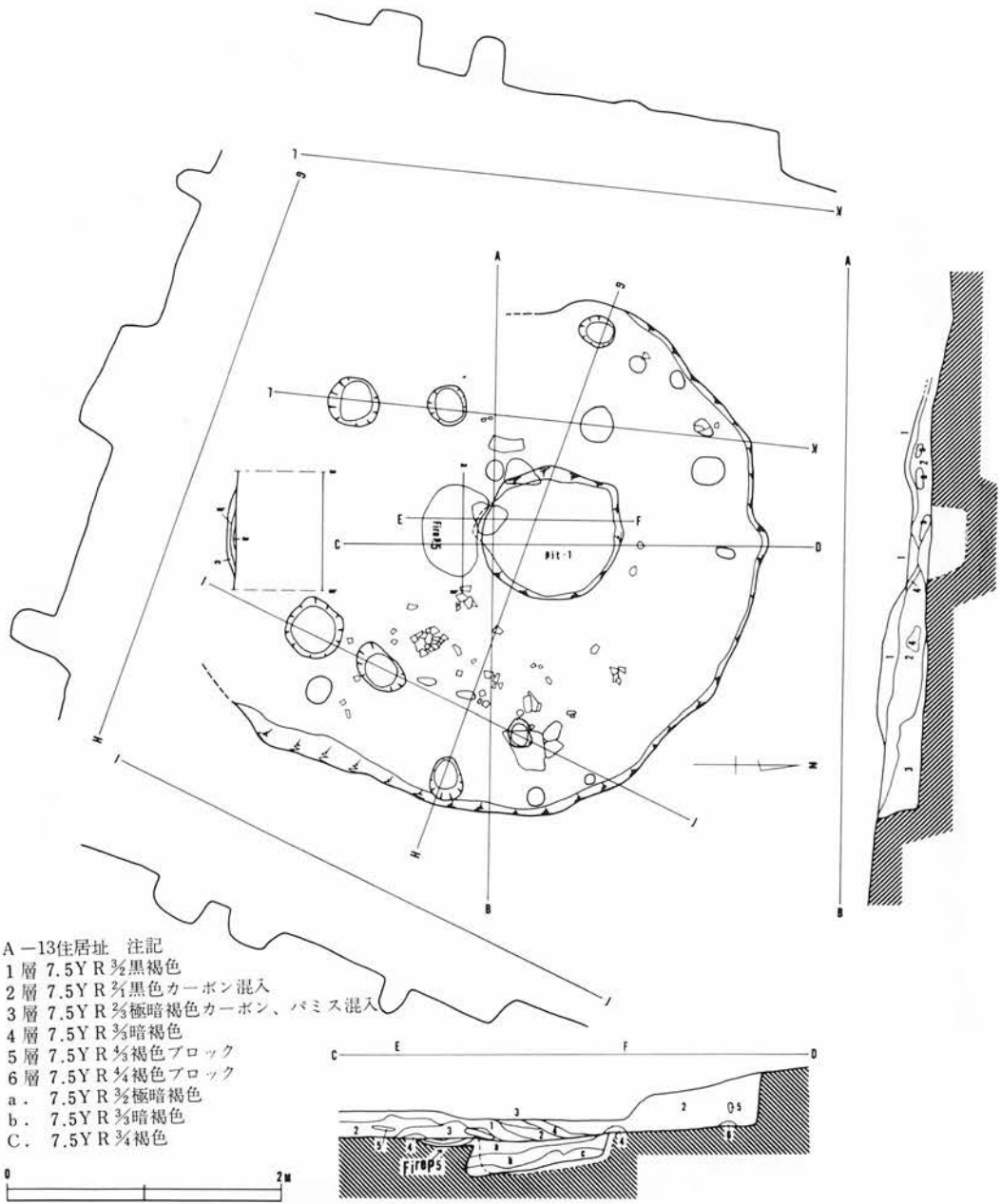
图版6 建物址



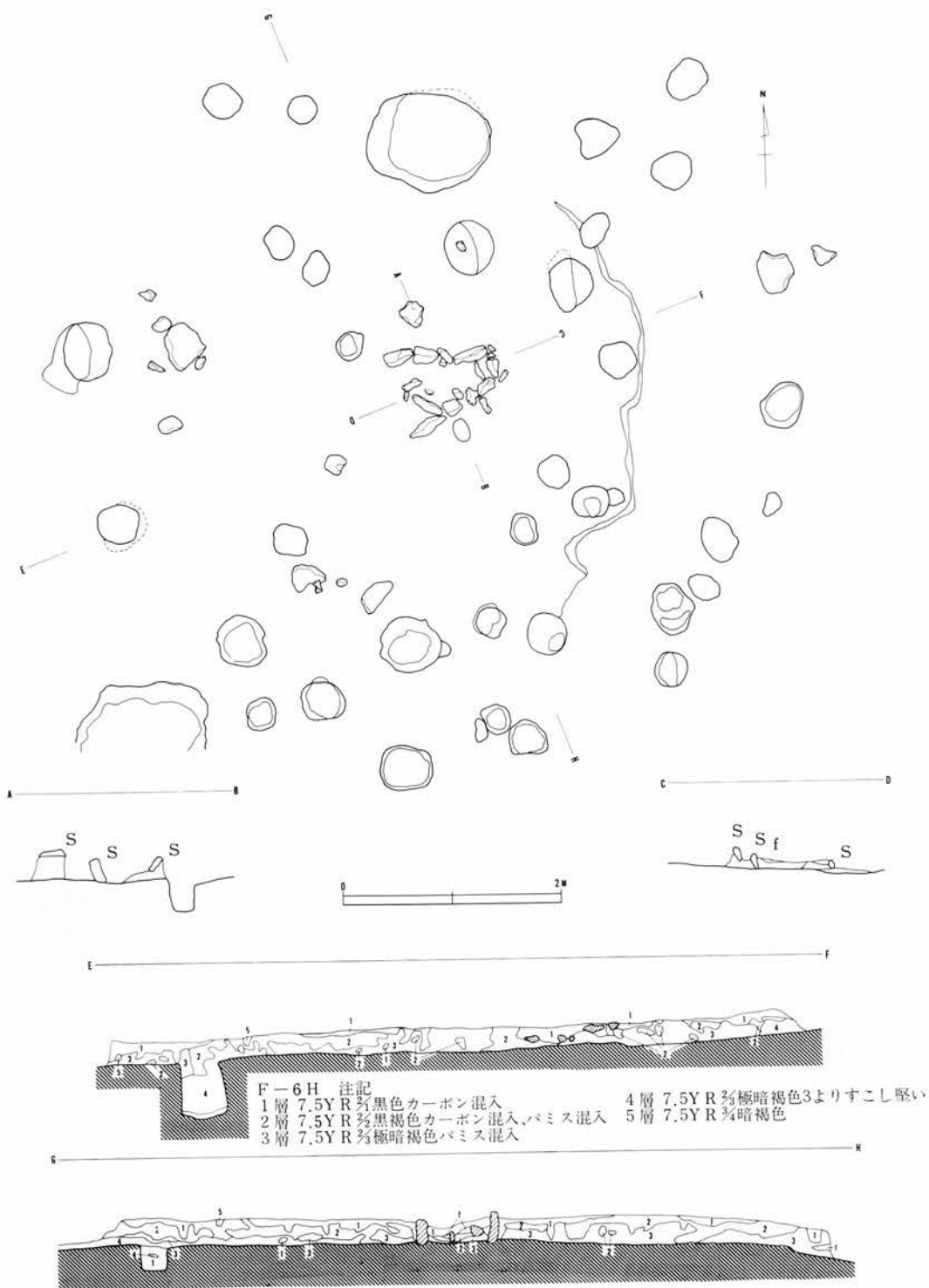
B-1・2住居址注記

- 1. 7.5Y R ㉫黒褐色耕作土
- 1-1. 7.5Y R ㉫黒褐色パミス混入
- 1-2. 7.5Y R ㉫黒褐色
- 2. 7.5Y R ㉫黒色炭化物混入
- 3. 7.5Y R ㉫黒色
- 4. 7.5Y R ㉫黒褐色

図版7 住居址-1

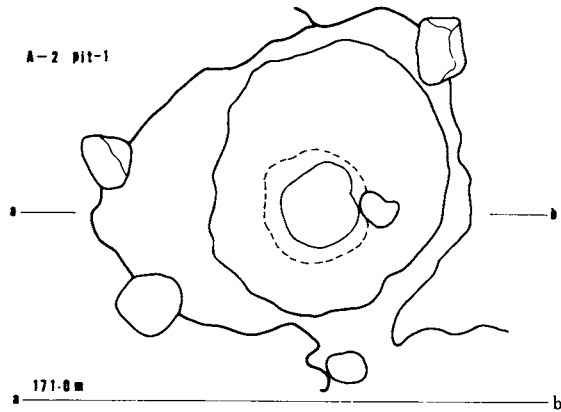


図版8 住居址-2



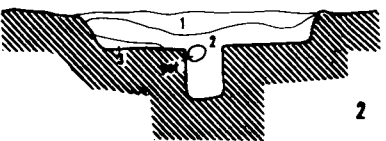
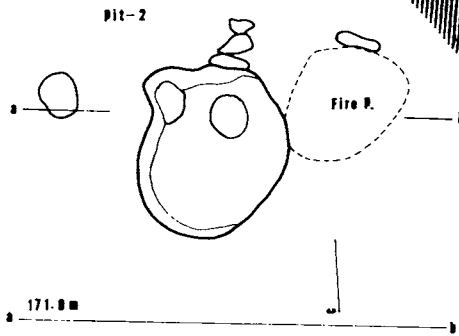
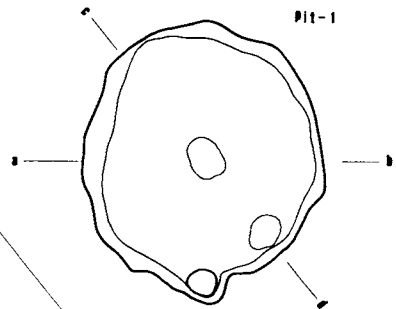
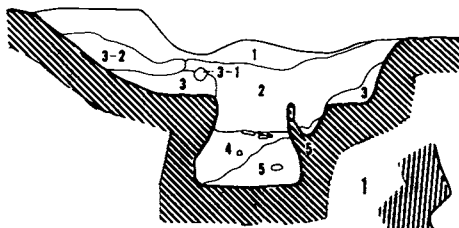
図版9 住居址-3



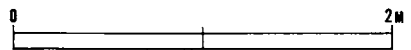


注記 Pit 2

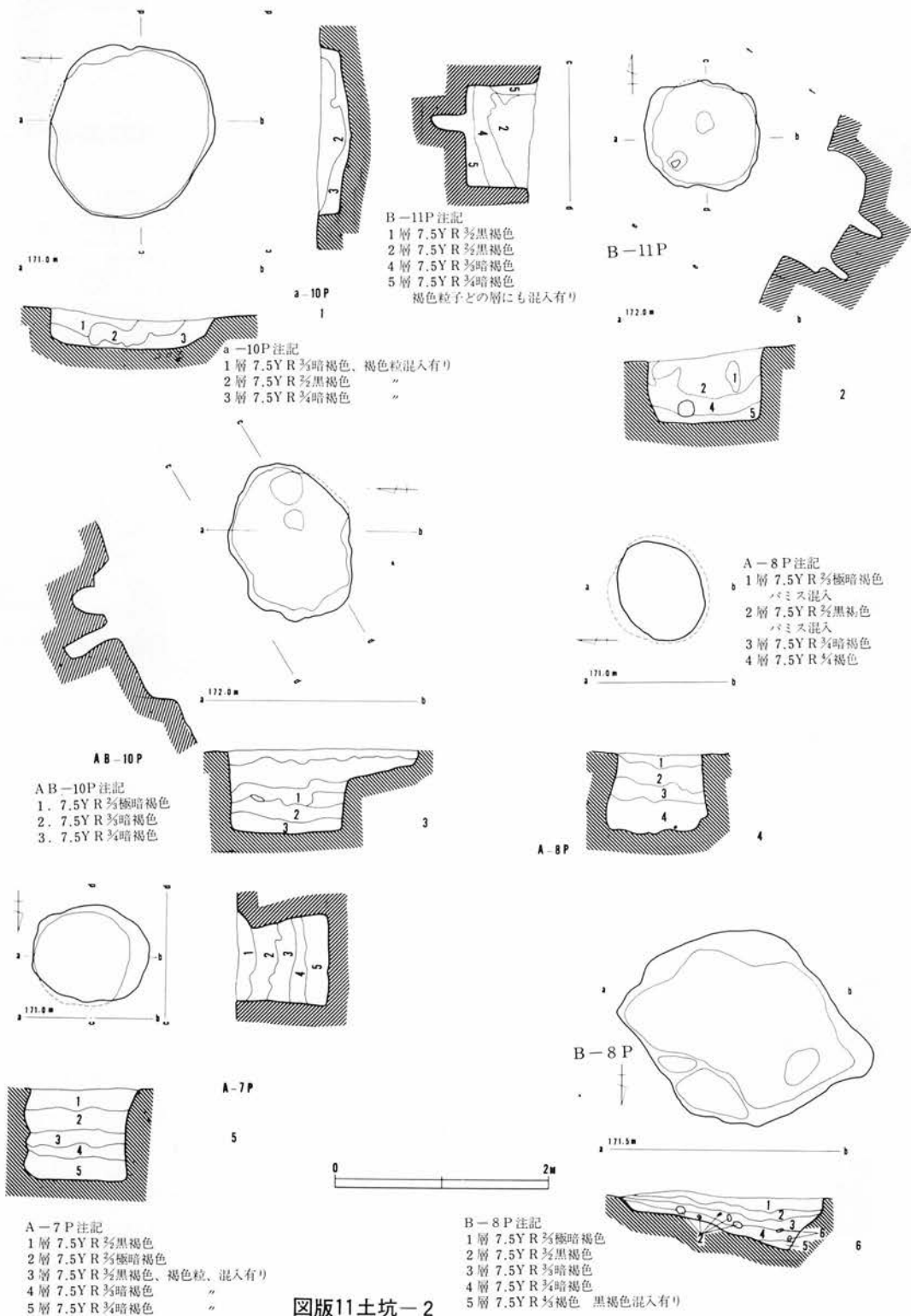
- 1層 7.5Y R ㉞黒色カーボン混入有り、粘性有り
- 2層 7.5Y R ㉞黒色カーボンバミス混入、粘性有り
- 3層 7.5Y R ㉞黒褐色  
3-1 3層よりやや、やわらかい感じ  
3-2 褐色混入
- 4層 7.5Y R ㉞黒褐色カーボン混入
- 5層 7.5Y R ㉞褐色  
7.5Y R ㉞黒褐色混入ボロボロする。



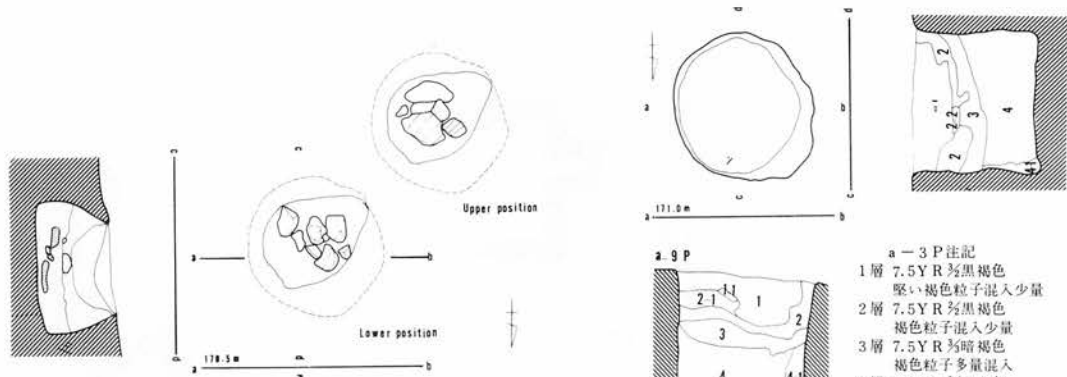
- pit-1 注記
- 1層 ㉞黒色
  - 2層 ㉞黒褐色、バミス混入  
2層より少々やわらかい



図版10 土坑1

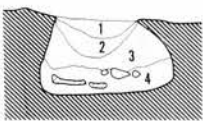


図版11土坑-2



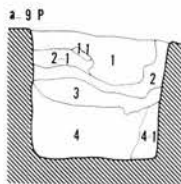
**b-3 P 注記**

- 1層 7.5Y R 為暗褐色
- 2層 7.5Y R 為 暗褐色、  
褐色粒混入有り
- 3層 7.5Y R 為 極暗褐色、  
褐色粒混入有り
- 4層 7.5Y R 為 黒褐色、  
褐色粒混入有り



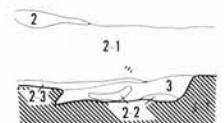
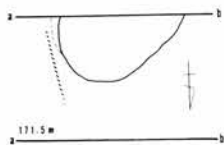
**a-9 P 注記**

- 1層 7.5Y R 為黒褐色
- 1-1 7.5Y R 為黒褐色やわらかい
- 2層 7.5Y R 為黒褐色
- 2-1 7.5Y R 為黒褐色やわらかい
- 3層 7.5Y R 為暗褐色
- 4層 7.5Y R 為暗褐色
- 4-1 7.5Y R 為暗褐色やわらかい

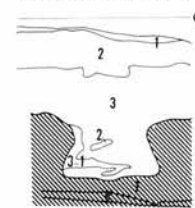
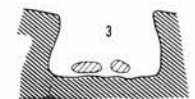


**a-3 P 注記**

- 1層 7.5Y R 為黒褐色  
堅い褐色粒子混入少量
- 2層 7.5Y R 為黒褐色  
褐色粒子混入少量
- 3層 7.5Y R 為暗褐色  
褐色粒子多量混入
- 4層 7.5Y R 為暗褐色  
褐色粒子多量混入
- 5層 7.5Y R 為褐色  
褐色粒子多量混入  
砂混入有り

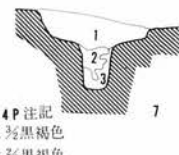


- 注記**
- 2層 7.5Y R 為黒褐色耕後土
  - 2-1層 7.5Y R 為黒褐色バミス混入
  - 2-2層 7.5Y R 為褐色
  - 2-3層 7.5Y R 為黒褐色
  - 3層 7.5Y R 為黒色

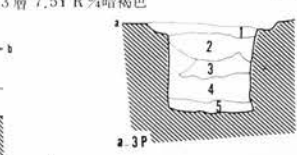


**C-3.4 P 注記**

- 1層 7.5Y R 為黒褐色
- 2層 7.5Y R 為黒褐色
- 3層 7.5Y R 為明褐色



0 2m



5



171.0m

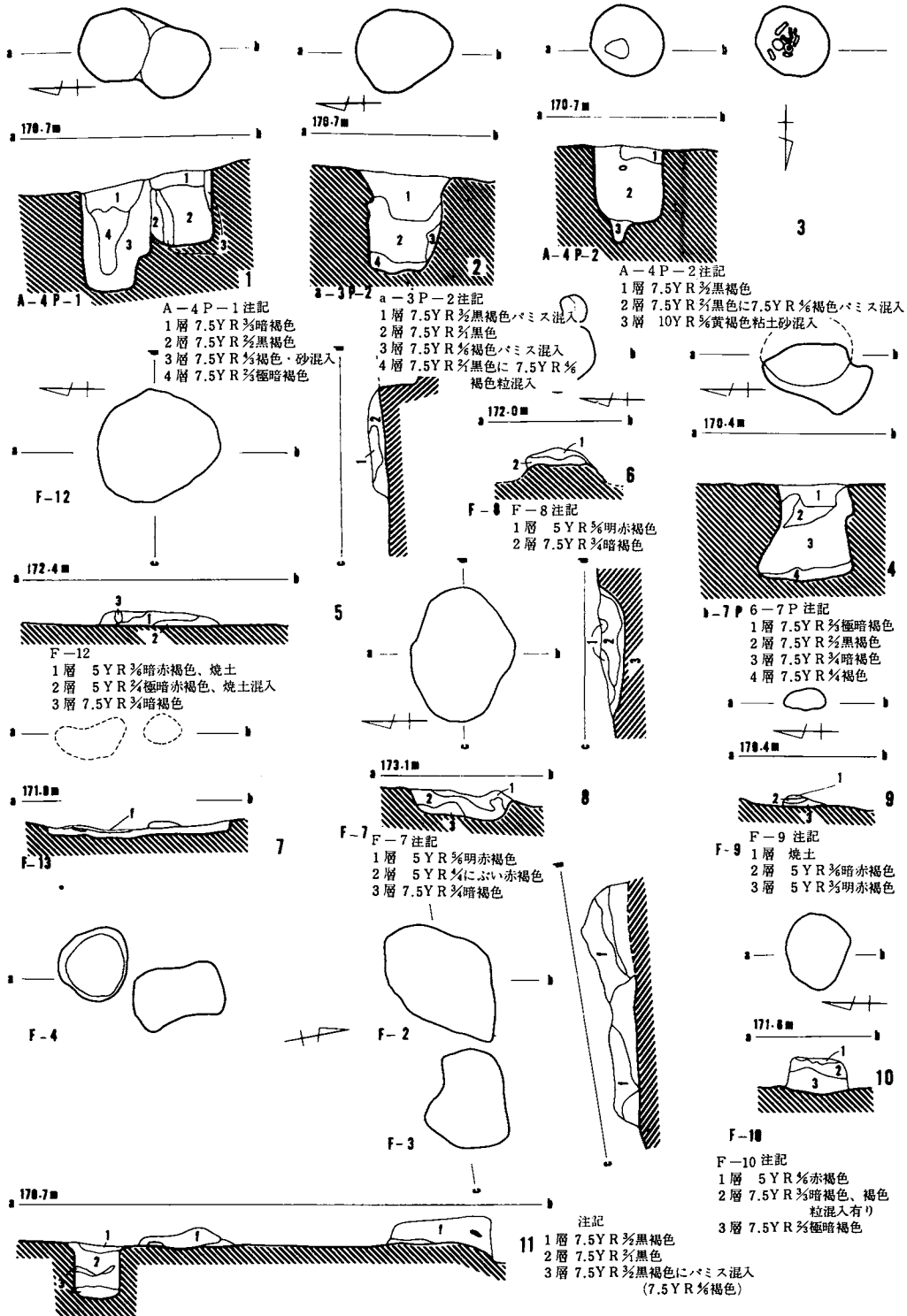


9

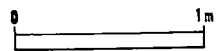
**2-5 P 注記**

- 1層 7.5Y R 為黒褐色
- 2層 7.5Y R 為黒色
- 3層 7.5Y R 為黒褐色、  
バミス混入
- 4層 7.5Y R 為極暗褐色、  
バミス混入
- 5層 10Y R 為にぶい黄褐色
- 6層 7.5Y R 為黒色  
(2と同じ)バミス混入
- 7層 7.5Y R 為暗褐色  
バミス混入
- 8層 7.5Y R 為褐色  
バミス混入
- 9層 7.5Y R 為褐色ブロック

図版12 土坑-3



図版-13 小土坑及焼土



## V 遺 物

出土した遺物は土器および石器である。土製品などの遺物は発見されなかった。特殊なものとしては、小形鉢口縁部の1部分を欠くもの(図版15-5)に入ったタール状のものが発見されている。

### 1. 土 器

土器は縄文時代早期、前期、後期および晩期に属するものである。他に続縄文系のものと考えられる土器の細片が2～3片発見された。出土土器はそのほとんどが破片であり、完形もしくはそれに近いものはわずかに3個体のみであり、いずれも縄文時代後期もしくは晩期のものである。

#### 1) 早期の土器

##### a 器形

図版9に図示した如く尖底のものである。尖底部は図版14-1に示したように比較的丸みをもった尖底が1例発見されている。他のものはいずれも尖底となるであろうが、先端部を欠除しており、このように丸みをおびた尖底となるか、鋭く尖がった底部となるか不明であるが、後述する文様等による形式分類によっては他遺跡で発見されているような鋭く尖がった底部となるものも存在するであろうと考えられる(図版14)。

##### b 文様

条痕文の一群(図版18)比較的肉厚の土器であり、表面にのみ条痕文を有するものであり図版9に示した尖底土器の胴部から底部近くにかけて施文されたものである。

半月形刺突文+沈線+条痕文の一群(図版19-1～7、9～11)。口唇部および口縁部上部に半月形の刺突を縦に一段もしくは二段施こしているもので、その下部は3～4条の細い横に走る沈線によって区切られ、さらにその下部に条痕文による施文がみられ、図版14-1、4、9のようにさらに沈線の下位にも刺突による文様がつけられている。この文様を有するものは、前にあげた条痕文土器の一群としたものの胴部上半または口縁部を形成するものであろう。

半月形刺突文＋貝殻文の一群（図版19-12-14）。口縁部に二段の小形半月形を呈する刺突を配し、その下は横につながった貝殻文が施こされている。

貝殻文の一群（図版20-1～7、21-6～15、22-1～5）。貝殻文を有するものは3種類に分けることが出来る。図版15に示したものは口唇部に刺突によると考えられる刻みをもつ、口縁部から胴部上半にかけて3本の細い沈線によって区画された三角形の中を縦および横の位置に貝殻の腹縁による圧痕が施されているものである。さらに裏面には斜めの貝殻腹縁の圧痕が並行して施されている。貝殻圧痕を区画する沈線部分も沈線と沈線の間に刻み目がつけられている。

図版21-10～15のものは、口縁部がなく胴部上半部の破片のみであるが、口縁部に並行すると考えられる横の沈線もしくは斜行する2本の細い沈線によって区画された中に貝殻圧痕文が施こされているものがある。

図版22-1～5は口縁部に斜めの貝殻圧痕を有し、その下に数条の並行する細い沈線が配されている。さらに沈線の中に二重の円形の文様が描かれ、内側の小円は縦に走る沈線とつながって画かれているようである。図版22-1は口縁部であるが、破片の下部に円形文様の一部が画かれていることがうかがえるし、さらに、その下位には図版22-2、4のように沈線が数本画かれているとみられる。図版22-3は貝殻圧痕文の下位に二重円を配してあるが、全体に破片が小さく文様の連続している状態がはっきりつかめないが、おそらく、図版22-1の口縁部の下に同図版の2、3もしくは4の文様帯が配されるものと考えられる。

小形円形刺突文＋沈線文（図版21-1～5）。三角形に沈線によって区切られた中に斜行する沈線があり、区画を作る沈線にならんで連続して小形の円形刺突文が配されているものである。

無文の一群（図版22-1～11）。表裏ともに無文の土器であり、表面にはわずかに整形のためと考えられる痕跡をとどめるものである。

以上の文様の変化によって6群に分けられる土器は貝殻文の一群がさらに文様施文の相異によってさらに3種類もしくは4種類に分けられる。これらの土器群はいずれも破片のみであり、全体的な形を示すものはないが、図版14に示したとおりいずれも尖底を有する土器群の一部と考えてよいであろう。形式としては個々の破片については述べないが、物見台式、ムシリⅠ式、蛇王洞Ⅱ式、白浜式などの時期に比定されるものであろう。

## 2) 前期の土器 (図版17および図版23)

いずれも太い複節の縄文のみを施文された土器であり、図版17に復元実測したものをのぞいて他はいずれも破片から器形を推定しえないものである。図版17に示したものは、丸みをおびた口唇部を有し、やや内反する口縁部から、外反する胴部に移る器形であるが胴部下半から底部にかけては不明である。胎土も粗く、若干繊維を含むものである。

## 3) 後期の土器 (図版15-1~8、16-1~6、8、9、24-1~12、25-1~7)

### a 器形

図版15、16に示した如く多様な器形を持っている。壺形、甕形および鉢形に大別される。

壺形としたものは図版15-2、3に示したようにいわゆる無頸の壺形土器である。いずれも口縁部のみであり、全体の器形をうかがうことはできない。図版15-1はやはり口縁部のみであるが、小形甕形土器の破片ではなく、おそらく壺形土器の頸部より上の部分であると考えられる。また図版15-4および6に示したような台付土器が2例出土している。図版15-4は特殊な形をした土器であり、完形でないが、胴部に窓がつけられたような形となっている。この窓は残存するものから推定して4箇所あけられているものと考えられる。図版15-7は器台ではなく、フタであろうかと思えるものである。他に小形壺1例(図版16-3)と注口土器の注口部のみが出土した。突起のある口縁を有する甕形土器がある(図版25-1)。

### b 文様

全体に縄文が施されており、沈線による区画で区切られているものが多い。並行する沈線によって区切られた中の縄文を磨り消しているものもある(図版25-1、3、4、6、)。他は沈線による直線および曲線による文様が画かれたもの(図版16-1、20-2、5)縄文のみのもの(図版24-7~11)、網目状撚糸の圧痕文(図版24-12)縄文の地文の中に沈線による曲線文様のもの(図版24-3、6)突帯を有するもの(図版24-1、2、4、5)などがみられる。

後期の土器形式としては加曾利B式、十腰内I式、宮戸II式などの土器が含まれている。

## 晩期の土器 (図版16-7、25-8~16)。

### a 器形

復元実測しえたものは図版11-7の小形甕形土器1点のみで他はいずれも小破片のために器形を復元することはできえないが、文様等の状態からみて、甕形および鉢形土器が存在するものと考えられる。

## b 文様

いずれも小破片であるために全体の文様はうかがえないが、変形雲形文、並行沈線十刻み目文などがある。

晩期の資料は極くわずかであるが、形式的には大洞BC式、大洞C<sub>1</sub>式期のものと考えられる。

以上本遺跡出土の土器について略記したが、当初にも述べたごとく、縄文早期、前期、後期および晩期に属する土器群である。これら土器の出土層位は攪乱層よりの出土を除けば基本層序の内の第Ⅱ、第Ⅲ層に遺物ありとした層位よりの出土がほとんどである。

しかも全体的に包含層が薄く、早期と後期の土器が混在して発見されており、明確に層位別に分類することはできない状態であったが、総体的にみて、第Ⅲ層下部からは早期の土器が、第Ⅲ層上部から第Ⅱ層にかけては後期の土器が多く出土したと言えよう。

## 2. 石 器

本遺跡より出土した石器、またはそれに類するもの、および剥片類は一部不定形で加工痕もしくは使用痕と思われる痕跡をとどめない剥片および石器等の製作時に生じたと思われる極小の剥片類を除いて図示したものが全てである。本遺跡周辺部に立地する他の遺跡出土の石器の量に比して量的にあまり多いとは言えないが、第Ⅱ章 調査方法およびその経過において述べた如く遺跡の状態が悪いため、これが原因の一つとも考えられる。いずれ後にこの事について若干述べることにしたい。以下、図版番号の順に各石器について記す。

### 1) 石 鏃 (写真図版25-1~16 図版26-1~16)。

石鏃は図示した如く縦長の三角形、いわゆる二等辺三角形を呈するものがほとんどである。これらの石器は基部の形により2通りに分けられよう。基部に抉り込みのあるもの(図26-1~4、6、9)直線に近い形を呈するもの(図26-7、8、10~15)である。前者においては図21-4がその先端部が丸みをおびており、石鏃本来の鋭利な先端部をもっていないが、これは加工の状況よりみて未成品のものと考えている。また図26-6に示したものは抉り込みの度が強く、基部の左右両端に脚部を形作るような形となっている。一方の脚部は折損している。基部が直線状に近くなる一群の石鏃は、抉り込みを有する一群のものよりも両側辺が二等辺三角形よりも直線状になるものがみられる(図26-15、16)。これら2例ともに先端部および両端部分を欠いているが、他のものに比して長身の鏃である。図26-5は表裏両面の加工度合および断面の状態よりみて石鏃とするには多少の無理があるかと考えるが、この程度の厚みをもつ石鏃も少なからず存在することからこの類に含めた。



## 2) 石槍 (写真図版25-17~21図版27-1~5)。

石槍として明確な形態を呈しているものは、わずか5例にすぎないが、後述する両面加工石器としたものの中におそらく石槍とみてもよい石器が2、3ある。

石槍としては完全な形をとどめているのは図版27-1、4、の2例のみであり、2例は欠損品また他の1例は未成品とも考えられるものである。完形品2例は、それぞれに異った形を呈している。小形木葉形および三角形状である。特に図版27-4は基部に丸みを有するが先端部は鋭く尖出している。欠損品のうち図版27-5は小形の三角形状であるいは石鏃の未成品とも思われたが、胴体部中央部分で折れているものであり、同図-3に示したものと同様に多少長身の石槍の一端部と考えられるものである。図版27-1および未成品と考えられる同図-2の例は両端部にかけてゆるやかなカーブを描く両側辺をもつ木葉形の石槍であろう。

## 3) 両面加工石器 (写真図版25-22~33図版27-6~18、28-1~6、8、9)。

ここに分類した石器は便宜上両面加工石器と仮称したが、この類の中には前述した如く石槍の未成品かと考えられるものをはじめとして、スクレーパー類、打製石斧、石ペラ類などに分類される可能性をもつ石器類が含まれている。これら石器は本来それぞれの分類されたものも含めても良いのであろうが、ここでは単に図版作製上の都合によりこのような形となった。

図版27-7~9、11、12、13、15、18に示したものはいずれも石槍もしくは石鏃の未成品もしくは欠損品と考えられるものであるが、前述した石槍に分類された石器類に比して素材となった剥片の不整形な点、加工状態の粗い点などからこの類に含めた。打製石斧もしくは石ペラ類の欠損品かと思うものは図版28-1~4、5、に図示したものである。図版28-8~10に示した3例は尖出もしくは快り込み部分における若干の細部加工がみられることからスクレーパー類の一種に含めてもよいものと思われる。

両面加工石器として細部加工が施され、かつまた形態的に同様のものは図版27-16、17、28-5があげられる。片面にやや粗い加工痕を残しているが全体的に両面とも細かい加工が施され、特にその一部にはスクレーパー類にみられるような規則的な、刃部を形成するような加工の痕がみられるものである。図版27-10および同図-6に示したものは形の相異、加工の状態などにおいて多少の相異はあるが、この類に含められよう。これら両面加工石器としたものの用途的な点については、はっきりしたことは言えないが、加工の状態などよりみて、スクレーパー類の石器と同様のものであろうかと推察される。あるいは両面加工の小形のナイフの用途のものとも考えられよう。

#### 4) 石ヒ (写真図版26-1~16図版29-1~16)。

本遺跡より出土した石ヒは横形のもの1例を除いて他はすべて縦形のもので素材となった剥片は横剥ぎのもの1例を除いて他はすべて石刃状の剥片である。大形のもの和小形のもの2種類に分けられるが、共に細い薄い並列する剥離痕を残す加工状態をとどめている。つまみ部分は小さく精巧に作出されており表面全体にわたって左右両側縁よりの加工が加えられ、さらに裏面の一側縁に細い加工がみられる。この裏面加工については図で明らかなように同一の側に行われている。すなわち、つまみ部分から表面よりみて左側に右に比して大きく作られた肩の部分とも言うべきものがあり、丁度その裏側に肩の部分から先端部まで1列の細い加工が施されており、刃部を形成している。この加工方法は、この種石ヒの欠損品であろうと思われる同図-11、14、16、の石器にもわずかながら認められるものである。また同図-10、12の2例はつまみ部分を欠くものであるが、他の石ヒ同様のものである。

横形のもとは唯一の出土例である。つまみ部分がなければ小形の石槍かと思われるような細い両面加工のもので、つまみ部分も小さく尖出したような形に作られている。

本遺跡出土の石ヒの特徴はすでに述べたとうりであるが、同一の形態および加工状態をもつもののみが出土している例は非常に珍しいものと言えよう。

#### 5) スクレーパー類 (写真図版26-19、20、27-1~10 図版29-19、20、30-1~10)。

ここに含まれるスクレーパー類とは、サイドもしくはエンド・スクレーパーとして分類されるものであるが、一部不定形のスクレーパー類とみられる石器も含まれている。

エンド・スクレーパーとされるものは図版29-2、6、に示した。大形および小形の円形に近い剥片の一端、表面側に加工が行われている。裏面は第1次剥離面を残すのみで何らの加工も加えられていない。

サイド・スクレーパーとされるものは加工の状態により2種に分けられよう。図版29-19、30-1、3、5、8にみられるように片面よりの加工により刃部を形成するもの、図版29-20、30-4、7、9、10、のような両面よりの加工により刃部を形作るものである。片面加工、両面加工のものともども不定形の剥片を利用している。これらのうち図版29-20および図版30-5は刃部とみられる部分が全体もしくは一部がわずかに湾曲しており、それ相等の用途を考えることが出来よう。また両面よりの加工により刃部を形成しているものうち図版30-10は前に述べた両面加工石器のうちスクレーパー類同様の機能をもつであろうとした石器群と非常に類似したものである。

6) 石ベラおよびそれに類する石器 (写真図版28-1~15、29-1~9 図版31-1~9、27-1~15)。

石ベラおよびそれに類する石器としたのは両面もしくは半両面加工の石器であり、形状はおおむね縦長の台形状を呈する。刃部は縦断面の形からみれば一面より片刃状となっている。刃部の線はやや丸みをおびているが、ほぼ直線に近い形を示すものである。

図26および図27に示した石器でみれば両面加工のものは図版31-3、7~9、32-4、5、7~9、11~15までがそれにあたる。半両面加工のものとしては図版31-1、6、32-1~3、6、10、があげられる。両面加工の石器においては定かではないが、半両面加工の石器による観察によれば素材となった剥片は縦および横剥ぎの大形肉厚のものが混在している。また自然面を残しているものもある。この種石器のうち特に半両面加工のものが、一般にトランシェ様石器と呼ばれて、東北、北海道地方の早期縄文土器に伴出する石器の呼び名の元となったヨーロッパ、アフリカの中、新石器遺跡より出土するトランシェ、もしくはフラット、アックス(扁平石斧)同様に石核より剥離される以前に細部加工が行われたものであるか否か石核と考えられるものが出土していないため定かでない。石器の大きさ等からみて相当大形の剥片が使用されたであろう。

図版31-2、4、5、は、この類の石器とするには不適格であるが同図-2、4、は欠損品と考えられるし5は、あるいは未成品とみて良いものであろうかと考える。

7) 石斧 (写真図版26-18、33-5 図版29-18、33-5)。

磨製石斧の欠損品2例が出土した。1例(図版29-18)は刃部を含む胴部中央より先端部を欠く。基部は面取りをされたようにていねいに仕上げられている。両面ともに整形時につけられた擦痕が残っている。他の1例(図版33-5)は基部および刃部を欠くが刃部近くに若干の打ち欠きによる剥離があった事を示す痕があり、残存部よりみて刃部は胴部最大幅よりせまいものと考えられる。石斧類の中には打製石斧がみられないのであるが、前述した石ベラ類中に含めた図版32-9および15の2例は刃部の断面よりみて、あるいは打製石斧として分類した方が良いものかも知れない。

8) 凹み石 (写真図版31-1~3、33-1~4、6、7 図版33-1~4、6~9、34-7)。

扁平不整形円形もしくは棒状の河原石の片面もしくは両面に1~2・3個所の凹みを有するものであり、全部で9点出土している。

9) その他の石器 (写真図版31-4~6・32・33-8、34 図版34-1~6、35-1~10、36-1~8)。

扁平もしくは棒状の河原石によって作られた礫器類を一括した。これら石器類の内訳は、すり石と思われるもの(図版34-1~6、35-8、9)。敲き石(図版35-3~5、36-1、4、5)。石皿状石器(図版36-8)。その他である。

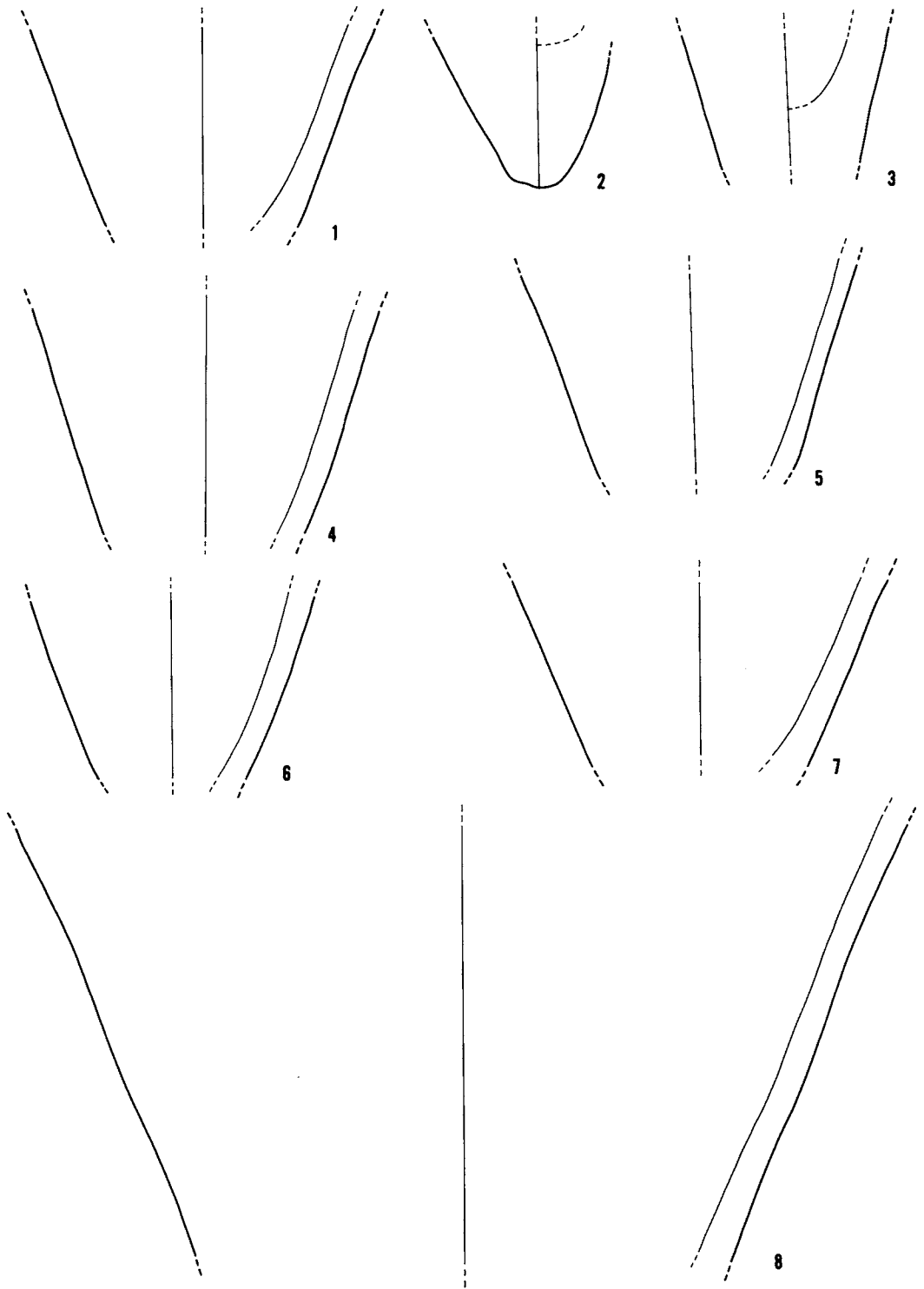
すり石としたのは図版34に示したように全体に丸い河原石を使用したものであるが、図版34-5は棒状の扁平な河原石の片面に加工痕とみられるような擦痕が残されており、また片側には、わずかに打ち欠きらしい凹が残されている。また図版35-1、2はサイド・スクレーパーのように片側にのみ加工とみられる打ち欠き痕があり、全体にすられたような痕跡をかすかに認めることが出来るため、他の類の石器と考えられなくもないし、また磨製石斧に近いものである可能性もある。図版35-8、9に示したものはいずれも欠損品であるが、不整四辺形を呈する断面をみせており、正面中央部分は細長く平坦に磨りこまれている。

敲き石は明瞭に敲打の痕をとどめているもののみをあげたが、それ以外に特殊なものとして図版35-10に示した礫器である。扁平円形の礫の一部に打ち欠きを加えられている。これが人工的なものか否か定かでないが、明らかに使用することによって、もしくは若干の加工によってなされた事は考えられよう。

1例石皿状の扁平大形のものがある。中央部にみられる凹みは自然に出来た凹みを利用して使用した結果のものと考えられる。なお他に数点欠損品もしくは完形ではあるがわずかに磨り痕の認められるような礫器が存在した。

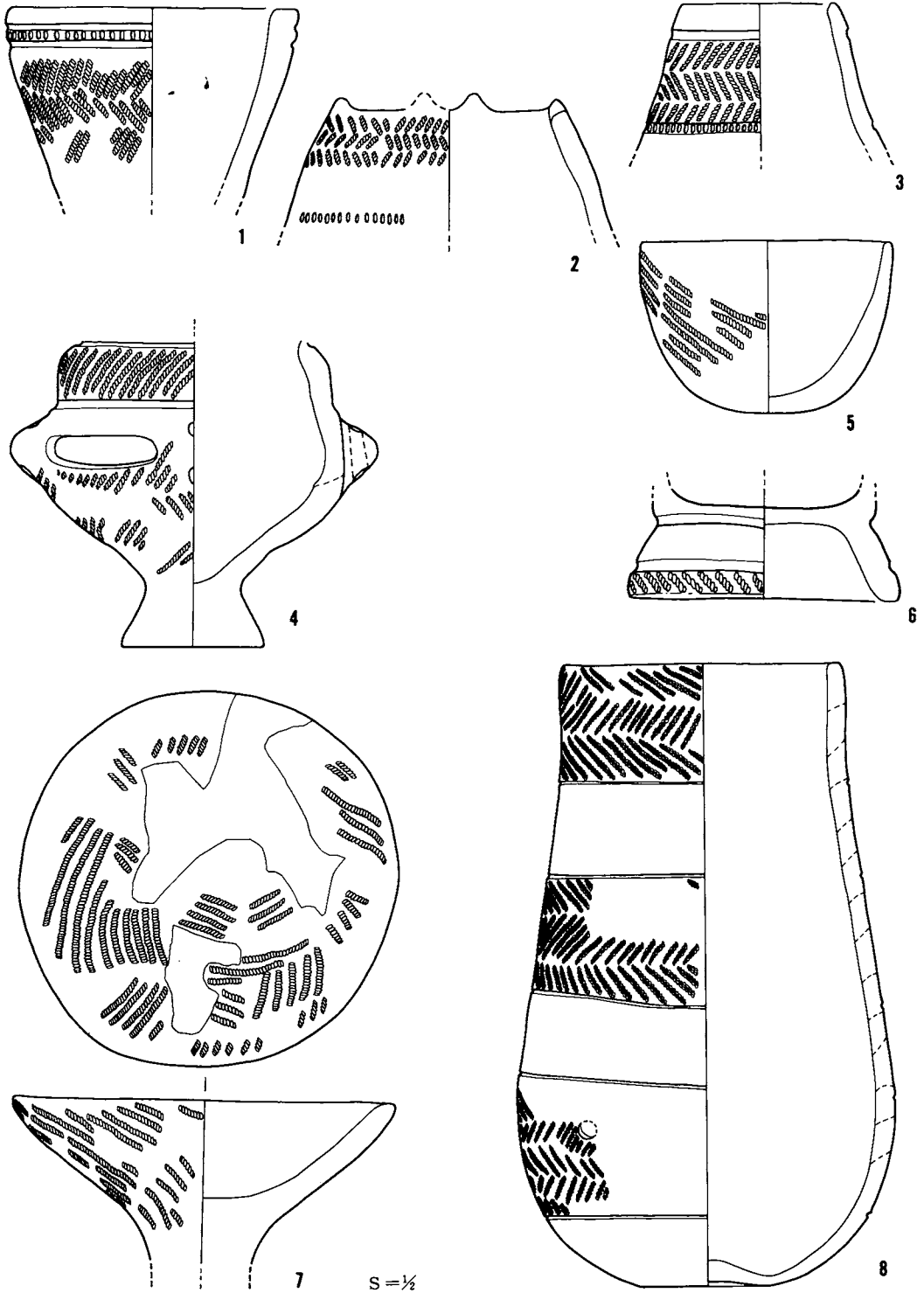
以上、本遺跡出土の石器について略記したが、これら石器の遺跡における出土地点および出土層位等については表をのせてあるので参照されたい。出土層位の点からみれば、当初に記した如く遺跡の大部分の攪乱状態により、いわゆる石器の組成を明確につかむ事がむずかしい状態にある。たとえば特徴と考えた石ヒの出土層位によっても地表面より第3層まで散在している状態である。この縦形石ヒの形態の特殊な面よりみれば、ある1時期のものと考えて良いと思われるが、強いて層位をつかむとすれば第2層下部より第3層と言うような状態で、その数も決して多くない。他の石器類においても同様である。

個々の石器の特徴としては今述べた石ヒ、それに不整四辺形の断面を有するすり石があるが後者にしてもわずか2例の出土であり、附近一帯の他遺跡の出土例と比較しながら検討を要するものであろう。

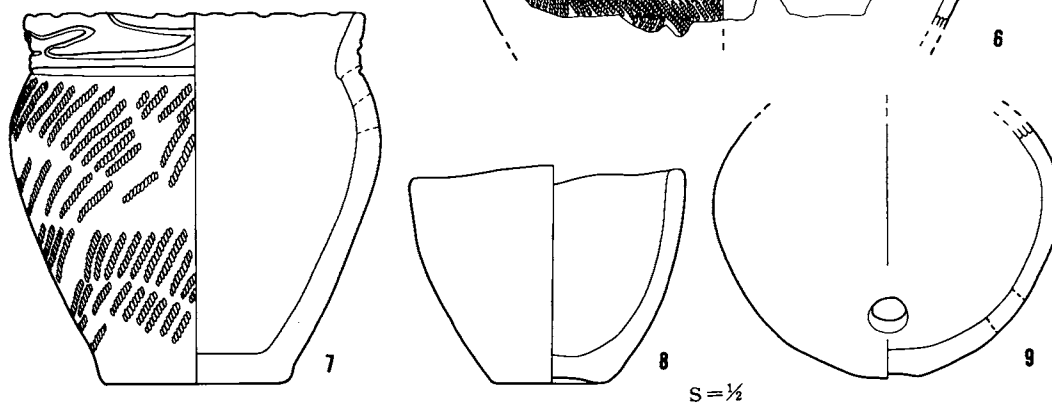
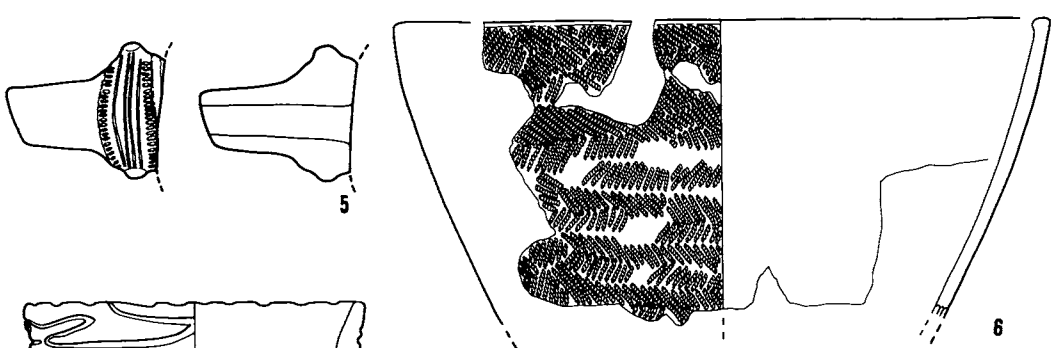
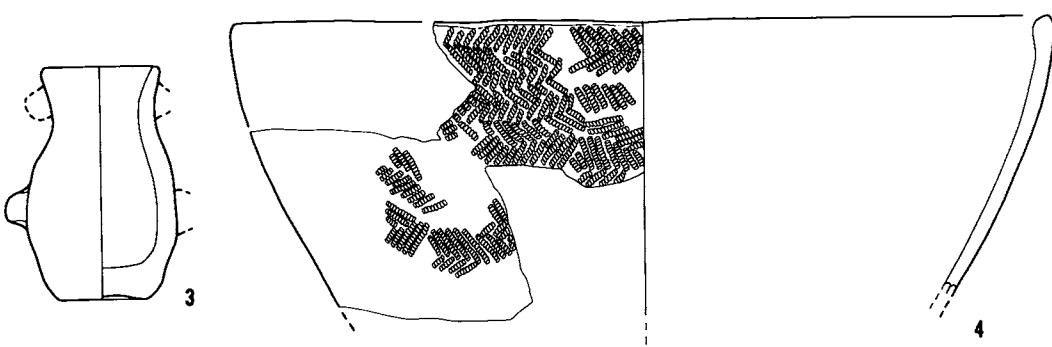
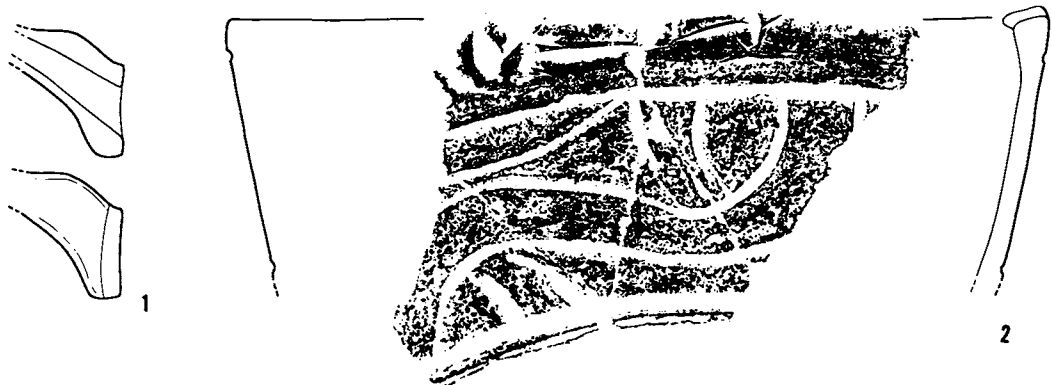


图版14 土器 1

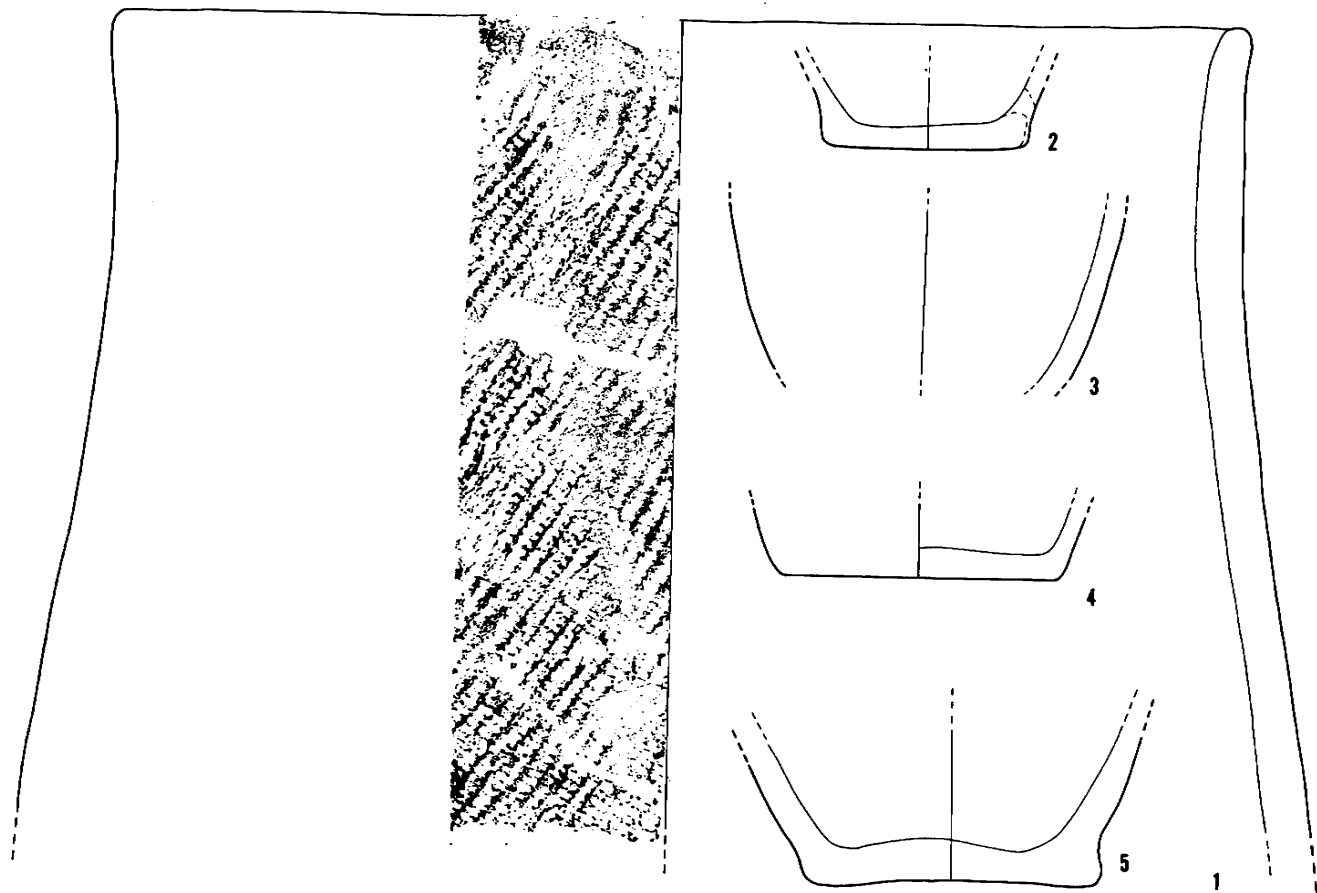
S = 1/2



图版15 土器2



图版16 土器 3



图版17 土器 4

S = 1/2





1



2



3



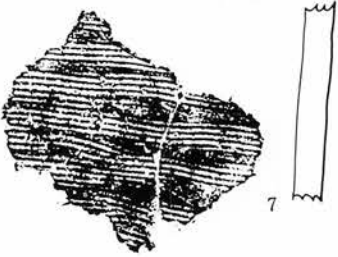
4



5



6



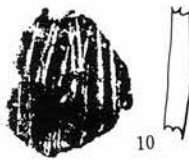
7



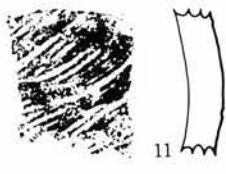
8



9



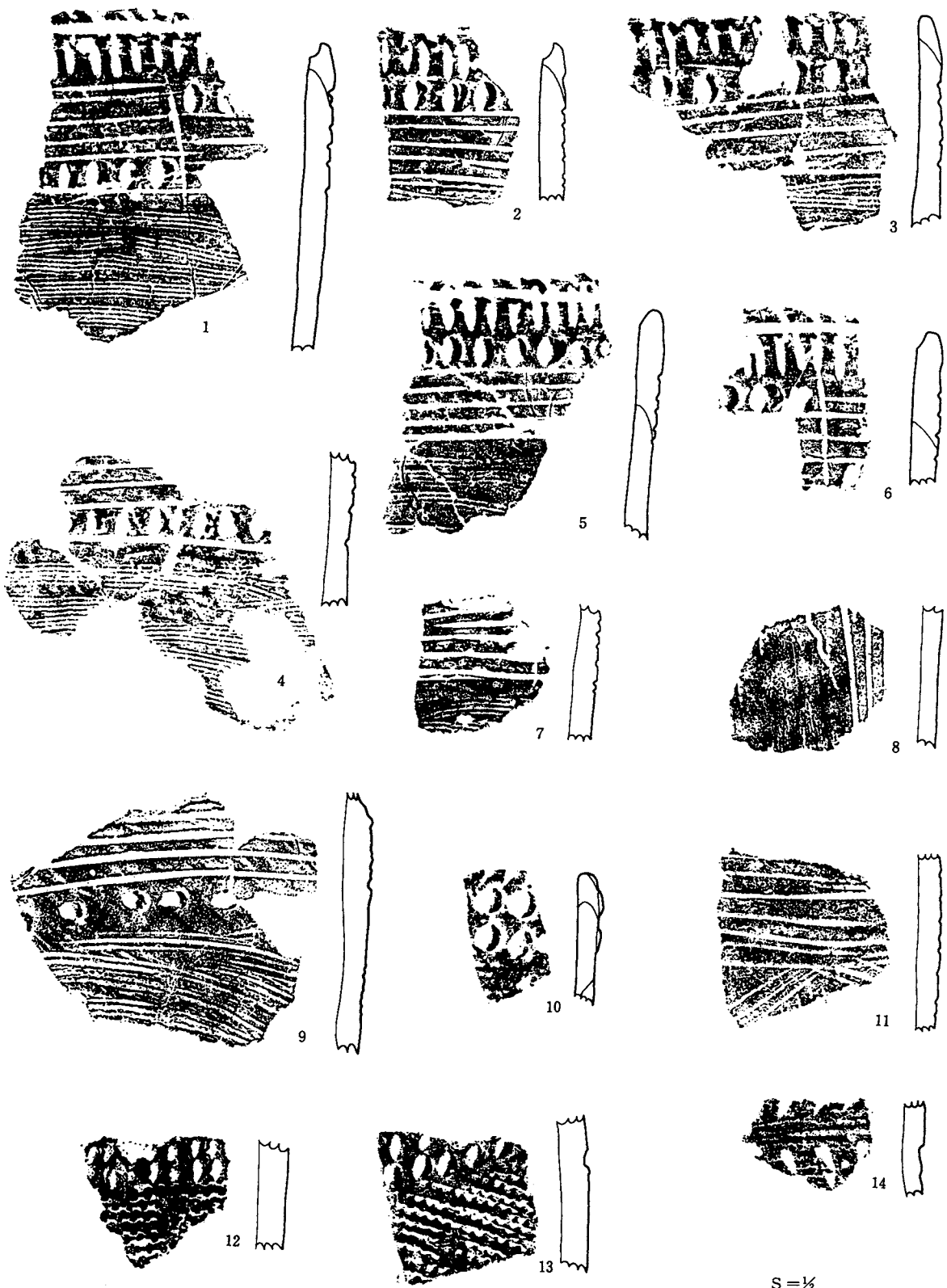
10



11

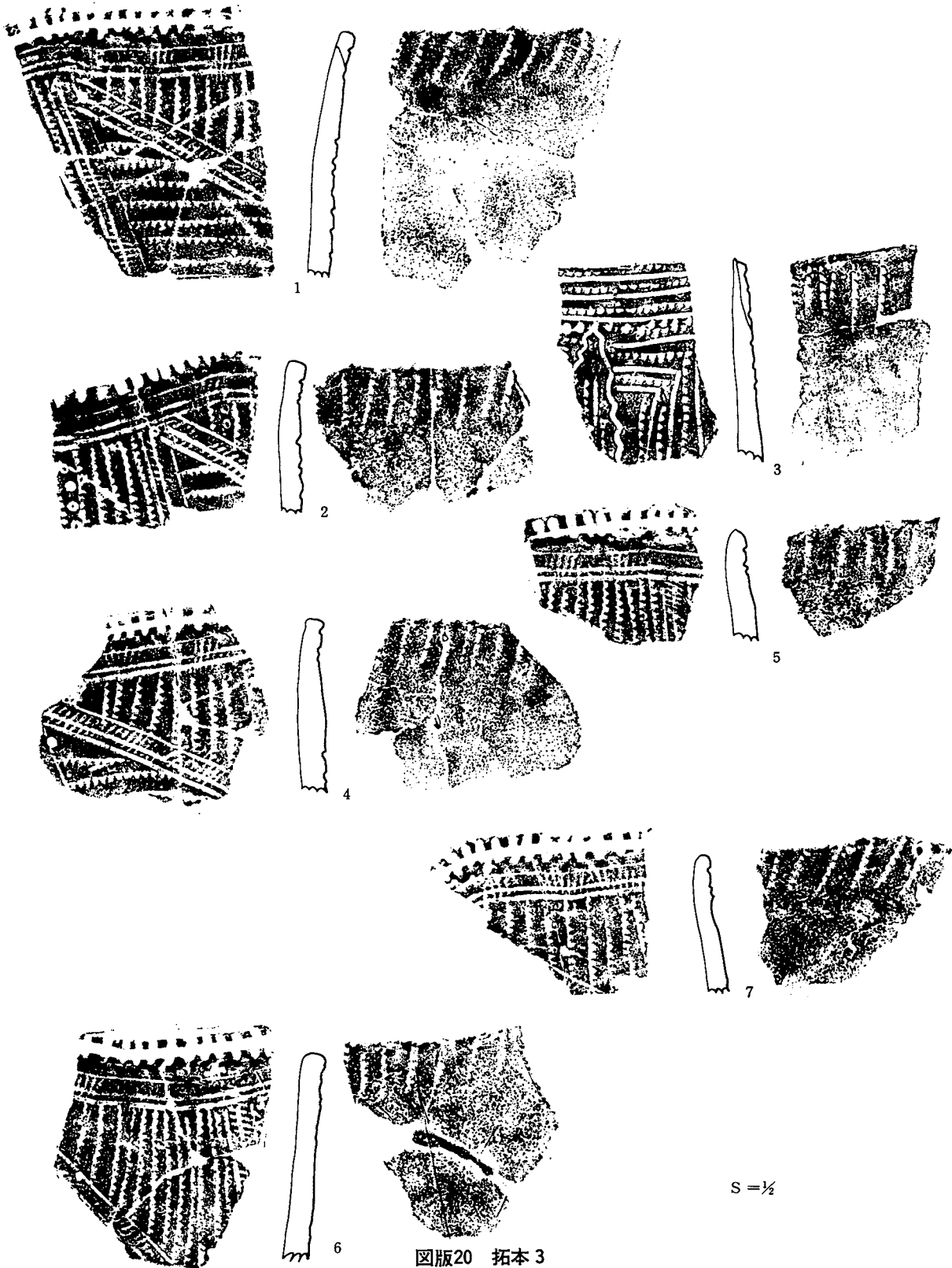
S = 1/2

图版18 拓本1

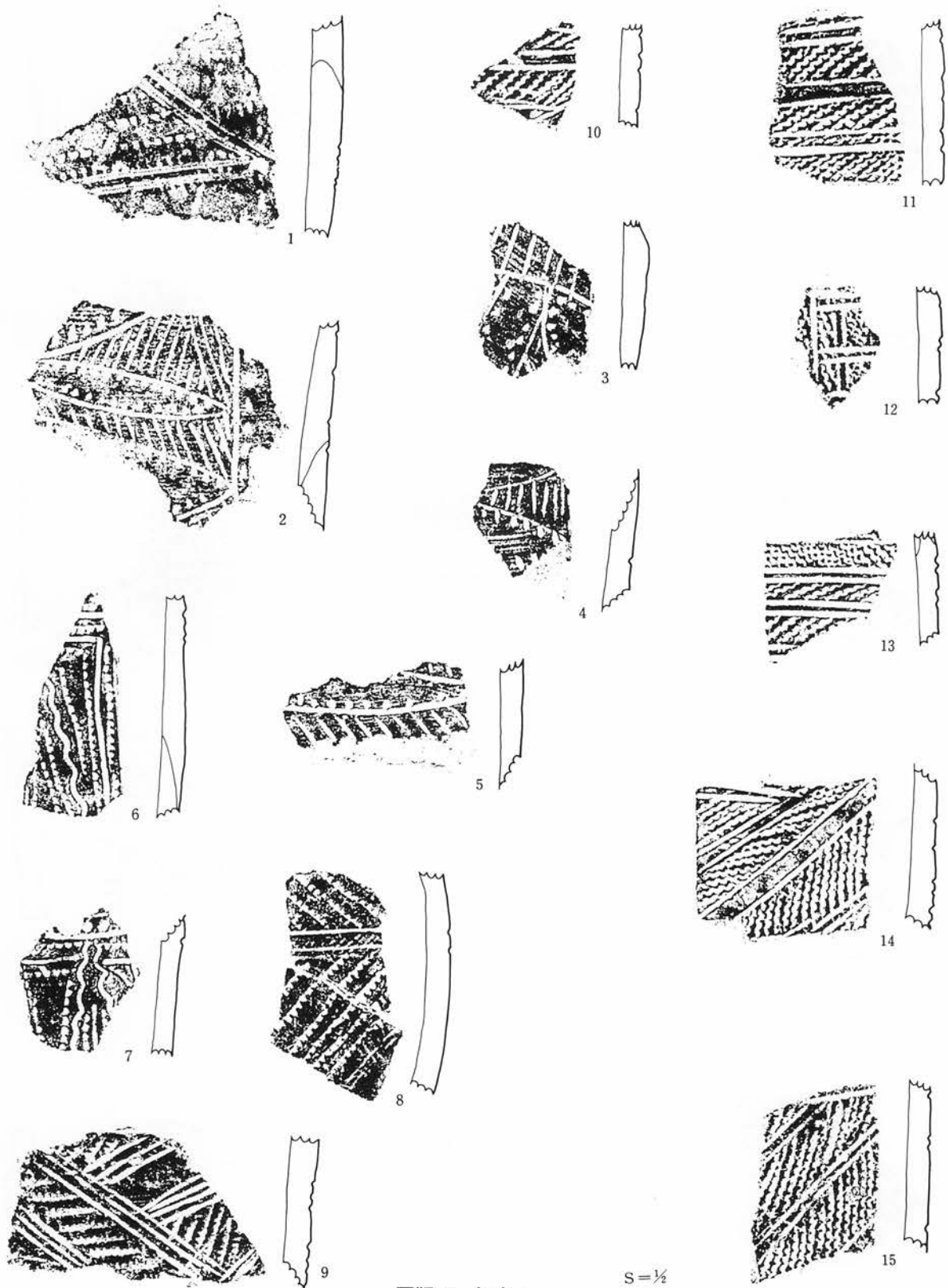


S=1/2

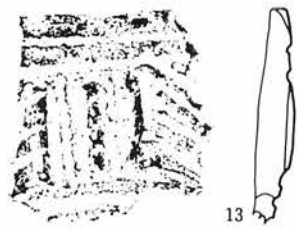
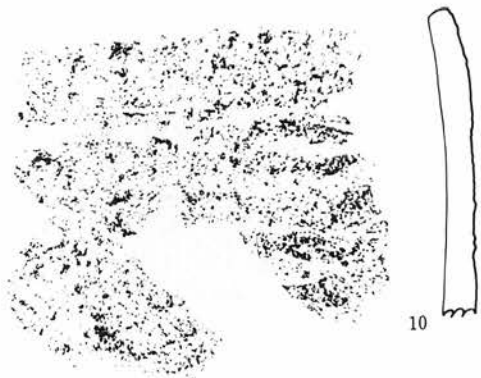
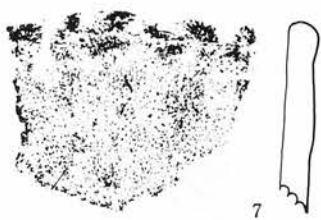
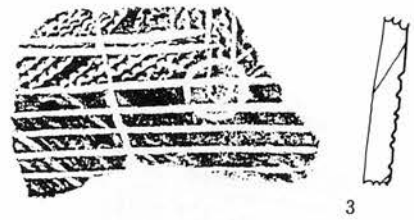
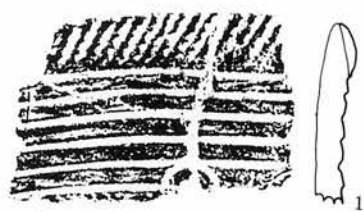
图版19 拓本 2



图版20 拓本 3

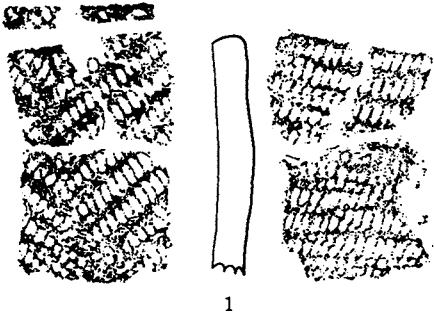


图版21 拓本 4

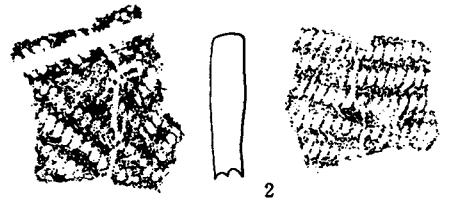


图版22 拓本 5

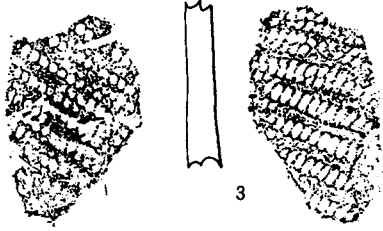
S=1/2



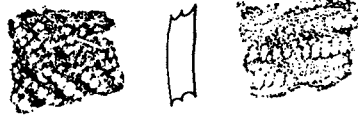
1



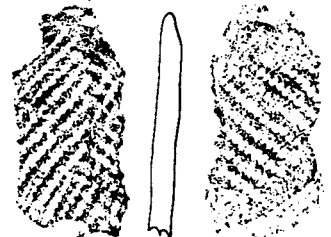
2



3



4



5



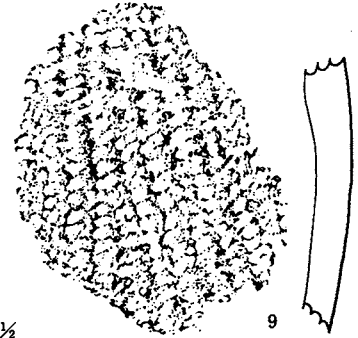
6



7



8



9

S = 1/2

图版23 拓本 6



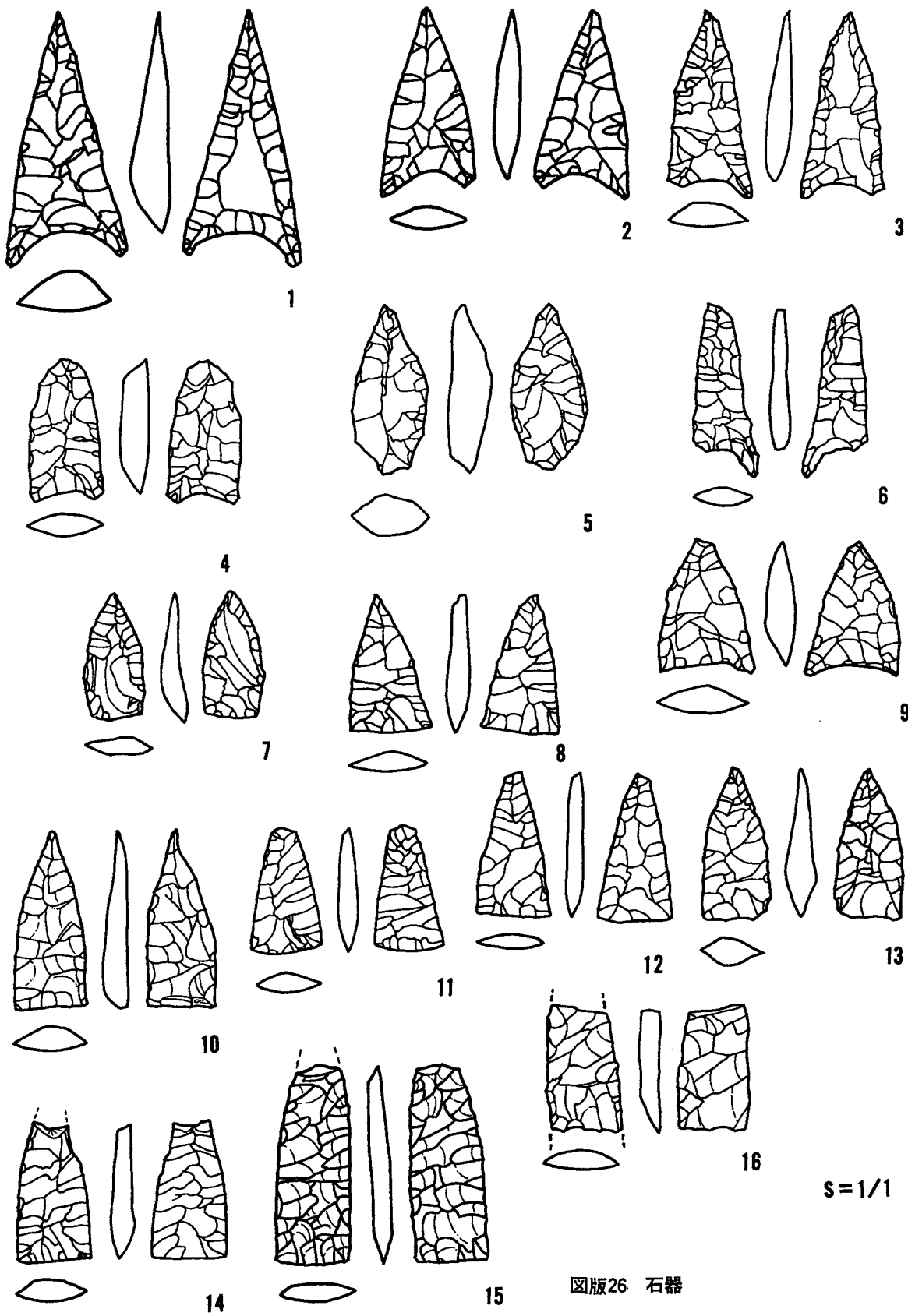
图版24 拓本 7

S=1/2

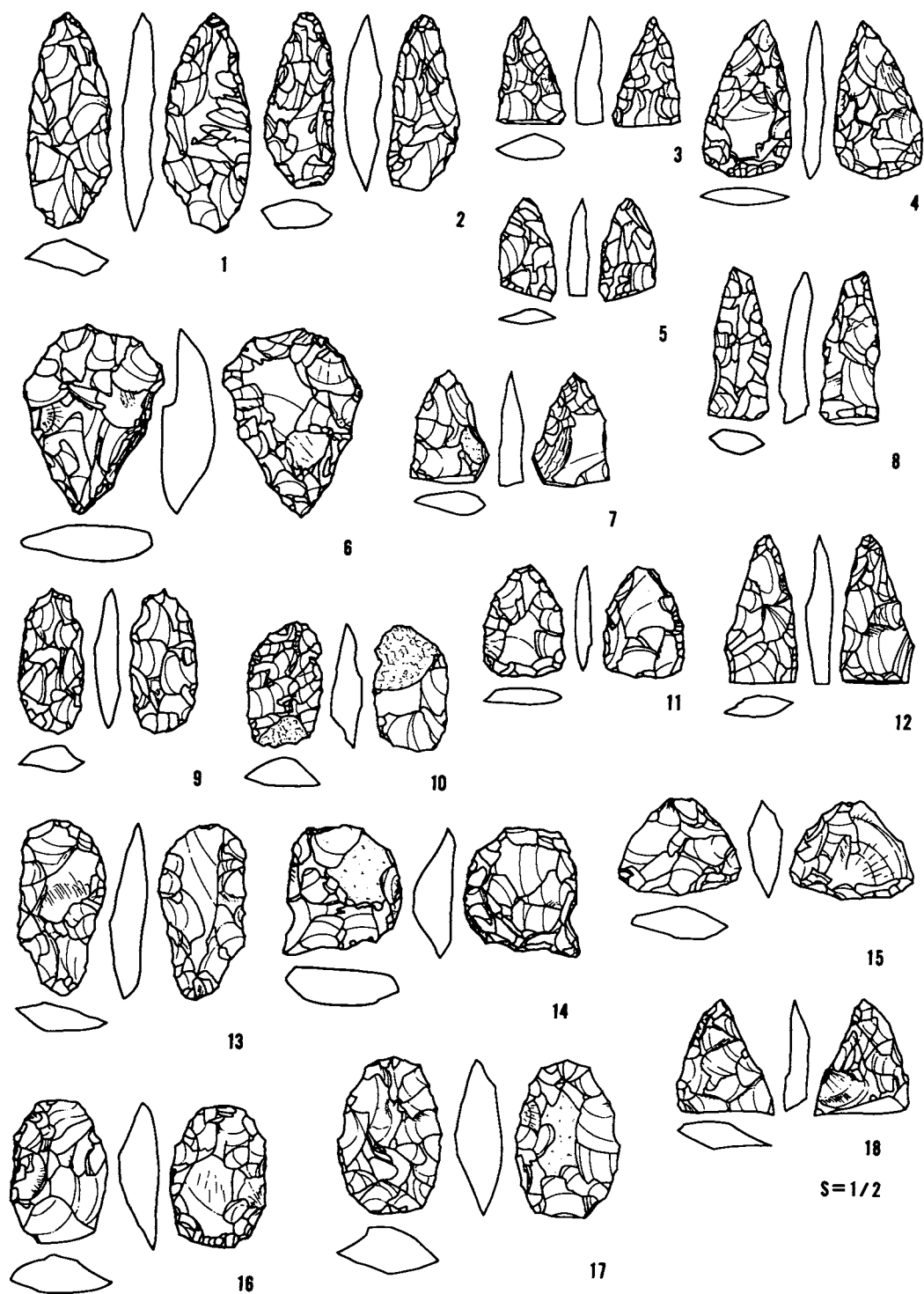


图版25 拓本 8 S=1/2

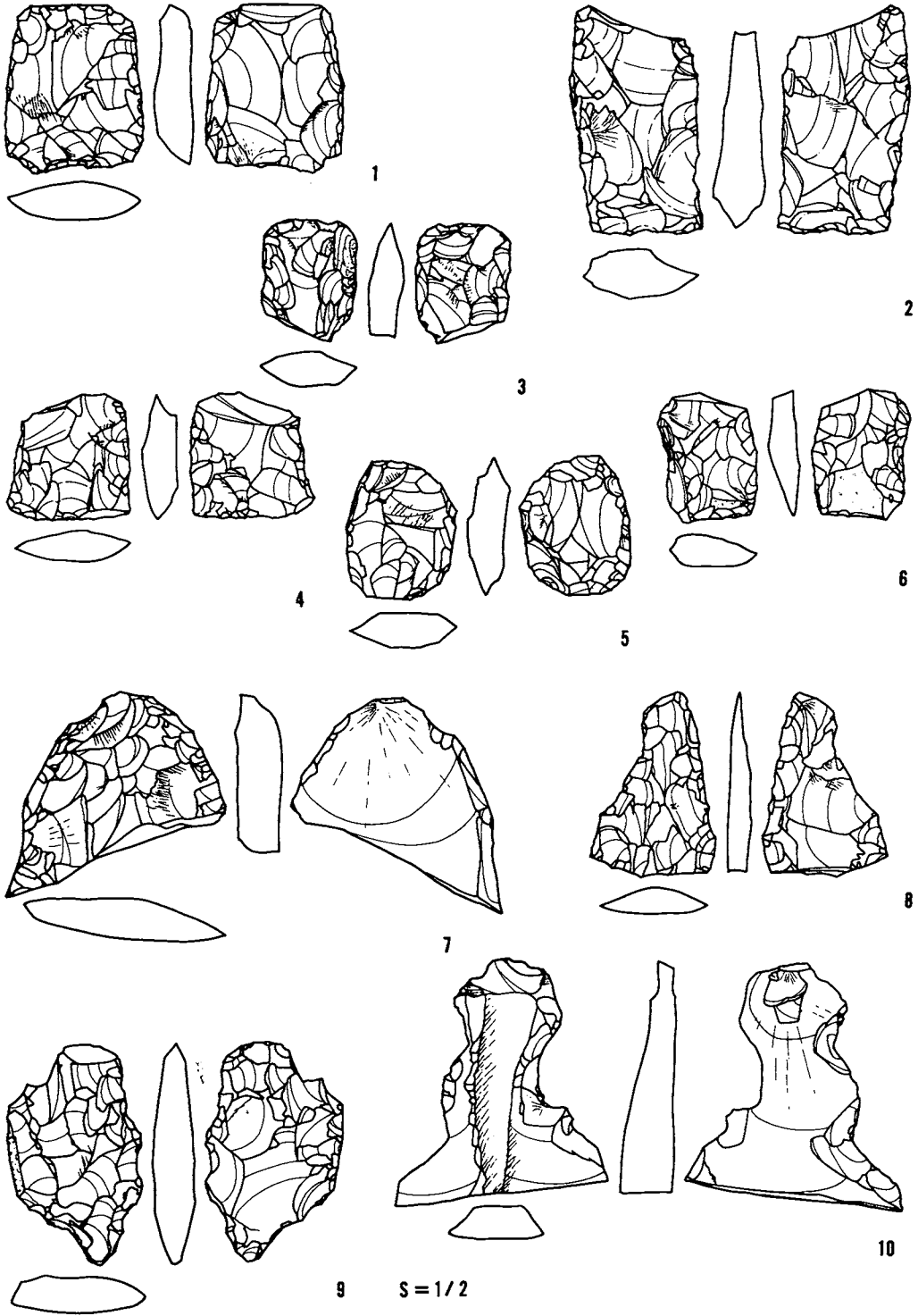




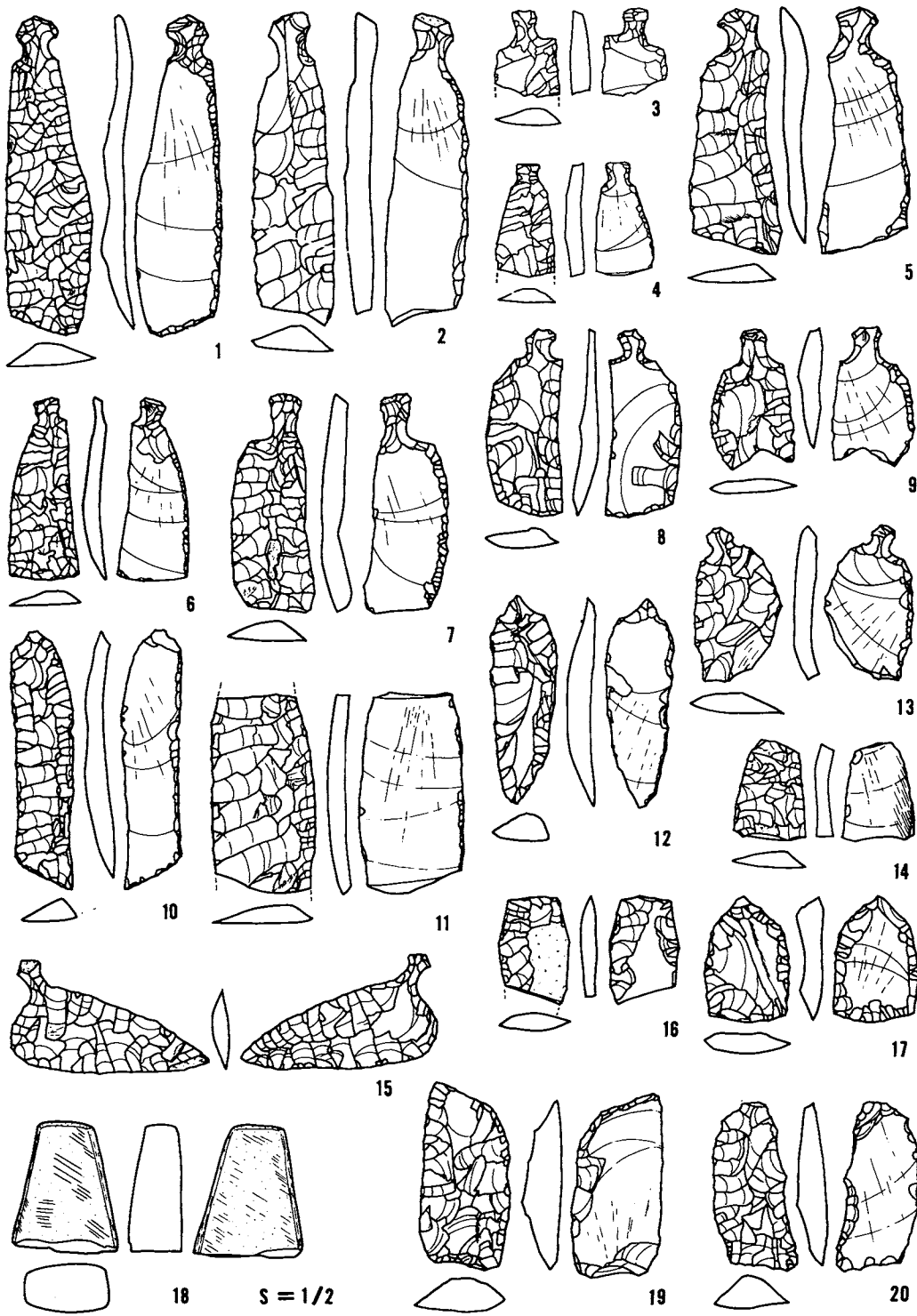
图版26 石器



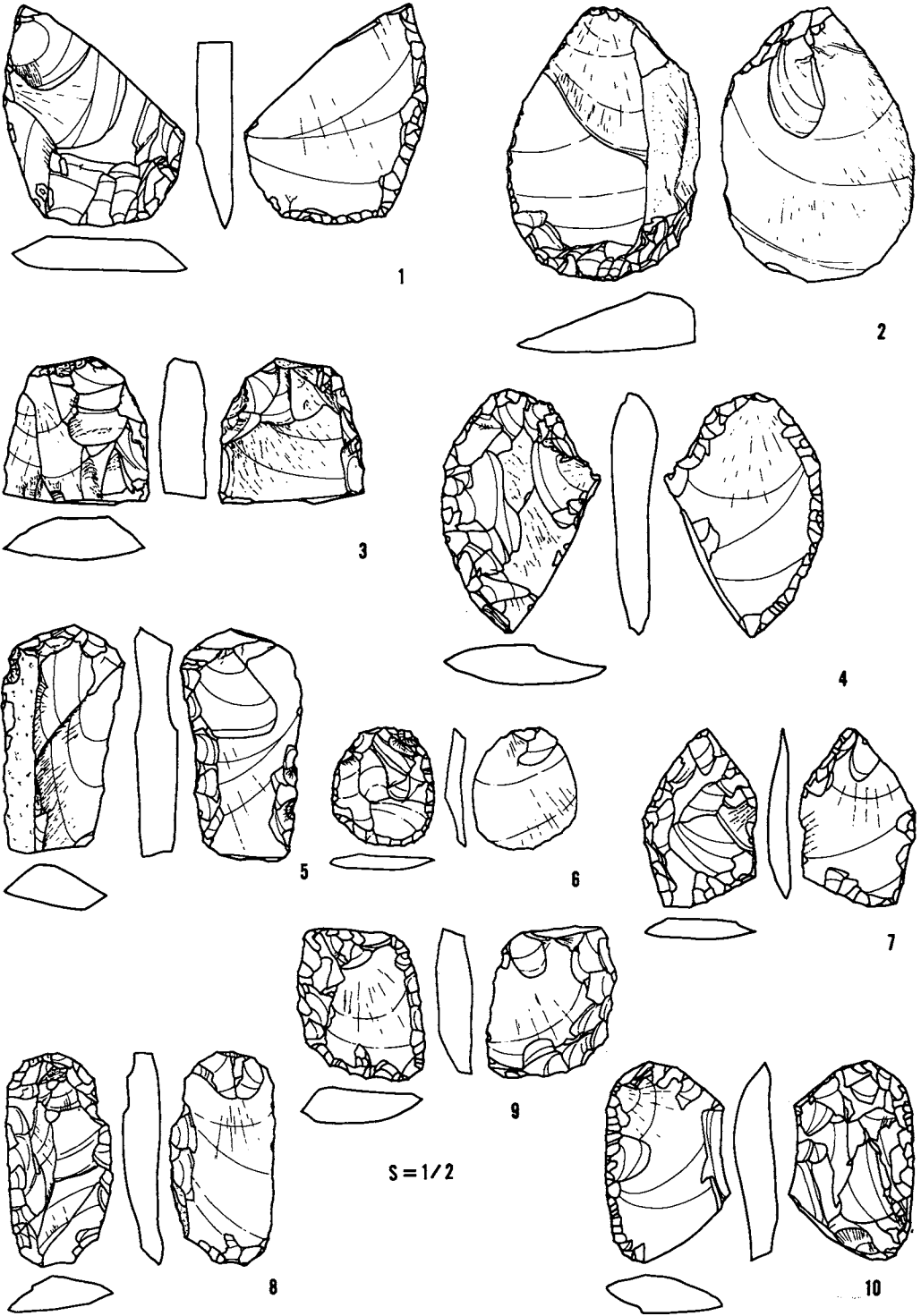
图版27 石器 2



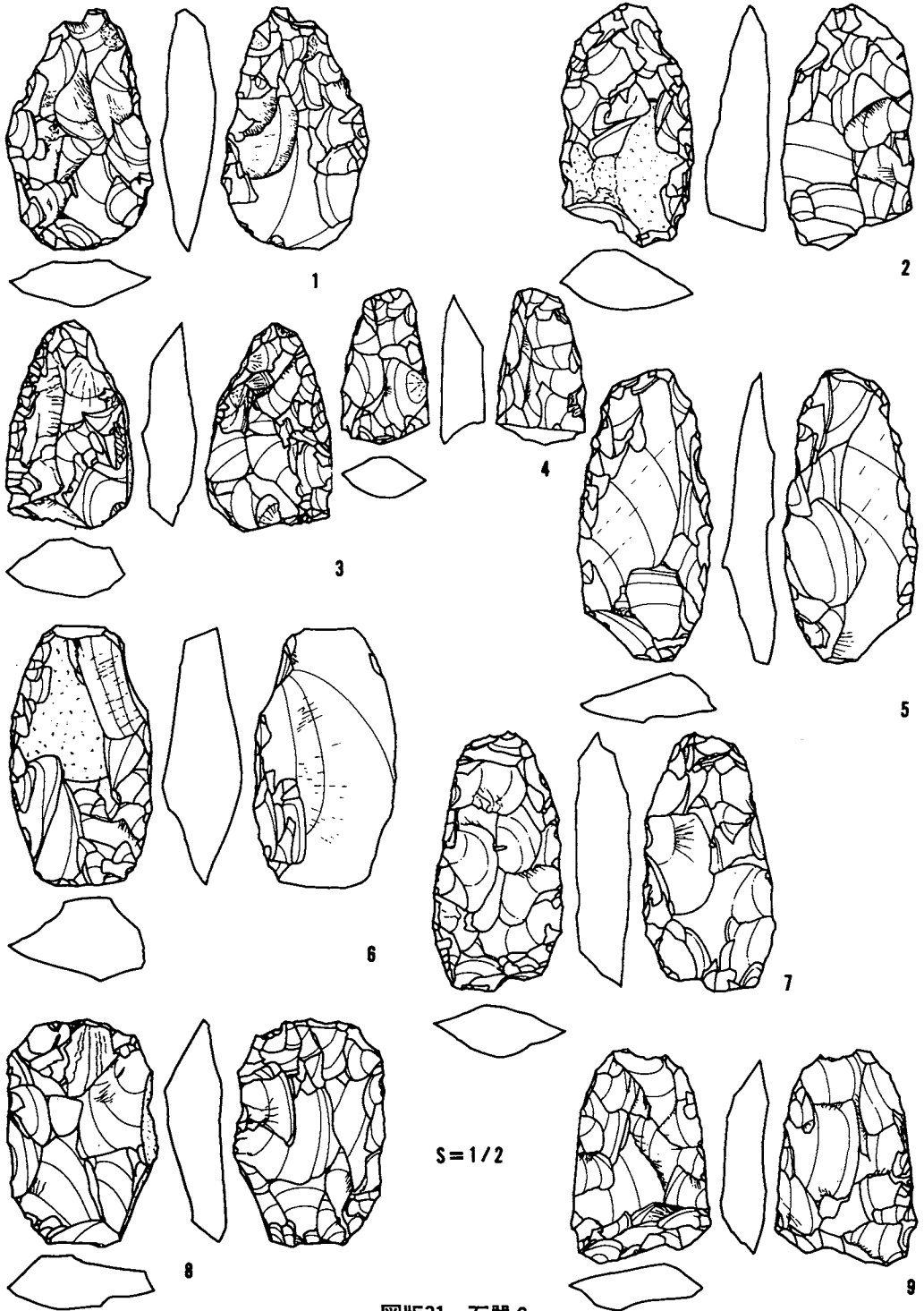
图版28 石器3



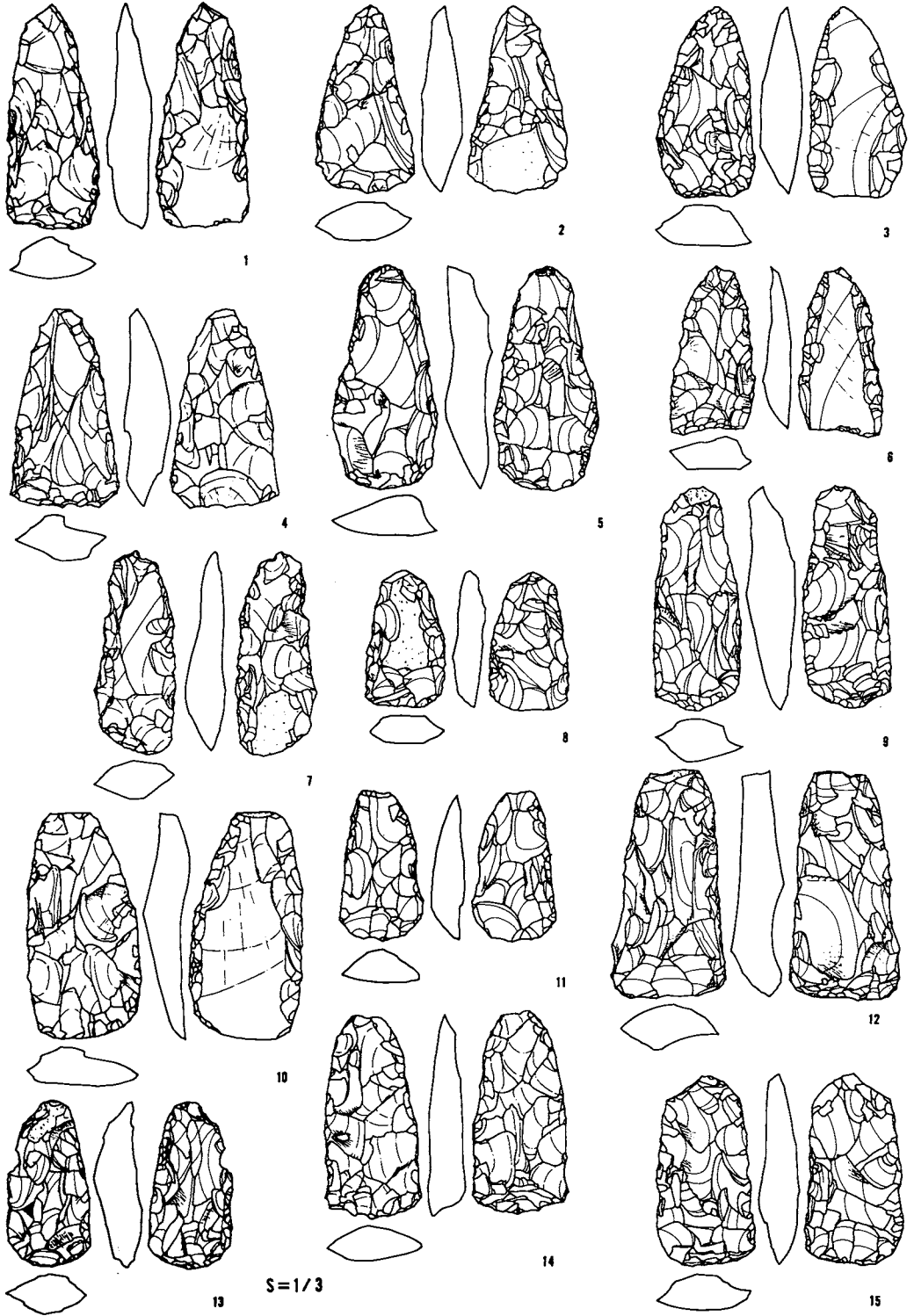
图版29 石器4



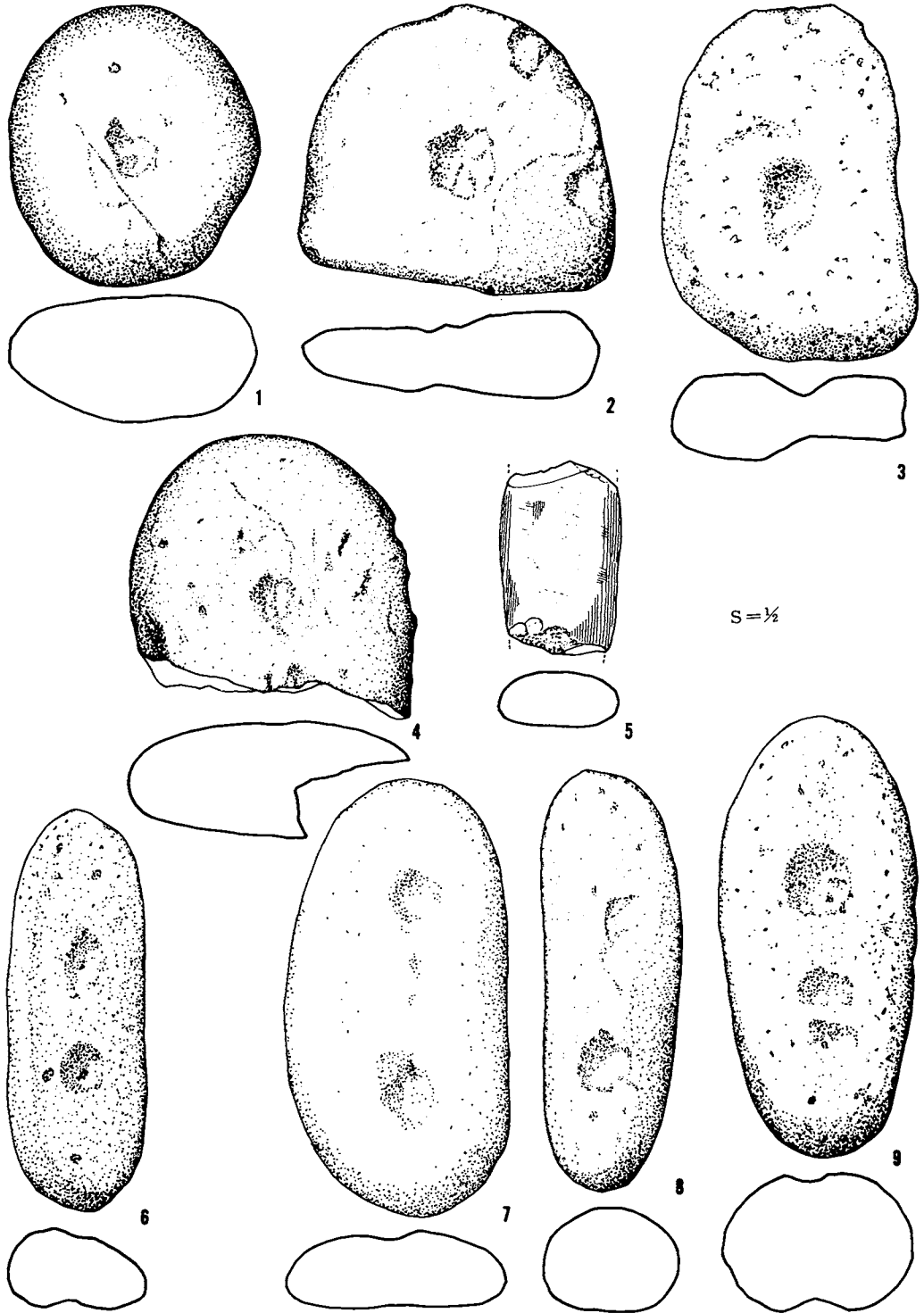
图版30石器 5



图版31 石器6

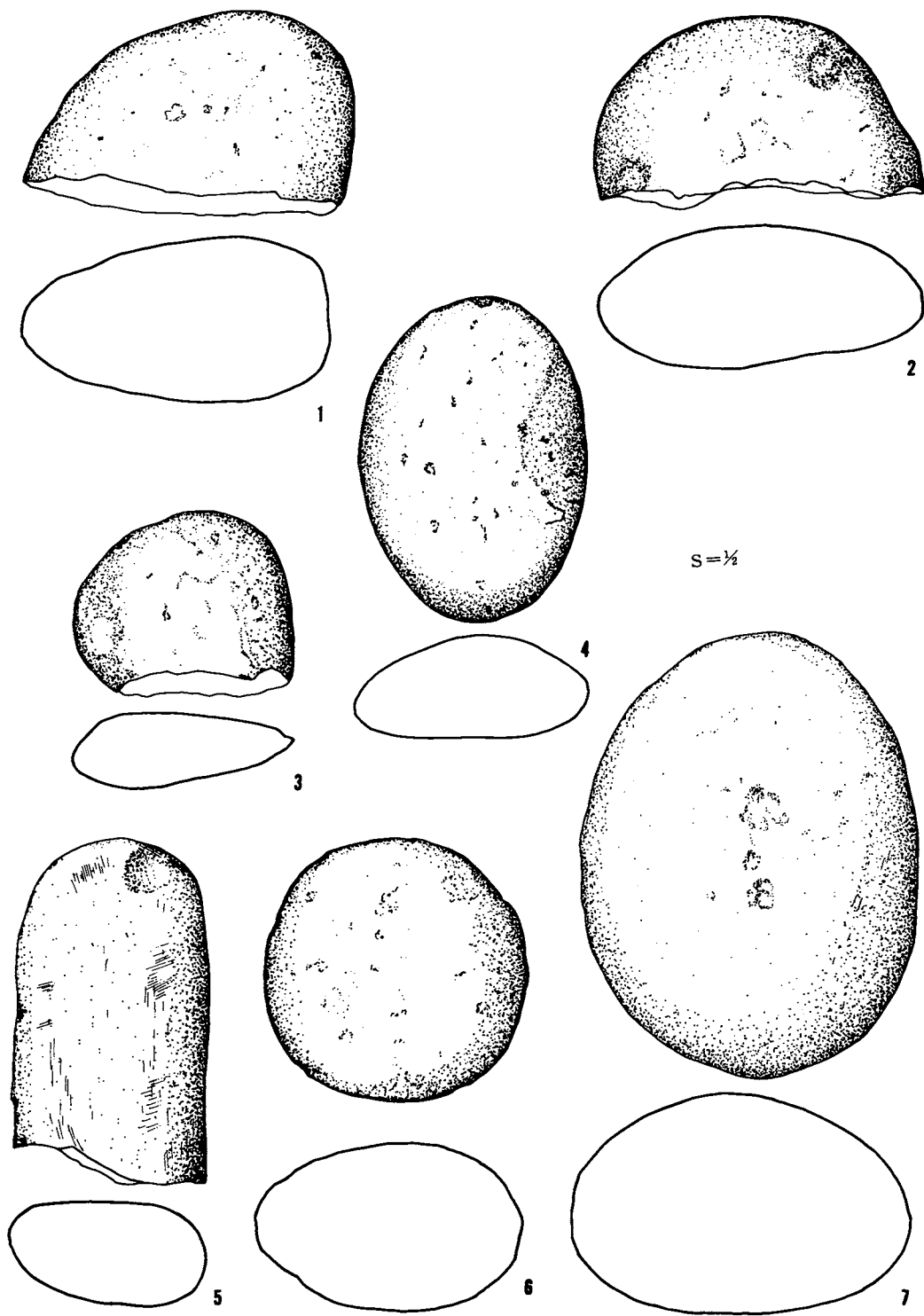


图版32 石器7

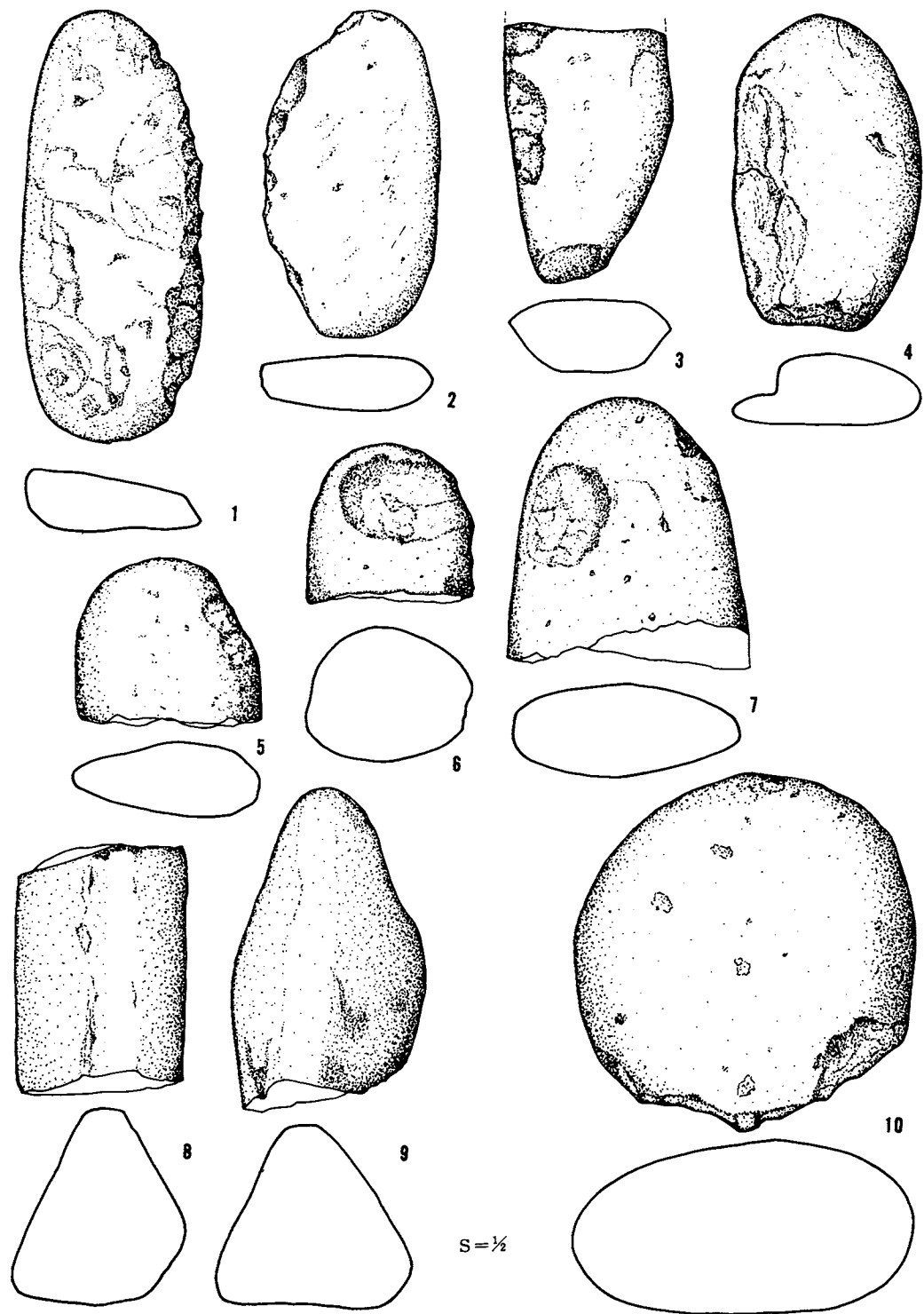


图版33 石器 8

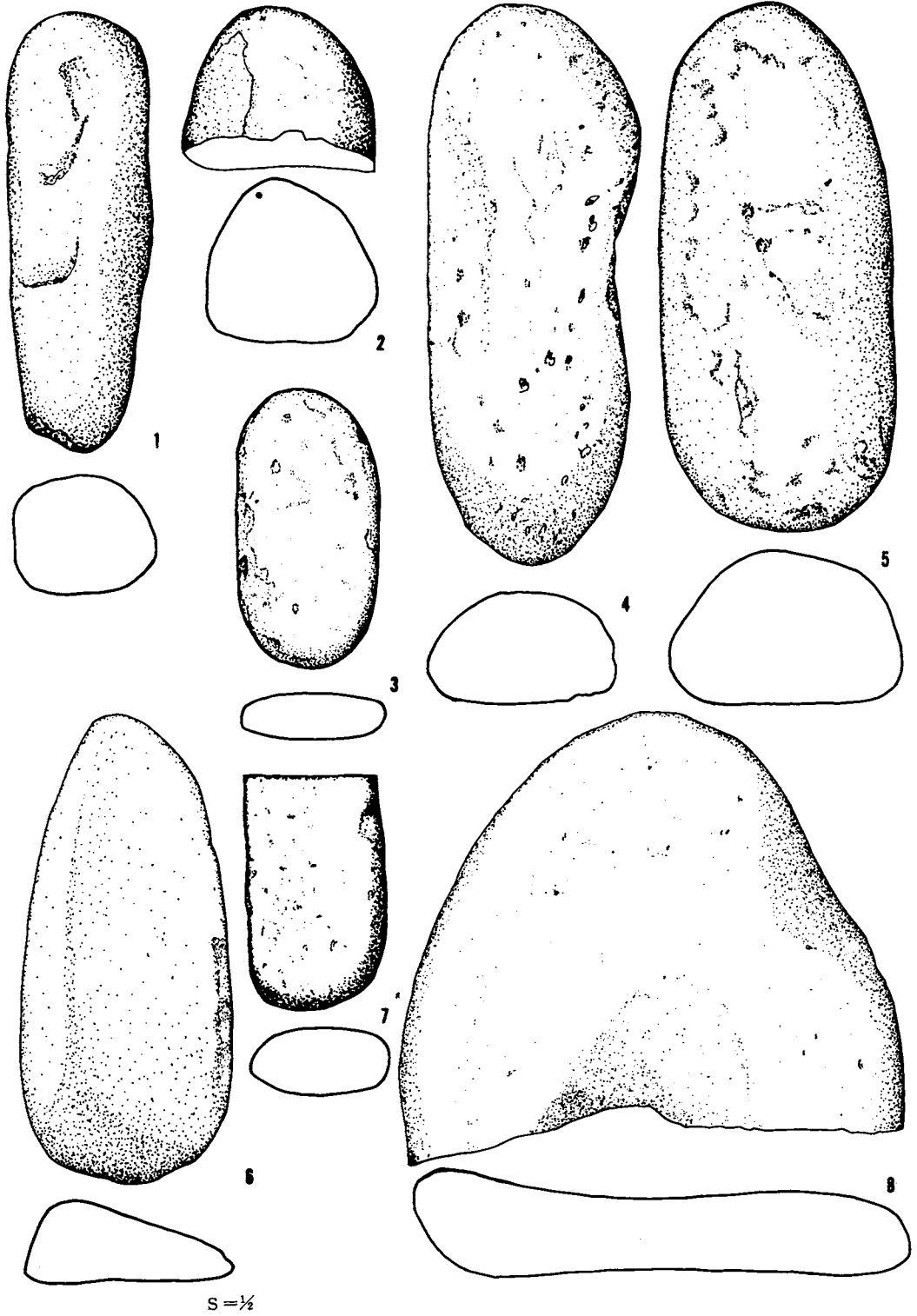




图版34 石器9

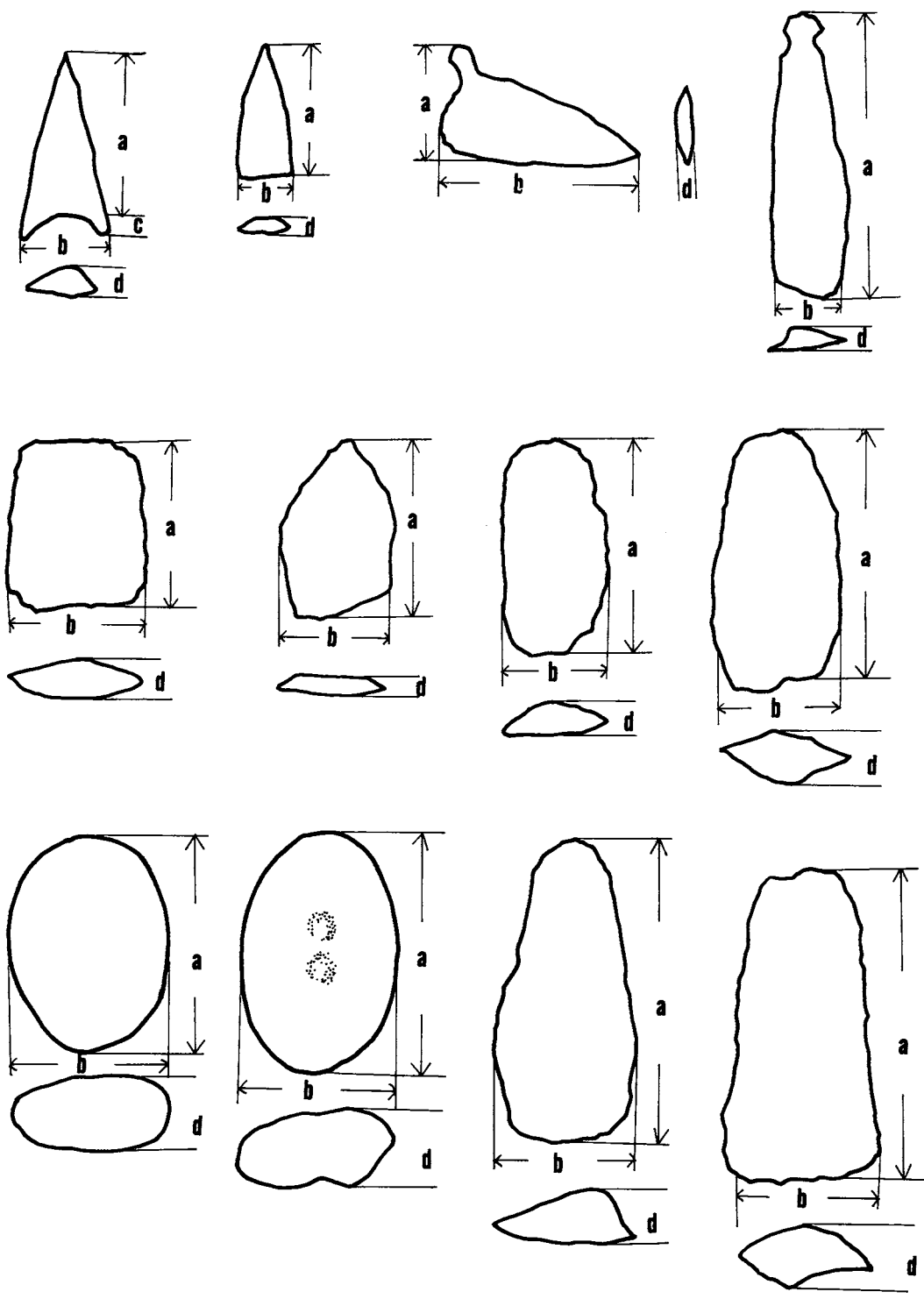


图版35 石器10



S = 1/2

图版36 石器11



图版37 石器計測位置图

図版	番号	グリット名	層位	石器計測値				重量	石質
				a (mm)	b	C	d		
26	1	A 3	3	38	19	4	6	3.3	硬質泥岩
	2	A 3	3	28	16	35	5	1.55	"
	3	A 2	3	28.5	15.5	35	45	1.45	"
	4	A 6-7	3	23	13.5	2	55	1.65	"
	5	B 5	1	28.5	14		78	2.55	"
	6	b'67	1	25.2	10.5	58	38	0.85	"
	7	A 3	2	22	11		35	0.65	黒熔岩
	8	C 6	2	23.5	12.5		4	0.95	玻璃質流紋岩
	9	A 3	3	22	17		51	1.25	"
	10	C 12	2	31	12.5		4	1.3	硬質泥岩
	11	A 3	1	21.5	11.8		4	0.75	玻璃質流紋岩
	12	O 7	2	24.5	13		35	0.85	硬質泥岩
	13	C 5	1	25.5	12		48	1.05	"
	14	B 11	2	23	13		5	1.2	硬質泥岩
	15	A 11	2	34.5	12		3	1.7	"
	16	B 10	3	22	12.5		4	1.25	"
27	1	A 23	2	67	27		9	16.3	"
	2	C 4-5	1	53	21		9	10.1	"
	3	A 2, PA-12		32.5	18		8	4.5	硬質泥岩
	4	B 14	4	47	26		4	6.45	硬質泥岩
	5			28	16		35		"
	6	A 9	4	67	38		19	3.1	"
	7	C D 6	2	35	23		6	5	"
	8	B C 5	1	46	19		7	6.75	"
	9	C 78	1	43.5	18.5		8	6.15	"
	10	a' 8	3	37.5	21.5		95	7.15	"
	11	a' b' 10	2	34	24		5	4.9	"
	12	B 2	I 住 1	46	22.5		75	6.75	"
	13	A 5	1	54	27		9	12.55	凝灰質硬質泥岩
	14	B 5	1	38	35		11	16.25	硬質泥岩
	15	A 67	3	3	38		9	9.6	"
	16	A 5	1	44	3		11	12.5	硬質泥岩
	17	C 6	3	48.5	32		13	17	"
	18	a' 9	1-5	34	28.5		75	6.2	"
28	1	D 9	3	49	41		11	28.1	"
	2	B 11	1	86.5	35		12	37.1	"
	3	B 1	住 1, PB	36	27.5		11	12.55	"
	4	B C 5	1	37	34		11	16.25	"
	5	P 201		40.5	32		11.5	15.95	"
	6	A 10	3	37	27		95	11.65	"
	7	E 12	3	43	71		13	43.4	"
	8	a' 3	1	55	37		95	14.5	"
	9	a' 67	2	67	4		13.5	33.8	"
	10	C D 6	3	71	65		16	42.48	"
29	1	A 89	2	91.5	26		7	17.3	珪質泥岩
	2	F, 12	3	95	24		8	13.5	硬質泥岩
	3	A 89	1	26.8	2		65	2.99	凝灰質硬質泥岩
	4	DE 11	3	34	18.5		5	2.98	珪質泥岩
	5	C 6	3	71.5	23		7	12.75	硬質泥岩
	6	b' 7	1	54.5	21.5		55	5.7	珪質泥岩
	7	B 13		64	24		6	11.9	"
	8	C 6	3	57	22		5	8.65	硬質泥岩
	9	A 89	2	43	24		6	6.1	"
	10	A 13		78.5	18		75	9.9	凝灰質硬質泥岩
	11	B 8	2	61	81		65	15.75	珪質泥岩

表 1 石器計測表

図版	番号	グリット名	層位	石器計測値				重量	石質
				a	b	c	d		
29	12	A 23	2	62.5	2		8	9.25	硬質泥岩
	13	B 13	2	46	28		65	9.42	"
	14	a' b' 9	3	28	2		6	3.7	"
	15	住5	1	63	27		7	9.35	珪質泥岩
	16	A 89	2	33	2		5	3.55	硬質泥岩
	17	a' 67	2	38.5	25		7	8.75	"
	18	P 191		37.5	33		18	39.05	緑色細粒玻璃質凝灰岩
	19	DE-9	2	55	28		1	15.81	硬質泥岩
20	B 7	2	52	21.5		9	9.35	"	
30	1	A 11	2	47	49		12.5	38.15	硬質泥岩
	2	住5	F	83	57		19	80.98	"
	3	A 2	I住2	42.5	42		14	30.8	"
	4	B 4	2	73.5	48		11	40.25	"
	5	C 6	3		34		13	36.2	"
	6	b' 67	1	35	32		5	6.95	"
	7	A 3	1	54	34.5		8	12.95	"
	8	C 78	1	64	32		12.5	23.2	"
	9	BC 5	1	45	37		1	21.55	"
	10	A 11	3	61	37		11	29.49	"
31	1	B 1	I住1	73.5	43		14	40.1	硬質泥岩
	2	B 9	5	73	39		19	52.9	"
	3	B L	I住1	61	38		16	36.9	"
	4	B 2	2	43	22		13	15.5	"
	5	BC-9	3	87.5	39.5		19	52.05	"
	6	E 9	2	77	43.5		23.4	70	"
	7	H		76.5	39.5		16.5	50.15	凝灰質硬質泥岩
	8	a' 67	3	68	44.5		15	53.65	硬質泥岩
	9	住5	F	65	42		12	37.85	"
32	1	B 9	5	10.3	43		18.4	72	硬質泥岩
	2	A 6	4	87	44		18.4	57.75	凝灰質硬質泥岩
	3	C 78	1	87	43.5		19	75	硬質泥岩
	4	A 5	4	91	47.5		16.5	70	凝灰質硬質泥岩
	5	E 9	3	104	46		20.5	95	硬質泥岩
	6	a' 9	3	77	38		15	45	"
	7	B 2	2	94	39		18	60	"
	8	a' 67	住6 F	64.5	33		12.4	34.8	"
	9	b' 7	1	103	41.5		20.5	80	"
	10	a' 7	2	106	51.5		15	100	"
	11	A 6	3	68.5	38		14.8	33.9	"
	12	a' 67	住6 F-5	104	53		17	115	"
	13	b 6	住6	78	35		17	51.6	"
	14	a' 6	3	94	43.5		15.5	70.45	"
	15	b' 6	F-10	88	43.5		17.4	70.5	"
33	1	DF11	2	77	73.5		38	330	アルコース砂岩
	2	B-11	2	84.5	94.5		15.5	235	流紋岩質細礫凝灰岩
	3	A 67	3	105	74		14	175	"
	4	67	住6 F	76	84.5		33	290	両輝石安山岩
	5	a' 67	3	58	35		19	60	粘板岩
	6	C 45	1	12	42		19.5	200	硬質凝灰岩
	7	A 3	3	131	66		17	310	プロビライト変朽安山岩
	8	A 1	住1	123	42		32.5	250	砂質凝灰岩
	9	E-12	2	131	27		36	450	緑色角礫凝灰岩

表2 石器計測表

図版	番号	グリット名	層位	石器計測				重量	石質
				a	b	c	d		
34	1	a'67	3	61	98		49	430	瑛安山岩
	2	a'4	1	53.5	99		42.5	330	両輝石安山岩
	3	B2	H	99	7		31.5	320	"
	4	B-2		55	66.5		25	105	"
	5	B13	I	102	57.5		3	270	砂質凝灰岩
	6	P107		81	8		49.5	410	石英安山岩
	7	A7	3	135	101		65	112.7	プロピライト変朽安山岩
35	1	H		129	54		19.5	210	両輝石安山岩
	2	B-11	4	101	51		19.5	145	プロピライト変朽安山岩
	3	A8	3	76	53		21.5	140	"
	4	B-5	3	94	51		22	160	"
	5	B2	住1	49	57		22.5	80	"
	6	B1	住1, PB	44	5		4	110	石英安山岩
	7	b'-4	H	78.5	72		28	245	両輝石安山岩
	8	A67	3	78	65		42.5	375	硬砂岩
	9	A67	2	89	58		52	395	両輝石安山岩
	10	A7	4	103	108		52	840	両輝石安山岩
36	1	A13	3	136	45		37	390	両輝石安山岩
	2	A29	2	37	59.5		52	180	プロピライト変朽安山岩
	3	67	6F	172	67		36.5	660	石英安山岩
	4	B1	住1-S	163	72		68	910	両輝石安山岩
	5	A-11	4	86.5	44.5		14.8	100	硬砂岩
	6	A6	3	143	63.5		27.5	290	プロピライト変朽安山岩
	7	A2	住1PA12	71	43		21.5	120	プロピライト変朽安山岩
	8	P109		128	153		23	890	プロピライト変朽安山岩

表3 石器計測表

## VI 結 語

以上、下猿田 I 遺跡より検出された遺構、遺物について述べたが、本遺跡は縄文早期より晩期に至る土器を出土した。検出された遺構では住居址、土坑等はその伴出遺物より推定して縄文後期の時期のものと考えられるものばかりで、他の時期に属すると思われるものは、はっきりしない状態である。土坑、焼土等についても、いずれも時期不明のものが多く検出されている。また時期不明の建物址と思われる柱穴列も検出されたが、全体の規模を把握することはできなかった。

なお、最後になりましたが、調査中及び報告書作成のための遺物実測、写真撮影、図版トレースなどを下記の人々に御協力いただいた。記して感謝いたします。

発掘調査に御協力いただいた方々。

瀬川与四蔵 泉川三郎 瀬川伯人 森下仁太郎 泉川道三 泉川清治 高橋秀代 瀬川エイ子 泉川スギノ 瀬川敬子 瀬川トミエ 村上ツギ 高橋フジ 高橋ミサ 高橋ハル 高橋ミヨ子 高橋リン 高橋ツギ 村上アイ子 瀬川ハナ 瀬川イマ

報告書作成に御協力いただいた方々

高橋ミヨ子 佐々木美耶子 瀬川クニ 川口エミ子 大久保隆 高橋ヒデ 附田チャ 菅原キシ子



# 写真図版



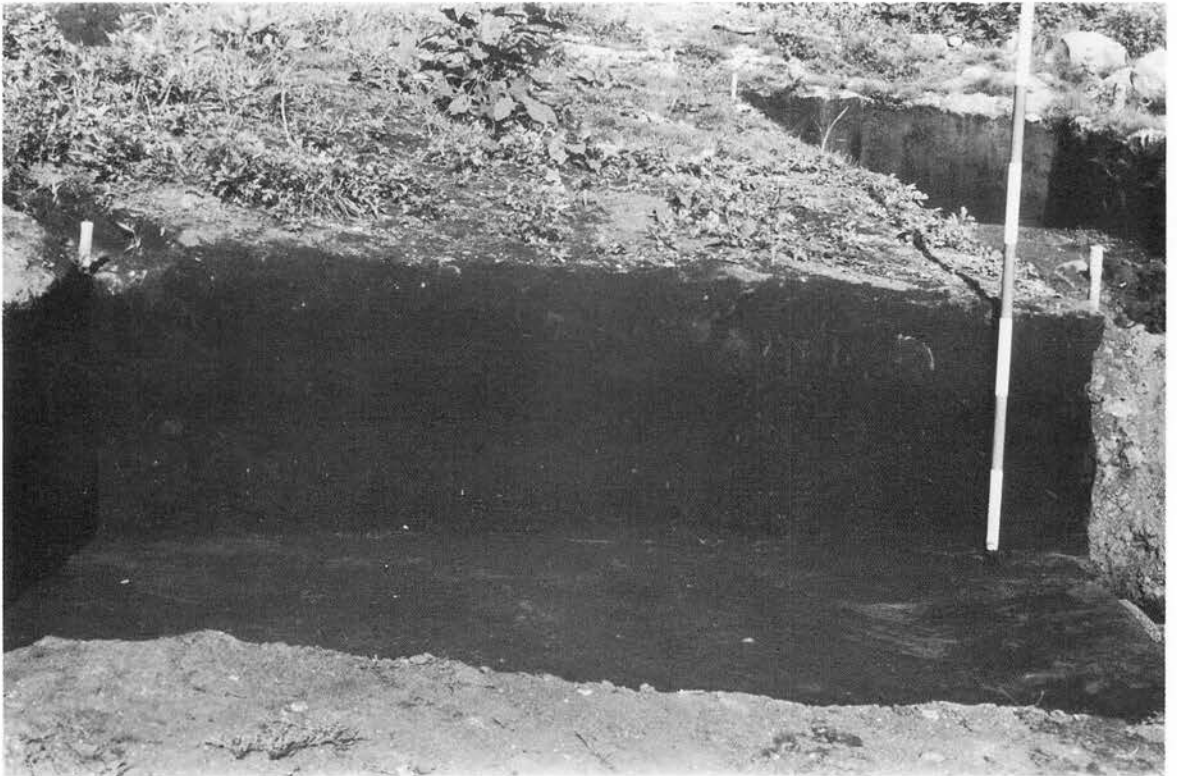
a 遺跡遠景 東より



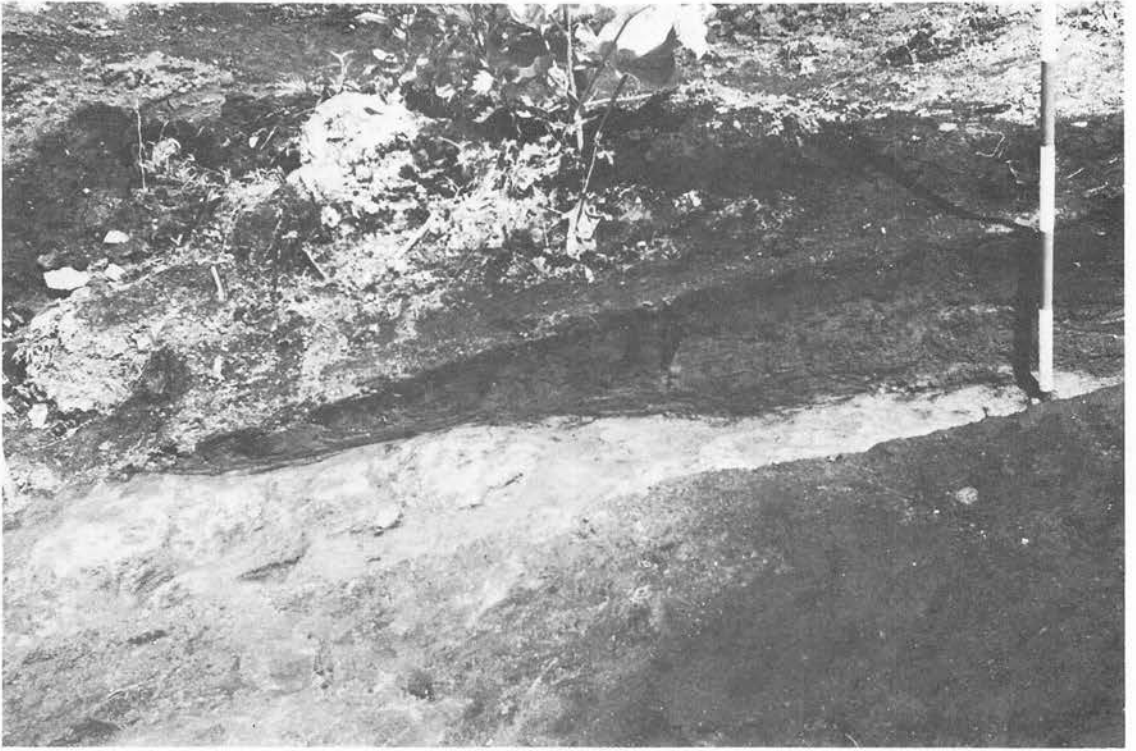
b 遺跡遠景 南より  
写真図版 1



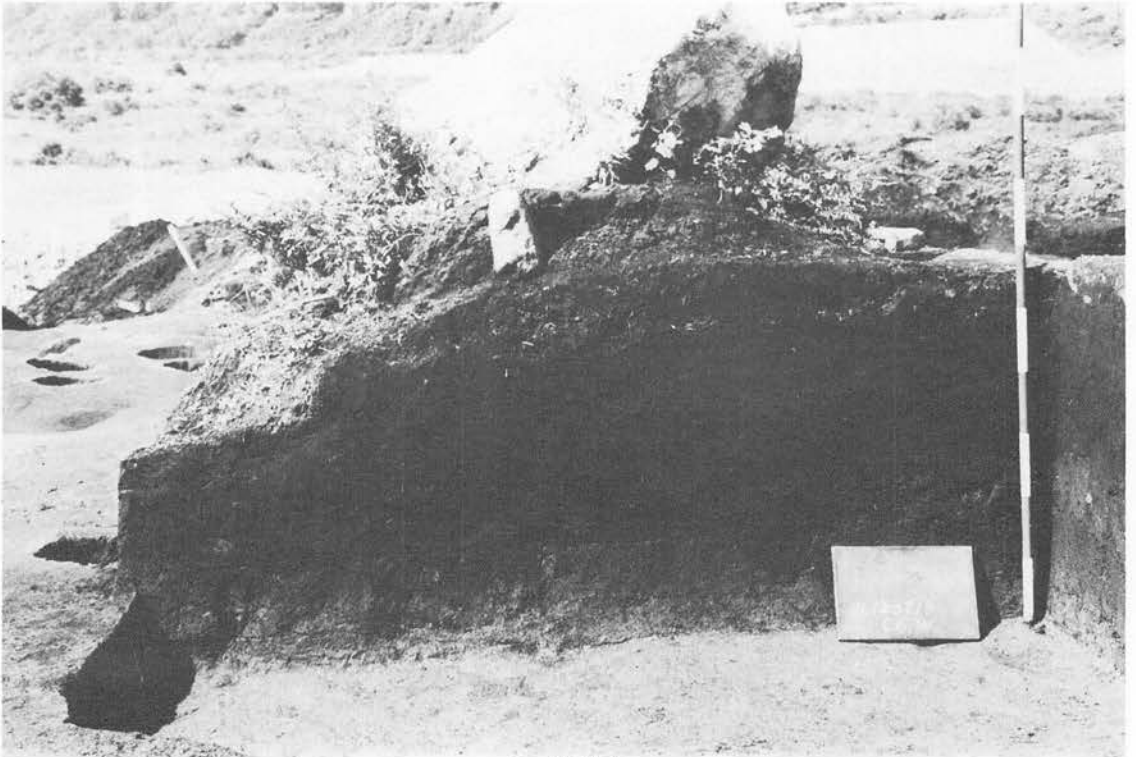
a 遺跡近景 東より



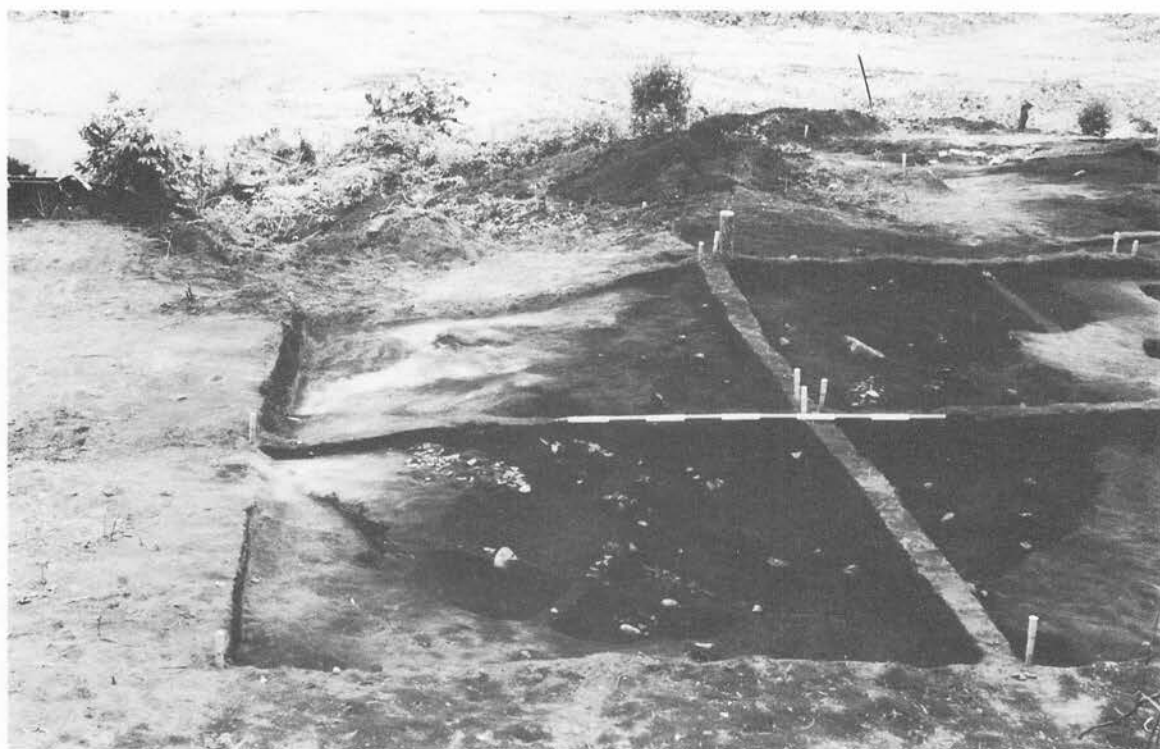
b 土層 1  
写真図版 2



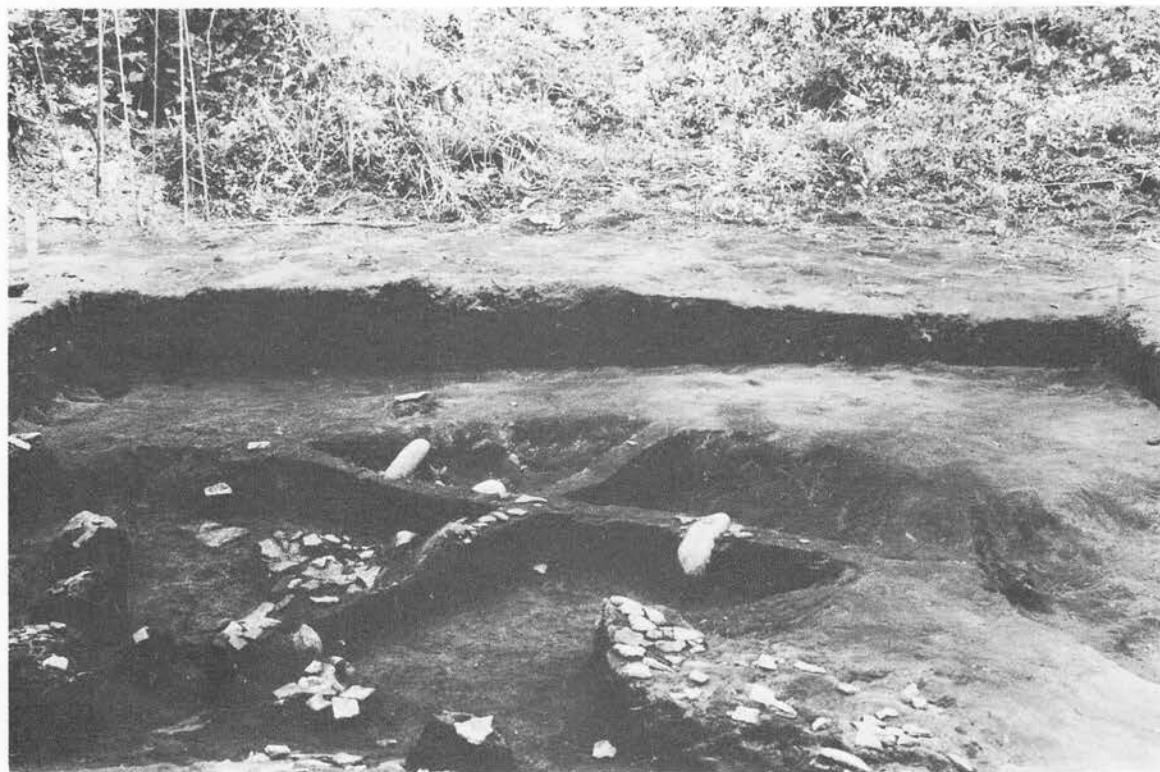
a 土層 2



b 土層 3  
写真図版 3



a B1.2 住居址検出状況 東から



b B1.2 住居址 北から  
写真図版 4

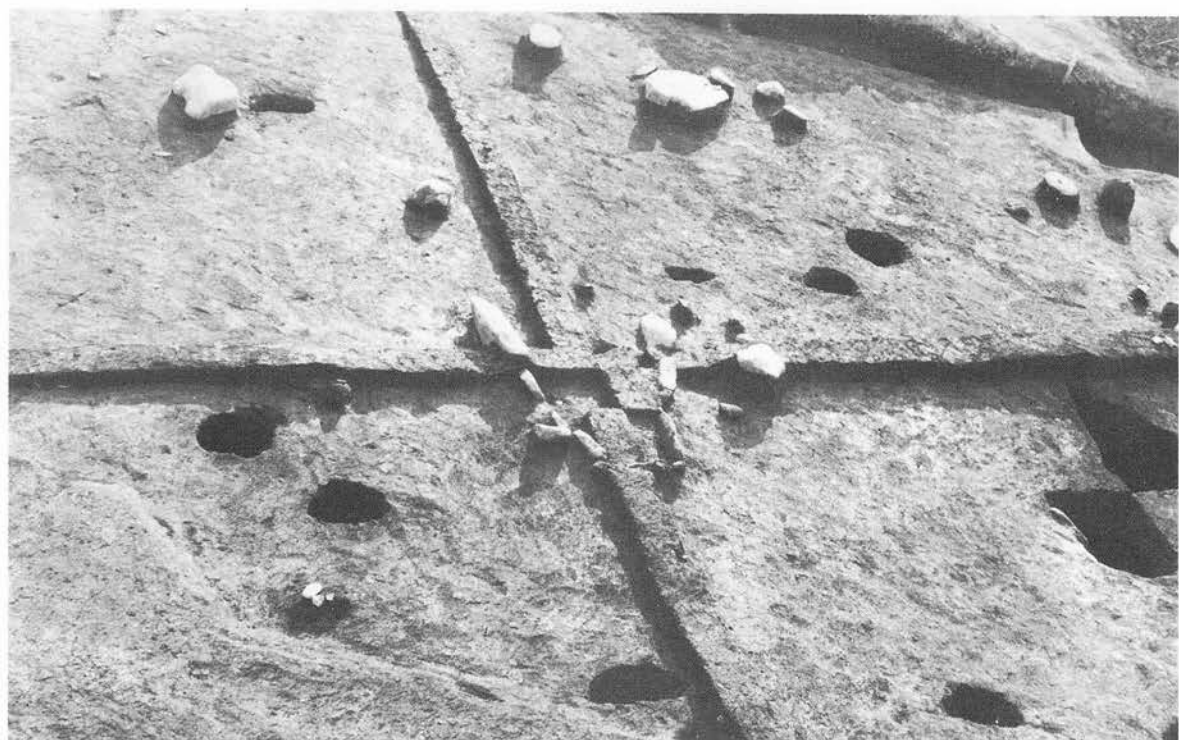




a A-13 住居址検出状況 北から



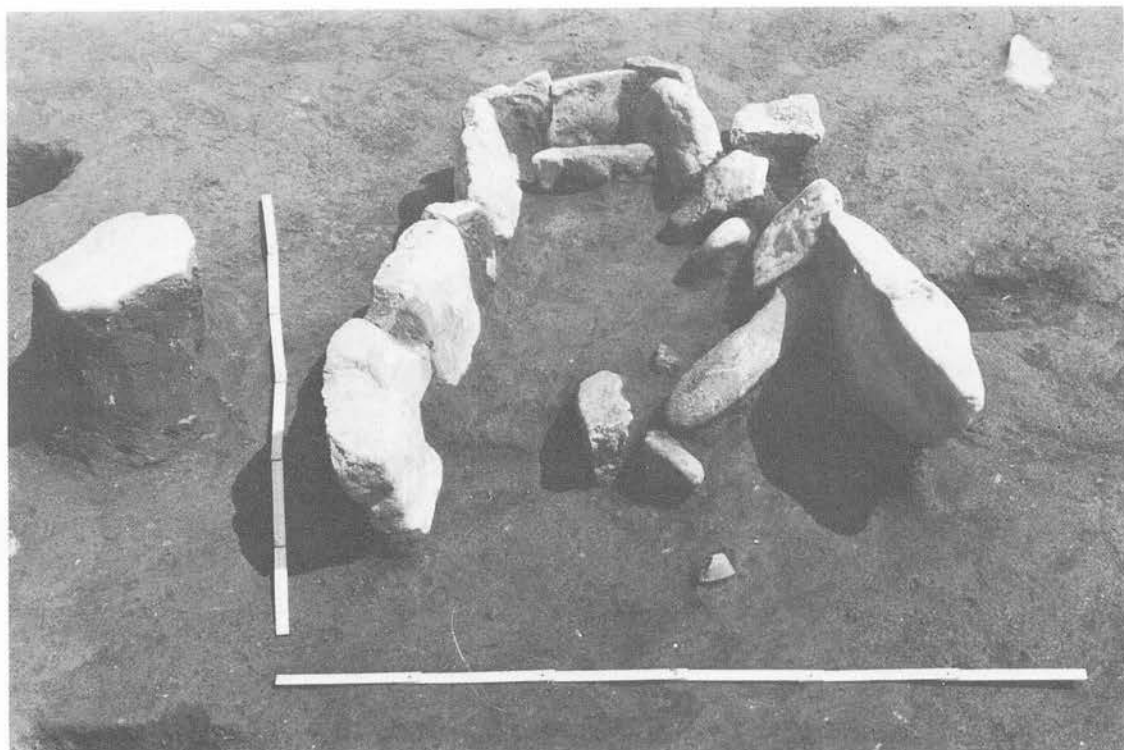
b A-13 住居址完掘 北から  
写真図版 5



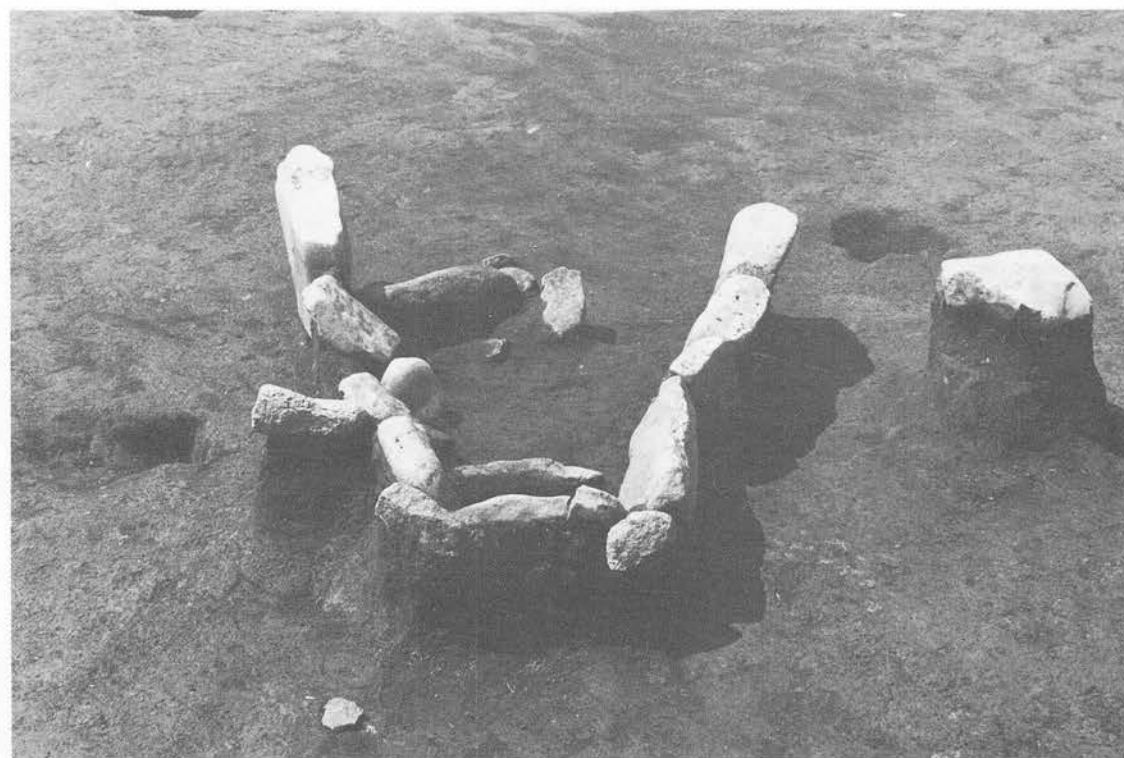
a A-6.7 住居址完掘



b 4-6.7 住居址炉  
写真図版 6

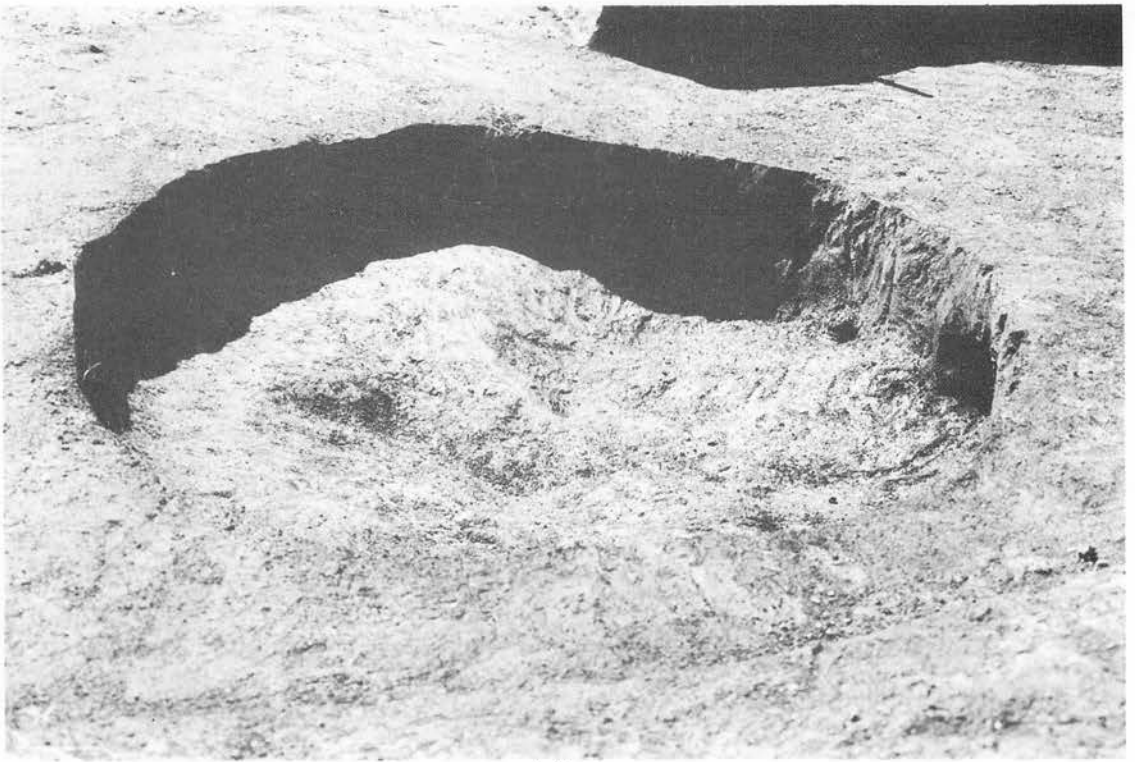


a A-6.7 住居址炉 1

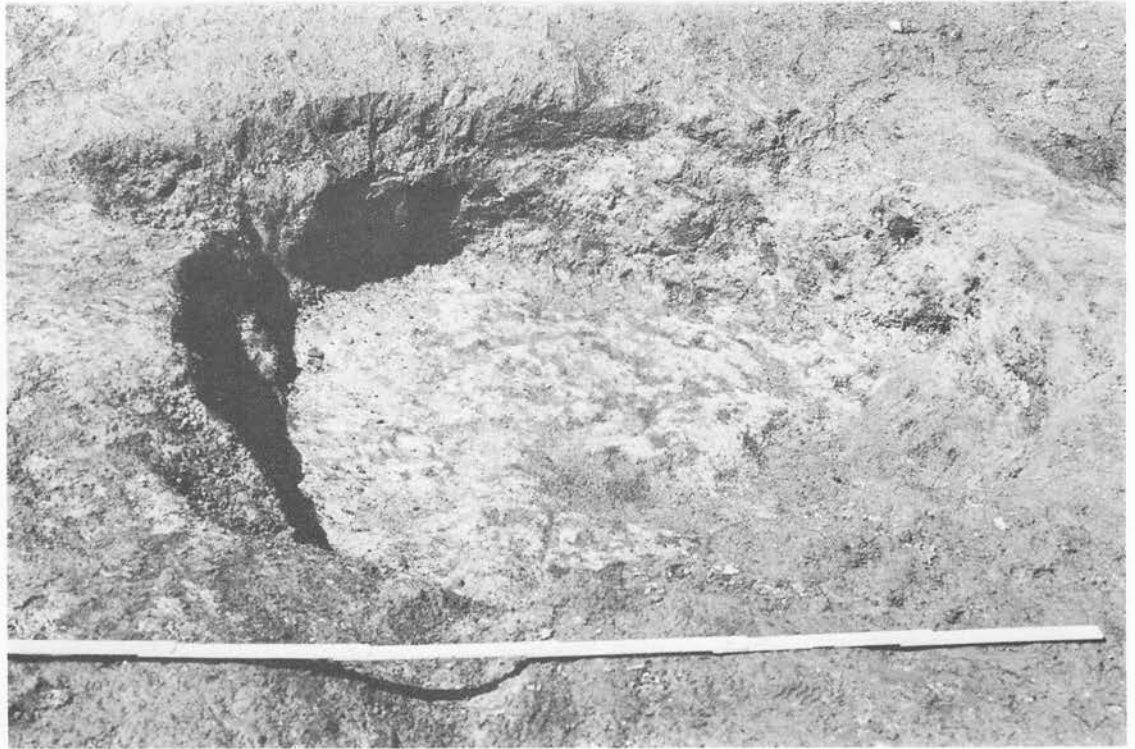


b A-6.7 住居址炉 2  
写真図版 7

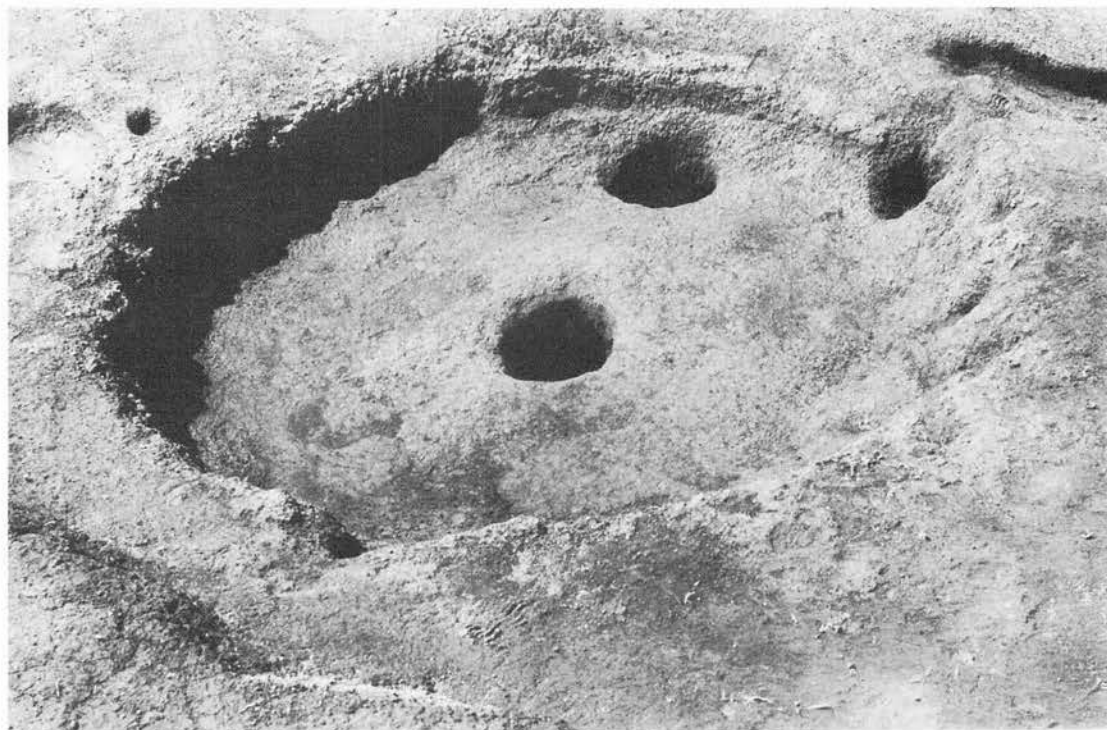




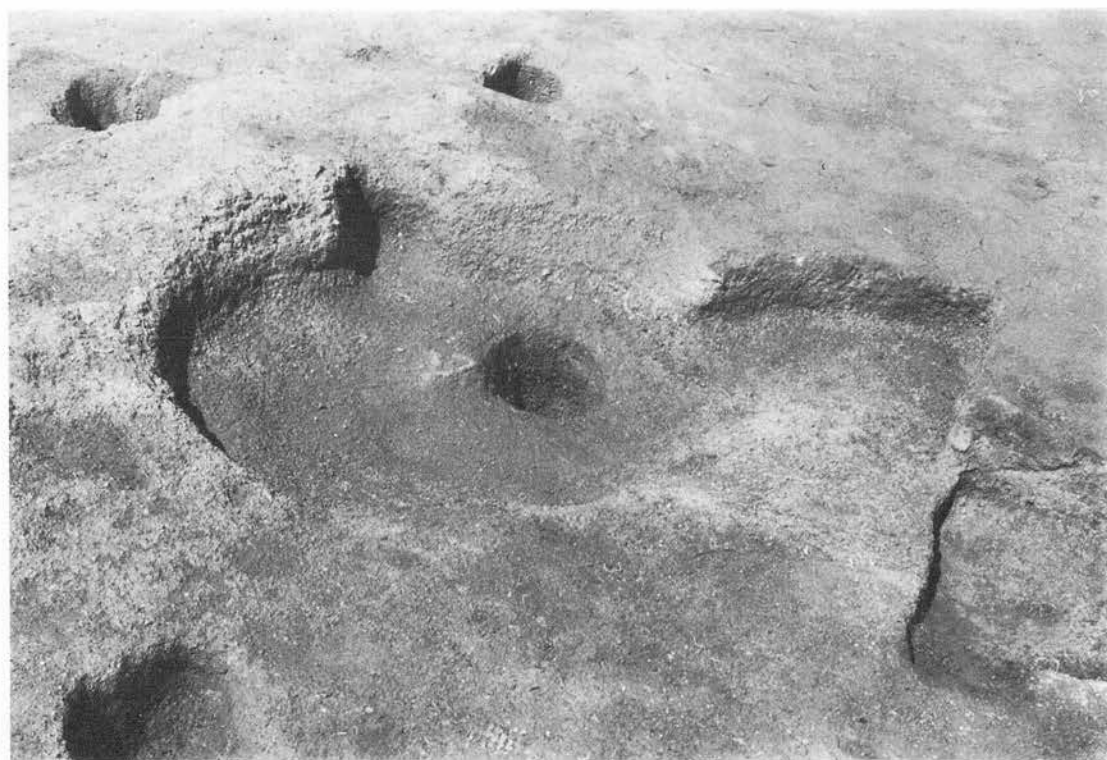
a 土塚 1



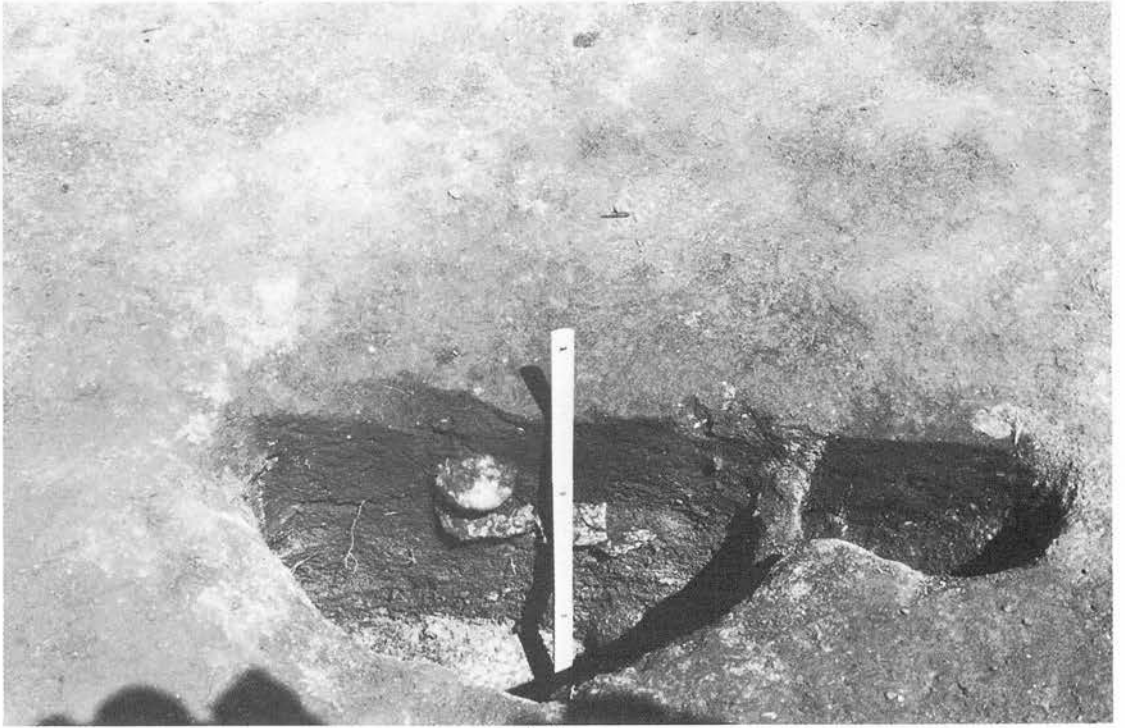
b 土塚 2  
写真図版 8



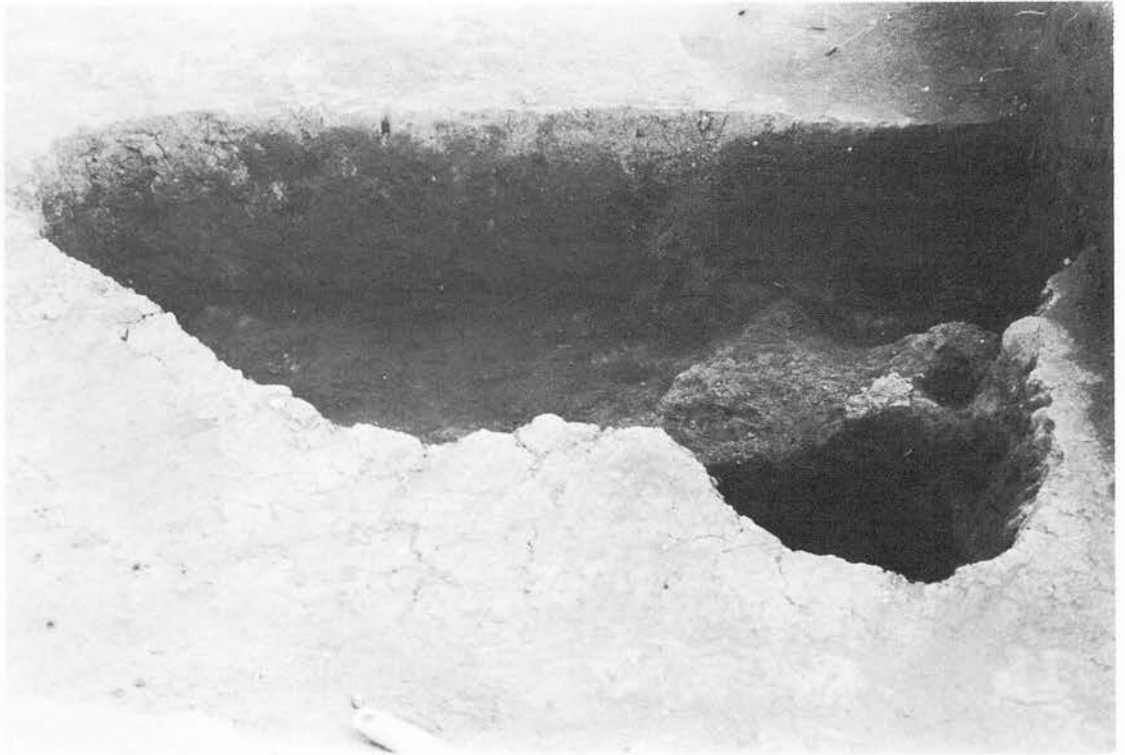
a 土塚 3



b 土塚 4  
写真図版 9



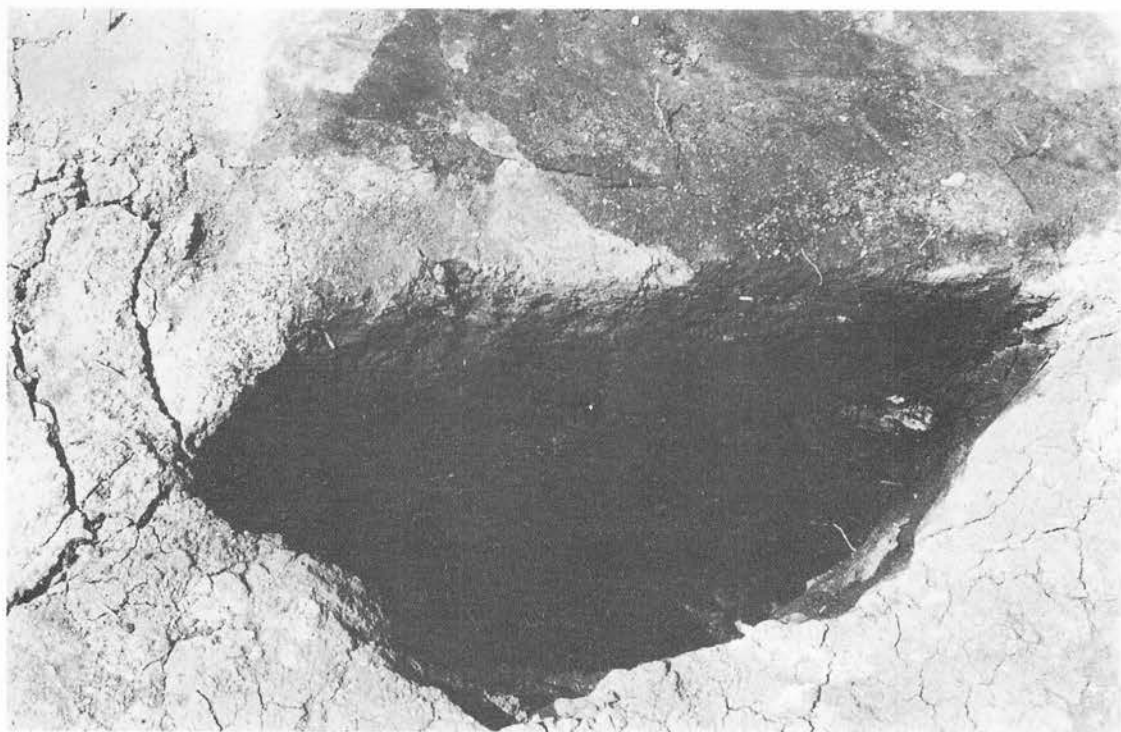
a 土塚5



b 土塚6  
写真図版10

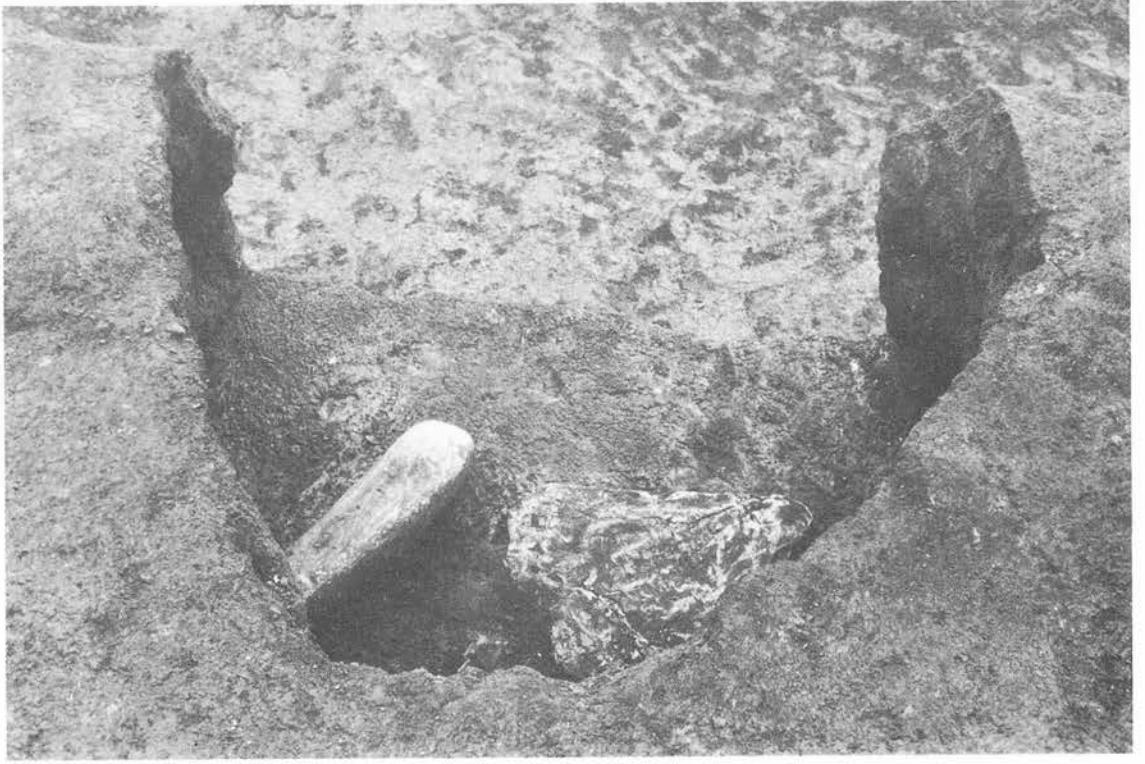


a 土坑 7

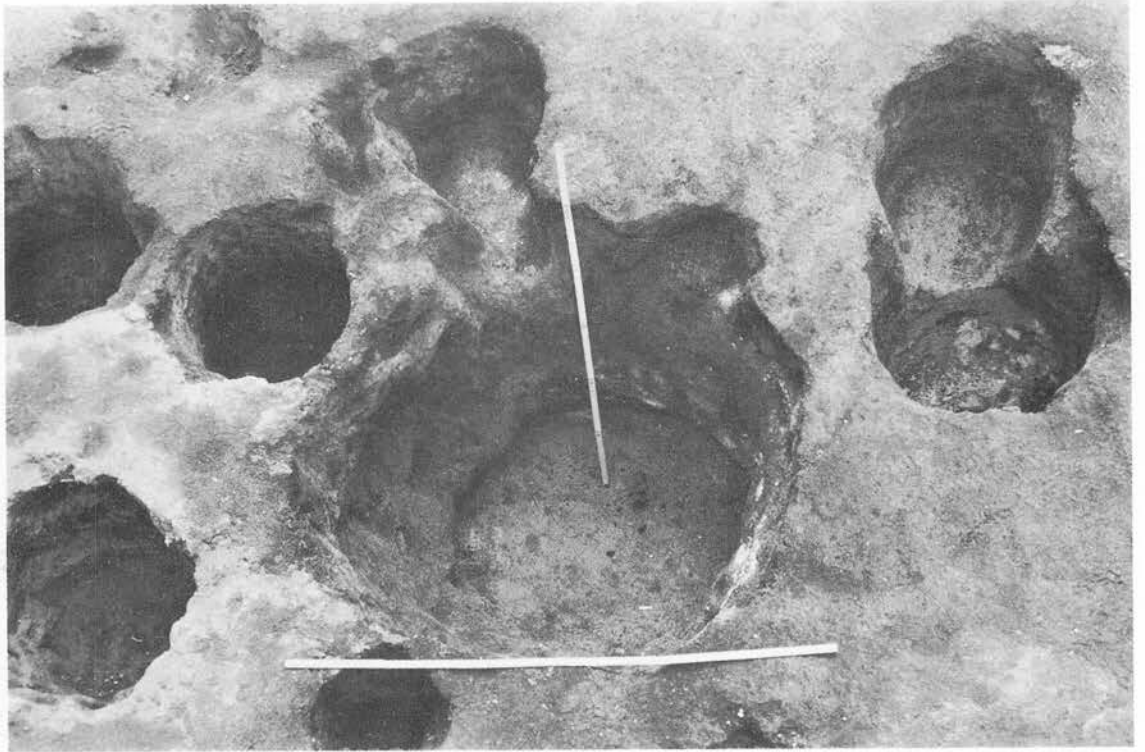


b 土坑 8  
写真图版 11

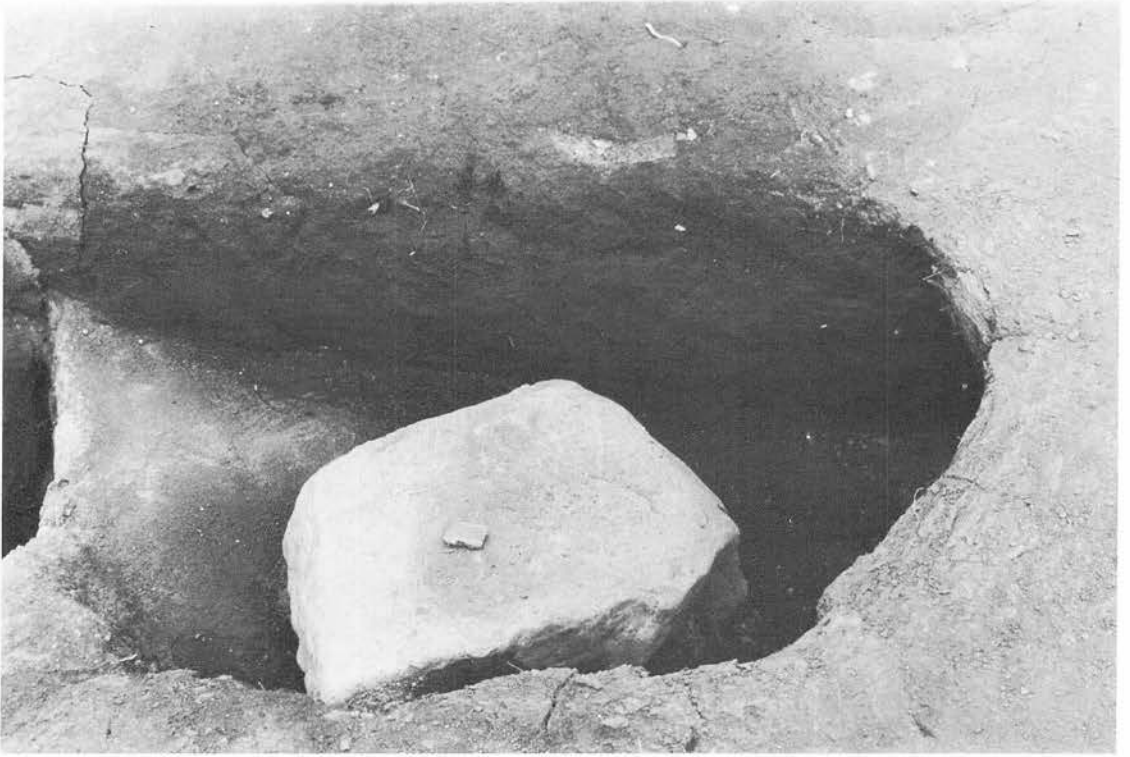




a 土坑9



b 土坑10  
写真图版12



a 土城11



b 烧土  
写真图版13



a A-13 住居址遺物出土状況



b A-13 グリッド遺物出土状況  
写真図版14



a 遺物出土状況 1

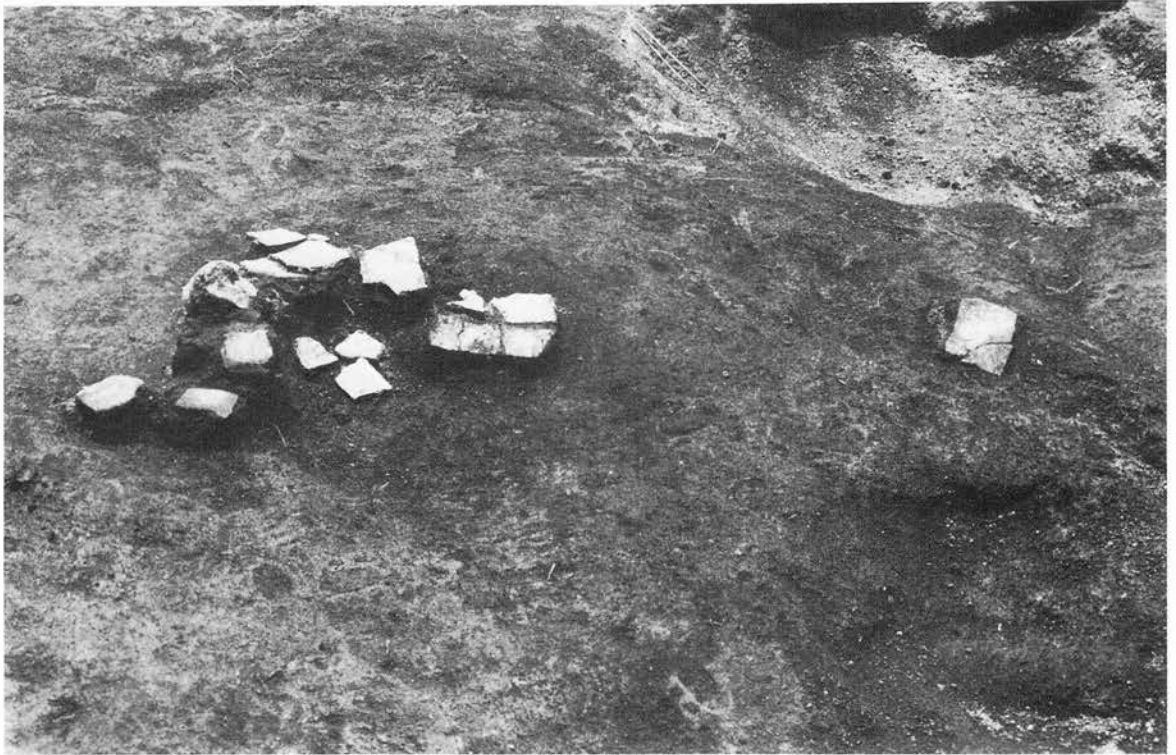


b 土坂検出状況 2  
写真図版 15

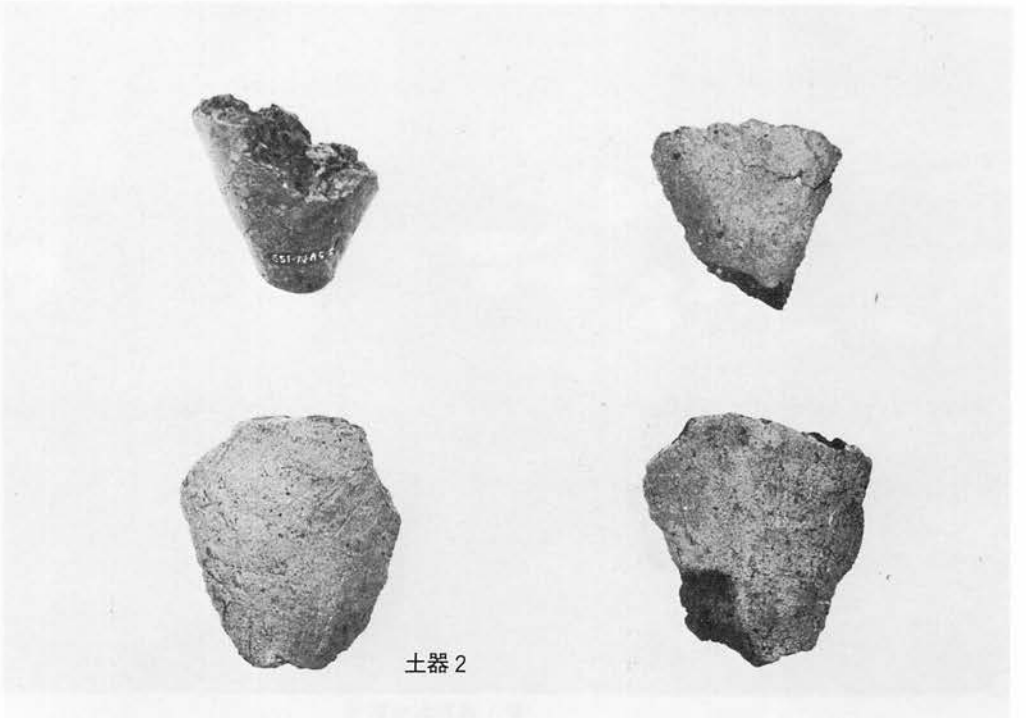
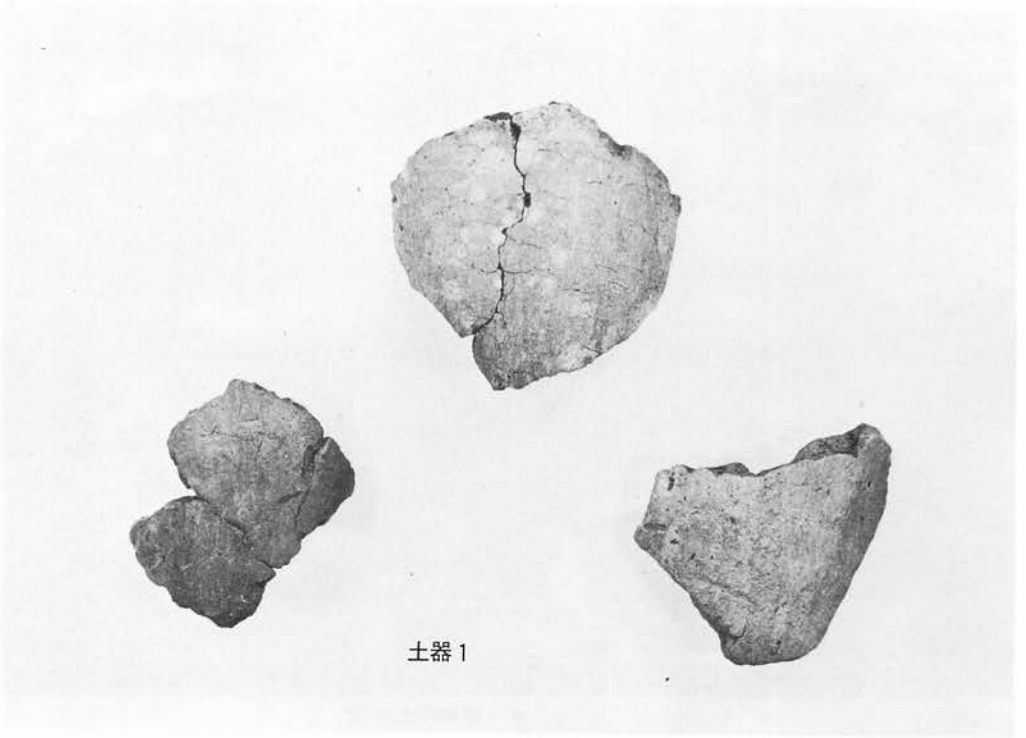




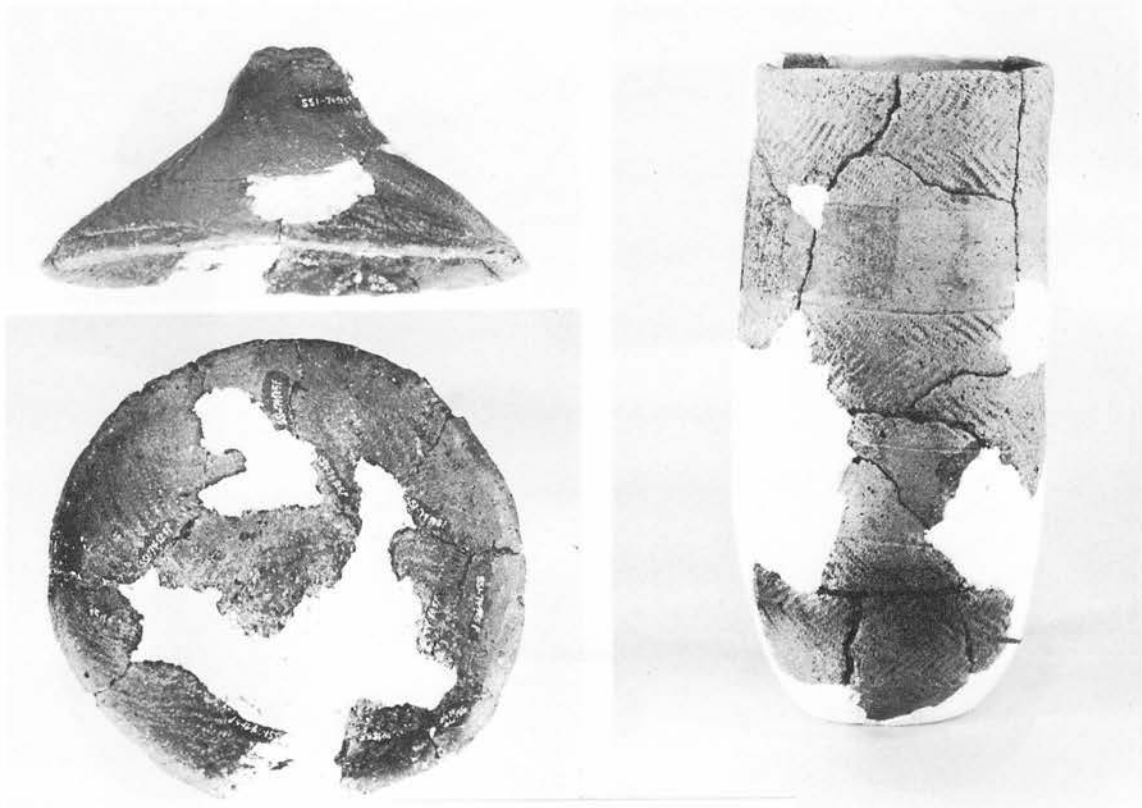
a 遺物出土状況



b 遺物出土状況  
写真図版16



写真図版17



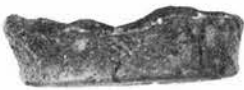
S=1/2



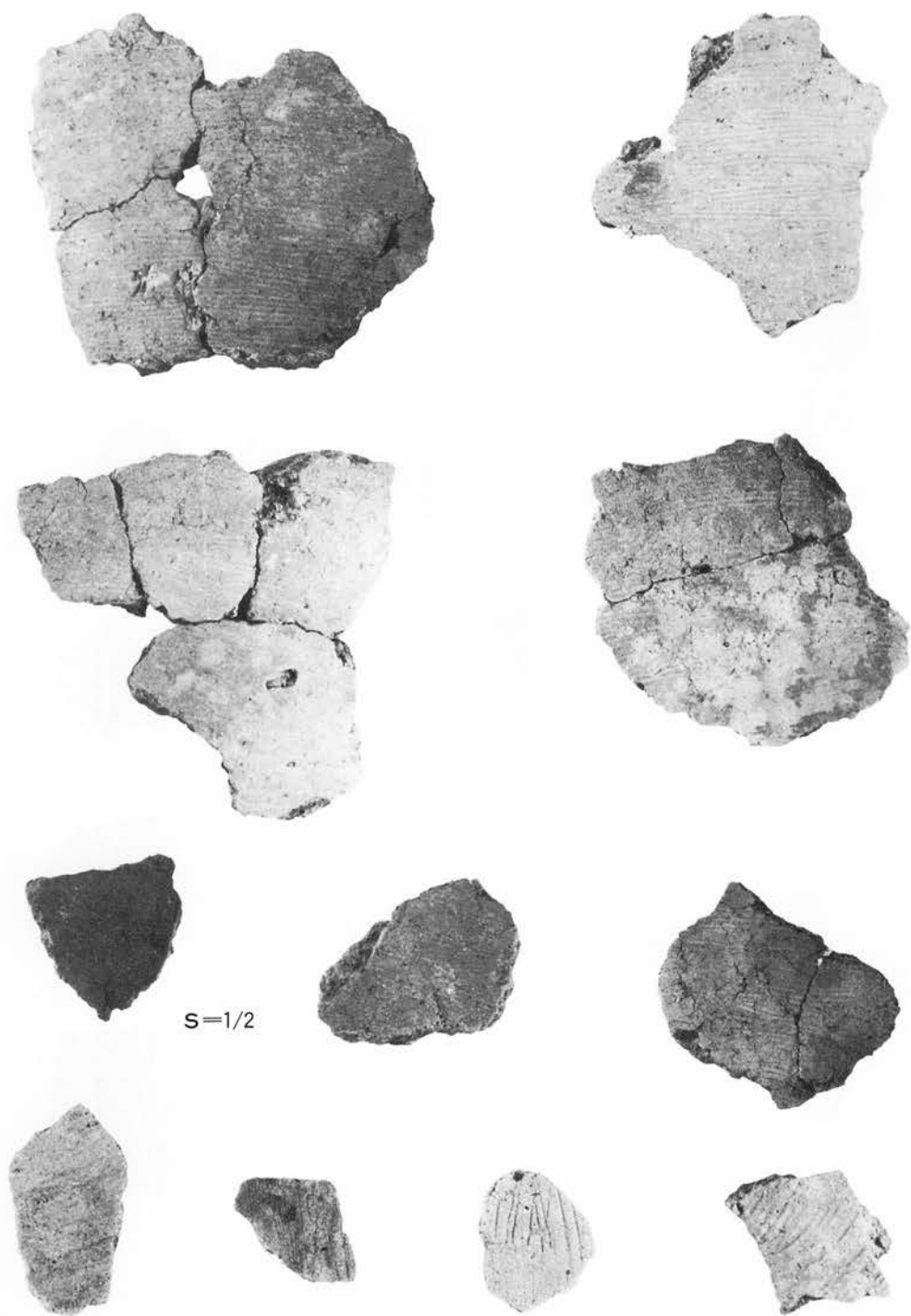
写真図版18 土器 3



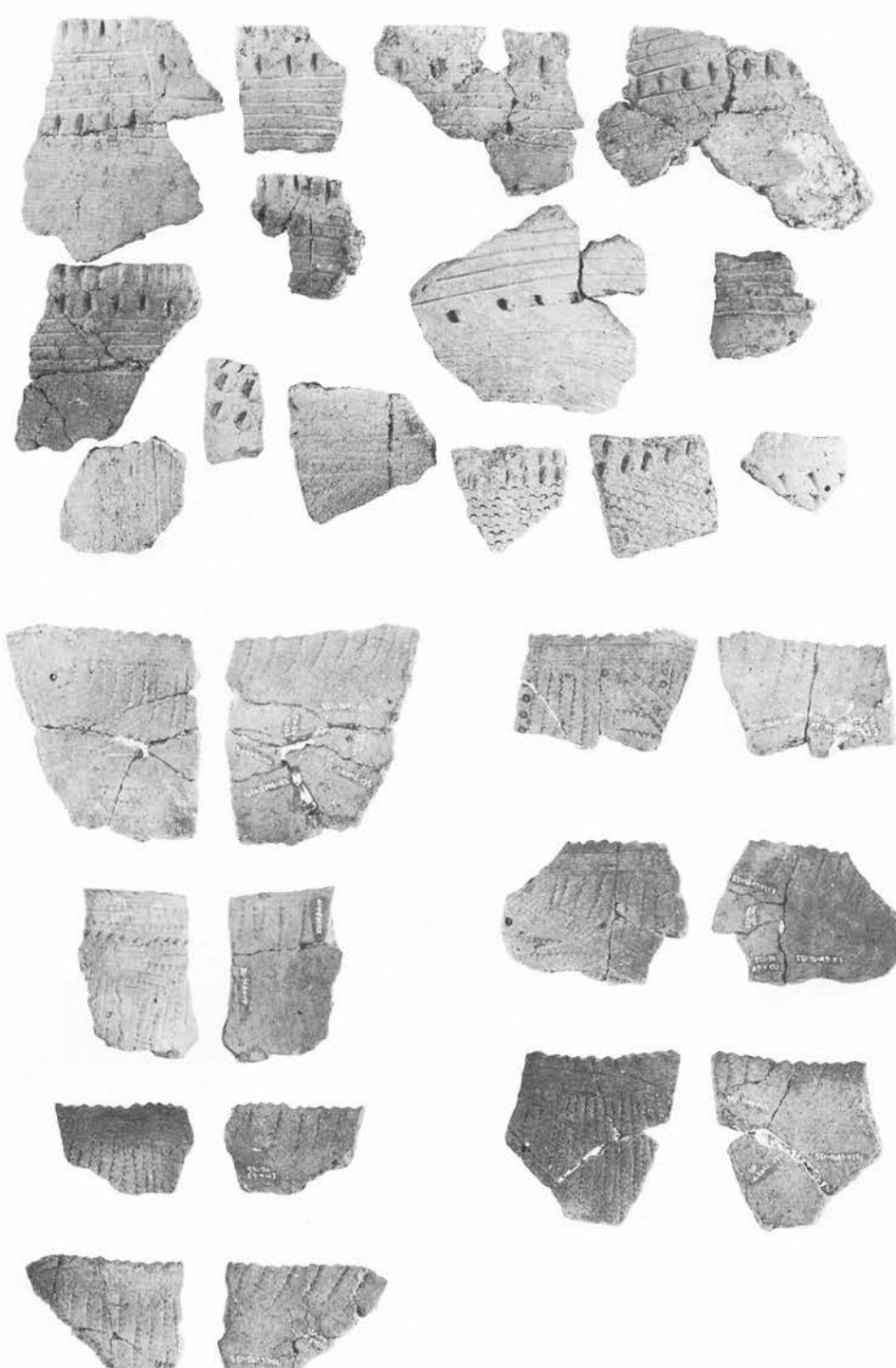
S=1/2



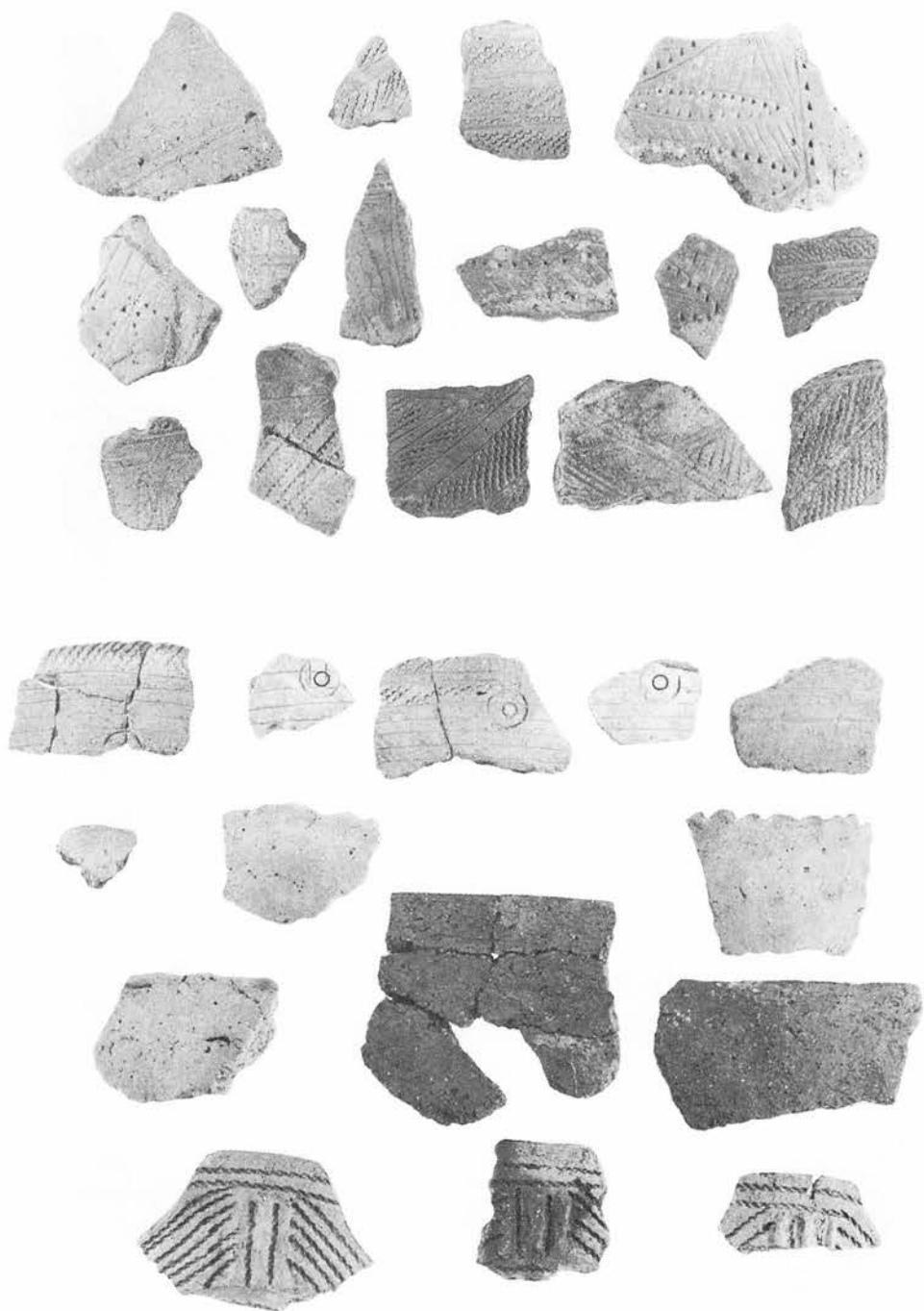
写真図版19 土器 4



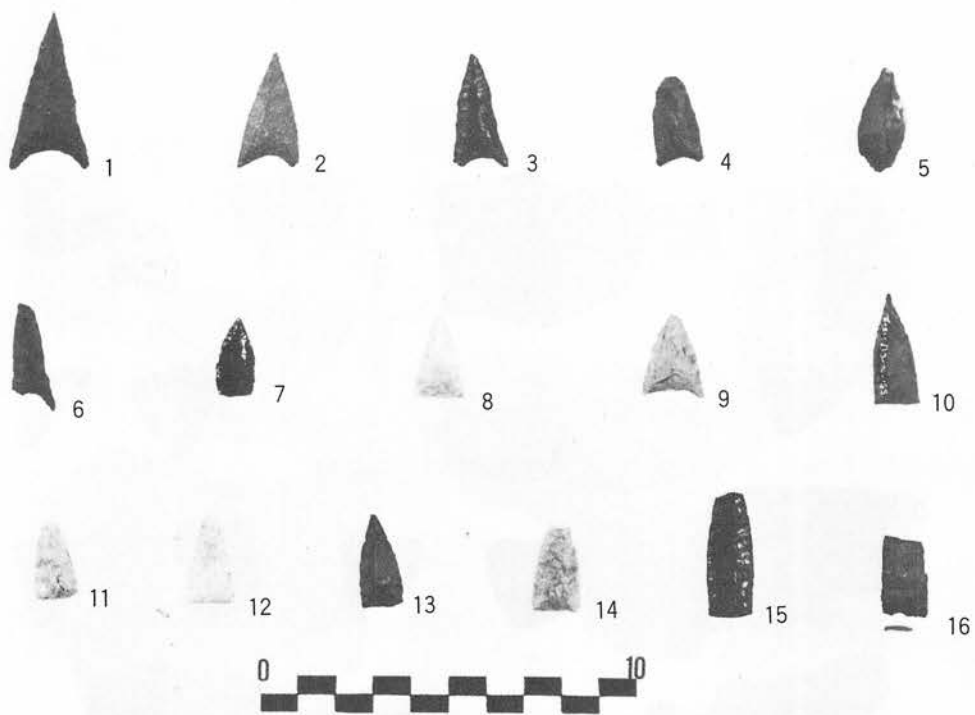
写真図版20 土器



写真図版21 土器



写真图版22 土器

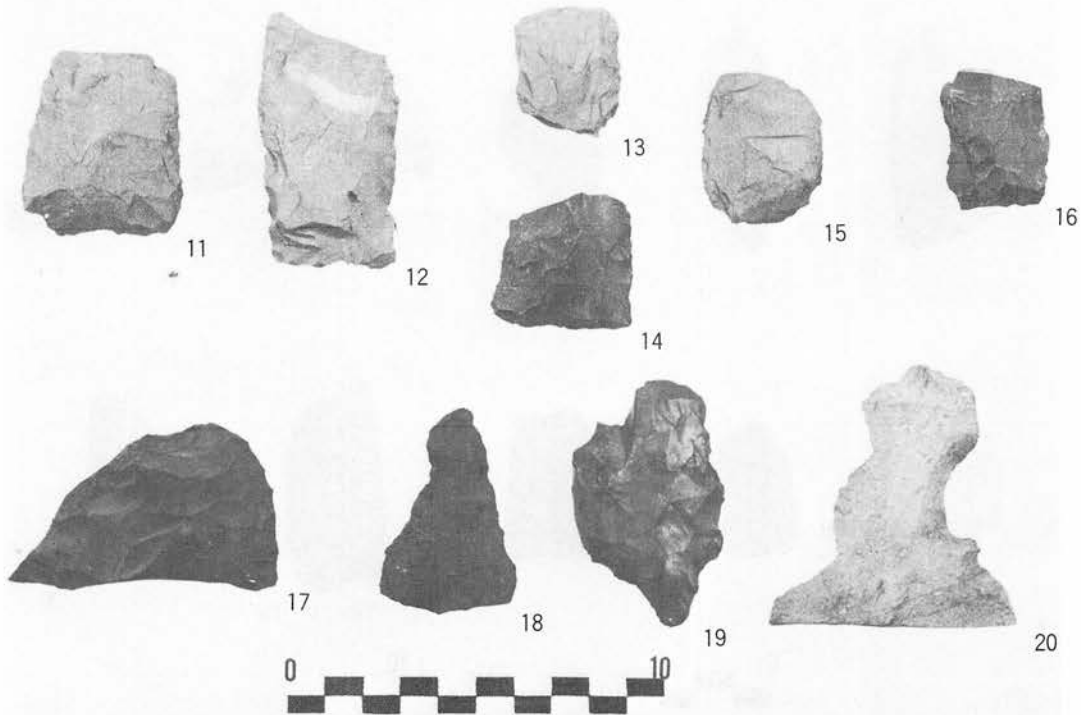


写真図版25 石器1

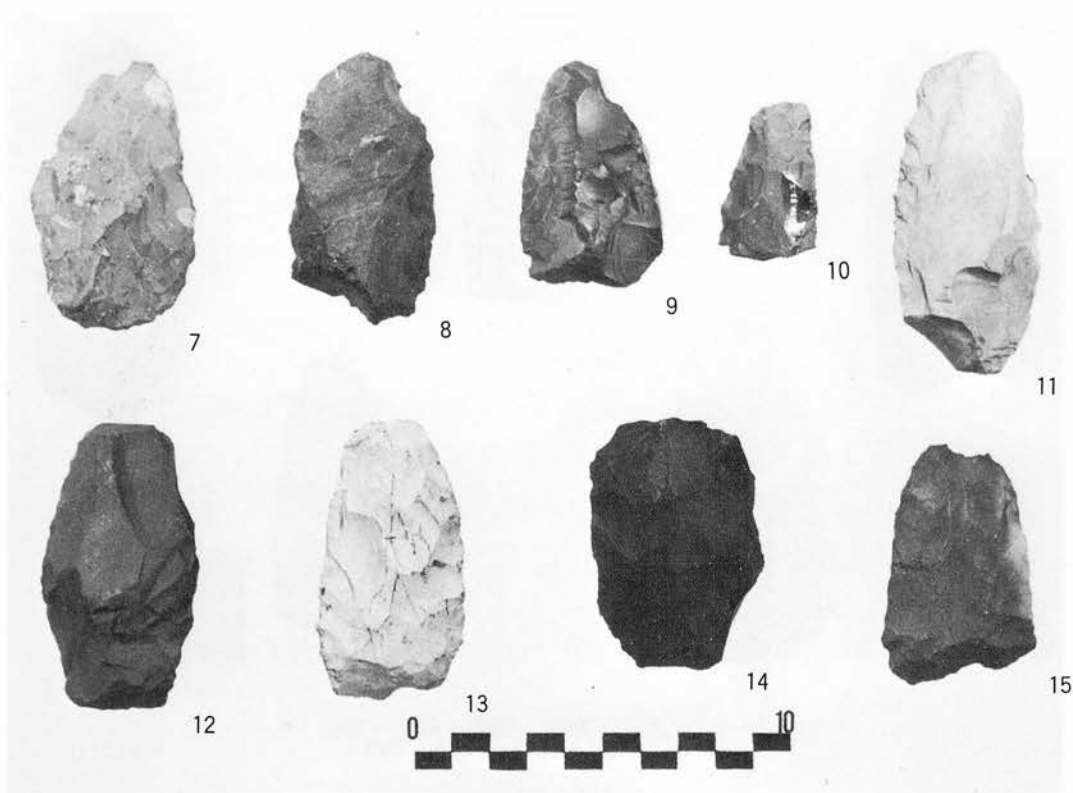




写真図版26 石器2



写真図版27 石器3



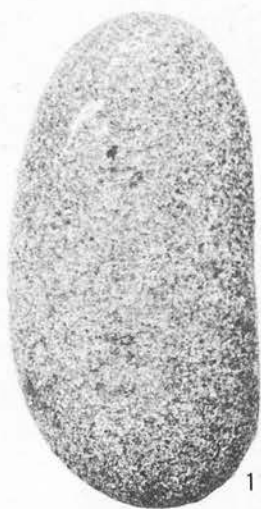
写真图版28 石器4



写真図版29 石器5



写真図版30 石器6



1



2



3



4



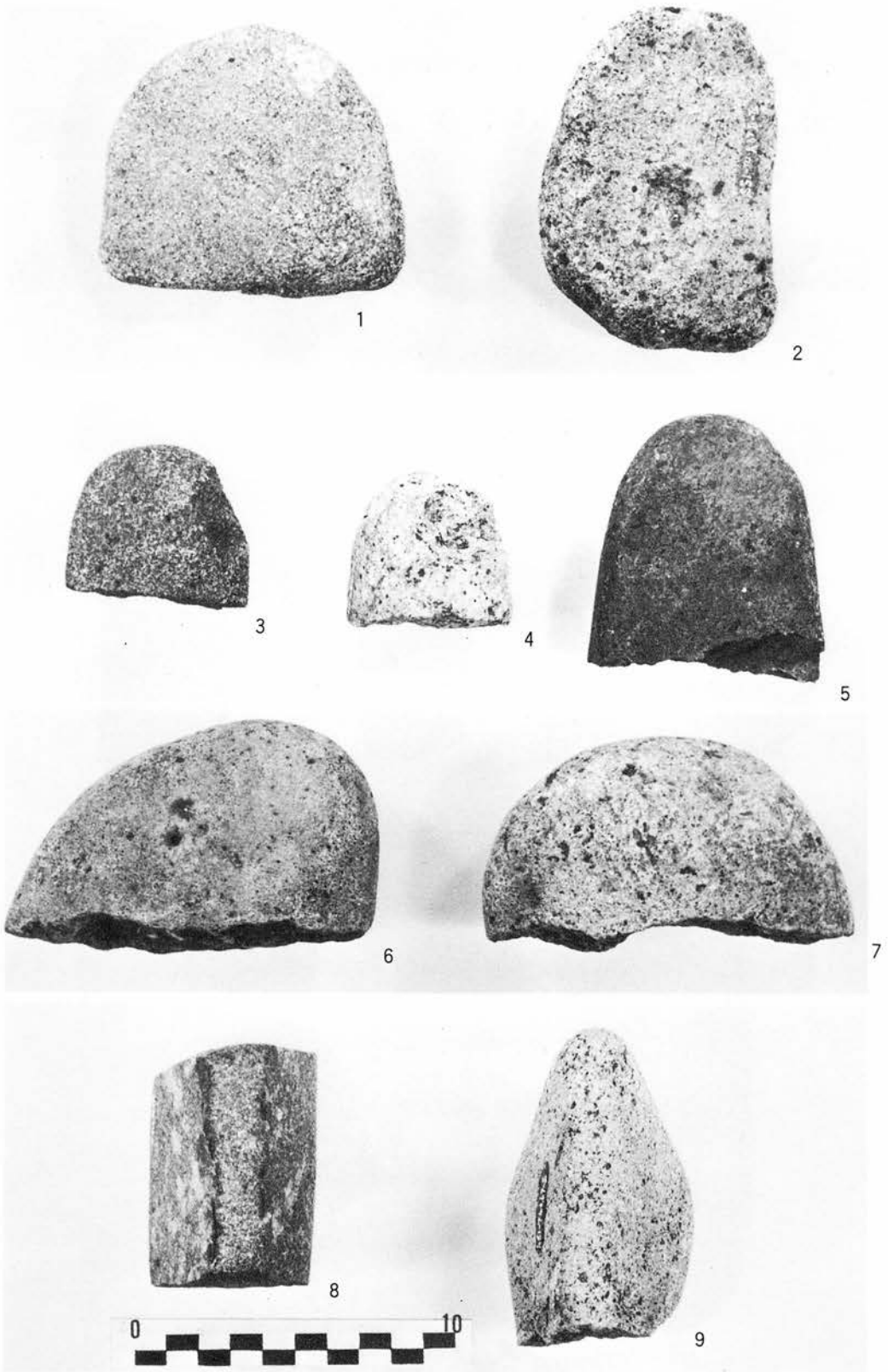
5



6



写真図版31 石器7



写真図版32 石器 8



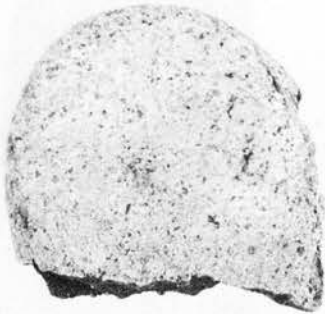
1



2



3



4



5



6



7



8



写真図版33 石器9





写真図版34 石器10

---

岩手県埋文センター文化財調査報告書第29集  
御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書

雫石町 桜松・除Ⅰ・除Ⅱ遺跡  
盛岡市 下猿田Ⅰ遺跡

(昭和49年度・51年度・55年度)

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月25日 発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷

TEL (0196) 38-9001

印刷 川 鳴 印 刷 株 式 会 社

© 岩手県埋文センター 1982

---